

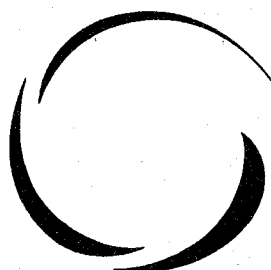
C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

オーラルヒストリー

松野 頼三

[元自民党衆議院議員]

〈 上 卷 〉



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

松野頼三 オーラルヒストリー

目次

〔松野頼三・略歴〕……………4

《第1回》……………5

現在の政局……………7

生い立ちと家族……………9

大学生活……………17

サラリーマンの後海軍経理学校に……………20

鳩山日記について……………29

《第2回》……………33

「加藤の乱」と米大統領選について……………35

政治家と人気……………36

敗戦後の様子……………38

吉田茂の秘書に―初当選……………40

自由党の面々……………49

中道連立から吉田へ……………53

政局関連年表：「加藤の乱経過」「二〇〇〇年のアメリカ大統領選挙」……………62

《第3回》……………65

現在の政局について……………67

朝鮮戦争の勃発……………70

公職追放解除後……………73

厚生族として―厚生政務次官時代……………77

政治家と新聞記者の関係……………84

政調副会長時代と造船疑獄……………86

《第4回》……………91

KSD事件と機密費事件について①……………93

吉田政権末期……………96

鳩山内閣と保守合同……………101

岸内閣で初入閣を果たす……………106

政局関連年表：「KSD事件概要」……………118

《第5回》……………119

KSD事件と機密費事件について②……………121

森内閣の今後は……………127

岸内閣前後……………129

三井・三池―労働大臣時代……………133

60年安保……………137

政局関連年表：「えひめ丸沈没事故」「二〇〇一年二月十四日の党首討論」……………145

「外務省不祥事の経過」……………145

《第6回》

ポスト森首相……………147

佐藤派に入る……………149

佐藤の五奉行……………153

森首相について……………157

政局関連年表：「森喜朗内閣出来事」……………170

《第7回》

自民党総裁選について……………171

政治家の口利き……………173

防衛庁長官に――佐藤に直談判……………177

農林水産大臣時代……………187

選挙調査会長に就任……………191

政局関連年表：「自民党総裁選の動き」「李登輝前總統訪日問題の経過」……………199

《第8回》

小泉内閣について……………201

退陣した総理は辞職すべき……………203

選挙制度調査会長として……………205

沖繩返還交渉に関与……………208

田中派旗揚げ……………212

農林族として……………216

政局関連年表：「小泉首相就任後の田中真紀子・鈴木宗男閣連記事要旨」……………222

《第9回》

利権というもの……………229

田中内閣発足……………231

福田赳夫との関係……………237

田中内閣崩壊……………243

三木武夫との関係……………245

政局関連年表：「東京都議選概要」……………253

《第10回》

靖国神社問題と田中外相について……………257

三木内閣の政調会長時代……………259

政治資金問題……………263

佐藤死去……………268

野党との関係……………275

日本の安全保障……………276

政局関連年表：「二〇〇一年参院選閣連年表」「小泉首相靖国参拜閣連年表」……………282

松野頼三略歴

生年月日：大正6年2月12日

学歴：昭和15年慶應義塾大学法学部政治学科卒業

本籍地：熊本県鹿本郡菊鹿町

備考：祖父野田卯太郎（政友会）。故参議院議長松野鶴平三男。

子息：松野頼久（衆議院議員）

昭和15年 9月	日立製作所勤務を経て、海軍経理学校へ入学。	昭和44年12月	衆議院議員に10回当選（第32回総選挙）。
昭和20年 5月	任海軍主計少佐。	昭和46年 7月	党総務に就任（党選挙制度調査会長兼任）。
昭和22年 2月	内閣総理大臣秘書官となる。	8月	日台関係に関する佐藤の密使として台湾訪問（～9月）。
4月	衆議院議員に初当選（第23回総選挙）。	10月	南ベトナムのグエンバンチュウ大統領の就任式に特命全権大使として出発、米国大使館でコナリー財務長官に会う。
昭和24年 1月	衆議院議員に2回当選（第24回総選挙）。 この年農林部会長に就任する。	昭和47年 7月	党総務を辞任（党選挙制度調査会長は留任）。
昭和26年12月	厚生政務次官に就任する（～昭和27年10月）。	12月	衆議院議員に11回当選（第33回総選挙）。
昭和27年10月	衆議院議員に3回当選（第25回総選挙）。	昭和48年 7月	党顧問に就任する。
昭和28年 4月	衆議院議員に4回当選（第26回総選挙）。 この年自由党政調副会長に就任する。	昭和49年12月	自由民主党 政務調査会長に就任する（～昭和51年9月）。
昭和30年 2月	衆議院議員に5回当選（第27回総選挙）。	昭和51年 9月	自由民主党 総務会長に就任する（～昭和51年12月）
11月	自民党政調副会長に就任する。	昭和51年12月	衆議院議員に12回当選（第34回総選挙）、 政綱等改正委員長に就任する。
昭和32年 7月	政調会審議委員に就任する（～昭和33年6月）。	昭和52年 1月	党顧問に就任する。
昭和33年 5月	衆議院議員に6回当選（第28回総選挙）。	昭和54年 5月	この年ダグラス・グラマン疑惑が発覚、 日商岩井からの政治献金を証人喚問で認める答弁をする。
6月	総理府総務長官に就任する（～昭和34年3月）。	昭和54年 7月	衆議院議員を辞職、党顧問を辞任する。
昭和34年 6月	労働大臣に就任する（～昭和35年7月）。	昭和54年10月	衆議院議員に落選する（第35回総選挙）。
昭和35年11月	衆議院議員に7回当選（第29回総選挙）、 総務会総務に就任する。	昭和55年 6月	衆議院議員に13回当選（第36回総選挙）。
12月	自民党総務会副会長に就任する。	昭和58年 6月	自由民主党院内会派へ復帰する。
昭和36年 4月	財務調査委員に就任する（～同年7月25日）。	昭和58年12月	衆議院議員に14回当選（第37回総選挙）。
昭和38年11月	衆議院議員に8回当選（第30回総選挙）。	昭和61年 7月	衆議院議員に15回当選（第38回総選挙）。
昭和40年 6月	防衛庁長官に就任する（～昭和41年8月）。	平成 2年 2月	衆議院議員に落選（第39回総選挙）。
昭和41年 8月	農林大臣に就任する（～昭和41年12月）。	平成 5年 6月	第40回総選挙に不出馬を表明する。
昭和42年 1月	衆議院議員に9回当選（第31回総選挙）。		
2月	自由民主党 選挙制度調査会長に就任する（～昭和49年12月）。		
12月	総務会総務に就任する（～昭和45年1月）。		
昭和43年 3月	自民党の政治資金法改正案（「松野試案」）をまとめる。		

参考文献

- ① 松野頼三著『議員生活二五年』（中央公論事業出版 1972年）
- ② 松野頼三語り、戦後政治研究会聞き書き『保守本流の思想と行動』（朝日新聞社 1985年）
- ③ 『私なりの戦後50年(1)～(12)』（産経新聞1995年7月連載）
- ④ 『自由民主党党史 資料編』（自由民主党編 1986年）
- ⑤ 『佐藤栄作日記』全6巻（朝日新聞社 1997年）
- ⑥ 「松野頼三経歴書」（松野頼三事務所作成）

松野 頼三

オーラルヒストリー

第1回

[2000年10月16日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

■現在の政局と人々

松野 ……いま、あなたの方、学者が非常に大事なんだ。いまの小学校は、先生が駄目だから駄目になったんだ。

伊藤 大学だって同じですよ。

松野 学校の先生が大事なんだ。

伊藤 その学校の先生をつくっているのが、大学の先生なんです(笑い)。

松野 家庭は親が大事なんだ。子供は純粹で神様だから、子供を叱る前に親を叱らなければいけない。子供の犯罪には親も責任を負わなければいけない。だから刑法で、親も罰しなければいけない。

伊藤 いい考えです。

松野 生徒も先生も罰しなければいけない。いじめを知らなかったなんていう先生は、もう先生の資格なしだ。無免許運転みたいなものだ。まず知らなかった先生は駄目なんだ。知らないということ、は、もう資格なしだ。親も当然責任を負わなければいけない。罰則を受けなければいけない。先生も罰則を受けなければいけない。連帯性がなくて、個人の自由を認めて、連帯責任を忘れてるんじゃないか。

伊藤 この事務所はずっと前からですか。

松野 もう二十年ぐらいになるかな。あまりいいマンションじゃないですよ。金丸信がいたからね。

伊藤 ここは国会にも近いし、いろいろな点で便利ですね。

松野 新聞記者とか若い議員を呼んでも、ここなら来ますからね。

伊藤 やはり場所は大事ですね。

松野 いま一所懸命教えているのは、小泉「純一郎」とか鳩山「由紀夫」です。野中「広務」は来ません。ああいう政治は嫌いなんだ。性格に合わない。

伊藤 警察的な政治ですか。

松野 田中「角栄」というのもあまり好きじゃない。

伊藤 先生がいちばん好きな政治家は、過去ではどなたですか。

松野 正反対だが、鳩山「一郎」と吉田「茂」が好きでした。やったこと、考えたことは正反対ですね。しかしどっちも人間が好きだった。それから岸「信介」。岸というのは人が好かった。人間の人が柄がいいのは、岸が最高でした。吉田は我が強くて、その頑固さが魅力だった。鳩山は豊かな包容力で、自分の思想がはっきりしていた。

伊藤 岸と佐藤「栄作」はどうですか。

松野 もう全然岸が上だな。佐藤は行政官みたいでした。岸は政治家ですね。兄弟でも、それだけ違っていた。それは岸が上です。

伊藤 僕は昔、岸さんのインタビューをやって本をつくったことがあるんですが「岸信介の回想」岸信介、矢次一夫、伊藤隆(昭和五十六年)文藝春秋、やっぱり魅力がありましたね。

松野 ある。岸は人間として魅力がある。佐藤は行政官だな。岸はほんとうに人間味があった。鳩山「一郎」も人間味がありましたね。

伊藤 息子の方はどうですか。

松野 鳩山の息子は一所懸命教育してるんですけどね。失言を怖れるな、と言っているんです。失言しないというのなら、役人と同じでしょう。どんどん失言しなさい、世論を喚起していかなければ駄目なんだから。鳩山「一郎」というのは失言ばかりしていたんだ。失言が、あとで見れば名言になるんだ。「失言しないでおるなら、おまえ役人と同じで、原稿読むのと同じで、進歩はない。失言の中に進歩があるんだよ」とさかんに教育してるんですが、最近ばかりに憲法で失言しているから、あれもいいだろうと思ってるんだけれど。

伊藤 いいですよ、あれは。

松野 失言しないと政治は進まないんだ。岸さんも失言ばかりし

ていた。鳩山も失言ばかりしていた。吉田は、世論と対立してしましたね。あれは失言じゃないんだ、対立なんだ。マッカーサーにも対立してしましたからね。その書類がたくさん出て来た。これほどはつきりしたものはない。あの占領下でマッカーサーと堂々と対立した文書が、アメリカの文書公開でたくさん出て来た。それを見ると驚くべきことを平気で言っている。そのへんは政治家なんだ。あとは行政官なんだ。あとは分けたり、公共事業を増やしたり。そんなことは行政官の仕事だ。政治家は日本民族の指針と方向を示すんだ。だから外交の問題を言わないなんていうのは、政治家にさせられない。やっぱり国の歩みは外交です。いま、この十年以上は外交なし、ですからね。政治じゃないんだ、行政なんだ。

伊藤 今の政治家で、松野先生が一番期待を持っておられるのはどなたですか。

松野 小泉と鳩山と小沢一郎。これは世の中を変える思想と行動ができるだろう。抵抗のあるものほど政治家ですよ。抵抗のないものはただのオポチュニストだね。自分の政権と自分の生活を守らんがためであって、それは「サラリーマン政治家」なんだ。

伊藤 その言葉はあまり聞かないですね。いい言葉ですよ。ちよつと利用させていただきます。

松野 そうなんです。それじゃあ困るんです。村山「富市」政治なんてその典型でしょうね。ただ暦をめぐっているだけだね。

伊藤 だいたい、図らずもなつたわけですからね。総理になるための訓練も何もしていないわけでしょう。無理というものです。

松野 まだ橋本「龍太郎」は、行革とか自分の思想を持って、途中で途絶えたけれど、やったことは間違いない。橋本は目指したものがあつた。小淵もあまりなかつたな。森にいたつては何もない。ただ生きながらえようとするだけで、あまり意味がない。

伊藤 ただ、替わる人がいないでしょう。

松野 替われれば、誰か出てくるでしょう。

佐道 亀井静香みたいな人はどうなんですか。

松野 これもひとつの暴力的政治家でしょうね。世をよくするんじゃないのに、壊すときの壊し屋としてはいいかもしれない。

伊藤 壊し屋の方ですか。

松野 壊し屋の方だ。あれに運転を任せたら、とんでもないところに行くでしょうね。でも、それも政治家なんだ。だから亀井を使うものがおれば、亀井は有能なんだ。あれが上に立つたら駄目なんだ。あれは要するに壊し屋に使わなければ、建設屋に使ったら無理なんだ。

伊藤 石原「慎太郎」さんなんかどうですか。

松野 これはひとつ面白い男ですよ。ただあまりに思想が偏っている。政治家としてはひとつの型です。じゃあ任せられるかというのと、偏り過ぎている。自己主張が強すぎる。

伊藤 自己主張が強いという点では、小沢さんもそうじゃないですか。

松野 それはそうです。小沢はその掌に立っていないからまだいいけれど、立つたら危ないでしょうね。新しい型の強権政治になるでしょうね。ファッショとも言わんけれど、新しい型でしょうね。

伊藤 ここは灰皿がありますね。

松野 どうぞ、たばこをうんと飲んでください。日本では、たばこをのんじゃいけない、禁煙教育をどうのこうのと、言っているんだけれど、日本ぐらいいは、禁煙条項を緩やかにして、喫煙国にすればいいと思うんですよ。だって「日本は」寿命はいちばん長いんですよ。私は逆にしちやえばいいと思う。喫煙国を宣言すればいい。アメリカのようなばかな真似をせんでもいい。アメリカ人ぐらい付和雷同というか軽佻浮薄というか、そんな国民はいませんか。ね。

伊藤 あれは宗教になつていますからね。

松野 クジラは神様だと思つていらっしゃるんだから。そういうところは

極端だ。それを日本人が真似をすることはよくない。私は一日四十本から六十本のむんだ。それで十八歳からですから、五十年のんでいるんだから。

佐道 年季の入った喫煙者ですね。

松野 いまさら、やめない方がいい。今日新聞を見たら、日本はたばこを吸っていて恥ずかしいとか。冗談じゃない。いいことなんだ。たばこをのんで長生きする国は日本だ、と世界に宣言すればいい。それで私はアメリカに行かないんですよ。たばこをのめないから行かない。飛行機も、向こうも、いやだ。そんな野蛮国には行かない(笑い)。ヤンキーとモンキーがたばこをのまないんだから(笑い)。この十五年、いくら誘われても、一切アメリカには行かない。ヤンキー、モンキーのところには行かない。たばこがないから。ほんとうにあれは不思議だと思ふ。日本ぐらい喫煙を自由化すればいい。それを「アメリカの」真似をして、遠慮している。日本人もおかしな、規制のない国だとか言う。そのくせ、最長寿命国でしょう。

伊藤 たばこを吸っているから(笑)。

■ 生い立ちと家族

伊藤 先生、それでは始めさせていただいてよろしいですか。

松野 何の研究ですか。私はえらい話はできませんよ。

伊藤 先生がご体験なさったことをすべて吸い取ろうという企画でございます。

松野 私が大成しないのは、常に私は七・三なんだ。七は自分で自惚れていて、三は反省しているんだ。だからどうしても十の大博打が打てないんだ。いろいろな政治の場面で、私は七・三で、三のためにほんとうの大博打を打てないという政治的立場がたびたびある。そういう人間だから、あまり大した歴史はないですよ。

伊藤 いえ、ご自分のご体験を淡々と話していただければ、という希望なんですが、よろしいでしょうか。

松野 いいですよ。

伊藤 それでは、政治家になられる前の話を今日はちょっと伺いたいと思うんですが、今後何回も続けてよろしいですか。

松野 いいですよ。

伊藤 二十回でも、三十回でも。

松野 いいですよ。足りなければ。

今日は私の生まれたときの写真を見つけたんです「兄弟三人が写っている写真と、兄弟三人と父親が写っている写真を示す」。兄弟三人の写真です。三人のうち、二人生きています。男三人の兄弟で、私は一番下だ、頼三といいますけれど。

伊藤 お生まれは、大正六年二月十六日になっていますが、お生まれになったのは熊本ですか。

松野 熊本で生まれました。

伊藤 お父様は東京ではございませんか。

松野 それはもつと後だ。私は八つぐらいまで熊本にいました。小学校の二年ぐらいからこつちに来たんです。

伊藤 じゃあ、ご両親と一緒に来られたんですか。

松野 それまではみんな熊本にいました。

伊藤 それじゃあ小学校は熊本ですか。

松野 「熊本で小学校」一年に入って、二年から東京に来ました。

伊藤 当時の熊本の生活というのはいかががございましたか。

松野 ほとんど下駄でしたね。それから緋の着物。足袋はなかったな。裸足が多かったな。それから草履。

伊藤 冬でもそうですか。

松野 冬でも草履。

小池 だいたい、このような格好「写真に写っている格好、着物を着ている」ですか。

松野 こんな格好で、これが私ですが、小学校に行っていたんだ。

伊藤 お宅は、比較的金がある方だったんですね。

松野 まあ、中地主でしょうね。十三町ぐらいの地主でした。大地主は、四百町、六百町とありましたからね。十三町というのは、中の小でしょうね。

伊藤 でも、それで十分食べていけるんですね。

松野 まあ、酒屋なんかしていましたからね。その米で酒造りをしていましたから。

伊藤 何という銘柄ですか。

松野 「松」という字を崩して「十八公」という銘柄です。造り酒屋で、せいぜい二百石ぐらいでしょう。製造能力二百石だから、ほんとうに村だけの酒屋ですね。

伊藤 お生まれは、村ですか。

松野 村です。城北(しろきた)村という村です。

伊藤 それは熊本市からー。

松野 四十キロぐらい離れていますね。阿蘇の山麓ですね。

伊藤 そうですか、それじゃ東の方ですね。

松野 いま菊池溪谷といって、菊池です。菊池郡城北村です。菊池

武時、武光のところですよ。だから阿蘇の外輪山の外側です。

伊藤 ではお育ちになったのは農村地帯ですか。

松野 ほんとうの農村です。田植えも知っています。草取りもやりました。

伊藤 じゃあ自作もやっていたわけですか。

松野 もちろん自作もやっていました。パッタ取りとか、タニシ取り

りとか、鯉、鮒。ほとんど裸足でしたね。

伊藤 いま行つてご覧になって、状況は似たようなものですか。

松野 今でも家があります。形は似ているけれど、タニシを食べるやつはいませんね。ドジョウを食べるのはいませんね。ドジョウがなくなつてしまった、農薬で。タニシも農薬であまりいなくなつ

た。

伊藤 あれはおいしいのに、どうしてだろう。

松野 残念だけれど、そういうところははずいぶん変わりました。しかし外側は同じですね。村の戸数なんてあまり増えていませんね。藁葺きが瓦葺きになったり、道がきれいになったり、そういうことは変わっていますが、だいたいロケーションはあまり変わっていませんね。

伊藤 その当時はお父様「松野鶴平」は何をなさっていたんですか。

松野 父はその頃ほちほち代議士になっていましたね「衆議院議員。昭和三年二月から」。私が小学校の時はもう代議士になっていましたね。

伊藤 そうすると家にはあまりいらつしやらない。

松野 あまり家にはいない。私はほとんど子供の時のことをいうと、母のことしかない。これは私は、捨てきれないんだけど、この日誌を見てください「松野氏の母親がつけた日誌を示す」。「明治三十七年一月元旦」と書いてある。一年分あるんです。紙に書いて、真ん中で切つて、ここに「野田瀧の」とかいてあるけれど、嫁に来る前でしょうね。私はこれを捨て切らんで、いまだに持っている。

伊藤 これは捨てられないでしょう。

松野 筆で書いているんです。

小池 きれいな字ですね。

松野 帳面がなくて、自分でつくつています。こんな節約をしているんですね。毎日書いているんですよ。

伊藤 野田さんの文書がいま福岡にあるんです。

松野 野田卯太郎の長女が母ですから。貧乏していたんだ。

伊藤 野田さんの日記もあるみたいですよ。

松野 あるでしょうね。野田卯太郎のものはいまでもたくさんありますよ。これだけは私は捨てきらんのでね。母の書いたものは捨

てられない。まだ、たくさんあるんですよ。今日は一つだけ持ってきました。まだこんなにあるんですよ。母の字は捨て切れない。父のものは捨てても、母のものは捨て切れない。これは母の手紙です。「母から松野氏宛の手紙を示す」。これは私が海軍に入ったときの手紙です。

伊藤 ここ「日誌」には「瀧の子」と書いてありますが。

松野 「瀧の」です。「子」は自分でつけたんでしょうね。母の手紙は捨てられないんだ。父のものはほとんど持っていませんがね。

伊藤 それはどうしてですか。

松野 「私の」教育は母ですね。父は家長であって、直接の教育は母ですね。だから母の影響がどんなに大きいことなんだ。父はほとんどいませんしね。

伊藤 お母さんはどういう教育でしたか。

松野 母は厳しかった。母は野田卯太郎の家で自分も厳しく育てられた。野田卯太郎は貧乏な豆腐屋か何かやって、一所懸命天秤棒を担いで売りながら。ただ向学心があって、年中胸に本を入れていた。体は一六〇キロぐらいあったでしょう、相撲取りみたいに大きかった。それがたまたまあの頃の世で、日露戦争の前なものだから、炭坑景気で三井炭坑、福岡の炭坑の景気が良くなった。軍需ですけれど、軍艦の石炭とか電力がさかんですね。それで三井で誰か一人代議士をつくらうじゃないか、誰かいいのがないかと探したときに、野田卯太郎という体が大きいのがいた。あれどうだ、代議士にしないかということ。野田卯太郎が三井の御用政治家で立候補して、代議士になった。それが最初ですね。

その頃の有権者は、婦人がまだないんですね。直接国税十円以上納めたものが有権者なんです。村では二百人ぐらいしかいない。おそらくいまの十分の一ぐらいしか有権者がいなかったですね。だからみんなで話し合えばすぐ当選する。談合すればいいわけだ。だから談合選挙です。三井のおかげで代議士になるわけです。それで

続けたのが野田卯太郎。

母は貧乏なときで、長女だから、一番きつかった。ただそのとき、野田家というのはどんなに貧乏でも教育だけは金を出した。そこで母を、熊本の竹崎順子という、大江（現フェリス）女子校というのが今でもありますが、竹崎順子という校長がいて、それが熊本にあった。それで竹崎順子の大江高等女学校に母は入った。それがひとつの転機で、松野鶴平と縁ができたんでしょうね。いまでも竹崎順子の学校の卒業名簿を見ると第三回卒業生ですね。まだ大江高等女学校がまだありますから、卒業者名簿を見せてくれというのと、一年間に八、十人ぐらい卒業している。その三回目ぐらいに私の母が卒業していますね。

当時は寄宿舎ですから、半分以上は寄宿舎生活。正月になると、家に帰るわけです。母ともう一人、二人ばかりは帰れないんです。帰ると、福岡・熊本の往復で一円ぐらいの汽車賃がかかる。その一円の汽車賃がないから、帰らずにじつと寮にいるわけだ。もう一人いたそうです。二人が帰れないでいるので、竹崎順子さんがかわいそうだったって、正月の餅を一緒に食べさせてくれたり、お雑煮を出してくれたりしたと言って、母は竹崎順子さんの話ばかりしていましたね。

そういう教育で、教育にだけは、野田家は金を出しましたね。代々、全部大学まで出ていますね。野田卯太郎というのは、自分が一所懸命勉強したんだ。だから子供たちは学校に出した。あの頃女学校に出るといえるのは、いまだ言えればケンブリッジかオックスフォードに行くぐらい大変なものなんです。高等女学校だから。いまでいえばおそらくそれぐらいのところでしょう。それで字が書けるようになって、字が得意になった。母の方がよっぽど父よりも字が上手です。

そこから思い出す母の思いは、父が代議士になってお礼状を書かなければいけない。妻の名前で妻の字ではおかしというの

で、東京で、小野鷲堂（おのがどう）とかいう男の書家が出て、そこに行つて男の字を習い始めた。それで父の代筆は男の字でやった。それで思い出すのが、私が熊本に入つて、ある医者の方に、選挙によくお願いしますと、私が最初の立候補の時に行った。そのときに、「あなたのお父さんは字が上手だった。見てくれ、このきれいな字を」といつて、ちゃんと表装して玄関に飾つてあるんです。見た途端に、あつ母だ、と思つた。お父さんの字と言われたけれど、それは、父の名前が書いてあるからなんです。私は見た途端に、あつと思つたんです。とはいえ、「松野鶴平」と書いてあるから、これは母の字だと言えない。向こうは喜んで、父の字だと思つて玄関に表装して飾つてあるんです。「きれいな字で、私は惚れ惚れして、捨てられずにいる。見てください」といつて。見た途端にあつと思つたけれど、それは母の字です。男字だからわからない。そのお医者さんも、もちろん書道の趣味のある人なんですけれどね。

だから私の人生のほとんどの教育は母ですね。職業上で教つたのは父です。議会のことは父に習つたけれど、人間のことは母にしか習つていない。父からは、代議士、政治家の歩む道とか、政治家のやり取りの話は聞いたけれど、九九%の影響を受けたのは母ですね。あの頃は、下駄を履いていくものと草履を履いていくものがあるから、差別があつたんだ。地主の子供、小作の子供と差別が学校にある。それをいちばん厳しく言つたのが母なんだ。「学校に行つても差別をするな。貧乏人を軽視したり、小作人の子供なんていつたら、お前は天罰が当たる。うちのじいさんも、松野の家もそんなに豊かではないんだ。もともと貧乏な家から育つて、こんなに来ているんだ。だから貧乏な人を軽視したり、差別したりすることを絶対にするな」といつて、懇々と小学校に行く前から言われた。それだけが印象に残っていますね。昔は、地主、小作という階層があつたわけだ。それから士族とかね。小学校にも一種の差別があつたんです。それに対して学校に行く前から教育されたんだ。そ

れから家におるねえやとか女中さんは軽視するな、そういうことをしたら人間の価値がなくなる、という。これだけは不思議に厳しかったですね。それから嘘をつくようなことをするな、ということですね。

「母は」一所懸命「お金を」貯めて、シンガミシンというのを買ったわけだ。あの頃シンガミシンというのは大変なもので、一年間自分で貯めて、シンガミシンを買つて、それが家に来たわけだ。それで大事にして、乾拭きで拭いたりしていた。私はなんとか母に喜んでもらおうと思つて、開けたところに一所懸命汽車の絵を描いたんです。それは母に捧げようと思つて書いたんです。さあ、帰つてきたら、「これは誰が描いた」といつて。黙つていたら、「お前が描いたんだらう」と、さあ叱られて、叱られて。とうとうシンガミシンの足にゆわえつつけられた。それは釘で汽車の絵を描いたんだ。私は母に褒めてもらおうと思つて描いたんだけど、シンガミシンが届いてその日のうちに落書きされたものだから、母が怒つて、とうとう三時間ぐらいミシンの下にゆわえつつけられて、ワンワン泣いたのをいまでも覚えてますけれどね。いま考えると、やつと一年貯めて月賦で買ったのにね。釘で描いたものだからね。

父は一年に五、六回一緒に遊んでくれるぐらいのものでしたね。子供の時には、あまり父の印象はありませんね。学校も、ほとんど「父とは関係がない。小学校、中学校、大学と、どこに受けようか」といつて、試験を受けるのはお前なんだから、俺が受けるんじゃない、好きなどころを受ける。どこを受けても俺は文句を言わない」といつた。それで「麻布中学を受けたいが、いいだらうか」「ああどこでも受ける」といつて、麻布中学を受けた。大学に行くときには、「慶應を受けてもいいだらうか」「ああどこでも受ける」といつて、学校への推薦とか依頼とか一切しなかつた。

就職もそうです。「お前がやるんだよ、俺が試験を受けるんじゃない。頼んだり、そんなことはしない。お前の実力で、入るところ

に入れ」という。父の教育はそれが印象に残っています。「自分の力で、自分の道を選んで、自分で行け」。これが父です。母の方は、「差別をするな、人を軽蔑したりするな。それから正直に、嘘を言うような卑怯なことをするな。お前が頑張ったことは自分で責任をとればいいんだ、嘘を言って責任逃れをするな」、これが母の教えです。父からは自分の力でやれという。就職も何も一切手引きはしない。「なったら教えてやる。代議士になるのはお前が勝手になれ」という。

選挙も全部そうです、「お前がやれ。なったら、俺が次のことを教えてやる。なるまではお前の力だ」という。私が選挙に出るとき、父は一切応援もしない。応援されたことはありません。これは小学校の時からそうだから、当たり前だと思っていた。学校でも同じこと。

伊藤 小学校は、最初は熊本で入られたんですね。

松野 一年は、田舎で村の小学校に通った。

伊藤 何という村ですか。

松野 菊池郡城北村。菊池城の北だから、城北でしょう。城北村の尋常小学校です。

伊藤 その熊本の小学校にいらつしやる頃は、子供としてどんな遊びをされてましたか。

松野 まあ、冬は家の中で餅を焼いたり、いろは歌留多をやったりして遊んでいましたね。夏になると、キノコを採りに行ったり、タニシを捕りに行ったり、川魚を捕りに行ったり、夏の方が遊びは多かった。川浴びもしたね。川で毎日泳いだりしてましたね。だいたい酒屋におるから、酒屋の若いのが一緒に行ってくれたり、近所の子供と一緒に遊んだり。夏の遊びは、鳥を捕りに行ったり、キノコを採りに行ったり、タニシ、魚、泳ぎ。冬は歌留多遊びみたいなものが多かったですね。いろは歌留多なんかあの頃はやっていました。

それから兄弟三人いるから、家の中で相撲をとったりしましたね。相撲をとると私が一番下で弱いから、負けるとまた悔しくて飛びついていたりして、襖と障子はボロボロでした。襖もぶち破る。

伊藤 本はお読みになりましたか。

松野 あまり本は読みませんでしたね。あの頃は、『金の星』とか『金の船』という童話の本を毎月送ってきていたから、それを読んではいましたね。それから『少年倶楽部』なんてね。佐藤紅緑なんていう小説家が出て、『紅顔美談』というのが小学校の時に、はやっていましたね。『金の星』『金の船』という子供の本があったり、『少年倶楽部』があったりして、その辺は読んでいましたね。

伊藤 それで東京においでになったんですね。東京はどちらですか。

松野 東京市外・大崎町・町立第三日野尋常小学校といました。今でもありますよ。ほとんど庶民教育だった。差別の教育をされたことがない。一般教育に徹してました。それも狙ってやったわけではないんですが、私のところは一族、庶民教育に徹してましたね。

伊藤 田舎から都会にやってきて、いかがでしたか。

松野 いちばん困ったのは言葉です(笑い)。肥後弁丸出しでしょう。言葉が笑われたこと、笑われたこと。一人でぼつんと入って来て、四十七、八人いたでしょうけれど、そこでいきなり肥後弁を使うものだから。まず本を読めと言われる。読むことは読めるけれど、アクセントが違う。同じ「さくら、さくら、さくら」がさいた。さいたがさくら」と読むのもアクセントが違う。これは不思議なものでね。「さくら」がさいた、さいたがさくら」とアクセントが違う。このアクセントが笑われた。なぜ上下をつけるんだ、というんだ。上下をつけるんじゃないくて、そういうアクセントです。それで同じ本を読んでもアクセントが違うから、ワツと笑うんだ。今でいえばいじめに

あつたんだ(笑い)。

しかし、できたかできないか。私の家は家庭教師もやっていないし、幼稚園にいたわけじゃないですからね。幼稚園なんかないんだから。家庭教師もつけたことがない。でもまあ、兄弟でお互いに競い合ったんでしょう。兄弟がいたから、兄貴に負けるまいと思った。その時は甲乙丙ですから、甲が少なく乙が多いとか。兄貴は乙が二つある、俺は全甲にしてやれとか、お互いに兄弟で競った。それで自然に勉強をしていたんでしょうね。

伊藤 じゃあ、そんなにいやな感じではなくて、楽しく。

松野 楽しく、兄弟喧嘩しながら、競い合ってたやりましたね。長男は一所懸命やって、小学校から、昔で言う府立一中(伊藤日比谷)に入ったんですからね。府立一中に入ったら学校の先生が大喜びで、その小学校から府立一中に入ったのは初めてだと言われて喜ばれたんだ。次男は麻布に入ったんだ。それも学校で喜ばれた。私もどこに行こうかなと思っただけで、府立一中に受けに行っただけれど、府立一中は落っこちた。それで二番目の麻布中学に入った。だから府立一中、麻布、麻布、と三人兄弟が入った。

「府立一中は」今の都立高校ですね。あの頃は難しかったです。日比谷公園の横の、いまの厚生省あたりに府立一中はありまして、有名な学校でした。河田さんという校長がいて、一世を風靡した中学でした。

しかしこの長男が悪くてね。悪くて悪くて、とうとう退校になった。それで四年の時に父が呼び出されて、退校だといわれた。「どうしてだ」というと、「あなたの息子がいると子供が学校に来なくなる。松野がおるからいやだ」といって、三人の父兄から文句が来た」という。何故かという、早く行って、門のところ立っているそつだ。それで金持ちの息子を呼んで、お前一円出せ、二円出せといつて、毎日とるといふんだ。そのうちに事件が起きた。オートバイで来ていた華族の息子がいたんです。そのオートバイをエンジン

をかけたばなしにして爆破してしまった。もうこれは許せない。その爆発事件を契機に退校処分にするという。そこでおやじが呼び出されて、教職員会に出て、「あなた方には悪い息子だと思うけれど、私にとっては一人の息子だ。それで退校にして一生を棒に振られたら困る。せめて刑一等減じて、退校処分をやめて、こちらから転校を希望するから、転校にしてくれ」といって、一席弁じた。それで転校にしますからといって、小原國芳というのがいたから、一年遅れて玉川学園に入つて、そのまま成城に入った。だから大学は成城大学卒になった。退校処分になったら、どこも入れてくれない。しかも四年生ですからね。あの時は五年まであつたんだから。小原さんの玉川学園は、その時初めてできたんです。その玉川学園の四年に編入して、翌年成城に入れてくれた。そういう救済する学校があつたからありがたい。

伊藤 先生「自身」は悪くはなかつたんですか。

松野 私はわりに、兄貴の悪いのを見ているからね(笑い)。こまめでしちやいかん、これ以上は駄目だと。たかりはやっちゃいけないとか。悪いこともちょこちょこしていたけれど、限度を知っているから。だから兄貴がひとつの反面教師でした。悪さもしたけれど、限度はわかつていた。

伊藤 東京に行かれると、遊びはずいぶん変わるでしょう。

松野 東京に来て遊びはずいぶん変わりましたね。多少、歌留多がメンコになったりしましたね。よく遊んだのは、メンコ遊び、ペーゴマ。こういうものは熊本にはなかつた。東京ですね。道具を使うのは熊本にはない。自分でつくって遊ぶんだ。東京に来ると、品物を買って遊ぶということがありますね。田舎では自分でつくって遊ぶ。縄を巻いて、まるく輪にして、竹の棒でポンと飛ばすわけです。飛ばし方でお互いに争うのが田舎の遊びです。田舎の遊びは、全部自分で道具をつくる。東京に来た時の違いは、買って遊ぶんだ。それが非常に違いますね。田舎では全部自分で作ったもので遊ぶ

んだ。竹鉄砲をつくったり、竹とんぼをつくったり、今でもできま
すよ。それからスズメの毘を仕掛けたりね。全部、手づくりです。
今でも私は竹鉄砲はつくれるでしょう。その差がありますね。東京
に来たら、メンコも買う、ペーゴマも買う。買って遊ぶ。その差は
非常に感じましたね。

伊藤 中学生になると、映画は観てもいいんですか。

松野 あまり観てはいけません。麻布中学は観てはいけなかったで
すね。でも学校の帰りじゃなければよかったですね。一回家に帰っ
て、父兄同伴ならいい。でも学校の帰りによく観ていましたけれど
ね(笑い)。

伊藤 やっぱり映画は好きでしたか。

松野 映画しかありません。

伊藤 あの頃は映画はいちばんの娯楽でしたか。

松野 あの頃の映画は、田中絹代とか、夏川静枝とか入江たか子と
か、憧れだったね。テレビはないしね、映画が一番だった。ラジオ
はその頃初めてできたんです。愛宕下の放送局。でもまだラジオは
娯楽の範囲に入らないね。放送時間も一日四時間とか六時間とか
しかやっていないんだから。二時から四時まで、夜は六時から十時
までとか、時間制限でラジオはやっているから、大した娯楽になら
ないですね。やはり映画が唯一でしたね。

伊藤 碁将棋なんかはおやりになりましたか。

松野 碁も将棋もやりました。碁将棋は私のところに来る人たちが
教えてくれた。若いのが書生みたいにして田舎から来ています
からね。また学生が泊まっていますからね。そういう人たちが教
えてくれる。東京に来たときには、二人ぐらいの書生、田舎の有力
者の息子を預かっているわけだ。みんな県会議員の息子とかを預
かっているんだ。その二人が、いいこと、悪いことを教えてくれる
(笑い)。カフェに行つて来たなんていう話を聞くと、目をみはつて、
カフェってどこだということ。二人ぐらい必ず居候、預かつて

いる子供がいるんだ。政治家の家にはみんないますよ。そういう人
たちがいいこと、悪いことを教えてくれる。勉強を聞くとすぐ教え
てくれる。

伊藤 じゃあ麻布中学は楽しく過ごされたんですか。

松野 麻布はそうですね。楽しかったですね。麻布中学では柔道を
やっていました。

伊藤 中学に入つて初めて柔道を始めたんですか。

松野 入つてからです。小学校では走るのが速かったんです。私も
森喜朗じゃないけれど、体育会系だから、頭よりも体の方が丈夫で
したね。運動神経は発達しているけれど、頭脳神経はあまり発達し
ていませんよ(笑い)。

伊藤 じゃあ、お丈夫だったわけですね。

松野 丈夫です。でも怪我はしましたよ。スポーツをやっているか
ら骨を折ったりするけれど、病気はあまりありませんでしたね。柔道
をしていたから、骨を折ったりしますよ。鎖骨ぐらい。

伊藤 昭和の初めだから、世の中比較的平穏な時代ですね。

松野 平穏な時代ですね。そのうちに、昭和七年に満州事変が起こ
りますね。あの頃ちょうど麻布中学でしたね。なんだか、映画を観
ると軍人のニュースばかり出てくる。私たちもあんな徴兵にとら
れるんだらうと思つて、ちよつと不安を感じていましたね。別に軍
人になるとは思っていないものだから。

伊藤 当時は何にならうと思つていらつしやいましたか。

松野 やっぱり政治家にならうと思つていたのでしょね、自然に。

伊藤 中学ぐらいから。

松野 ええ。いちばん私になりたかったのは小説家と絵描きだつ
た、小学校の初めの頃はね。小学校から中学校ぐらいになると、あ
つこれは駄目だ、ということになった(笑い)。文才も絵の才能も、
中学に入ったときに、これは駄目だと思つた。それは美術学校を受
けようという気があつたけれど、それは全然駄目なんだ。麻布に入

った途端に、次は美術学校を受けるという友だちがいたんです。とても問題にならない。それから文科を受けるなんていうのがいたけれど、それは文章が上手なんだ。比べてみると、全然駄目だ。麻布に入ったときに、自分の才能がないことがわかった。小学校まではわからないから、夢なんだ。小学校で絵で二重丸をもらうと喜んでいたら、中学校に入ると専門になってきて、そこで自分の才能がわかりますね。中学でだいたい決まるな。

伊藤 中学で、あとまでつき合うような親しい友だちはできるんですか。

松野 できます。いまだに中学の同級生会をやっていますね。

伊藤 麻布あたりだと、後々高い地位につく人もいるでしょう。

松野 高いのがありますし、低いのもありますね。一時、殖産住宅で、東郷民安という事件を起こした人、あれは麻布で一緒にしたよ。今でもときどき年に一回ぐらいクラス会で会います。東郷民安に、「お前、えらい目に遭ったな」というと、「俺は中曾根に騙されたよ」なんていう。「お前、俺のところを金を持ってこないからいけないんだ」と言ったんだ(笑い)。「東郷氏は」中曾根とは高校時代の同期なんです。静高で。私は麻布で一緒にんだ。「お前、俺のところを金を持ってこないからいけないんだ」「いや高校の時の同級生だから、中曾根のところに行ったんだ」といっていました。今でもそんな笑い話をしているんだ。

ただ、私のところに持ってこない理由もわかるんだ。あれは、できる方のグループなんだ。勉強をする方なんだ。私は与太者のグループだから。松野は与太者だから、私のところには近づかなかったんです。それで、勉強ができるクラスの中曾根の方に行ったわけだ。麻布の時には、明らかに与太者クラスと秀才クラスの二つの層があったことは事実だ。向こうは秀才クラスだから。同じクラスでも、「東郷氏は」一緒にそばを食に行ったり、映画を観に行ったり、遊びに行ったりしない組なんだ。私の方は、ムーラン・ルージュとか、

映画に行ったりするグループなんだ。だから東郷と一緒に歩いていないんだ。それで東郷は中曾根の方に行ったんだ。

伊藤 じゃあ、やっぱり相当楽しかったんですね(笑い)。

松野 しかし、慶應を受けるために特に勉強もしませんでしたけれどね。私は慶應と早稲田を受けて両方受かったんだ。

伊藤 官立に行こうとは思わなかったんですか。

松野 官立には、東京を離れるとー。どうせ一高には入れない。私は数学が駄目なんだ。サイン、コサインの数学は駄目なんだ。数学のない「官立の」学校を受けようとする富山なんだ。富山だけが数学がない。富山まで行くのはいやだ。だいたい麻布の者は、一高か浦和か静岡を受けるんですね。私は数学が駄目なんだ。数学がないのは富山だけなんだ。しかし富山だと、都落ちだから(笑い)。そこで慶應、早稲田にした。

伊藤 秀才組の人たちはだいたいどういいうところに行くんですか。

松野 できるのは一高に行った。もつとできるのは、あのころは海軍兵学校なんだ。兵学校、士官学校。校長が喜ぶのは軍の学校だ。次が文科系なんだ。いちばんできるのが受けるのは、海軍兵学校、士官学校。受かると全校生徒の前で表彰しますからね。受かったことを紹介しますから。一高に受かってもなかなか紹介しない。あの頃は軍国主義だから。もちろん、兵学校、士官学校に入った者がいます。それから一高、静岡、浦和、この辺まででしょう。

伊藤 そうすると、早稲田、慶應というのはー。

松野 早稲田、慶應はその次だ。だから一、二、三だから銅メダルだ。金が軍人、銀が文科、私学は銅メダルだ。慶應、早稲田、青山学院というのは銅メダルだ。紹介には入らない。ああ入ったか、という程度で終わらだ。

伊藤 でも私学の中では慶應、早稲田ですか。

松野 まあどこも同じですね。慶應、早稲田の差はあまりなかった

ですね。まあ、慶應、早稲田、それから青山学院ですね。

伊藤 「青学の」評価は高かったんですか。

松野 わりに高かった。明治学院なんかはあの頃は無試験でしたからね。あの頃は普通の大学は生徒募集だから、だいたい入るんです。受ける受験者が少ないんだ。

伊藤 でも、慶應、早稲田はそんなことはないでしょう。

松野 慶應、早稲田はあの頃は四倍ぐらいの倍率でしたね。今のよ
うに二十倍なんていうのはありませんからね。四倍ぐらいの倍率
で、早稲田の方がやさしかったですね。

■大学生活

伊藤 慶應は何科に入られたんですか。

松野 私は法学部政治科です。

伊藤 初めは予科に入るわけでしょう。

松野 予科に入る。予科の時から、入ることが決まっているんです
ね。

伊藤 予科というのは、旧制高校ですね。そうすると三年ですか。

松野 三年。大学三年。

伊藤 その予科の時代と大学時代というのは違うんですか。連続
ですか。

松野 同じです。連続です。もうラグビーをやっているから、ラグ
ビーは連続です。

伊藤 今度はラグビーですか。

松野 柔道からラグビー。足が速かったものだからね。ラグビーに
引っ張られて、ラグビーに入った。

小池 バックスをされていたんですか。

松野 ええ、バックスをやっていました。ラグビーは、森喜朗なん

て問題にならないくらい上手ですよ。体育は上手ですよ。早稲田に
このあいだラグビーで亡くなった、大西「鉄之祐」という名監督が
いましたが、それと一緒に死なされた。大西は年中私のところに来まし
たし、私も大西の葬式に行きました。大西は私と早慶でぶつかって
いたんだから。大西と同じクラスに私がいたということは、名選手
ですよ。大西鉄之祐というのが早稲田の名選手で名監督で、今でも
名が残っている。それと私は同じクラスで平等にやっていたんだ。
だから名選手の方でしょう。だから勉強はできなかったでしょう
ね(笑い)。

伊藤 そういうところでラグビー部に入れば、ほんとうに練習、練
習ですか。

松野 だいたい二時まで講義があるんです。三時に三田から日吉
まで行って、三時から練習が始まる。だいたい四時頃から六時頃ま
でが練習ですね。それから風呂に入って、家に帰ると八時でしょう
ね。それをほとんど毎日続けているんだから。大学ですから、別に
出席はとらないけれど。

そのとき今でも慶應で覚えているのは、永田清という財政学の
先生、板倉卓造という政治学の先生、憲法は小池隆一といいました
か、ちよつと変わった人でしたね。その三つが印象に残っている。

板倉さんというのは政治学で、その息子さんは住友の頭取なん
かやった名門で、報知新聞の社長をしたりした。この人の政治学は
今でも残っていますね。今の若い代議士にいろいろな話をすると
きに、板倉さんの勉強を思い出す。授業以外にいろいろなことを言
う。本で「イフ・ザ・ストーリー」という原書なんだ。原書があ
るよ、六円する。今でいえば五、六万というところだ、高い。原書
でいい本でした。あまりそのことは私たちがわからないんだ、原書
に仮名をふってかく。

その合間に「民主政治の基本はね、イギリスでは十八世紀の頃、
ジョンという王様がいて、王様が年貢米をたくさん取るので困っ

て、年貢米を値切りに行こうじゃないかと言っけれど、お前行け、お前行けといつて誰も行かない。そこで行つたのが、僧侶と知識人の学者が、犠牲として代議員として行つて、年貢米を値切つた。それがイギリスの民主政治の始まりだ。だから議會では予算委員会というのが一番重要な委員会になるんだよ。予算をとつて使う。それを陳情に行く。陳情団の代表に誰を選ぼうかと言つて選んだんだ。だから選ばれるのは犠牲的精神なんだ。それが代議員制度のイギリスでの発祥だ」という話をした。これはその当時言われたことで、今でも覚えてる。

それからボイコットというのを言いましたね。ボイコットというのは人間の名前だという。アイルランドとイングランドが合併したとき、アイルランドで猛烈に反対した。そこにイングランドの地主が来たから、あいつをみんな追いつ追いつと言つていろいろやつたとき、お前たちはそんなことをしては駄目だ、あの男に一切ものを言うな、近づくな、郵便も手紙もあそこには出すな、全部で除け者にしろといつて、除け者にしたら、とてもたまらないので、イングランドに逃げて帰つた。その男の名前がボイコットと言ふんだ。だからそれは人間の名前なんだ、という話なんだ。そんなことをいつまでも覚えてるんだ。

それからイギリスでは昔は大乱闘をした。だからイギリスの國會は議場に入る入り口が狭くなつてゐる。それはなぜか。サーベルがぶつかるから、サーベルが入らないように、体だけ入るように小さくした。サーベルを持つてゐると、中で斬り合いをするから、だからイギリスの國會の入り口は狭いんだ。

それからベンチがある。昔は椅子だつたけれど、椅子で殴り合いを始めた。だからこれは駄目だといふので、持てない長いのを出した。これなら持てないだろうと。

それから党首同士が向かい合つてそのベンチに座る。必ず相手方に足を向けて行儀が悪い「足を組んでみせる」。あれは行儀が悪

いんじゃない。相手に足を見せるということは、俺は飛びかかつて行かないぞ、という意味なんだ。そうしないと飛びかかつていくかもしれない。足を見せているということは、暴力を振るわないという印なんだ。それでこういう格好をしているんだ。あれは俺は絶対に暴力を振るわないよということなんだ。そういうイギリスの伝統に謂われがあつて、イギリスでもずいぶん苦労して、今の民主政治をつくつたんだ、という話をして、そんなことは今でも覚えてますね。

それから、椅子があるけれど、椅子には名札も何もない。伝統的に、党首が前に座る。下つ端は後に立つてゐる。椅子が議員の数だけないからだ。それで後に立つてゐるのをバックベンチャーという。それは何かというと「陣笠」という意味だよ。バックベンチャーというのは、ベンチに座れないから立つてゐる。それで党首討論を聞いて、拍手をしたり野次つたりする。そういう話をしょつちゅうしてましたね。

それからイギリスでは絶対に議長に手を挙げちゃいけないとか、議席を大事にして、議會は神聖にしてある。誰かが演壇で演説をするとき、グラッドストーンか何かの演説があまりに激しいので、卓を叩いた。その時指輪をしていて、その指輪の傷がついた。イギリスの議長席の傷はそれだけだ、という話を聞いた。だから、イギリスに行つたときに、議場があつたから、演壇を見せてくれといった。たしかグラッドストーンの時の傷しかないと言つた。私か代議士になつて行つたときに、見せてくれと言つて見に行つた。そうしたら、これは駄目です、戦争で焼けて、もうないといふ(笑)。その案内人に、すまんけれど見せてくれといつたら、それは駄目です、この前の戦争で焼けたから、グラッドストンの演壇はありませんと言われた。板倉さんはいろいろなことを教えてくれた。

伊藤 よく覚えていらつしやいますね。

松野 そういふばか話を覚えてるんですよ。若い代議士に話を
して聞かせているから。今の小泉とか鳩山に、政治家はこんなもの
だ、こんなことがあるんだ、とそういうことを何遍も話をしている
んだ。今日初めて話すことではなくて、板倉さんの話を次々にする。
それから、何かのエッセイみたいなことを書いてくれというところ
んなことを書くものだから、それでいつまでも気に入った逸話だ
けは覚えている。バックベンチャーは陣笠という意味だとかね。

それから永田清さんは財政でしたね。永田さんは学校以外に、そ
の後吉田さんのブレーンになりましたから、その後も永田さんと
は何遍もお会いして、話を聞いたりしました。楨という人がもう一
人いました。登山家の楨という人ですね。あの頃はわりに大学で親
しくなるんです。

伊藤 先生と、ですか。

松野 先生と。自宅によく訪ねていく。自宅に訪ねていく必要がある
から。特に親しくなるのは、試験ですよ(笑)。できないから。
ラグビーをやっていると、ほとんど試験がもうろうとしてできな
いんだ。答案用紙に三割も書ければいい方なんだ。さあ困ったな、
と思つて、発表前に頼みに行くわけ。一升瓶を持って。そうすると
玄関で仁王立ちして、「お前、そんな卑怯なことをするな、そんな一
升瓶は持つて帰れ」と叱られたこともある。これは駄目だな、と思
つたら、その叱つた先生はちゃんと合格をくれた。叱つておいて、
くれるんだ。また逆に、「上がれ」と言つて、紅茶を飲ませてくれる
先生もいるんだ。

だからふだんから親しくしているのは、必要に迫られるからな
んだ。試験の時に行くなら、その前に酒でも持つて行つておいた方
が、行きやすいものだから、親しくならざるを得ない。試験の時だ
けでは具合が悪いから、その前に行く。だから自宅訪問は私は得意
でしたよ。みんな自宅を知っているんだ。知っているから、その次
に頼めるんです。だから必要に迫られて先生と親しくなるんだ。そ

れで普通に行つて、「田舎からおくりものが来ましたからどうぞ」
と出せば、「まあ上がれ」と言われて上がる。こっちはそわそわしな
がら、実は年度末の試験を頼みたいんだけど、その時は言わない
で、いずれとか言つて、親しくなるだけなんだ。今のマキさんと
板倉さんとか永田さんとか、親しくなつたのは、自宅に行つてか
らだ。それも一つの教育でしょうね(笑)。行けば何か話してくれ
ますよ。そんなに突つ慳貪な人はいない。何か世間話をしてくれま
すからね。

塾長の小泉信三さんのところにも行つたことがある。それは謹
言実直な人だつた。やはり何か話してくれる。「最近の学生はどう
か」とか質問される。「いや最近はこんなです」「俺の時はこうだつ
た、福沢諭吉さんのときはこうだつた」と話してくれる。話してく
れると今度は印象が良くなるものですからね。

だから成績の悪い奴は悪い奴なりに努力すればいいんだ。何か
考える。私なんか本道で駄目だから、抜け道で努力したでしょうね。
それはやっぱり努力のうちでしょう。本道が通れないんだから、裏
道でも努力しなければ。どっちもやらないやつが一番いけない
だ。それは山に登れないね。登ろうと思つたら、本道が駄目なら裏
道でもいいんだ。これは私の父が私たちを突っぱねたからでしょ
うね。「自分のことは自分でしなさい。教えることはできても、俺は
代わりに試験を受けられないんだ。受かつたらその時教えてやる」、
そういうふうに出つぱねられたから、自分で努力したんでしょ
うね。だから慶応の時はとうとう落第なしに、全部合格点すれすれで、
ほとんどラグビーをやつていて、勉強はしていませんからね。試験
は受けた。

一度大失敗をやつたのは、代わりに試験を受けてもらつた。でき
るやつがおつて、「おい松野、おまえできるか」というから、「でき
ない。おまえなんとかしてくれるか」「俺が代わりに受けてやろう
か」「うん、あの先生なら大丈夫だ、二百人ぐらいうけているから」

「俺も入っているからお前も大丈夫だ」「じゃあ代わりに受けてくれ」「十円だぞ」、十円といったらいまの十万円ですわね。それで頼んで受けてもらった。落っこちちゃった。落第印がついていた。「お前、なんだ、落第点取って、なんで十円払えるんだ」「お前は受けてくれといったんだ、合格させてくれとは言っていない」、それでもめて、結局半分の五円取られた(笑い)。

それで追試験は私が受けたんです。追試験は少ないから、すぐつかまる。それで追試験で進級したんです。とんでもないことだ。「お前は代わりに受けてくれという約束をしたんで、合格という約束はしていない」「馬鹿野郎、落第だったら、俺だって受けるよ」といって、十円の問題でおおもめにもめた。結局、中をとって五円で、あと追試験を受けて、三日間ぐらい勉強をし直した。追試験で通らないと進級できませんから。必修科目だから。それで追試験を受けたけれど、五円払って馬鹿なことをした。やっぱり裏道は近道じゃない。近道は危ないんだ(笑い)。結局遠回りの方がいい。成績が悪くても自分で受けておけば。追試験だから三日間ぐらい勉強して、それは通りましたが、最初からやれば五円払わずに済んだ。

■サラリーマンの後海軍経理学校に

伊藤 それで大学を卒業される頃には、政治家になろうと思っておられたのに、会社に入られるんですね。

松野 会社は、これもおやじは全然、推薦もしてくれない。三菱商事を受けたんです。見事に落ちた。隣に日立製作所があるんです。そこを受ければ、そこに入っちゃった。それで日立製作所に入っちゃった。三菱商事が隣だから、三菱商事を受けて失敗したから、隣に頼みに行った。日立が何だか、おやじは一切紹介しないものだから、自分の力で入れという。友だちと二人で受けにいったんです。

二人とも三菱商事を受けて、駄目なんだ。二人で日立に行ったら、二人とも入った。ただそういう因縁でした。日立製作所がどういう会社か知らずに。あの頃は軍需工場で、たくさん入れたんですね。慶応から五十人ぐらい入れたでしょうね。全部で、四、五百人採っていましたから、慶応でも五十人ぐらい入って、その中には入った。

伊藤 会社に入っとうしようと思っておられたんですか。
松野 入っても別に長くおるとは思っていないからね。しばらく社会勉強のつもりで、日立製作所に終身おる気はない。社会勉強としてサラリーマンの体験を二、三年しようかなと思った。戦争だから、すぐ海軍の経理学校の試験があった。それを受けたらそっちに入ったから、経理学校の方に行ってしまった。

伊藤 海軍経理学校というのは、どういう格好だったんですか。

松野 海軍経理学校は、全国の大学を出たものから八十人採るんです。経理幹部候補生ですね。それは日本中の大学から来る。

伊藤 それは短現と言われていた制度ですか。

松野 短現です。二年間。

伊藤 それは何期目ですか。

松野 私は五期です。

伊藤 五期ですか。中曽根さんは。

松野 六期です。それで慶応を出て受けて、慶応からだいたい二人とか、東大から何人とか、だいたい学校別に採っていたんです。ぱらぱらに。慶応からだいたい二人、早稲田から二人、東大から何人、京大から何人、だいたい毎年そういうものを採っていた。そこに、当時レスリングで有名だった風間「栄一」とか、テニスのチャンピオンだった山岸「二郎」とかが入る。海軍のイメージアップみたいなものだったでしょうね。陸軍は、依託学生といって、在学中から決めるんです。在生の中から決めて採用する。

伊藤 お金が出るんですね。

松野 お金もくれます。依託学生ですけど。海軍は卒業してから探る。その差がありましたね。

伊藤 それはかなり希望者が多いんですか。

松野 多かったですね。それは陸軍の徴兵で採られるよりはいいですからね。入れば中尉にしてくれますから。短期現役は任官すると中尉ですからね。

伊藤 最初は中尉なんですか。

松野 任官すると。それは一等兵で徴兵されるよりいいでしょう。だからみんな受けるわけだ。慶応から十人ぐらい受けたでしょう。その中で二人。それは学校の成績よりも面接で採りましたね。海軍は面接が多かった。学校の成績でやれば、私は入らなかった。面接だったから入ったんでしょうね。いろいろ質問を受けましたけれどね。わりに学校の成績より健康なものを探るんです。だから優秀な頭脳よりも体育会系をうんと採っていますね。海軍はわりとその辺はあか抜けしていました。山岸とか風間とか、スポーツ選手がたくさんいた。私はそっちの方で選ばれた方でしょうね。

伊藤 「海軍経理学校の試験は」慶応の時代に受けているんですか。

松野 慶応の時代に受けています。二月か三月に受けて、卒業が四月ですからね。発表がだいぶ後でしたね。

伊藤 それ「合格発表」は会社に入ってからですか。

松野 入ってからです。

伊藤 すみません、その頃どこにお住まいだったんですか。東京においてになってから、ずっと同じところですか。

松野 その時は伊皿子「港区三田あたり」でしょうね。いま私の甥が住んでいます。伊皿子にいたと思います。

伊藤 そこから丸の内の会社に通われたんですか。

松野 ええ。いまの明治生命ですね。明治生命の六階に分室があった。日立の社は東京駅の前でしたが、分室が明治生命にあった。

私は分室だったから明治生命に行ったんです。

伊藤 どんな仕事をさせられたんですか。

松野 ほんとうにこんなものか、と思いました。原稿を書くんですよ。原稿を二十枚ぐらい持つてきて、その原稿を写して書いて、それを謄写版じゃなくて蒟蒻版にするんだ。謄写版と蒟蒻版がある。謄写版ならガリ版で切るわけです。蒟蒻版だと、蒟蒻のインクで書くわけです。蒟蒻版で一日二十枚の原稿を書いて、それを八枚ずつ刷るわけだ。蒟蒻版で八枚ぐらい。それを二十枚ぐらい持つてくる。なんのことはない、書いていけば、午前中で済んでしまう。あと困ってしまう。そうしたら先輩が来て、「松野さん、サラリーマンというのは、こんなことをしちゃいけないですよ」「どうして」「この二十枚を一日かかって静かにやる。それがサラリーマンだ。二十枚終わったら、あとどうします。働いていないような格好をしちゃいけないんです。いつでも働いているような格好をして、この二十枚を五時ギリギリまで、ああ忙しいと言つて終わるのがサラリーマンの仕事です。あなたはまだまだ駄目だ」と言われた。どうしても早くなる。ゆつくりできない。「それは何遍も書き直してもいいけれど、なるべく紙を使わないように、ゆつくりゆつくり考えながら、忙しそうにやる。忙しそうに二十枚の原稿を写して、五時になって、あ間に合わない、間に合わないと言いながら、残業するぐらいになつたら一人前だ」という。いやまあ、いまだにこの処世術は見事なものだと思った。「あなただけ急ぐと、はたが迷惑する。あなたの二十枚は、また次の人のところに行くんですよ。あなたがお昼に終わったら、次の人もお昼に終わらなければいかん。それじゃ駄目なんだ。ぎりぎり五時になって間に合わん、間に合わん、と言つて五時半頃に終わるようになったときに一人前のサラリーマンだ。そのあいだ忙しそうにしているんだ」。なるほど、これがサラリーマンか。

その謙卑という先輩が教えてくれた。「松野さん、まだまだ駄目

だ。私を見なさい、同じ二十枚ですよ。こんなに忙しそうにして、一日中やっているでしょう。それを上司に忙しそうに見せなきゃいけない」「じゃあもう一回書き直しましょうか」「そんなことをすれば無駄なものが出ます。それはいけない。上手にきれいに二十枚、五時になつても間に合はん、五時半まで残業しなければいけない」というときになつて一人前だ。あんた二時間でやつちやいけない。六時間でやるんだ」。私がいちばん苦労したのはそんなことです（笑い）。これは苦労です。上手に、遅く働いているような顔をしてやるのは技術だ。これは大変な技術です。それがサラリーマンのABCだと言われて、いまだに忘れない。名言だ。

伊藤 僕はガリ版というのはやつたことはありませんけれど、蒔蕪版というのはやつたことがないんです。あれは難しいものですか。

松野 いや、蒔蕪版は、書いたときはきれいに見えるんです。逆にとつて、とると字が全然写らないんだ。

伊藤 あれは何か特殊な紙に書くんですか。

松野 いや、インクが違うんだ。それを蒔蕪版にくつつけてこすると、インクが蒔蕪に染みる。今度は、そこに白い紙を当てればいいわけだ。まあ上手にやれば二十枚ぐらいとれるでしょうね。

伊藤 やつぱりそれは上手下手があるんですか。

松野 上手下手がある。押し方で、うんと押せばうんとつく代わりに少なくなつちゃう。上手なものはサツととつて、二十枚もとる。私なんか十八枚か、十九枚で、もう写らなくなつちゃう。それは押し方が違うんだ。

伊藤 それは何で押すんですか。

松野 手で押すんです。女の子が上手なんだ。高等小学校を出たぐらいの十五、六歳の女の子が、見事に二十枚とる。そっちの方が先生なんだ。「なぜこんなことをやらせるんだ」というと、「いや、みんないつべんは覚えてください」という。

その次は工場の実地で、あそこは電気だから、コイルを巻くんで

すね。小さいコイルを、機械で電線を巻くわけです。そこにメーターがあつて、二百回巻いたら止めるとか、電線を巻くことをやらされる。電線を巻くつたつて、うまく巻けなくて、よれよれになってしまう。そのたびにオシヤカで、私たちがやったのは製品になりませんけれど、そんな実習をさせられた。それは覚えるだけです。

伊藤 こういうことをやっています、ということですね。

松野 商品の製造過程ですね。日立に行かされて、工場を全部見せられて、重機械をつくつたり、いろいろなものをつくつたりしている。そんなことをして二ヶ月もしていましたかね。いちばん困つたのは、蒔蕪版を急ぐな、ということですね。急げというのならいいけれど、急ぐな、という方が難しいな。しかも働いていて、よく勉強しているような格好をしなければならぬ。だから、さつき私は「サラリーマン政治家」と言つたけれど、いかにも何かやつているように忙しそうにパフォーマンスをやっているけれど、何も日本の政治は進んでいないんだ。時間が来るまで待つていれればいいんだ。

佐道 意味の深い言葉だつたんですね。

伊藤 さつきの話と結びつくんですね。

松野 時間が来るまで待つていれればいい。本人の努力じゃない。いまの森なんていうのもそれに近いでしょうね。何か来るまで待つているだけで、自分でどうしよう、ということはない。そんなことをしたら駄目なんだ。

伊藤 それで二ヶ月ぐらいですか。

松野 九月までだから、四ヶ月ですね。九月から「海軍経理学校」に入校しました。

伊藤 経理学校はどこにあつたんですか。

松野 勝鬨橋のたもとです。いま記念碑が建っています。勝鬨橋のたもとに大きなビルができました、それでも「海軍経理学校跡」という碑が建っています。ちょうど勝鬨橋のたもとで、勝鬨橋がカツ

ターで運動場でしたから。いまは家庭裁判所だったか、何かのビルになっっていますね。あそこに「治作」という料亭があって、「治作」でこのあいだクラス会をしました。たしか九月十日に入校しました。それで十月十日にみんなで三十五周年記念をやったんです。

伊藤 同期で、ですか。

松野 同期です。八十人の中で来たのが四十人ぐらいいましたね。わりに多かったですよ。戦死したのもいたけれどね。九月十日だから、十月十日にやったんですね。

伊藤 経理学校はどのくらいの期間ですか。

松野 九月から二月まで、まる六ヶ月。

伊藤 六ヶ月間みっちり、ですか。

松野 みっちり、それこそ朝から時間通り。七時に起床、七時半朝食、八時朝礼、それから勉強、午後は体育、カッター漕ぎ、運動。それで九時が消灯。ハンモックですね。短期現役はみんなそれをやっている。一クラス八十人です。みんなハンモックです。

伊藤 同期だと、非常に親しくなるわけですね。

松野 非常に親しくなる。

伊藤 一緒に生活しているわけですからね。

松野 いまでも「おい、お前」という仲だ。呼び捨ての仲で、いまでもそうです。四十人ぐらい生きていますけれどね。

伊藤 経理というのはなかなか面倒ではないですか。

松野 二年現役でずいぶん偉くなったのがいますよ。このあいだ来ているのは、検事総長をやったのがある。辻「辰三郎」という検事総長、前の前の前の検事総長ですね。検事をやったのもいたり、役人も多かったですね。局長をやったり次官をやったり。東大出が多いから、役人も多いんです。

伊藤 勉強はかなりきついですよ。

松野 海軍経理の本だから、学校で習ったのと違って、海軍の会計法を厳しくやった。それから簿記が厳しかったですね。

伊藤 いろいろな物品の名前とか。それは今まで聞いたことがないようなものもあるでしょう。

松野 聞いたことがない。世間で使わないような「ハンカ」なんていつていたら、それが靴だったりね。

伊藤 ハンカはどう書くんですか。

松野 半分の靴ですね。

佐道 長靴に半靴ですね。

松野 いろいろな物品があつて、経理の方法、款項目節で項目を並べたり、酒保の経理をどうするか、要するに海軍の経理の問題で、初めてのことがばかりです。こんなに厚い本「両手で二十センチぐらいの幅を示す」が五、六冊あつて、その中の大事なものの試験をやる。試験も年中ありましたね。

伊藤 一応六ヶ月やると一人前ですか。

松野 本の読み方がわかりますね。どこを見れば何が書いてあるか、その読み方だけはわかる。あとはそれを見ればいい。それでみんな主計で出ていくんですから、それは覚えていなければいけません。

伊藤 それは何年ですか。

松野 昭和十五年。十六年が戦争ですから。だから私たちは十六年の二月に赴任して、みんな船に乗ったり、陸戦隊に行ったりする。私はそれから駆逐艦に乗って、上海の陸戦隊の付属に行つたわけです。上海陸戦隊付属の蘇州砲艇隊です。小さなところですよ。

伊藤 それは砲艦か何かですか。

松野 砲艦というか、クリークの川船です。太湖とか、あの辺の近くにクリークがありまして、クリークの警備です。そこに八月に赴任して、十二月に開戦なんです。開戦ということ、その辺にいた私たちは知らなかったんです。電報が来たわけです。十二月八日の八時に電報が来たわけです。「本朝米英ト交戦状態ニ入り真珠湾攻撃セリ」といつて、戦果がどうだこうだと。以下「直チニ米英ノ資

産ヲ取用セヨ」という命令があった。さあ、それであわてて、蘇州の米英の資産、財産がどこにあるか探したんです。そうしたらその近くにどうもあるらしい。よしそこに行け、といって行ったら紡績工場か何かだった。紡績工場に行つて、これは米英じゃないか、と聞いて、いやこれはイギリスの資本が入っているとかなんとかとあるので、じゃあそれを接収しろといって、あわててそれから接収した。向こうも抵抗はしませんよ。それで日本の軍艦旗を揚げた。だから蘇州では紡績会社を一つ接収しただけです。

伊藤 その時はもう中尉になつてゐるわけですか。

松野 中尉になつてゐます。二月に卒業するときに中尉になつてゐます。卒業までは中尉になつてゐない。卒業式と同時に中尉に任官するんです。だから中尉です。

伊藤 じゃあ少尉は経験がないわけですね。

松野 ええ。それから上海の砲艇隊で戦争「開戦」を知つたわけだ。だから戦争ということを知らないんだ。下つ端になるとわからななんだ。何にも教えてくれない。幹部だつて知らなかつたでしょうね。だから私たちは戦争の経験といつても、ただつかまれただけで、言われるとおりやつただけで、意識もない。戦争中、蘇州にいたけれど、蘇州の住民とも平気だつたんですよ。戦争しているな、なんて街を歩いたつて、中国人のひと「戦争になつたな」そうだそうだ」といつていて、何も意識がないんだ。だから前と同じなんです。戦争になつても中国人の住民と同じように話している。ただ命令が来ると何かしなきゃいかん、といつてあわてて行くぐらいです。そんなに戦争前の八月と十二月と意識の違いはない。何も変わりがない。

伊藤 当然そこでは戦闘なんかないわけですからね。

松野 ない。それで、中国人のダイマルという百貨店があつて、その前に洒落た中国人のパン屋とお菓子屋とレストランがあつた。これはなかなか気が利いていて、年中そこへ私は食べに行きまし

た。戦争が終わつた後、私はいなかつたけれど、話を聞いたら、それが中国の大尉だつたという。それでも知らずに一所懸命食べていた。終戦になつた途端にそれが軍服を着てダイマルに来たそう。ダイマルの社長は驚いた。昨日までワンさん、ワンさんといつていたのが大尉になつてゐる。おまへたち全部接収するという。接収されたそうです。

ダイマルの社長が「日本に」帰つてきて、「松野さん、私は驚いた。あのワンさんは大尉だ。あれが翌日軍服を着て私のダイマルに来て、『これは全部敵国財産として接収する。ただし、君たちは好意的だつたから、黙つて出ていけばいい』と言われて、特に迫害を受けなかつた。財産だけは没収するという。ワンさんが大尉だつた」という。だからほんとうの戦争というのは、現地で激しいところは別だけれど、中の人間は同じなんだ。人間は変わらないんだ。ただ立場がある。昨日まで俺も中尉だつたんだから。だから人間というのは立場と服装が替わつても、人間性というのは変わらない。私たちがワンさんを大事にしたと同じように、今度はワンさんが日本人を大事にしてくれた。だから強権とか、政府とか権力を捨てれば、人間というのは変わらないものだということを私は体験した。権力というのはいけないんだ。権力というものが人間を壊すんだ。私は無政府主義者じゃないけれど、権力というのは使わんことだ。権力を使つたら駄目だ。政治は人間性でやらなければいけない。

今日の長野県だつてそうですよ「前日の長野県知事選で田中康夫氏が当選している」。権力・反権力だ。田中康夫がいいか悪いか別で、あれは反権力で勝つたと思う。田中康夫が当選したんじゃない。反権力という力、民権主義じゃないけれど、明治以来、自由主義と同じ民権主義という。人民、国民、民衆というのは、権力に対するあれ「反発」があるんだ。学校の生徒は、先生を権力者と思つているからね。先生は先生に徹すればいいので、教授になつちやいけない。先生でおればいいんだ。教授になると、点数をつけるから

問題が起こるんだ。

伊藤 その上海、蘇州にはどれぐらいおられたんですか。

松野 約一年ですね。夏から、次の夏までちょうど一年いて、それからフィリピンに行った。「八重山」という船の機関長で。

伊藤 「八重山」という船は何ですか。

松野 掃海艇。小さな船です。それがフィリピンの第三南遣艦隊の旗艦なんだ。

伊藤 その小さな船が、ですか。

松野 小さな船が旗艦なんだ。形だけ旗艦なんだ。あの時は、旗艦は小さなものだけれど、海軍大将から全部その船に乗ったことになっっているんだ。それで海上勤務をもらうんだから。海軍は便利なもの、上海の陸戦隊の隊長でも、「出雲」に乗艦したことになっている。あの船に何千人が乗ったことになっている。それは何故かという、海上勤務、乗艦勤務手当をもらうんだ。乗艦勤務手当をもらうと給料が高くなるし、同時に恩給も上がるし、勲章の計算もよくなる。だから海軍というのは便利なもので、陸上にいても、船があればみんなそこに乗っていることになる。だから「出雲」という船が年中、上海につないであるんだ。「出雲」の上に上海陸戦隊司令長官は乗ったことになっている。ただ便宜上、こちらにあるということ。乗艦手当はもらうんだ。

だから「八重山」という小さな船に、大将から中将から全部乗ったことになる。実際には司令部におるんですが。乗艦手当をもらうには海軍は常に海におらなければいけないんです。海軍は海上におることが前提なんだ。陸上にいたら陸軍になっちゃう。だから海軍は常に海の上におるということで、出雲の上に司令長官は乗っていることになって、便宜上陸戦隊としてこちらにいる。本体は乗っていることになる。

伊藤 先生は「八重山」にのっておられるんですか。

松野 私は乗っているんです。私は乗っていないといけない。だ

から船の中で居住している。船の中にずっと、約一年十ヶ月「八重山」に乗っていました。

伊藤 それはフィリピンのどこにいるんですか。

松野 マニラにおるはずだから、マニラ以外、フィリピンの周りの島をぐるぐる回っていた。マニラとかラバオとかセブとかいろいろ、あの辺を一年十ヶ月回っていた。ひと月のうち二週間島巡りをして動いて、二週間また入ってくる。

伊藤 それは第三南遣艦隊司令部があるわけですね。その経理部長はー。

松野 経理部長は別にいます。司令部の経理部長は少佐。「八重山」の経理部長は大尉でした。

伊藤 仕事はその「八重山」だけやればいいんですか。

松野 「八重山」だけです。百四十人ぐらいいましたかね。

伊藤 その給与とか補給ですね。

松野 艦長は大佐、航海長が少佐、軍医が大尉、主計が大尉、だいたい将校が十人ぐらいいましたかね。機関長とか、少尉以上が十二名ぐらいいましたかね。あとの百何人は兵隊です。

伊藤 フィリピンのいろいろなところを回って歩くというのは何ですか。

松野 それはときどきゲリラが出るんです。ゲリラ掃討に行くわけだ。ゲリラといっても、フィリピンは島が四千ありますからね。見つかりはしないんだ。見つかるもんですか。向こうの方が利口だ。船が来れば隠れる。どこの島、という電報が来るとそこに行つて、その島を、見えないけれど、多分あの辺におるといって、海の上からパーンと大砲を二十発ぐらい撃つて帰ってくるだけで、当たったか当たっていないかわからない。音を出して、二十発ぐらいジャングルに撃ち込んで帰ってくるだけ。それしか方法がない。向こうに上がれば向こうの方が多いですからね。絶対に陸には上がらない。陸軍からそういう命令が来るんです。この辺にゲリラがおるか

ら、自分たちは行かれないから、海軍が船から撃つてくれというと、その命令通りやるんです。

伊藤 威嚇なんですね。

松野 威嚇なんだ。だから戦闘らしい戦闘じゃない。ただその時にマニラに「鎌倉丸」という船が来まして、千八百人ぐらい乗っていましたかね。それはシンガポールの方に行く軍属とか小学校の先生とか、慰安の演劇とか、文官とかをたくさん乗せて、忘れもせん四月の天長節の前後に入ってから来ました。それが出ていったら、三日目にそれが撃沈された。それが天長節の日に出ていったような気がします。四月二十九日に。その日に出ていって、翌日か翌々日に撃沈された。それを拾いに行けというので、急いで全速力で行って、それでも二日かかったんです。だから、撃沈されてまる二日たっている。それを救いに行つたんです。生きていたんです。千八百人のうち、四、五百人生きていた。それを私の船と他の船と一緒に拾った。

筏に丸二日いたんですからね。スルー海という静かなところですけれどね。女性が二人いて、その女性だけは元気なんだ。筏があつて、二、三人は乗れるけれど、後はみんな筏の横にぶら下がっている。女性だけはずっと筏の上に乗せられていたんです。あとのものは交替交替。長く「海に」入っていると、小さい魚に皮膚がみんな喰われる。体が全部小さい魚に喰われるんですね。魚の餌食になる。しかし生きていました。私は四十何人拾いましたけれどね。女性だけ元気なんです。さすがに女性だけは筏から降ろさない。だから女性は何もなっていない。それが印象に残っていますね。だけど、四十八時間よく何も飲まず食わずで生きていたと思いますね。海が静かで、わりに暖かいところでしたからね。人間というのは最後は努力するんだな、と思ひましてね。それで私は戦争を身近に感じましたね。後は私たちは、戦争前に引き揚げたから。

伊藤 それは昭和十九年ですね。

松野 十九年の四月頃ですね。

伊藤 それで、今度はどこに転勤ですか。

松野 その間ちょっと呉に帰ってきました。呉からすぐに京城、今のソウルの経理部に行きました。

伊藤 あんなところに海軍があるんですね。

松野 もちろん海軍の経理部。

有馬 これは、ちょっと呉に帰ってきたときのもので、冒頭で松野氏が持つてきた、呉の松野氏宛のはがきを示す。

松野 そうです。

伊藤 はがきがあるんですね。主計長ですね。

松野 どこでも主計長です。私たちは中尉になったらみんな主計長だから。中尉でも主計長、少佐でも主計長。その主計長です。そのはがきは呉公務部主計長ですか。それは四ヶ月ぐらいでした。

伊藤 いちおう、ここにしばらくいたんですか。

松野 ちょっとおつただけです。

伊藤 もちろん仕事があつたんですね。

松野 もちろんありますよ。大したものじゃあないですよ。

伊藤 今度ソウルでは何ですか。

松野 ソウルでは、経理部に配属されたんです。海軍経理部の経理部主計長。経理部長というのがいますからね。部長の下に経理部員。経理部長が少佐ですから、部員というのはわりに上の方でした。二番目ぐらいでした。経理部長と部員ですから、二番目だ。

伊藤 朝鮮にどういいう海軍がいたんですか。軍港だったらわかりますけれど。

松野 それは今でも、何を積んだか。武官府というのがあつた。武官府はどちらかというと特務機関みたいなもので、そのあれに児玉機関なんかがあつた。上海の武官府の付属機関が児玉機関だ。児玉機関は、要するに戦争をしている相手の重慶と取り引きをしているんだ。戦争をしながら取り引きしているんです。金(かね)

では買えないから、金(きん)とか銀とか、貴金属を持って行って、向こうから食糧とか、こちらの必要なものと物資交換をしているんです。敵地、向こうの占領地で。それが兎玉機関なんです。その補佐をする。朝鮮から物資を集めて、兎玉機関が取りに来るんです、私たちの経理部に。

伊藤 ああ、朝鮮で物資を集めてー。

松野 朝鮮で集めるものがあるんです。いろいろな朝鮮産のもの、朝鮮人参とか。その中に驚くなかれ、阿片があつたんです。

伊藤 栽培していたわけですかね。

松野 それは朝鮮じゃなきゃないわけだ。栽培していたんだ。

小池 北の方ですね。

松野 私は阿片を見たことがないんですが、帳面上は五トンあつた。おそらく私は北の方だと思ふ、満州寄りだと思ふ。今でも北朝鮮にある。あの辺だろうと思ふ。それは軍需物資なんだ。中国の奥地に持つていくために、やつていたんだ。そういうものを経理はやつていた。私は経理で見たら阿片と書いてある。どこに置いてあるかといつたら、朝鮮総督府の地下にあるという。とうとう見る暇はなかつたです。それを取りに来るわけ。帳面上は知つていなければならないけれど、本物を見たことはない。この間見たら、北朝鮮に阿片があるといつていられるけれど、あの辺だろうと思ふ。だから日本の統治下の頃からやつていた。ある意味において、阿片は麻酔剤とか一種の薬用には使つていますけれど、主として兎玉機関に渡したのは、中国のあの辺に持つていくわけだ。スパイの行動だ。

それから兎玉機関のやつが来ると、ダンヒルのライターをくれるんだ。あの頃ダンヒルのライターなんて見たこともない、聞いたこともない、大変なものです。それとか、パーカーの万年筆。

伊藤 懐かしい。

松野 パカパカくれるわけだ。兎玉機関の吉田というやつが。「松野さん、これあげましょう」といってライターをくれる。「これも上

げましょう」といって、パーカーをくれる。もう目をみはる。「これはみんなアメリカのやつだろう」と言うと、「そうです」という。「どうして、それは私たちはルートがありますから」という。戦争をしながら、裏では両方で、政商が動いている。その上、自動車も持つてくるんですよ。車まで持つてくるんですよ。アメリカの車、忘れもしないプリムス。寄付するんですよ。もちろん私にはなくて経理部にですよ。だから経理部長と私が乗る車を寄付してくれる。驚いた。それが今の物資だ。金(きん)とかプラチナとか阿片とかというものと交換していく。それが兎玉機関の仕事だ。世の中というのはね。

伊藤 松野先生は物を実際に扱つたりするわけではなくて、帳簿上、

松野 帳面をつけるんですよ。こうしろと言われるから、それをつけるだけなんです。私が権限があるわけではない。それは海軍武官長が決めるわけ。その経理を私はやるだけ。だからとうとう物を見なかつた。ただダンヒルとパーカーをもらつた。まあ、役得でしょうね。プリムスも乗れる。部長も乗るので、私だけではないんだけど。私は、そういう物があるということを知つた。いろいろなことをやつていたんだな、と思つた。

伊藤 そこで終戦を迎えられるんですか。

松野 そこで終戦。終戦を迎えたところが、昨日まで使つていた運転手とか下つ端の奴が二十人ぐらい私を取り囲んで、「お前たちは今日から敗戦国民だ、おれたちは戦勝国民だ。松野さん、あんた今日から敗戦国民だ」といって説教するんだ。危害は加えない。私たち二十人ぐらい日本人の将校は、どうしようかということになったが、「ただちに撤去しろ。洋服も置いていけ」という。米だけ担いで持つて行けという。持つて行けといつたつて、今まで担いだことないんだから。まありユツクサツクにいっぱい米を入れて担いで、その晩のうちに駅に行つたけれど、日本人は乗せないと。それ

で頼んで、貨物か何かに乗って、釜山まで行った。釜山まで三日間ぐらいかかるんです。普通なら五、六時間で行くところ、走っては止められ、走っては止められ。止まると、近くの農家に行つて、米を出して、米を炊いてくれと言つて。

敗戦の昨日と今日の一日の違いでこんなに違うかと思つた。物資の阿片なんかは、どうなつたかわかりませんよ。とられちゃつたんだから。その朝鮮は、翌日になつたらハンゲル文字が街いっばい。昨日まで使つていた運転手が、今度は朝鮮語を使つて。わからないんだから。こんなに隠れてわれわれはやられていたのであるかと思つた。

伊藤 それでも、とにかく釜山までは行けたんですね。

松野 まあ、みんなでグループを組んで、三日、四日かかつて行つた。

伊藤 それは海軍のグループですか。

松野 海軍のグループです。

伊藤 海軍なら船がありそうな気がしますが(笑)。

松野 それで釜山に来たら海だから、今度は困る。あそこに鎮海という海軍基地があつて、鎮海にたどり着いたわけだ。鎮海に行けば海軍の宿舎もあるから、そこで一週間ぐらい待つて、船を探した。海軍の船はみんなとられていきますから、漁船に頼むしかない。だから漁船に頼んで、空くのを待つて、一週間ぐらいいましたかね。そこで飯を食つていた。

伊藤 お金を払つて、ですか。

松野 鎮海は海軍の基地だから、ただでいいわけです。

伊藤 船は。

松野 船は金を払うか、物で払わなければいけない。それで金を払つた。朝鮮銀行券を払つて、それで乗せてもらった。

伊藤 それでどこに着いたんですか。

松野 福岡です。釜山と福岡は一番近いんです。

伊藤 どれぐらいかかりましたか。

松野 夕方五時頃乗つて、到着しましたから、七、八時間かかりましたかね。

伊藤 それは朝鮮人の船ですか。

松野 朝鮮人の船、漁船でしたね。日本人が、そうですね、百人以上乗っていましたね。小さい船で、危ない船でしたね。荒れて。それで福岡に着いた。福岡についても、なかなか汽車に乗れるものではない。私は今でも覚えていますが、責任感を感じたのかしらんが、二四〇万円ぐらいの金を持っていたんです。

小池 その当時で、ですか。

松野 ええ、二四〇万円ぐらいあつたでしょうかね。

有馬 それは何の金ですか。

松野 経理部の金。二四〇万はちよつと多いかな。職員の給与ですから、二五〇人ぐらいの給与をひと月分以上持つていたんだから。二四万かな。現金で持つていた。それをリュックサックに入れて、米を持ちたいのに、責任があるものだから、札を積んで、担いで、二四〇万、重いものを担いできた。

伊藤 それは朝鮮銀行券ですか。

松野 朝鮮銀行券。それを海軍の本部まで持つていかなければ責任が立たんと思つて、二四〇万何千何百何十何円まで書いて、一所懸命持つていった。途中で赤痢になつて、赤便と粘便を出しながら、苦労して苦労して、やつと持つていつて、海軍経理部の、今でも顔は覚えていますが、少佐に、「これを苦労して持つてきたから、調べて受け取ってくれ」といつたら、「ああ、そこに置いてください」といつた。見ない。腹が立つて、腹が立つてね。あの金はどこに行つちやつたのか。あれなら持つていかなければよかつた。調べもしない。あれなら持つていかないで、途中で使つてしまえばよかつたと思つてね。

伊藤 東京まで持つてきてー。

松野 朝鮮ではらまいてくれば、私たちはもつと朝鮮人に威張れ

たんだ。一所懸命、公金だと思つて、何円何銭まで書いてあるんだから。それなら朝鮮で使つてくれればよかつたと思つて。敗戦の経験がないものだからね。どさくさの経験がないものだから、馬鹿正直なんだ。今でも私はその領収書を持っている。サインだけはもらつたから。調べないけれど、「サインだけください」といつたら、「あげましょう」といつて、サインをくれた。たしが私は、今でも几帳面だから持っているかも知れませんが。しかし調べやしない。リュックサックにいっぱいあつたんだから。米も持たずに、その金だけは公金だと思つて、赤痢をしながら、ふうふう言いながら、これだけはと思つて抱いて持ってきたんです。調べもしない、検査もしない。その少佐のやつはとんでもない。それなら苦勞をせずに、朝鮮ではらまいていけば、鶏肉でも牛肉でも食えたのに。この次戦争をするときは、あんな馬鹿なことほしくない(笑い)。

伊藤 負けるような戦争はしない(笑い)。

松野 もう、こんな馬鹿な戦争できませんね。情けなかつた。それで朝鮮人嫌いじゃないけれど、朝鮮に行くのに、その時の印象がね。

その後朝鮮に行ったことがあるかというから、農林大臣のときに、どうしても日韓閣僚会議で行かなければいけない。それで、行きたくなかつたけれど、行つたんです。その時は大統領が誰でしたかね。一日行つて、閣僚三人で行つて、オーカヒルに泊まつて、夜は朝鮮料理をご馳走になつて帰つてきた。

朝鮮に行くとき懐かしいものだから、昔アサヒ町とか朝鮮総督府と言つていたけれど、外務省の案内人がいるから、「ここに昔、朝鮮神社がありましたね」といつたら返事をしない。「ここはアサヒ町といましたね」といつても返事をしない。「ここは昔朝鮮総督府でしたね」といつても返事をしない。一切返事をしない。外務省の書記が。まあ、こんな不愉快な奴もいないな、と思つてね。そうでした、今はこうです、と変わったことを教えてくれればいいのに、

昔のことは言いたくないんだ。その時の印象が悪かつた。だから翌日は急いで帰つてきた。どこも寄らずにね。

そのときは、向こうの接待役は、明治大学を出た人がその時の幹事長でした。藤山さんも一緒だった。その時外務省で、「今日はみんな料理の横に妓生(キーセン)が付きます」という。一人ひとりに妓生が付くそう。それで妓生が箸でつまんで食べさせてくれます。そういう礼儀だから」と前もつて言う。「ただしこの妓生にセクハラみたいな妙なことはしないでくださいよ。みんな堂々たる一流の大臣の愛人ですから。うっかり冗談を言われると後で恥を掻きます。その妓生は、みんな金持ちか両班(やんばん)か大臣の彼女なんです。だからただの東京の芸者のつもりで冷やかすようなことはしないでください」とまで言われてね。それはきれいな妓生が座つて、箸で食べさせてくれるんですよ。まあ、あんなの初めてだけれど、二度と食べたいと思わない(笑い)。

明治大学を出たと言つたのは金鍾泌です。幹事長でした。書記長みたいな金鍾泌さんが接待役で、今でもいらつしゃいます。

■鳩山内閣の内幕

伊藤 さて、そろそろ時間ですので、何か聞きたいことがございますか。

有馬 いずれゆつくり伺います。お父様の伝記がございますね。これ「松野鶴平伝」は熊本電鉄で。

松野 熊本電鉄でつくつたんですね。

有馬 もう残っているものはございませんか。私も持っていないので、人のものを借りてきたんですが。

松野 電鉄にあるかもしれません「取りに行く」。これをお貸ししましょう。私のものですが。

有馬 コピーはこちらで取りまします。

松野 こういう伝記は人が書くので、私たちは見たことがない。この間、櫻井よし子というのが、『週刊新潮』のスタッフと来て、いろいろ吉田さんのことを聞きたいという。この前池田勇人のことを聞きに来た。その時はよく話した。それで吉田さんのことを聞きたいというから、「ちょっと待て、そういうことは良し悪しだ。君たちは知ればいいと思ってるけれど、私は吉田さんのことを伝えたいんだ。伝える方と書く方と意見が合わないよ。櫻井よし子さんのを見ると、ちょっと私は違う。池田勇人まではいいけれど、吉田茂のことは理解できないと思う。だからそれは困る」と言って断りました。それで吉田伝を持つていましたから、「その伝記を見て書け」と言った。伝記に書いてあるから、伝記を見て書けばいいんだ。伝記というのはいいことしか書いてないんだから。裏は書いてない。ちよつと持つてきたから、その伝記の通り書けよ。俺はしゃべるのは嫌だ。無理だ。私が言うと、伝記というのはその人のいいことだけを書くんだ。日記ならまだわかる。『鳩山一郎』『薫』日記』というのが出ている。

伊藤 私がやりました。

松野 あれを！？ あなたがやられたの！

伊藤 ええ。『佐藤栄作日記』もそうですよ。

松野 ちよつと待つてくたさいよ「本を取りに行く」。これを見て、私は鳩山さんという人に驚いた。

伊藤 私がやっています。ここにあります。

松野 ほんとうだ。これを見て驚いた。鳩山さんの書いてあること。これを私は鳩山由紀夫からもらった。「鳩山一郎は」ほんとうに几帳面な人ですね。人間も会ったことだけで、内容は書いてない。だから誰に出しても構わないわけですね。これは見事なものだと思う。私の結婚式に出てもらったこともあるんです。

伊藤 これは『下巻』が薫さんの日記になります。というのは、倒

れられてから後、二人で一緒の日記帳に書いているんですが、だんだん自分が書かなくて、奥さんが書くようになって、亡くなるまで奥さんの日記があるんです。そこに人名索引をつけようと思ってるんです。

松野 私の母が、鳩山薫子さんと一緒に謡(うたい)をやっている。鳩山さんの奥さんは謡にリズムがあるそう。私の母は無骨だから、一緒にやっていた。それで百冊あげるとかいつて一所懸命やっていますから。百冊あげるといつていたから、一緒に五、六年やっていたんじゃないかな。月に二回ぐらい、鳩山さんの奥さんと。それで鳩山家と親しい。鳩山薫子さんと私の母が非常に親しくて、年中音羽の家に行っていた。公私ともに。息子の昌太郎、私の兄が退学させられたときも相談に行つたと思いますよ。

伊藤 松野さんのお父様も出てくるし、息子さんも出てくるだろうと思いますよ。

松野 これにもずいぶん出て来ます。ブリジストンの石橋の家が年中出て来ます。この中に兎玉誉士夫が出てくるし、辻嘉六が出てくる。この鳩山さんの日記は見事なものだと思う。またこの本がよくできている。いかにも高そう(笑い)。これは本を見ただけで上等だと思つて。

伊藤 やはり中央公論社ですからね。

松野 本の出来がすごい。どの本を見ても、これが目立つ。ほかの伝記は駄目だ。これが秀でている。これは六千円でしょう。私にもらつただけ。由紀夫が真つ先に持つて来てくれた。

伊藤 鳩山由紀夫さんは、安子さんと一緒に、どうぞといつて、あのコピーを全部つくつてくださったんです。

松野 そうですか。

伊藤 それで自由に出してくださいという。ですからどこも削除したところがないんです。それではすみません、次回を決めさせていただきます。だいたい速記をつくつて、お送りして読ん

でいただいて、ちよつと手を入れていただいて次回、ということになりますので、一ヶ月ぐらいあいだを空けてずつと続けて行くこととなります。今回は十一月の半ば頃でいかがでしょうか。

話の成り行きですから、十回でも二十回でもやらせていただいでよろしゅうございますか。

松野 それは私の命が続く限り。記憶がどうかね。好きなことしか覚えていないからね。いやなことは覚えていないからね。

伊藤 好きなことで、覚えていることを話していただければいいんです。

松野 鳩山薫子さんは、私も何遍もお会いしました。賢夫人。安子さんがプリジストンで、あれもよく存じ上げている。未婚の頃から知っています。鳩山威一郎も二年現役なんです。あれも六期ですから、私の一年後なんです。

伊藤 鳩山一郎が薫さんにラブレターの本が出たのをご覧になったことありますか。

松野 いえ。

伊藤 面白い本ですよ。鳩山一郎が甘い甘いことを書いていて、読んでいて背中が痒くなる。ラブレター集があるんです。

松野 鳩山家はみんな親類従兄弟同士の結婚が多くて、天皇家じゃないけれど、やっぱり他の血を入れようというので、ひとり、体

が弱い娘さんがいるでしょう。渡辺という音楽家と結婚して、娘さんができた。それで鳩山薫子さんが、これは近親の結婚ばかりでこうなるというので、それで石橋から安子さん。安子さんが門外からの初めての人ですね。そんなもので門外漢を入れるといったから、今度由紀夫はよその奥さんまでもらっちゃった。『週刊文春』に書いてあった。由紀夫に、「こんなこと何でもないよ、ロマンスだよ。俺だって羨ましいよ。こんなこと気にするなよ。よその奥さんをとったっていいことじゃないか。それだけ熱があるから」といった。

伊藤 邦夫さんは全然違うところから。

松野 「ロマンスで俺は羨ましいよ。徳富蘆花と徳富蘇峰が一人の女性を争って兄弟喧嘩をした。君の場合は違うからいいじゃないか」と言った。取られた人が書いたのが、このあいだの『文春』の記事で、それは向こうは言いたいだろうけれど、人倫の道を誤ったわけじゃないよ、何でもないよ。

伊藤 勝った方だから、いいんじゃないですか。

松野 「羨ましいよ」といって由紀夫に電話して、奥さんにもそう言うっておけといった。「何でもないロマンスだ」といって、激励したんだ。

伊藤 どうもありがとうございます。ではまた来月お願いいたします。

松野 頼三

オーラルヒストリー

第2回

[2000年11月13日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

■「加藤の乱」と米大統領選について

松野 「加藤紘一氏が森内閣不信任案に賛成するという動きに関連して」……やはり戦争をするには軍資金がいりますからね。今の話は、金がついていない。昔は動く時には、裏に背景があつて、要するに財閥がつくわけです。その保証がなければ、選挙のことを考える」と。

伊藤 それは両方お金がないということですか。

松野 今は政党の援助資金だから、政党に行つてしまふんです。新党には一年間いかなんです。十二月二十五日に登録をして、翌年に払うわけだ。会計法で。

伊藤 じゃあその前につくらなければならぬ。

松野 その前につくらないと、金がゼロなんです。保守党が自由党から分かれた時、小沢が分けなかつたんだ。だから、いま中途半端にやると、分けてもらえないんだ。それで十二月の末を狙つたんだらうと思うんですね。あれだと三月に「金が入るわけだ」。

伊藤 アメリカも「大統領が」なかなか決まらないで、大変ですね。

松野 これは、民主政治も危ないところですね。アメリカは、こんな馬鹿な制度がいいとは思っていないだらうと思うけれども、頑強に守っているんだね。イギリスもそうだ。ルールは不便でも、それを守ることが正しいので、野球のベースの距離を伸ばしたりすれば、おかしいですよ。日本とかイタリアとかドイツなんて勝手に変えるけれど、イギリス、アメリカは頑強に変えない。変えないことが民主政治だね。年中、都合のいいようにベースを変えたり、ホームベースを大きくすればストライクゾーンも大きくなるから今年に変えようとかね。誰が見たって、これは不便ですよ。これは、おそらくまだ開発時代の、人口がバラバラで、選挙がうまくいかなかった時にやったものなんでしょうね。

小池 しかし、結果的にゴアが勝つたら大変ですね。

松野 大変だよ。私なんか、やはり変化を求めらるうと思うんですね。いまの民主党がいい悪いよりも、みんないいもの、新しいものを求める権利はあると思う。

伊藤 何十票とか何百票ぐらいのところでは物事が決まるのは大変ですね。

佐道 投票ミスがあつたりとかで、途上国に選挙監視団を送るとか言えなくありませんね。

小池 ケネディとニクソンのときも、ニクソンが最後に負けた時は、百万票、問題があつたんだと生涯言い続けるわけです。

伊藤 ある程度大きな差だったら、勢いで流されちゃうけれども、こうぎりぎりになった時は、あつちでもこつちでも文句言われるでしょうから、無茶苦茶になる。

松野 不在投票は、日本の場合は投票をする前にするんですが、アメリカでは投票日に不在投票をするものだから、遅れるんですね。日本は不在投票が、開票日に間に合うように前もつてするわけだから、あれがちょっと違つていましたね。

伊藤 あれは、あの州だけなのかな。州によって選挙法が違ふんでしょう。

小池 全然違いますね。リカウント制度があるところもないところもありますから。

佐道 ほかのところも不在者投票がずいぶん遅れてきたりしていますよ。

小池 結果が変わるかもしれないというのはニューメキシコでしたか。ゴアになるにしろブッシュになるにしろ、アメリカの相対的な力は弱くなりますかね。

佐道 どつちに正当性があるかといわれると、なんだかー。

松野 当分裁判が続くでしょうね。(問)

まあ、森も利口じゃないけれども、加藤もちょっとね。わざわざ

離党しなければ。新党でもつくればいいところですね。いまの模様では、党内にまだとどまる気ですからね。おかしいなと思ってるんだ。

伊藤 もつとも、福田と大平の境目の時なんか、党が二つあったみたいなものでしたからね。

松野 ええ。大平のときは本会議で投票したんですからね。本会議で総理指名投票をやった。それで大平が勝っているでしょう。

伊藤 ああいうことは空前絶後だと思っていれば、今度もあり得るんじゃないか。結局、加藤さんなんかはあれを念頭に置いているんですよ。

松野 それを加藤は念頭に置いているんです。ちょっと私は時代錯誤じゃないかと思うんだ。あの時は中選挙区ですからね。小選挙区になるとちよつと違うと思う。

小池 でも、出る出ないというところ、渡辺美智雄氏が出る出ないの時に似ているような気がするんですね。結局出ないという形になって。(間)

松野 どうも大平、福田の争いを加藤は念頭に置いている。「党を」出る気はないですよのね。

小池 でも「加藤氏は」大平の時の官房副長官ですからね。やっつてはいけないこと、とテレビでは言っていましたけれど。なんで意見が変わったんでしょうね。

松野 それも、党内抗争で収めようと思っっているようですね。「加藤氏は」小池が辞めた時に、自分に「総理が」来ると思い込んでいたんです。森になっちゃった。当然、自分に来ると思っ込んでいた。総裁選挙でいくと彼が二番目ですからね。森にいったものだから、その時から、ややひがみがあったでしょうね。才能や行政能力からみれば自分が上だと思っっている。森から見ればみんな上ですよ。早稲田の商科からすれば、東大法科のほうが頭がいいでしょうね。

小池 森さんはスポーツ推薦ですからね。

伊藤 加藤さんはどういう勝算があったのかなあと思っつてね。よくわからないです。

松野 森では参議院選挙を戦えないという党内世論が七割あるでしょうね。それにうまく乗ろうと思っつたんですよ。

■政治家と人気

佐道 加藤さんという人は、自民党の中では人気がない人だということをよく聞きますが。

松野 人気はない。冷たい男でね。官僚型というところでしょう。官僚でも官僚らしくない官僚もいますけれどね。官僚でもだいたい優秀なのが冷たいですね。優秀じゃないほうが、官僚でも成功しますね。優秀な官僚は成功しない。中曽根も官僚だったけれども、あれは出来の悪い官僚でね。警察庁ぐらいでしたからね。

伊藤 警察庁だったらいいけれど、警視庁ですよ。

松野 警視庁だから、あまり出来のいいほうじゃない。

伊藤 池田さんはどうですか。

松野 これも落第生ですからね。二回ぐらい落っこちているから。これはわりに度胸がよかったです。

伊藤 宮沢さんみたいなのはできるんだらうな。

松野 宮沢は出来のいいほうです。池田は出来の悪い官僚だった。

小池 大平なんかはどうですか。

松野 大平も出来は悪い。これはもつと悪いでしょうね。秀才だと学校に友達がいらないですよ。鈍才ほど友達が多い。落第するともつと増える。二倍にね。あなた方は生徒を教えられているからそうでしょう。出来の悪いのが、案外社会で成功している。出来のいいのは発明家か科学者か、象牙の塔でひとりやるものは、出来のいい方がいい。みんなやる時は、出来の悪い方がいい。一人でこつ

こつやらせるのは、出来のいいものじゃなければいけないんですが、みんな揃ってやらせるのは、出来の悪いほうが調和がいい。

伊藤 頭がいいというのは、なんで測るか難しいからね。学校の成績がいいだけで、本当に頭がいいかどうかわからない。

松野 頭がよすぎると、妙な詐欺みたいに発掘したりね。遺跡発掘。学者というのは、頭がいいやつほど騙されやすいんだと思う。あの学者が全部気がつかないなんてね。唾然とした。これを放っておいした学者の男よりも、それを認めた学者に唾然とした。吉村なんていうエジプト研究家も危ないんじゃないの。本当にそう思いたくないでしよう。学者同士が、やはり人のことを言わない。きつと自分もやっているからじゃないかと思う。学者は多少やっているものだから、人を怪しいと思っても摘発しないんだ。摘発しないということは、自分も多少心苦しきがあるんだ。私は、ほとんど社会はそうだと思う。

小池 いや、一言もありませんね。

伊藤 まあ政治家もそうじゃないかなと。

松野 政治家はそれが専門ですよ。政治家の中に逆ののを見つけていることは無理だ。偽物の方が多くて、本物は少ないんだ、政治家は。

伊藤 学者だって同じですよ。何を本物とするかというのは非常に難しいですけどね。感覚的に似たようなものじゃないかと思う。

小池 比率は、もしかしたら、同じかもしれませんね。

松野 それがある時期にくると本物になるんです。悪い学者でも、政治家でも。それは自分の欲を捨てた時です。自分の名誉心とか出世欲を捨てたときに、その人間は立派になる。だから悪いからといって、一生悪いわけではない。私は吉田茂なんていうのは、最後の総理をしていたときに一番立派なんだと思う。名譽心があったら駄目で、逆に総理になってから悪くなるやつもいるんです。権力を

私物化するやつもいる。だから、人間はその場その場で、一生悪いやつもないければ、一生善人もいない、履歴の中で、どんな悪人でもたまにはいいことをしている。だから一概に批評するということも、どこを批評するかだ。青年期を批評するのか、老年期を批評するのか。それで、こういう自叙伝なんていうのは嘘が多いのは、どこを取るかによって違うものだから。だから、私もそれ「保守本流の思想と行動」松野頼三著、朝日出版社」を書いていたら、私がかう思っただけでも、相手は別の意見があつたかもしれない。それはわからん。私は保利茂だと思っただけでも、こう感じた。これは逆に取つたかもしれない。それは想像するとわからない。どっちが真実かということは言えないと思う。

伊藤 人間は、やはり自分がどういふふうに使われているかというのとはわからないのですよ。

松野 人はわかっているけども、自分が一番わからないんだ、案外。

伊藤 自分の描いているイメージと、ほかの人が思っているイメージは、まるでギャップがあつたりして。

松野 吉田さんが曲学阿世の徒といった東大の南原さん。「曲学阿世の徒」なんて、よくあんな言葉を覚えていたと思つて。私は知らずに、新聞に出てあわてて調べた。あの人「吉田茂」は字がうまいのよ。漢文、漢字が好きなの。私は英語かと思つたら、そうじゃない。漢字・漢文の才能が秀でている。

伊藤 吉田さんという人はよく手紙を書く人ですけども、もらったことはありませんか。

松野 ああ、たくさんあります。

伊藤 そうですか。いまでもお持ちですか。

松野 あると思います。私はいま表装して三つぐらいあるんだけど、一つぐらいあるかもしれない。いまでもあるかもしれない。四つ五つ、人にやりましたから。みんな表装してあります「取りに行き、手紙を持つてくる」。これは私のおやじにもらつた手紙です

けれどね「吉田茂の松野鶴平宛の手紙を示す」。

伊藤 本当にこういう字ですね。

松野 この人の本物は、切手がないんです。切手のないのは本物だ。郵便で出さない。下隸が持つてくる。文箱に入れて。飛脚のようにして。

伊藤 ちゃんと文箱に入れて持つてくるんですか。

松野 持つてくるんです。安斉という人。だから、切手があるのは郵便で、切手のないのが本物なんです。肉筆でしょうね。私の父に。だいぶとってあつたんですけれども、みんながどうしても欲しがるから、あげて、これひとつだけ私は残しておいた。何のことかよく読めませんがね。難しいんですよ。

伊藤 内容は「万事安斉に言い含めてあるから、聞け」いうことですね。

松野 これは間違いなくご本人の字です。

伊藤 これは間違いないですよ。僕らも吉田さんの手紙はたくさん見ていますから、見たらすぐわかりますよ。ちよっと人が真似しようと思ってもできないですよ。

松野 漢文調で、長くはないが、要領を得たものです。

伊藤 こういう手紙を書く最後の人でしょね、きつと。

松野 なかなか私も全部読めない。誰か読んでいただくとありがたい。

伊藤 これ、読みますよ。

■ 敗戦後の様子

伊藤 では話を始めてください。この前のお話は、朝鮮から大金を背負ってお帰りになったというところで終わりになりました。

松野 はい。あれは海軍の終わりでした。

伊藤 それで、お帰りになって、日立製作所にお戻りになったんですか。

松野 そこには、もう戻りません。

伊藤 戻ろうという気がなかったということですか。

松野 いいえ、会社から「出社に及ばず」ということでした。

伊藤 要するにクビになったということですか。

松野 いやいや、ほとんど全員ですね。おそらく日立には六万ぐらいいたでしょう。六万のうち、工場がつぶれたものだから、ほとんど全員、全員というとおかしいが、まあ八割ぐらいに「出社に及ばず」という通知が終戦と同時に来ましたね。

伊藤 「出社に及ばず」はいいんですけど、退職金は出ないわけですか。

松野 いや、出ました。二十五円ぐらいの退職金を送ってきた。当時の金で、たしか二十五円ぐらいでしたね。

伊藤 さてどうしようかと。

松野 それで私は、帰ってきてても「出社に及ばず」だから、そのまま熊本の郷里に帰った。東京も食糧難ですからね。郷里に帰って百姓の真似事をした。熊本には食糧だけはあるものだから。米だけあるから食っているうちに、私の父が追放になる。それから憲法ができた。第一回の選挙が行なわれた「昭和二十二年四月二十五日」。その時は連記制です。大選挙区二名連記制で、当時の内閣はたしか第一次吉田内閣。それで選挙があつて、私も出ようかなと思つたけれども、その準備をしていなかったから、そのままにした。

伊藤 出ようと思えば出られたわけですか。

松野 その時は父が追放だから、三親等までは駄目だという噂が出たんです。追放者の三親等までは駄目だという噂が新聞記事に出たから、じゃあ私も駄目かなあと思つた。第一回はそういうことで躊躇して出なかった。その時、坂田道太というのが軍人じゃなかったの、それは出たんです。

伊藤 じゃあ、お父さまの地盤といえますか、それはどうなったんですか。

松野 それはそのまま、もう誰も出ませんでした。

伊藤 ということは、バラバラになったということですか。

松野 バラバラにもなっていないかっただけれど、まだ終戦後で混乱してしまっただけだからね。それで、そのバラバラになっていったのが、誰か出そうじゃないかといって、二回目に私が出たんです。一回目はまだ出なくて、それで二回目に出たんです。

伊藤 お父さまのお話は、あまり伺わなかったんですが、熊本電鉄でしたか、あれはお父さんの会社なんですか。

松野 非常に小さな軌道でポロ会社でしたがね。私の父がそれを再建して、大きくして、電車にしたわけです。

伊藤 電車の前は何なんですか。

松野 軌道です。ポンポンという。

小池 軽便鉄道みたいなものですか。

松野 軽便鉄道です。地方でつくった軽便鉄道ですから、距離は二十七キロぐらいのものです。

伊藤 どこどこを結ぶ鉄道なんですか。

松野 隈府(わいふ)と熊本です。隈府はいまは菊池市ですけれど、もね。その当時は隈府という町で、そこから熊本までの二十七キロのローカル鉄道です。それは石炭をたいた軌道です。それで、私の父がそれに増資をして電車にしたわけです。それで私の父がその創立者になって、名前も熊本電気鉄道という名前にしたわけです。その前は菊池軌道です。

伊藤 これはある程度儲かった仕事なんですか。

松野 儲かるものではないです、全然。市町村がみんな出資して、それと私の父がそれを増資しただけで、儲かるものではないです。軌道というのは。

伊藤 なにか第三セクターみたいな話ですね。

松野 町村が出資し、いまでも町村が株主ですよ。それで、私の父が半分を増資したから大株主で、いまでも私が大株主で、町村がいくらか持っていますよ。

伊藤 その当時はバスなんかもやっていたわけですね。

松野 バスはまだその後ですね。うんと後です。その軌道の時にはバスはなかった。電車になってからバスは始めたんですね。

佐道 電車にされたのは、いつごろですか。

伊藤 戦前でしょう。

松野 戦前ですが、大正十五年ぐらいですね。まあ、利益になるものではない。

伊藤 大きな利益はないでしょうけれども、別に赤字が生まれるということもないと。

松野 まあ、とんとんでしょね。私のうちは、もうひとつは酒造業をしていたんです。

伊藤 なんとという酒ですか。

松野 城北醸造。「松」を崩して「十八公」です。ローカルの酒屋で、生計はその酒屋でやっていました。生活費は酒屋で、生計ぐらいは立っていましたね。

伊藤 じゃあ、松野さん一人ぐらい遊んでいても、どうということはないわけですね。

松野 そうそう。ことにあの頃は、酒を持っていて何でも入るんです。金は駄目なんだ。物を持っていけばいい。石炭を持っていけば何でも入る。酒を持っていけば何とでも換えてくれる。だから酒を持っていけば、小豆もくれれば、砂糖もくれる、肉もくれる、魚もくれる。物々交換ですからね、終戦当時は。金では物が買えなかった。

伊藤 でもその酒を造る米はどうなんですか。

松野 米は割当ですからね。免許だから。酒屋は免許があると、それは当然つくる権利があるし、米も切符で割当でくれる。要するに

昔は切符でしたからね。食料券。終戦当時は配給物資だから、米も配給してくれるんです、酒屋にはね。だから、当然つくれる。つくった酒を横流しすれば、飯は食えるわけだ。だから私の生活は、酒屋で食っていたわけです。第一回の選挙費用も、酒屋の利益ぐらいで出られたでしょうね。

伊藤 どれぐらいの酒屋なんですか。つまり熊本の中で何番目とか。

松野 いやあ、小さいものです。あの頃は二百軒ぐらいあったでしょうね。統合する前には二百軒ぐらいあった。その中の百番目ぐらい、まあ真ん中ぐらいでしょうね。いまはもう造り酒屋はせいぜい二十軒ぐらいしかありませんね。あの頃は二百軒ぐらい、小さな各郡町村にありましたけれどね。

伊藤 まあ、酒屋何里という話があるから、やはり歩いて行ける範囲ぐらいのところに一つあったんでしょね。

松野 そうですね。酒屋は熊本県でも二百軒ぐらい、町村でも大きなところには三つぐらいあったでしょうね。各町に一つずつは必ずあるんです。私の生活費は、その酒屋で食べていましたね。まあ、食うだけです。ね。

伊藤 地主さんでもあったわけでしょう。

松野 地主でもあった。

伊藤 それは農地解放でー。

松野 その時は十三町ありましたね。十三町と、農地解放の時に私は記録した記憶がある。

伊藤 それで、自作地があったんですか。

松野 十三町だと、自分で持てるのは三反ぐらいしか持てないですね。不在地主だから。

伊藤 やはり完全な不在地主ですね。

松野 完全な不在地主です。だからその十三町の中の三反ぐらいは、私が不在地主でも取れるわけだ。

伊藤 三反でもあればー。

松野 それと、酒屋の米がありますからね。だから田舎では威張ったものです。酒を持っていけば。三反よりも酒を持っているほうが強い。それであの頃は、ご承知のように間酒が横行して、みんなどぶろくを造っている。だから、私の清酒なんていうのは貴重品だ。多少薄めても文句言わない（一同笑い）。それは、酒というのは、一級酒が十七度、二級酒が十五度とか規定があるわけです。それを税務署から測りに来るんです。必ずその度数を測りに来る。測ったあとで、少し水を入れて酒を増やすと、二百石が三百石ぐらいになりますからね。

佐道 かなりの割合で入れますね。

松野 そこまで入れないにしても、その程度のもは税務署もある程度は見逃します。それを摘発するものはいませんよ。清酒であればいいんだから。そのアルコール度数が十七度か、測るやつは日本中にいませんから。十五度ぐらいのものでも酔ってくれますよ。

■吉田茂の秘書に——初当選——

伊藤 あのご本『保守本流の思想と行動』によりますと、吉田さんの秘書になるといふことがあります。それは何年ですか。

松野 それは昭和二十二年の第一回衆議院選挙に出るんです。憲法ができて第一回が二十二年です。二十二年に、「父親が」政治家にどうせ出るのなら吉田の秘書にしてやろうということ。二十二年一月末、二月に吉田さんの秘書官になった。

伊藤 じゃあ、第一次吉田内閣ですか。秘書官ですか、秘書ですか。

松野 秘書官です。ちゃんと辞令が出ました。

伊藤 それはどういう背景ですか。お父さまがー。

松野 父が「どうせあれになるなら、軍人の肩書きは駄目だから、

何か肩書きをつけてやる。じゃあ、吉田の秘書官に頼んでやる」と言って、電話した。吉田さんが、席が空いているから秘書官にしてやろうと。それで、その二月になったわけです。それで四月に選挙ですからね。二ヶ月間、秘書官として官邸に行っていたわけなんです。

伊藤 じゃあ、短い期間ですね。

松野 ところが、あの頃は代議士でも秘書官が続けられた。当選したあとでも。いまはありませんよ。あの頃は政治家でも大臣秘書官が続けられた。まだ官制が変わっていなかったから。

伊藤 その秘書官の時代は、具体的にどんなお仕事をしたわけですか。

松野 官邸に行つて、吉田さんの出入りを見たり、時間があるときは話に行つたり、それぐらいのものです。

伊藤 具体的に、お前はどの担当だというのは――

松野 そんなものはありません。ただ秘書官室にいただけだ。担当も何もなかったですね。電話もとらなかつたですね。

伊藤 誰が電話をとられるんですか。

松野 電話は専門家がおるから。秘書官は六人ぐらいおる。各省から来ていますから。だから、もう私の仕事なんかありません。六人ぐらいおる。その人たちは、もう専門で電話をとります。私は黙って座つて、タバコでも飲んでる。吉田がどこかへ出る時、「いつてらっしゃい。どこへ行かれますか」というぐらいの話です。

伊藤 お供して行かないんですか。

松野 それは行かない。それは連れても行かない。ただ本当の名前だけ「の秘書官」で、ただ吉田さんが暇なとき、話に行くぐらいの権利はありましたね。

佐道 どんな話をされたのですか。

松野 「総理、どうですか」「何が」「天気はどうですか」「天気はいかに決まっているよ」なんて言われた。

それから当選してからも、そのまま秘書官をしていたんです。当選してからのの方が大事にしてくれました。

伊藤 だけど、あれで選挙「昭和二十二年四月二十五日」があつて片山内閣になるわけでしょう。そうすると、秘書官はなくなる。

松野 なくなる。それでも前官礼遇で、そのまま吉田さんの秘書官みたいなことをしていましたね。

伊藤 今度は秘書ですね。

松野 今度は秘書として、そのままやっていた。

伊藤 選挙はいかがだったんですか。

松野 選挙も、まあ原始的なものでしてね。選挙といってもスピーカーとマイクがないんですからね。

伊藤 生の声ですか。

松野 生の声、またはメガフォンです。マイクをつけようと思つたら、電線をつつ張らなければいけないんです。だから車を止めて、「ちよつと電気を貸してください」といって、電線引つ張つて、つけて、それでマイクをつける。走りながらの電気はないんです。その時はメガフォンなんだ。そういう原始的なものでしたね。

伊藤 移動は車ですか。

松野 移動はむしろトラックです。ガソリンがなかなかない。木炭車でやったこともありますね。

伊藤 その時は、もう中選挙区になっているわけですね。

松野 もともと中選挙区です。その時はなっています。

伊藤 その前は大選挙区ですね。

松野 大選挙区です。それが中選挙区になった。中選挙区になって第一回ですね。

伊藤 それで、どのぐらいの候補者がいましたか。

松野 定員五人、選挙期日が二十六日間ぐらいあつたでしょうね。その時が憲法第一回だから、新しい町村長の選挙、町会議員の選挙、参議院というものができて初めての選挙、それから県会議員の選

挙、知事の選挙と六つぐらい同じ月にあったんです。四月の間に、それが新憲法第一回だから、すべて諸政一新だった。だから、町村長、町村会議員、県知事、県会議員、参議院、衆議院で六つぐらい、同じ一ヶ月の間に五日おきにやっていたですね。

伊藤 たしか、参議院が一番最初じゃないかな。

松野 参議院が衆議院より早かった。みな同じ月ですから。

伊藤 やはりその時には、旧松野派みたいなものが一。

松野 おやじの時の松野派の旧県会議員が、みな応援してくれましたね。その人たちも候補者ですからね。だから一緒に。

伊藤 県会は私、衆議院は松野さん、といふうになるんですね。

松野 そう、町村長は誰々、そういうふうと一緒にやりましたから、わりに選挙はワーワーやっておればよかったです。ガソリンがなかったですから。そこでガソリンがなくて困っている時、酒を持っていくとガソリンが手に入る。酒がガソリンになるんだ。

伊藤 もつとも、酒もアルコールだから(笑い)。

松野 トラックで遊説に行く時は、遠いから三日間ぐらいで行きました。車や道が悪いから一日で帰ってこれないんだ。トラックに米を積んで行くんです。米を積んで行かないと、旅館に宿泊できないわけです。そうすると、運動員が二十人もおれば、米一俵ぐらい持っていけないと三、四日もたない。米を積んでいくんです。その米は、もちろん闇米です。その米も、酒を持っていけばくれるわけです。酒が、要するに金なんです。昔は石高といったけれども、あの頃は酒高でしょうね。酒の量で決まるんだから。そこで酒屋は非常に有利ですよ。

佐道 その効果は大きいですね。

松野 大きなものを持っていく。それから三井三池の石炭を持っていった。石炭を持っているから、三井三池は何でも揃う。牛肉から何から。だから、ものを持っている者があの頃は強かった。代表的なのが自転車のチューブです。ご覧なさい。プリヂストンが繁盛

したのは、自転車のチューブと地下足袋です。あれは大変な闇です。いまロシアで言われているけれど、あの頃は闇成金が横行した時代ですからね。隠匿物資とか言ってるね、闇成金が。ロシアもいまは世界一ロールスロイスが売れると言いますからね、闇成金が増えているわけです。日本はその代表だったでしょうね。鍋釜までなかったんだから。あれぐらいものを戦争というものが消耗するものか。話は聞いていたけれども、戦争というものの消耗をあらゆるものから感じましたね。

伊藤 特に主計ですからね。

松野 人命はもちろんのこと、物資の消耗で、「物が」ないことないこと。ないとなると、また絶対出てこない。逆に、隠すんです。それで、社会党片山内閣が物資統制令みたいなもの「食料品配給公団法案 昭和二十二年十二月九日可決 十二月十七日公布」で配給切符「経済危機突破緊急対策要綱(物価改定など八項目) 昭和二十二年六月十一日発表」をやったわけだ。あれが片山内閣の責任だ。あんな馬鹿なことをして、それで取引高税というものをつくりましたからね。なんでも取り引きする時は、証紙を貼らせるわけだ、切手みたいに。それが貼ってないといけないわけです。その証紙を税務署が押しつけるわけです。貼ったけれど、はがれる場合があるわけです。デパートの前なんかには税務署員が立って、「ちよつといまお買いになったものを見せてください」と言う。見て、証紙が貼っていないと、乗り込んでいって不正摘発をやる。そのうち利口になって、みんな証紙が貼ってある。貼ったけれど、それが一回り回って、また貼るわけです。うるさく言うと、そうなるんです。だから、取引高税は大失敗。片山内閣が不人気になったのは取引高税です。だから私たちが消費税を怖れたのは、取引高税の経験をしているからです。私たちはそれを体験した。

伊藤 まあそうですね。本当に同じことをやっているから。

松野 それで、物資を決めようとすると、ものの値段が決まらない

んです。一番私が思い出すのは、米を統制が一番安くしたことです。米が石あたり五五〇円です。それをまず政府が決めた。その時、煙草が五〇円なんです。五五〇円だと、煙草十一個分なんです。そんなものをあの時決めたんですからね。それから薪がいくら、炭がいくらと、あらゆる物資の統制をした。守れるわけがない。それで、社会党だものだから、生活物資の米を一番安くした。それで農村の反撃があった。なんだ、米一石が煙草十一個分しかないじゃないかと。そういうもので、統制経済の馬鹿さ加減、いかに馬鹿かということがわかる。片山内閣はそれをやったんだから。社会党が永久に政権をとれないのは、あれを本当にやったからですよ。

伊藤 当選なさった時は自由党ですね。

松野 ええ、自由党です。あの時は日本自由党です。

伊藤 「日本」はついていないんじゃないですか。

松野 創立のときは日本自由党です。みんな日本をつけたんです。日本社会党、日本自由党、日本民主党、日本共産党です。

伊藤 あれは野党になっていますよね。

松野 ええ。それで、演説では常にそれを攻撃したわけです。「この馬鹿さ加減。米一石で煙草十一個ですよ。こんなことをする社会党があるものか。それから薪一俵が一円五〇銭。東京で一円五〇銭ならいいけれども、熊本で一円五〇銭なんて合うわけがない。こんな馬鹿なことを」といって、統制経済をさんざん攻撃演説したのを私は覚えている。それで、いまの米一石が煙草十一個というのを覚えていてるわけです。よく演説でやったから。ほかのものは覚えていません。たしか五五〇円が米一石で、煙草が五〇円だった。だからタバコ十一個分だったことだけは、私は演説でいつも言っていた。

伊藤 一年生議員というのは、どんなものですか。

松野 一年議員というのは、はっきり言えば、員数でしょうね。そこ「保守本流の思想と行動」にも書いてあるけれど、私の父が「二年議員の時にあまり代議士でしゃべったりするなよ。お前がし

ゃべることぐらいい、みんな幹部は知っているんだ。しゃべらせてもらうだけでもありがたいと思え。それよりも、しゃべらないで、じつと座って、会議の時は五分前に行つて、五分あとまでいる代議士が、一番幹部はありがたい代議士なんだ。だから会議の時は五分前に行け。会議が終わったら、幹部が退席したあとで退席しろ。五分前に行き、五分後に帰ればいいから。それを一年続けていけば、自然に覚えるよ。幹部もこれは見所があるといつて見るよ。なまじつか演説なんかするな。演説したつて大したことないよ」と言っていた。その時、田中角栄は毎日演説していた。毎日です。

伊藤 一緒ですか。

松野 一緒です。悲憤慷慨して、「いまの内閣はけしからん」といつて。

伊藤 あの人は民主党でしょう。

松野 その時は民主党です。民主党で石炭国管です。その頃統制で最大のものは石炭国管ですね。片山内閣で水谷長三郎が通産大臣、平野力三が農林大臣ですかね。

伊藤 その当時でも、議会では花形の自由党の側の演説者というのは。

松野 植原悦二郎という人です。植原悦二郎という人は重厚な演説をしていました。北吟吉とか、元学者だったね。植原さんがよく不信任とか代表演説をやった。それから、岡山に行った星島二郎。星島二郎、植原悦二郎、北吟吉、樋貝詮三、こういうのが演説の代表ですね。よく植原さんなんかは、「おい、まあ君たち、演説というのは、三つ方式がある。それをはずさないようにしろ。いきなり攻撃したら駄目だ。物事はこうだ、それにかかわらずいまの政府はこうだ、だからいけないんだ、という三段論法でやれ」と、われわれ代議士に暇な時に来て、そんな話をした。「おれはいつも三段論法でやるんだ。親は孝行すべきである、しかしその子供はこんな悪いことをする、だからいけないんだ、そういうふうな三段論法で論

戦をやれよ。ただ、こいつは悪い奴だ、悪い奴だ、では駄目だ。基準を先に示せ。その基準に合わないから悪いと言っただ、そういうこと植原さんが言われる。そういう先輩の話は、なかなかよくわかりますね。

星島さんは星島さんで、また型があつてね。この人は、親孝行とか人倫の道とかいうものをまず説いて、そして政治を批判してましたね。北吟吉というのは、なかなか文学者で、よく漢文の例をとつてやつてましたね。そういうものは一つの参考になるし勉強になる。漢字・漢文の格言を北吟吉はやつていました。「天を俱に戴かず」とかね。そういういい熟語を北吟吉さんはやつていた。文章が上手で演説も上手でしたね。

それから日本自由党の創立の文章は北吟吉さんと樋貝詮三さんが書いたんです。鳩山さんの側近ですね。日本自由党創設の宣言みたいなものを北吟吉、樋貝詮三の二人が確か書いたんです。それを見んなで付け加えた。なかなか才能のある人でしたね。

伊藤 当選なさつて、すぐ野党ということだ。

松野 野党ですけれどもね。だから片山内閣を攻撃して、統制反対、自由民権とは言わないけれど自由経済と言いましたね。

伊藤 だけど、まだ議会の中で発言するような立場にはないわけですね。

松野 機会はありません。私は農林委員に配分された。発言する機会なんかほとんどありません。

伊藤 要するに頭数(あたまかず)ですね。

松野 頭数です。でも、なにか採決があるといえ、立つんです。それから郷里の問題があれば、けしからんという。あの頃は小さなことだけれども、玄米供出で、供出する時には政府は玄米で買うんです。政府が玄米で買うと、糠が取れない。糠があれば、ニワトリが卵を産むわけだ。だから白米供出にかえろとか、それぐらいは発言してましたね。農家から頼まれるからね。玄米で供出するもの

を白米で供出させてくれ、そうすると糠が取れるからニワトリが飼えるというので、私は玄米供出を白米供出に変えろというぐらいは、一年議員でも要求していましたがね。あの頃は「供出」という言葉があつたね。米は統制だから割当供出なんです。その割当を達成しないと、町村長が叱られる。それから米を隠すと、警察が刑事犯として捜査して逮捕しますからね。統制経済は刑事犯だ。小さいながらも警察権で米を集めていく。そうすると割当が来るわけだ。だいたい担当面積に応じて来るんです。担当面積に応じて、何俵自家米を取つて、残りを供出する。それを各町村別にずっと来て、最後には部落別に来るわけです。だから、供出というものに対して非常に反感があつた。いまは逆ですものね。生産制限でしょう。いまの時代では生産制限になる。あの時は強制供出なんだ。本当に、私はいま生産制限と馬鹿なことをしているなと思います。昔の強制供出を裏返しただけで、ちつとも進歩してないなと思う。それがその時代ですからね。農林委員では、そんなことで供出の問題とか、米糠問題とかいう程度の発言はしてましたけれど、農政を大批判するような立場ではないんです。理事がおりますから、発言させてくれない。郷里のことだけは発言させてくれる。質問時間で余つた十分ぐらい残っていますので、松野がやるなら十分。その程度しかしやべらない。それで一年ずつといましたかね。

伊藤 その当時、自由党の中には後の派閥になるような「もと」というのは、何かありましたか。

松野 その時ぼちぼちありました。吉田さんが新官僚みたいなものを非常につくつた。その中に池田、佐藤ももちろん入ります。吉田さんは政黨員をあまり信用しなかつたんです。政黨員は幹部ですからね。幹部を相手にしないわけにはいかない。しかし政黨員はあまり信用しない。そこで官僚出の政治家を大事にしていく。そのうち官僚から政治家に作りあげた。まだ第一回るときには官僚が少ないですから。政黨員としては、林譲治さん、益谷秀次、大野伴

睦、廣川弘禪、これが幹部でしたね。私より一年上に当選しているから。廣川もその前に当選していて、第一回です。

廣川というのは、毎朝吉田さんの私邸に来るわけです。吉田さんが「あれ誰だよ」と言うから、「廣川です」というと「ふーん」と言う。毎朝来る。そのうち廣川君も、吉田さんが入ってくる、話をしようになった。それまでは話はしないんです。あの人が来たつてむっとしている。毎日、毎日来るものだから、そのうち話をしようになった。それで廣川弘禪というのを初めて知った。大野伴睦は知っているけれども、会議で会うだけ。星島二郎も、みんな会議で会うだけ。ですが廣川弘禪は、毎日吉田さんの自宅に来る。そのうちに、なんだあいつは、ということになって、とうとうそれがめでたく幹事長になっちゃった(笑い)。

それが大野伴睦、廣川弘禪の政党派閥の喧嘩の始まりでしょう。その頃はまだ派閥というほどのこともないけれども、みんな先輩に話を聞きに行くグループができるわけです。もちろん食堂だって料理屋だって、東京では闇料理屋だ。統制だから料理屋がないんだ。闇料理屋しかない。闇料理屋に呼ばれて、会合するぐらいのものですよね。それでも闇料理屋がちよこちよこありましたよ。確かハネザワガーデンというのが、日赤の近くにあるんですが、それが闇料理屋だったな。それから銀座の焼け跡に小さな闇料理屋があった。要するに闇料理屋しかない。統制経済のツケです。だから牛肉だって、検査を受けないような牛肉が闇肉屋にどんどん来ていたでしょうね。また、屠殺場で検査を受けるんだけれどもね。飯を食わしてもらうならといって、みんな行くものだから(笑い)。

それで、だいたいその頃は、隠匿物資で、軍隊の靴かなにかをつくっていたやつが急に皮革で大儲けした者だとか、タイヤで大儲けした者だとか、そういう闇の成金が、大野伴睦とか、そういう政黨員の後に残っている。だからその人たちが、馳走してくるわけです。それについて行くと食えない飯を食わしてくれるから、派閥

が生まれるわけだ(笑い)。それだけ力がなければならぬ。いくら理論があつたつて駄目なんだ。飯を食わせるといふことは闇に通じている。それが派閥なんだ。それで結局、大野伴睦とか河野一郎とかの知り合いが後ろのボスだということ、兎玉誉士夫なんていうのが裏についていると、何でも持つてくるわけだ。それがひとつの派閥といえれば派閥ですよね。人脈程度でしょうね。派閥までいかな、人脈ぐらいです。

それが後になって、官僚と政黨員の二つの派閥の争いが始まる。それは吉田内閣の後期です。最初はその程度のもので、飯食い派閥です。今日は牛肉があるから食に行かんかといえば飛んで行く。そこで政治の話をしたりする。その程度なら私も何遍もタダ飯を食に行きましたけれどもね。名もないようなバラックみたいなところですよ。焼け跡にバラックをつくつて、そこで料理屋をやっている闇料理屋ですからね。それでも白いご飯と牛肉が出れば大喜びだからね。

伊藤 石橋湛山さんはー。

松野 石橋湛山さんはそのあとです。そのあとで出ます。

伊藤 でも、最初から大蔵大臣になったんですよ。

松野 いきなり大蔵大臣になりましたね。この人は代議士にはもつと後でなつたでしょう。鳩山さんと懇意だったからね。これは『東洋経済』という雑誌をやっていた人です。それは人間の豊かな人でしたよ。正力松太郎という人も豊かな人でした。いま、そういう豊かな人間がいらないな。

伊藤 豊かというのとはなんですか。

松野 身分も出世もあまり気にしない。人生に、権力にあまりせかせかしない。狙うなら総理を狙う。それ以外はいらぬ。今「現在」は、大臣になりたい、やれ幹事長になりたい、何になりたいという。いろいろなものに対して、せかせかし過ぎる。そういう「当時の豊かな」人は、誰がなつたつて構わない。おれは天下国家のために働

ければいい。そういう地位を求めないですね。そういう、社会の中で地位を求めない者ほど、豊かな者はいない。財界で金銭を求めないというとおかしいが、せせこししない。

伊藤 いま吉田さんの私邸と言いましたけれども、どこにあったんですか。

松野 あの時は麻生さんの家です。渋谷の松濤の。

伊藤 先生もそこにはー。

松野 もうひとつは大磯です。私が最初に行ったのは大磯です。秘書官の挨拶に行った。大磯にいて、遅くなると東京では麻生さんの家へ泊まった。ほとんど大磯までロールスロイスで帰っていましたね。古いロールスロイスです。幌の、戦前の。戦前のときから持っていたんでしょうね。戦前の古いロールスロイスで、大磯に遅くても帰っていた。

佐道 廣川さんは大磯のお宅まで行っていたんですか。

松野 大磯までいくんです。

伊藤 大磯まで行くんですか！ 先生も大磯にはしょっちゅう行っているわけですね。

松野 しょっちゅうも行ってられない。就任の時、それから一緒にだから、たまに行きますけれどもね。だいたい東京で待っていましたね。大磯には何遍か行つたけれど、大磯まで押しかけて行くのは廣川ぐら이었다。

伊藤 じゃあ代議士に当選なさつてからも、秘書的な役割をしておられたんですね。

松野 だいたい、明日の何時に大磯から出てくるというから、議会の前で待っているわけです。野党ですけれども。遊説の時もついて行つたりしましたね。

伊藤 今度はそういう役割ですね。遊説はかなりあちこちに行かれましたか。

松野 遊説はだいぶ行きました。一番は岡山で、高知、愛媛、大分、

そのへんまで行きましたかね。

伊藤 そうすると、先生は前座をやるわけですか。

松野 前座をもちろんやります。「私が」前座をやつて、それから吉田さんが最後に話す。

伊藤 それは、土地の人もやるわけですか。

松野 もちろん土地の人もやる。だから代議士は四人ぐらいやつて、私が前座をやるわけです。まあ、演説の稽古みたいなものですね。その次に先輩の代議士が三、四人やる。それで吉田さんがやる。吉田さんは、演説が好きでなかつたですから。「いまの政治は駄目です」なんていうふうにする。もう吉田さんほど、これぐらい下手な人はいない。だから、だいたい吉田さんの演説は長い話もしませんしね。好きでもないし。

伊藤 そうやつて遊説するということは、吉田さんに来て欲しいということですか。

松野 それはそうです。顔見でしょう。頑固な顔を見たい。それもひとつの人物ですからね。話は聞けなくても、頑固な顔を見ればいいわけだ。口を「へ」の字に曲げて。それを見たいんだ。

佐道 聴衆はへたな演説でも、顔を見ていればそれでいいんですね。

松野 顔を見ているだけでいい。演説は私が聞いたつてつまらないというとおかしいが、感激はしません。顔のほうに感激する（一同笑う）。

佐道 アイドル歌手みたいですね。

松野 ひとつの役者ですね。私はあれが政治家だと思う。話を聞きたいというのは、まだそれは語り手なんです。人物を見たいというのが本当かもしれない。私はどうもいま政治をみると、雄弁有能なものよりは、無言の政治家がほしいなと思う。雄弁ばかりで言うから、失言ばかりするんだ。無言なら失言しないんだ。失言しないし、一言に価値がある。

この前話しましたが、吉田さんが演説を好かないで少ないというけれども、私が秘書官の時にマツカーサーから電話が来た。「いまのは誰ですか」と聞いたたら、「マツカーサーだ」という。マツカーサーから直接電話があった。しかし総理の英語はずいぶん少ないですね。ぼつぼつしか言いません。私はもつとしゃべれると思うんですけれども言ったたら、「それはおまえ、べらべらしゃべる英語は通訳英語だ。おれの英語は価値ある言葉をひとこと言えよ。一番言葉が少なくて、ありがたいのがいいんだ。お前は、誰が一番偉いと思う。天皇陛下だ。『ああ、そう』としかおっしゃらない。その『ああ、そう』をみんな聞きたいんだ。それが価値ある。マツカーサーは占領軍の司令官だけれど、おれは日本の代表だ。マツカーサーが三つ喋るときに、ひとこと言えよ。銀行へ行ってみる。金を借りる奴は一所懸命しゃべる。頭取は『あつ、おつ』と言えよ。いいんだ。そのひとことを聞きたいために、百万べん話す。だから、お前たちは、言葉は多い方がいいんじゃない。言葉は少ないほど価値がある」という。

だから、吉田さんの言葉、演説は少ない。「おれは、価値あるから、そんなに喋らなくていい。五つも喋ればいいんだ。お前たちは六千語喋らなければいけない」という。私はその吉田さんの豪快な、剛胆なものをみると、これは神髄をついていると思う。雄弁必ずしも有能じゃないんだね。無言が無能じゃないんだ。私が見ている、そういうものが秘書官で身についた価値ある教育でしたね。

伊藤 この移動の時は、普通の列車に乗っていくんですか。

松野 それがまた違う。移動の話をすると、移動の時に進駐軍列車というのがあの当時はありました。日本人の列車はすし詰めになつて動きます。進駐軍の列車は、暖房がついて暖かくて、人がほとんどいない。東京から岡山まで夜行列車だったから、進駐軍が用意してくれたんです、進駐軍列車を。

伊藤 それは野党のときですか。

松野 野党のとき。野党の党首です。私なんか喜んでね。二等寝台だ、上下。それで、吉田さんと並んで、秘書と私と、もうひとり四人で行った。私は喜んだ。暖かいしね。長々と寝て。朝起きたら、吉田さんは二等車のところで座っているんだ。「あれつ、総理どうして寝なかつたんですか」「寝ないんだ」「どうしてですか」「気にいらん」「なにが気に入らないんですか」「あんな、おれの上に兵隊が寝てやがる。兵隊の下におれが寝られるか」という。二段ベッドで、上に兵隊が寝ていたから、ふつと帰つて、もう二等車の中で、こうやって一晩過ごした。秘書の安斉も一緒でしょう。「そもそも、おれの頭の上に兵隊が寝ていて、おれは寝られるか」といって、とうとう寝ない。頑固なんです。その点も、ひとつの自分に対しても威張つていましたね。兵隊の下におれは寝られるかという。これには私は唾然とした。それで岡山に到着した。

その旅行の時の汽車に唾然とした。野党ですよ。やはり敬意を表したんでしょうね。マツカーサーの方から。私なんか、暖かいし長々と寝られるから、上だつて下だつて構いはせんしね。それで、進駐軍のあの弁当はくれる。あのランチもくれるし、まるで極楽だ。吉田さんは断固として、兵隊の食事も食べない。配ってきたやつを食べない。「いらん」という。それで岡山に行つたら、味噌汁を食べていました。味噌汁とか、旅館のもの。「もう兵隊の兵食なんて食べるか」と言つて。将校だから、上に誰か寝ていたんでしょね。「アメリカの兵隊の下におれは寝られるか」といって、とうとう寝ない。

伊藤 いつでも、そういう進駐軍の列車に乗せてくれたんですか。

松野 いつでもじゃない。私の時はそうでしたね。その一晩は夜汽車だった。だいたい向こうは敬意を表していましたね。だから、よくMPが駅に立つて護衛していました。

伊藤 ああ、そうですね。

松野 そういうことは自然に。不思議に吉田さんに対しては、MP

がついていましたね。護衛がちょっと駅の前に立って敬礼なんかしてましたけれどもね。

伊藤 高知にいらつしやる時なんかもそうですか。ご一緒ですか。

松野 高知もそうでした。高知も一緒です。高知は九州から入っていきましたね。大分から船で愛媛に行つて、愛媛から入つた。その時もまた逸話がある。ずっと回つて、林譲治さんという人は吉田さんの官房長官で、しかも吉田家とは深い関わりがあつて、立派な方ですが、林譲治さんが宿毛(すくも)の先のどこかに林譲治さんの土地がある。それで途中で寄つた。吉田さんが「林譲治の家はこれだよ」という。もう立派な屋根付きの壁でダーツと三千坪ぐらいあるでしょうね、泥の壁だ。やあ、えらいもんだなと思つて、入つたら、中は草ぼうぼうでした。もつと面白いのは、井戸堀というように、井戸だけあつた。井戸に屋根がついていました。まさに井戸堀そのものが、林譲治さんの家だつた。私は肉眼で見ても、井戸堀という話は聞いたけれども、林譲治さんの家が井戸堀。井戸と堀しかない。これは諺じゃない、本当だなと思つました。それが吉田さんと一緒に行つた時です。吉田さんがずっと回つて、それから旅館に行きました。

また、もうひとつ逸話があります。さつきの話の続きですが。その時に知事がちょうどいなくなつた。その時に総務部長が代理で知事公舎に私たち四、五人を呼んだわけです。その時の総務部長が奥野誠亮なんです。あの奥野は内務省だつた。それで高知の総務部長でいた。その時はまだわからないんです。それで野党といえども吉田さんが来たから、奥野君が知事代理で私たちを知事公舎に呼んで、それでご接待したわけです。私たちは喜んで、珍しい鯛のお刺身は出るし、いろいろ飲んだり、ぶかぶか食べた。吉田さんはしばらくしてスツと帰っていきました。私たちは、もう一所懸命食べて帰つた。帰つたら、吉田さんが鍋焼きうどんを食べている。「どうしたんですか、総理。さつきあんなご馳走があつたのに、なぜ食べな

かつたんですか」「最初のお汁が冷たかつた。君、冷たい、冷や飯みたいなのをおれに出しやがる。おれはいやだ。おれは野党でも冷や飯はいやだ」という。ユーモアがあるんです。野党といえども冷や飯は食えないと言う。「だから暖かいうどんを食っているんだ」という。鍋焼きうどんです。その頑固さとユーモアには驚きました。「野党の党首だから、あいつ冷や飯をおれに食わせよ」という。そういうえばお汁が冷たかつたんです。そんなものですね。最初に出ていたから。それを一口食つて、冷たかつたから、もう帰つちやつた。もう鯛なんか食べやせん。それだけなんです。あれが暖かいお汁だつたらよかつたんです。宴会じゃそんなものです。冷たいお汁が出るわけです。それなのに、「おれに冷や飯を食わせる。野党の党首でもおれは暖かい飯を食うんだ」といつて、家へ帰つてきて鍋焼きうどんを食べる。

進駐軍、それからいまの林譲治の家、それから鍋焼きうどん、私は、このたつたの二日間の遊説で吉田茂という人間の頑固さと、ユーモアもあるし、気概もある。それで驚くなれ奥野誠亮ですからね。不思議なこともある。人間はやはり一喜一憂じゃないけれども、一期一会じゃないけれども、ちよつとしたことがあるものだと思います。

伊藤 その時は別に奥野さんというのは、別に認識していたわけではないでしょう。

松野 知らないです。しかし、あとで聞いてわかつた。代議士になつてきたから、その話をしたら、あの時おれは総務部長だつたと。どうもそんな話を代議士になつてきてからした。その時の総務部長だつた。あれは内務省ですからね。まだ官選で行つていたんです。

小池 奥野さんは怒つていらつしやつたんじゃないですか。

松野 いやあ、奥野は知らなかつた。知らないですよ、本人はね。だから、私たちは一所懸命ご馳走になつて食べた。鯛が出るし、お

汁の冷たいぐらい、なんでもありませんよ。吉田さんは、最初の汁が冷たくて、もう気に入らない。それで、帰っちゃうんだから。鍋焼きうどん食べているんだから。

佐道 主賓の吉田さんがいなくなつて、皆さんはわからなかったんですか。

松野 ちょっと淋しい、ちょっとおかしい、と思ったけれども、お疲れだろうということで、まあその場はごまかしたわけです。お疲れだからといってごまかしたけれども、本当は吉田さんが、帰つてから「おれに冷たいのを出す。おれは冷や飯は食わねえ」と言った。そういうユーモアというのか、剛胆というのか。だけど、言葉が少くないです。

さっきの雄弁有能じゃない無能無言じゃないけれども、そういう政治家が出てこない。べらべらしゃべるから失敗をする。言葉がよければ、一言か二言で、鉄をも通すような言葉があるはずなんです。だから吉田さんの演説は、まことに含蓄に富んだ演説でして、べらべら喋らない。二十分ぐらいのものでしょね。聞いていて、なかなか、ちょうど文章に似ていますね。一般の大衆受けはしないんです。大衆受けは、ダイドウヤキみたいなものが大衆受けすればいいんです。だいたい大衆受けするのはダイドウヤキ。だから、吉田さんのは、この文章と同じようなもの。この文章みたいな演説をするから、大衆受けしないうです。聞くものにはありがたいけれど、議会の答弁もそうでしたね。

伊藤 要するに吉田さんの秘書をやっているということとは、ずいぶんいろいろな人を知るチャンスになるわけですね。

松野 人を知るチャンスよりも、吉田さんを知った方が価値があったですね。いろいろな人は、もうその場その場で変わりますから。いろいろな偉い人があつても、変わるものだから。だけど吉田さんに教わつたものは、私の中に残っている。

伊藤 それはそうでしょうけれども、当時の自由党の幹部やなに

かはね。

松野 それはそうです。「一時中断」。

いつも吉田さんのところへみんなが行くけれど、うまくいかなかったのだから、「おい松野、吉田さんのところへ行つてこう言つておいてくれ、ああ言つておいてくれ」といって、メッセンジャーみたいなことをしました。

伊藤 そうすると、向こうも覚えてくれるわけでしょう。

松野 覚えてくれます。幹事長が吉田さんのところへきて、「今日は遅いけれども、総裁おるように言つておけよ。夜十二時頃になることがあるから」という。吉田さんは十時ぐらいになると帰っちゃうわけですから、今日はおるように、お前言つてこいと言われる。それで「今日は、幹事長が最後までいるように言つてますよ」と伝える。「そうか。つまらんもんだな」とか言つて、それで最後までいきました。「私は」そういうメッセンジャーみたいな役でしょうね。

自由党の面々

伊藤 その当時、吉田さんの周辺にいる人で松野さんが素晴らしい政治家だなど思うような人はありませんでしたか。

松野 一年経つて、秘書みたいのを辞めたのは、麻生太賀吉が当選したからです。その翌年です。それが今度は吉田さんの秘書になった。親子だから。その前の一年間は私がやっていた。そのあとは、麻生太賀吉が翌年当選してきたから。その麻生太賀吉の息子がいま麻生太郎で、わりにいいですよ。これは私から見ると、家柄をほめるわけではないけれども、やはり卑しくないな。やはり一代のし上がるといふのは、なんととっても、努力して有能かもしれないが、品がそろわない。品がそろつていては、一代では出世しない。おそらく秀吉なんていうのは一代で出世したから、粗忽で下品で

わがままだったでしょうね。

伊藤 鳩山家なんか四代ですよ。

松野 それからいまの田中角栄がそうです。真紀子になると落ちてきている。やはり下品さが無い。田中は自分での上がろうという。それが下品に感じる。真紀子になると、もうの上がったあとだから、そっかさが無い。吉田、麻生、あれも三代目になりますね。それで、麻生太郎というのは、ものになると思いますね。下品さが無い。それでいま通産大臣をしている平沼赳夫。あれは平沼騏一郎の孫にあたりますね。平沼騏一郎というのは奥さんがいないから、子供がいない。だから、あれは弟の子供か何かで、孫になるわけですね。あれも私は筋がいいと思う。それから小泉純一郎も三代目ですね。私はなにも名門の血を引いているとは思わないけれども、人間の落ち着きというものと、考えだね。やはり、そういう者は安心して使えますね。鳩山のところも四代目になりますね。

伊藤 吉田さんは、そういういい家柄の人が好きなんじゃないですか。

松野 吉田さんは、佐藤栄作なんて知らなかったんだから。官房長官にする日まで知らなかったんだ。

伊藤 じゃあ、誰が推薦したんですか。

松野 私の父が「佐藤栄作というので、運輸省の事務次官にいいのがおるよ」と言ったら、「どんな男だ」というので、「岸信介の弟だ」と言うと、「ああ岸の弟か、じゃあよし」とそれで終わったんです。それで、「佐藤を呼べ」と言う。そこで初めて会った。決めてから会ったんだ。「岸の弟、それならいい」、もうそれでいいわけです。それが佐藤栄作の官房長官です。

伊藤 その時は、お父さまはどういう役割をしていたんですか。

松野 鳩山さんが追放になったあと誰を総裁にしようかともめたわけですね。時間がないから。その時、候補になったのが、松平と吉田さんだ。私の父は「吉田がいいぞ」と言いました。ほかの者は

松平がいいだろうというって、両方出た。結局吉田になって、私の父が吉田に交渉に行ったわけですね。「いま、ならんか」「おれは政党嫌いだ」「でも、いまのところ鳩山がパージになったあと、とりあえず日本自由党にはいない。いまなればいいじゃないか」「じゃあ条件がある。もう政党のことは一切関係しない。金のこともおれは関係しない。それでよければやる」「それでいいよ、吉田さんやれよ」と言って引つ張り出したのが私の父です。だから、私の父はパージで表に出ないけれど、電話と手紙がたくさん来ている。人間がわからないから。「官房長官は林譲治さんがやっていただけでも、そのあと誰だろう」「それは佐藤君はどうだ」「佐藤って誰だ」「岸君の弟だ」「それならよし、すぐ呼べ」その瞬間に呼んで、会って、それで決めた。佐藤栄作で決めたのじゃなくて、岸信介の弟で決めたんだ。その点は簡単なものだった。岸と吉田さんは、非常に親しかったです。新進官僚で、おそらく事務次官が一緒でしょうね。外務省の事務次官と商工省の事務次官が一緒ぐらいのところじゃないかな。非常に親しかった。だから岸の弟、それならいいと。それで決めたぐらいいだ。岸の弟ということで決めたんだ。

伊藤 じゃあ、お父さまはずいぶん。

松野 ずいぶん推薦しました。橋本龍伍もそうです。若宮貞夫の娘が橋本龍伍の奥さんなんです。「若宮の息子だよ」というと、「あつ、いいね」とすぐに副長官に決めた。それで大蔵省に行った。若宮貞夫というのを吉田さんは知っていた。政友会の若宮の娘婿だということ、すぐに決めちゃった。だから、そんなところで縁類で決めちゃって、本人とは決めてから会うんだ。だから、誰か推薦したのじゃないと使わなかった。田中角栄を政治家にするときもそうです。幣原「喜重郎」が政治家にしてくれというので、保守合同して真つ先に田中角栄が政務次官になったんです。二年生です。幣原さんをつくった。その時は民自党といった。民自党になった時に、幣原さんが入って来た。幣原が、どうしてもひとり田中角栄という

人間をなにかにつけてくださいというので、すぐに法務政務次官にした。法務政務次官にした時に石炭国管問題かなにかで逮捕されそうになった。それは幣原さんの推薦です。あの人は信用ある人の推薦だと、すぐ入れる。だから、小汀利得、あれもブレーンだから、あれが勤めるとすぐ入れる。それから白洲次郎とか。

伊藤 小汀さんもそうなんですか。

松野 そうです。それから、白洲次郎も。ブレーンが勤めると、すぐ採用する。人間は自分でなかなか知らないものだから。そうするとだいたい間違わないでしょうね。信用ある者の推薦でやると、あまり間違っていない。

佐道 お父さまは、官界の動向をよくご存じだったんですか。

松野 よく知っていました。それは岸さんも知っていた。佐藤も課長のときぐらいから知っていた。「父が」鉄道大臣をした時、佐藤栄作が課長なんだ。

伊藤 松野鉄道大臣だ。

松野 その時、佐藤栄作は課長をしていた。その課長の時から、岸の弟というので知っていた。だから人脈というのは不思議なものでね、どこかに生きてくるんです。

伊藤 まあ、人脈があつたからどうということではないんですけど、れども、ある場合に人脈が生きてくるわけですね。

松野 生きてくる。やはり竹の根みたいなものだ。根があるから、筍が生まれる。筍だけでは根が出ない。根だけでもいかん。両方揃わないといかんわけです。やはり人間というのは、人脈と素質とチャンスと、三つ揃わなければいけないでしょうね。チャンスというものも、その時期に合わないとね。戦時中の人間は戦時中であつて、戦後は戦後で、時代に合わなければうまくいかない。金色夜叉も、うしろに松があるから金色夜叉だ。あのうしろの背景なしには、芝居はできないものだ。ことにアピールする政治というものは、背景がなければ駄目ですよ。背景の前に名優が出る。素踊りではな

なか難しい。背景なしの素踊りができる名人はいない。背景が大衆を唸らせる。案外、役者よりも背景が大きな効果があるかもしれないね。

伊藤 さきほど、吉田さんはお金の面倒を見ないということを言われたらしいですけども、当時の自由党のお金の采配は、誰がやっていたんですか。

松野 お金の采配は、あの時の自由党は、廣川弘禪も多少やっていましたね。大野伴睦もやりました。吉田さんの面倒は全部麻生君が見ていた。総裁の経費は全部麻生が出した。政党のほうは、あの頃は河野一郎も追放になっていましたから、大野伴睦、廣川弘禪、それからだいたいいろいろ闇屋がいた。それにくっついてる皮成金とか、いろいろなのがいた。そういう人が人脈を頼って寄附していましたね。その代表が大野伴睦だったんですね。大野伴睦を頼って寄附していました。それぐらいのものでですね。政治資金規正法がありませんから自由でしたからね。いまのようにうるさくなくて、政治資金規正がないから、帳面に載らない金ばかりだったでしょうね。

伊藤 そういう党の金庫番みたいなものは、いないんですか。

松野 金庫番は、多少あとなると、西村英一なんかが一番金庫番だ。細田吉蔵君なども、運輸省で金庫番です。これは佐藤内閣になつてからです。佐藤になつてから、西村英一、これも運輸省、それから細田吉蔵、これも運輸省。佐藤内閣の頃の金庫番はこの二人ですね。政党の頃の金庫番は誰だったでしょう。廣川弘禪も幹事長をやっていましたからね。これは金庫番というより、金庫から金をつかんで持つていく(笑い)。番じゃないんです。掴んで持つていく。大野伴睦もそうなんだ。番じゃなくて、金を掴んで持つていっていました。私もおこぼれをもらったですからね。掴んで持ち出すのを見ているから、私たちにもくれと言つて、どちらからももらったですよ。廣川からも大野からも、もらったんです。掴んで持つていくんだか

ら、おれにもくれと言つてね(笑い)。掴んだ中から私はもらったから、あのへんでしようね。だから、党に献金を勧誘して、自分で持ち出していたんでしようね、私が見ると。自分が集めた。それが將來いろいろな事件があつたでしょう、例えば造船疑獄とか。やはりそういうひとつの復興時代の新興財閥が寄附してくれただんでしようね。それが造船疑獄の発祥になつたんでしようね。

伊藤 その当時は自民党の党本部はどこにあつたんですか。

松野 本部は、いまの本部のほしいあのへんです。いまの本部のあるあの場所で、小さかつた。あの十分の一ぐらいのものでつた。それも、誰か個人の焼け跡を借りていましたからね。

伊藤 当時も院外団というのは、ございましたか。

松野 ありました。院外団は強かつた。

伊藤 だいたい大野伴陸さんなんっていうのは院外団出身でしょう。

松野 ええ。院外団というのは政党の用心棒でした。政党のガードマンが院外団です。前代議士じゃないんです。院外団というのはまた別のものです。

伊藤 前代議士もいますね。

松野 前代議士も、院外団の者もいるし、院外団ではない人もいるわけです。だから、院外団が全部前代議士ではないんです。要するに、政党のガードマンです。

伊藤 じゃあ、腕力がなければいけないわけですね。

松野 腕力があるし、護衛で、ガードマンです。総理総裁が遊説するときは、院外団がついてくるわけです。それからデモがある時は、院外団が陣頭に立つてそれを阻止した。そういうひとつのガードマンです。そこから出た代議士もいる(伊藤 ずいぶんいますよね)。大野伴陸はそこから出た代議士なんだ。院外団出の代議士です。

伊藤 だんだん院外団はいなくなつてくるわけですね。

松野 いなくなつたですね。吉田さんが非常に嫌いだつた。

伊藤 嫌いなんですか。自分が護衛してもらうのに。

松野 吉田さんが護衛してもらつていて、嫌いになつた。吉田内閣の中期までありましたけれども、だんだん減りましたね。

小池 それは吉田さんがクビを切つていたんですか。

松野 いや、「もうあんなものを寄せ付けるな」と言つた。それから自然に遠くへ行くようになった。権威がなくなつたんです。院外団の費用は政党で払つたんですからね。党の経費で払つた。当然月給を払つた。だから職員みたいなものですね。院外団という職なんです。それは自民党だけで、社会党にはなかつたですね。それは旧政友会とか旧民政党時代のものなんです。その昔は壮士でした。その昔は侍(さむらい)ですね。政党の出发点からみると。護衛の侍、それから国家の壮士、それが院外団、今はそれがなくなつて、前代議士。

壮士というのは、誰がつくつたのか。朝鮮の閔妃暗殺というのがありましたね。あれを見ると、壮士が憲兵みたいなことをしてしまつたからね。壮士というのは憲兵みたいなものだ。だからあれを見ると、壮士というのは偉いもので、安達謙蔵なんていうのも、新聞社にいながら、壮士と一緒に組んでいる。閔妃暗殺をみるとゾツとしますね。

小池 安達謙蔵といえ、お父様と同じ選挙区ですね。民政党で。

松野 頭山満とかね。九州はああいうのが多かつた。ことに韓国は中国に近いからね。それから閔妃暗殺をみると、ゾツとしますね。あれが真実がどうか知らないけれども。ああいうのがあつたなあという感じがする。あれじゃあ日韓関係は、うまくないですな(笑い)。だから、熊本は朝鮮征伐の加藤清正以来、うまくいかない。あれ以来、うまくいかないんじゃないかな。あの時、与謝野のじいさんが出て行くでしょう。与謝野鉄幹が出てきますね。あれは確か外務省の警察だ。私は、あの閔妃暗殺は非常に興味がある。誰が書かれたか知らないけれども。あれを見たら、朝鮮征伐で加藤清正、そ

れから安達謙蔵、日韓はうまくいかないなと思った。

■中道連立から吉田へ

伊藤 この二十二年の総選挙の時に、中曽根「康弘」さんとか、増田「甲子七」さんとか田中さんとか一緒ですね。

松野 園田直も一緒です。

小池 園田直も熊本ですね。

伊藤 同じ選挙区ではないでしょう。

松野 選挙区は違います。坂田道太さんなんかそうです。坂田、園

田と同じ選挙区です。私は違います。

伊藤 だいたい、あと社会党の佐々木更三とか。

松野 佐々木更三、成田知巳。

伊藤 錚々たる人たちがあの時当選したんですね。

松野 成田君なんか、いまでみれば民主党でしょうね。非常にインテリでしたよ。成田君はわりに好きだった。わりに社会党でもいいのが出たんです。日教組とか、そういう者もおったけれど、非常にインテリがおったですよ。自民党よりインテリだったかもしれない。自民党は名門の、要するに家柄の政党で、新進気鋭は社会党に多かったですね。

伊藤 当時は、野党ですけれども、与党のほうに民主党がいるわけでしょう。民主党というのは、もともとからいえば――

松野 民社党の時の創立者は春日の前だから、西尾末広です。

伊藤 あの時社会党です

小池 まあ、右派ですけど。

松野 西尾、春日。西尾の方が上だった。あれは同じことでしたね。

言っていることが。

小池 芦田さんの民主党です。連立内閣を片山内閣で組んでいた

あの芦田のグループですが。

松野 平野力三とか。

伊藤 あれは社会党ですね。だから、斎藤隆夫とか。

松野 それから誰がいましたかね。片山内閣だから。

小池 苦米地「義三」とか。

伊藤 多分、それに国民協同党の三木「武夫」さん。

松野 三木さんもいたね。あれは昭電事件があつて、芦田さんが逮捕された。

伊藤 ですから与党、野党といつても、あとの自民党、社会党の時

代とは、ちよつと違いますね。

松野 違う。

伊藤 それで、さつきおっしゃったように、幣原さんのグループが

来ますよね。

松野 その通りです。政友会、民政党というのがそうでしたね。二大政党になると、そんな過激なものはない。いまのアメリカの民主党、共和党くらいなものです。政友会、民政党もそんな違いはない。政友会は農村政策を中心に地方開発をし、民政党は産業構造で産業開発をやるし、どっちもそんなに違わない。都市政党と農村政党の差はあつても、思想的に差はない。どっちを先にやるかだけ。社会党と自民党の五五年体制というのは、基本が違っていた。だいたい憲法の解釈が違う。基本が違う、イデオロギーが違う。あんなのは、いくらたつても敵対するだけでしょうね。敵か味方かというだけであつて、お国からみれば、私はあんな時代は無駄だったなと思う。自民党にも無駄だった。いつも自民党は七・三で妥協してしましたからね。

いま私はこれを見ると、あれに似ていると思う。地域振興券みたいなもの（一同爆笑）。妥協のための無駄なことね。自民党と社会党は、たまには向こうの言うことを聞いてやろうというので、そういうことをやるんだ。労働政策なんかにそういうのがたくさんあり

ますよ。これは承知して、やはりいくら分けてやらんと彼らも顔が立たんだらうというので、ちょうどいまの地域振興券を自民党が公明党に分けてやったようなものだ。国民から見れば無駄なことです。私は、政治でああいうのを見ると、よくないなと思う。

それから五五年体制で、自民党も十に進むところが七しか進まなかったし、だから進み方がすっきりしなかった。社会党のときから育てていたんでしょね。私の中で自民党が悪いのは、社会党を育てていた。そういうながら一歩下がって、進むべき社会に遅れたなと思う。その代表的なものは憲法です。憲法の動きを逃げた。憲法改正が自民党の第一の合併の本義です。社会党をなだめるために、だんだん言わなくなってきた。この五十年のあいだ憲法問題が進まなかったのは、自民党も悪いし、社会党は駄目だなと思う。あの時、もつとぶち壊しておけばよかった。一か八かで勝負しておけば。

伊藤 今になってできるのかできないのか知らないけれど、憲法論議とか言っていますよね。憲法改正と言ってはいけないと。

松野 それは鳩山「由起夫」が極端に言う。あの精神は鳩山一郎から五十年ぶりにまた復活したと思つてね。私は当然だと思つて。このあいだ鳩山に会つたから、あれを取り消すなよ、と言つておいた。気に入るかどうかわからないけれど、皆さんで論議してくださいと言つているが、君から取り消すなよと。「みんなで論議して、結論があれば私も黨員だから従います。論議するまでは私は撤回しない」と言つている。あれは鳩山一郎の地下水が伏流水へ走つていくよ。うだ。五十年ぶりに湧いてきたようで愉快だった。そういうことでもしないと、政治は進みませんよ。まるくまるくといつて、官僚の原稿を読んでいるだけでは、進歩しない。やはり大胆に言う者がいないとね。小沢も言えないようなこととはつきり言いましたからね。集団安全保障と憲法に合わない。集団平和維持という言葉にすれば、なんだったかもしれない。同じだけれどね。集団平和維持と

言えば文句を言われなかったんだ。集団安全保障といったから議論が出たので、私なら集団平和維持軍をつくると言えば、国連に書いてあるからね。社会党の横路たちも食いつけなつたかなと思う。

小池 内閣法制局の解釈を超えましたからね。

伊藤 その片山内閣も芦田内閣も、短命に終わりますよ。

松野 両方で一年半ですから、片山内閣がたしか九ヶ月ぐらい。片山内閣がつぶれたのは、やはり経済政策と、それから社会党内部で何かもめていた。

小池 ええ、賃金の問題でもめていたんです。官公労の賃金です。

伊藤 鈴木茂三郎がつぶしたんです。

松野 それですぐ替わつて、芦田になった。芦田は昭電でつぶれた。その時に人間というのは面白いもので、大蔵省の銀行局長が福田越夫なんです。昭電事件に関係させられちゃつた。その時福田は官僚でしょう。その次に吉田内閣ができた時に、吉田さんが「福田を助けてやれ」と言い出した。よく知つていましたね。「福田は有能な男だ。あれを助けなければいかん」という。その時の法務大臣が殖田俊吉という人が法務大臣だった（伊藤 法務総裁ですね）。法務総裁に吉田さんがあれを助けてやれと言うんだから。殖田俊吉は困つてしまつてね。法務総裁といえどもそんなことできないけれども、吉田さんの気持ちは、福田は有能で将来があるから助けてやれということだった。その時に池田勇人が大蔵大臣でした。福田越夫は池田のところへ行つたわけだ。池田勇人は「よし、おれが何とかしてやる。吉田さんに言つてやる」といった。あとでみたら、池田はちつともしてないことがわかつた（笑い）。それで、池田・福田の仲が悪くなつた。池田内閣打倒を掲げたのが福田ですよ。党風刷新会。それは、その時に池田が軽はずみに「よし福田君、おれが何とかしてやるよ」と言つて、何も吉田さんの耳に入れていなかったことがわかつた。それで池田不信。あの人間は信用できないということになつた。それが巡り巡つて、池田内閣の時の党風刷新会に

つながる。思わぬことですね。たつたひとことでそうなった。それはあとで、福田が死ぬまで言っていましたけれども。

福田のその時の原因は何かというのと、昭電の中に銀行局長福田赳夫の名刺が一枚あったそうです。その名刺が一枚あったから、容疑をかけられた。最後には何も無いということがわかったわけです。裁判官が判決で「まことにあなたは冤罪をこうむって気の毒だった。無駄な時間を過ごしたが、どうぞ一新、心を一にして改めて再生を図ってください」と、裁判官が判決文に言ってくれたそうです。それを福田が言うんだ。「私は裁判官から激励を受けた判決文をもらっているんだよ。これはまことに気の毒だった」と。それが福田が終生私に言っていた自慢だった。「あの時おれはえらい目に遭った。約二年間。それで池田は『おれに任せておけ』と言って、何もしてくれない。だからおれは池田不信なんだ」という。それが後日談。これが見たい事実でしょうね。これは第三者の話で、私は利害のない話です。福田・池田の政争があったのは、それですよ。だから人間は思わぬところでこの伏流水が涌き上がるんだ。水源を見ると、あるんです。どうしてここに水が出るんだろうと思う。どうしてこんなに突飛なことをするんだろうと思うけれど、元をたどればちゃんと原因があるんだ。やはり歴史というのは、そんなものでしょうね。なにかなければ出てこない。

伊藤 そうですね。それで短い期間で、片山内閣、芦田内閣がつぶれて、吉田さんがもういっぺん総理になります。その時は、もう秘書じゃないわけですね。

松野 もう秘書ではありません。その時はもう麻生が出ていたから。その吉田内閣の第一党が社会党なんです。第二党が吉田なんです。第三党が芦田なんです。ほとんど十、十、十ぐらいしか差がない。それで、連立に入らないかという話が、まず社会党から来たんです。「吉田氏は」「おれはそんなのいやだよ」という。それから芦田のほうからも、連立をやらんかと言ってくる。「吉田氏は」「おれ

はいやだ」といった。片山にも芦田にも、あの時は連立を断っている。「おれはそんなワリカンみたいなことはしない。とるんなら、おれはいっぺんにとる」という、その吉田の豪快な決断が、今日の長期政権の自民党をつくったんです。あの時に組んでいたら、どっちと組んでも駄目だったでしょうね。社会党と組む気はないが、芦田さんからも来た。二党と三党でやれば、必ずなれる。それだから政権はとれる。しかも吉田内閣は現職ですから、芦田さんから見れば当然吉田は乗ってくると思っただけでしょうね。そうすると、吉田・芦田内閣ができていたわけだ。その時毅然として断ったからね。やはり、さすが吉田でしょうね。それで、とうとう社会党と芦田が組んだ。「吉田氏は」「社会党と組んでろくなことないよ、芦田のやつが」と吐き出すように言っていました。社会党と組んで、ろくなことあるかと言っていた。最初から社会党と組む気はない。芦田とは、保守同士だから世間は組むかと思っただけでも、これも毅然として断りました。

伊藤 たしか、第一次吉田内閣の時は、民主党と組んでいるんですよ。

松野 ええ、あの時は。だから、当然組むだろうと思われていた。しかし、吉田さんは毅然として断った。あれがその次の大勝利になったんでしょね。

伊藤 昭和二十三年に第二次吉田内閣ができて、そこで解散ですね。いわゆるなれあい解散というやつですね。話し合いですよね。それで、第二回目の選挙はいかがでしたか。

松野 第二回目は、その前とは違っていましたけれど、選挙法は同じですからね。少しガソリンが豊かになったこと。それから、第一回の時には、MPが演説会にみんな聞きに来ていた。

伊藤 監視ですか。

松野 監視ではない。監視というほどではないけれども、聞きに来ている。要するに、どんなことを演説するんだろうという意味と、

どんな思想を持っているだろうという意味で、演説会に必ずMPが来ている。もちろん通訳するやつもいるんです。それは第一回の時には目立ちました。第二回になったら、それが非常に少なくなりました。その印象がちよつと残っている。第一回は、ことに私は終戦軍人だから、占領軍批判をしたりする。私はどこかでそれをやったと思う。やったら、私の選挙長のところに通訳が電話をきて、「あまり占領軍批判はなさらない方がいいんじゃないか」と言ってきたのを覚えています。第一回の時ですね。

伊藤 まあ、通訳は通訳しなかつたんだろうな。

松野 そうだろうと思う。あまり占領軍の批判はなさらない方がいいんじゃないかというようなことをこつそり言うんです。通訳がそう言ってきた。私の選挙長のところに言ってきたのが第一回です。だから、やはりMPが聞いていたんだということだけはわかつたわけです。二回目はそういうのが目立たなくなつた。

伊藤 選挙は楽でございましたか。

松野 選挙は楽でした。二回目は楽。だいたい私は十回ぐらいまでは楽だつたんです。あまり気にしない。選挙になつてから帰つて、選挙期間中も全部はいなかつたですからね。

伊藤 選挙事務長みたいな人がやはり取り仕切っているわけですか。

松野 取り仕切っている。

伊藤 それはお父さまの代からですか。

松野 いえ、私の代になつて替つたですけれども。また、時代が違いますから。

小池 先生の熊本の地盤は、民政党と政友会が昔から拮抗していて、どちらかというところ、民政党のほうが強かつたですね。

松野 ええ、都会はそうです。農村は私の方が強かつたです。だから、私は菊池、鹿本、阿蘇とか農村地帯ではほとんど安定していました。熊本市内の都市部だけ悪かつた。これは不思議なくらい悪か

つたです。それは民政党なんです。

伊藤 民政党というのは、昔の熊本国権党の流れでしょう。

小池 いまでも、濟々鬢がありますし。

松野 だから、福岡は保守・革新の争い、熊本は政友・民政の争い、鹿児島は西郷と島津の争いと言われたぐらい時代が違う。福岡県は保・革の争い、熊本は政友・民政の争いでした。鹿児島へ行くと、西郷・島津の争いと言われましたからね。それがひとつの九州の断層でした。地層がそう。いまでも不思議なことに、今度の衆議院選挙をみると、福岡の一区は民主党です。長崎の一区も民主党、熊本一区も民主党、大分一区も民主党なんです。鹿児島だけは自民党ですからね。まだ断層がある。一番変わっていない鹿児島は一区がまだ民主党がなれない。あとはみんな、なつたんだ。

佐道 まだ薩摩なんですね。

松野 鳥津、薩摩の藩だから。

伊藤 一区というのは、だいたい県庁のあるところでしょう。

松野 県庁のあるところ。都市部ですよ。そこまでは民主党が勝つてきている。鹿児島だけは、まだ民主党が入り込めない。

小池 熊本は、民主党といっても、息子さんだったりするわけですから（一同笑い）。そういう意味では民主党とは言えないんじゃないでしょうか。

伊藤 二回生になると、多少はいろいろ違つてまいりますか。

松野 二回生になると、委員会が発言が増えますね。だいたい一つの法案に政党の割当がありますからね。二回生になると、希望すればその割当を増やしてくれる。六時間ぐらいが割当なら、いままでは十五分ぐらいだったのが、一時間ぐらいはしゃべらせてくれる。

佐道 ずいぶん増えるんですね。

松野 増えます。

佐道 どの委員会ですか。

松野 私は農林委員会です。予算にはまだ割当はなかつたですね。

予算委員会に割当になれば、相当なものだ。あそこは政治委員会ですからね。予算委員会という名の政治委員会ですから。予算の数字は、後半のわずかしかりやらない。前半は全部政治委員会です。それは予算委員会だけは総理が出席するから。あとの委員会は所管大臣しか来ない。だから、どうしても所管大臣との質疑応答だし小さいんです。予算委員会だけは総理が出るから、国政委員会になるわけです。それで予算委員会が重要視される。予算委員は、なり手はたくさんあるけれど、なかなか希望通りはいかない。なにか特徴がないとね。

伊藤 党の役職はどうなんですか。

松野 役職はその頃は、政調会の副会長とか、副幹事長とか、部長ですね。政調の部長とか。そういうものは、三回ぐらいになると、ならせてくれるんです。それが四回ぐらいになると政務次官にしてくれる。六回か七回ぐらいだと大臣にしてくれる。だいたい政務次官が三回、四回でしょうね。一回、二回は、ただのヒラ委員です。まだ委員会の理事にはなれませんからね。まあ、だんだんしゃべらせてくれる時間が増える。しゃべると何がいいんかというのと、それが速記にのって地方に配れるんです。それから、しゃべると、当該委員、農林省が言うことをよく聞くんです。役人というのはなるべくボロを出したくないものだから、いやな質問をしてももらいたくないんだ。質問を間違うと、自分たちが困るんだ。だから、「おい、質問するぞ」と言うと、陳情の言うことを聞くわけだ。農林省に、「どこどこの農地の井堰をなおせ、予算をつけてくれ。つけてくれなければ質問するぞ」と言うと、「じゃあ、わかりましたので、質問せんでくれ」という。彼らは無傷で早く法案を通したいわけだ。野党のいうことを聞くのは、その質問が怖いんだ。与党でも困る。言うことを聞かない役人には、委員会で質問するわけ。与党から質問してもいいんですけれどね。しかし、だいたい野党の質問の方が、質問でしょうね。与党質問は、なあなあでね。

伊藤 翼賛質問ですか。

松野 翼賛質問です。半分けなして、あと半分はほめる。だいたい与党質問は半分悪口を言って、半分はよくやっていると、というのが最後でしょうね。だから、与党の質問というのはあまり面白味はないな。

伊藤 でもやはり与党で質問はできるといことは――。

松野 できる。一番は災害です。災害の時の質問は与党質問をさかんにやるわけです。災害民の声を訴えて、災害地にそれを聞かせてやりたいわけだ。こんなに私は努力していると。努力の表現が質問だから。災害の時は与党質問がうんと出るんです。あれをしる、これもしる、もつと早く補修費を出してやれ、住宅をしてやれ、個人補償もしてやれ、川を治してと言う。それが災害地におけるものです。だから、災害の時は与党質問が殺到するわけだ。それこそ災害地の代議士が、みんなやる。

伊藤 国対みたいなのというのは、だいたい後になってからですか。

松野 いや、一年、二年の時から、国対の委員には入りますけれどもね。

伊藤 それは動員するための要員ですね。

松野 ただ座っている委員です。しゃべったり、方向指示はしませんから。指示命令は、やはり三回以上から五回ぐらいにならないと、本物にならないわけです。

伊藤 ほかの党との交渉も――。

松野 それは三回以上じゃないと――。一回、二回では、ない。ただ、顔を会わせるだけだけでも、向こうも同じことだ。

伊藤 議席は、やはり一番底のほうですか。

松野 議席は一番前、一番底が新入生。上のほうが当選回数が多い人で、だんだん上がってくるわけです。

伊藤 国会の映像を見ると、上のほうに中曽根さんとかいますね。

松野 一番古いのが一番後ですね。

伊藤 じゃあ、国会対策の委員長みたいな人は、やはり上の方にいるわけですか。

松野 国会対策の委員長は真ん中より後の方ですかね。幹事長がだいたい三分の二ぐらいのところにおりますね。

伊藤 いまの法案に対して、こうやれ、ああやれというようなことは――。

松野 幹事長は、真ん中ぐらいで、通路の近くに決まっているんだね。飛び出して行って命令するのに具合がいいように。野次るときは野次れ、いまは静かにしろとか指示する。だから幹事長は通路の横に決まっている。もつと野次れ、野次れとか、いまはもつと静かにしろとかいう命令をするからね。

伊藤 それは国対の委員長と幹事長ですか。

松野 国対委員長と幹事長がやるんです。だから、どつちも飛び出しやすいように、通路の横に決まっている。各党ともそうです。

伊藤 二回目の当選後は、しばらく吉田内閣ですね。

松野 吉田内閣です。三回当選して政務次官になったかな。その時は橋本龍伍が厚生大臣、私が政務次官。その時は、橋本龍伍がお灯明料ということで辞めたときです。予算で、池田と喧嘩して辞任した。戦没者補償法。その時はサンフランシスコ条約の決定の前だ。サンフランシスコ条約が、もういよいよ翌年は発効するということが決まったときです。その時の厚生大臣が橋本龍伍、大蔵大臣が池田勇人、総理大臣が吉田さんです。来年サンフランシスコ条約が決まる。だから、来年の予算のことで喧嘩したんです。「橋本龍伍は」

「独立後最初にやることは、戦没者の慰霊を祀ることだ、それを第一回に入れる」といった。池田は「予算がないから、入れられない」という。「ほかを削っても、これを入れる」「いや、そんなことではできない」と言われて、厚生大臣橋本龍伍は「そんなことでは厚生大臣は務まらない」と言って、とうとう辞表を出して辞めた。その時

私は政務次官だった。一晚、橋本龍伍がいなくなっちゃった。翌日は閣議ですけれどね。さあ、私のところへ問い合わせが来て、「政務次官、早く大臣を見つけて」という。見つけようがないんだ。私の家にかくまっていると思つたらしい。火曜日は閣議ですからね。それで、火曜日に出て行って、辞表を出した。さあ、私も困っちゃった。そのあとに吉武「恵市」というのが厚生大臣になりました。これは、役人出ですね。

それが橋本龍伍が有名になった理由です。遺家族援護法という法律ですね。あとでできましたけれども、その時はできなかった。そこで、そんな予算はないという。それで一柱五万円のお灯明料だけ組んでやるといった。五万円のお灯明料の予算だけ池田は組もうとしたが、橋本龍伍は、そんなまやかしては駄目だ、ちゃんと援護法をつくれと言った。そんなことでもめたんです。とうとう厚生大臣は身を捨てたわけだ。

伊藤 三回当選すると、だいたいは政務次官に当たるんですか。

松野 だいたい当たります。

伊藤 それは、どこというのは――。

松野 どこというのは、お仕着せです。

伊藤 勉強しなければならぬですね。

松野 私は厚生委員会に入ったことないから、「政務次官」になってから初めて行つたんです。農林委員会をしているからといって農林政務次官には、案外あの頃はしなかつたんです。しない理由は、若いうちに型をはめると駄目だ。多くのものを勉強しろ。農林委員をやつたやつが農林省に行つたのでは、何のことはない、専門職みたいで駄目だ。官僚じゃないんだから、どの大臣でもどこでも務まるようにしろというのが政治家だ、ということ、わざと当該委員会にしないんです。農林政務次官は、ほかの者にした。ほかの委員会も同じようなことです。それはそのときの幹部の方針でした。いまは違うでしょうけれど、幹部の方針でそういう人事だった。非

常にそういうことを厳しく言われました。

伊藤 厚生省というのは、なかなか難しいじゃないですか。

松野 それで今でも厚生省のことを私はいくらか覚えているわけです。いまでも、社会保障なんて出ると、やはり勉強しておいてよかったですと思います。一年間は一所懸命勉強しますからね。法律を一所懸命読みますからね。それで、いまでも多少いろいろなことがわかる。医者的一点単価なんていうことも知っていますよ。医者の医療費の値段は、一点単価で決まる。一点はいくらで、手術は何点、往診は何点と、そういうものを自然に覚える。四十年前でもいまでも、基本は変わりませんからね。

伊藤 保険もそうですよね。年金もそうですか。

松野 年金もそうです。

伊藤 あれも、なかなか難しいでしょう。

松野 年金とか保険とかいうのは、財政学では最高ですね。難しいものです。私は保険と年金というのは、大変な知識がいると思う。世界で一番難しいのは、保険と年金かもしれないですね。その制度は。

伊藤 いま、その保険も年金もちょっとつぶれかかっているというか、危ないですよ。

松野 それは金融よりも保険、年金の学問の方が、私は上だと思っ。保険というのは、考えてみると面白いものではないか。なんの推定であるの保険料率を決めるか。それから物価指数をやったりして、年金も同じですね。いまそれが逆さやになって大騒ぎしている。

伊藤 まさかこんなに若者が減るとは思わなかったですから。

松野 あの頃は「人口構造は」三角に決まっていた。いまはもう逆ですから。これじゃあ、あの制度は私は駄目だと思っ。ほんとう言ええば、私はあの制度を維持することが間違っていると思っ。新しい方式に乗り換えなければいけない。昔のままのものを一所懸命やっているが、それはいくらやっても矛盾がある。私は、あれは何か

新しい制度に乗り換えなければ駄目だと思っ。

伊藤 少々手直ししたぐらいでは、どうにもならないですね。

松野 できない。根本から直さなければ駄目だ。私は根本から、あのピサの斜塔はつくり直さなければ、限度にきている。

伊藤 もう、こうなっている「傾いている」。

松野 もうあれ以上高くは積めないんだ。私は実にそういう感じがする。それを一所懸命あのままでもう一回建てようとするから、矛盾がある。

伊藤 それで、一寸延ばしにしているから、ますます矛盾がね。

松野 私は、もう根本的に変えなければ駄目だと思っ。つくり直すこと。過去の補償をして、つくり直せばいいだ。過去の掛け金を全部補償して、つくり直せばいいんだ。

伊藤 橋本龍伍さんの名前が出ましたけれども、橋本龍伍さんは、どういう感じですか。

松野 橋本龍伍さんというのは、大蔵省の部長までした優秀なお人で、若宮貞夫という昔の政友会の代議士の娘をもらった。政治家も、優秀な官僚と縁類を結びたいんですね。官僚も、それはお互い同業ですからね。そういう縁類で、あの人はなかなか努力した秀才でした、岡山の。

伊藤 人柄はどうですか。

松野 人柄も真面目だった。これぐらい真面目なものはない。女遊びの噂ひとつない。ひとつの噂もないぐらい謹厳実直。毎日、毎日本を読んでいる。毎日日本を読んで、話をする面白味がないんだ。女の話をしてない、金の話はしない、理論ばっかりだ。二時間おれば、理論闘争ばかり。

小池 しんどいですね。お体が少し。

松野 若い頃小児麻痺かなにかをやって、片一方の足がちよつと短いんだ。それで、片一方だけ高い靴を履くんです。それで負けず嫌いだから、登山ばかりやっている。負けず嫌いで頑固なものだか

ら、足が悪いことを言われるのもいやなんだ。自分は歩くことができないうんて言われるのがいやで、登山家なんです。いまの龍太郎も登山家なんだ。親が連れて歩いた。これも真面目というか堅物というか、だから話しても面白くない。一緒に話すと二時間も三時間も理論闘争で、あまたこうだ、財政論はこうだと言つう。

その時言われたのは何だったかな。大蔵省主税局と主計局を別に分けて、主計局は内閣に収入と支出を分けようというのが、いまでもあるんですが、その理論が出た。その時、橋本龍伍が私に四時間ぐらい言つていた。「そういう理論は、よその国でやっているが、日本がこんにちまでそんなことをやっていると駄目だ。収入と支出を一緒にしているから、予想して予算が組めるんだ。それがはっきり収入がなければ予算が組めないなんていうことになる、日本の予算は組めない。一緒になつていから、収入を予測して、支出をよけい予算が組めるだ。これは明治以来貧乏な国は、みなそうしている。収入があつてから、支出を組むのでは駄目なんだ。収入の前に予想ができるんだ。一緒になっているから。それが日本の財政の妙味なんだ。それを分けようなんてとんでもない」、これが橋本龍伍の講義ですよ。「収入局と支出局を一緒に大蔵縛るから、懐手して、来年はこのぐらいの収入はないけれども、あることにして予算を組もう、ということができると。これが限定されたら組めないんだ。そうすると、予算を少しよけい組むんだ。それで足りなかつたら、その時はその時で考えればいいんだ。よその局なら組ませない。収入以上に支出を組むことは、よその局なら組めない。自分の腹だから予想して、一割ぐらいよけい組んだつて大丈夫だと思つてやる。これが日本の財政の妙味だ」という。これは橋本龍伍です。これを四時間ぐらいやるんだから。要点はそこなんだ。

伊藤 吉田さんの覚えはどうだったんですか。

松野 よかつたです。吉田さんの覚えもそういうふうに一所懸命やつていたから。だけど、非常に堅いから、所得倍増みたいなそう

いうことができないうんだ。倍増になるかどうかかわらないのに所得倍増だなんて言えない。あれは池田だからできるので、橋本はできないんです。だから橋本龍伍は、七〜八割までは大丈夫だろうけれども、十割は言えないんだ、堅いから。池田は八だつて十と言うんだ。同じ大蔵省でも、そういうところが違う。それが人間、人柄の違いでしょうね。だから、池田は当たり外れがある。橋本は堅い。そのかわり面白味がない。その差だろうと思う。同じことですよ。日本の国がどうあろうとも。その指導者の顔つき、目つき、思想で、社会が変わるんだ。バラ色になるんだ。それが私は政治だろうと思う。ある意味では幻想を抱かせる。その幻想が当たつたり、それが国を発展させる。

伊藤 所得倍増は当たらなかつたら大変でしたね。

松野 私は聞いたんだから。「所得倍増つて、ほんとうに月給が倍になるんですか」と。「ばかなことを言うな。所得が倍」「だつて月給が倍じゃないの?」「月給もそうなるかもしれないけれども、おれが言っているのは、月給が倍と言っているんじゃない。所得が倍だ」という。私は月給が倍かと思つた。一部の新聞は、月給倍と書いているからね。「ところで、月給が倍になるんですか」と聞いたら、「馬鹿なことを言うな。おれは所得倍増と言っている」「どうして倍増なんですか」と聞いたら、その時の説明で一番わかりやすいのは、当時の定期預金なんです。長期の定期で十年もの「の利率」が五・五%ぐらいなんです。「五・五%を七年すれば倍増になる。五・五%の定期預金を複利で計算してみる。八年ぐらいで倍になる。だから、おれが所得倍増といつて、何がおかしい」といって、定期預金で私は説明された。「それにちよつと足したただけだ。複利計算にちよつとおれが政治計算を足したただけだ」。それが池田勇人の私に対する説明です。

伊藤 あれからこんなについている。では今日はそのあたり、二回から三回ぐらいのところだ。

松野 これは、失礼ですけども、どうするんですか。こんな話を
 して。心配でしょうがない。

伊藤 先生が心配することはないです。

松野 あなたみたいな偉い方がみんな来て、あなた達を見ている
 と錚々たる人だからね。ひとりひとりが錚々たる人で、私がこうや
 ってしゃべっているけれども、どうなるかハラハラする。ただ、話
 せというから話しているけれども。全然私は知らずにしゃべって
 いるんだ。

伊藤 何も知らずに話してください。

佐道 いつの間にか、「松野頼三大いに語る」というゲラになって
 出てくることはありませんから。

松野 前後もわからずに、なにもかもね。前後だから記憶も多少違
 うし。

有馬 この前お母さまの日記をお持ちになったでしょう。これは、
 野田卯太郎さんのところの文書の中に入っているお母様の手紙で
 す。

松野 そうですか。

有馬 これは古いもので、もちろん結婚なさる前です。野田たき
 のですね。これが明治二十年代あたりでしょうね。

次のは、これはもう松野になったあとです。これは大正四年だか
 ら、野田卯太郎さんは、ちょうどその時、東洋拓殖の副総裁で京城
 にいるときですね。

松野 東洋拓殖というのに行つて、あそこでランを習ったんだ。こ
 こにあるんだ「部屋にランの絵が飾られている」。このランは拓殖
 銀行の時に習った。それで、拓殖銀行へ行くと、二年ぐらいで当時
 の金で四千円ぐらいくれるんです。大変ありがたいところなんだ。
 それだから、あそこへ行くと家が一軒できるんだ。いまでいえば四
 千万ぐらいくれるんでしょうね。二年ぐらいで退職金だ。ちょうど、
 いまの公社公団の総裁と同じだ。二年か四年おるとくれるでしょ

う。ああいうものなんだ。二年行くと、四、五千万円もらう。当時は
 四、五千万円だ。

有馬 それで、一番下は、これはお父さまです。

松野 そうですか。野田卯太郎様か。ああ、大分、別府温泉。若松屋
 に泊まっていた。若松屋という旅館は覚えてる。あの頃困つたの
 は、野田卯太郎は重いでしょう。あの頃は車がなくて、別府の駅か
 ら人力車なんです。上がらないんだ。だから、二人引きじゃないと
 駄目なんだ。ひとりじゃ危ない。だから野田卯太郎が乗る時は、後
 から人が押してやらないと。百キロ以上、百二十キロぐらいあつた
 でしょう。だから、野田卯太郎が乗る時は、二人引きじゃないと危
 ない。人間がいくら安いといっても、大変なものですよ。

有馬 それは野田さんのお宅から、福岡県の地域史研究所という
 ところがもらいまして、全部それを目録にしたのが、これなんです
 (松野 ありがとうございます)。野田さんの関係資料が数千点あ
 るんです。

松野 そうですか。野田卯太郎は福岡ではまだ大変大事にしても
 らつてゐるんです。

有馬 実はお母さまのお手紙というのは、もつとあるんですけども、
 今日はずぐバツと見つかるものだけコピーしてきました。

松野 いや、もう結構です。

伊藤 大変立派な字ですね。

松野 いや、昔の人はみな墨なんだ。ほんとうに私はいまでも感心
 する。とても母の字は捨てられないな。父の字はひどいが、母の字
 は捨てられない。

有馬 これは、たしかお母さまが、英語の勉強をしたかったので英語の
 本を送ってくれとかいう、そういう類の手紙ですね。

松野 英語は一所懸命勉強していました。ちょうどクリスマスチャン
 ンでしてね、賛美歌なんか私も英語でよく歌わされましたよ。母が
 歌っていると、つい覚えるものだからね。カトリックではなくて、

メソジストでしたね。野田のところも私のところも、宗教は自由なんです。宗教には凝るんです。どの宗教に入ってもいい。そのかわり、絶対人に勧めるなどというんです。親族兄弟には。お前だけにしておけ。それだけが金言だった。宗教の自由、ただし人を勧誘するな。

いま、はつきり言う、宗教が一番怖いですね。とんでもない宗教に凝ったら怖いですよ。とんでもない目に遭う。それは自分だけにしてくれんとね。世界での戦争は宗教だものね。イスラエルも、

政局関連年表

「加藤の乱経過」

二〇〇〇年十月三十一日

加藤紘一氏が、東京都内のホテルで開かれたパーティーであいさつし、「評論家みたいなことだけ言って済むタイミングは過ぎた気がする」と発言。

十一月二日

加藤氏が夜、TBSの報道番組で、内閣改造について「(森首相)に入閣を要請されても全くやる気はない。(入閣しても)自分の政治が十分にやれると思わない」と入閣の可能性を否定。また、「今、この国を何と

かしくてはいけなれと思つてい」と語り、森首相への対決姿勢を鮮明にする。

十一月五日

山崎拓元政調会長が、フジテレビの報道番組に出演し、加藤氏が「ポスト森」に意欲を示したことについて「加藤さんが手を挙げた。彼を支持したい」と述べ、加藤氏を支える立場を明確にした。

十一月九日

民主、自由、共産、社民の野党4党の幹事長・書記局長が夜、非公式に会談し、臨時国会の終盤に森内閣に対する内閣不信任決議案を共同提出すること合意。

インドだってね。宗教ぐらい怖ろしいものはない。案外一番悪いのは宗教かもしれないな、究極は。あとは妥協できるけれども、宗教だけは妥協できないからね。あとは、経済だって妥協できるもの。宗教になると妥協できない。

小池 怖いことを考えますからね。「終了後、伊藤は冒頭で話が出た、吉田茂から松野鶴平氏宛の手紙を読み、楷書に書き直す。

十一月十日

加藤氏が、記者団に「国民の七十五%が反対している内閣を信任できるかどうか、非常に考えなければならぬ」と述べ、森首相は退陣すべきとの考えを明らかに。これに先立ち加藤氏は同日、小泉純一郎・森派会長に対し、今国会に野党四党が内閣不信任決議案を提出した場合、衆院本会議での採決を欠席することもあり得るとの考えを伝えた。

十一月十一日

加藤氏が森首相の退陣を要求し、内閣不信任決議案採決に欠席の可能性に言及した問題で、同党の橋本、森、江藤・亀井の主流3派と旧河本派、

河野グループの会長、事務総長らが夕方東京都内のホテルで今後の対応を協議。一致結束して森政権を支えることを確認した。

十一月十四日

加藤氏の森首相退陣要求により、自民党の主流派内からも、森首相が退陣し、自民党総裁選を前倒して実施すべきとの意見が出る。しかし、橋本派の野中広務幹事長や青木幹雄参院幹事長は、民主党など野党が加藤氏を首相候補に担ぐ展開を懸念、加藤派や山崎派所属議員の切り崩しに全力。

十一月十五日

加藤氏が、経済構造改革などを柱と

した政権構想を週内にも発表する意向を明らかにするとともに、政権を獲得した場合は、民主党などと連携し、財政再建に取り組む一方、懸念される新たな金融危機に対処していく考えを示した。

十一月十七日

加藤氏が、野党が提出する内閣不信任決議案に賛成する考えを明らかに。自民党執行部は、加藤、山崎両派が不信任案に同調した場合、賛成はもちろん欠席でも除名処分にする方針を固めた。

十一月十八日

内閣不信任決議案をめぐる自民党主流派と反主流派の激しい対立が続く中、野中広務幹事長は、同案に賛成方針を決めている加藤紘一元幹事長と山崎拓元政調会長に対して採決前に離党勧告をする方針を明らかに。しかし両氏は野中氏の要求を拒否する姿勢。

十一月二十日

夕方、加藤氏の森首相退陣要求に反発していた宮沢喜一蔵相ら自民党加藤派内のベテラン議員らが、東京都内のホテルで会合を開き、事実上の反加藤グループを結成し、池田勇人元首相以来の伝統を持つ同派の分裂が確定的になった。野党四党が提出

した内閣不信任決議案の採決をする十一月二十日夜の衆院本会議を自民党の加藤、山崎両派の全員が欠席する方針を決めた。これにより同案は否決される見通し。

十一月二十一日

衆院本会議は未明に再開、野党四党が提出した森内閣に対する不信任決議案の採決を行い、投票総数四百二十七票のうち反対二百三十七票、賛成百九十票で、同決議案は否決。

「二〇〇〇年のアメリカ大統領選挙」

共和党のジョージ・W・ブッシュ候補も、民主党のアル・ゴア候補も、訴える政策に大きな違いはなかった。十一月七日の投票日に開票作業がはじまると大接戦になった。

特に、フロリダ州の開票作業が問題となった。はじめマスコミは、ゴア候補勝利を伝えたが、あまりに接戦であったため、それが取り消された。その間に他州の開票結果が出揃い、フロリダ州の開票結果が大統領選挙全体の行方を決める状況になった。フロリダ州の選挙人二十五人を獲得した候補者が、選挙に勝つということになったのである。

ようやく僅差でブッシュ氏勝利となったが、同州の一般得票数の差があまりに小さかったため、次々と問題

が生じてきた。

フロリダ州の再集計の結果によって、ゴア氏が逆転勝利する可能性が出てきたため、両候補とも、票の数え方について州裁判所と連邦最高裁判所に訴えを起こしたが、十二月十二日に連邦最高裁判所が手作業による再集計の停止を命じ、ブッシュ候補の勝利が確定して、第四十三代大統領に就任することになった。

松野 頼三 オーラルヒストリー

第3回

[2000年12月11日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

■現在の政局について

松野 「松野氏が週刊誌に記事を書いているという話をしながら、雑誌記者の言い分として」……『週刊ポスト』は六十万部売れるんですよ、ひとを馬鹿にせんでください。裸を見ても、中に記事があれば、それも見る。中にあればあなたの記事も見えますよ。だから若い読者だと思って、出てください」という。じゃあ出よう、と行って、出て原稿料はいらんから、という。一年間送ってくる。だから、こんなに来ているんだ。私の秘書はそれを喜んで、毎週読んでいるんだから(笑)。

だから四冊ぐらい来るんだ。『アサヒ芸能』『週刊ポスト』『週刊実話』『週刊文春』『週刊新潮』まで来るんだ。週刊誌は私のところは大変なんですよ。

伊藤 『週刊文春』『週刊新潮』はまあいいとして。

松野 なるほどそういうのがあるというんだ。「それは裸を見るのにもいますよ、中の記事も買えば見えますよ。だからあなたの記事も見ていますよ」といわれると、そうかなと思う。それは幹事長の職責は何だとか、幹事長はどんな仕事をしているかとか、そんなことですよ。昔の名幹事長は誰だ、とか。

伊藤 それは幹事長によって違うでしょう。

松野 名幹事長は、結局総理大臣と一体の幹事長は強いんだ。総理大臣と違うと駄目だ。吉田「茂」の時の佐藤「栄作」、池田「勇人」はバックが吉田だからいいと。バックが違うときは駄目だとかね。佐藤の時の田中「角栄」は佐藤が後ろだから強かったとか。差し替えのやつは駄目だとか。そんな話をしたんですね。

伊藤 だいたい、総裁と幹事長は同じ派閥ですね。

松野 同じ派閥の時は強いんです。それが違うと、幹事長が強いと

きは総裁が馬鹿に見える。総裁が強いときは幹事長は無能になる。いままさに、野中「広務(橋本派)」と森「喜朗(森派)」が違うから。野中が光るときは森が駄目だ、森が光るときは野中が駄目なんだ。そういうふうには差が出てくる。二つの合わせた力がないと、一足す一が一引く一になってしまう。だから片方が二でも、片方はゼロになる。私が大臣をしていて、後ろの総理が私を信頼していると思うと、何でも言える。総理が他人だと、遠慮する。私の時は岸「信介」さんだったから、何を言っても岸さんがそうだと言ってくれる。私が妙な失言をしたときも、必ず岸のところへ、労働大臣はこんなことを言っていますかどうですかと聞きに行くわけです。そうすると、そうだ、松野の言うとおりでいいよ、私の力は倍になるわけだ。だから後ろがあれば、こちらは安心して言えるわけだ。必ず私を肯定してくれる。総理が否定すると、所管大臣は浮いてしまうんだ。省内の役人が駄目なんだ。

伊藤 浮いてしまうだけではなくて、場合によってはクビが飛んでしまうことになりませんか。

松野 クビが飛んでしまう。「その閣僚が総理派閥と」違うやつであれば、クビが飛ぶ。それも幹事長と同じですよ。他人のときは、うまくない。吉田内閣の閣僚はみんなよかった。全部吉田さんが、「そうだ」と言ってくれる。だから池田勇人のクビを切れ、と言いにいったら、「君たち、俺を辞めさせると、なぜ言わないんだ」と言うものだから、これには困った。「池田を辞めさせるといふ前に、なぜ俺を辞めさせるといふ決議をもってこないんだ」と言われて、まいつちやった。吉田に辞めろといえ、解散を覚悟しなければいけないから言えない。池田辞めろ、とは言いに行ったら、吉田辞めろといふとみんな困っちゃう。

その時は、気に入らんから、決議文を持っていくんですね。私や若手の者が五、六人で、どうも気にいらんと。食料問題が主だけれど、もつと食糧配給をこういう方法で増やせとか、こういうことを

しろという決議文を若手が持つていく。あの頃は食料が主です。そのとき、「よし、決議文を書こう」といつてサツサツサと書くのが田中角栄だ。驚いた。名文を書くんだ。「近來感じるところこれあり、食糧の配給、不公平にして」とサツサと書くんだ。そうすると私たち六、七人が署名するわけだ。その時に決議文を書くのが田中角栄だった。文章がうまかった。字もうまかった。

伊藤 あまり学がない感じですよ。

松野 私たちも馬鹿にしていたんだ。とんでもない。田中角栄は、文章がうまい。字がうまい。これは大学出は駄目。やつぱり自分で自習しているからね。大学出は、先生に教わってばかりだから駄目。基本が違う。大学に行かないものは、みずから努力して、みずから自習しているからね。字を書いたり、ものの考え方が実務に合っているんだ。文章の書き方も上手だ。私は、これは実務者だと思つて。机上の水練と、実際に川で泳いでいるやつとの差があると思つたな。どぶ川で泳いでいるやつと、「机上の」水練の差だな。

田中角栄のことを最初に知つたのはそのことだ。それまでは馬鹿にしていたんだ。行儀は悪い、品がない、一緒に会合をすればすぐに浪花節を唸る。大学出はどつちかという軽蔑していた。さて決議文を出すというときには、彼が決議文を書くんだ。「おまえ書け」というと、「よしっ」と言つてサツサツサと書いて、「さあ、みんなで署名しろ」という。それにみんなで署名する。これは当選に二回の時ですよ。当選二回だから三十歳。第一回の時は、私が二十九、田中が二十八。三十歳の時の話です。それだけはいまだに印象に残っている。

今度、一月に田中角栄論を一時間半テレビ朝日でやるそうさ。それに私に三分か五分出てくれというから、出ますけれどね。私は若い時のがらつぱちの時と、長所、短所を言つてやろうかと思つている。短所は、品がない、恥知らず、とてもわれわれはついていけない。そんな男が字を書いて、文章を書く、文章も簡単にして

うまいんだ。実務でやっているから。散文調でない決議文でね。これは、と思つたな。だから長所と短所があるんだ。短所はガラガラ、恥を知らない。

伊藤 どこテレビですか。

松野 テレビ朝日で一時間半やるんだそうです、田原「総一郎」の番組です。出演するのは小沢一郎、私はその中に三分か五分挿入するんでしような。一時間ぐらい撮るんですよ。その中でいいところ、うまく合うところだけとるんでしよう。私は反田中の方の論客だろうな。

伊藤 そうなんですか。いまのお話だけ聞いています。

松野 だってガラガラで、とても品が悪い。彼は自分で一級建築士の資格を持っているというんですよ。

伊藤 会社経営もやっていたわけですから、実践的な知識というのが非常に大きかったですよ。お役人は法律しかわからないから。

松野 設計士だから、こういうものを作つてくれと言われると、いいものを作るんです。だから後ろに誰かおれば有能なんです。自分が施主になると駄目なんだ。

伊藤 最初の頃から、ああいうだみ声ですか。

松野 そう。ちよび髭を生やしてね。

伊藤 いかにも土建屋のおやじという感じですね。でも総理になつた頃は、総理らしい顔になりましたね。

松野 それは、なるとそうなりますね。

伊藤 まあ、森さんのよりは風格がある。

松野 キャリアが違うからね。

小池 森さんだつて幹事長を二回もやっているわけですから。

松野 幹事長の時に、総理に向くか向かないか決めなければね。そこがおかしいんです。幹事長でみんな知っているんだから、森の性格は。

伊藤 でも、あれは消去法で選ばれた総理ですからね。

松野 野中さんだって『私は闘う』『文藝春秋、一九九六年五月』という本の中でいき下ろしていますからね。

佐道 しかし印象の薄い幹事長ではありませんね。

伊藤 野中さんというのは、しかし顔があまりよくないね。

松野 よくない。悪い。

伊藤 やはり一種の悪相だろうね。

小池 今度の古賀「誠」さんも、田中六助さんの議員秘書。いかにも議員秘書上がりという感じの方ですね。悪い言い方ですが。

伊藤 今度橋本「龍太郎」さんが入閣しましたけれど、あれはどういうふうにご覧になっていましたか。

松野 やっぱ森のリリーフを狙ったでしょうね。森のあとがないから。戦前は総理大臣に何回もなつたけれど、戦後、総理大臣に二度なつた人はいないんです。私はそれを狙つたなと思つた。

佐道 河野「洋平」さんは駄目ですか。

松野 これは総理になっていませんからね。

佐道 最後のチャンスでは。

松野 加藤紘一とは政敵ですからね。河野は加藤にしたくない。加藤は河野にしたくないでしょうね。

伊藤 橋本さんがなれば、しょうがないか、という感じですかね。

松野 最大公約数は橋本になるでしょうね。あの派閥は大きいから。

小池 替わるのは三月ぐらいということになりますか。

松野 いや、参議院選挙後。

佐道 参議院選挙までは、森さんですか。

松野 森です。

伊藤 勝てなかつたらどうするんだろう。

松野 勝てなかつたら総理をやめて橋本になるでしょうね。

伊藤 また河野さんと同じで、総理になれない総裁ですか。

松野 河野・橋本も争つた中ですからね。それで加藤紘一を裏切つて橋本にしたわけですから。だから河野から見れば、加藤は宿敵だな。またそれがこの時期になると、河野が橋本かというときに、参議院選挙に負ければ問題になるでしょうね。

伊藤 自民と民主の連合ということはありませんか。

松野 あり得ますね。小泉「純一郎」なんか明らかにそうですね。

小池 雑誌『選沢』なんかを読んでいますと、鳩山「由紀夫」さんも改憲論をずつとぶち上げていますし、外交政策でも、どちらかという自民党に近寄っているような雰囲気があるんですけれどね。

松野 明日出る『週刊朝日』に私が主催で、小泉、鳩山、麻生「太郎」、羽田「孜」、「鹿野道彦」。平沼「越夫」も呼んだけれど、平沼はちょうど入閣で来られなかった。いつも六人呼ぶんです。もう四年目です。みんな初めは若かつたけれど、みんな幹部になつちやつた。まだ鳩山も党首じゃなかつたですからね。羽田、鳩山、鹿野、自民が小泉、麻生、平沼越夫、六人を毎年暮れに呼ぶんです。今年で四回目です。それが『週刊朝日』の記事になるわけです。

小池 「永田町の闇鍋」というものですね。

松野 明日出るはずです。

小池 平沼さんは亀井派の後釜というか、首相候補に名前があげられますし、最近株が高いですね。

松野 森よりいいですね。やはり血筋がいいな。平沼騏一郎の血筋です。孫じゃありませんけれどね。平沼騏一郎というのは奥さんがいなくなつたんだ、だから弟の子ですよ。ほかにいないから、孫みたいなのですね。

このあいだ私は、評論家で吉田さんが親しかつたのは小汀利得と言つたけれど、あれは古島一雄だった。訂正しておいてください。

伊藤 このあいだ『神戸新聞』から古島一雄について、「誰か研究している人はいますか」というから、「いやあ、いないね」と言つたん

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100

ですね。「京都大学にも聞きまされたけれど、誰もいないというので、関東にはいませんか」と言うから、僕の知っている限りではない。

松野 古島一雄というのは研究に値する人物です。これは清貧に甘んじて、言論で生きて、欲を求めず、職を求めず。私は古島一雄の家に行つて驚いた。本当に貧相な、昔のままで荻窪かどこかに住んでいましたよ。ガラスの格子戸で、入るとすぐそこが畳で、畳の上に絨毯が敷いてあつて、古い椅子がある。それが一つあるだけ。ほんとうに、こういう人が日本の国を良くするんだな、と思つたな。もちろん、車が入るようなところではない路地ですよ。

私の父が、古島一雄を訪ねて行つてこいと言われて、古島さんのところに酒をかついで訪ね、訪ねて、もちろん車の入らないような路地の横で、入ったらガラスの格子戸でガラガラッと開けて、踏み板があつて、一段上がつて、右の方に行くと、畳の上に絨毯を敷いて、古い椅子、明治時代の椅子みたいなものが置いてあつて、ガスストーブをつけていた。

伊藤 それはいつ頃の話ですか。

松野 吉田内閣の時ですね。それで、着物を着て、奥さんがいたかどうか。部屋が三つか四つしかなくて、二階はなかったと思う。平屋でした。それをみて、なるほど、こういう人が言論の人で、こういう人が日本の国の大事な宝だと。古島一雄。私のおやじが電話をかけていたものだから、一時間以上話して、話もなごやかで、いろいろな政治の話をした。「それは松野さん、人間ですよ」なんて言つていた。「組織をいくら作つても駄目です、人間を作らなければ駄目ですよ」と言つたのが印象に残っている。

伊藤 それはそうでしょうね。

松野 それは要するに、次の大臣はどういう人をあなたは考えていますか、と聞いたんです。吉田内閣だから、古島一雄が入閣の名簿を作つていたんですよ。古島がどんな考えを持つているのか聞

いてこい、次の組閣の基本方針を聞いてこい、と言われて行つたわけだ。

伊藤 それは吉田さんの秘書としてですか。

松野 おやじに、古島一雄に会つて来いといわれたから。いつも、吉田さんのところで、古島一雄と私のおやじが一緒になるわけだから、おまえも参考のために行つてこいと言われて、「これはどうでしょう」と聞いたたら、「結局松野さん、人間ですよ。人間を選ぶことですよ」「じゃあどういふ人間を選ばいいんですか」「それがいちばん難しいね。それができればもう政治家は合格だ」と言われた。実に含蓄のある言葉で、結局人間ですよという。「人間はどう選ぶんですか」ときくと、「それが松野さん、難しい。それがわかれば人生の達人です。私だつてずいぶん見誤ることがある、しかしなべんもやつているうちに誤りが少なくなるものだ」という。これも卓見だと思う。何度もやつていると誤りが少なくなると思うんです。

伊藤 もう相当なお年でしょう。

松野 もうその時「一九五二年五月没（八十六歳）」は七十歳を過ぎていたでしょうね。

伊藤 当時七十歳と言えば、相当な年齢ですね。

松野 吉田さんよりも上だったかもしれないですね。吉田さんの先輩のような感じだった。吉田さんが外務官僚の頃から知つていふようなことを言つていましたからね。長いつきあひのようだった。

■ 朝鮮戦争の勃発

伊藤 そろそろ、この前の続きを始めさせていただきます。この前のお話で、選挙の時にMPが来ていたという話があつたんですが、

先生は昭和二十五年に厚生政務次官になられることになりましたが、まだ占領下ですね。占領というのは、先生がご覧になって、見えたのか見えなかったのか、どうでしょう。

松野 見えた。ちょうど、上で雷がゴロゴロしているような感じですね。落雷はしないだろうと思うけれど、気持ちが悪いですね。空の上で雷がゴロゴロ鳴っている、そんな感じでした。常に頭の上で抑えられている。落ちはせんと思いつながら、意識してしまいました。それが占領ですね。私たちの議会では、法律を通すときに必ずアグレマン「承認」を求めます。それが一つの制度でした。そのほかには、発言も言論も自由でした。でも何か常に頭の上に暗雲があるような気がしました。占領政策というのはこんなものかな、と思っていました。

伊藤 間接統治ですから、表には出てこないわけですから。

松野 憲法も間接統治で、明治憲法の改正ですからね。改正案で天皇の発議である憲法を作ったんだから。みんな間接統治でしょう。でもどうしても、その「間接」を感じますね。ゼロではない。早く自由にしたい。

伊藤 占領軍との直接の接触はなかったわけですか。

松野 ほとんどありません。占領軍はもういません。防衛長官の時はもう独立していますが、直接占領軍とはありません。ただいろいろ会議の時に、占領軍というのを招待するために呼びますからね。

伊藤 省内の会議ですか。

松野 省がいろいろな記念行事をやるでしょう。その時は労働担当の人を呼んだりするわけです。もちろん礼服を着て出席したり、出席しなかったりですけれどね。労働省開設記念日なんていうのをやりますね。その時労働担当のGHQを呼んだりするわけだ。ご招待で。別にそれが来たからどうということはないけれど、なんとはなしに常にどこの役所も担当のものを意識しましたね。議会は

ホイットニーというのが担当でしたね。議会担当の局長がおるものだから。

伊藤 ウィリアムズですね。

松野 議会はウィリアムズでした。ウィリアムズは何かの時に招待をして、出たり出なかったりですけれどね。ウィリアムズの名前は年中話題に出るんだ。

伊藤 占領時代に朝鮮戦争「一九五〇年六月〜一九五三年七月」があるわけですが、朝鮮戦争についてのご印象はいかがですか。

松野 印象は、真つ先に国連軍の旗がGHQのビルにかけられた。これが第一の印象でしたね。国連軍の旗が第一生命の上に掲げられた。第二は、私たちは米ソ戦争の印象を持ちましたね。韓国を戦場とした米ソ戦争の印象を持った。米ソ戦争かと思つたら国連軍だった。あれつという感じがした。そのうちに、吉田さんがなんべんGHQと呼ばれた。マッカーサーでしたから。軍隊をつくつて協力しろという要請があった。そこで吉田さんが、「それはできない」といった。「憲法ができてまだ安定していない日本がそういうことをすれば、一番いやなのは旧軍が復活する。いままし日本に軍隊をつくつてみる、旧軍が全部復活する。旧軍はみんな民間の中に潜んでいるだけで、旧軍に対する憧れを軍人はみんな持っている。必ず旧軍が復活する。それではなんのための憲法か、なんのための改革かわからなくなる。民間協力にしてくれ」と、これは非常に頑強に言ったようですね。民間協力の限度は何かというと、保安隊とこのをつくるということだ。

伊藤 警察予備隊ですね。

松野 警察予備隊ができた。そのときは三万か四万、わずかな数です。それは民間組織による協力隊ということをやった。もう一つは軍隊でもいいが、掃海事業というのが日本の海軍にあった。掃海は残っていたんです。戦争は終わったけれど、機雷が日本周辺にはうぼうにたくさんあるものだから、名前は変わっても、旧海軍の掃

海部隊が掃海隊といって残っていた。それを派遣しようと。それから船も軍艦じゃない船は輸送船として送る。それから保安隊は国内、九州の方の治安維持のためにつくろうと。それはいいけれど、軍隊だけは、憲法の如何にかかわらず、それは逆行する危険なことだ。非常にそれを頑強に断つたのを私は覚えてますね。どうして軍隊をつくらぬのか。いまつくつたら旧軍の将校がみんな入ってくるよ、あとで取捨できない。なんのために平和憲法と改革をやっていたか。ことに旧軍に対しては吉田さんは非常に、憲兵をはじめ、体験からいやがっていましたね。

伊藤 北朝鮮軍が釜山の近くまで来たという時「一九五〇年九月」には相当危機感があつたと思うんですが。

松野 相当危機感を持ちましたね。これはいよいよ九州は危ないぞというので、私たちはどうしようかといって、本当に心配しましたね。ただその時に米軍というものを信頼していたかもしれないですね。米軍がおるから、まさか、と思う。その米軍が負けている、押されているんだから。第一線は韓国でも米軍なんだから。

その時に噂が出たのは、原爆を使う使わないで、マッカーサーがあれに使うといったという話があつた。結局使いませんでしたけれどね。それぐらい米軍の緊迫感、私たちも身近に感じました。しかし、だからといって、戦争をするという気迫はなかつたな。じゃあ銃を持ってみんな立つかといったら、それはなかつた。もし釜山を攻められたらどうするか、その時には日本は銃を持って立ち上がるぞ、という気迫は国民になかつたですね。不思議なぐらい、そのへんは弱かつたな。

もう一つは、ソ連の共同管理ということがあつたな。これは日本人が奮い立てなかつたでしょうね。奮い立てば、ソ連の共同管理でしたからね。その前にメーデー事件というのがあつた。ああいうのを見ると、戦争になって社会党は、労働者の世界を作るんだというスローガンでした。国民協同党は組合産業をやるんだという。鳩

山さんは日本民族の伝統の自由主義を唱える。共産党は、あの時は共産主義インターに入っていたんだから。それが日本におるものだから、国論が一致しなかつたんだ。もし釜山に攻めてきても、国論が一致していない。一致していないのは、その四つの共同管理の中に、四つの思想が日本に出たでしょうね。そのために朝鮮戦争の危機感というのが、残念だけど一本にならない。片方はソ連の進駐、米軍は国連軍、だからなんだかあの時は、緊迫感というのが不思議に、ないんですね。なんだといって、世論が一致しない。一致しないのは敗戦、終戦で方向として力、氣力がなかつたんでしょうね。

伊藤 共産革命への恐怖というのはありましたか。

松野 非常に感じた。国内の共産革命の蜂起の方が怖かつた。朝鮮戦争の北朝鮮の軍隊よりも、国内の共産革命の方に私たちは目を向けていた。釜山よりも国内だった。だから敵対意識というのが一本にならなかつたですね。

伊藤 例えば熊本なら熊本を見たら、そんなに共産党は強いわけではないし。

松野 それはない。熊本の世論は別として、東京は共産革命が、消費税じゃないけれど、五%ぐらいあつたでしょうね。五%ぐらい。共産革命の危険率は今の消費税ぐらいだ(笑い)。これが一〇%になるかもしれないけれど、それぐらいの脅威はあつた。それで内閣に内閣調査室。それは共産革命が怖かつた。だから私は北朝鮮よりも、国内の共産革命の方が怖かつた。

またソ連が狸穴の大使館に年中代議士を呼ぶんだ。主として共産党も呼ばれたし社会党も呼ばれたが、私も一回ぐらい呼ばれましたよ。一回行って、早く帰ってきましたからね。何かの記念式で、社会党の連中や共産党の連中は長くいるけれど、私たちは行ってすぐに挨拶をして、もう五分もしないうちに帰って来た。別室に連れて拉致されたら大変だから(笑い)。治外法権だからね。私たちは手をつないで行ったもの。お前行くか、と言うから、行ってみよう

かといつて。

小池 ソ連崩壊後でしたけれど、私はソ連大使館のある狸穴の前の外交史料館にいましたから入ったことがあるんですけど、壁も厚いですし、ほんとうに威圧感がある建物ですね。

松野 私はあそこに三人ぐらいで行くかと言って、行ってみた。なんとか記念日ですよ。社会党や共産党はたくさん来ている。保守党ももちろんいましたけれど。手をつないで早く帰ろうや、といって帰った。

佐道 朝鮮戦争で米韓軍が釜山まで追いやられて、そのあとマッカーサーが仁川上陸をやって一度盛り返しますが「一九五〇年九月」、共産中国が入って来て、また状態がずいぶん変わります。朝鮮戦争の前年に、あの大陸に共産中国ができるわけですね。今度は北朝鮮と米軍の戦いではなくて、共産中国がまさに相手として出て来たわけです。中国が入ってきたということについてはいかがでしたか。

松野 あまり興味がなかった。不思議に中国というものを軽視していましたね。ソ連は怖かったけれど。それは中国には日本は勝っていましたからね（一同笑い）。そうでしょう。ソ連には脅威を感じる。中国にはあまり感じない。われわれは中国には勝ったという意識があるし、そんなに強い軍隊だと思っていない。

■ 公職追放解除後

伊藤 政務次官に就任なさった前後から、だんだん追放解除の問題が出てきますね。お父さんも解除になりますね「一九五一年八月」。政界の様子が少し変わってくるんじゃないかなという気がしますが、それはどんなふうにお感じでしたか。

松野 それは非常に強く感じました。私のおやじもそうだし、鳩山さんも復活する。それは自明の理で、ほとんど予想されるメンバーがどんどん出ていきますからね。その人たちの動きも活発になってきました。吉田さんも非常に脅威を感じて、鳩山・吉田の会談もその後に行なわれますね。それで鳩山さんが自由党を返せ、というように話がぼつぼつ出ている。吉田さんも顔をひん曲げて、「鳩山がわがままなことばかり言っている」とかいう。いろいろ政界が、追放解除に向かつて新しい足音が聞えてきましたね。三木武吉とか。伊藤 先生のような若手がおられるところに、ベテランの政治家がワツと上の方に戻ってくるわけですね。

松野 戻ってくる。だからみんな脅威を感じて、その大きな足で踏みつぶされないようにするのが必要でしたね。私も親子で選挙をやるうやといつて、中選挙区で五人ですから、親子で選挙をやってもいいよというぐらいの覚悟をしていた。おやじが、「まあおまえたち若い者が数が多いからな、おれは参議院に回ろう」と言つて、参議院に回った。どこでも同じことですね。そうやってずいぶん顔ぶれが替わりましたね。

伊藤 いままで地盤を引き継いでいた人が、戻ってきたのでトラブルが起こるといふようなこともだいぶあったんでしょうね。

松野 各選挙区でありましたね。ただ中選挙区ですから、多少余裕があるわけですね。中選挙区は三、四、五人だから。三、四、五に一人帰ってくるだけで、一対一じゃないわけだ。だから多少余裕があるんですね。三人がいて、古い人がひとり出て来るという感じ。あるいは五人の中に四人いて、戦後のが一人入ってくる。余裕があるから、大きな改革にはなつたけれど。

伊藤 復活できない人もいましたね。

松野 できない者もいましたね。

伊藤 お父さんが参議院に回られると、先生も参議院選挙をおやりになるわけですね。

松野 やりました。

伊藤 これは悠々ですか。

松野 まあまあでしたね。それでも、戦前・戦後の断層がありますからね。三割はおやじを知っているけれど、七割は戦後の有権者です。そんなものです。だからどうしても断層がある。しかしおやじを知っていて、その息子の代だから、だいたいそう苦労せずに行きましたね。

伊藤 旧鳩山派の幹部がかなり吉田さんの周辺にくっついたわけですね。それである程度吉田さんの政権が続いた。今度鳩山さんが復帰したときに、その人たちはちよつと去就に迷うところがあるんじゃないですか。

松野 いちばん迷ったのは大野伴睦ですね。もともと鳩山のいちばんの直系だったのが、七年も経つと吉田の政治に染まっていますからね。染まっているし、それを支えてきた男ですからね。だから今さら、といっても、鳩山にも長い友情がある。

その中で、広川弘禪が鳩山と写真を撮ったのが出た。広川弘禪はかつて幹事長を二年もやって、吉田に非常に可愛がられた男が、鳩山が復活した途端でしようね、みんなで音羽の庭で新しい政治の結成式をやった。まだ政党じゃない、鳩山中心の政治をやるうという結成式を十人ぐらいでやったわけだ。河野一郎とか三木武吉とかがいる。その中に広川弘禪が入っていたんだ。その写真が新聞社から出たわけだ。大野伴睦はそこに行っていなかった。広川は鳩山中心の政治の結成式の発起人みたいなところに出たので、さあ吉田さんが機嫌が悪いわけだ。それがスタートでしたね。それが吉田から鳩山への移行のスタートだったな。音羽の庭です。私の写真を記憶しているが、後ろに鳩山さんの家があった。

そんなふう非常に迷った。大野伴睦も真ん中で、今日は吉田、今日は鳩山のところというように、一日ずつ替わっていたでしょうね。しかしほとんどのものが吉田内閣の七年の間に育ったから、池

田、佐藤とかいうのは、もう関係ない。政党员があつちに行ったり、こつちに行ったりしていた。

伊藤 お父さんの場合はどうですか。

松野 私の父も、もう困ったんだ。

伊藤 困ったでしょうね、両方とも親しいわけだから。

松野 どつちですか、どつちですかとやっていました。私の家は泉岳寺の近くだから、たくさん鳩が来るんだ。それで豆をやる。鳩が毎日来る。おやじはそれに豆をやって、「鳩は可愛いね」という。だから気持ちには、鳩の方なんでしょう(笑い)。私もパツと豆をやる。鳩が何十羽も来る。泉岳寺のすぐ近くだから。鳩は可愛いね、ということから、その言葉で、最終的には鳩山でしたね。この頃はほつぽつ吉田には辞めろと言っていたんですね。

伊藤 なんとかうまく禪譲できるように、ということを考えていたんですか。

松野 禪譲できるように、吉田さんに、お前さんやめた方がいいよ。最後の方は、吉田さんも横を向いていた。あの家族は、最後は松野鶴平が嫌いでした。七年前は好きだったけれど、七年後には、苦虫を噛んでいた。

最後に私のおやじが「吉田に」言ったのは、「おまえは鳩山から預かると言ったじゃないか。鳩山が復活するまで『俺は預かる』と俺に言ったじゃないか」「そう、確かにそうだった」「じゃあ返せという言葉もいいじゃないか」「それはそうだ。日本のことを考えると」と言い出した。「日本のことを考えて鳩山じゃいけないのか」「いやそうじゃない。あの政党が悪い。河野一郎と三木武吉、あの連中が悪い。あれが日本を戦争に導いたような政党の幹部がおるじゃないか。鳩山はそうじゃないが、あの連中は良くない。あれを切つてこい。鳩山だけなら受け入れる」というのが最後の吉田さんの言葉だった。

だから私の父が鳩山に、「吉田がこんなことを言っているぞ」と

いったら、鳩山さんが怒って、「馬鹿なことを言うな、あれを切れ、これを切れとそんなこと言えるか。俺の同志は同志だ。吉田の方が悪い。おまえこそ、おまえの仲間を切って俺に返せ」という。それは両方とも激しかった。結局、本心は鳩山に返したいという気があったけれど、戦争犯罪人の連中が復活して、ぞろぞろ鳩山の周りについたのでは、なんのこともならんんじゃないか、というのが吉田理論なんです。一つの理屈がないわけではない。しかし鳩山から見れば、吉田だって戦争前は同じことをしていたじゃないかという。両方で多少感情が入って、それが喧嘩のもとです。だから本心から鳩山・吉田が仲が悪いわけではない。その七年間の経過でそこに溝ができたんでしょね。人間鳩山、人間吉田は、私はちっとも悪くないと思う。その政治の動きと七年間で行なったことが、吉田さんには責任がある。鳩山とはその差があっただけです。

伊藤 ですから、なかなか禅譲といっても難しがるうと思えますし、鳩山さんも自由党に入ったり出たりいろいろやりますね。そのとき松野先生はどうされたんですか。

松野 私は、いつも真真中で困った、困った。しかし吉田で育った政治家ですから。私の父は鳩山と同志の政治家で、私は吉田の秘書官で育った男だから、鳩山さんを尊敬はするけれど、行動は共にできない。それは吉田さんと行動する。体は吉田さん。私は吉田さんの秘書官で長く仕えたんだから。だから鳩山にエールは送っても、塩までは送れないな。それは私ははっきりしている。おやじになると、それが逆でしたね。鳩山が七で吉田が三、私が吉田が七で鳩山が三でしょうね。それはどうしたって、実際体験したものはそっちが強いですよ。この二つが世間では大喧嘩というけれど、大喧嘩ではないんだ。見方が違うんだ。七年間の政治の見方と未来への見方が違う。鳩山は復活したんだから、昔の自由主義を言う。吉田さんは「やっ」と独立したばかりで、日本は容易じゃない。自由主義なんて言っていると狼に食われちゃうぞ。やはり日米安保でしっ

かり守って行け」という感じ。だから「鳩山は子供でわからん」という。

鳩山さんは日本独立をすぐやろうとした、それで追放になったんですからね。あの時は民族主義みたいな感じだった。人気があったんです。日本民族を建て直すんだ、自由主義を守るんだという思想と民族主義が鳩山のスタートだから、熱狂的支持を得た。私も遊説に三回ついていったけれど。

伊藤 誰の遊説に、ですか。

松野 鳩山の。

伊藤 それは後の話ですね。

松野 いや、追放前。日本自由党を作ったとき。鳩山さんの遊説に行くと、驚くほど聴衆が集まる。それで民族と自由主義を唱えるわけだ。そうすると聴衆が沸く。それで占領軍が怖れをなして、これは人氣があり過ぎるというので、鳩山さんの古い書物を引張り出して、それは無理ですよ、これは戦争協力者だと言って、突然鳩山一郎だけ指名追放だから。それで吉田がなったわけですね。その時の鳩山の勢いは大したものだった。私も戦後見ていて、大衆からの風圧を感じるようだった。神田の女学校、共立の講堂が焼け残っていた。日比谷、名古屋、それから熊本も行きました。小さな八百人ぐらいしか入れない焼け残りの芝居小屋に、十重二十重に人が集まるぐらいで、鳩山のブームは素晴らしいものでしたね。それで占領軍が怖れをなした。ことに民族主義者ですからね。日本民族大事、占領軍帰れ、というものだから、それで追放になった。鳩山という人は、その点では戦後の国民の一つのシンボルになったでしょうね。吉田さんはそれを知っていて、口を尖らせて、「鳩山が馬鹿なことを言うから追放になった」と言っていましたけれどね。馬鹿なことをあまり正直に言いきたという。吉田さんも同じ気持ちなんだが表現が違う。吉田さんは占領軍の中で上手にそれを進めしていく。考えは同じだった。「鳩山の馬鹿が、大声で叫ぶからいいな

いんだ」という。「じゃあどうすればいいんですか」「小さい声で言えばいいんだ」という(笑い)。ユーモアたっぷりでしょう。言うことは同じでも、大きな声を出すと隣からうるさいと言われる。小さい声で言えば、隣から言われない。それはまさに吉田さんのユーモアだったな。「隣に占領軍がおるんだから、隣から怒鳴られる。それが鳩山で、あいつは馬鹿正直だから駄目だ。あんな大きな声で言ったら駄目だ」といつていた。

吉田さんと鳩山さんは、両方理解はしているんです。両雄はお互いの立場を理解している。しかしそれは七年という政権があるし、同志というものがあるから、越えられない一線なんだ。二人が超えられないんだ。だから二人だけでなんべんも会ったんです。それはいいんです。会った後が駄目なんだ、音羽に帰つてくると鳩山さんは駄目なんだ。帰つてきて会うのは、河野一郎、三木武吉でしょう。おまえたちは悪い奴だと言われているところに帰つてきているんだから(笑い)。二人はいいんだけど、一步家に帰つてくると、家族会議は駄目なんだ。

伊藤 この前のお話で、広川派というのがありましたね。緒方さんが後で入って来て、緒方派というのがー。

松野 緒方派というのは、石井光次郎さんとか、私もその方に入ってたでしょう。大野伴睦もいましたけれどね。大野伴睦の大野派よりも、緒方派というのはもつと網が大きかったですね。いろいろな派閥がみんな入って、緒方派だったから。

伊藤 そうですか。網の目が粗いわけですね。

松野 網の目が粗い。それで私がいまでも覚えておるけれど、緒方さんは非常に温厚な人徳のある、包容力のある人物でした。古島一雄に会ったときは、古武士というか侍、骨董的な感じだった。緒方に会うと、鳩山、緒方というのは似ていましたね。鳩山の方がよくしゃべった。緒方はあまりしゃべらなかつたな。「そう、それはよかつたね、はあ」というように、人の話をなんでも聞いて、じつと

見るんですね。「そうですか、それは」という。これは誰も、会つていやな印象はなかつたでしょうね。だから緒方という人は惜しかつたな。突然肝不全か何かでね。その前の日に私の父と一緒に鰻を食ひに行ったんです。鰻を食ひに行つて、その翌日に肝不全か何かでした。私の家は近くでしたから、なんべんも家に遊びに来ていた。この人はいまでも尊敬に値しますね。

伊藤 いま派閥にはよく事務所がありますけれど、緒方派にも事務所があつたんでしょうか。

松野 緒方派にはありませんでした。緒方さんは官房長官をしていましたからね。官邸にいつも集まっていましたね。

伊藤 じゃあ、大野派とか広川派は事務所があるんですか。

松野 大野派はありました。焼けたニュージャパンの中に大野派があつたし、大野派は赤坂の待合みたいところが会合場所でした。ね。

伊藤 たまり場みたいな感じですか。

松野 たまり場。夜になるとみんなそこに行つていた。赤坂の料理屋みたいな小さなところで、営業していたかどうか知りません。彼女がいたところだ。

伊藤 林譲治なんていう人は。

松野 林譲治さんも事務所がなくて、自宅でやつていた。

伊藤 あの人はどっちにくつついていたんですか。

松野 あれは鳩山・吉田の中では、体は常に吉田さんの方に行つていましたね。気持ちは鳩山だったかもしれないけれど、吉田さんところから離れませんでしたね。

伊藤 なかなかその点は難しいところですね。

松野 難しいところでしょうね。あの禅譲は、大政奉還じゃないけれど、ただじゃ済まんだつたんでしょうね。やつぱり江戸城明け渡しということになると、いくら勝と西郷がいても庶民は騒ぎますね。なかなか、江戸城みたいには行かなかつたでしょうね。それで

も彰義隊が戦争したぐらいのもので。

伊藤 やっぱり政権というのは戦い取らなければ駄目なんですかね。

松野 政権というのは難しい。個人の自由にはできませんね。

伊藤 重光「葵」さんが改進黨の党首で、吉田さんからの禪譲を狙っているということがありましたから。

松野 その時は幣原「喜重郎」さんがいたんです。重光のほかに幣原がいた。幣原という人が好々爺さんでした。

伊藤 もう相当なお年でしょう。

松野 そう、あの人はどっちにとつても先輩だから。重光も吉田さんも先輩が幣原さんだから。幣原さんが吉田さんを最良してしまいましたね。だから、重光よりも、吉田さんは幣原さんの言うことを聞いていたでしょうね。幣原さんと吉田さんは、サンフランシスコ条約の時「一九五一年九月」は、真剣に二人で力を合わせて、幣原さんは身を捨てて吉田さんに協力したでしょうね。だからあの一派を連れて自民党に入ったんだから。それで名前を自民党にしたんだ。「一九四八年三月」。その中に田中角栄がいたんだ。

伊藤 民自党ですね。

松野 日本自由党を自民党にしたんだ。さすがに吉田さんも礼を尽くして、対等合併ということで名前も変えたんだ。それも偉かったと思う。数から見れば一割ぐらいですね。十五、六名ですからね。こっちは二百名近くいる。それでも対等合併だから平等にする。それで名前も変える。それで日本自由党を自民党にした。その中に田中角栄が入っている。それは当選二回目に合併したんだ。だから昭和二十四年でしようね。それで二回目に、幣原さんの要請で、田中角栄を次の内閣改造で、法務政務次官にした。法務政務次官にしたところが、石炭国管で逮捕された。その時、第三回目の選挙になったわけだ。だから獄中から立候補届を出したんだ。さすがに告示になったら、釈放になったそうですね。告示まで釈放しなかった。告

示になったら、議員には不逮捕特権がありますからね。不逮捕特権で釈放されて、告示の日から選挙運動を始めて当選してきたんだ。それが第三回目ですね。だから相当なものではあるんです。獄中から立候補したんだから。

■ 厚生族として — 厚生政務次官時代 —

伊藤 お父さんは参議院選挙で当選なさる「一九五三年四月」。そして先生は衆議院議員ですね。それで議員会館はまだなかったんですか。

松野 議員会館はその頃はありました。

伊藤 いまの建物ですか。

松野 いや、バラックで、木造の二階建て。それで向こうは参議院ですからね。ほとんどおやじは会館は使いませんでしたからね。自宅でしたからね。会館は秘書がおるだけで、自宅でしたからね。

伊藤 その頃の会館というのは相当ひどかったですか。

松野 木造の二階建て。

伊藤 皆さんにお聞きすると、がたがたでー。

松野 がたがたで、隣の部屋の声が聞えるぐらいです。大きな声のやつは隣に聞える。

伊藤 場所は今のところですか。

松野 いまの場所です。同じ場所です。

伊藤 そのほかにもあちこちにあったようですね。

松野 尾崎記念館の方に参議院の宿舍があつて、今のところは衆議院の宿舍。二階建てですから部屋が足りないんです。

伊藤 上で暴れると下に音が聞えるね。

佐道 やはり利用せざるを得ないわけですか。

松野 利用しないわけにはいかない。だから利用していましたね。

伊藤 ところで、政務次官というのはどんな存在ですか。

松野 政務次官のときは、橋本龍伍が厚生大臣だ。政務次官というのは、前が秘書官室、隣が厚生大臣室、政務次官はその廊下を隔てた反対側だ。そこに年中、麻布の生徒が来ている。息子だ。それが橋本龍太郎です。大臣の橋本龍伍のところに、年中麻布の制服を着て、黒ボタンで、役所に来ていた。

佐道 そんな頃からもう出入りをしていたんですか。

松野 出入りしていた。

伊藤 政治見習いをやっていたのかな。

松野 秘書官なんかと話をしたり、役所の勉強をしたりしてましたね。そこで「橋本龍太郎は」厚生行政が詳しいんだ。

佐道 その頃から勉強していればそうでしょうね。

松野 趣味なんだ。習わぬ経を読むだ。それで私は麻布の学生の中から知っているわけだ。私が政務次官だった。

佐道 話をされることもー。

松野 もちろんあります。年中来ていましたから。

伊藤 政務次官なんていうのは盲腸だなんていわれるところがありますが、やっぱりそうなんですか。

松野 それに近いですね。政務次官はなんだというと、大臣が委嘱したときは、政務次官は大臣の職務ができる。委嘱しなければ何もないんだ。

伊藤 決裁書類なんかは回ってこないわけですか。

松野 回ってきます。序列でいうと、大臣、政務次官、事務次官ということですね。ただし、政務次官は大臣の命令を受けたときしか権限がない。事務次官はちゃんと職務権限があるわけですね。政務次官は何もないんです。大臣が委嘱したことに関してのみ。これは政務次官に任せるといったら、政務次官が役所に命令できるわけだ。だけど政務次官に固有の職務権限はないんだ。大臣の命を受けたときだけだ。だから何もなければ何もない。大臣が政務次官にこ

れをやらせると言ったとき初めて、そのことについて権限ができて、局長を指示監督する権限が生まれるわけだ。しなければ何もできない。直接指示監督はできない。では何かというと、大臣の予備軍という意味で、役所ではまあ敬意を表するんでしょうね。

伊藤 いちおういろいろな書類は回ってくるわけですね。

松野 それは回ってきます。

伊藤 そうすると勉強はできる。

松野 勉強はできます。それも、「これは政務次官に見せておけ」と大臣が言わなければ来ないんだ。

伊藤 そうなんですか。

松野 大臣が決めて、「政務次官に見せておけよ」といえば、みんな見せておく。「政務次官はいらないよ」といえば、来ないんだ。実に政務次官という職務は何もないけれど、大臣の命を受ける。だから、大臣が大事にすれば大臣と同じ。だから橋本龍伍は、「政務次官に見せておけよ」と言ったと思うんだ。だからみんな来たわけだ。そういう立場なんだ。あるようでない、ないようであるんです。

伊藤 それで、厚生省の局長クラスの人たちは、いろいろな話をしたりしに来るわけですか。

松野 それは呼ばれます。権限はないから、向こうから説明するということは少ないですね。

伊藤 こちらから言えば、来て説明をするんですね。

松野 事務次官と大臣に説明すればいいので、政務次官は盲腸と言えは盲腸だけれど、呼ばれます。

伊藤 省内の定期的な会合はどうですか。

松野 省議だけは出ます。

伊藤 そうすると、重要な案件はいま何があって、どうなっているかというところは完全にわかるわけですね。

松野 それはわかります。大臣の省議には必ず出ます。だから聞いてはおるわけだ。

佐道 国会ではどうなんでしょうか。

松野 国会も、特に「大臣が多忙のため政務次官でお願いします」といつて、委員が承知すれば、それでいいですね。大臣の特命がない限り、政務次官は盲腸なんだ。

伊藤 国会でもそうなんです。

松野 国会でもそう。

伊藤 政府委員にはー。

松野 なりません。

佐道 出なければいけないという義務はないんですか。

松野 義務はない。

伊藤 ないんですか。

松野 ないです。また呼ばれもしない。たしか政府委員はないと思います。いや、政務次官は政府委員にはなっているわけだ。なっているが、呼ばれない。

伊藤 答弁はー。

松野 答弁はできる。こちら側に座れるのが政府委員ですから、政務次官も座れるんだから、政府委員にはなっているんです。でもお呼びがないんです。でも委員会で急ぐときには、「政務次官をお願いします」といつて、委員が承知すればそれでいいですね。それは提案理由を読むだけだ。質疑じゃないんです。質疑は大臣じゃないと承知しません。

伊藤 それは質問者の方が、ですか。

松野 質問者の方が、ですね。ただ提案理由だけ、お経を読むだけならいいだろうということで、提案理由は政務次官で了承してくれる委員会がたくさんあります。重要法案でなければ、なんとかの一部を改正する法律案で、五、六条の但し書きだけを直すような法案がたくさんあるんですね。それは政務次官で了承されますね。

伊藤 先生が厚生政務次官の時に、厚生省の大きな問題というのは何だったんですか。

松野 医療。医師会。健康保険組合の医療単価。

伊藤 単価引き上げですか。

松野 単価引き上げ。あの時はたしか、大蔵大臣が池田勇人、厚生大臣が橋本龍伍、それがいちばん大きかった。たしか健康保険は単価制になっていきますからね。一点がいくらかというのが問題なんだ。医師会は確か、一点十四円ぐらいで要求した。政府の方は予算がないわけだ。

伊藤 組合の方もあってはいい。

松野 健康保険組合もあります。

伊藤 それは上げてもらっては困ると。

松野 上げてもらっては困る。医師会が一点十四円か十六円と言ったでしょうね。健康保険組合は上げてもらっては困る。

伊藤 政府もお金を出すわけですからね。

松野 それは何ヶ月もやっている。その時にいまでも覚えているが、一点単価を十四円から十二円にしたわけだ。その時初めて、二八%の所得控除というのをやったんです。

伊藤 医師優遇税制ですか。

松野 ええ。それをやったのが池田勇人なんだ。私はわからなかった。医師会のいう十四円というのは、十二円五十銭で十四円になるんだと言われたんだ。どうしてだ、と言ったら、所得控除を二八%やると、医師会の要求の十四円になるんだから、十二円五十銭でいいんだ。あとの一元五十銭は、所得控除で、税法特例。それで私は初めて知ったんだ。そんなことを考え出したのが池田勇人だ。私はその時政務次官で初めて知った。池田というのは、まるで法令を自由に使う。その後二十年ぐらいつつと続いた医師の所得控除二八%は、そのとき決まったんだ。十二円五十銭で間違いない。

伊藤 医師会というの強い組織ですね。

松野 強い。

伊藤 これは厚生省にとつては鬼門ですね。

松野 政治にも鬼門。政治家も鬼門。地方の医師会の反対を受けたら、保守党の政治家は上がらない。医師会は強いですよ。

伊藤 先生の場合は、医師会は――。

松野 私だって医師会は怖いですよ。医師会全部ではありませんよ。私を支持する医者は、個人的に熊本県内の三分の一ぐらいは私でしょうね。あとは各代議士についている。

伊藤 医者というのも政治に関わるわけですね。

松野 いまでも病院一つなら、患者と看護婦とか数えてください。四百人ぐらいいます。

伊藤 患者も関係あるんですか。

松野 お医者さんがこの人がいいよと言えよ。

佐道 命を握っているから、強いですね。

松野 それでお医者さんの診療室にポスターを出してくれるんです。

佐道 それは選挙違反にはならないですか。

松野 いやいや、外に見えないからいいんだ。街頭じゃなければいいんだ。診療室、個室だから。選挙はこれこれ、と言えよいいんだから。選挙はこの人だよと言えよ。それはもう大変なものだ。

伊藤 お医者さんは政治が好きなのがたくさんいるんでしょう。

松野 好きなんだ。

伊藤 お医者さんから代議士になっている人もいますからね。

松野 たくさんいる。いまは少なくなつたけれど、昔は多かつた。金は持っているし、宣伝はする。参議院には必ず医師会から出ている。武見「太郎」の息子「敬三」だつてね。いまでもそうです。自民党で医師会の力は強い。これ「病院一つ」が四百といつても、それは現在の四百で、家族を入れて、もつと大事なのは、昔入院した人に全部手紙を出してくれるんだ。

伊藤 そうですか。全部アドレスがわかるんだ。

松野 最近病気はどうか、と言えよいい(笑い)。病院で書いてもらえば大変だ。だから四百が二千票に響くでしょう。

佐道 以前に比べれば、いまは――。

松野 いまはたいぶ変わった。患者の方が医者を選ぶようになったから。昔は医者が少ないから診てもらう方だ。いまは医者が多くなつて、病院を選べるんだから。あの頃は選べるものですか。集票力はいまは四分の一でしょう、昔は四倍あつたでしょうね。

伊藤 先生がむかし書いたものの中に簡易水道の問題があります。これがどういうことですか。

松野 その時に、環境部長というのが厚生省にいたわけだ。あそこは楠本「欣史」という男がいる。それが私の政務次官のところに、年中遊びに来るんだ。遊びというか、職務報告に来る。

伊藤 それは狙いがあるわけだ(笑い)。

松野 予算の時に一所懸命来る。簡易水道というのは、辺鄙なところで、水が悪いところで、それを簡単に作れば、非常に功績になると。

伊藤 簡易水道というのは、どういうものですか。

松野 一つの部落に管を通して、各戸に分けてやる。

伊藤 元はどうなつていんですか。

松野 元は、山の上の水源から引つ張つてくるだけですよ。樋で引つ張つてくる。それをもうちょつと近代化した程度だ。水源まで近くにあるということが前提。水源が百メートルか二百メートル以内にあるということが前提。それで上から電気もかけずに自然に流れてくるのが条件なんだ。

伊藤 水圧で下がってくるんですね。

松野 そういうものを条件にした場所が、日本には何千ヶ所あるというんだ。

伊藤 そんなにあるんですか。

松野 いや、そういうふうには部長が言うんです。それで、わずかな

金がないためにみんながそれを引けないで苦勞している、これは厚生省として一番いい事業だ、という。

伊藤 それは厚生省の管轄の事業なんですか。

松野 衛生。下水は建設省です。上水も建設省。しかしいまの簡易水道だけは、ぜひ衛生研究のために厚生省でやりたい。私のところに毎日来て口説かれたんです。それを橋本龍伍に言ったら、「君が努力するならいいよ、俺は忙しいから」と言われた。そこで池田勇人のところに私が日参したわけだ。それで池田勇人が「松野、なんで来たんだ」という。「今度厚生政務次官に」「それは知っている。なんで来たんだ」「実はこういうわけで、こういうわけで、とにかく新規予算だから入れてくれ、入れてくれ」と、朝晩四日ぐらい行っただでしょうかね。池田勇人の信濃町に。

伊藤 お宅に、ですか。

松野 自宅に。最後に、「よし予算だけはつけてやる」と言った。「ありがとうございます」と。確か二億ぐらいの予算でした。

小池 当時の二億というのは大きいですね。

松野 二億だと、それを四倍にすると八億になる。一ヶ所が八百万から一千万だと、五十、六十。各県に一本ずつぐらいできる。その予算を新規予算でもらったから、驚いた。それがずっと続きましたね。はじめ私は二億円の予算だった。それが四倍になる。県で補助金、町村で補助金、自己負担を入れると四倍に膨れる。八億ぐらいになる。一ヶ所が一千万ずつだと、八十本ぐらいできるわけだ。各県に一ヶ所か二ヶ所できるわけだ。そこでまず私は選挙区に一ヶ所つくった。いまでもそれが残っています。それが初めての私の政務次官としての働きです。

省内では驚いたんです。予算にないのがついてきたから。要するに、省議に上がっていないんだ。

伊藤 そういうことがあるんですか。

松野 あるんです。省議でつぶされたやつだ。上がっていないわけ

ではないんだ。

佐道 それは驚いたでしょうね。なんでこれが、と思いますから。

松野 省議でも、そんなものはとても忙しくて駄目だと。大きな予算ばかりやっているから。省議でつぶされたものが復活したから、厚生省としても反対ではないけれど。橋本も、「それはいいことだからいい、返すことはないじゃないか」と言っていた(笑)。省議の事務次官たちは、他のがつかないでこれがついたといって渋い顔をしているわけ。橋本龍伍は「いいじゃないか、ついたものは返すことはないんだ」という。

それで私が政務次官として池田に借りができたわけ。池田の家に行ったのもそれが初めてです。信濃町に家に行くと、秘書で出て来たのが大平正芳だ。秘書官だ、まだ代議士じゃないから、秘書官で玄関で大きな声で「やあ」と言うんだ。「松野さん、なんで来たんですか。まあ、上がりなさい、上がりなさい」と言って入れてくれて、奥さんが出て来る。奥さんも腰の低い人でした。大平が玄関でやあ上がりなさいと言ったし、奥さんは私が上がったらすぐに靴を揃えてくれた。それが印象に残っていますね。私の靴をすぐに直してくれた。大平は、「やあ、松野さん上がりなさい」と言って、仁王立ちになっていた。日本式の家でしたけれどね。信濃町では、そんな印象が残っていますね。だから奥さんは非常に庶民的な人でしたね。

伊藤 それは厚生省の中で有名になったでしょうね。

佐道 その環境部長さんはどうなったんですか。

伊藤 環境部長はもう鼻高々です。省内からは、あいつ横道しやがって、と思われたでしょう(笑)。

佐道 順調にご出世なさったわけではないんですか。

松野 あんまり出世しませんでしたね。次官まで行かなかった。局長ぐらいでやめちゃった。楠本っていまでも覚えてますよ。私はすっかり洗脳された。それで「池田の家に行つて来る」と橋本龍伍

に言ったら、「ああいいよ、行ってきて取れば」という。取れると思っていなかったんだ。どうせ、運動だけだと思つて橋本龍伍も軽視していた。大臣折衝に入つていなかったんだからね。

伊藤 そのほかにも不遇な子供たちの職業改善というのはどういうことですか。

松野 不遇の子供の職業改善というのも、厚生省の児童局か何かの役人が来て、予算獲得だったんだ。

伊藤 何ですか。この不遇な子供たちの職業改善というのは。

松野 不遇な子供におやつか何かをやつて、という児童局でした。それも予算獲得のために、私がどこかに連れて行かれて、「松野政務次官、お願いします」なんて書いた看板が出ていて、そこで子供が並んで、私はそこで握手する写真を撮つて、それを社会部に載せさせた。それは予算獲得だった。その楠本が成功したから。

佐道 それは孤児とか、そういう人ですか。

松野 要するに職業訓練所には入れない不自由な人。一般の職業訓練ができない、特殊職業訓練をしている子供に職業を教えるというわけだ。だから不遇の人の、特別な職業訓練をしようじゃないかということだ。

伊藤 身体不自由の方ですね。

松野 身体不自由の子供だ。それはいま名前が変わつていて、しょう。そういうところに連れて行かれました。政務次官はそれでだいぶ使われた。

佐道 いや、使える政務次官が来たといつて、喜んだんじゃないですか。

松野 私の能力では、使われたんだ。役人の方がうんと上手（うわて）なんだ。

伊藤 それはそうでしょうけれど、役人だつて、役に立たない政務次官に頼むわけがないでしょう。

松野 そのとき、小沢辰男なんかが局長でいました。病院局長だつ

た。

伊藤 そうすると、政界にある程度人脈がある、と。

松野 あると見たんでしょね。それから、私の名前のおやじの名前があつたからでしょうね。

伊藤 ただ政務次官になつただけでは頼めなですよ。

松野 役人は使い方が上手（じょうず）。

伊藤 いや、使われ方も上手にならないと駄目なんですよ。

松野 本当に上手。いま政治主導とか言つてはいるけれど、私は裏でみんな使われていると思ひますよ。政治家を使つてはいるんだ。それはできませんよ。長年やつている者の専門知識は、政治家が外から見ても無理。いま政治主導、政治主導と言つても、全部、役人が政治家を使つてはいるんだ。亀井がいくら威張つたつて、私から言えば、その材料は役所から来ているんだもの。建設省から来るのか、大蔵省から来るのかだけです。

伊藤 やはり、アメリカの政治家みたいにシンクタンクがあるわけじゃないですか。

松野 ないんだ。かねてから勉強し、思想を持つてはいる政治家が少ないんだ。その「持つてはいる」代表が小泉純一郎ですよ。彼は郵政民営化ということの基本に政治家として出ているんだ。こんなのはいいないんだ。自分の柱を立てた政治家がいますか。残念だけれど、あまりいいない。

伊藤 あの人は、それだけ。

松野 橋本龍伍は遺家族援護法だけ。しかし、ほかはゼロじゃないですよ。柱があるだけ偉いと思うんだ。橋本龍伍も小泉純一郎も、私は面白いと言ふんだ。ほかはゼロじゃないですからね。一本旗が立つてはいる。そういう政治家がいないんだ。

佐道 一本も立つていないんですね。

松野 一本も立つていないんだ。そこが寂しいところだ。ことに総理大臣だ。総理大臣になるなら旗を立てろ、というんだ。

小池 でも森さんを擁護するわけじゃないですけど、文教族が長かったですから、教育基本法の改正等は、言い出しましたけれどもね。

松野 総裁選挙をやった者とやらない者の差が出ているな。小淵というのは何もなかったが、総裁選挙をやるときには旗が立った。だから総裁選挙をやったものは、一応小さい旗でも立てているんだ。森の欠点は、総裁選挙をしないから、旗なしなんだ。

伊藤 もともと準備がないわけだから。

松野 それがこの不人気最大の理由だ。簡単でも総裁選挙をやって、加藤でもいいから、競争すればいい。総裁選挙をやれば旗を立てないわけにはいかない。そうすれば小さい旗でも立ったんだ。そこが私は、政治家に旗がないのが寂しい。だから橋本龍伍は遺家族援護、小泉は民営化、田中角栄は列島改造、要するに土建業だ、公共事業。立ってればいい。それだけでなくて、そのほかの者は別として、いまの政治家に旗がないのが寂しい。もちろん旗を立てれば抵抗がありますよ。抵抗はあるけれど、それが政治ではないか。なんのために自分は代議士になるか旗を立てなきゃ。地方公共のためになりませんか、人類平和のためになりませんか言ったって、それは宗教家じゃないんだからね。そこを私は最近、特に感じる。

佐道 とところで国会の改革で大臣の下に副大臣ができたり、政府委員が廃止になって、大臣とか副大臣がみずから国会で答えなければいけないことになりましたが、あの成り行きはどうなりますか。

松野 まあ、五年かかるでしょうね。五年間はあの制度は動かずでしょうね。それは、今度の政務官というんですか、大臣、副大臣、政務官ですね。政務官を見ていると、だいたい当該委員から選んでいますね。農林委員会から農林省、当該委員から選んでいるから、全然の素人じゃないことはわかる。副大臣もだいたい当該委員会にいたものだ。そのへんは苦労したと思う。しかし委員会で質問する

知識は果たして自分だろうか。役人から原稿をもらっているんじゃないかという気がする。

伊藤 答弁するときも、役人から原稿をもらって答弁する。

松野 自分のものをどれだけ持つているか。だから私が五年かかるというのは、まだ五年ぐらい勉強しないと、ものにならないでしょうね。

伊藤 でも昔の政治家で、それができた人がいるわけでしょう。

松野 昔はやはり旗を持っていたんだ。旗を持っている者が質問したり答弁していた。それ以外の者はしなかった。いまは順練りにやるものだから、順練りに回ってくるんです。知識がない者でもしやべらなければいけない。昔は当選してから何年間も一言もしやべらない人がたくさんいたんだ。その代わり、有能な人がどんどんやつてくれたわけだ。いまはそうじゃないです。平等にやるから、有能な人も三時間、有能じゃない人も三時間ずつ割り当てる。この三時間は何を質問するかというと、役人を呼んで聞くしかない。そうすると結局、役人の知識の範囲内でやる。それを打破する人間は少ないですね。

伊藤 まあ打破できるというか。

松野 このあいだ見ていたら、大臣がみんな後ろでこそこそ、耳打ちされているでしょう。そうすると、答えて次の質問をされるとまた帰ってきて、また次に行く。また次に来ると、もう最後はわからなくなっちゃう。自分の言っていることがわからなくなるんです。なんべんも言い直しているよね。そういう混乱が各所に見られる。

伊藤 でも今度は覚悟は決まるでしょう。

松野 今度は覚悟は決まるでしょうね。しかし、今度の制度は、まあ五年はかかるでしょうね。だいたい各省の合併の問題が大変なものだ。銀行合併でも大変ですよ。それはなんとか系、なんとか系と違って、支店長が交替交替になるとか、人事の一致がなかなかで

きないんだ。まして役所仕事になると、まず行政の混乱が五年間あって、その上に政務官が乗っているから。私が五年と言ったのは、各省の行政の混乱が五年間あると思う。だから上に立っているものも五年かかる。機構いじりというのは容易じゃないですよ。それが馴染むまでは。これは橋本龍太郎が専門でしよければね。

■政治家と新聞記者の関係

伊藤 政治家と新聞記者というのはずいぶんいろいろな関係を取り結ぶわけですけど、どれぐらいの時から新聞記者とのつき合いが始まるんですか。

松野 政務次官クラスからでしょうね。政務次官の時に役所の記者クラブとまず会いますからね。政務次官から私は新聞記者とつき合うようになった、それで見ていると、ときどきわからん時に呼んで聞くんですよ、政務次官は暇だから。そうすると、役所のこと、は役人だが、世間のことは新聞記者に聞けばわかるんだ。聞くと、そのあいだに自然に「関係が」できるんでしょうね。大臣だったらほとんどできます。省担当の新聞記者とのつながり。労働省の時は、竹内黎一がいましたよ。青森から代議士になった。毎日の記者で年中労働省に来ていた。その後ずっと、いつまでもつき合っていましたね。

伊藤 この厚生省の時はどうですか。

松野 厚生省の時は、ほとんど今、いませぬね。時代が違うから。

伊藤 でも、かなりいい新聞記者とのつき合いができましたか。

松野 わりにみんな素直でしたね。だからよく記者クラブには遊びに行きましたね。記者クラブで私はよく麻雀をしていたな。

伊藤 麻雀は前からおやりですか。

松野 私は学生の時から強かったからね。今でも老人麻雀でボケ

防止ですよ。週に一回ずつぐらい、誰か来てくれますね。昨日も夜六人ぐらい慰労に来てくれた。

伊藤 新聞記者もその頃は麻雀ですか。

松野 麻雀が多かったですね。今でもそのままつき合っている人がいますね。

伊藤 今はあまり麻雀というのは流行らないですね。

松野 そうですか。

小池 学生はもう全然ー。

松野 えっ、いま何をやっているの？

小池 学生はカラオケはしますけれど、麻雀はしませんね。

伊藤 だから麻雀屋はずいぶん減ったね。

小池 広島大学の近くに麻雀屋は二軒しかありません。あんなマンモス大学で二軒だけです。それも学生はほとんど行っていないですね。

佐道 早稲田の近辺でもほとんどつぶれていますね。

松野 だから頭が悪くなったんだ(一同笑い)。

小池 だから友達つきあいなんかもしなくなりましたね。人の顔を見て物事を判断するなんていうことは麻雀で覚えるわけですが、そういうことがないですね。

松野 慶應のあの狭いところへ、三田から慶應の大学まで行く間に六軒あった。どこかで引つかかるんだ。

佐道 今はもう探す方が難しいですね。

小池 三田等も少なくなりましたね。

松野 私たちの時代の者はみんな麻雀が好きなんだ。だから新聞記者も好きなんだ。代議士も好きなんだ。だから六十、七十ぐらいから上は麻雀が好きですね。記者クラブでも麻雀だった。

伊藤 麻雀は人間つきあいのかなり大きな部分になっているんですね。

松野

大きな部分ですね。

伊藤 あとゴルフとかありますけれど。

松野 ゴルフは昼間できないし、時間がかかるんですよ。麻雀はその日にできる。ゴルフは一日つぶさなければいかん。それに、前から予定していなければいけない。麻雀はその日にできる。やっぱ新聞記者とか代議士のつき合いは麻雀がいちばん多い。今でも麻雀づきあいがたくさんいますね。平沼なんて強いですよ。亀井も強いですよ。あと、ツカハラシンの塚原「俊平」も強い。麻生も強い。

伊藤 その厚生省の頃は、どこで麻雀をやっていたんですか。

松野 記者クラブです。記者クラブにみんな麻雀台が置いてあったんだ。いま、ないことがおかしいですよ。記者クラブには必ず置いてあった。

佐道 記者クラブの部屋にはいるとジャラジャラ音がするんですか。

松野 それが常識でした。それから簡単な麻雀で、一回、一回で勝負なんです。すぐ立てるように。二時間も三時間も shouldn't。五分で急いで立てるように。立つと次のやつが入るように。一回ごとに終わりになる。上がれば、それでゲーム終わり。また次。また上がれば終わり。だから東西南北なんかないんだ。一回で終わり。それで払うやつは払う、取るやつは取って終わり。

伊藤 場はないわけだ。

松野 そういう麻雀をしていた。だからいつ入ったって、いつ出たっていいんです。だから一回、一回。上がればそれで終わり。また次をやつて、上がれば終わり。それが新聞記者麻雀。

伊藤 新聞記者からは情報はずいぶん入るわけですか。

松野 新聞記者は必要ですね。新聞記者がないと政治家は動けない。もちろん、いろいろな報道がありますよ。今でもそうですよ、新聞記者のニュースが入らないと私たちはめくらだ。一つのガイドですね。新聞がないと、今日なんかもまるで一日なんだかわからなくなっちゃう。今日は休刊日でしょう。だから政治家と新聞は昔

から。

昔の新聞記者は権威があった。それだけに、政治家と対等な知識と権威を持っていた。古島「一雄」さんなんてそうでしょう。それから朝日の佐々「弘雄」。新聞記者と政治家は対等な権威を持っていた。対等な論戦ができる。それが新聞記者でした。数も少なかった。今の新聞記者の十分の一でしょうね。

佐道 今は各社とも、厚生省の記者クラブでも、一年か二年ぐらいぐるぐる動かしていますが、先生が政務次官であられた頃は、専門で長くやっている人がほとんどでしたか。

松野 だいたい経済部が来ていましたね。お医者さん関係とか。政治部は少ししかいないですよ。あとは業界の経済部。

伊藤 じゃあ、お役人から聞けないような情報もそこで聞けるんですね。

松野 医師会の動きとか、団結とか、医師会がどんな運動をするとか、健康組合は誰がボスだとか、誰がこう言っていますよ、というような話は、新聞記者に聞かなければわからない。

佐道 それは重要な情報ですね。

松野 重要な情報だ。だいたいガセネタはありませんからね。そんなものを作っちゃべる新聞記者もいない。新聞記者が話している、ポツツと言った言葉が耳にはいる。新聞がないと政治家はめくらで、道案内のない山登りのようで、それは成功しない。昔の新聞記者は天下国家を動かしていましたね。政治家以上の権威と知識を持っていた。対等だった。対等な論戦と勉強をしていた。うっかりすると、新聞記者は勉強の相手だったかもしれない。数は少なかったけれど。その他のニュース取りは社会面のニュースであつて、政治面とか、一面は政治家と対等な政治記者でした。

伊藤 政務次官のときは、「大臣は」最初は橋本さんだったでしょう。それから吉武「恵市」さんになったでしょう。このまえ橋本さんの話を伺ったんですが、吉武さんというのはどんな方だった

しよう。

松野 吉武というのは、官僚出でしたね。吉武と橋本は、吉武の方がちよつと歳が多かったかもしれない。これも内務官僚でしたね。おとなしい、角のない男でした。特徴がなかった。橋本は角があつたけれど、特徴があつた。吉武は円満だけに特徴がなかった。やつぱり内務省出でしょうね。

伊藤 橋本さんなんかは派閥でいうとどうということになるんですか。

松野 橋本は、初めは佐藤のあとですかね。吉田内閣で、佐藤が官房長官、橋本が官房副長官だつた。二人一緒に出たんだ。でもその時は代議士じゃないわけだ。役人の官房長官が佐藤栄作、役人の官房副長官が大蔵省から行ったのが橋本龍伍。片一方の官房長官も閣僚じゃなかった。役人の長だから、運輸省事務次官から官房長官になつたわけだ。橋本は大蔵省の部長から官房副長官になつた。吉田内閣の時。それから二人が一緒に衆議院に出たんだ。それで二人とも当選した。だから佐藤と親しかつたでしょうね。橋本はなかなか理屈の多い男だつた。

■政調副会長時代と造船疑獄

伊藤 厚生政務次官をおやめになつた後は――。

松野 政調副会長をしました。

伊藤 政調の副会長というのは何人ぐらいいるんですか。

松野 六人ぐらいいます。

伊藤 それぞれ分担があるんですか。

松野 分担がありますね。会議をするときは一緒ですけれどね。

伊藤 先生は何の分担ですか。

松野 私は農林関係でした。この部会でも一緒に会議をしますからね。たしか池田勇人が政調副会長だつたと思います。

伊藤 今の政調会はずごく権威があるみたいですが、当時はどうですか。

松野 当時もありましたよ。当時は、政調会・池田勇人が権威があつた。政調副会長は権威がないかもしれないけれど、池田勇人が権威があつた。その時の大蔵大臣は誰だつたかな、全部池田が決めていましたからね。あの時の大臣は誰だつたかな「内閣の名簿を調べ」。池田が大蔵大臣をやめて、政調副会長になつていたはずだ。向井「忠晴」かな、小笠原三九郎だ。小笠原三九郎が大蔵大臣でしたから、ほとんど大蔵省の予算の細かいことまで、政調副会長の池田が全部やつていましたね。だから大蔵大臣は何をしているらうと思ふうぐらゐ、全部池田がやつていた。そのときは小笠原三九郎。わりと人のいい人でした、それでも何も文句を言わなかつた。政調副会長の人によつて、政調会が強いつきと弱いつきがあるんだ。組織よりもやつぱり人間だな。

佐道 池田さんの、対大蔵省というか予算への影響力は絶大だつたということですか。

松野 ものすごいものがあつた。また知恵があつた。それを実行した。シャープ勧告に一兆予算を積んだからね。一兆ですよ。今でいえば予算を半分にしろというんだから。それをやる大蔵大臣だから。そのときですよ、大蔵大臣罷免要求を党内から出して、吉田さんのところに持つていったのは、それを田中角栄がサツサツと書いたわけだ。それに署名していったわけだ。

佐道 最初の話ですね。

松野 そう。池田をクビにしろといつたら、「吉田に」なぜ俺に辞めろと言わないんだ、と言われて困つたんです。それは一兆円予算のとき。あれは大変なものだつた。それが政治でしょうね。膨張したものを圧縮するというのは大変なものですよ。やらなければ駄目

なんだ。一兆の予算をやったから、悪性インフレが収まったんでしょね。悪性インフレで貨幣価値がなくなってきたからね。貨幣なんていうのはあるようでないようで、通貨の価値がゼロだった。そのときに一兆円予算で引き締めたから、金の価値が出てきた。あれをいっぺんもやらないと締まらないでしょうね。たがを締めなきゃ。いま、締めるやつがないんだから。たがが緩みっぱなしで、水が漏れっぱなしだ。まさに私はあの一兆円予算、シャウブ勧告、戦前の補助金を全部打ち切り。あれが財政革命だったね。

佐道 そうすると、吉田さんのものでは、池田・佐藤とよく言われますが、池田さんの方がー。

松野 財政は池田、党は佐藤だった。党をまとめるには佐藤だ。財政・行政は池田。この両腕を飛車角みたいに使いましたね。私は、戦後の復興の基本は、占領中のあの悪性インフレを断ち切ったのは、一兆円予算と政治だと思えますね。今はまた崩壊しつつある。戦争に敗れて崩壊ならわかるけれど、自分で居食いして国債発行で敗れたら困るな。

伊藤 それで昭和二十九年に鳩山派と改進黨が合わさって、日本民主党になるわけですね。最終的には吉田さんは、総選挙をやるか解散するかということになるわけですが、そのへんの動きは何かご記憶がありますか。

松野 たいへんあります。その前に、造船疑獄事件「一九五四年二月〜四月」というのがありましたね。吉田内閣の時に。それが私は今でもー。

伊藤 そうですか。あの犬養「健」さんの。

松野 その時には、私も身の引き締まるような、寒いときだと感じましたね。それは日に日に状況が悪化してくるんだ。佐藤身辺に。初めは誰かのメモか何かが出て、それが次々に出て来て、疑獄事件になったんだ。もちろん逮捕されたり何かしていた。一番最後には、その金が佐藤のところに行っているという。寒いときだったと思

います。十二月か一月の寒いときだけれど、どうなるだろうと思っただ。私のおやじも蒼白な顔をして、夜中遅く出ていくんです。十一時頃、寒いときにマントを着て出ていくんです。一言もいわずに出ていって、二時頃帰ってくるんです。それが三、四日続いたでしょうね。私の家が狭かったから一緒にいましたからね。焼け跡だから「おやじ、どこに行くんだ」と言っても黙っている。そのうち、吉田さんから電話がかかってきたからわかったんだ。吉田さんのところに行っていたんでしよう。新聞記者もおるし、出口も別のところ、用心して、安斉という秘書官が待っているんだ。毎日、吉田も心配して。

それでいろいろ、旧検事正上がりを呼んで聞いているわけだ。どうしたらいいだろう。弁護士も呼んで聞いている。どうしても良い案がない。最後に出たのが、行政で法務大臣が検事総長を指揮する。検事総長は検事を総括する。ほかの役所は農林大臣は農林省を総括すると書いてある。検察だけは、検事総長だけしか書いてない。検事の指揮命令権は法務大臣にはない。それが司法の独立になっているわけだ。だから検事には、法務大臣の指揮命令権がないんだ。検事総長だけにしかない。他の役所は全部あるわけだ。それで検察の独立ということがある。

さてそこで、検事総長を指揮命令しても、検事総長が検事を指揮命令しなければ何の役にも立たない。それが指揮権発動の一番の問題点だ。もし検事総長にこの捜査をやめると言って、検事総長が検事にそれを命令してくれればいけれど、おそらく検事はいうことをきかないだろう。検事総長だつていうことをきかんよ。言いそうもないことだから。そうすると、検事総長をクビにただけで、事件は終わらないんだ。さあどうするか、それが悩みで、約二週間ぐらい連日協議をしたわけだ。

弁護士上がりの人、検事総長上がりの人、いろいろ考えたけれど、佐藤逮捕となれば、おそらく自民党は崩壊する。崩壊するだけでは

ない。保守政権が革新政党に乗っ取られる。その時の革新というのは容共革新、社会党左派だから。それはとても治安が悪くなる。革命と同じだ。革命戦争だよ。組織は壊れる。それで悩みに悩んで、佐藤をどうしても助けなければならぬ。これが今の焦点だ。そのことで連日。私たちもそばにいて緊張して、言葉も言えない。

それでいろいろ知恵を絞って、知恵を絞って、全部の検事にその事柄を了承させなければいけない。「時局はこういう事態だ、この命令を発したとき、君たちがきかないといえ、現在の日本の既存構造が全部崩れる、革命を覚悟しなければいけない。検事も体制派だろう」といって、要するに全検事の思想が一致するのを、ずっと口説きながら待っていたわけだ。それが漏れたら大変なんだ。一人でも検事の中に謀反人が出たら駄目なんだ。佐藤「藤佐」検事総長まではまず理解をさせ、その次、その次と各個撃破だ。あれが誰の従兄弟だ、あれは誰の何だといつて。そこまでしなければ駄目なんだ。それが漏れたら駄目なんだ。検事総長がそう言ったら、ピシャツと全検事がそれに異議を申し立てないようにする、それが大変なことだったんだ。おそらく戦後最初で、もうできないでしょうね。漏れないということが。漏れたら駄目ですよ。漏れないこと、しかも一致すること。それで指揮権発動「一九五四年四月二十一日」。

犬養健法務大臣はそこまで知らなかったんだから。知らせなかったんだ。知らせたら危なくて。法務大臣にはそのあいだ知らせないんだ。だから法務大臣は「なか川」に行つて遊んでいたわけだ。「なか川」に行つていたらと後から出たでしょう。それは法務大臣に知らせなかったからだ。それで大変だ。最後にできたときに吉田さんが、「おまえはあさつて指揮権発動だ」と二日前に言ったんだ。もう犬養はおつたまげて、即答できないんだ。それで私のおやじが知っていたから、すぐ犬養のところに行つて、「おまえ、今日、吉田から何か命令を受けたか」「受けました」「その命令は一切言えない。おまえはその命令を守るか守らないか」とても自分にはできない」

「できないのなら今日辞表を出せ、今日出せ。吉田はできるやつを今日任命するから。今日出せ。今日なら間に合うから。明日になったらもう駄目だ」。「犬養法相は」その事態の重要さ、緊急さに初めて気づいた。「どうせ今日やめても、指揮権発動してもやめることは間違いないんだから。指揮権発動して辞めるか、指揮権発動を怖れて、今日逃亡して辞めるか、どっちかなんだ。おまえどっちにするか」といって、「おやじさんが犬養法相を」口説いて説明した。「それじゃあ職務遂行して辞める」と言った。吉田さんは二日前に言ったんだから、できないなら明日もつてこいという。その日にやるやつを任命するという。殖田俊吉さんなんかいたわけですからね。殖田俊吉に一日でもやらせて、天下を救わせるといふ腹だった。

その時の約三週間の厳しかったこと。だからその寒さ、冬だったから厳しかったですが、年が明けて一月か二月で寒かった。あの指揮権発動が暴力だとかなんとかというけれど、その準備と背景の怖ろしさがある。指揮権発動の論戦をするときに、その社会情勢を論ぜずに議論したつて駄目なんだ。政治というのは常に背景が大事なんだ。背景がどんな怖ろしい時代か。おそらく赤旗でしょうね。社会主義政権、共産党と連立政権ができたかもしれない。それこそ日本も、戦争よりもっと大きな革命になったかもしれないね。戦後の混乱期にあれをやつたら、日本は共産党といわんが、容共というか、経済復興なんていうことが考えられない、後進国に近い経済になったでしょうね。指揮権発動ということよりも、世相の怖ろしさを感じた。私だつて怖かった。革命が起こつたら、日本の政治がいつ復活するか。

伊藤 それは自由党の最大の危機ですか。

松野 最大の危機。保守党の、といつてもいいでしょうね。おそらく鳩山政権はできなかつたでしょうね。それこそ赤旗組が天下を取りますからね。メーデー事件とか、宮城焼き討ち事件のあのグル

ープが天下を取る。鈴木茂三郎とか、浅沼稲次郎とかいうのは、まだ穏健なほうですよ。徳球「徳田球一」とか、野坂参三とか、そういう容共政権、革命政権ができるという危機感を感じた。保守党は鳩山・吉田ならず、全部駄目になったでしょうね。その佐藤のカネが保守合同の鳩山の方に行っていたなんていうことになれば、それは鳩山も一緒です。吉田、鳩山の移行がなかったでしょうね。

そういう時代になると、裁判権、司法権も彼らが牛耳るでしょうからね。それで司法の独立という言葉があると同時に、司法の健全化。あの時は関係者が一様に黙っていてくれたわけだ。辞表一つ出なかつたですからね。あの時、意に添わないといって辞表を出した検事は一人もいなかった。いかに万全の策がとられたか、それでわかりますね。一人でも検事から辞表が出たら大変なことだ。

伊藤 そういう裏工作をできる人はそうたくさんいないわけでしょう。

松野 一番初めに吉田さんが、どうすればいいだろう、こうすればいいだろうと、私のおやじが一番たくさんいったでしょうね。佐藤と懇意だったから。佐藤を推薦したのは私のおやじでしたからね。だから私のおやじは佐藤救済に一所懸命だった。

伊藤 やはりお父さんがだいたい中心になって根回ししたと。

松野 吉田さんのところに人を呼ぶときに、一緒に話を聞いているんだ。昼は総理大臣だから、夜だけなんですからね。夜の十時から二時頃までしか会えないんだから。また吉田さんも公務で会えば目立つもの。だから秘中の秘だったんだ。今の白金の迎賓館でしたからね。漏れたら大変なんだ。犬養にも言わなかつたんだから。犬養に言うとしたら。顔に出るから。二日前に言ったんだから。

伊藤 それは全部かたまってからですか。

松野 かたまってから。もうこれ以外にない、やろうということになった。それには検事総長と、意志を聞いてから。誰だって最初は

反対だ。それはできないという。法の前に平等だ。佐藤だけ助けるわけにはいかん。それではどうなるかという話ですね。日本が大変なことになる。だから法務大臣も責任をとる、検事総長も責任をとる。だから身を捨ててから、君たちはという。それで法務大臣は翌日、検事総長は落ち着いてから辞めましたね。それをやつと納得させたわけだ。それで指揮権発動ということをやったけれど、もう再びできるものじゃありませんよ。私は二度とできないと思う。

佐道 ときどき、また指揮権発動か、みたいな話が出てきますが、松野 それは本当に表面だけで、指揮権発動の内容とその難しさを体験した者にはとても言えない。農林大臣が農林省を指揮するのと違うんだ。また指揮権発動か、ということは、全然異質なものだということがわからないんだな。指揮権は発動できるけれど、効果はない。ただ暴力をふるうだけで、効果なき暴力ですよ。今ごろ指揮権発動をすれば、指揮権発動をしたやつが暴力をふるうだけで、効果はない。しかもそれは自分の非が戻ってくるでしょうね。

小池 それは担当の検事が一人でも辞めたら駄目ですね。

松野 それでまいっちゃう。それはどういふことだ、ということになる。漏れてはいけない。それから全部熟知しなければいけない。統制がとれない。だから犬養は翌日辞め、検事総長は落ち着いてから辞めましたね。決してそのあいだに辞表は出なかつた。これが私は保守党の危機、鳩山さんも自民も同じだけれど、最大の危機は指揮権発動でしたね。今でもゾツとしますね。寒い頃おやじが出ていて相談して帰ってきて、何も言わない。それが三日も四日も続く。私もわかつておるけれど、聞きようがないんだ。黙ってて、言わない。

伊藤 では今の話は、あとからお聞きになった話ですね。

松野 あとから聞いた。その時は肌で感じていましたけれどね。あとで、指揮権発動をしてから、社会騒然となった。そのあとで、「実はあれはこうでな」というのを聞いた。「犬養は困ったんだ。おれが

犬養の家に行つて、『おまえ、辞表出すなら今出すんだ。明日、吉田に出せ。出さないのなら、これをやれ。おまえのおやじはどっちを喜ぶだろうね』と言つた」という話をした。「おまえのおやじはどっちを喜ぶだろうね、出さずに辞めるのがいいか、出して辞めるのがいいか、といつて、前の夜犬養を口説いてきた」と言っていました。

伊藤 犬養さんも自由党の中では一派の親玉ですよ。

松野 もちろん一派の親玉です。あれは、一党を作っていましたからね。あの人たちが合併したときは、日本自由党、民自党、今度はただの自由党になった。犬養、保利茂、あの一派が合同したときは自由党になった。これも一派を成していた。犬養健さんだけは一年遅れて入つて来た。

伊藤 連立派とか言いましたね。

松野 それで保利茂が代表で入つて来て、犬養健は一年遅れた。遅れた理由は、吉田内閣弾劾演説、打倒演説をさかんにやっていた。吉田さんは、「おれのこと弾劾演説ばかりしやがって、おやじはいけれど、息子は駄目だ」と言っていた。

伊藤 それに指揮権発動をさせるんですから。

松野 それで一年遅れて入つて来て、すぐ法務大臣にしたんだ。優遇だったんです。入つて来てすぐ法務大臣ですからね。

佐道 優遇だったのがー。

伊藤 仇になったか。

松野 「おやじは偉かつたけれど、息子は駄目だ、俺の弾劾演説ばかりしやがって」と言っていた。それで保利が一年先に入つて、一年後に犬養さんが入つたから、すぐ法務大臣にした。その点は素直

にやつた。でもそんな事態になるとは思わないわな。

伊藤 それはそれでしようね。さて、時間ですがどうしましょう。

松野 ここまでしておきましょうかね。この指揮権発動だけは怖ろしかった。これは朝鮮戦争より怖ろしかった。国内の内乱が見えるからね。朝鮮で何があつたつて、日本には武力がないんだから。抵抗力がないからハラハラするだけだ。これは、抵抗力があるんだから、これで負けたりしたら、われわれ後世にー。こっちの戦争の方が怖いですよ。外敵には残念だけど、日本は実力がないんだから。他国の信義を信じるしかない。憲法の規定通り、他国の信義を信じるしかないんだから。

伊藤 それでは今日はこれでいちおう終わりにして、次回をちょっと決めさせていただきます。

松野 こんなことをしゃべっていて、どうなるんですか。大丈夫ですか。

伊藤 いや、もう充分です。

松野 私は知らずにしゃべっているだけです。

佐道 それがあります。

松野 何も特に考えておりませんから。

伊藤 いや、あまりいろいろ配慮されると困るんです(笑い)。今日はほんとうによくわかりました。ありがとうございました。

松野 頼三 オーラルヒストリー

第4回

[2001年1月15日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

■ KSD事件と機密費事件について

松野 ……政経クラブの内田健三というのが、ぜひ来てくれと言
う。「あなた以外生き証人がいないから、来てくれ、夜一時間ぐ
らいしゃべってくれ」と言う。

伊藤 それは、どこの主催ですか。

松野 政経文化会、共同通信主催です。毎月一回ずつやります。

伊藤 今日は何の話をされるんですか。

松野 今日は生き証人だから。ところが、みんな死んでいるから、
多少しゃべっても平気なんだ（笑い）。田中角栄のことは、きの
うテレビでやりましたが、あんなのは嘘っぱちばかりなのに。
落としてやっているんだろね。私はすいぶん悪口を言ったんで
すよ。悪口の方は全部削って、いいところだけ拾っている。私は
九割悪口を言って、一割「いいことを」喋ったんだ。その一だけ
「放送に」出すんだもの。ひどいものだと思ってるね。あの田原
「総一郎」というのも、ちょっと最近ねー。

伊藤 「NHKテレビのニュースを見て」なんで村上正邦が出て
いるんですか。

松野 辞めたんですよ。会長辞任。

伊藤 そうですか。例の問題で。

松野 ええ、KSD「ケーエスデー中小企業経営者福祉事業団」。
このKSDは質が悪くて、造船疑獄よりも悪いでしょうね。造船
問題は一種の計画造船強化という国策をもってきてやったわけだ
から。それは行為は悪いですよ。行為は悪いが、その事業の目的
は認められる。このKSDは認められないだから。詐欺的行為
をやっている。造船疑獄というのは、目的はいいわけだ。間違い
ない。その中で贈収賄が起きた。今度の「KSD」は目的が不純
というか、無形の、形のないものでしょうね。

伊藤 国家的な目的ではないでしょうね。

松野 ほんとうに少し政治家の質が違ったな。もう一人は？

伊藤 「有馬氏は」どうしたのかな。連絡がちゃんとあるんで
けれどね。もう一人の佐道君というのは、椎間板ヘルニアになり
まして。

松野 そうですか。この仕事を始めてからじゃないですか。

伊藤 いやいや、前からなんですけれどもね。

松野 でも、これ「KSD」は悪質ですね。補助金との関連があ
りますからね。

伊藤 あれは、しかしひどいですね。

松野 造船疑獄は造船界全部だったんです。今度のは特定事業で
すから、スケールが小さいけれど、納得がいけない。しかもそれ
が、現実にものがなかつたりしているんだから。ものがあればい
いけれども、ものなしですから。

小池 ただ、中小企業で小売の商店街なんかを中心にした組織で
すから、自民党の基盤には相当の大きな打撃を与えるんじゃない
ですかね。

松野 あれは相当大きいですね。もう一つは外務省の機密費。あ
れは会計検査院の審査のいらぬ金ですからね。

小池 僕も外務省にいましたけれど、もともと使途が非常にあや
ふやなもの、スパイを雇うとか、そういうような形でお金を使っ
ていましたね。議員の方の接待用のお金とか、それも全部そこか
ら支出されるんですね。

松野 私もすいぶんもらいましたよ（笑い）。

伊藤 そういうお金に使うんだっただけいいけれど、自分のマンシ
ョンを買ったとかね。

小池 馬を買ったとかですね。香港は特にお金が多いんですよ。
中国との関係がありましたから。

伊藤 ひどいやつがあるものだね。

松野 長年経つと麻痺するんですね。

小池 外務省は在外公館を九年やると家が建ちますからね。

伊藤 それは在外制度があるからだろう。

小池 はい、そうです。等級も上がりまますし、特に公館長になると、機密費をある程度自由に使えますから。

伊藤 明治時代だと、海軍でも軍艦の外国への発注のリベートとか、いろいろあるんだね。

松野 シーメンス事件、山本権兵衛とか。

伊藤 あとになると外国に発注しなくなるから。といって、なくなつたわけじゃないだろうと思ふだけども。

小池 いや、国内でたくさんありますね。いまま防衛庁に行くと、『公文備考』の懲罰という巻を見ると、微に入り細に入りリベートを取っているのがよくわかりますね。非公開ですけども。

松野 麻痺しているんですよ。係が長いとね。

伊藤 しかしそういうことをやっている人は、いずれバレるだろうと思ふんじゃないかなと思ふけれども、どうなのかな。

松野 それが次々にやっていると、わからなくなつちゃうんだ。自分の金か他人の金か。

伊藤 そういうものですかね。

松野 うん。むかしよく言われたのは、利殖に株を買うなど。増えれば返ってくるけれど、増えなければ駄目だ。競馬の馬だつて、あれが当たれば、あの金は返したでしょうね。公金の中に入れてはいんだから。ところが穴があくと困る。そうすると、また買うわけだ。二頭買って駄目なら、四頭。四で駄目なら六。そのうちだんだん大きくなつちゃう。

小池 香港の外務省員は身を持ち崩す者が多いと言われていました。香港はギャンブルが多いですから。犬「ドッグレース」とか、そういうもので身を持ち崩した例が多いんですね。

松野 海軍の在外公館でも、モナコでギャンブルにはまって、身

を持ち崩した有名なのがいますよ。

小池 あれは、本当に慣れというのがあつたでしょうね。

松野 優秀なものほど危ない。

伊藤 在外の人なんか、個人的なものならいいけれども、外国に利用されたりすると最悪だからね。

小池 今度の外務省の松尾克俊・元要人外国訪問支援室長はノンキャリアですよ。ノンキャリアの中で香港総領事というのは、ものすごく身分が高いんですよ。ですから、本当に「ノンキャリアの星」だつたんですね。

松野 だいたい、内々で処理するわけだ。

小池 そうです。

松野 内々でね。ところがいまは告発があるからね。

小池 最近じゃないですかね。機密費の予算を単年度予算に変えたんです。それで、使つた使わないという決算報告をある程度しないと。損失が出るというのはあり得ないことですから、そこで発覚したみたいです。

松野 外務省も、全部洗えば次々に出てくるんですね。

小池 外務省は教科書問題でもミソをつきました。

伊藤 機密費というのは、ないと困るし、管理をうまくしないと、とんでもないことになるし。

小池 だから中途半端な額なんですよ。根本的に、システムとして謀報機関みたいなものを持っていませんので、どうしても情報をとるためにお金で解決する。そうするとそのお金は、ガセネタも多いものですから無駄に使われることも多い。

伊藤 とにかく情報というのは、ガセネタも買わなければ、ほんとうのネタは来ないよ。

小池 ただ、やはり自前のものを持っていませんでしょう。ですからどうしてもロスが大きいみたいです。

伊藤 よく言うじゃない。骨董品だつて、偽物だとわかつていて

もやはり買わなければ、いい物は来ない。

小池 外務省が収集する情報の質は、あまり大したことがないと
言われていますね。

伊藤 戦後しばらくの間は、日本のチャイナ・ウォッチングは相
当よかったらしいですね。

小池 ええ、よかったですね。朝鮮戦争なんかありますね。
あの時、先生がこの間お話しあったところの外務省の報告で、
「中共報告」などを読むと非常に的確ですね。どこから情報を得
たのか、非常に正確で、諜報機能が高かったと思いますね。

松野 一番正確なのは、アメリカ大使館からとるもの。アメリカ
大使館は、全部暗号の解読をしているわけだ。アメリカ大使館に
金を出すのが、一番早いよ。全部解読していますからね。ソ連の
大使館からの打電も、全部暗号でとっているわけだから。それか
らアメリカの大使館とCIAだ。ソ連大使館から出るのは全部解
読されているんです。また、アメリカの方も向こうがやるでしょ
うね。それは日本ではできないんです。防衛庁の情報も、ほとん
ど米軍からもらうんだ。日本だつて暗号をとればいい、昔よかつ
たんだから。どうしてできないんだというと、向こうの変化に応
じて継続してやらなければ駄目だということですね。「今日いくら
やつたつて駄目です。何年分のデータを持っていないと解読はで
きません。だから日本ではできない。昔のデータがないと暗号の
変化というのはわかりませんから。それには三十年ぐらいの経験
がなければ、今年いくらやつたつて駄目です」という。防衛庁は
全部米軍の暗号解読をもつていまやっていますよ。外務省の
アメリカ大使館の解読をもらうわけで、それで金がいるわけだ。
伊藤 政治でいいますと、森内閣はなにか落ち着いたですね。
松野 少し落ち着いてもらいたいな。参議院選挙まで。
伊藤 でも、森内閣で選挙は勝てるか、と前から言っているでし
よう。

松野 鳩山に勝たしたいものだから(笑い)。

伊藤 敵本主義だ(笑い)。

松野 鳩山に勝たせたいから、森を残したいんだ。

小池 しかし二月危機説、三月危機説というのは、まだ株価の暴
落と共にあるんじゃないですか。

松野 あるけれども、不思議なことに日本は経済では倒れること
がないんだ。社会不安は別ですよ。社会不安になれば別だけれど
も、経済では倒れないんです、日本は。それだけ経済力が日本に
はあるんです、民間に。だから経済問題が大騒ぎになつても、内
閣は大丈夫。社会不安になつて、失業者が騒ぎ出すと面倒ですけ
れどね。でも日本では失業したつて、米の飯は喰えるんだ。それ
も失業手当で一年も喰える。本当の社会不安というものは、日本
は経済では出てこない。騒ぐだけだ。騒ぐのは経営者が騒ぐだけ
で、大衆まで行かない。だから経済では、まだまだ日本は底が深
いと思う。株屋とか経済人は騒ぐけれども、一般国民まで行かな
い。

小池 行かないですね。

松野 だから、経済では私は倒れないと思う。これはいままでの
日本でかなり経験したけれど、日本の経済力、民間の力というも
のがあるから。

伊藤 国の財政赤字といったつて、みんな国民から借りているわ
けだから。外国から借りているんだつたら問題は深刻だけれど。

松野 その国民から借りているというのが、全部銀行から金をだ
してもらおう。銀行は国の国債だけで、民間に金を出せないんだよ。
資金がないんだから。経済の仕組みをつくり間違つたつて、それ
は経済の仕組みが中小企業に行かないようになってるんだ。銀
行は国債を買うことばかりだ。国債を買うことは、二・何%かも
らうでしょう。中小企業に金を出すと危険が多いものですから、
それで金利が安い。国債を買うのが一番安全で、一・七は保証さ

れる。ほかに貸すと、〇・何%、どんな一流企業でも二%以上というのではありませんよ。身に危険を生じる。それなら国債買う。一・七の方は無限に貸してくれるし、間違いない。銀行は国債を買っただけで、融資することはもう考えなくなっちゃった。

金融監督庁というのが悪いやつで、「民間の危険なのに金を貸すな」と通達を出している。「民間の危険なのに金を貸すな」ということは、「民間に貸すな」ということと同じですよ。そんな通達を出しているんだから。常識的な話として、民間の危険なところに出すなというけれども、危険かどうかということ言われれば、出すなということに通じますね。だから一番困るのは、中小企業の今度の三月の倒産でしょうね。私は今度の三月は驚くべき赤字決算と倒産が起きると思いますよ。

小池 中小企業だけではなくて、今度はゼネコンあたりが一つ二つ飛んでしまうと、やはり雇用不安が出てくると思うんですね。

伊藤 株価が下がりましたからね。

松野 株価でいうと、金庫株がやられるのは馬鹿な話だね。あんなことをすれば犯罪が多発しますよ。自社所有株を無限に持っているなんて言えば、大変な混乱を思う。あれで株が上がると思っているから、私はおかしいと思う。上がるよりは、私は混乱を招くと思う。上がる前に混乱と不正が行なわれる。架空の株取引を誘発するだけで、正常な投資家はたまらない。売り買いするブローカーが儲かるだけで、一般の投資家はたまりませんよ。どうしてああいう発想が出るんだろうと思うんですね。なにか、本当の政治家がいらないんじゃないか。宮沢「喜一」ももつとしっかりしないよね。世界一の借金王だなんて澄ましているようじゃね（笑い）。小渊「恵三」と似てくる。宮沢は昔はああじゃなかったんですね。

小池 健全財政主義者だったはずなんですけれども。

松野 そうなんですよね。やはり八十歳過ぎると駄目になるのか。

もう賞味期限が過ぎた缶詰みたいになっちゃうのかなと思ってね。優秀でしたけれども、最近どうも大蔵大臣が一言も言わないということではね。

■吉田政権末期

伊藤 それでは本題に入ってよろしいですか。この前は厚生政務次官をおやりになって、そのあと政調会副会長をおやりになったんですね。

松野 「政調会長は」池田勇人です。

伊藤 その段階に、ちょうど吉田政権の終わりというのがあるわけですが、その過程で、岸さんが率いている部分が鳩山さんの方にくつついて行く。広川「弘禪」さんのところもくつついてしまふということですが、岸さんというのは、急速にこの時に伸びてきた人なんですか。

松野 サンフランシスコ講和条約ができて、まだ吉田内閣の頃に追放解除が出て、戦犯が全部解除になる。戦犯の賀屋「興宣」とか岸「信介」とかいうのがみんな帰ってきた。その時は、佐藤栄作が官房長官だった。官房長官の車で巢鴨に迎えに行くという予定をしていたけれど、さすがに官房副長官の車で行くわけにはいかないで、別の車を出した。そして本人も、さすがに迎えに行くわけにもいかなかったので、それは遠慮した。それで、岸さんが自分個人の車で官房長官の官邸に初めて来たわけだ。それが何年ぶりの兄弟の再会。その話を、私に佐藤がしてくれた。「官房長官の車で夜行きたいんだけど、行くわけにもいかな。やはり戦犯と言われると、急に無罪と言われても」と佐藤が述べ懐しさを覚えています。それから、「岸はここ「佐藤氏のところ」へ来たんだ。おととい来た」とか言っていました。「どうだった」

と言ったら、「いや、元気でした」と、そんな話をしていました。その岸が、早速自民党に入ったわけですね。

伊藤 早速でもないですよ。

松野 ええ。当選してから入って来た。ちよつと選挙まで時間がありません。その当選してきた時に、私は岸信介という人に会ったわけです。代議士に当選して、ニコニコしていた。「戦犯で苦勞だったでしょう」と言ったら、「ああ」とか言って、あまり話はしなかった。それから私の父とも懇意だった。岸さんは「父と」戦前から懇意なんです。「岸は」吉田茂とも懇意です。たしか「岸が」商工事務次官の頃、吉田が外務事務次官かもしれませぬ。

伊藤 いや、もつと離れていますね。

小池 ちよつと離れていますね。

松野 戦前から「岸と吉田は」非常に懇意だったんです。

伊藤 そうですか。考え方は、だいぶ違うんですよ。

松野 吉田、岸は官僚の頃、懇意だった。そのおかげで佐藤栄作が官房長官になったんだから。「吉田は」岸の弟ならいいよ、とあって、「佐藤を官房長官に」したんだから。戦前に岸、吉田が親交があったことは間違いありません。私の父が佐藤を官房長官にしたということだから。「父が吉田に対して佐藤を官房長官に推薦したら、吉田は父に佐藤のことを」「何をやっている」と聞いたので、「運輸次官をしている」といったら、「佐藤ってどんなやつだ」「いや、なかなか優秀で、岸の弟だ」「あ、岸の弟ならいいよ」ということで、すぐに官房長官にした。だから、どこかでつながりがあったんでしょうね。私はあったんだろうと思う、官僚時代に。

その親交があったから、岸さんが代議士になった時も、吉田、岸は必ずしも不仲ではなかったと思います。ただし、吉田内閣に対して、岸さんが協力というか賛意を表していたかどうかは別で

すよ。やはり多少批判的だった。もう時代が違くと。佐藤は別として、やはりこの時代の流れは、占領から独立して変わらなければいけないということは、「岸は」私たちにも説教していました。

それから、いろいろな話をして、人間味のある人と見えた。巢鴨に四年半ぐらいいいたんですが、その間の話を平気です。「巢鴨でどんなことをしていましたか」というと、「本は自由だ。新聞は駄目だ。ラジオも聞けなかった。しかし、いろいろな話ができるよ。それから、いまだこうだというのが不思議に耳に入るよ。それで、戦犯は中に十八人ぐらいいいたけれど、東条ともを言うやつはいなかったね」と言っていました。

「最初は独房だった。独房で本を読んではかりたいけれども、そのうちに食い物がまずくなつて、みんなから『こんなひどいものを喰わせる。俺たちを餓死させるつもりじゃないだろうか』と不満が出てきた。そこでみんなで進駐占領軍に喰い物がひどいと文句を言った。そうしたら、『みんな一緒に食事にしてくれ。きみだけ一人で食うと自分だけまずいものを食わされていると思うだろうから、あすから全部で一緒に食事をしようじゃないか』というので、何ヶ月か経ってから、一緒に食事をすることになった。それでみんな顔が合うようになった。これはだいぶ後、六ヶ月ぐらいい経ってからですよ。それで、みんなで顔が合うから、そこでやや和やかになった。

食い物がどうだったかという、食い物は同じだった。二八〇〇カロリーとかいう、カロリー計算で出すので、何か条約みたいなものだろう。それでつくるのかしらんけれど、二八〇〇カロリーは必ず出す。ただし味はまずい。足りない、味噌汁にバターを入れたりしてカロリーを増やすんだ。そういうことまでしてくれるけれども、われわれの嗜好からみるとひどい。きょうはバターが入っていた。ヤシ油が入っていた。味噌汁にそれを足すと二八〇〇カロリーになるんだ、という説明だ。まあひどいもの

を食ったけれども、カロリーだけはあから、生きていた。」

本も読む。本だつて、もう戦前の本だから、読み飽きる。新しい本を読みたいけれども、それはなかなか手に入らない。結局、懇意なやつと食事をしながら話す。食事後も自由に話せたらしい。「何を話したか」というと、「人間というやつはぎりぎりになると、食べ物の話と女の話しかないよ。あとは、赤坂の芸者、柳橋の芸者、お互い芸者の思い出話ばかりしていた」と言う。

そんな話で、案外人間というやつは同じようだなと思った。「ぎりぎりになると、食い物と女の話しかないよ。ただ、その時は、東条だけは一緒に飯を喰ったけれども、誰もものを言わない。ひとりでポツンとしていた。これだけは印象に残る。ほかのは一緒に食事をするから、話をする。東条にものを言うやつだけはいなかった」というのが、非常に岸らしい話でした。

吉田については、そういう間接的な話はしないけれども、「変わらなければいかんよ、戦前、戦後」と言っていた。あの人も巢鴨に入っていたから、なお印象的だったんでしよう。その間によく考えたんでしようね。「俺も戦犯、戦前に対しては罪を感じるから、罪滅ぼしじゃないけれども、せめて日本の新しい時代に俺は努力したい」という熱意がある。その時は政治家はみんな戦前派が多いですから、岸の戦犯をただすようなものは党内にはない。自分たちも大なり小なりその生活で来ている。たまたま岸が戦犯という人柱になったということは認めている。岸が悪いことをしたとかいいことをしたということとは、占領軍が言うのと、われわれから見るとは違う。党内の人望は岸に非常に集まった。不思議なくらいです。それはなぜかというところ、戦前派が多いから。それで岸の人氣が上がったんだ。戦前派の苦勞した同志が帰ってきたという印象なんだ。その空氣は党内にいつべんに広がりました。それに岸さんの態度が、非常に人間味があつて、威張らないし、自分の非を平気で認めるし、隠さない。それで、川島正次

郎とか政黨員が、もちろん岸の行為を知っているから、みんな集まった。

岸は戦争中に東条みたいな強権的な政治をしていないから。無理にいえば、満州国を建設に行くとか、そういうことは、岸が新官僚だから尽力したけれども、しかしわれわれから見れば、何もそれは罪悪とはいわれないわけだ。同じ世代、私たちの世代におつたんだから。でも不思議に岸に対しては、第三者が見るのと違って、あの時代は、吉田の次は岸、という不思議な印象があつたんですね。吉田は、要するに戦前は弾圧をされて、憲兵に追われてひどい目にあつた。鳩山も同じようなことだつた。しかしその時代が過ぎて、新しい時代になれば、鳩山、岸というものが出てくる。鳩山は終始ありましたが、岸というのは、出てきた時に異常に人氣が出た。

代議士会の時も、ヒラ代議士として座っているんですよ。それでも、代議士会が終わると、岸のそばに五、六人集まるんですよ。その光景を私は見ている。私も集まる一人です。代議士会では幹事長やいろいろな人が話をして、いちおう終わるわけだ。代議士の大部屋ですから、二百人ぐらいいる。その会議が終わると、はじっこに座っている岸のところみんなが集まる。その人望を私は見ている、なるほどなと思つた。

「苦勞さんだつたですね」とか、「この間はどんな印象ですか」とか、「巢鴨から出てきて、まるで浦島太郎みたいでしょう」とか、そんなことでも言いながら、岸のまわりに寄ってくる。すると岸はすましてその話を聞いている。「いや浦島太郎だよ、おれは」、そんな話で、少しも威張らない。人間味を感じましたね。この人が戦犯だなんて、誤審であることは間違いないんだということだね。野党はさかんに戦犯と言うけれど、与党は、そんなことを言つたつて他人の話みたいなんだ。戦犯というならお前だつて同じじゃないか、と逆論したいくらいだつた。

伊藤 岸さんというのは、そういう意味で人望ももちろんあったんでしょけれどね。

松野 戦前の岸というのは、何か新進官僚で理屈っぽくて、たしか小林一三が商工大臣になって、小林一三をけちよんパチョンにやつつけた。小林一三が『大臣落第記』という手記を発行して、それが売れたんだね。その時の事務次官が、たしか岸だったと思いますね。そういうことで、岸というのは軍閥的な官僚だという印象を私たちは持っていた。満州の資源開発とか、そういう印象を持っている。私たちは学生ですからね。学生の時、私はそういう印象を持っていた。会ってみたら、もう全然違う。いつ変わったか知らないけれども、急に変わったわけでもないでしょう。人間というのは急に変わるものではないから。やはり本質が出たんでしょね。

伊藤 岸さんというのは、猥談が好きだと言っていましたね。

松野 女の話はもう見事なもんです。だから、われわれ若いものがみな寄ってくるんだ。

伊藤 岸さんは、どこかに事務所をつくりましたか。

松野 つくりました。岸さんは、まあほとんど自宅だったけれど、日石のところ。

伊藤 ああ、あれはかなり前からですか。

松野 前からです。終わってから、ずっと日石に行っていましたね。

伊藤 岸さんのそういう財界的なスポンサーというのは、どうなんでしょうか。

松野 岸さんは、ほとんどあの頃は全部でしょうね。賀屋興宣とというのが非常に仲が良かった。あれは大蔵官僚ですね。

伊藤 一緒の頃ですね。

松野 一緒に戦犯だった。この二人は巢鴨でも親しかったですね。

伊藤 あと、井野碩哉さんもそうですか。

松野 そうです。井野は農林ですか。たしかその三人が、戦犯で巢鴨に一緒に入っていたから。それで赤坂の話ばかり、猥談ばかりしていた。そんな三人一緒に出てきましたからね。一緒に平気で私らの前で話をする。こっちは面白いから寄っていく。「松野、政治家は金の話はしちゃいけないんだ。食い物の話と女の話をしなさい。無難だよ」という（笑い）。「食い物の話と女の話、これは党派を超えて、共産党まで通用するよ。ほかは危なくて話せない。危なくて、いくら親友でも話せない」という。

伊藤 僕はむかし岸さんにインタビューをしまして、岸さんから獄中の日記を借りて、それを本の末尾にくっつけたんです。書いてあることは、朝から晩まで食べ物のこと。朝のご飯が何々、と事細かに書いてある。昼は何、夜は何と、それが一番多いんですよ。

松野 私はそれを聞いたから。岸さんのところには年中、事務所に行ったり、近くへ行ったりしていた。岸内閣で総務長官にしてもらって、すぐ労働大臣になった。

伊藤 それが好きですか。

松野 それが好きです。もうひとつは、私のおやじの関係でしたね。おやじの息子だというので。

伊藤 じゃあお父様は、岸さんとはいいんですか。

松野 いいんです。事務次官の頃から知っていました。私のおやじは官僚じゃありません、政党员として目をかけた官僚の一人が岸だった。政党の領袖になると官僚が来ますね。その中で非常に優秀な岸をかわいがっていた。

伊藤 岸さんは、戦前一回議員になつていてるんですよね。翼賛選挙の時になつていてるんです。

小池 護国同志会でしたね。

松野 官僚を辞めてすぐですか。

伊藤 いや、辞めないで。たしか次官は出られたんですよ。そ

れが、国務大臣になったので辞めたんです。

松野 ああ、そうですね。そんな経歴ですか。

伊藤 だから前議員ですよ。あれは二回目の当選なんです。

松野 そんな話をした。吉田さんはその路線から離れていた。吉田・反吉田という意味もなかった。ただ、佐藤栄作がいますから。伊藤 難しいでしょうね。兄弟で、片方は吉田さんを支えていて、片方は反吉田ですからね。

松野 それでも兄弟の血は濃いもので、岸が石橋と総裁選挙を争った時、佐藤は無所属ですよ。無所属でも、岸の応援ですつと歩いていました。私なども呼びつけられて、「おい松野、岸を入れるよ。石橋じゃないぞ、岸だぞ」と言われた。「その時佐藤は」党外ですよ。田中角栄も呼ばれて、「岸をやれ」と言われた。それぐらい熱心にやった。やはり兄弟は別なんだ。だから岸が吉田内閣を正面切って攻撃しなかったのは、やはり佐藤がおったからでしょうね。正面きって攻撃したことはありません。

伊藤 民主党という形で鳩山さんが！

松野 岸は、民主党の鳩山のほうにいたことは間違いない。

伊藤 それで幹事長になるんですね。

松野 幹事長になります。新時代というものを考えて、鳩山を応援して幹事長になった。

伊藤 それで重光さんもそっちに入っちゃうということですね、副総裁で。

松野 それは、やはり吉田の時代が終わったという印象を持っていたんだな。

伊藤 それで、松野さんはどうなるんですか。

松野 私は、その時はもう困ったもんだ。

伊藤 困るでしょうね。

松野 困るんだ。どうしたって困るんだ。吉田、鳩山というよね。私の父なんか、年中新聞記者が「どっちに行くんですか、どっち

に行くんですか」と聞いていた。ちょうど私の家とところに泉岳寺からハトが飛んでくる。ハトに豆をやって、「ハトがかわいいね」なんて言つて、ハトだと暗示してましたね。だって吉田さんも、私のおやじなんか引つ張り出したんだから。吉田に対しても育ての親みたいなので、かわいいわけだ。鳩山とはその前からだ。政友会時代に、中島知久平、鳩山一郎が大喧嘩をして総裁を争った。一所懸命、鳩山でやっているから、これは盟友だ。だから私の父がどっちに行くか、私もわからなかった。それでも不思議なもので、兄弟でも親子でも、政治は別なんですよ。

伊藤 鳩山兄弟みたいなものですね。

松野 それは鉄則なんだ。それは、「お前はお前の仲間がいるだろう。俺は俺の仲間がいる。それを俺が教えたつて、合わないんだ」と言うわけです。その場面が、岸・佐藤にもあるし、松永東の親子もそうでした。松山義雄というのが娘婿だった。私は非常に親しい。松永東は鳩山の方にいくわけだ。松山義雄は、私と親しくて、私のいうことをきく。親子でも別だ。一緒に会議に行くんです。行って、ドアの手前で入らずに帰ってくる。そこが区切りなんです。そういうのはいくらでもある。私は、親子でも政治は別だと思ふ。私がおやじに言われたのは、「お前はお前の仲間と一緒に行動すればいい。俺は俺だ。時代が違うし、友人が違うし、感触が違う」ということです。

伊藤 その時の仲間というのは、誰ですか。

松野 それは鳩山の話ですね。私の仲間というのは、石井「光次郎」派。石井派だったから坂田道太とか田中伊三次とか。それから松山義雄というのも一緒にボートしました。その時はどうしたって、やはり鳩山の方に行きにくい。石井さんは吉田さんのところだから、行きにくいんです。

伊藤 それはそうですね。だって、緒方「竹虎」さんが次の総裁になるわけですからね。

松野 だからどうしたって、鳩山というのはちよつと。鳩山のところには、河野一郎、三木武吉とかそういうのを集めているので、こつちは近づけない。

伊藤 あれは悪役ですか。

松野 私はそつちへ行かれないもの。やはりどうしたって、自分の流れの方に行きます。だから、私は自然に吉田の方に行くわけです。河野一郎のところへ行っても、私がいくら鳩山さんと親しいからといったって、相手にされませんね。やはりその個人もそうだけれど、仲間も政治には非常に大事な勢力でしょうね。

■鳩山内閣と保守合同

伊藤 鳩山内閣ができて、それで自由党は野党になるわけですね。これはどんな感じでしたか。

松野 私はいろいろな委員会で、いじめて、いじめて。その時の閣僚で知っている人を、私はずいぶん質問でいじめた。「なんで松野君、俺をいじめるんだ」と廊下へ出ると言うんだ。それは立場が違うからだ。いじめる材料はいくらでもあるんだ。いまままで私たちがやってきた方が詳しいから。

予算の編成では河野一郎もいじめました。予算の編成で、不作奨励金というのがあったんです。五%以上の不作の時には、米価にプラスしていくらか足すということで、当時ですから千円足すとか千二百円足すとかいうのが予算にあった。それを河野農林大臣が、不作奨励金を出すとか言ったから、「不作奨励金の単価はいくらだ」「千二百円」「千二百円の根拠はなんだ」というと、知らないんだ。知らないわけだ。それを決めた時、私は政調副会長で、池田勇人と話して、「千五百円と農林省が言ってきたけど、これは無理だ。予算がないから千二百円にしとけ」「じゃあ千二

百円にしましょうか」ということで、二人で勝手に決めた千二百円なので、根拠がないことはわかっているんだ（一同笑い）。

そうすると河野は役人を呼んで、「おい、この根拠はなんだ」と聞くが、役人もわからない。わからないわけだ。歩きながら、まあ予算がないからこのへんかなと、勝手に私と池田で決めた数字で、根拠はないんだから。根拠がないことを知っているから、なんべんも聞くわけです。「根拠のない予算はないだろう。予算書に書いてあるのに根拠がないのか」と。とうとう予算委員会はそれで二日間も止まった。根拠がないことを知っているから、わざわざ何度でも聞く。「計算の根拠を示せ。根拠のない予算があるか」と。ないことを知っていていつまでもいじめるから、二日間予算委員会は止まっちゃった。最後に、そんな格好で二日間以上追うと、これはちよつと醜態だから、二日間は予算委員会でもめて、私はそれで矛を収めた。これが内閣総辞職にまで行くことはないんだから、もうこのへんかなと思つた。そんないじめ方でした。

もう一人あつたですね。平塚常次郎という人が、なにか大臣になつたんですね「第一次吉田内閣運輸相。日魯漁業創設者」。その人にも、なにか予算のことで質問して、平塚さんは困つた。廊下へ出て、「松野君、なんで俺をそういじめるんだ」と言う。いじめているんじゃないんだ。吉田内閣の残党がやっているんだ。「あなたにはお気の毒だけれど」と言つて、みんな説明つかないことばかりでいじめる。それは、予算編成を知っているとわかるものだから。

伊藤 吉田内閣が倒れて、吉田さんはリタイアするでしょう。

松野 リタイアして、まだ議員ではおりましたけれど。

伊藤 そうすると、やはり緒方さんが本当に中心なんですか。

松野 緒方さんが中心です。吉田さんが辞めて「緒方」総裁になつた。なつた時ですが、石井さんが、なにか役職「自由党幹事

長」をしていましたね。

伊藤 その時は、自由党はどこに。

松野 いまのところですよ。あの場所です。もつと小さかったけれども。あそこに小さい木造の建物があった。だいたい二階建てのちよつとしたものですけれど。

伊藤 よく集まりましたか。

松野 ええ。二百人が上に集まると床が抜けるような、怖ろしいものでしたね。木造でしたからね。

伊藤 その野党の時代が一年ぐらいあるんですね。

松野 一年ぐらいです。

伊藤 そのあと、ずつと自民党が政権を持つていく。

松野 その時に、保守合同で緒方さんが合同する。その時、もちろん吉田さんは入らなかった。佐藤栄作と橋本登美三郎と三人が入らなかった。入らないで、議席は最前列で、共産党と並んでいたんです。

伊藤 無所属。

松野 ええ。「自民党入りは」岸になってから。その時のことで、今度の加藤紘一に教えてやりたいのは、その時堂々と、「吉田・佐藤・橋本は」自分の主義主張は鳩山とは合わないから、俺は入らないといつて、最初から入らなかった、参加しなかった。したがって、離党でもなければ除名でもない。それが、岸になってからみんな、私たちも同じだが、佐藤・橋本・吉田を迎え入れようじゃないかと党内で迎え入れ運動をしたわけです。それが岸内閣の時の復帰の原動力になったんです。

今回、加藤・山崎が無所属であれば、おそらく加藤派は割れなかったでしょうね。自分で責任を負うから、そのかわり君たちは団結して行ってくれ、と言えば割れなかった。そうなれば、あの九十人が、加藤紘一を迎えようというふうには時局が変われば、凱旋將軍で帰れる。その度胸がないんだ。佐藤は凱旋將軍ですよ。

入ってくれといつて、三人を迎え入れたんですから。もちろん鳩山派も了承ですよ。岸内閣で、岸が総裁だから、岸を迎え入れた。それで、迎え入れてすぐその時に大蔵大臣にした。誰も異論がない。佐藤大蔵大臣で誰も異論がない。政治というものはそういうもので、世論を背景に自分の言葉と言行が一致していれば、いつか救ってくれる。こんどの加藤のは言行不一致なんだ。

伊藤 致命傷ですね。

松野 それがわからないんだ。側近のものが教えてやればいい。あの二人が無所属でいけば不気味ですよ。あの二人がバリバリなら、政界再編のひとつのへそになったと思う。次の政界再編の時に、この二人は気持ち悪いですよ。これと小沢も同じ。小沢も自ら出ていった。仮に二人でも、それを国民は忘れなかったと思う。いま党内で改革をやるぐらいなら、権力闘争が自分の地位獲得の運動としてしか見えないんです。政治家として大失敗したと思う。

伊藤 完全に困われちゃったんですね。

松野 あれじゃあ駄目ですよ。「ただの人」になっちゃう。しかも、派閥は分裂して、三分の一と三分の二になった。おそらく三分の一しか残りませんよ。

伊藤 日ソ国交回復交渉については、かなりいろいろ意見があったと思いますが。

松野 たしか、松本瀧蔵とかいいましたよね。

伊藤 ええ。

松野 鳩山さんの側近で、たしかコロンビア大学を出た外交通でした。松本俊一というのもおりましたが、松本瀧蔵、これが鳩山さんの近くにいましたね。これが年中ソ連に行っていた。なんだかわからないけれど。一議員だと思えますね。たしか外務大臣じゃなかったと思います。

伊藤 違います、全然。

松野 年中行っていた。それから鳩山さんも反共で売り出した男

ですからね、私はなんのことかと思っていた。鳩山さんは反共で、当時は民族政治家。いま見ると鳩山さんは「民族」ということを言っていましたね。あのころは「民族」というと、日本民族という右翼的な思想を感じるけれども、いまと違って、終戦当時はみな戦前派ですからね。責任者は別として、みな戦争に行つて、日本が負けて悲惨な目に遭つた。だから、戦争が犯罪というよりも、負けたことが残念だった。戦争犯罪よりも、残念だという気持ちが強かった。そこに、鳩山が民族復興をかける。拍手しますよ。その民族の心、情熱をみんな持っているんだから。いまは、民族の心も民族の誇りも忘れてしまった。戦争も忘れたけれど、民族思想まで忘れてしまっている。だから、民族と戦争というのは、ひとつの表と裏でしょうね。それだけに、私たちは鳩山は民族政治家だと思つていた。これをいちばん引つ張つたのは松本龍蔵です。もうひとつは河野一郎かもしれない。河野一郎は日ソ漁業交渉で、たびたび行つているから。

私も農林グループだったから、農林大臣の河野一郎が初めてクレムリンに行つて日ソ合意交渉をしてきた報告を受けました。どうだったと聞いた。

大きな鉄の扉で、大きな家で、人がいないんだと。部屋にいくと、一時間も二時間も待たされる。そのうちに大きな扉が、がーんと開く。開くと、次の部屋へ行く。またその次の部屋に行くと、誰もいない。そこでまた二時間も待たされる。またその次に行く。大きな部屋で、人がいないんだ。そこに通訳と二人で行く。外務省の連中は途中で入れてくれなかった。河野と通訳と二人で、三つ目ぐらいの部屋に行くと、おれは帰れないんじゃないかと思つたという。そんな脅迫感を感じた。あの河野でも、最初に日ソ漁業交渉でソ連に行つた時、威圧感を感じたんでしようね。やはり戦争で負けたという。そんな話をしていた。

そういうことから日ソ漁業交渉が進み、それから松本龍蔵の国

交回復。ソ連も早く国交回復をしたかったこともあった。アメリカに遅れるから。なるべく早くくしないと日米が非常に緊密になるから。なんとか日米の中に日ソも対等に持ちたいという気持ちはあつたでしょうね。アメリカよりも、領土は日本のほうが隣国です。ソ連の方にも焦りがあつたと思う。それを松本龍蔵が察知して、どうせ平和条約はやらなければいけないんじゃないかと。それから河野一郎の漁業問題がある。領土問題までは、その時は頭になかった。言葉に出なかつたでしょうね。だから領土問題は棚上げにして、日ソ共同宣言という形をとつた。それは鳩山というより、その時代が鳩山をしてそうさせたんでしようね。

伊藤 あれは、二島返還か四島返還かということでもめるわけですよ。重光さんが外務大臣ですか。

松野 外務大臣です。私は重光さんは、四島返還に徹底したと思つた。

伊藤 いや、最後に二島返還で手を打とうと。

松野 それは、よほどのあれでしょうけれども、その前にダレスが来た。ダレスが「歯舞、色丹」と書いて持ってきた。そこで当時の吉田さん及び外務大臣が、これはおかしいといつて、とうとうとダレスに四島の歴史的解説をした。ダレスもわからない。わからないので、その二島を消した。それで日本は四島を主張した。だからダレスは、四島も支持していない、二島も支持していない、ペンディングなんだ。そこで二島論と四島論が常に浮上したり消えたり、浮上したり消えたりしているわけです。

ソ連は、ダレスも二島と言っているじゃないかというが、日本はそれは打ち消したんだ、四島だと言っている。だから二島、四島というのは、外交の場面で日本は四島を主張しているが、アメリカは二島を言ってみたり、ソ連は二島を言ってみたりしているから、そういう話が浮上しては消え、浮上しては消えしているんでしようね。

伊藤 自由党の側は相当いろいろな形で攻撃をしているわけですよね。

松野 おまえは二島返還で承知したんじゃないかといって攻撃したけれども、その日ソ国交回復には書いてはないんです。それは入ってない。おまえたちは売国奴だ、とわれわれを攻撃した。そんなことはない。四島だと言っているでしょうね。言い直しているぐらいの根拠は薄弱なことは間違いない。だから、常に二島、四島は口の上に出てきます。でも日本の文章には、四島しかないんだ。

伊藤 それだけ自由党と民主党が激しく対立しているのに、翌年には保守合同をやるわけですね。保守合同というのは、何年も言われてきてできなかったことなのに、このときにポイントとできるわけですね。

松野 最初のシンボルは憲法改正だった。第一条に憲法改正が書いてある。保守合同の大目的は憲法改正だ。日本の完全な独立体制をつくること、これが第一条だ。これで合併合同した。

伊藤 それは、旧吉田派の方では、あまり異論はなかったんですか。

松野 異論どころか、私なんかはそれを第一にした方ですよ。私も若手で起草委員になっていたんだから。あのときは中曽根なんかが出てきましたね、民主党で。政策協定で。私も自民党から出ていった。第一は憲法改正。

伊藤 そういうのは、どこでやるんですか。

松野 その時の場所は、議会の中だったと思う。

伊藤 でもなかなか簡単なことではないでしょう、二つの党が一緒になるということは。

松野 簡単なことじゃないですね。簡単なことじゃないけれど、吉田自由党が負けたものだから。やはり吉田自由党が負けたということが、保守合同の契機でしょうね。これで勝つということとは

容易じゃないと見たわけだ。三百を持っていたのが、二百を割るようになれば、とてもこの回復は容易じゃないという気があったから、保守合同に賛成したんでしょうね。鳩山の方は、鳩山内閣の安定を図るために、保守合同した。だから、向こうは喜ぶ。こちらは意気消沈して合同でしょう。その差がある。

伊藤 だけど、その直前に社会党の統一があるわけですね。社会党が、当時は日の出の勢いといいますか、選挙をやることに議席が増えていくという状況で、それに対する危機感もあつたんじゃないですか。

松野 党内の、社会党への危機感もありましたね。あの当時社会党もだいたい変わってしまいましたけれどもね。吉田の時の社会党の時代と、次の社会党とは多少変わっていた。

伊藤 組合出身の左派が伸びているという状況ですからね。

松野 国内には社会主義政党の脅威、これもありました。同時に憲法改正ということ。保守党の中では、社会党の脅威という文面はありませんでした。社会党の勢いという言葉は、私たちはみんな書いた覚えがない。憲法改正ということを目標にした。だがそれは言うなれば、社会党の防波堤でしょうね。憲法改正ということとは社会党の防波堤をつくるということでしょうね。大きな政治の、まあ社会党撲滅とは言わないけれども、社会党の大きな思想を転換させると。

伊藤 撲滅までにだいぶ時間がかかりましたね(笑い)。

松野 要するに、なんといっても保守二大政党を理想とした。かつての政友・民政ですね。だから社会党はなるべくつぶす。それなら憲法改正して、過激な労働運動を停止してしまえとか、共産思想をもっと抑えつけるとか。主として日教組がいましたからね。日教組の教育を変えてやれとか。そういうことが保守政党の憲法改正の中含まれているわけだ。

伊藤 でもやはり保守二党論というのもけっこう強くあって、民

主党の側でも、自由党の側でも、二党論はあったように思うんですね。

松野 ありました。保守二党論がありながら、憲法だけはやろうじゃないかということですね。

伊藤 合同を推進したのは――。

松野 合同を推進したのは、緒方さんなどはそうでしたね。

伊藤 緒方さんは「爛頭の急務」と言っていましたから。

松野 それから、吉田さんは推進しなかつたですね。自分がやる。緒方さんになったときにガラッと変わりましたね。緒方さんが保守合同の推進者でした。またそのためになつたでしょうね。石井とか緒方というのは、どちらかというと、鳩山の好きな男ですからね。緒方というのは、いちばんリベラルな言論人だつたでしょうね。緒方になることが、鳩山との合同の旗印でしょう。

伊藤 最初は鳩山総裁はできませんでしたが、総裁代行委員制でやっておりましたけれど。

松野 私のおやじも代行委員に入っていたかもしれない。四人でしたからね。緒方、松野、どちらも鳩山が好きですからね。もう保守合同に決まつてから。

伊藤 会社の合併と同じようなものですから、なかなか党の役員配分とか、閣僚の配分とかいろいろゴタゴタしたんじゃないかと思えますが。

松野 あの時の幹事長は岸でしたかね。保守合同の幹事長は岸でしょう。だから自然に。緒方も私の父も、岸が好きだつたんでしょ。ね。鳩山も岸も。もう吉田さんが辞めたときに、保守合同の流れは止められなかつたですね。それで吉田さんが辞めたんだ。その解散の時、吉田内閣総辞職の時が大問題だつたんだ。

伊藤 解散するか、総辞職するか、でしょう。

松野 吉田さんは解散を言った。ところが、指揮権発動以後の不人気なときだから、解散するということは代議士の心理としては

いちばん嫌なんだ。党がどうなるかよりも、自分が議員に上がるかどうかの方が先だから。いま解散すれば、俺たちはバタバタ負けて、鳩山の方がバタバタ勝つ。とても選挙はもたん、ということとで解散反対が党内の三分の二だ。解散をするということは吉田内閣を続けるという意味だから、信任を問うという解散だから。だから吉田は捨てても自分たちは残りたいという議員心理が働く。指揮権発動以来、吉田さんは世の中に厳しい指弾を受けている。吉田を捨てても自分たちは解散回避ということで大喧嘩になつた。

その時はたしか官房長官は誰でしたかな「福永健司」。そこは思い出します。その時に目黒のいまの迎賓館が吉田さんの公邸になつていた。外相公邸か総理公邸か知りませんが、政府から金を出してやつていた。そこで書類、解散詔書が隣の部屋にできていた。署名をするように、全部書類は整っている。宮中からの内示に向けて、解散を決めていた。

そこに、私のおやじとか大野伴睦とか緒方さんが行きました。相手は吉田さんと佐藤、それに息子の麻生太賀吉がいましたかね、秘書官みたくにして。そこで七、八人で大激論になつた。「俺は解散する」「許さない。おまえの政治じゃないぞ、みんなの政治だ。おまえ一人でなんだ」「俺は解散権があるから俺がやるんだ」「権利ばかり主張して、そんなことを言うな。おまえは自由党のおかげで総裁になつて総理になつたのに。いまから自由党を除名する。いまから総務会を開いて、総務会の三分の二で除名できるんだ。直ちに除名する。それでもおまえやるのか」ということで大変でした。

吉田さんが佐藤と二人で隣の部屋で署名するというところで、全部宮中の内示も受けていたけれど、それを最後に取りやめた。取りやめて、その次の選挙で鳩山が第一党になつた。その時はまだ吉田が第一党ですからね。その緊張した場面は、われわれヒラ代

議士でも身近に感じた。さあどうなるか、解散か、総辞職か。それこそ総辞職でホッとした。議員は残るから。それで次の任期だか解散で、鳩山が第一党になった。

その緊迫したことも、造船疑獄の指揮権発動と、その解散は、私の人生で一番緊張した二つの事件でしようね。そのほかに緊張したのは、安保改定、議会を取り巻いたあの連中。もう一つは三木内閣で解散するかしないか。この四つぐらいが、私が政治で、緊迫した、張りつめるような場面に遭遇した例ですね。

■岸内閣で初入閣を果たす

伊藤 鳩山内閣の時は無役ですか。

松野 鳩山内閣の時は無役です。私は何もしてませんでした。

伊藤 旧自由党系の集まりというのはあったんですか。

松野 それはあったんです。それが佐藤であり池田だったんですね、旧自由党の吉田内閣の閣僚をやったのが。総裁になった石橋が六ヶ月で終わり、その後で岸内閣になる。岸内閣の頃から、旧民主党系、旧自由党系という集まりが出ましたね。

伊藤 でも鳩山さんが、日ソ国交回復をやってリタイアしますね。それでその次に、ものすごい激烈な選挙があったわけですね。この時はどうなされたんですか。

松野 その時は私は佐藤に頼まれて岸の方に行つたと思いますね。あまり運動はしなかったけれど、自分の票だけは岸に入れた。

伊藤 あれで派閥ができたと言われますが。

松野 その時に、石橋の方には石田博英というのがいた。自由党で私と同期なのが、石橋の旗振りをやっていたんだ。幹事長みたいなものだ。石田博英とは親しかったし、よく麻雀をしました。日経新聞上がり、体が大きくて演説も上手、なかなか迫力のある

政治のプロでしたね。

伊藤 あとで労働大臣なんかやりますが、そのうち消えてなくなりましたね。

松野 あれは石橋の官房長官をやりましたかね。六ヶ月間。

伊藤 あの人はどうしたんですか。パツといなくなりましたね。

松野 急にいなくなりましたね。政治よりも女性の方に行つたんです。カワグチなんとかという踊り子とか、ミヤギチカゲとかね。そういう浮き名を流して、何か政治の「政」が「性」の方にいったら（笑い）。

伊藤 それで消えちゃったのか（笑い）。

松野 「石田博英は」石橋に命を賭けて、石橋が亡くなってからすっかり元気がなくなつて、情熱を失つたんですね。そこまでは、石橋の官房長官をやつて、大変な逸材だったですね。中曽根なんか比じゃない。どうも石橋に情熱を傾けすぎたんじゃないかな。それですっかり後は労働大臣をしたにしても、大したことはしていませんでしたね。

伊藤 あの時二、三位連合というのをやつたでしょう。

松野 石橋と石井で二、三位連合。私はその時は最初は石井の方に行つて、二度目に岸の方に行つたんです。だから二、三位連合の数が合わないんだ。二、三位連合なのに、岸の方が増えちゃったんだ。そうなるわけだ。一、二、三で、二、三と組めば数が決まっている。ところが、一位の岸がうんと増えた。それですれで二、三位が勝つた。それは私が二度目に岸に入れたから。それは佐藤に頼まれたりするし、二、三位になれば、石橋よりも岸の方に近親観を持つ。人間というのはいろいろグループもあるけれど、個人の意志もありますからね。一番は石井だから、私は石井に入れた。二度目はたしか二、三位連合で、佐藤のことを思いだして、岸に入れた。石橋には行かなかった。

伊藤 石橋さんという人にはあまり接点がなかったんですか。

松野 あまりなかったです。たしか東洋経済とかいう経済人だったんですね。何回も会いましたが、表面で会うだけで、個人的な深さはなかった。総裁選挙前に何回もご飯をご馳走になりましたが、夕飯を食っただけです。通産大臣をしていただけでしょう。

伊藤 最初、議員になる前に大蔵大臣をやっていたんですね。

松野 総裁選挙に出るときは通産大臣だった。通産大臣室に呼ばれて、「松野君、ぜひ会いたいから来てくれ」といわれて、さかんに総裁選挙の依頼を受けたことがある。

伊藤 両方からいろいろあるんですね。

松野 それは夕飯が多いですよ。(一同笑い)。飯を食わなければスタートしませんよ。礼を尽くさなければ。だからいろいろ話の時は、まず飯から始まるに決まっているんだ、保守党政治というのは。飯を食う回数がだんだん増えてくる。初めはぜひ来てくれと言う。そのうちに主催者側になってくれという。「今度は松野君、君の仲間を呼んでくれ」という。そんなふうにして、だんだん取り込まれるものなんだ。初めは、来てくれ、ということ。で床の間に座らされている。その次は、どうだおい、今度は君が主催でゴルフに呼んでくれんかという。それで取り込まれるわけだ。取り込むときは、石橋だ、岸だ、どっちかに決めなければいけない。そういうふうにして政治をするんです。だから初めは五、六人なんだ。五、六人が固まると、五、六人が五、六人を呼んでくる。五、六人呼んでくると、またその中で五、六人呼んでくる。要するにネズミ講みたいなものだ。倍々で増えていくのが政治ですから。

伊藤 当然お土産もあるでしょう。

松野 初めは無理でしょうね。初めは羊羹ぐらいなものですよ。それ以上の物は危なくてね。敵か味方かわからないから、バレちゃうもの。それこそ向こうに塩を贈るじゃないけれど、内容がバレたらみっともなくってね。向こうからは二百万来たぞ、というこ

とがバレて、言われたら困るでしょう。その時は相手は三百万で行くに決まっているんだから。

伊藤 あっちからもこっちからもらっている人がいるんじゃないですか。

松野 それはサントリーもいますがね。三人から取るからサントリーという。でも本人はどこに入れているかわからない(笑い)。それは政治家の中だから。

伊藤 なんとなくわかっちゃうでしょうね。

松野 わかります、それはわかる。

伊藤 ニツカ、サントリーというんですね。

松野 だいたいその時は、私たちは石井さんでしたから、石井さんを先に決めていたものだから、石井さんはせいぜい百万ずつぐらいでしたかね。自分の仲間に、名目は運動金でした。いろいろ総裁選挙でご迷惑をかけるし、飲食をするだろうからといって、私たちは当時の金で百万ずつぐらいもらいましたかね。よそからはさすがに来なかった。石橋からは、さかんに石田博英に呼ばれて、こっちの運動員になれといわれて、金を出すような顔をしているけれど、さすがに両方からは取れないからね(笑い)。それは後でバレることだからね。どうせ、二百五十人ぐらいしかいないんだから。それは話し合えばすぐわかりますよ。

伊藤 でも最後は岸さんに投票して、岸さんの方が負けるということですね。

松野 二度目でもいいから入れてくれと石田博英がいう。「おい松野、二度目でもいいから入れてくれ。それで、これを持っていくってくれ」と言うんだけれど、「待てよ、おれはもう石井からもらったから、君からもらうわけにはいかない」「いや二度目でもいいんだよ、だってまだ決まっていないうらう」ということで、二度目で勧誘された。私もさすがに、石田博英は仲間ですが、あの男はすぐバラすに決まっているから、受け取らない。だから人によ

りますね。石田というのは、麻雀をしたってインチキばかりしていたやつですからね。

伊藤 岸さんの運動員は。

松野 岸さんの運動員は、佐藤さんしか来なかった。

伊藤 佐藤さんが来ればすごいものですね。

松野 佐藤さんがずっと回って、私も佐藤さんに呼ばれた。

伊藤 その時は佐藤さんは無所属でしょう。

松野 無所属ですと回った。自分で議員会館を回った。これは見事だった。ただし、佐藤さんは金を持って歩かなかった。「岸を頼む。君は石井だろう」「そうです」「二度目でもいいよ」、そしてずっと歩いてきた。無所属で。田中なんかもそれに近かったでしょうね。初めはどっちに行っただろうか、私はどうも石橋じゃないかと思うんだけど。

伊藤 それで石橋内閣の時はまた無役になるんですか。

松野 無役です。池田が岸に行っただけかな、わからん、いや池田は石橋だったな。池田は石橋、田中も石橋だと思う。それが岸内閣の時に辞職したでしょう。たしか池田、田中は石橋に行っただ。それで岸内閣をつくるその次の時に、岸が外務大臣になったときにやめましたからね。三木武夫は明らかに石橋だったでしょうね。そういう流れだ。

伊藤 石橋さんが病気でやめるということになったときに、岸さんになるのは非常に自然な流れだったと。あまり抵抗はなかったんですか。

松野 なかった。それは一、二、三で、「相手は」石井さんですからね。石井さんよりも岸の方が人望がありましたね。それに異論を唱えるのは、不思議になかったですね。いちばん異論を唱えるのは石橋に行った仲間の筈だけれど、それだと池田しかないでしょうね。田中角栄、池田、石田博英、このクラスでしょう。さすがに、岸けしからん、というやつはあまりなかったですね。石

井さんは、そういう気持ちではなかったですけれどね。もし名前を挙げれば石井さんでしょうね。石井か岸か、ということになるでしょうね。一、二、三だったからね。あまりそれがなかったですね。それに二、三位連合の時に、岸の票が伸びたからね。それが大きい。これで党内は、岸、石井といっても、まんべんなく行くなど見たんでしょう。石橋と石井の合体で数が減ったから。私なんかその減った方ですからね。

伊藤 もうストレスでしたからね。

松野 二、三位連合で当然うんと勝つべきものが、ほとんどスレスレだった。それが岸の人気の背景でしょうね。今度再び二、三位連合で別な者を立てても、それは無理だということがわかってるわけです。

伊藤 それで「岸は」石橋内閣の副総理のような外務大臣ですからね。

松野 よくまた岸さんが入りました。争った直後に、その内閣に入るといのは容易じゃないですよ。普通なら、いや俺は野にいて批判をして、この次を狙う、というでしょうね。よく素直に入ったと、私は思う。針の筈みたかったけれど、総裁戦で負けた相手の石橋の外務大臣として、よく仕えたと思う。

伊藤 石橋さんもよく「岸を」とりましたね。だけど石橋内閣は非常に短命に終わった。

松野 八ヶ月ですから、ほとんど政治らしい政治をしないうちに終わった。

伊藤 それで岸内閣になって、それで先生は総理府総務長官ですね。

松野 総務長官というのは大臣じゃないんですよ。官房長官が赤城宗徳、これも大臣じゃないんですよ。閣僚じゃない総務長官、閣僚じゃない官房長官。

伊藤 それは前からずっとそうですか。

松野 前からずっとそうです。閣僚ではないが、閣僚以上の権限を持っていました。でも閣議の椅子が違うんですよ。丸いテーブルには閣僚しかつけない。官房長官は閣僚じゃないから、その横、総理の後ろに小さい脇机があって、そこに座るんだ。総理の横に座って脇机で議事進行をやる。閣僚じゃないから。私も総務長官の時には、その赤城の隣に座るんだ。

伊藤 閣議には入るわけですか。

松野 閣議には入る。部屋の中にはおるし、発言もできるけれど、閣議のメンバーではない。発言もできませんよ。

伊藤 でもあまりしないでしょう。

松野 いや、聞かれればします。自分の所管事項で私がいちばん聞かれたのは賞勲だった。総務長官だから。賞勲をどうするんだ、賞勲法というのは生きていますらう、というから、生きていますという。生きていますのならばいいじゃないかという。なかなか基準が決めにくい。そういう質問が年中出るわけです。私もやるうかやるまいか、基準がないんです。戦前の賞勲で、その時はいまでも覚えている、金鷄勲章だった。金鷄勲章が生きています。

伊藤 廃止になっていなかったんですか。

松野 金鷄勲章が生きていたんだ。あれは年金がついているんですよ。年に五十円だったかな。

伊藤 年金は戦争が終わったときに打ち切られたでしょう。

松野 年金は打ち切られたけれど、金鷄勲章は生きています。だから勲章を復活するなら、金鷄勲章の年金を復活しろという、その運動があった。だから金鷄勲章の年金は占領軍に打ち切られるけれど、勲章は消えていないんだ。金鷄勲章はだからいまでも生きていますよ。年金がないだけなんです。金鷄勲章を持っている人もいないですからね。もう五十年経つんですから、百歳以上でなければいけない(笑い)。その時はまだ生きていたんだ。

勲章を復活すると同時に、金鷄勲章も復活しろというわけだ、年金を。たしか年に五十円ぐらいだったと思う。

伊藤 一年前後、総務長官をおやりですね。

松野 一年ぐらいやりました。その時やったのは、勲章が一番多かったですね。勲章の等級をどうするか、基準をどうするか。

伊藤 その問題が一番大きかったですか。

松野 所管事項としては大きかったです。それから人事院が所管でした。それからもうひとつ、独禁法の改正がありました。独禁法も総務長官なんだ。恩給もそうだったかな。軍人恩給がそうだったと思う。何か、薄くて広がったんです。

伊藤 総理府はどこにあったんですか。

松野 総理公邸。いま総理が住んでいる公邸に総理府があった。だから公邸の中にいましたよ、部屋は小さかったけれど。役所はいまのところにあつた。幹部は公邸にいました。だから裏門から入った方が近い。

伊藤 総理府と官房長官はどういう関係になるんですか。

松野 官房長官は内閣の人事、いまで言えば内閣府ですね。総務長官も、いまのようにその他役所に属せざるもの。いまの勲章とか、独禁法とか、人事院というのは、所管がないんです。それから宮内庁予算もそうでした。だから宮内庁の宇佐美「毅」という長官が、予算を出すときは必ず来るわけだ。そうすると宮廷費とか、いろいろなものがある。

その時初めて知ったのは、天皇家への献金の金額が決まっているんですよ。それは物の献上品です。献上品の金額が決まっていることが初めてわかった。その献上品は、椎茸なら椎茸を献上したいというと、椎茸を換算して金額にする。年間五百万ぐらいなんです。一都道府県にすると、十万円以上の物は献上できない。それで米一俵とか椎茸一袋とか、そうやって献上品が来るということが初めてわかった。いまでも続いていると思います。私の時

は五百万円だった。一都道府県でいうと十万円ぐらいの物です。米二俵を熊本県から献上すると、もう熊本県からは献上できない。宮崎県からは椎茸を贈る。地方からの献上品は、戦前は無限に来ていたそうだ。それではいけないというので、金額に換算して献上品を決めているということが、私は総務長官になって初めてわかった。

それで「陛下はどんなものをお上がりになるか」とか、そんな話を宇佐美に聞いた。そうしたら、「陛下は混ぜご飯が好きで、炒飯とか混ぜご飯がお好きなんだ」という。「お酒は」と聞いたら、「お酒はお飲みにならない」という。「乾杯するときはどうする」「乾杯されても、ちよつと口をつけて飲まないようにされている。天皇家はお酒はあまりお飲みになりません」とか、宮内庁の宇佐美長官が、年に一回予算の説明に来るから、その機会にいろいろ聞くわけだ。

伊藤 当時の宮内庁の予算というのは、大変だったんですか。

松野 大変じゃありません。ほとんどなかったですね。ただ、「人間を少し増やしてもらいたい。どうしても皇后さまとか、女官を増やしてもらえないと、終戦後窮屈になっている。陛下がおっしゃるわけではありません。私が見ていて、少しご不自由ではないかと思う」とか、そんな話です。二人増やしてくれとか、そんな大きな要求はない。「宮中は広いから、掃除人、その費用が大変なんだ。きれいに威厳を持って、落ち葉や堀を掃除する」、そんな話をした。

それから「全国から奉仕団が来るじゃないか」というと、「奉仕団が来てありがたい。ありがたいが、奉仕団に来ていただくのも大変なんだ。私の方も手間をかけるんですよ」「どうして手間をかけるんだ」「黙っておるわけにはいから、付いていて、ここをやってくれ、ここをやってくれ、それが終わったら食事を買ってきてくれ、なかなか簡単にいくもんじゃないんですよ」と、

そんな話を聞いたりしました。

伊藤 ちゃんと記念品もあげなければいけませんしね。

松野 いちばんの記念品は、陛下の顔が見たいという。だから奉仕団が来るときは、なるべく天気がいい日で、陛下に回っていたいで、挨拶でもしていただく。それが最大の土産だという。

伊藤 あと、煙草を差し上げたりしますね。

松野 菊のご紋の煙草をあげる。そういう費用なんです。それからもつと意外だったのは、正月に何百人のご招待をするわけだ。そうするとそこに、備品、什器、茶碗を出すわけだ。それがなくなるんだって。

伊藤 持って帰るやつがいるんだ(笑い)。

松野 持って帰るやつがいる(笑い)。菊のご紋は一生に一度だから、お茶碗とか、あらゆる物がなくなる。それは大変なんです。一回に毎年相当お呼びするわけだから。その人たちが、必ず一つや二つ持つていく。杯(さかずき)だけ、と決めてもらえばいいけれど、そうじゃない。杯もお茶碗も。それを、いけません、とは言えない。その話を聞いたから、笑った。われわれ平民が知らないご苦労が宮中にはあるなと思った。お膳まで持つていく人がいるんだって。あんな大きい物をどうやって持つていくのか。これも菊のご紋が入っている。「知っていても、いけませんとも言えないし、黙って見ているんですが、それは非常に尊敬の意味でお持ちになるんだから、大変なんですよ」と言う。なるほど、われわれ平民の知らないご苦労がある。宮中は非常に質素なんです。私はそれを見て驚いた。食事なんて、われわれの家庭とほとんど同じなんだ。

それから「いまの話ではありませんが、むかし陛下が新しい顕微鏡を買いたいと言われて、ご相談があった。どうしても予算がないので、一年お待ちくださいといって、一年待たせたことがある」という話を宇佐美がした。「本当に申し訳なかつた。どこか

を削って、食費でも削って買ってあげればよかったんだけど、陛下が『予算があるか』と言われたから、『予算はありません』と言ったら、『じゃあ来年度まで待つよ』といわれた」というんですね。昭和天皇ですよ。「いまでもあの時は申し訳なかったと思っっています」なんていう話をしていましたね。

私も農林大臣の時、十一月二十三日に新嘗祭の行事が九時から四時間かかるんです。九時から始まって十二時半頃までかかる。そこまで四時間、閣僚は勤める。農林大臣だけは、二時からまた四時間、二回勤める。「宇佐美さん、二度も勤めなきゃいかんのか」と聞いたたら、「いやお勤めにならないければ、ならなくても結構ですが、みなさんお勤めいただいています」という。それを聞くとね。

あそこは三献堂といいますが、暗いところで、吹きさらしで、火鉢一つなんです。その火鉢一つで、三時間ぐらしかかるでしょうね。陛下は御簾があつて、影だけ見える。こちらにウネトというんですか、白装束で琵琶を弾いて歌う人がいる。二十人ぐらい。それを三時間歌っているんですが、御詠歌みたいなもので、交替で歌う。陛下の影だけ映っている。こちらは屋根があります。吹きさらしのところ座っている。「歴代の農林大臣にはお勤めいただいています」と言われれば、私もいやとは言えない。ホカロンはなかったから、白金カイロを入れて、二回目も勤めたんです。

そのあいだ、二時間ぐらい待っている間、「ときにあの御詠歌というのはなんだ」と聞くと、「なかなか難しい。しかしなかなか猥褻な言葉がたくさんあるんです」、そういうものだという。私たちはよくわからんが、御詠歌で歌うんです。二十人ぐらいが十人ずつぐらい交替で、筑前琵琶みたいな琵琶を弾いて歌うけれど、御詠歌ですからわからない。二時間のあいだに、宇佐美長官に「あれはどんな意味があるんだ」と聞いたたら、「昔の話で

すから、なかなか猥褻な文句が多いですよ」という話を聞きまされたけれどね。御詠歌というのは、むかしはそんなものかもしれないですね。ほかに何もないんだから。

伊藤 じゃあ、だいたい宮内庁の予算は通したんですか。

松野 その時に私は予算と陛下の質素を知ったな。世間で言うけれど、陛下というのは予算の生活で厳しくて、顕微鏡も予算がない。宇佐美が申し訳なかったという意味で言ったんです。あの時は本当は食費を削って買ってあげれば良かったのに、陛下が予算がなければ来年でいいよと言うから、ついそうした。それぐらいなんです。宮内庁の予算は、「献納品があるだろう」というと、「献納品は制限があるからただけじゃないですよ。それは金銭に換算して決めるんです。陛下の食事は、失礼ですが、皆さんの食事は知りませんが、同じでしょうね」という。だけど、什器備品がなくなるのがいちばん困るという。ナイフ、フォークまでみんな揃えるやつがいるという。「どうして持つていくんだ、ポケットに入れて持つていくのか」というと、「いやそうじゃありません」という。余った物は必ず風呂敷で持つて帰るようになっているんですね。

私が大臣になったとき、総務長官になったときでしたか、宮中に行つて、すぐ隣に佐藤栄作がいた。「おい松野、これをうまく入れることが閣僚の資格だよ。上手に入れるやつは何回も大臣になつていくやつだ」と言つて、小さなお膳から、箱の中に鯛を入れて、そこにきんとんを入れたり、上手に入れるんだ。佐藤が隣で、「松野、これを上手に入れるようにならなければ、おまえは政治家じゃないぞ」という。まるで試験だ。白い箱と、白い風呂敷がお膳の横に置いてあるんです。それでお膳はほとんど食べないんだ。出てくるのは暖かいおつゆと、お雑煮とちよつとした混ぜご飯が出る。混ぜご飯とおつゆだけ飲んで、あとの物はお持ち帰りか常識なんだ。それは冷たくて立派にできている。そこにち

ちゃんと白い箱と白い風呂敷が置いてあるわけだ。「佐藤は」それを上手に入れないと大臣の資格はないんだ、見ていろ、と言つて、ちゃんと鯛を入れて、横にきんとんを入れて、ぴたと入る。その時に茶碗が入っていくわけだ。私も杯だけは持つてきた。杯とお茶碗はいま家にあります。

それを、宇佐美長官が予算の時に言うのを、わが身に感じた。おれもお茶碗とか杯をもらつてきたよと言つたら、それぐらいならまだ可愛い方ですという。毎年少なくとも四千人は呼ぶでしょうね。天長節だとかありますからね。だいたい二百人ずつ。二十回呼ぶと四千人だ。それがみんな杯とお茶碗から、ナイフからフォークからもつていつちやつたらね。

伊藤 補充するのが大変だ。

松野 その費用があつたからわかつた。案外なものだなと思つた。宮中は予算としては質素なものです。せいぜい女官を二人増やしてくれ、ぐらいのもんです。それはまことに質素なものです。

伊藤 勲章の方は復活されたわけですか。

松野 私ときは復活せずにとつとそのまま保留になつた。そのまま改正せずに、いまはむかしのままのものを基準だけ変えてやっています。

伊藤 その基準を変える作業はおやりになつていたわけですか。

松野 作業は私のときにやりました。

伊藤 でも決着はまだー。

松野 決着はできなかつた。

小池 そうですね。勲七等だけをやめるといふ話になっていますね。

松野 その後でできたんですね。むかしは勲八等だったんです。私も戦争中の勲六等をもらつていますね。その基準を決めて、賞勲というものはあるけれど、基準は閣議決定ですから、法律にせず閣議決定だけでやつた。それを次の次ぐりにやりました

ね。

伊藤 何か役人優位だといつて話題になつていますね。

松野 役人優位なんです。あれはどうしても基準を変えなければね。

小池 民間からは勲四等ぐらゐまでしかなりにくいんですね。

松野 ときどき商工会議所の会頭だといふと勲二等ぐらゐありますけれど、一般的には役人が多いですね。むかしは役人は月給が少なかつたから、勲章と恩給で釣つたわけだ。ところがいまは役人は安くはないですからね。だからもうその制度はおかしいんです。むかしは官僚は質素で「給料が」少ない。その代わり、恩給と勲章で釣つたんだ。

伊藤 いまは、給料はいい、天下りはある。

松野 いまは良すぎます。もつと官僚は何かしないとね。行政機構を一府十二省にしても役人は減らない。人事院なんです、問題はね。

伊藤 その人事院を担当なさつたんでしょう。

松野 人事院というのは給与勧告を出す。もう一つは身分保障をする。たしか一度、私のときでしたか、河野農林大臣だから鳩山内閣の時でしょう。河野一郎のことを聞かない課長がいた。その課長をすぐ罷免した。そうしたら人事院に駆け込んだ。人事院は不当人事とみた。不公正人事という審査基準があるんだ。その審査会に提案して、これを不公平人事だとして、復職命令が出た。それでまた「罷免された課長は」農林省に帰りました。そのときはもう河野は辞めています。そういうことが人事院で現実にはあるんだということがわかつた。

伊藤 ご在任中にはそういうことはありましたか。

松野 私の在任中にはありません。河野一郎の在任中であつたことが、私は人事院を担当したからわかつたわけです。

伊藤 じゃあほとんどご在任中は給与の引き上げ勧告ですか。

松野 給与の引き上げ勧告で、今度いくらすと前もって相談に来る。いいも悪いも言えませんけれどね。ただ報告を聞くだけで、威張りが言えません。人事院で決めたとおり。だから干渉はほとんどできないんだ。

伊藤 いろいろな算定基準で計算していきますからね。

松野 ただ人事院の給与を出すのは私のところ、総理府で出すんだ。それから宮内庁の給与を出すとき。それが所管ということです。干渉とか何とかはできません。給与を出すときはどこから出すか、総理府から宮内庁の予算が出る、総理府から人事院の予算が出る。それから質問があれば、私が出したんだから、総務長官が答弁しなければいかんわけだ。

伊藤 宮内庁関係の問題でも、ですか。

松野 予算だけです。監督はできません。予算が、私のところを経由して出るわけですから。人事院の給与も私のところから出る職員給与です。

伊藤 これは国会では、どの分科会に入るんですか。

松野 分科会は総理府の分科会。

伊藤 総理府の分科会があるんですか。

松野 総理府分科会、ほとんど質問はありませんけれどね。

小池 ただ、宮内庁で二人増員すると、当然予算は増えますね。そうすると例えば普通の役所だったら大蔵省と折衝するとか、概算要求をするとか、そういうことは総務庁でやるんですか。

松野 もし交渉があれば「やりません」。ほとんど呑みます。ほとんど、交渉になることはない。

伊藤 人事院もそんなにないでしょう。

松野 ありません。あれば、私がそれを人事院にいうわけだ。こんなことをしてどうなるんだ。そうすると、人事院が大蔵省に行つて説明するでしょうね。私が説明しなくても、だいたい直接やるでしょう。その窓口だけだ。もし聞くなら、大蔵省が人事院に

聞きますよ。

伊藤 賞勲局とか宮内庁、人事院。

松野 それから独禁ですね。公正取引委員会。そういうところの予算は、総理府から出すわけだ。事務経費ですからね。

伊藤 そうすると何か非常に事務的な官庁なんですね。

松野 独立機関ばかりですから。指揮命令権はないようなところだ。会計検査院もそうだったかな。会計検査院は直接だったかもしれませぬね。「院」だから。

伊藤 そうすると、総理府の総務長官というのはそんな忙しい仕事ではないんですね。

松野 忙しくはない。ただ、広く勉強するだけでしょうね。

伊藤 勉強にはなるんですか。

松野 その間に、人事院総裁に話を聞いたり、宮内庁からは宮中のことを聞いたり。わからないから、どんなご生活をしておられるか聞くぐらいなものです。それで献上品がなかなか難しいんだなということがわかるし。

伊藤 閣議には出られるわけですから、どんな様子かというのがわかるわけですね。

松野 閣議は毎回出ます。発言も、総理がいえばいいんですね。

伊藤 総務長官は一年ぐらいですが、その間で閣僚でー。

松野 その間は、赤城と岸さんと同じ総理官邸にいるから、ほとんど一日おきに会っていたわけだ。暇だから。赤城は忙しいですよ。忙しいけれど、岸さんは暇なときが多い。岸さんが空いた時間にはいつも遊びに行っていたわけだ。官邸の中にいるんだから。伊藤 岸さんはなんで忙しくないんですか。

松野 忙しくて空いている時間はありませんからね。それから食事はいつも昼一緒に食べますからね。食事には一時間は空けますでしょう。私と赤城と岸さんと三人の時が多かったですね。

伊藤 赤城さんはどんな感じですか。

松野 赤城はね、非常に飄々としていいおっさん、人柄のいいおっさん、という感じだった。

伊藤 あの人も茨城ですね。橋本登美三郎さんと同じだ。

松野 戦前に一回出たかな。岸さんとも戦前から親しかった。おとなしいけれど、一回言い出すと頑固でした。いちばん頑固だったのは、その後で防衛長官になったとき。彼が防衛長官になって、私は労働大臣になるんです。それも岸内閣です。そのときハガチー事件。中曽根も科学技術庁長官でした。これはデモでハガチーを日本に入れないと行って大変な騒ぎになる。「それは内乱じゃないか、自衛隊を出せ」というような元気のいい声を中曽根が出していた。私もそうかな、と思って、「内乱だったら出したらいいじゃないか」というような話をしたら、赤城は黙っているんですね。

閣議が終わったたら、佐藤がたしか大蔵大臣だったけれど、「おい松野、ちよつと来い。あの話はするな。赤城が駄目だよ。赤城がそんなことをしたら、今日辞めるよ。出さないということに決めているんだ。おまえもあんなことを言うな」と注意された。その時に佐藤が言ったのは、「赤城は絶対に自衛隊をこんなことには使わない。国民に銃を向けるような危ないことはさせたくない。どんな内乱でも、赤城は頑固で、決めている。岸と二人で決めているから、おまえ言うな。それが世間に出ると立場が悪くなるぞ」ということです。

伊藤 落とされちゃう。

松野 「おまえも悪くなるし、赤城も悪くなる。そんなに大きな声で言うもんじゃないぞ」と注意された。その時、赤城は頑固だからね、と言われた。いま考えたら、赤城の言うことが正しかった。あんなことで自衛隊を出したら、騒ぎは大きくなったでしょうね。

伊藤 閣議でよく発言する人っているんですか。

松野 中曽根がよくしていた。

伊藤 それはありそうな話だ（笑い）。

松野 それは何を言ってもいいんですよ。言うけれど、みんな聞いただけで終わりになっちゃう。無意味なことを言うと、相槌を打ったり、議論が進まないんだ。だから意見発表で終わってしまふんだ。議事進行にはならない。

伊藤 それは一応閣議が終わって、閣議の懇談会になってからしゃべるんですか。

松野 いや、閣議の時にしゃべってもいいんです。それから各閣僚がいろいろなることを言うときには、「ちよつと閣議が終わってからにしよう」と言って、「閣議はこれで終わります」として、官房長官が「それでは懇談に移ります」といって、そこで議論が百出するわけだ。要するにその議論は、次に持ち越す議論なんだ。

伊藤 声をあげておく、ということですね。

松野 それでみんな研究して、この次にしよう。まだ閣議の決定まで行かないと。そういう議論は自由にしていいです。しかしそれは直ちに政治には及ばない。

伊藤 閣議の時は、事務次官会議でいたいこなされて、ただサインするだけでしょう。

松野 ただその中に、これはちよつと待ってくれと止める場合があるんです。事務次官会議で済んだものを止めることはあるんです。もう一回事務次官会議に差し戻す。そういうことはいくつものがあります。これは大臣と事務次官と打ち合せが済んでいないものがありますからね。

伊藤 そんなことがあるんですか。

松野 あります。

伊藤 それで、総務長官で少しごゆつくりなさって、一年ばかりで労働大臣になられますね。

松野 その時に、経済企画庁長官が誰か辞めたんです、誰だったかな。病気が何かで辞めた。和歌山の年寄りでした。その時に、私が経済企画庁長官になるか、坂田道太がなるかということになったんです。それで坂田道太がなった。私はそのままなれなかったんです。なんで自分がなり損なったのかなと思ったら、それはそれらしいいろいろなことがあったようです。坂田道太が経企庁長官になった。和歌山の人が病気が何かで辞めたんです。それで私になるかなと自分で思っていたが、ならず、その次の労働大臣になったんです。「辞任した経済企画庁長官は世耕弘一、後任は菅野和太郎。坂田が就任したのは経済企画庁長官ではなく、厚生大臣」。

伊藤 その時は、党内の派閥でいうと、「松野さんは」どこに属しておられたんですか。

松野 私はその時はまだ石井派だったでしょうね。坂田道太も石井派だ。それで石井さんが坂田道太を推薦した。

伊藤 だいたい議員歴からいうと同じぐらいなんですか。

松野 坂田が一回上だった。それで石井さんが坂田道太を推薦して、坂田道太が閣僚になった。私はまだその時は閣僚じゃなかった。官房長官と総務長官は閣僚じゃなかった。

伊藤 それで労働大臣になるときは、改造ですか。

松野 岸内閣の改造。それで私を労働大臣にしてくれた。

伊藤 前任者は誰ですか。

松野 倉石忠雄ですね。

伊藤 倉石さんは倉石労政と言われるぐらい、労働通なんですかね。

松野 通というか、大したことしていませんよ（笑い）。

伊藤 そう言われたら身も蓋もないんですけれど（笑い）。

松野 要するにその時代に、中労委とか公労委というのがうまく働いてくれたんですよ。だいたい中労委、公労委でストライキ開

題でしたね。その上に倉石がいて、知った顔をして座っているだけですよ。労働行政というのはそんなものです。

私になって、「ストライキばかりやったら困るじゃないか」と言ったら、「ストライキは必ず終わるんだから心配ありません」という（笑い）。中山伊知郎「中労委会長」に言われたんです。「ストライキは必ず終わるんだから心配ありません。一年、二年、三年、終わります。会社がつぶれる前には終わるんです」と。

伊藤 会社がつぶれることもありますね（笑い）。

松野 「労働行政は気が長いんです。急いだって駄目です。裁判じゃないんですから」と言われた。それを言うと、歴代の労働大臣は、本人は大したことしていないな、たまたま本人がおるときに、いろいろな事件が起きて、事件が解決すると、倉石労政とか石田労政と言われるんだな、と思っただけです。私の後がまた石田博英なんです。石田、倉石、松野、石田とつながったんです。石田も倉石も行儀の悪い大臣でね。表彰状を書かなければいけないんだ。勤労の賞があるでしょう。労働安全の表彰状。

伊藤 あれはサインするだけでしょ。

松野 表彰状だから書かなければいかんわけだ。

小池 名前だけですよ。

松野 名前だけ。それを印刷して何万枚か。

伊藤 そんなにあるんですか。

松野 いろいろな賞状があるんだ。労働安全とかなんとか、何千枚ありますよ。全国に表彰状を出すんだから、その署名を書くわけだ。さあ困った。いくら書いても字がうまくない。自分ではいけれど、印刷したら合わないんだ。困ったな、悩みきって、いままさら急にいくら習字をやってもうまく書けない。シブヤというのが官房長だった。シブヤというのは同期生で、「おいシブヤ、俺は困った、おまえ書け」といったら、「それはできない、自分で書きなさい」という。二日間も練習したけれど、うまくなら

ない、困った。「じゃあムラカミに書かせましょう。ムラカミという達筆なのが労働省の部長にいる。これはムラカミ流という流派を持つぐらい上手なんだ」という。「それをどうするんだ」というと、「それが書いて、その上を撫でろという。それは自分で書かなければいけない。代筆はできない。しかし、なぞることはいいんだ。だからなぞりなさい」「恥ずかしくて俺はいやだ」「そんなことは心配ない。倉石も石田もみんなやっただから」（笑い）。

啞然とした。倉石、石田も前大臣はみんなやっただから、あなただつて恥ずかしくないというんだ。しかし自分で書きなさいという。倉石、石田がたいした大臣じゃないと言ったのは、そういうわけだ。そういうのを知っているから、倉石労働とか石田労働と言われると、汗が出る（笑い）。そんなものはないですよ。世間が言うだけだね。

伊藤 でも何万枚も書くといったらー。

松野 書けば、それを印刷してくれるんです。それだけに名が残るから。

伊藤 あちこちにかかりますからね。

松野 かかるから。私は恥ずかしいから。そうしたところが、なに、心配ありませんという。石田、倉石も同じことをした。あなたがしたつて恥ではない。ただし自分で書いてくれ。下にムラカミに書かせて、それを何十回か書き直して書いて、それが私の残した表彰状だ。私が書いたことは間違いない。

伊藤 自筆。ほかに書いたものと全然字が違う。

松野 もう一つは、倉石、石田には、運転手と護衛が付くわけだ。ところが倉石も石田も行儀の悪い奴で、必ず彼女のところに年中行っているはずだ。どうしたんだろうか、とまたそのシブヤに聞いた。それは五時になったら護衛と運転手を帰して行けばいいという。それを習ったから、私も帰して、五時以後は自由にしてい

た。そうしたら後で、全部報告が行っているんだ。私はわからんものだと思ひ込んでいた。そうしたら、何のことはない、全部警察は報告しているんだ。

伊藤 それはSPですか。

松野 SPを帰すと、SPはすぐにそれを所轄署に言うらしい。所轄署が見ているんだから、何のことはない、私は大恥を書いた。ということは石田博英も同じだったんです。あれは同期生でしたけれど。石田と倉石に習うわけです。こうすればいい、ああすればいいと。じゃあそうすると。後で聞いたら、官房長が笑っていた。みんな知っていますよと言う。だから石田、倉石も案外幼稚なものだ。それを真似した私はもつと幼稚なんだ。だから私が倉石労働とかたいしたことはありませんよと言ったのは、そういう裏を知っているものだからね。その時、森山真弓というのが婦人局にいましたね。

伊藤 政務次官はどなたでしたか。

松野 三木派の人でした。

伊藤 それは自分で選ぶんじゃないんですね。

松野 それは選ばない。政務次官を選ぶ権限はありません。大臣もありません。内閣で選ぶ。内閣ということは党で選ぶんです。みんな党で決めてきますからね。それを拒否する権限は大臣にもありませんね。党でだいたい決めて、内閣が任命。だから労働省の任命じゃないんです。内閣の任命ですからね。だから人事権は内閣にある。内閣ということは総理総裁にあるということですよ。

伊藤 でも役人の人事に関与するとなかなか厄介なことになるというふうによく聞きますが。

松野 役人の人事は、労働省なら労働省の人事は労働大臣が権限を持つている。持つていますが、それを変えようと、次の大臣の時にしつぺ返しが来るんだ。だから選ばれたものも困る。仮に課長を抜擢して局長にしたとする。今度は次の大臣になったとき、そ

の局長はおそらく左遷されるでしょうね。外に追い出されるでしょう、事業団とか。それは何かというと、秩序を守らないからだ。選ぶことが悪くなる。だから自分のカラーで役人を動かすと、その大臣の方が鼎の軽重を問われますね。

伊藤 黙って見ている以外ないわけですね。

松野 どちらでしようかと聞きに来るときは、どちらを選んでも自由です。だいたい事務次官が、これとこれの二人の同期生をどっちにしようかという。その時は自分の好きなものを選ぶことはできるけれど、そうではなしに、下から引つ張り上げたりすると、あとでその人が大変だ。

伊藤 多少そういう選択権を残すんですか。

松野 だいたい、いろいろなことで大臣の意向を事務次官は敏感にわかりますからね。この人はこういうことをする。役所の中にこの人の関係者がいるというと、サツとわかるんでしょうね。そうすると、私が推薦して入れたものを秘書室に採用したりはしません。いままで労働基準局にいたのを、本省の秘書室に抜擢しましょうかとか、転勤させましょうかとか言ってきました。事務次官が言ってきたのは呑んでいいわけです。事務次官が言わない人事は、やるものではない。それは必ず悪例となって、次にしつべ返しになる。本人も後で困りますね。省内の人事を大臣が自分の趣味でいじくると、後でしつべ返しが来ますね。替わった後で。

伊藤 さつきおっしゃった河野さんの人事なんていうのは、河野さんはかなりやったでしょう。

松野 河野は、それを大胆にやった男ですね。やったけれど、結局あとで復職命令が出ちゃった。どの課長ということでは人事院は言わないんですが、要するに不正人事ということで復職命令が出る。不正とはなんぞやというので、農林省の事務次官たちが検討して、適当なところへ戻したんでしょうね。けどあまり栄転はしませんね。そういうのは無理にくつつけたんだから、課長

クラスのどこかに入れたんでしょうね。

伊藤 やはり各省庁ともこういう「ピラミッド型の」組織で、長年の慣行があつて、大臣といえどもめつたやたらにそれに手を突っ込んだら危ないということですね。

松野 危ない。突っ込めないことはないけれど、そんな権限をふりまけば、必ず次の大臣がまた権限をふりまくでしょうね。そうならば人事はめちゃくちゃになるでしょう。それで人事院というのがそれを監視している。いちばんは公平公正人事ということですね。

伊藤 そのことが有能な役人であるかどうかということで、有能な役人を抜擢するというのは難しい。年次で行っちゃうということですね。

松野 もう一つは、人事院のいう資格があるから、民間採用ができない。いまそれが問題になっているけれど、民間との人事交流といつてもできませんよ。いまやっているのは、特別職だけではないんです。一般職はできないんです。資格がないから。だから講師とか顧問とか臨時とか、そういう特別職にはいまでも民間が採用できる。一般職では人事院が頑としていて、できません。それで人事院改廃ということがあっても、現実には難しいでしょうね。

伊藤 すみません、時間になりました。労働大臣になって最初は三井三池ですから、その話からこの次に伺います。ちょうど切れがいいところです。それでは次回の日程を決めさせていただきます。

松野 原稿は、よく細かく書いておられますね。私はあれを見て驚く。私がおんなに話すのに全部書いてあるのね。あれはちよこちよこ直していますけれど。私はいつおんなに書かれるのかと思う。

伊藤 また長々とお願いします。

松野 どうなるかと思いましたが。こんな雑談でいいんですか。
 伊藤 ええ、いいんです。だんだんに進んでいきます。雑談でないと聞けないことつてあるでしょう。もしちゃんと文章を書けということになるよ。
 松野 私の頭の中には雑談しかないんだ（笑い）。
 小池 文章に書けということになると、本当の機微がわからない

んですよ。
 伊藤 いろいろなことが落ちますからね。
 松野 文章を書こうとすると、いいことを書こうと思うから嘘を書くからね（笑い）。
 小池 番組の作り方と同じですね（笑い）。

政局関連年表

「KSD事件概要」

- 二〇〇二年十月六日
 疑惑発覚。東京地検特捜部が財団本部などを背任容疑で家宅捜索、強制捜査。
- 二〇〇〇年十二月十二日
 KSDの関連財団が進めていた「ものつくり大学」について、大学設置・学校法人審議会は設立を認可したが、「KSD及びその関連団体との関係を排除すること」と異例の条件を付けた。
- 二〇〇一年一月十六日
 KSD側の事業を後押しする国会質問をした見返りにわいろを受け取ったとして、東京地検特捜部が、小山孝雄参議院議員（自民党）を受託収賄容疑で逮捕。KSDをめぐる事件は、政界汚職に発展。
- 二〇〇一年一月二十二日
 額賀福志郎経済財政担当相が、KSD側からの資金提供問題の責任をとり、森喜朗首相に辞意。
- 二〇〇一年二月五日
 森首相の施政方針演説などに対する各党の代表質問が、衆院本会議で開始。森首相は答弁で、KSDからむ受託収賄事件について初めて謝罪。また、辞任した額賀前経済財政担当相を任命した責任について、事実関係を承知していなかったことを強調。
- 二〇〇一年二月二十六日
 参院が本会議で、KSD問題で議員辞職願を提出していた村上正邦前自民党参院議員会長の議員辞職を全会一致で許可。
- 二〇〇一年二月二十八日
 参院予算委員会が、KSD事件で、村上正邦前参院議員に対し証人喚問。村上氏は政治責任は認めめたが、受託収賄容疑に関する証言は、大半を拒否。
- 二〇〇一年三月一日
 東京地検が、村上正邦前参院議員を計七千三百万円に上る受託収賄容疑で逮捕。
- 二〇〇一年三月五日
 民主、自由、共産、社民の野党4党が、森内閣に対する不信任決議案を衆院に提出。決議案は同日の衆院本会議で採決され、与党3党などの反対多数で否決される見通し。
- 二〇〇一年三月十三日
 森喜朗首相が自民党大会で、9月の総裁任期切れを待たず早期に総裁選を実施する方針を表明。党員に対して事実上の退陣表明を行ったことで、与党内の後継総裁選びが本格的にスタート。

松野 頼三

オーラルヒストリー

第5回

[2001年2月15日12:00~14:00]

[インタビューアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

武田知己 (東京都立大学助手)

(於：松野頼三事務所)

■ KSD事件と機密費事件について②

松野 「原子力潜水艦の話をしながら」……グアムに行った時に、グアムの基地で、「原潜が」泊っているところを見学させてくれました。三階建てぐらいの大きなものでしたね。その潜水艦には映画館があるし、デイスコがある。娯楽がないといけませんからね。その船はだいたい四十日ぐらい海に沈んでいるそうですよ。じっと沈んでいる役だそうです。四十日間も、水はどうするんだと聞いたら、水は使い放題だという。原子力だからでしょうね。テレビはアンテナが必要だから駄目だが、映画はある、デイスコがあつて遊び場がある。一ヶ月間じつと座っていると、空気が一番困る。空気はどうするんだといったら、アンテナを出して吸い込むんだそうです。

その時に、驚くほど大きい金庫があつた。その金庫は赤いマークがついている。これはなんだと聞いたら、それは核弾頭だという。大きな金庫で、人間が入れるぐらいだ。真つ赤なテープが貼つてあつて、核弾頭だという。核弾頭はいくつ入っているかと聞いたら、それは知らないと言う。「知らんと言うが、君は艦長だろう、どうして知らないんだ」「私も知らないが、前の艦長も知らない。全部知らないんだ」「どうして知らないんだ」「電報で暗号が来ない限り、わからないようになってる。それがわかつたら、歴代の艦長でみんな知っていることになる。私で十二代目だ。だから暗号はみんな知らない。中に入っていると、思うけれど、見たことはない。模擬弾でいつも訓練している。たぶん模擬弾と同じものが入っているだろう」と言う。だから、本当には見ていないですよ。

それで、二年に一回ぐらい検査に来る。その時は艦長はじめ全職員が外に追い出されるそうです。六人ぐらいのスタッフが来て、

一日か二日チャカチャカやって帰るといので、それは大統領直属の核従業員でしょうね。それを見ると、日本に入つて来た原潜に核があるかどうかという事は、わからんというんだ。

あるという事は確信していても、見た者はいない。これには私が驚いた。それが核管理だと思つた。だから暗号は誰も知らないんだ。必要な時にペンタゴンから暗号が通知されて、その時しか開けられないようになってる。それがブラックボックスでしょうね。だからそれを見て、なるほど、そういう管理をしているのなら、艦長が知らないというのは嘘じゃないだろう。現物を見た者はペンタゴンの核スタッフだけ。スタッフは民間人か、と聞いたら、専門の民間人だと言っていました。それ以外には見た者はいないですよ。

だから、核管理というのは嚴重にはしているわけですね。船が危なくなつたからといって、艦長が突然それを開けて撃つたりしたら、たまらないからね。核がいかに嚴重に管理されているかという事は、それでわかつた。

伊藤 食事をしながら、最近の話についてお考えを聞かせてください。KSD「ケーエスデー中小企業経営者福祉事業団」の問題と、いわゆる機密費問題ですね。

松野 いままで私たちもいろいろ事件を取り扱つたが、KSDみたいな事件はないですね。それは、金持ちとかブローカーから金を取るようなことはありません。ロッキードから金をつまんだ、リクルートからつまんだ、いろいろなものがあるけれども、それは金持ちから、取引の時のコミッションみたいにして摘むのであつて、集めた会員の金を使うやつはいないと思いますよ。これは初めてで、しかも中小企業の会員の金をつまんだという者はいない。これは悪質であつて、組織的で、個人犯罪じゃないですよ。こんな事件は私は五十年の中で初めてだ。いろいろ汚職事件はあつたけれども、それは個人の犯罪だ。個人の利益のためにやる、会社

の利益のためにとるんだが、今度のはそうじゃない。中小企業という組織を楯にした一種の組織的詐欺でしょうね。私はネズミ講を思い出すけれども、これはちよつと悪質、しかもそれが自民党の中の組織された議員団という背景を持って、そのボスが何人かいる。こんなのは初めてだ。

伊藤 あれは、やはり集団ですか。

松野 集団でなければ、あんな補助金を出すことはできませんよ。しかも補助金ですからね。補助金を出すということは、個人ではできない。集団でなければできない。その証拠に、天下り役人が各省から入っているでしょう。これは役所も一緒になっているんだ。

伊藤 じゃあ、役人と政治家と組んでいる。

松野 組合と組んで、ネズミ講式の補助金に利益を得ようとしている。そして党費を立て替えた。まあ、立て替えといつても、もったということでしょうね。こんなことは初めてです。

伊藤 それは、いま話題になつていような人たちだけではなくて、もうちよつと広い範囲の背景があるということですか。

松野 あるでしょうね。役所もひどすぎる。補助金を組んで、代々局長を送り込んでいっている。最後になると、法務省の出入管理局まで入っている。管理局長が二代ぐらい入っていますね。それから各省とも三年ごとに次の局長を送り込んでいっているわけだ。ここまできると、ひどい。こんなことは、まずこの五十年間にありませんよ。まるでネズミ講の詐欺団体を政府が認めて、そこに役人が入っているようなものだ。

伊藤 しかし、ああいうことをやって噂にならないものですかね。

松野 それは、黒字で動いている時は噂にならないんです。赤字になつた時に、噂になるんだ。補助金で穴埋めしている間は、自分で使い込んでも噂にならないでしょう。赤字になつた時、噂になる。今度も穴埋めができなくなつたから噂になつた。それまで

は補助金で泳いでいますからね。今度の学校でつまずいたわけだ。寄付金が集まらないから。

小池 バレるといふことは、あんな形で無理をしたということなのでしょいか。

松野 あれで民間資金が集まらなくなった。それで組合費を横流しした。だから本体が赤字になつたんでしょね。それでわかつてきた。その中に政治献金が十数億入つていたんですね。それは当然、自民党は返さなければいけません。道義的にこれは返すべきでしょうね。血税と組合員の血と汗の基金だから。それはネズミ講と同じですよ。

小池 自民党にとっては、中小企業というのは重要な支持母体ですからね。

松野 今まで五十年で、初めてのことで。

伊藤 外務省の問題も同じようなことじゃないですか。これも初めてじゃないですか。そうでもないですか。

松野 初めてです。機密費が漏洩するなんていうことは、まず漏洩がおかしいんだ。何に使つたかということより、私は漏洩することがおかしいと思う。漏洩しちゃいけないことなんだから。何に使つたかという議論じゃない、漏洩することが問題なんだ。

伊藤 たしかにその通りですね。じゃあ、なんで漏洩したんだらう。

松野 それは、度が過ぎたんです。

伊藤 内部告発ですか。

松野 内部告発というか、本人の度が過ぎたんでしょね。松尾「克俊・元外務省大臣官房総務課要人外国訪問支援室長」が、機密費をわかるような使い方をしたからです。馬を買つたからでしょうね。

小池 説明がつかなくなつたんでしょね。

松野 マンションまではわからなかったが、馬を買つた時はバレ

た。あれは中央競馬会なら、馬主になれないんです。なぜかという、身分と所得を調べなければ中央競馬会の会員にしないんです。中央競馬会ではなれないから、地方競馬会へ行つた。そのへんが、私からみるとちよつと公私混同も派手すぎる。機密費はお互いに紳士の使い方わからんように使うけれども、形を残しちゃいけないだね。私もずいぶん機密費はもらいましたよ。何に使つたかと言われると、それは機密だから言えませんがね（笑い）。そういうものにはしか使っちゃいけない。機密費で家を買つたりなんて、私たちだったら絶対にしませんよ。

伊藤 家を買うほどあるんですか。

松野 はい。ないが、残るものにしちゃいけない。

伊藤 総務長官とか労働大臣も、機密費という名目ではないでし

ようけれども、報償費はあるわけですよ。

松野 それは官邸からもらつてくるんです。

伊藤 官邸からもらうんですか。

松野 はい。

伊藤 各省庁にもついていると思いますけれども。

松野 それは一本になつていて。その代わり食糧費というのがあつたんです。昔は。それを報償費一本にした。

伊藤 じゃあ、労働省で外国からのお客様を接待するということ、

どこから金が出るんですか。労働省だつて少しは持つていてるでし

よう。

松野 それは一般会計です。

伊藤 一般会計でそういう費目があるわけですか。

松野 それは会計検査院の検査を受ける金です。受けないような

金は、官邸からもらつてくるんです。

伊藤 官邸には誰がもらいに行くんですか。

松野 官房長または大臣です。

伊藤 大臣が自分で行くこともあるんですか。

松野 あります。私は労働大臣の時にもらいに行つたもの。

伊藤 いちおう領収証は書くんですね、メモみたいなものは。

松野 書かない。書いたことはない。

小池 ただ先生の頃は、機密費を取るときに、いまみたいに報償

費だとか食糧費ということ、世間の目が厳しくないですから、

それほど問題にはならなかったですよ。

松野 金額も、総額が問題になつても、中身は問題になつていな

い。これは予算委員会で社会党のやつが、機密費のことで会計検

査院を呼んで、議決を経たのに監査をしないなんていう予算があ

るか、ということだ。いぶ問い質したんです。その時も会計検査

院長が、「これは最高の政治のものとして、会計検査院が検査し

ないという領域のものだ」といった。「そんな馬鹿なことがある

か」と言われたが、「これは最高の総理大臣自身が使うという道

義的なものだ。これは道義と信頼の下で成り立っているのです、事

務的な一般経費と違うんだ。だから検査しないんだ」といって、

検査しないで通つた。だから佐藤栄作の、「それに関しては、私

が全責任を負います」という答弁があるわけです。総理大臣が最

高の責任を負うべき金なんです。その代わりに官房長官、外務大

臣が扱う。

伊藤 総理大臣によつても違うんでしょうけれども、ほとんどは

官房長官が仕切つていてるわけですね。

松野 総理大臣の命を受けて。

伊藤 まあそうですね。官房長官と総理との間の力関

係とか信頼関係とかがありますね。

松野 あります。総理大臣の命を受けて、官房長官がこれを司る

ということになつていてるので、細川「護熙・首相」の時は、武村

「正義・官房長官」が全部仕切つた。それで毎月一億使つたとい

うので、細川が怒つちやつた。総理大臣が仕切るのに、官房長官

がこれを司ると書いてある。おれを抜きにしてあいつが全部やっ

たといつてね。日本新党のやつに三十万、五十万と金を配った。それでさきがけをつくった。細川の日本新党はなくなっちゃった。毎月一億使つて、「合計で」八億使つたというのは、みんなそれだった。

伊藤 そういうことをやっていて、年度途中で内閣がつぶれた時は、年度の予算が空になつていふという事態も生じるわけですね。

松野 あります。

伊藤 あるいはつぶれそうだといいんで、バツと使つちやうとか。

松野 三木内閣の時に、三木が正直だから、「機密費は余つていふるだろう。どうせ十二月で辞めるんだから、あるだけみんな月割りで出せ」と言つた。「うーん、いいよ、出してやる」「袋で出して、全部派閥の金に入れちまえ」「それはいい考えだな」ということで、翌日行つたら「松野、良心が痛んでできないよ」と言つた。だから、とうとう。そういうものは派閥に使つたつていいんですよ。そういうことに使つても構わない。だから代議士のお餞別にやつてもいいんです。

伊藤 野党の議員もずいぶんお餞別をもらつていふんでしょやね。

松野 もちろん。まあ、だいたい三十万ぐらい。買収するといふほどの金ではありません。そんなにたくさんは受け取りませんけれどもね。だいたい三十万でしょうね、今の時期なら。それも全員にはやらない。ボスだけです。それから官邸に挨拶に来た者とかね。

伊藤 それは相手のメンツもあるから、そんなボカンというお金は出せないでしょう。

松野 私どもは、ちょこちょこもらいにいった。古い代議士は知つていふから。佐藤栄作の総理大臣室の机の中には、二段になつて百万、五十万、三十万と、ちゃんと封に入っていましたからね。保利「茂」が官房長官で、保利のところにも入つていたし、佐藤

のところにも入つていた。だいたい議会が終わつて、国に帰る時期には代議士が挨拶に来る。そのために百万、五十万、三十万と札束になつて入つていた。どうせ議会が終われば、みんな国へ帰るから、挨拶にも来る。

伊藤 両方からもうというわけにはいかないですか。

松野 挨拶に来るやつは、その時にちゃんともらうんだ。ある代議士が私に「松野君、俺は選挙区に帰るけれど、俺は金がない。君、ちよつと佐藤のところへ一緒に来てくれ」という。一緒に行つたら、その代議士が「二人で来たんだから、何かあるだろうな、何かあるだろうな」と言うんだ。佐藤が「わかつたよ」と言つて渡すと、「悪いな」という。三十万でした。二つ置いてあつた。そうしたらその代議士は「これはちよつと軽い。もうちよつと上の棚から出してくれ」と言う。「しょうがないな」なんて言つて、伊藤 じゃあ、松野さんはお相伴で。

松野 その代議士が二つとも持つていって、私にはくれなかつた（笑い）。二人分取るために私に來いと云つたことが、そこでわかつたわけだ。私はなんのこともわからないで行つたんだから（笑い）。

伊藤 なんだ、お相伴じゃなかつたのか（笑い）。

松野 十五分ぐらい話して、「もう何か出るだろうな」と言う。それも毎回だから知つていふ。「これは今日はちよつと軽いな。上の棚にあるのがいい」と言つて、棚まで知つていたんだから。これは福家俊一です。だいたい、盆暮にそういうものが来るから、用意してある。封筒で三十万、五十万、百万というのが、官房長官の机にも入つていふ。だからあなたが言つたように、中には両方を取るやつもいふ。あとでわかつて、「おまえ、このあいだ両方から取つただろう。これはやらないぞ」なんて、そう言われる者もいたんです。両方から取るのもいたが、あとでつけ合わせれ

ば、すぐにバレる。だから、メモぐらいは書いてあるわけだ。金額の領収書は取りません。しかし向こうは、誰に渡したということぐらいは記録しておくでしょうな。保利は保利で、ちゃんと「〇」をつけておく。佐藤は「正」という秘書官が「〇」をつける。その程度で、公表する必要はないが、二重取りは困る。それは報償費だからバレるわけがない。みんなしゃべらないに決まっているんだ。それを、バレるような馬鹿なものを世間に出したから。競走馬はおかしいですよ。だって資格のないやつが馬を買っているんだから、これはすぐわかる。

伊藤 個人の口座に公金を入れるというのが、よくわからないんですけれどね。

松野 やっこさんは、おそらくカードで出したかったんでしょうね。虎ノ門の銀行まで行かずに、新宿の支店からも出せるから、カードが便利だということを出した。外国からでも出せますからね。

伊藤 外国へ行った時の精算の方法があるわけですね。

松野 カードが扱えるということで考えたんでしょうね。

小池 外務省は全部カードです。

伊藤 カードでできるんですか。

松野 だから、カードを使った。それに便乗したんだ。

小池 あれは記録に残るから、というのが、公的な内部での話でしたね。

松野 漏れてはいけない機密費が漏れたということは、機密費の使い方が乱暴だったし、だんだん慣れてきて麻痺していた。本人が機密費の性格を知らなかった。だから私たちは、機密費はいくらでももらってもいい。理由を言わないのが機密費なんだから、言ったらいけないんだ。これも、五十年なかった。機密費も一般会計もわからないような馬鹿なやつが出てきたから、こんなことになったんだ。そのことに私は呆れているんだ。使い方の問題じ

やない。馬を買ったとか、家を買ったとか、残るものには使っちゃいけない。人に問われるような金を使っちゃいけない。やはり消費しなければ。

小池 飲食費用に使うということはあるんですよ。

松野 だいたい交際費というのは飲み食いですからね。まあ、多少の土産ぐらいはいいだろうけれど、その範囲ですよ。それから外国の高官に対しての贈答品が機密費なんだ。これは、いちいち国別に金額が違って、イギリスには一千万の絵をあげた、エチオピアには三十万の絵だったとかいうと、やはりいかな。それは機密の必要があるわけだ。

小池 実際に違いますからね。

松野 有田焼とか、だいたい焼き物が多いですよ。骨董はなかなか外国人にわからないから、だいたい焼き物ですね。それから風景画。そんな名作はあまりやらないですよ。

伊藤 贈答品だから、贈も答もあるわけですね。やはり、向こうに見合うようなものを出さなければいけないでしょう。

松野 贈はいいけれど、答をすると、みんな総理大臣個人が持つていつっちゃうんだ。

伊藤 そうですか。

松野 そうです。向こうも個人が持つて行っちゃう。また、あんなの歴代のものを飾っておいたら、倉庫何杯にもなりますよ。だから佐藤のところへ行くと、佐藤のところへ贈ったものが全部飾つてある。あれは個人がもらってもいい。だから、あげるほうも個人にあげる。それは国にあげるんじゃないんだ。そういうところが機密費でしょうね。それこそ国家財政であれば、向こうも国家財政で処理しなければいけないでしょう。機密費だから、個人がもらっていいわけだ。

伊藤 しかし、個人だと贈与ですね。

松野 まあ、乃木大将は馬をもらうのに、いちいちどこへ置いた

というけれども、その時といまは違う。だから、だいたい贈答品というのは、個人です。勲章だってそうです。個人でしょう。勲章だって、国を代表していったんだから、国の代表としてもらうことだと思うと、そうじゃない。個人・佐藤栄作がもらうんです。だから、それに付随する記念品も個人でいいわけだ。それは不正取引じゃない。クリントンだって、もらったものは全部自分の家に持って帰ったでしょうね。

伊藤 そのうちにまた記念館をつくりますからね。

松野 そうです。だから、これは個人に決まっている。記念館をつくるのに、個人でないとね。国でもらったものを飾っておいたら、それはみつともなくて、かえって醜態でしょうね。だから個人で勲章をもらう、個人の贈答品とみる。それは、お互いどこの国でも機密費でしょうね。

だからこの機密費問題は、あの松尾は慣れすぎたし、河野も松尾を室長にしたところが間違ったね。あれは六年だから、当然転勤になるべきものを室長にすると、また三、四年置けるものだから、新しい職を得たんだ。明らかにあれは驕りだ。外務省の驕りだな。外務省から三十何億と多いというけれども、あれは在外公館の費用が全部入っていますからね。だから、官邸が十五億、外務省が五十億で多いじゃないか、というけれども、国の数が多いんだから。

伊藤 いま、公館は百以上あるでしょう。

松野 驚いたことに、一等国の大使はコックを連れて行くんですからね。銀座から。主として日本食のコックですよ。それを専属で連れて行くんです。まあ、月給で百万はかかるでしょうね。それはみんな機密費だ。

伊藤 それはしょうがないですよ。相手の国で接待しなければならぬんだから。

松野 それで日本食に決まっている。日本食のコックなら百万と

いうのが常識でしょうね。

小池 特に公館内でパーティを開くというのが、国際上のルールですからね。

松野 これは機密費で、外務省の一般経費に入っていない。アメリカなんかには、領事も「コックを」連れてきますね。一等国の総領事と大使は連れて行っている。そういう費用があつた五十億に全部入るわけだ。だから、工作費というけれど、工作費というよな簡単なものではなく、ご接待ですからね。外国に行くとき、一番おいしいのは大使館の食事です。最高のコックがいるし、一番いいものだから。どんな日本食のレストランに行くより、大使館の日本食が最高であることは間違いない。

小池 でもいま、在外公館のコックのなり手がなくて大変なんです。お金がどんどん上がっていきますね。

松野 もう、なり手がないでしょうね。昔はコックになることは名誉だったんですね。いまは、もう駄目なんだ。最近はこのKSDと機密費の二つに、昨日の株「安」、それに船「会員権」で四Kですからね。三Kでアウトとわかっていて四Kなら、もうチェンジだということだね。

伊藤 しかし、本人が辞めると言わない限りは駄目ですよ。

松野 駄目なんです。だから昨日の「党首討論における」鳩山のやり方が手ぬるいということだ。鳩山もなにも自民党に手を貸す必要はないんだ。首切りは最後にはないんだから。かえって、鳩山のほうが深謀遠慮でよかつたかもしれない。あの程度で、なまぬくて。与党は首を切つてくれればいよと待っているんだ。鳩山は確かに手ぬるかつたですよ。しかし結果は、鳩山は鳩山流でいいんじゃないかなと思つてね。

■ 森内閣の今後は

小池 先生としては、やはり七月まで。

松野 七月までしてもらわないと。さつき留守でしたが、鳩山に電話して、君らしくていいよ、と言つてほめてやるうと思つてね。君は君で、首斬浅右衛門にならんでいいよと。自民党が一番焦るでしょうね。今日のゴルフの会員権、これは名義貸しといっても、今日の会員券の説明を見ると土地と家屋の地上権みたいなものではないか。あれは名義が森で、券は向こうの会社が持っているというの、地上権だけ森にしたんだなという感じがしますね。地上権と地主という感触だったな。ただ、名前が森になっているのは、向こうが了承して書かせたんでしょう。しかし会員権としては森ですからね。これはまた面倒なことですね。まあ、経緯としては、もらったようなものでしょうね。

伊藤 次から次からごたごたして、しかし何も決着がつかないですね。

松野 本当に人間というのは、一つ躓くと、二つ、三つと出てくるね。洗われるんだ。

伊藤 まあ、探すほうも一所懸命探さすでしょうね。

松野 狙いをつけるからね。私のところ、年中、『週刊ポスト』とかの週刊誌が来るから、君たちは毎週よく探さすねと言ったら、みんな売り込みなんだそうです。売り込み屋が何百人といますと云う。この話はどうだ、この話はどうだと毎週売りに来るといふんです。それで本当の話、嘘の話がある。「いくらで買うんだ」と聞いたら、「高いのは三百万、安いのが十五万でしょう。主としてスキャンダルですけれども」ということでした。

『フォーカス』もそうで、写真番があるわけです。みんな写真を撮つて、売りに来る。これはどうだ、と。五十万とか三十万で。

ああいうものは、売り込みが多い。売り込みというと、その情報屋が何百人いますという。だから怖い世間で、この「マンション」の「受付だつて監視されていると思わなきゃいけない。だつて金になれば、すぐ喋るでしょうからね。

伊藤 まあ、ここは大丈夫だと思います。

松野 この下の受付なんかね。私のところに若い女性が夜来たなんて写真でも撮られて売り込まれたらたまらないね。

小池 誰のところに入ったかわからないから大丈夫でしょう。

松野 でも、ピンポイントと押すのを見ていけば、やはりわかるでしょうね。マンションの受付なんていうところには、みんなトッブ屋がいるから。

伊藤 何かあつたら、ちよつと知らせてくれということですね。

松野 オークラのボーイがそうだった。それで山東昭子が『フォーカス』に「写真を撮られたでしょう。あれは、ボーイだったんです。朝、エレベータで写真を撮られたでしょう。あれは前の日にボーイから電話があつた。それで朝までいたわけだ。朝出てくるのを待っていた。あれはどうしたんだ」といふと、ボーイですよ。

伊藤 ボーイの副業だ。

松野 ボーイが電話でちゃんと知らせしてくるというんだ。ボーイの副業だった。山東昭子がチップをやらなかったからと言っているんだけれど（笑い）。

小池 そういうことまで気をつけないといけないですね。

伊藤 それは狙われたら、のことで、君がなにをやるうと関係ない（笑い）。

小池 僕の話じゃないですから。

松野 いろいろ話を聞くと、伊藤さん、あなたは大事なものだ。あなたみたいな人がやはり日本には必要だ。いろいろ話や小説はたくさんある。私は読んでも、どうせろくな人生を送っていない

いが、まあ楽しい人生だった。いろいろなことが起きている。ただ、みんな自叙伝というのは、自分中心なんだ。そういうものばかり出ていて、いかにもその人の伝記みたいなものがたくさん出ている。

今度の場合、「信なくば立たず」という話を三木武夫がしたことを思い出した。そこで私は鳩山に、「今度のKSDの事件は、民主政治の危機だ。国民の不信をかうときは、大変な民主政治の危機になる」と言った。

田中角栄逮捕の時に、私が三木武夫に「もう、いよいよ逮捕になつてどうしますか」というと、三木は「おい松野、信なくば立たずだ。おそらく田中が逮捕されたことは、ここで検察の日本の政治に及ぶ。こうなったら全てを弁護しては駄目だ。俺も、三木内閣もつぶされるだろう。しかし日本の民主主義は守れる。田中逮捕の衝撃は、俺の内閣で受けた以上、俺も駄目だと思ふ。しかし民主政治を守るためには、田中も三木内閣も、それは小さなことだ。信が大事だ。全てを隠してはいけない」と言った。本当に三木が、私にひとこと言ったその言葉が忘れられないわけだ。

だから、その話を鳩山に懇々としたわけだ。「今度のKSDは与党だけじゃないよ。野党も駄目なんだよ。野党は野党なりに、民主政治を守るという立場でこれを攻撃する。スキヤンダル合戦じゃない、という信念を持って君はやれよ」と言った。それが、あの代表質問での「信なくば立たず」ですよ。

その時に「三木武夫といったら自民党の総裁ですね」と言うんだ。「君、自民党の総裁だから、俺は言っているんじゃないよ。尾崎聖堂と三木武夫は議事人として戦前から尊重されているから、この名前を出したんだ。何も派閥でいうんじゃない。名前を出している意味は、三木武夫が自民党総裁だから言ったのではない、本当に議会政治を引き継いでいるからだ。その時、三木の顔を見て、私も議事人の真髓を見たような気がしたから、君にそ

れを伝える。これは本当に私は信なくば立たずだと思ふ。こんなことをすれば、納税しなくなるよ。そうなたた時は議会は混乱で革命が起ころう。本当に民主主義の危機を感じるから、この事件を民主主義の危機と位置付けて攻撃しろ。反省する、改善するといつても、真髓がわからないで、なんで改善できるんだ。まず真相をつかんでから改善の道へいく。まだ真相をつかまないうちに改善ができるか。まず真相究明に徹底しろ」という話をして、演説会にやったのが「信なくば立たず」です。鳩山には「特にこの問題をやれ、このKSDの問題をそういう角度で捉えるべきだ」と言った。機密費は、綱紀肅正の最たるもので、これは漏らしたやつが悪い。

KSDはもつと大変です。中小企業の今後の基金がなくなるんだから、どうするだろうと思ふ。まだ、再建途中だと労働省が言っている。これは足りないに決まっている。横へ使っちゃったんだから。あの穴埋めをどうするんだらうと私は思ふ。当然、自民党は十何億返さなければいけない。それでも足りないに決まっている。もう何千万か食っちゃっているんだから。どうするんだらう。もちろん背任横領だけど、あとの再建を考えてみれば背任横領だけでは済まないでしょう。こんな事件はいままでない。リクルートは金持ちから取っただけ、ロッキードだって外国人からちよつとつまんだだけ。悪は悪でも、その根底で違うんだ。

伊藤 リクルートは、あれでやられたからといって別につぶれたわけじゃないですからね。ますます隆盛をさわめている。

松野 それは利得の罪悪だ。今度はその会員が一二〇万ぐらいいますからね。二四〇〜二五〇億の基金がある。それはみんな保険みたいなものだからね。被害、災害の時のために、入っておかなければいけないんだから。

伊藤 支払不能になつたら大変ですね。

小池 訴訟なんか出されたら大変ですね。

松野 もう出るでしょうね。それはいずれ出るでしょう。そうすると自民党が、訴訟の対象になるんだから。訴訟の向こう側には自民党がいるんだから、自民党は返さなきゃいけない。当然訴訟対象になりますよ。古関「忠男」の次は自民党ということになるでしょう。まだ村上が出てこないから。村上が大臣の時に、どうもあの法人の許可をしているんですね。

伊藤 村上「正邦」さんは、とにかく証人喚問に出るつもりでしょう。

松野 出なければ、ちよつと済まないでしょうね。それが衆議院にも出なきゃいけないんだ。参議院のつまみ食いじゃない、予算は両方に関係あるんだから。衆議院の議決前に出なければいけないと思う。それをなんだかんだといって逃げていくけれども、それは額賀「福志郎」の比じゃありません。村上ですよ。まあ衆議院で参議院に唾をつけようといって、衆議院に唾をつけたのが、額賀でしょうね。これは私に言わせれば枝葉の方だ。幹はやはり村上ですよ。だから、歴代の労働大臣が、みんな多少はあれ「KSD」に汚染されている。私も労働大臣をしたけれども、私の時はまだあの団体がなかったんだ（笑い）。私も労働大臣をしたんだぞと言ったんだけど、私の時はまだあれが認可されていなかった。私なんか問題外なんだ。陣中見舞いどころじゃない、菓子折ひとつ持ってこない。あれも現金なやつですね。

伊藤 「古関を」知っているんですか。

松野 知りません。あれは、なにか地方の基準局長かなんか。中山というのが逮捕されたでしょう「山田博資または中山勝彦か」。あれが問題なんだ。

■ 岸内閣前後

伊藤 そろそろ本題に入りたいと思いますが、前回の記録を見直してみても、先生は石井派だというお話で、労働大臣の時もそうだったというお話だったんですが、もともと石井派というのは緒方派でしょう。緒方さんが亡くなるまでは。「松野氏への電話で一事中断」緒方派の話ですが、緒方「竹虎」さんが亡くなられて、石井「光次郎」さんが引き継がれるんですか。

松野 ところが石井派は早いんだ、緒方さんがまだ復活する前だったから。緒方さんは追放で復活したんだ。だから石井派が先なんです。

伊藤 緒方さんが復活してきて、石井さんのグループの上に乗ったんですか。

松野 乗ったんだ。だから、吉田内閣の時はまだ石井派しかないんだ。緒方が追放解除で出てきてから緒方派です。だから石井派の流れがずっと緒方派につながっていくんだ。

伊藤 先生はなんで石井派なんですか。

松野 石井さんは、私の父と懇意だったし、九州、福岡だから。福岡で、石井さんとかブリジストンとか九州財閥と親しかった。

伊藤 石橋「正二郎」さんですか。

松野 石橋さんも、石井さんも応援していた。それともうひとつ、私の父と懇意だったというのには、石井さんは電通にいたんだな。いまの電通という会社です。朝日を出てから、電通の顧問をずっとしていた。電通というのは九州の会社なんです。創始者は光永星郎といって、熊本出身者なんだ。その二代目の吉田「秀雄」というのも九州出身ですね。

伊藤 光永というのは、珍しい姓ですね。

松野 熊本、熊本の球磨郡出身なんだ。それで私のおやじが懇意で、石

井さんは朝日新聞で、もともと電通は朝日が育てた会社ですからね。小さな広告会社だった。それが朝日新聞の広告の一面を買い占めたんです。買い占めて小売りをしたんです。朝日新聞でも、そんなこと誰も気がつかない。一面を年間契約で安く買い占めて、それを小売りしたんです。その発明をしたのが光永だ。それまでは新聞の代理店ぐらいだった。年間契約をすると、朝日も安くするわけだ。

伊藤 全部埋めてくれるわけですね。それは戦前の話でしょう。戦前は一面が全部広告ですからね。

松野 それを小売りで売ったのが光永さんです。それが電通なんだ。そんなのはなかった。新聞社が直接、個々にやっていた。新聞社も細かくて手がかかるから、光永がそれをやった。それで大儲けしたのが電通のスタートなんだ。だから、朝日と電通はいまでも縁が深いはずですよ。

伊藤 石井さんは朝日の営業ですからね。

松野 営業です。そこで光永は朝日と知り合い、それから代議士に出たんです。私も自然にその流れで、代議士になる前から知っていた。それで石井さんなんだ。

伊藤 まだ保守合同する前ですね。

松野 前です。

伊藤 その前は、そういう「派」みたいなものがあつたんですか。
松野 「派」みたいなものは、あるようでなくて、ただの寄り合いでしょね。ただの集団です。だからどこへ行ってよかった。統制はない。なんとなしに個人のところへ寄ってくるだけです。だから派閥の名簿というのもないでしょう。自然に集まって、昼飯を食ったり、来たり来なかつたり。私はそのほかに大野伴陸のところにも行っていましたしね。どこへ行つたっていいわけだ。今日は大野のところの飯を喰つて、昼は石井さんのところで昼飯を食う。それも自由だった。いまのように派閥でどうする、とい

うとはないですね。そのうち派閥が金を配るようになった。これも田中からだ。田中が金を配ることを始めた。伊藤 でも、石橋・岸の選挙の時は、さうとう派閥的な動きが出て来ましたね。

松野 あのへんから、総裁選挙というのが派閥と金を生んだんですね。それまでは総裁選挙はなかった。総裁選挙というのはなくて、推薦・承認なんだから、派閥の効用はないんだ。人物がよければ、自然に「総裁に」なった。そのうち、「総裁選挙」なんていうことを言い出したものだから、選挙をすると金がかかるわけだ。「選挙」という言葉がつくと、どこでも金がかかってくる。慶應だつて学長選挙になると金かかる。それで、さうとう石川忠雄が追い出された。妙なスキャンダルで。要するに金がかかるから、スキャンダルが出るんです。それまではなかった。だからいまの鳥居「泰彦」という塾長と争つたんですね。石川忠雄は、もういっぺんやりたかつたけれども、途中でやめて、鳥居に譲つたわけです。やはり選挙というものは、民主主義では金がかかるんだ。その金のかけ方が常識の範囲ならね。非常識な金が罪悪なんだ。友達でもさうです。飲み食いから始まるのと同じだ。吉野屋の牛丼ぐらいいいけれども、だんだん高くなると危ない。

伊藤 その当時、さういう星雲のような状態の中でコアになるのは、例えばいまお話がありました大野さんとか広川「弘禪」さんとか石井さんですね。池田「勇人」さんとか佐藤「栄作」さんなんかはどうなつていたんですか。

松野 池田、佐藤もありました。

伊藤 やはりそれぞれを囲むグループがあつたんですか。

松野 その頃は、まだ池田、佐藤が官僚上がりで、石井、大野、広川は党人派だ。党人派の勢力は、あの頃はうんと強かつた。七割が党人派だ。官僚派は三割だ。したがって官僚派は官僚派だけで集まつていった。愛知揆一とか橋本龍伍とかね。だから、私た

ち、党人派の連中はあまり行かなかったんだ。しかし、ほとんど官僚が代議士になってくると、四分六分ぐらいになって、最後には五分五分になってきた。そうなった時に池田、佐藤の派閥が強くなったんですね。そして大野、石井の派閥が負けてきたんです。伊藤 岸さんなんていうのは、どうやって派閥をつくってきたんですか。

松野 岸さんは、官僚派と旧党人派が一緒になっていましたね。川島正次郎なんかがいたから、これは旧党人派でしょう。旧党人派というのは、岸商工大臣、商工事務次官時代に親しかった者だから、戦前派が糾合したのでしょうかね。戦前派が岸を糾合して、それで追放解除組が全部岸についたんですね。追放解除になって、岸さんが脚光を浴びたんだな。それから戦前派の代議士が復活してきましたから。砂田「重政」、三好「英之」、そういうのは、みんな戦前派の人で、復活してきました。それが一挙に岸を応援した。それから官僚の佐藤、これも岸を応援した。だから一挙に岸が伸びましたね。

伊藤 この前のお話で、石橋、岸の選挙の時に、最初は石橋に入れて、二回目は岸に入れたとおっしゃいましたけれども、それは石井派に対する裏切りにはならないんですか。

松野 石井派に対する裏切りというか、話はしていただきましたけれどもね。そんな話のご都合主義で、両方に話しますからね。岸の方にも話す。今度やってくれと。石橋の方の約束もする。岸の方とも約束するから、両股をかけていますからね。それは、信義が乱れるわけではない。どっちも両方かけるんです。

伊藤 かといって、石井派から追い出されるわけでもない。

松野 それはちっともない。石井派は、もう第一回戦で負けていますからね。その時たしか、大野伴睦も立候補に出ていたんですよ。それが、選挙二日前にやめたんだ。その時の逸話で「大野さんは勝ちそうもない」と言った。「なに、勝たないか。おれは駄

目か」「無理です」「無理ならやめる、勝たぬ戦争はせん」といつて大野伴睦はやめたんだ。そんなことで四人が三人になったんでしょうね。その票がどっちに行つたかわかりませんが、石橋の方に行つた可能性が強いですね。池田の性格でも石橋に行つた可能性が強い。佐藤及びその他は岸に行つたでしょう。私は石井さん、二回目は岸に行きました。

伊藤 じゃあ、池田、岸という関係はよくないですね。

松野 あまりよくなかった。それで、岸内閣の時に池田はもちろん入閣したけれど、最後は辞めましたけれどもね。

伊藤 辞めて、また復活した。

小池 安保の時に復活して、三閣僚が辞任したんですね。

伊藤 その後でもう一回入つたんですね。

松野 あのへんになると、仁義も何もないですよ。政治家は理論的に動いているわけではないですからね。その時の流れで、自分を中心に動くから。自分が中心に動いたのが、国のためになればいい、ということですね。

伊藤 石井派というのは、だんだん細つていきますね。

松野 細つていく。それは石井という人は石橋「正二郎」の応援を受けるけれども、財界とのつながり、金銭的なつながりが弱いんです。石井さんにもあまり金はなかったですね。総裁選挙の時もあまり集まらなかった。石橋財閥が中心ぐらいなものです。金はないこともなかったでしょうけれども、あまり大きな金は動かなかった。それは石橋「湛山」のところが一番金を出したでしょうね。岸、石橋、石井なら、一番使つたのは、石橋でしょうね。石橋のところは、顔ぶれを見ると、金がかかりそうな代議士が多かったもの（笑い）。金を使うだけの代議士が多かった。

伊藤 保守合同で、旧自由党の中のいろいろな派閥は烏合集散したんですか。

松野 あの時は、ほとんどありませんね。あれは幣原「喜重郎」

さんがやめてから、もうなくなりましたね。それから田中は、おそらくあの頃は、石橋の方に入っていたかもしれないですね。それから石田博英というのがあります、石田博英というのは、金を使わなければ動かないやつで、また金の使い方も荒いやつでしたからね。

伊藤 金を稼ぐ方は、駄目なんですか。

松野 稼ぐ方も稼いだか、あまりあれは信用して金を出すことはしませんでしたね（笑い）。あれは日経の出身だから、多少知っているけれども、金をよく使う方でしたね。だから石橋さんがよっぽど石田に出したんでしょうね。そうじゃないと、あれ「石田」があんなに動くわけがないし、あんなに活躍するわけがない。あの男は金を持つと働く男だ。金がないとシユンとしている男だ。

伊藤 石橋派というほどの力はないでしょう。

松野 石田は、もう石橋にくつついている。

伊藤 だから、参謀はいるけれども、集団としてはー。

松野 石橋は、石田たちがつくりあげたんですね。田中角栄とか石田とか池田が、石橋を担ぎ上げたわけだ。

伊藤 旧自由党系ですよ。

松野 旧自由党系です。岸さんは復活組、追放解除組で、石井さんは温厚な中間派だ。

伊藤 これも旧自由党系ですよ。

松野 もちろん旧自由党系です。私とか、田中伊三次とか坂田道太とか村上勇とか、九州関係が割合多かったですね。

伊藤 ははあ、多少そういう地域的なものがありますね。

松野 地域的なものもありましたね。田中伊三次は京都ですけれども。まあ、どちらかというと、どこにも色気のないのが集まっていたんですね。私はおやじの関係で、石井でしたから。

伊藤 なにか、選挙をやるたびに人が少なくなっていくというー。松野 総裁選挙の度に派閥が替わる。選挙というのは、みんなそ

うなんだ。

伊藤 草刈り場になるわけですね。

松野 選挙というのは、みんなそうなんだ。総裁選挙のたびに派閥が変わる。強い派閥はうんと強くなり、弱い派閥は駄目になる。総裁選挙でいたい党内政治は決まりますね。総裁選挙までの派閥も、選挙後にはみな変わる。いまでもそうです。総裁選挙をやると変わる。いま、森は「総裁」選挙をしなかったけれども、ほかの時は総裁選挙の度に変わりますね。論功行賞があるものから。総裁選挙が露骨な論功行賞です。よく働いたものは入閣させるし、反対派のものは入れない。総裁選挙が一種の関ヶ原の戦いになって、論功行賞があるものだから、雑兵はやっぱり雑兵にしかねないんです。大将首を取ってくれば、大名になるしね。

伊藤 派閥の現有勢力でポストの配分をやるというようなところがあるでしょう。だから非主流派になつても、挙党体制といって、いちおう配分するじゃないですか。

松野 いちおう配分は来ますね。あまりいい配分は来ませんがね。やはり配分しなければ党内は収まらない。しかし、生きのいいものはこない。少し古びた菜っぱみたいなものは来るけれども、配分しないわけにはいかない。飢えさせたら反乱するし、新党をつくったり離党したりするから。だから党は全部に配給しなければいけない。また、反主流も含めた数で内閣をとっているんですからね。反主流を冷遇すれば、反主流は謀反を起こして新党をつくるでしょう。そうすると過半数を割ってしまう。だからそれは必ずやります。

しかし、いいポストは主流派が取る。官房長官は必ず主流派でしょうね。幹事長も主流派です。そういうふううに党を牛耳るところは、みんな主流派が取る。「反主流には」その他の閣僚の割り当てがきますね。

伊藤 そうすると、閣僚のポストのウェイトを点数化して、この

派に何点ということを決めれば、それは単純な数では駄目ですけども。大蔵は何点とかです。

松野 一番狙われるのは、大蔵とか外務でしょうね。あとは、あの頃は建設とか運輸とか農林とか、そういう選挙に影響が強いところを取るでしょうね。これは主流派が取っていきます。

伊藤 そうすると、だいたいどこがどれだけのウエイトを持っているかというのが、もつとはつきりわかりますね。

松野 はつきりわかります。いまでもそれに近いでしょうね。やはり、主流派がいいところを取っていますね。

伊藤 額賀さんなんていうのも。

松野 いいところを取っていたんですよ。しかし、あれは防衛長官をやって、今度は通産だった。いいところを取っているでしょう。それが替わったんですね。経済大臣、やはり経済は経済閣僚懇談会というのがありますから、経済閣僚懇談会に入るのがひとつのウエイトでしょうね。だから、大蔵、企画庁、運輸、建設、外務、このへんが経済閣僚懇談会です。

伊藤 かなり偉い人が経済企画庁長官になるというのも、そういう意味もあるんですか。

松野 そういう意味です。企画庁長官は、昔はなかなか経済界には幅が利いたんですがね。まあ堺屋「太一」もだいぶ宣伝したでしょうね。

それで石井さんはおとなしい人で、閣僚獲得もあまり上手じゃないんです。交渉がとにかく下手だった。だから石井派はだんだん閣僚が減って、一人ぐらいになってしまった。人が好いものだから、交渉が下手なんです。いまの鳩山みたいなものでしょうかね。人は好いけれど、交渉が下手なんだ（笑い）。人柄はいいけれども交渉事は下手、だから子分が少なくなっていくた。伊藤 その少ない割り当ての一人ですか、「松野先生が」労働大臣になった時は。

松野 そうです、一人でした。私と坂田ぐらいでした。坂田が文部大臣をやって、私が労働大臣をやりましたからね。

伊藤 それは、議員としてはかなり順当な出世ですか。

松野 ごく普通、だいたい順当ですね。特に抜擢でもない。

伊藤 遅れてもいい。普通よりちよつと早いぐらいじゃないですか。

松野 当選五回以上ですから。年は若かったけれども、当選はしていましたからね。年は四十そこですが、当選はその頃もう六回ぐらいしていますね。三十歳からスタートしたんだから、四十歳というと、当選は五回ぐらいしていますね。あの頃は短かったですからね、二年ぐらいたったから。

■三井・三池く労働大臣時代

伊藤 しょつちゅう解散がありましたからね。これは岸内閣ですね。ちよつと三井・三池問題というのが。

松野 総務長官をやってから、労働大臣をしました。その時に三井・三池問題があった。労働大臣というのはストライキを収めるものだとばかり思っていたら、そうじゃない。その時は中山伊知郎が中労委の委員長、藤林敬三が公労委でした。中労委と公労委が争議だな。「労働大臣は、争議の時に何をやるんだ」といったら、「じつとしていくください。法律を守ればいいんです」と言う。私はどちらかというと、労働大臣は仲裁するものだと思う（笑い）。「そうじゃないんです、労働大臣は法律法規を守る労働者の味方ですよ」という。「じゃあストライキを応援する方か」と言ったら、「いや、そうでもない」と言う。応援する方じゃないけれども、労働者を守る法律の番人であって、争議の番人じゃないということを知ったわけです。「労働法の法律の

番人であつて、争議の番人ではありません。争議は中労委、公労委というのがるので、あなたはじつとしていてください」と言うんですからね。

そのうち三井・三池が激しくなる。「どうすればいいんだ」と言うと、「あなたはじつとしていない。ただ争議行為が過激な場合は、労働大臣が警告を発する。それはあなたがやるべきだ。あるいは、政治闘争を掲げるということは必ずしも法律に合致しない。労働者の福祉団結ということが政治闘争では行き過ぎる。だからあまり政治闘争に走るときには、警告を発しなさい」という。そういうことしかない。だから、見ていると歯痒いんだ。「警察へ持つていつて、全部ロックアウトして収めたい」というと、「そんな力はあなたにはありませんよ」と言われた。だから、ただ歯痒い思いをして、両方の話を聞いて、法律違反にならないように労使間を監視することしかない。だから歯痒いんです。見ていると、激しいでしたからね。

私も大牟田は近いですからね。もうその組合はまるで戒厳令みたいな、街の中にバリケードをつくったり、鉄条網を張ったりしている。片一方は、組合の団結をはかる。それからアウトサイダーを規制する。そういうことで組合の方が激しい。

伊藤 あれは分裂するでしょう。

松野 分裂するまでなんだ。その分裂を狙うわけだ。組合は分裂防止に走る。それで、一軒一軒、分裂の傾向がないかどうか、子どもの小学校から監視する。会社の方は分裂を画す。その争いが、家庭から小学校まで来た。それで岩井「章」が闘争資金を何億か持つて来たなんていうニュースが出るし、ロシアの大使館もよく福岡にそれを見に来る。もちろんアメリカの大使館も見に来る。まるで戦場です。私が行くといつても、危なくて行けるものじゃない。

伊藤 行けないんですか。

松野 行くには行きましたけれども、組合員に会うことはできませんから。会社側は東京で、三井の本社で、とても現地に行けるものじゃない。あれを見ると、騒擾事件そのものでしたね。「警察を呼べ」といつても、「警察なんて、労働大臣、駄目です。こんな時に警察を入れても、警察はどうするんですか。じつと我慢していてください。我慢、我慢して、どちらも機を見て、中山が仲裁案を出すから」という。それで中山の調停案がだいぶ後から出るんですね。その間は、全労、全資本の争いでしょね(伊藤 総資本ですね)。総資本は全部三井を応援するし、銀行から何から支援する。片一方は、組合が全部、総評の資金を出すんですよ。十ヶ月ぐらい激しかったですね。

そのうちに安保が通つたら、内閣が替つた。でも三井闘争は終わっていないんです。安保闘争と三井闘争とは並行してきている。安保闘争が終わつて、内閣が総辞職したけれども、三井闘争は続いているんだ。さあ続いている最中、その時は後継総理が池田に決まっていましたから、池田のところへ行つて、「どうしましようか」と言つたら、「いや、おれがやるからいいよ」と言っていましたね。そうしたらその後で、石田博英が「労働大臣」になった。それで、わかつたわけだ。石田が労働大臣になると聞いて、石橋総裁の時に、池田と石田は組んでいたから、私のあとにすぐに石田を持つて来たわけだ。私を置かずに石田を持つて来た。私は岸に入れたから「岸が私を労働大臣にした」。いかにも総裁選挙の時とちよつと同じパターンだ。それでわかるわけだ(笑い)。

伊藤 よくわかりました。ところで、そういうふうな争議の時は、議会で――。

松野 議会でも、毎日です。

伊藤 それは、労働大臣に対して言うんですか。

松野 労働大臣に対して毎日その問題を言います。

伊藤 労働大臣はなんとも答えようがないんじゃないですか。

松野 答えようがないが、いま労使間も監視しているとか、注意するとか、不法なことはせんでくれとか、激しいことは良くないとか、子供、児童にまで影響を及ぼしてはいけないとか、そういうことばかり言っています。質問は応援ですからね。議会でも、組合員を奮い立たせるための応援の質問だから。社会党は争議の応援演説だから、演説は長いわけだ。けしからん、とかなんとか言う。「暴力を振るって会社側が組合員を怪我させた、労働大臣はどう考えるか」と言うから、「それは現地を見て、よく実情を調べて」と言うしかない。彼らは、言いたいんだ。こちらは聞かされているだけだ。だいたいそんなものですよ。

伊藤 演説会ですね。

松野 毎日毎日、何時間も続けました。「そういうことがあったらよくない、労働法に違反しますね」とか言っているけれど。争議の内容よりも、その争議の実態についての演説しかないんだ。法律案が出ているわけではないんですからね。

伊藤 労働大臣がそういう問題についていろいろ答弁したりする時には、補佐役は誰なんですか。

松野 それは労働省の労政局長です。労政局長がそばにいて、法規上こうなっていますとか、法規の説明をする程度なんです。だいたい私は法規上の解釈をするだけです。質問に対して、労働法はこうなっていると、暴力行為は禁止されているとか。

伊藤 労働法を勉強しなければ駄目ですね。

松野 それはとても覚えきれんけれど、いちおう私も法律は嫌いじゃなかったし、法律を読むのは好きでしたからね。しまいには暗記したところもある。いかにも得意げにそれを喋っていましたけれどもね。ほんとうは屁理屈ですよ（笑い）。

伊藤 その三井・三池の争議だけではないですよ。

松野 三井・三池が一番激しかったですね。あとは、ILO八十七条です。あれは公務員のストライキ権を認めるか認めないかと

いうことですね。日本の労働法では認めていないわけです。それを認めるというわけです。最後には、三年ぐらいあとに批准しましたね。あの時は、国家公務員及び公労委はストライキを認めていなかった。いなくてもやっていったんだ。そこで政治目的でするなどかいつていた。

私のあとしばらくして批准したけれども、その批准の条件は変わっていましたけれどもね。私が労働大臣の時、毎回聞かれたのがILO八十七条条約だった。もうこれは、いやというほど聞かれましたね。

小池 これは、国鉄ですね。

松野 国鉄です。

伊藤 ですから、批准はあまりしたくないでしょう。

松野 したくないんですよ。したくないが、ほとんど理論的に追い込まれてくるわけだ。「労働大臣はどうだ」と言われると、いやとも言えないし、いいとも言えない。だから、私はぐずぐずしていました。「これには反対か」と言われる。反対でもない、賛成でもない。「じゃあ、どっちだ」と言うから、「その国の労働運動の状況の成熟化によって決まる」とか、「成熟の度合いによって決まる」とか、そんなことを言いながら、私は積極的ではなかったですね。

組合のほうもまた、批准したら案外静かになっちゃいましたね。あれを批准させるといことが組合のスローガンだったんですね。批准してしまつたら、案外静かになった。だから労働運動というのは、大衆運動のひとつ目標をかかげて、「そうだ、そうだ」といつてやるところに意味があるんです。それを批准したら、一回国鉄のスト権スト「一九七五年十一月二十六日」、あれで終わっちゃった。あれは、私は政調会長をしている頃で、中曽根が幹事長をしていた。その時に、「やるだけやらせろ。三日でも四日も食糧がないといつたつて、戦争中のことを考えれば」なんて

言いながら（笑い）。「戦争中を考えれば、君、三日や四日はなんでもないよ」なんて言って、思い切りやらせていたら、とうとう世論の反対で途中でやめた。戦争中のことを考えたら、大根、菜っぱで、握り飯一つで三日間暮らしていたからな、なんて言いながらやっていましたが、あれがああいうストライキの最後でしたね。スト権ストが最後。三井・三池が、本当のストライキの最後でしたね。

やはり人間というものは、一回は体験しないと進まない。体験しないで進められればいけないけれど、やはりその時代の苦い水を飲まないと、人間は駄目だ。火傷をしないと、子供は火の恐ろしさかわからない。怪我をしないように前もって教えればいいじゃないかというが、体験した上で、私は歴史ができるなと思う。つくづくそう思いましたね。やってみて、それで乗り越えていくんだ。

伊藤 三井・三池の時は、向坂理論というのがありましたね。

松野 向坂「逸郎」、九州大学ですね。あれを見ると、会社はつぶれても組合は残る、組合が残れば職場は残るといふ。まるで共産主義そのものなんだ。

伊藤 あの人は共産主義者なんですよ（笑い）。

松野 向坂さんは熊本の出身だ。それえ、向坂理論は毛沢東語録みたいに言われていましたね。あれはあの頃、まるでご神体みたいな理論ですね。それで行くものだから、もう会社をつぶせ、つぶせば俺たちの時代になる、職場は残る、会社も残るといふ。まるで共産主義そのものなんだ。それを信じてやってるんだから。生産はしないんですからね。そこがおかしいんだ。生産はしないという理論はちよつとね。生産自体がなかったんだから、会社はほとんど生産しないでどうなるか。

伊藤 ちようど、エネルギー源が石炭から石油に替わる時ですね。

松野 その前の年に三十万の炭坑労働者の解雇があった。私が労働大臣になった時に、三十万の炭坑労働者の配置転換解雇問題が

あった。その時、三十万の就労対策を立てるといふ。それで立てたんだ。そうしたら、役人が持つて来たのは、三十万の中で、四万ぐらいしか対策が立っていない。四万人の雇用と訓練だ。「三十万なのに四万でいいのか」と聞いたたら、「これでいいんです」といふ。「どうしてだ」と言うと、なんとかという統計を持つて来て、解雇しても、その土地に残る者の人数がこれだけです、という。それから、停年で退職する人がこれだけです。ほかに移住希望者というの、なんとかの統計で四万しかない。だから四万の再就職の対策を立てれば、これで三十万全部完全にできるんです。その町に残る者は、抜かす。炭坑労働者の半分は残るんです。そうすると三十万が十五万になる。十五万で老齢の年代を引くと、だいたいあと八万です。それから今後再就職をする希望者は四万です。そんな統計を出すんです。そうすると三十万の首切りでも四万の再就職、職業紹介をつければ、それでいいわけだ。

だから四万人分の六ヶ月間の再就職訓練所の経費、訓練所の費用、その失業手当を出して、それが予算に入っていた。こんなのでいいのかなと思った。統計というものは、上一割は許されるもので、上一割というのと、一〇〇の上下で九〇と一一〇だな。それは世界中そうだ。統計学というのは、上一割は誤差があつて当たり前だ。それで、誤差の最低をいくと四万でいいそうだ。ところが後になつてみたら、不思議なもので、四万は来なかった。たしか二万何千ぐらいでした。三十万が全部クビを切られると大騒ぎだったけれど、そうじゃない。四万でも訓練所が余った。その時は、対策対象になつた住友鉱山のなんとかいう人が、その代表をやってくれました。それが、再就職雇用の公団の理事長になつた。だから炭坑労働者で、本当に再雇用を希望したのは、二万何千ぐらいしかなかったですよ。三十万のクビを切つてね。

伊藤 いまと違って、経済が上を向いていますからね。

松野 だから、炭坑なんていうところに行くのを嫌がった人も多

いでしようね。あんな穴の中に入るのは。私が大臣の時に、それがひとつ問題でした。それから珪肺法のことがありました。肺に石炭の粉が入る。珪肺法の法律をつくりましたね。

伊藤 それも労働省ですか。

松野 労働省です。労働災害ですから。労働災害で私が法律をつくった。それと、三十万の炭坑労働者の再雇用の政策です。

伊藤 それは公団をつくったわけですか。

松野 公団をつくった。再雇用公団をつくった。処分は公団の会長が出しました。それから、教育のほうの費用だけは、労働省が補助した。それで、その間の失業手当を出した。「松野氏に電話で一時中断」だから、三つ僕の印象に残りました。雇用の問題、三十万の炭坑労働者の対策、それからいまの珪肺法、それから三井・三池。私が労働大臣在任中にどうやら自分なりに記憶に残っている一年間はそんなものだった。

それからもうひとつ、安保条約の労働法の改正だ。これは直接雇用を間接雇用にしたことですね。米軍の直接雇用を間接雇用にした。これは安保条約の中の労働対策です。こんなことを私は手がけました。何か知らないうちに一年経っていた。

■60年安保

伊藤 その一年の終わりが安保騒動ですか。

松野 安保騒動です。安保騒動は済みましたが、三井・三池が残ったんですね。

伊藤 でも安保騒動は大変だったんじゃないですか。

松野 大変でした。私は労働省にいましたが、岸さんの官邸には年中遊びに行っていましたね。官邸には裏口があるんです。昔の防空壕みたいなところですよ。そこはふだんは閉まっていますから、

開けておいて裏から出入りしました。岸さんのところには年中行っていました。この時は大蔵大臣が佐藤栄作でしたからね。佐藤と岸と私は、二時間も三時間も、よく総理官邸の総理室で話していましたね。あと二日頑張れば、とかね。参議院は大変ですからね。あと二日頑張れば、三十日が来る。

伊藤 自然成立になるわけですね。

松野 時効で成立する。そのあとの一週間ぐらいは厳しかったですね。私も、労働省へ行っても仕事がないから、総理官邸へ行つて、岸さんの執務室にいた。岸さんもほかに何もやることがない。ただ、その中にいなければいけないわけだ。だから、ずっと二十四時間、缶詰みたいでしたね。総理官邸の中から出られない。あの時は岸さんもよく頑張りましたよ。

伊藤 そういう時は、岸さんは佐藤さんを頼りにするんですか。

松野 それは、佐藤は頼りにしていましたね。

伊藤 池田さんもそうとう頼りにしていたみたいですね。

松野 池田さんも頼りだけでも、やはり他人ですからね。

伊藤 まあ、それはそうだ。

松野 佐藤には愚痴をこぼすけれども、池田さんは他人だから、やはり上着を着て話をしなければならぬ。佐藤ならワイシャツ姿でも話せる。私たちにもワイシャツ姿だ。

伊藤 身内みたいなものですか。

松野 それはもう、私たちは子供みたいだと見ているんでしょうね。だから愚痴も言うし、悪口も平気で言う。池田にはそれは言わない。公式の話をする。「岸がこう言ったぞ」と言われたら大変だから。私たちは言うわけはないから、安心して愚痴こぼして、「あいつはひでえやつだ」とか、いろいろなことを言いましたね。

政治家も、もつと人間性を出せばいい。きのうの森なんて人間性を超えている。ああいう人間性じゃない。人間性というのは、ああいうものではない。自由奔放ではいけない。相手の気持ちに

合わせて裸になってやらなければ。

いま、私の息子「頼久」が電話をしてきて、「遭難したえひめ丸の搜索を」打ち切らずにアメリカに自衛隊を出していいかというのはどうだろう」と言うから、「自衛隊を出すのはちよつと無理だよ。戦争しに行くんじゃないんだから。まあ海上保安庁を出せというぐらいにしておけ。いくらパール・ハーバーだって、もう一回パール・ハーバーというわけにはいかない。そんなことを言うもんじゃないよ。海上保安庁を出せと言うことにはしておけ」と言っただけだね。

伊藤 それはそうだな。アメリカは思い出すな。

松野 思い出す。昨日も、ある人が、日本の漁船と知っていてやったんじゃありませんか、なんて言っていた。緊急接近浮上して、日本を脅かしてやるうぜえとやってたんじゃありませんか、と。あそこはマグロはえなわ反対でしょう。あれはマグロ漁船じゃないけれど、マグロばかり捕る日本の船だから、近くへ行つて、少し脅かしてやろうと思つたのが、接近しすぎたんじゃありませんか、なんて言っている人がいましたよ。

それが、私の労働大臣の時でした。

伊藤 その一番最後のところですが、例の自衛隊出動というのが出てくるでしょう。

松野 あれはハガチーの時で、安保の前です。ハガチーが来るのは安保の前です。その時は労働大臣の時ですね。ハガチーが来るという時に、私は労働省におりました。その時、機密費に関係があるけれど、労働省には機密費がだいたい一千万ぐらいあって、よくもらいに行つていた。それは何かというと、組合の情報を取りたかつたから。組合情報のために、私はどう使うか知りませんが、そんな金を約一千万もらうと、五百万は労政局長に渡すようになつていた。石田、倉石「忠雄」からの慣例です。持つて来たのは、石田が労働大臣の時が初めてだ。あれは岸さんの前だから、

石橋の時だ。その時に、石田が労働省に一千万をつけた。それが慣例になつて、私にも機密費が一千万ずつ官邸から来るわけだ。それで機密費をもらつた経験がある。

石田、倉石、松野の時は、一千万ずつあるから、私も引き継ぎの時にあるわけだ。「松野君、一千万必ずもらつてこいよ。官房長官がくれようになつてから」と言われた。それで一千万円くれたけれど、それを私は労政局長に渡す。労政局長は、ストライキの内容とかいろいろな話を聞いてくる場合の飲み食いをするんです。労政課長と二人で、組合員と飲み食いをする費用になつているんだ。

そこでハガチーの時に、組合関係から情報が割合早く入つてきた。そこで私は閣議の時に、私の知つている範囲では、ハガチーは十万人ぐらいの激しい闘争になる、という話をした。もちろん警察、公安からも話が出る。その時私が発言したことを覚えていられる。どうもいろいろ聞くと、ハガチーのときは万全の措置をしなければならぬ。じゃあどうするか。自衛隊を出すという準備します。中曽根は科学技術庁長官だから、自衛隊を出せという。私も自衛隊を出してもいいんじゃないかという方に与していたわけだ。

機密費はそこへ出てくる。だから、無駄じゃないんだ。労働省の機密費は、労政局長の組合員との飲み食い。組合に世話になつていたんじゃない情報は取れないから、こつちから呼び出さなければいけない。その費用は労働省にはない。会食費というのがいくらあるけれども、そんなことに年中飲み食いはいできない。それで労働省の機密費として組合員との飲み食いに使う。

労政局長に聞いたら、一回おきだと言っていました。組合もまだ金を持っていますよ。組合も一回、こちらも一回、両方でやるためには、役所も必ず出す。これを資本金からもらつていたので労働省もたまりませんよ。それは恥ずかしくてできません。そ

こで、官邸から機密費をもらう。だから、機密費も有効なところはあるわけだ。これを資本家からもらったら、ちよつとおかしいですよ。組合は組合費があるけれど、労働省にはないんだもの。一回おきに飲み食いするのに、金が出てきようがない。それが機密費なんだ。だから私がもらった機密費は約一千万円。年に一千万という意味じゃない。たしか春、秋に一千万ずつぐらいもらったと思うな。だいたいそんな程度です。ほとんど労政局長が、組合員との会合の時に使う。向こうがご馳走したら、今度はこっちがご馳走する、というように交替交替でやっていました。

伊藤 そういうことは、大臣はしないんですか。

松野 私もあります。私が組合幹部を呼ぶ時です。

小池 総評とか。

松野 就任したりしたとき、呼ぶことがあるでしょう。就任の時にみんなご挨拶に呼ぶわけです。会食をする。その費用をそこから出していた。それがなければ、私は自腹を切らなければいけない。ほかにないんだから。

伊藤 労働組合の人で、あとで印象に残るような人とか、あとまでつき合いに残るような人はいますか。

松野 岩井章、それから太田薫。二人は印象に残りましたね。太田というのは剛胆なところがありました。岩井というのは、非常に緻密な感じがしたな。やはり太田はひとつのリーダーというより、剛胆な風格がありましたね。

伊藤 「太田ラッパ」と言われているでしょう。

松野 岩井は非常に緻密で紳士的でした。そのかわり理論派のようでした。それで、二人が印象に残っています。

伊藤 でも、そういうものは、つき合いにはならないでしょう。

松野 ただ、会って顔つなぎをするだけです。人柄を見るだけです。知らずに相手を批判するより、知っていて批判する方がいいですからね。あの太田がラッパ吹いているということは、知らな

くでは言えないけれど、知っていると見えるわけだ。

伊藤 やはりフェイス・トゥ・フェイスということが必要なんですね。

松野 人間というのは、どうしても会って人間を見ないとね。それはただ、文章の上の人間じゃ駄目ですね。私はすべてがそうだと思う。一〇分でも一五分でも会う。顔を知っているか知らないかということは、すべてに通じる。知らない、文章の上の虚像ですからね。虚像に話しているようなもので、間違がある。一回会っていると、あんな顔していたとわかる。だからそれに対して批判もできるし、反論もできる。知らない、批判、反論がでない。

伊藤 反論する時も、違いますね。

松野 違う。相手の常識と知識をだいたい呑み込んで言うのと、知らずに言うのとでは、全然見当違いな反論になるでしょうね。

伊藤 労働省の中で、有能な官僚として補佐をした人で記憶に残る人はいますか。

松野 いま残っているのは、前の福岡の知事をした労政局長としていた亀井「光」です。それから部長が、官房長の渋谷「直蔵」というのが印象的でした。わりに労働省は人物が揃っていましたね。少ないけれど、やはり人間の省ですから。金はないから、人物だけなんだ。企画庁もまた役人が少ないけれど、優秀でした。人間の多いところより案外少ない役所の方が精鋭だし、また一所懸命やりますね。大臣と局長、部長が、せいぜい二十人いないんですからね。だから近親感を持つし、お互いに腹を割って、勉強もする。

伊藤 のちのち他の省の大臣をおやりになりますが、やはり労働省というのは独特のカラーがありますか。

松野 独特でした。防衛庁になると、これはもう規格にはまっていますからね。軍人だから。農林省になると、もうこれは駅の

待合室みたいなものでしょうね（笑い）。いいのと悪いのがいる。小池　すぐわかりやすい。

伊藤　いろいろな人がいるということですね。

松野　もう玉石混交で、ろくなのがいなければ、たまにはいいのがある。東畑四郎なんていうのもいましたからね。それから小倉武一さん。こういうのは、その中の玉の方です。あとは石ばかりだ。農林省だと玉が目立つんだ。それは石が多いからだ。

伊藤　労働省は地方労働局がありますね。

松野　地方労働局とはあまり親しくないんです。東京労働局長ぐらいのもので、地方労働局とはあまり懇意ではない。地方労働局は、統計を送ってきたりするだけですね。労働統計とか労働事件、労働災害とかの統計ですね。東京労働局長は、争議があつたり、小さな町工場の事件があつたりして、よく会いますけれどね。東京の中小企業の労働対策、労働件数、状況を説明しますからね。地方はあまり出てきませんでした。

伊藤　職安は労働省の管轄ですね。

松野　東京の職安は、何度も視察に行きました。

伊藤　今ごろはハローワークといっていますね。

松野　あれはおかしい。職安の方がわかりやすい。農協の方がいいのに、JAとかいつている。私は歯が浮くような気がする。職安でいいですよ。JAでなくて、農協でいいんですよ。いまだ本人でも、芸能人はみんなカタカナですからね。

伊藤　カタカナだけじゃなくて、ローマ字ですね。

松野　あれは流行り病でしょう。職安はよく行きました。そこで思いついたのが職安の失業統計です。日本の失業統計は、職業安定の希望をしたものが失業者で、登録しない者は失業者ではないことがわかった。登録しないと失業者ではない。里へ帰ったり、田舎の農家に帰ればもう失業者じゃないんだ。就労者に入る。日本人というのは農村の家族労働が多いものだから、失業統計が少

ないことがわかった。本当の熱心な者だけが失業統計に入る。中途半端な者は含まれない。だから日本の失業率は1%ぐらいに見えないといけないでしょうね。四・五%のときは、五・五%とアメリカなら見てもいいぐらいですね。

それから、失業保険の対象人員に登録しなければいけない、失業保険をもらうために一日勤務しないといけないのもおかしいですね。保険をもらうために、職安にいなければいけないもの。職安に出勤しないと失業保険をくれないんだから。なぜこんな制度になっているかというと、完全失業者だということを認めるには一日いなければいけない。いなければどこかで内職をしているんだろうという疑いがかかる。こんなことはおかしいんじゃないか。無制限ではなくて、六ヶ月間に決まっているんだから、六ヶ月間就職運動をすればいいんだから、黙って払ってやればいいんじゃないかと言ったけれど、それは会計検査院がうるさいから駄目だという。完全失業者というのは職安に三時間以上座っていないといけない。座っていて、私は失業者ですということを見せなければ、「失業保険」くれないんだから。それはどうだろう、と私は言ったけれど、それは会計検査院が乱費濫用に入りますというので駄目だという。

伊藤　失業保険もいろいろ悪用されている面もありますからね。

松野　悪用されているために、みんなが迷惑している。失業保険の掛け金は、自分もかけている。会社もかけている。しかも基準は六ヶ月と決まっているんだから、それだけでいいんじゃないかと言ったけれど、駄目だといって、悪い例をたくさん持ってきた。会社と結託して、失業保険が切れればまた雇用、そしてまた解雇、雇用をつなげたらどうしますか、なんて言われると、そうなかと思わざるを得ない。

伊藤　職業訓練というのも、一つの大きな仕事ですね。

松野　職業訓練も大きな仕事です。職業訓練所は各県に二ヶ所ず

つぐらいいあって、労働省の直轄です。大工とか手仕事とか、屋根葺きとかコンクリートとか、簡単なものですね。少し大きくなる
と重機の運転。確かにこれは有効です。一年ぐらい生徒になって、
毎日通わないといけませんからね。その間が失業保険の対象なん
だ。それをやると、失業保険をつなげてくれるんだ。それは内容
は別として、いいことでしょうね。もう少しそれが拡大されて、
もっと普及すればいいけれど、失業者しか行けないようになって
いるんですね。スタートが失業者を対象にしたからでしょうね。

伊藤 ちょうどその頃は高度成長が始まっている時期ですから、
さっきの炭坑の失業者もそうですけれど、失業者はほとんど新し
い産業に吸収されていくということで、それほど失業率は上がら
なかったですね。

松野 上がらないんです。訓練所に入った者はもう失業者には入
りませんからね。ただ、いま見ると、あの職業訓練所の内容が時
代遅れなんだ。過去の実績の雇用と希望でやるから、未来の話に
はならない。だから結局、左官、セメント、屋根葺き、せいぜい
起重機運転程度しか訓練科目がないんですね。いま少しは変わっ
たでしょうけれどね。

伊藤 変わっているとは思いますが、どうしてもテンポは遅れる
でしょう。

松野 過去の実績を中心に職業種目を見つけるものだから、遅れ
るんですよ。一年間、広く勉強しただけですが、いまそれが役に
立っているかという点、あまり役に立ちませんけれどね。

統計を見るとときに、役人はいろいろな統計をうまく作ってくる
な、と思う。それで議会に出て答弁すると、みんなちよつとおか
しいと思っても、反論する数字がないんだ。反論する数字がない
から、その数字が通っていく。議会でみんな妙な顔をしていまし
たよ。三十万のところを四万でいいのか、という点、これで大丈
夫ですという。それでいろいろ聞くうちにちゃんと説明する。相手に

おかしいと言いながら、反論ができない。夕張炭坑の雇用者の中
で居住者は半分以上は現地雇用で、現地に就職すると言っていま
す。あと半分のうち何割が初めて希望する、それが各炭坑ごとに
統計が出ているから、そうなる。うまくできたものだと思う。詭
弁かもしれないが、無視することもできない。

伊藤 でも結果的にそうなったんですね。

松野 結局、四万も行かずに、二万何千しかなかった。不思議な
ものだ。

伊藤 誤差の範囲以上ですね。

松野 私が大臣を辞めてからあとで聞いたら、二万六、七千でし
たよ、四万は多すぎましたよ、余りましたよ、と言われました。

伊藤 職安のネットワークがありますね。

松野 私は東京だけ二、三ヶ所見ましたが、いちばん感じるのは、
失業者というのは技術を持っていない人が多いんですよ。技術を
持っている人はまだはめ込みやすい。技術を持っていない人が八
割でしょうね。職業訓練所に行かなければいけないような人が多
いんだ。それから年齢が高い。

結局最後になると失業対策になりましたが、失対に行ってもら
うしかない。あの頃は失対が多かったです。都道府県でみな失
対事業をやっていた。失対事業で何をやるかといったら、単純労
働だから、どぶさらいか道路清掃とかですね。清掃といつても
箒で掃くだけです。それであるべく身体をいためないようにす
る。勤務時間は、昼が一時間、支度するのに一時間、帰り支度に
一時間とつて、あと五時間しかない。着いて登録して名前を呼ん
で、はい出発というのに一時間かかる。それで昼飯に一時間かか
る。帰りは四時になって、また名前を書いて登録して、点呼を受
けて箒を置いて帰るとまた一時間かかる。しかも遠くは駄目なん
だ。近くしか行けない。町内会より遠くへ行くわけにはいかない。
失対事業はお守りをするのが大変なんだ。事業をつくるのが大変

なんです。地方でやって政府が六割補助する。四割が市町村。市町村から遠くに行くことはできない。

伊藤 あれは全自労が組合でしょう。日共に染まったすごい組合ですね。

松野 指導者はえらいですよ。失対事業は国家事業なんだ。失対登録をすると特別公務員になるんだ。失対事業員は特別公務員、代議士も特別公務員（笑い）。その労働者の組合員に、「あなたたちも特別公務員、俺たちも特別公務員だ」ということを、私は言い聞かされた。

伊藤 それは日給の交渉があるわけですね。

松野 日給の交渉をやりませう。これは東京、五大都市が高くて、地方が安いんです。それでもちろん交渉があります。これは一日六〇〇円ぐらいではなかったかな。四五〇〇円だったかな。

伊藤 むかし「にこよん」と言っていましたね。

松野 それから少し高くなったんですね。四〇〇〇円ぐらいになって、六千円ぐらいになっていたんですね。五大都市が高い。「にこよん」で二五四円だったのが初期でしたね。その失対事業に登録することが大変なんだ。それは地方自治体でやりますから、地方自治体の予算の範囲内だから。そこで登録されると特別公務員になる。もうそれで権利を得たようなものだ。もう、毎日仕事があるに決まっているんだから。失対事業に登録されると、就職なんだ。地方は地方で、なるべく失対事業の登録したくない。でも市町村の住民なら登録しないわけには行かない。熊本でも荒尾でもあった。「ありがとうございました、労働大臣、おかげで登録が出来ました」というので、何の登録かと思ったら、失対事業に登録されたから就職できたという話だった（笑い）。そうすると必ず、月に二十日ぐらいは市役所から呼び出しが来る。だから就職なんだ。失対事業という職業なんだ。

伊藤 それは最初はかなり数が多かったんですね。

松野 多かった。いまは少なくなっただけで、あの頃は多かった。熊本市とかでも相当な数でしたよ。その費用が大変なんだ。生活保護の費用よりも失対事業の対策費用の方が多かったかも知れませんね。

伊藤 いくら国で六割持つといっても、地方自治体が四割持つといふのは大変ですね。

松野 だからだんだん減らすんです。失対事業の登録ができれば、それで就職なんです。それで特別公務員になる。

伊藤 あれはクビにならないですからね。

松野 それで労働大臣のときに、荒尾で、私の懇意な者に頼まれてお礼を言われた。大臣のおかげで私は就職できたと。そうしたら失対事業に登録ができたということだった。

伊藤 そういうものとは存じませんでした。

松野 伊藤さん、下々にはいろいろな話があるんです。ばか話ばかりして、これでいいのかと思っただけで、伊藤さんがいいというからしゃべっているんですよ。まとまったアカデミックな話はないんですよ。大博士がどうするか知りませんが。

伊藤 ちゃんと速記録が出来上がっていますから。さっきのお話ですと、池田内閣ができて、クビですか。

松野 それからしばらく何もしていませんが。

伊藤 無役ですか。

松野 無役です。

伊藤 党の中でも無役ですか。

松野 党でも無役です。

小池 国会ではどうだったんですか。

松野 国会では、予算委員ぐらいしていましたね。

伊藤 予算委員をやっていたら、いいじゃないですか。じゃあ、池田内閣時代は泣かず飛ばずということですか。

池田内閣の時は、泣かず飛ばずということですか。

松野 池田内閣の時は、泣かず飛ばずよりも池田打倒の方に行っ

て、佐藤擁立を一所懸命やっていました。

伊藤 それはどこの派閥ですか。

松野 その時はもう佐藤派に入っている。石井は総裁選挙で終わったから、今度は佐藤派に入った。岸さんの応援をしたから、それからずっと佐藤派に入った。佐藤が復活して入って来たから。

あの時、佐藤が帰ってくる時は凱旋將軍みたいでしたよ。それが加藤「絃一」がわからないところだな。鳩山内閣の時は、「佐藤栄作は」私は離党するといって、保守合同に入らなかった。無所属だった。岸になったら、佐藤を帰せといって、党内に佐藤復帰運動が起こるわけだ。佐藤派がおりますからね、八十人。それで佐藤復帰、入党ということにして、佐藤に入党届を出させて帰ってきた。代議士が拍手だ。凱旋將軍のようだ。加藤がいま無所属におれば、加藤派は分裂しないで残っている。森に反対したんだから。森に反対して次に誰かがなつたとすれば、加藤を帰そうじゃないかというでしょう。そうしたら加藤は帰ってきて凱旋將軍でしょう。

小池 読売新聞を読んでいますと、谷垣「禎一」という加藤派の議員が、おまえだけは反対票を出して無所属にいろと言ったという小里「貞利」さんの談話が載っていましたね。そういう意見も加藤派の内部であつたんでしょうね。

松野 あつたんだ。あつたけれど、加藤が駄目なんだ。

伊藤 山崎「拓」に押しえられたんだ。

松野 誰に押しえられても、それは本人がひとに相談をするからだ。行動するなら黙って行動しなければ。佐藤なんか誰にも相談していない。俺は入らんよ、といって、みんな本当か嘘かと思つたけれど、たぶん入らんだろうと思つていた。

伊藤 たぶんハシトミさんも、黙ってくつついて行つたんでしよう。

松野 黙って行つた。誰にも言わない。自分で行動すればいいん

だ。人に相談するときは、止めてくれ、という相談だ。

伊藤 加藤さんが離党して、演壇のすぐ近くにいられたらね。

松野 気持ちが悪いですよ。いまでも森がこうなつたら、加藤を呼び戻せという声が出たでしょうね。いま中におつたら駄目なんだ。外におれば、彼の存在が光る。ことに鳩山と組まれたら困るという気があれば。中にいたんじゃ駄目だ。

伊藤 鳩山と組むわけでもないし、自由党に行くわけでもなし。

松野 一人でも政治的力が発揮できたと思う。佐藤がそうだった。

小池 佐藤と加藤の違いは大きいですね。

松野 それで私は佐藤派に入つて、池田に袖にされたし、前から田中とは気に入らない。田中は大蔵大臣になるし、私は労働大臣を辞めたし、あまり気持ちが良くないから、次の総裁選挙で、佐藤擁立、池田打倒に走つたわけだ。

伊藤 それはちよつと時間がかかりましたね。

松野 それで確か二年後ですか、佐藤擁立を凶つて、出る、出るというところで、いよいよ出るかという手前で、今回はやめると言つて、その四年後に出たんですね。

出なかつたとき、二年後のときに、「立候補する代わりに、世界を見に行こう。松野、おまえも連れて行ってやる」と言つて、私は佐藤と一緒に外遊して、イギリスとかフランスとかに行つた。あの時はドゴールでしたね。イギリスは保守党の党首とか、ドイツでは経済のなんとか、みんな外遊でわりに優遇された。佐藤は総裁選挙に出る代わりに、その費用で外遊しようじゃないかというところで、私と木村武雄、橋本登美三郎、佐藤信二、四、五人を連れて、約二週間外遊した。その時はケネディだ。

伊藤 ということは、もう側近になつたわけですね。

松野 その時はもう側近になっている。石井の側近から佐藤の側近になっている(笑い)。

伊藤 ちよつと区切りですから、ここでやめましょう。

松野 ちょうどケネディが、パナマを攻撃するとかしないとかいう時だった。それはこの次にしましょう。その時はもう佐藤側近になつてゐるんだ。政治家は早いんだ（笑）。時代の流れより政治家の動きは早いんですよ。わが身に関しては。佐藤派に入つてゐるんです。それで五奉行とかなんとかという話になる。それから出世話だ。

伊藤 ではこの次はそこから伺います。では次回を決めさせていただきます。

松野 三月は何もないんです。もう生きてゐる語り部だ。

伊藤 いや、しょっちゅう連絡をとつていらつしやる。

松野 語り部だから、知つてゐることはみんな話すんだ。記憶のあるうちに話しておかないとね。前後したりしますが。

伊藤 前後するのは構いません。この点はもう少しどうでしょうか、とあとで伺います。

松野 これは月に一回、いちばん大事な会合だから。あとののは変更することができるけれど、これだけは変えられないから。

伊藤 速記録はごらんいただいていますか。

松野 なかなか大変ですね。「速記者に向かい」あなたはえらいものだ。あまり見事で、本を読むぐらい正確だ。速記というのは

もつと簡単なものだ。風格がある。

伊藤 それは話し手によるんです。

松野 まるで本を読んでいるみたいで、こんなことはいつしゃべつたんだろうと思うけれど、活字になるとえらく見えるものですね。

伊藤 そうです。それが本物かもしれません。この人は一級なんです。

松野 そうでしょう。ただの録音じゃないんだ。書き方に権威があるんだ。

伊藤 だからこの人は一級の方にしかつかないんです。

松野 いや、伊藤さんは一級です。あなたが歴史の本当の真実をつくる人だと思う。

伊藤 ありがとうございます。

松野 あなたは、図書館に入れる人だから。あとののは単行本で、売れたり売れなかつたりするけれど、あなたのは図書館に入れる本ですから。

伊藤 私は図書館長ですから、図書館におります。

松野 あとの本はやりすたりがあるけれど、あなたの本はやりすたりがない。

政局関連年表

「えひめ丸沈没事故」

二〇〇一年二月十日

ハワイ沖で午前八時四五分ごろ（米時間九日午後一時四五分）、米海軍の原子力潜水艦「USSグリーンビル」が浮上中、愛媛県宇和島市の県立宇和島水産高校の実習船「えひめ丸」と衝突し、えひめ丸が沈没。宇和島水産高実習船の大西船長が、米国沿岸警備隊の調べに対し、「潜水艦がいきなり浮上してきた」と回答。河野洋平外相が午後、フアロゴ米太平洋艦隊司令官とフォーリー駐日米大使に、電話で人命救助に全力を挙げよう要請。これに対し、両氏とも「大変遺憾なことが起き申し訳ない」と正式に謝罪。

二月十一日

森喜朗首相が十日、横浜市でゴルフ中で、事故発生の第一報が入ってからもゴルフを続け、二時間後にゴルフ場を出発、午後二時過ぎに首相官邸に到着したことが判明。

二月十四日

森喜朗首相が事故の一報後もゴルフを続けたことで、与党内で首相の早期退陣論が再燃。福田官房長官が「（首相は）そもそもゴルフに行くべきではなかった」と官房長官として異例の発言、公明党幹部が一時、一部メディアに首相の早期退陣を求める発言。

二月十四日

衝突当時、グリーンビルの操舵席に民間人一人が舵を握っていたこと、操舵席がある指令室には、さらに浮力を調節する位置に民間人一人がいたことが判明。

二月十五日

衝突事故で、米沿岸警備隊と米海軍が、行方不明となっている九人の「えひめ丸」の実習生や乗組員の海上での捜索を十五日で打ち切る方針を発表。外務省の桜田義孝政務官は米側の打ち切りの提案をいったん拒否し米側に伝えたが、最終的には、日米両政府の合意に基づき、打ち切りの時期を確定することで合意

二月二十八日

原潜のスコット・ワドル前艦長が、現地派遣中の望月義夫外務政務官とハワイ・ホノルルの日本総領事館で会い、事故について口頭で初めて謝罪。

三月二日

えひめ丸乗組員の捜索を続けた米沿岸警備隊の広報官、クリスティン・テリオン少佐が、「三日以降、状況に変更がない限り、新たな捜索の

計画はない」と語り、生存者を捜す活動を打ち切ったことを明らかに。

「二〇〇一年二月十四日の党首討論」

森喜朗首相の「えひめ丸」事故への対応が焦点となった「党首討論」は、ひとつの発言に最長五分も時間をかけ逃げ切りを図る首相のベースを、鳩山由紀夫民主党代表ら野党側が崩しきれないまま「不完全燃焼」（民主党幹部）で終わった。討論後、野党側は「極めて冗長で空虚」（鳩山氏）、と批判したが、首相が事故発生を知りながらゴルフ続行を判断した核心部分の理由を突っ込んでたす場面はなく、野党側の工夫不足が指摘されそう。

鳩山氏との討論で森首相は「（ゴルフ場という）場所にいたことがまずいという責任は甘受する」と述べ、一報後もゴルフを続けた「対応」の問題を、ゴルフ場に「いた」場所の問題にすり替えた。しかし鳩山氏は批判をただけで、なぜ首相がゴルフを続行したかの判断過程や理由を追及しなかった。首相の発言は最長で五分六秒と長く、約九回のやりとりを重ねるうちに二十六分の持ち時間は終了。

討論後の記者会見で鳩山氏は「もともと追及する類（たぐい）で（討論を）やるうとは思わなかった。首相のリーダーシップの欠如を国民に知らしめることが目的だった。ただ首相答弁があまりに長かった」と述べた。首相にできるだけ発言させ、イメージダウンを図りたかったようだがベースをつかみ損ね、裏目に出た形だ。

持ち時間が限られる党首討論は追及型の論戦には不向きとの不満も野党側に強い。このため野党側は時間の延長を求めているが、与党の歩み寄りには得られていない。民主党は昨年秋の臨時国会でも首相の「第3国発見説」発言への鳩山氏の追及に不満が出た経緯があるだけに、「党首討論」は次第に野党にとって「重圧」となりつつある。

「外務省不祥事の経過」

二〇〇一年一月二十五日

機密費流用疑惑で外務省が松尾克俊月元要人外国訪問支援室長を業務上横領容疑で警視庁に告発。松尾元室長を懲戒免職。ほかに事務次官経験者ら十六人を処分。

三月十日
警視庁が四千二百万円分の詐欺容疑で松尾容疑者を逮捕。

三月三十日
東京地検が松尾容疑者を起訴。

六月六日
外務省が機密費詐欺事件を踏まえた外務省改革要綱を発表。

六月二十八日

東京地検が松尾被告を五度目の起訴。機密費詐欺事件捜査終了。詐取総額は約五億七千万円。

七月十六日

サミット経費詐欺事件で警視庁が約二千二百万円の詐欺容疑で小林祐武、月経済局総務参事官室課長補佐、大隈勤月同室事務官、ハイヤー会社幹部ら計四人を逮捕。

七月二十六日

公費流用問題で外務省が水谷周・デーンバー総領事を懲戒免職処分。ほかにも事務次官ら五人を処分。

八月六日

東京地検が小林課長補佐ら四人を起訴。外務省は小林補佐ら二人を懲戒

免職、川島裕事務次官を減給にするなど計十三人の処分を発表。

八月十三日

パラオ大使館の前理事官が経費約一万ドルを私的に流用したとして停職処分にして、これを外務省が発覚。隠ぺい工作が発覚。

八月二十四日

ケニア大使館の前公使ら職員三人が住居手当などを不正請求したとして減給などの懲戒処分。サミット経費詐欺事件で小林被告らから渡されたタクシークーポン券を使った外務省

職員十八人が嚴重注意などの処分。

八月二十八日

福田康夫官房長官が二〇〇二年度予算概算要求で内閣官房機密費の十％減額などを発表。外交機密費の官房機密費への上納問題など未解明のまま、官邸として機密費事件に幕引き。

九月六日

ホテル代金水増しの詐欺容疑で、警視庁が浅川明男・外務省欧州局課長補佐ら三人を逮捕

松野 頼三

オーラルヒストリー

第6回

[2001年3月14日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

武田知己 (東京都立大学助手)

(於：松野頼三事務所)

■ポスト森首相

松野 「森内閣の話をしながら」……命数が切れたようですね。

伊藤 こういう混沌たる状況になると、松野先生は血が騒ぐんじゃないですか（笑い）。

松野 こういうときは客が多いですね。一番はつきりしているのは、主権者に聞くことだ。国民の方がよっぽど利口だ。私は解散をすべきだと思う。混乱したときは主権者に聞け、政治家が考えるよりも、主権者の投票は不思議に当たるんだ。不思議なもので、投票は当たるんです。選挙は神の声です。それを代議士連中が、自分たちの個人的な都合で逃げるからいけない。

たまたま三木政治の『信なくば立たず』〔三木睦子著・講談社・一九八九年七月〕を読んでいたら、常に主権者に聞こう、とっている。ロッキード事件が起きたときに、すぐ選挙をしたかったし、する気だった。それで主権者に信義をただそうとした。自民党は不利ですよ。不利でも、主権者の方が大事なんだ。自民党より主権者の方が大事なんだ。それが三木武夫の基本的姿勢でしたね。さすがに議会政治家だと思う。今度のこういう時こそ、与野党で話し合っつて、予算案関係を上げたら手を携えて解散しよう。選挙は参議院と一緒にいいか、それは技術的な話ですが、それを逃げるからいけない。政治に能力がなくなつてから、主権者に戻つて選挙をすることですね。それで勝ち負けがあれば、諦めるんだ。

伊藤 それにしても自民党は次の総裁を決めなければしょうがないでしょう。

松野 自民党の総裁は、投票をすれば決まるんですからね。

伊藤 自民党の中で、ですね。

松野 誰かに決まるんだ。

伊藤 松野先生のお考えでは誰が決まりそうですか。

松野 昨日新聞に書いておいたが、私が一番信頼できるのは小泉「純一郎」ですね。というのは、いま一番問題の事件に対して、清潔なんだ。清潔ということは政治の要諦ですね。すべての事件が不潔なために起きているんだから、こんな時こそ清潔な者を出さなければ。田中「角栄」の後に三木をもつてきたように。

伊藤 でも新聞を見ると、野中「広務」さんが非常に有力だと書かれていますね。

松野 あれは、池田大作、公明党なんだ。自民党なら選べないところだ。公明が選ぶんだ。いま一番悪いのは、連立の公明が後ろで牛耳っていることだ。うっかりすると、池田大作の政治みたいになりますね。陰に隠れた実力者だ。

伊藤 いま一番いい状態でしょうね。

松野 絶対に政権から離れないんだ。

小池 でも、亀井「静香」の発言を聞いていますと、自民党の中でも公明党離れが出てきたんじゃないですか。

松野 だいたい出てきた。船田「元」、白川「勝彦」とかね。小泉もそれに近いですね。反公明ですね。

小池 親公明というと、田中派ということになるわけですね。

松野 意外なところに落とし穴を求めて、中曽根「康弘」なんていうのが出てくるかもしれない。

伊藤 第二次内閣ですか。どうでしょうね。

松野 本人が一番なりたいのは橋本「龍太郎」でしょうね。

伊藤 でもあまり可能性はないでしょう。

松野 可能性は少ない。そこで、橋本なら中曽根という名前が出てくるわけだ。だから橋本の延長線が中曽根なんだ。

伊藤 そうなると、昔の名前で出ていますという感じですね。

松野 歌謡曲ですよ（笑い）。

伊藤 いくら中曽根さんに力があっても、新味がないですからね。

松野 新味はないし、案外変身の早い男ですからね。頭の回りが器用な男です。彼はいかにも思想家のようなことを言うけれど、一晩でコロッと変わりますからね。そこが彼の特徴だ。大上段に振りかぶっているかと思うと、一晩でクルッと変わりますからね。憲法がそうです。あれほど憲法改正の歌なんて歌っていても、総理になったらコロッと変わって、私のあいだは憲法改正しませんなんて一晩で言い換える。それをちゃんと上手に理論づける男ですからね。そういう変身の才能がある男だ。

伊藤 しかし変身の才能というのは、政治家として大事な才能ではないですか。

松野 自分の保身のためには大事な才能だ。しかし国民から見ると困った才能なんだ。本人には便利だ。出番を窺っているのは、橋本と中曽根かもしれませんね。

伊藤 だけどあの人たちは、自分が総理になるための工作をするなんていうことはできないでしょう。

松野 いまはちよつとやりにくいでしょうね。党内でやれば、若い者が時代錯誤だと言うでしょうね。

小池 石原「慎太郎」という目はないですか。

松野 案外ないですね。

小池 いまの総裁になることはあり得ないけれど、例えばダブル選挙になるなり。

伊藤 衆議院議員にならないければしょうがないでしょう。

松野 国民は石原ですが、私達は石原を知っているから、駄目ですね。国民は石原を新しいと見るが、私達は二十年の代議士生活を知っているからね。

小池 このあいだ「サンデープロジェクト」で、あと五歳若ければ中曽根首相だと言っていましたね。

伊藤 中曽根さんというのは本当に歳に見えない人だな。

松野 あれほど公明嫌いだったけれど、公明が好きになるかもしれ

れませんか（笑い）。

小池 いまの総裁選だったら、小泉が人気が一番高いんじゃないですか。

松野 党内で選挙をすれば、間違いない小泉でしょうね。

伊藤 党内で、ですか。

松野 地方の代議員を百人増やせば、八割は小泉でしょうね。それで、代議員をどれだけ増やすかということが問題になっているわけだ。地方代議員を十人増やせば、小泉でしょうね。いま三人増やそうなんて言っていますけれどね。

伊藤 そうでないと、野中になる。

松野 そう。

伊藤 野中さんは自分では「二〇〇%ない」と言っていますね。

小池 京都で、首相になったときの祝賀会のパーティ会場をもうとっているんでしょう（笑い）。

松野 そういうことには手を打っているんです。そこで同じ派閥の橋本がおるものだから、橋本は自分の名前が出んものだから、野中ですよ、やきもちを焼いているでしょうね。前総理となれば、中曽根もおるじゃないか、となるわけだ。そこで、みんなから意外な中曽根の名前が出てくる。前総理なら橋本より中曽根だ、大勲位がおるじゃないか、ということになる。

伊藤 大勲位をもらったということは、「上がり」ということじゃないんですか（笑い）。

松野 本当は「上がり」なんです。勲章をもらえば「上がり」なんです。しかし自分の弁明は上手ですからね、天下国家緊急の事態だから暫定的に、とかいつて出てくるでしょうね。身を捨てて、とかいつてね。

武田 目に見えるようですね。

松野 目に見えるでしょう。笑い話になっているけれど、案外一ヶ月後にはそうなるかもしれない。中曽根なら出てくるでしょう

ね。

小池 でもいまは誰も火中の栗を拾いたくないというところもあるんじゃないですか。

松野 昨日、夕刊フジに、「森は毒殺された」と書いて、「青酸カリじゃない、トリカブトのおそれがある、一ヶ月半後に効くよ」といったんだ(笑)。「夕刊フジの紙面を示す。鈴木棟一の「風雲永田町」、「森は毒を盛られた」「松野頼三が喝破」との見出し」

伊藤 しかし、これは誰が毒を盛ったんですか。

松野 それがここに書いてある。みんな犯人を知っているけれど言わない。わかっているも明かさない。それが自民党のやり方だ。完全犯罪を装っているが、馬脚が出ている。その後ろに神崎「武法」のことを書いてあるわけだ。神崎は十三日まで、と期限を切っている。その脅しは、連立を離脱するとは言わないが、連立の利権を忘れられないんだ。地域振興券、馬鹿な利権だ。今度是在留韓国人の投票権、これに執着しているわけだ。政権の利権を覚えてたから、離れないんだ。そこで森を脅したのは、それじゃあ閣内協力を閣外協力にするぞ、という脅しだろう。坂口「力」だけ辞めさせるといって、森内閣はガタガタになるじゃないか。その脅しで、森が否応なしに承知したというのをここに書いた。

私はこの一週間前に矢野「絢也」と対談したんです。それで矢野に、「何だ君、不信任を否決したら信任じゃないか。何をわからないことを君は言うんだ。そのように公明党は二枚舌と言われるんだぞ」といった。そうしたら「いやそれは違う。内閣は信任しても森は信任しない」というから、「じゃあ君たちは連立離脱をするのか」といったら、「連立離脱はしない、まあ閣僚引き揚げぐらいかな」という。だから、ああ、こいつらはこんなことを考えているんだな、と思った。連立の利権の味を覚えましたが、公明党は自民党じゃなくても常に政権にくっつきたいんだ。一回味を覚えるともう駄目ですね。

伊藤 そういふものですかね。そうしたら、民主党だってそうじゃないですか。

松野 まだ民主党としてはとっていませんからね。

伊藤 民主党としてはありませんが、旧社民の連中とか、さきもそうでしょう。

松野 一回味を覚えて没落したのが、土井のところの社会党ですよ。ならなければよかったのに、なったから駄目になった。やっぱり若いうちに女の味を覚えるともう駄目だということと同じですよ(笑)。われわれみたいに、病気まで経験していたらなんでもないけれど、初めてのやつは駄目ですよ、一回味わったら。それと同じ、もうやめられないんだ。公明党は権力の味を覚えたから、やめられないんだ。

小池 しかし公明党の中でも二系列あって、浜四津「敏子」とかの系列は、どちらかというと自民党との連立に非常に反対したじゃないですか。

松野 それで公明党の人氣がグンと落ちていますよ。非常に落ちている。

小池 地方組織はガタガタに近いですね。

伊藤 だから選挙がしたくないわけだね。

松野 そこでいま東京都議会選挙が脅威なんです。東京都議会で、自民党四十八と公明を合わせて過半数だけれど、四十八の自民党が半分になりそうなんだ。二十五とかいっていますから。そうすると公明も減るんですね。過半数どころじゃない、合わせても駄目なんだ。それが一番脅威なんだ。

これ「前出の夕刊フジの記事」では小泉を褒めておいたんだ。最後のところで、「小泉は出るな。こんなに豪快、清潔、志操堅固の者は少ない。与野党を通じて将来のホープだ。こんなリリーフに使われずに、新装開店の時に出るスターティングメンバーになる男だ」といって、小泉だけは特に褒めておいた。

これは、送つても羊羹一つ受け取らないんですからね。これぐらい清潔な男はいない。小泉純一郎宛に皆さんが羊羹を送つても、全部返ってきますよ。それぐらい清潔だ。しかし困つたのは、送り返すのに金がかかる。

伊藤 そのためにどこから金を取らなければならぬ(笑い)。

松野 それで結局、受取拒否するとタダだそう。玄関で受け取らないで持つて帰ると、それはタダだそう。その受取拒否というのを覚えた。だから小泉純一郎宛だと、クロネコヤマトは最初から配達しないんです。受取拒否に決まっているから。だから私がうどんなどを送るときには姉さんの名前宛で送るんです。懇意なのは姉さんの名前を送るから、姉さんのところに届きます。私はいつも熊本のおどんとかミカンとか、小泉のおぶ宛で送ると届くんだ。

伊藤 いいことを聞きました。

武田 先生、何かお送りになるんですか。

伊藤 送ってみようか。将来の総理の候補ですから。

松野 それぐらい清潔だから、これは一番いい。それからもう一つ、野中が小泉に「君は総理になるなら、奥さんがいないと駄目だね」と言ったそう。いま独身だから。そうしたら小泉は、「落選と結婚は一生に一度でいい。一度して失敗したから、もうしない。しなければ総理になれないのなら、俺はならなくていいよ」と言ったんだ。だから「吉田さんは独身だったよ」と私は教えた。「あ、それはいいことを聞いた」「今度吉田さんはどうした、と言ってみろ」といったんです。

伊藤 「吉田さんには」身の回りの世話をする女性がいた。

松野 身の回りの女性はいいけれど、要するに野中は、外国に連れて行くときに困ると思つたんでしょね。あの時は娘さんを連れて行った、「麻生」和子さん。そういうことで、もめていきますけれど、小泉はもつたないないので、私は「こんな時に出るなよ、

敗戦投手になるようなら、一生傷がつくぞ」と言っているんですけれどね。

小池 責任をとらされてしまいますからね。

松野 「今度は誰でもどうぞ、森のあとは私じゃない、ほかの方は誰でもどうぞ、と言っておけ。誰がなつたつて同じだ。もと森がなつたとき、村上「正邦」が『森でもいいじゃないか』といつて、森に決まつたんだ。その言葉通りだ。いまは誰でもいいんだ。でも総理なんだ。だからそこに小泉は入るなよ」といつたんです。このあいだ私は止めておいたんですね。君はどうせなるんだから、あわてるな。

この本「『信なくば立たず』」の中で、私のことを三木さんの奥さんが書いてあるから、そこだけとつておいたんですね。「お世話になつた政治家」の中に、私のことがさかんに書いてあります。河本「敏夫」にお世話になつた、誰にお世話になつたと書いてある最後に。私は三木派じゃなかつたけれど、三木さんの奥さんが書いています。

伊藤 「読む」「松野さんは、お父さんもそうでしたが、政界の寝業師と言われています。松野さんのところにはいろいろ情報が集まつて、週刊誌の記者たちが松野さんの話をもとに記事を書く人が多いという。三木とはまったく正反対の政治家だったのに、二人とも気心が通じ合っていました」。三木さんという人はまっすぐに進んでいく人だから。

松野 そう、私は右左に。それが保守党の政治だと思つて、右にぶれ、左にぶれながら、道を誤るな、というのが保守本流でしょうね。それで必ず振り子は進んでいくよ。右左ぶれないで、まっすぐ行くと折れる、というのが私達保守本流の政治家だ。目標を間違ふな。ただしまつすぐに行くことと折れるから。右左少しづつジグザグで進んで行けということだ。それで吉田が固かつたから、鳩山に行く。鳩山から岸に、岸から池田にと、上手に右左、右左、

目先を変えてくるものだから、新内閣ができたようにみなが思うわけだ。本体は同じなんだけれど。それが保守政治の五十年間の妙味というのか、国民を飽きさせなかったでしょうね。三木はまっすぐ行くものだから。

■佐藤派に入る

伊藤 この前のお話は、労働大臣をお辞めになったというところで終わりになったわけですが、その時に先生は佐藤派に入られた、という話でした。今日は最初に、佐藤派はどういう構造になっていたのかということを知りたいと思います。竹下「登」さんが、保利「茂」さん、田中角栄、橋本登美三郎、愛知揆一、松野さんを佐藤派の五奉行といったと言っていますが、どんな構造になっていたのか。

松野 私はずっとと党人派で、石井、大野のところをいたんです。吉田内閣の頃は佐藤・池田は官僚派だ。私達は党人派におったけれど、どうも政治の動きで、党人派は過去になりつつある。なるほど党人派というのは、いかにも義理人情はあるけれど、政策的に進まないんだ。みんなが持ってきたものをつぎはぎすることが上手。足して二で割るのが政党だという。どうもこれでは、私も古い政治家になってはいかん。

池田は数字を使ってやる男だ。池田の答弁は全部数字になる。すべて彼は貿易統計から外国の輸出入統計から、数字で答弁する。党人派が違うといっても、なかなか言うことが通らない。それを私は学ぶために、党人派は別として、佐藤の方に行つて、佐藤の推薦で池田の政調副会長になりました。それは吉田内閣末期です。

いくら私が言ったって、池田が馬鹿にするんだ。こういう会議を毎日やっていますからね。私は農林委員だったから、「米価を

もう少し上げにゃあいかん」と言う。そうしたら、「君、日本のいまのエンゲル係数はいくつか知っているかい。四〇もエンゲル係数がある国は、君、ないよ。エンゲル係数なんていうのは、一五、六から二〇までにしなければいけない。そこへ米価を上げるとは、じゃあ君、日本の経済を知らないのか」という。エンゲル係数でやられるんだ。たしか一番高いときは四〇近かったでしょうね。

腹が立って、腹が立ってね（笑い）。ようし、こいつはやっつけなきゃいかん、と思つて、私とか小金「義照」とか水田三喜夫なんていうのが副会長で、五、六人おるんですが、毎日こういう政調会の会議があるわけだ。そこで発言するとすぐ「池田に」やられるんだ。エンゲル係数なんていうのは気がつかなかった。それで、エンゲル係数から、貿易統計から、世界のエンゲル係数から全部一所懸命調べて、三ヶ月ぐらい数字ばかり丸暗記しましたかね。

そのうちにまた同じことを言った。池田さんが、いまの貿易で農産物の輸入はなんとかじゃないか、と言つて、輸入農産物の話をした。それで私は覚えていたから、「それは池田さん、去年の統計で、今年はどうですよ」と言つたら、ニツと睨んだね。私はゼロコンマいくつ訂正したわけだ。そうしたら池田は黙つて横を向いている。それから、私の言うことを聞くようになった。池田のは記憶だから、一年古いんだ。私は昨日覚えてきたんだから。それから日銀のマネーサプライから、あらゆる統計を二百ぐらい丸暗記だ。根拠はなくても議論はできる。それから池田が「うむ、うむ」と言うようになった。初めて政策の方に入ったのは、それです。馬鹿にされたから、これは統計を知らないと言言できないなと思つた。

だからいまでも、多少の統計は覚えていますね。農業人口はどれぐらいか。あの頃は農業人口は二〇%を越していたでしょうね。

いまは八%ぐらいでしょう。エンゲル係数も九とか八とかというところでしよう。そういうことは、基礎があるから、いまある程度の推定ができるんです。それが私が労働大臣になる前の勉強です。

それから労働大臣になったときも、失業問題があった。一番大きなのは、三井三池の前に、三十万の炭坑離職者がいた。それは石炭産業再編成ですね。住友鉱山か何かが会長でした。その時も統計数字を見た。それで私が見たら、石炭で三十万の転職の問題があった。それから珪肺法、三井・三池、もう一つは零細の家族労働の最低賃金、それからILO八十七条、それは私が労働大臣の時に記憶していることです。

だから池田の真似をして、予算委員会での野党の質問には統計ばかりで答えたんだ。「三十万をどうするか」「三十万は完全に転業させます」「どうするのか」「その中の何%は何に、何%は何に」といったわけだ。それは何かというと、あの頃は第三次産業が一番多かったですからね。第一次産業が少なくなつて、第二次、第三次に振り分けるといふことで、私は第三次産業に転業させるといふ統計を出した。日本で一番多かったのは第三次産業でしたからね。そんなことで、統計を使って野党をごまかしていたんですけれどね（笑い）。あの時の統計だから、いま通用するものではないですけれど。それは池田に馬鹿にされたからですよ。

それで佐藤派に入った。やはり官僚派に首を突っ込まないと、将来は駄目だと思った。党人派は勉強をしなかったというよりも、基本が違っていたんですね。時代が、数字、統計で説明しないと納得しなくなつた。昔は、特に戦前は愛国心とか人情で通つたんだ。しかし新憲法になつてからは、人情や愛国心の答弁ではできなくなつた。

旧憲法はなんといつても中心がありますからね。天皇の言葉を使えばみんな通る。一つの国の中心があるから答弁がしやすい。

右翼だつて「天皇のため」と言うでしょう。あの二・二六だつて、天皇を守るためにというのが肩書きでしょう。だから天皇というのは一つの国策をつくるには非常に便利なんだ。天皇のためにと言えば、仮に右翼だつて認められる。クーデターだつて、「兵に告ぐ」は天皇のためですよ。だから「下士官兵二告ぐ」で、天皇のためにやつたんだから、おまえた方には罪はない。許してやるから早く降伏しろという。どちらも天皇を使うんだ。敵も味方も天皇を使うんですからね。

いまは時代が違うから、数字でなければいかん。理論というのは、精神論ではいかんので、数字でやらなければいかんと思つて、私は労働大臣の時も数字を勉強して、数字で答えた。それで、官僚派に入ってしまったんですね。

伊藤 入るといふのは、どうやつて入るんですか。

松野 入るといふても、「こつちもあなたの会合にいっぺん出たが」というと、「じゃあ来いよ、来週から」とか言うだけです。

何も入会手続きをするんじゃない。佐藤派の会合はいつも水曜日をやっているから、「水曜日に来いよ」という。

伊藤 誰と親しかつたんですか。

松野 私は佐藤さんといちばん親しかつたでしょうね。

伊藤 直接、ですか。

松野 直接です。佐藤さんは、私のおやじが運輸大臣の時に課長だつた。運輸課長か何かです。岸さんと親しかつたですから、岸さんはあの頃商工省の事務次官だつた。そういうことで、私の父が佐藤、岸と親しかつた。

それで、田部長右衛門というのが島根の大金持ちの多額納税貴族院で、私の父と親しくて、自分のところの書生、竹下を出すからよろしくという。それで竹下が最初に田部長右衛門の紹介状を持って、私のおやじのところに来たんです。それで私のおやじが、それは佐藤がいいぞ、といって、佐藤に電話して、佐藤派に入っ

たんです。

伊藤 竹下さんもそういうふうにしやべっています。

松野 その通りです。その縁もあった。私は大野・石井の時代はもう過ぎたと思って、私は佐藤と親しかったから、自然に「あなたのところに行っぺん行きたいが」と言ったら、毎週水曜だったか、火曜か木曜か、「やっっているから、おまえ来いよ」というから、「じゃあ行きましよう」と言っ行って行ったら、そのまま入っちゃった。

伊藤 それは周山会ですか。

松野 東急の上になりましたね。小さいところで、周山会です。そこに行くと、田中角栄もおる、橋本登美三郎もおる、竹下もおる、保利茂もおる。そこでみんな「まあまあ」といって、わりに居心地が良かったし、どうせ顔も知っている仲間ですから、入会紹介もないうちに、いつのまにか私も自然にその幹部になったんでしょね。

伊藤 自然に幹部になったというか、最初から幹部なんですか。

松野 もう最初から、入ったときから幹部ですね。それは当選回数がありますからね。私と保利茂がいちばん上で、佐藤よりも当選回数が多いんですから。代議士は、当選回数が一つのレッテルだから。

伊藤 階級ですね（笑い）。

松野 階級だ。一等兵、二等兵というより、もう上等兵になっているんだ。だからもう幹部です。田中角栄も同じだから上等兵。保利茂が一つ上でしたから、これは曹長でしたね。私達は上等兵だから、もう威張ったままで、やあやあ、と言うだけだ。橋本トミも上等兵ですからね。だから代議士は肩章の数です。当選回数とは肩章の数みたいなものだ。それでそのまま佐藤のところへずつといた。私は岸の労働大臣の時も、佐藤推薦ではなかったかと思えますけれどね。岸さんの時は、私のおやじの推薦だったと思

ますね。参議院議長までしていた頃ですから。おそらく岸さんが私を労働大臣にしたのは、私のおやじの関係でしょうね。佐藤の推薦もあったかもしれませんが。

伊藤 竹下さんがお話ししていた中で、世田谷の佐藤邸に五奉行が集まって会合をしょっちゅうやっていた、というお話がありました。

松野 それは年中やっていました。

伊藤 それは周山会と別に、ですか。

松野 周山会は会の名前で、佐藤邸は佐藤邸で別だ。

伊藤 実際に物事を決めるのはそこなんですか。

松野 だいたい淡島「代沢・佐藤邸」で方向を決めて、周山会で大衆討議をしますね。反対があるかないか。だいたい自宅で、こういうことではないかと決めて、それがだいたい決まりますね。それでみんなに披露すると、八十人ぐらいましたから、そうだと、そうだと、そういうことになる。

伊藤 竹下さんは脇の方にいたとか。

松野 竹下はものを言わない男ですからね。

伊藤 まだ当選回数が少ないですからね。

松野 ものを言わないんです。仮に上等兵になっても、ものを言わないんです。みんなが意見を言うんだ。「竹下君どうだ」というと、「はああ、みなさんは」と言うんだ。そうすると、保利がしゃべり、私がしゃべり、田中がしゃべり、みんながしゃべった後で、竹下は最後に一番多数の意見をしゃべる男だ。だから竹下がまとめたようになるんでしょね。三対二なら、三の方の意見を言う。それで竹下がまとめたというふうには見えないわけだ。そうじゃないんだ。あれは自分の意見はないんだ。だからいろいろな会議を竹下がまとめたというけれど、最後に言う男なんだ。それは数を見て、こつちが多いと思うと、そつちに行くんだ。最初には言わない男だ。

伊藤 これはいい勉強になります(笑い)。

松野 そういう政治家もおるんだ。そのくせ、誕生日だとか交友関係は細かく知っている。この人の前では、誰々の話をしてはいけない。この人の前では誰の話をする。そんなことを一所懸命調べる男だ。政策もゼロ、方向もゼロ、ただ人間の裏側を全部覚えるわけだ。これは奇妙なぐらい誕生日を知っているし、姻戚関係を知っている。それから趣味まで知っている。誰々は碁が好き、ゴルフが好き、将棋が強い、それから誰々の親類だ、そういうことは事細かに知っている。これは趣味だね。その特技が、竹下です。

だから人事の時に、佐藤が「竹下、ちよつと来い」という。今度の政務次官は誰がいいだろう、と相談するわけだ。相談といつても、別に竹下の意見を聞くわけではない。順番はどうなっているか、当選回数はどうなっているかということを知りたい。年齢はどっちが多いとか。そういうことは名簿を見るよりも竹下を呼んだ方が早いんだ。そうすると、「当選回数は同じです。生年月日はこつちが二歳上です。こつちはこの委員会の委員をしました、こつちは予算委員会の理事をしました」と、そこまで覚えている。また手帳を持っていますからね。それで彼は官房長官になるんだ。佐藤の官房長官になるのはそのことです。そういうことが得意なんだ、あとは何もあるものじゃない。それだけで、曾呂利新左衛門みたいに、政界で出世することがあるんだ。竹下が総理になったら、何をやるだろう、この男は、と思った。人の生年月日だけ覚えていてね。

だから彼が答弁するときには、必ず野党のものまで覚えている。野党の代議士が質問すると、ああこの人はどこの出身で、趣味は何か、どういう経歴か、ちゃんと覚えているんだ。だから褒め称えて答弁するんだ。「あなたは昔ハーバードをご卒業になって、さすがなものです」なんていうから、相手も悪い気がしませんね。

野党についてもそうなんです。それが竹下政治です。そつがない。だから思想とか哲学とか方針というものはない。ただ、相手に対する対人関係は奇妙なぐらい上手な男だ。敵は作らないでしょうね。味方もあまりない。姻戚関係だから金丸だけでしょうね。敵がないというのが竹下でしようね。だから彼を尊敬しているものは、私はあまりいなかったと思うんだ。

伊藤 五奉行と言われていた人たちはだいたいずつと。

松野 だいたいずつと佐藤と一緒にした。

伊藤 あまり顔ぶれに替わりはなかったですか。

松野 あまりなかった。例えば、多少、田中が池田の方に行きましたね。池田に近かった。派閥の中で好き嫌いはあったでしょうね。私は佐藤派にいて、親しいのは大野だ。田中は、佐藤派にいて親しいのが池田だ。そういうことはありますね。それは派閥の一つの触覚ですからね。そういうことも必要なんだ。派閥の中で井戸の中の蛙ではない。他の派閥と会合したり、つき合うことはいいことなんだ。

伊藤 いま触覚とおっしゃいましたね。

松野 触覚です。触覚が政治家に必要なものです。だから「このあいだ、こういう話をしていたよ」「ああそうか」という式のことです。「大野伴睦のところに行ったら、俺が目の黒いうちは佐藤を総理にしないと誓っているよ」と佐藤に言ったら、「ああそうか、そのうちに目が白くなるだろう」と言っていた(一同笑い)。そうしたら、大野伴睦が死んでから佐藤が総理になりましたね。そんないろいろ話をします。それは必要なことなんです。それで私は昔の党人派と親しくて、飯を食ったり、一緒に競馬に行っていましたからね。大野伴睦は競馬が好きだったから、私も連れられて年中競馬に行っていました。競馬には佐藤は行かないから、大野と行くに決まっていますね。ゴルフに行くときは佐藤と一緒に、競馬は大野と行く。そういうふうには、趣味によってグループ

が変わりますからね。それはいいことなんです。

■佐藤の五奉行

伊藤 保利さんという方については、どんなご意見をお持ちですか。

松野 保利さんというのは、犬養健と一緒に、昔の民主党から分かれて、犬養派をつくった。十四、五人でしたかね。犬養さんは民主党にいたんだけど、そこから分かれて自分で会派を作った。その代貸しが保利茂だった。保利茂は、吉田さんの時に、犬養と一緒に、サンフランシスコ条約の前に入党したんだ。しかし吉田さんは犬養が嫌いだった。嫌いな理由は、民主党の不信任案の時に、犬養健が吉田の弾劾演説をした。それが気に入らんのだ。「犬養毅の息子のくせに、不肖の子だ、俺の弾劾演説をしゃがった」といって、えらく嫌っていて、「入党は認めるけれど、犬養だけはいやだ」と言いだした。さあ困った、できているのにと。とうとう保利さんがだけが入って、犬養だけが一年遅れたんだ。一年遅れて入りましたが、入ってすぐ法務大臣にしたんだ。その法務大臣が強権発動ですからね。因縁というのは不思議なものです。あれが一年前に入っていたらよかったですかね。あとから入ったから、ちよつと悪いときで、すぐに法務大臣になった。それが造船疑獄で指揮権発動だ。だから犬養にはさうとう因縁があるんだ。好き嫌いじゃなしに、たまたま巡り合わせた法務大臣だったから。それが保利茂が入党した原因です。保利茂は吉田さんには非常によかったですね。信頼されていた。

伊藤 保利さんという方も党人派ですね。

松野 党人派です。この人は新聞記者上がりで、戦後第一回「目の選挙」に佐賀県から出た人ですね。

伊藤 どういう特徴のある政治家ですか。

松野 特徴は重厚な感じですね。ものに動じない。佐藤の後で、三木おろしの時、大平、福田と一緒に拳党協というのをつくって、三木おろしをやった。拳党協の代表は福田でも大平でもない、保利茂だった。だから福田、大平よりも上座に座っていましたね。それは肩章が一つ上だ、当選回数から言えば。

伊藤 長老なんですね。

松野 しかも年齢も多いから。座長は保利茂だった。その下に福田、大平が並んでいたんですね。その時は私も悪いことをしたな、と思うのは、三木おろしで私は三木の方の参謀長みたいなものだった。その時に、大平、福田が来て、三木がどこかに出ていたんだな、「二人でやるから降りろ」と言ったわけだ。二人で官邸に来た。それをやったのはロッキードの恨みがあるわけです。もう一つは政治資金規正法だ。「自民党の代議士はみんなこんなことをしたら、選挙ができない。政治資金規正法で金額を決めるとはとんでもない、党を潰す。もう党内の世論は三木から離れた。降りろ」と二人で言うから、「二人で降りろと言うけれど、ときに総理大臣の椅子は一つだが、どっちでやるんだ」と言ったら、もう相談していかないわけだ。保利にも相談していかない。言えないんだ。困って、二人ともそのまま出てきた。いやなことを聞きやがる、と思ったでしょう。おそらく後ろに保利がいたんだ。保利が調整役だ。保利の調整なしに、二人で俺が先だとか言えない。その時にはそれぐらい保利の力はあった。

伊藤 この佐藤派の時にも、やはり力があつたわけですか。

松野 保利は田中より上でした。田中よりも威張っていた。「おい、田中」という仲でしたね。だから佐藤の次の代貸しです。国定忠治の日光の田蔵というところでしょうね。佐藤よりも、どちらかという政党経歴は上でしたからね。それは一番で、代貸しといつても最高でしたね。

伊藤 田中さんはそれよりも下になるわけですね。

松野 下になる。それは私達と同じぐらいのところになる。愛知揆一とか、橋本トミなんて同列。保利はちよつと上。上等兵の上の曹長ぐらいだ。その時に、私は坪川「信三」というのが懇意なんです。佐藤派ですが。「まっちゃん、どうだろう。福田も大平も保利の下だ、二人じゃなしに、思い切つて保利で行くか」と言つてきたことがある。保利総理でどうだという。保利ならいいだろうと私がすぐ賛成するだろうと思つたんですね。私はどうとうそれに賛成しなかつた。「駄目だ」「駄目だ」「駄目だ」「どうしてだ」「いま君、保利の時代じゃないだろう。佐藤の後だから、福田の時代だよ（私は福田の方が好きでしたから）。保利に後戻りするようなことをするな。いまさら大野伴睦、保利茂というのは過去じゃないか」と言つた。

あの時私が保利に賛成しておけば、保利内閣ができたかもしれない。本当にできたかもしれない。私と保利はいつも仲がよかつたんですが、こと三木問題になると、私は三木から頼られているし、三木を裏切るわけにはいかない。そこで友情と信義の板挟みだ。友情か信義かで私はずいぶん悩んだ。友情は保利にあるけれど、信義は三木にある。とうとう私が一蹴したのだから、それは消えたんですね。あの時に私が賛成したら、保利内閣ができたかもしれないですね。

伊藤 保利さんというのは総理の器の方ですか。

松野 器といつても、いまの森よりもうんといいでしようね。

伊藤 そんなことを言つたら――（笑い）。

松野 それは桁違いでしょうね。いまの森とは鍛え方が違う。

伊藤 それはそうでしょうが、比較する対象がまずいですよ。

松野 しかしその時は福田、大平を抑えていましたからね。迫力もあつた。私は、保利が総理になつて、そばにいい政策マンがつけば良かったかなと思う。私がいま考えると、保利総理にして、

横に官房長官、外務大臣、大蔵大臣に政策マンがつけば、保利はその上に乗るにはいい頭だったかもしれない。あれは惜しかったな、という気がちよつとする。時代が変わつたかもしれない。福田、大平はもちろん入閣しますからね。保利が拳党協の会長なんだから、福田、大平が入閣して保利内閣が出来たでしょうね。少なくとも二年は続いたかもしれない。時代が変わつたかな、という気がする。私はあの時は友情と信義で、信義の方を重んじたものだから。三木を任期いっぱい守るんだといつて、二年間守りましたからね。その途中だから、ちよつと私も大胆さがなかつたなと思うな。

伊藤 この五奉行の仲で唯一総理になつたのは田中さんですね。そういう印象がありましたか。

松野 初めはあまりなかつたですね。私は愛知揆一かなと思つた。保利茂は政黨員としてなれるかな、あるいは愛知かな、と思つた。田中はどつちにしる幹事長までだと思つていましたね。そういう評価をしていた。それで私は田中に、「君は幹事長で、福田にしろ」と「千代新」で田中を口説いたわけだ。田中がいよいよ旗揚げするときは、お話ししましたかね。私がいちばんいやだつたのは田中で、田中も松野でしょう。私が「田中に会いたい」と言つたら喜んで、自分を応援してくれるものだと思つて、「千代新」に座をとつて待つていた。四月頃でしたね。もう旗揚げしたときです。木村武雄たちが「柳光亭」に六十名ぐらい、佐藤派の三分の二を集めていた。その三分の二に、私とか保利とか坪川とか塚原とか、十五、六人は入つていない。あとの連中で、田中擁立の旗揚げをしてしまった。四月か三月ですね。まだ佐藤内閣の時です。

その時に私が「田中に会いたい」といつたら田中は喜んで席を取つて、「千代新」で夜の七時頃待つていた。私が行つたら、「いやあ、松野君」といつて、えらいご機嫌がいいわけだ。「佐藤は

沖繩返還が終われば引退する、あとは俺が出るから、その時は君、幹事長をやってくれ」というんだ。三十分ぐらいしゃべってしましたかね。「おい田中、誠にありがたいことだけれど、俺は今日それで来たんじゃないんだ。君やめろ、と言いに来たんだ」といったら、ムツとした。「いまは福田にしろ、この時期は福田だよ。財政経済を考えると、君も有能かもしれないけれど、福田に先にさせる。年齢も多いし、君は幹事長をやって、その次になれよ。そうしたら俺は喜んで君を応援するよ。今度福田にやらせないよ、俺はどうしても無理だと思う。君は少し飛び上がりすぎているんじゃないか」と言ったら、機嫌が悪い顔で聞いていましたね。それでも彼は聞いていました。「まあわかった、考えておこう」と言って、それっきりです。それが私と田中の分裂です。その後ずっと田中内閣で、会いもしない、話もしない。やっぱり無理だった。あの時に福田にしておけば、彼「田中」は大政治家になれたでしょうね。

伊藤 佐藤さんも同じような考えだったんですね。

松野 佐藤も同じ考えだったんです。それで佐藤はあの時アメリカに外遊しましたから、福田と田中を連れて行った。田中角栄は通産大臣だった。私も保利も、二人の話を決めてくると思い込んでいたんだ。保利は官房長官だ。私と保利は、おそらく佐藤がこの外遊中に話をしてくると思っていた。そしてカナダに寄ったから、カナダではどうせ暇なんだ。カナダで話をしようとしたらいい。そうしたら田中が、佐藤のところへ寄りつかないんだという。ゴルフに行ったとかで、寄りつかなかったそうです。田中も感じたんでしょうね。とうとう話す暇がなかった。

そこで保利のところに電話がかかってきて、保利が「あの話は済んだか」というと、「済まないよ」「どうしてだ」「田中が寄りつかないんだ。ゆっくり話をしようと思って寄りつかない。ゴルフに行っているとか、いま外に買い物に行っているとか言っ

来ないんだよ、困ったな」という話をして帰ってきた。それっきりになった。

私と保利と佐藤は、福田で行こう、その話を佐藤が田中にするという段取りで、待っていたんだ。だから仕方がない、田中が立ったとき、私も保利も福田に行つたわけです。大橋武夫とか、十七名ぐらいいましたかね。佐藤派の中で十七名が福田に行った。

結局、中曽根の寝返りで田中が勝った。福田は同郷だから、中曽根は福田を応援すると一回ぐらい言明したんですからね。同郷だから福田で結構だ、と。それがいつのまにかグルツとなった。そこで週刊誌に、金が回った、と出たんですね。福田に聞いてみれば、ある程度の金を持っていつて中曽根は受け取ったけれど、しばらくしたら返してきた、だからおそらく、それ以上を受け取ったんだろう、というのが週刊誌に出たんでしょう。だから私も保利も、正常に行つて福田であるべきだと思ひ込んでいた。また福田もその気でおつたでしょう。そうなれば国は乱れなかっただろうな。乱れなければ、三木の内閣はなかったかもしれない。一つ歯車が狂うとね。

田中はまたアメリカのSECからやられたね。どうもあの頃は、諸外国のものがみんな出た。インドネシアのなんとか。SECというのは、アメリカではCIAみたいなものではないか。証券取引委員会でしょう。あそこで犯罪を出すなんて、おかしいことなんだ。向こうの検察庁じゃないんだから、証券取引所みたいなところが諸外国のリベートを洗い出したんだから。その中にロッキードが出てきちゃった。田中はアメリカにやられたんじゃないかと言われるのはそれだからでしょうね。日本のニュースより一ヶ月も前から、アメリカのニュースでは田中の疑獄事件が出ているんですからね。テレビニュースでやり出したんだから。それを日本の検察が一ヶ月もわからない。だから、どうもあれはアメリカにやられたんじゃないか。田中はなんで恨まれたか知らん

けれど、中国かもしれないですね。中国でアメリカを出し抜いたでしょう、国交回復で。それでアメリカにやられたんじゃないかというのが、SECだ。アメリカからあの犯罪が出たんだから。日本の会社ではないんだ。ロッキード社だ。

それで三木が困った。ほとほと困った。三木はその問題をどうしようという気はないんだけれど、出た以上、アメリカの方から突つかれてどんどん出て、日本の検察が調べないわけにはいかない。だからストリートに来たわけだ。日本の検察はまるで路線を走るように早かったでしょうね。

伊藤 田中さんと佐藤さんの関係というのはどうなんでしょう。

松野 佐藤は田中を有能だとしていた。私には、「あれは有能だから用心しろよ」と言っていた。「用心しろ」という言葉をつけていましたね。

伊藤 有能だから、実際に繊維交渉などは任せるわけでしょう。

松野 有能だ。だけど、「用心しろ」という言葉が常についている。だから佐藤はあまり金銭の関わりをしなかつたでしょうね。田中から献金を受け取るのを用心したと思う。「用心しろ」という言葉が常についている。

伊藤 じゃあやつぱり佐藤派の資金というのは、田中さんがー。

松野 というけれど、佐藤は用心していたと思う。田中の献金を半分も受け取らなかつたと思う。「用心」という言葉が常についていましたからね。「田中には有能だから用心しろ」と。常に用心しながらつき合っていた。有能は使ったけれど、あとの方は用心していたでしょうね。それで田中の問題のときに、佐藤は一切出ませんからね。佐藤は、それだけの人間は用心していた。

伊藤 ついでですから、五奉行の五人全部を論評してください。

橋本「登美三郎」さんはどうですか。

松野 橋本トミというのは、旧政党员で、これも新聞記者上がりだと思えます。

伊藤 朝日ですね。

松野 旧政党员の風格を持った男で、大野伴陸の小型みたいところででしょうね。政策的な話はほとんどしません。人間的な話、人情的な話、正義感、そういうものが非常に強い男でした。私達の政策議論のときはほとんど黙っています。しかしいろいろな政党の動き、派閥の動きの時は橋本トミが発言していましたね。

それから仁義が固いというか、吉田さんと佐藤と二人で保守合同の時に無所属で、鳩山の下につくのはいやだと言って、吉田さんもいやがる、佐藤もいやがる。その時についていたのが橋本登美三郎。誘われもしないのに、自分でついていった。「あれ、おまえも来るのか」というぐらいだった。いや私は行くんだと、そういう仁義があった。佐藤が誘ったわけでも何でもない。彼の気持ちで、佐藤、吉田に殉ずるといふ義理でついていった。そういうところは固い男です。私と佐藤、橋本、木村武雄、四人で池田内閣の時に外遊したことがあります。四人で毎日、飛行機でも食事でも一緒でした。あまり愛想がない、ブーツとしていましたね。朴訥な感じがする。

伊藤 そうですか、新聞記者上がりなのに。

松野 あまりしゃべらないで、書くのが好きでした。新聞記者でも、しゃべるのが好きなのと、書くのが好きなのがある。しゃべるやつは書くのが下手です。しゃべれないやつは書くのがうまい。新聞記者は二種類ある。明らかにそうだ。二物を与えず、です。彼は書く方が上手だった。文章はサッサと書いていました。佐藤が外遊すると、向こうの大統領なんか呼ばれて、挨拶をする。その挨拶文なんかは、サツと橋本が書いて渡していた。見事に書いていました。飛行機の中でサツサツと書いて、「こんなものでどうだろう」と言って渡すと、佐藤が「このへんはこゝかな」と言って二人で書いて、それをメモしてしゃべっていました。そういうことは上手だった。

伊藤 じゃあ、佐藤さんの橋本さんに対する信頼というのは、非常にあった。

松野 それはありました。「トミ、トミ」と言ってますね。それで第一回の官房長官にしたわけだ。初代の官房長官はトミにした。そういう義理があるから。

私は「官房長官は誰にする？」と言ったんだ。愛知か私かにしろ、という意味だったんだ。そうしたら、愛知でも私でもない、「トミにする、あれも義理が固いからな」「まあいいだろう、それもそうだ」と。その時に言ったのは、「あれは仁義が固いから、あれを第一回にしてやりたい。一緒に無所属に行つて、苦勞をさせたから」ということです。

伊藤 官房長官というのは、しょっちゅう記者会見をしなければならぬじゃないですか。

松野 記者会見をやつて、しゃべりは下手ですけど、記者上がりですから、仲間意識があるでしょうからね。官邸記者と。その時の佐藤は、「トミを無所属で苦勞させたから、トミを第一回にしたい」と、私と二人の時に言っていた。

伊藤 それで最後は愛知さんなんですけれど。

松野 愛知という人は、非常に聡明で円満で才能がある男でしたね。欠点は、酒を飲むと駄目なんだ。酒乱だ。暴力を振るうようになる。

武田 聞いたことがないですね。

松野 それが彼の欠点だ。大蔵省の時からそうです。

伊藤 大蔵省はそういう人が多いんだ（笑い）。

松野 暴力を振るうようになる。よく記者と喧嘩をしていた。翌日はもちろん、すっかり覚えていない。そんなことが何度もあった。これも気骨のある男で、あれが大蔵省の局長の時に、GHQが全公務員をテストすると言いだした。愛知は、「馬鹿なことを言うな、俺はGHQの試験を受けて局長になる必要はない」といっ

て、局長をやめてしまった。銀行局長だった。それで政治家になった。なかなか気骨がある男だ。「冗談じゃない、試験まで受けて局長をやるか」と言つて、直ちに銀行局長を辞めましたね。そのあとが福田かもしれないね。だから年代も古いし、人間も非常に面白い男で、政策通で、池田も愛知には一目置いていましたね。愛知の方が頭がよかったですよね。佐藤も愛知には一目置いていた。

伊藤 政策の面で、ですね。

松野 政策の面です。そのときにたしか相互銀行をつくったんだ。愛知が昔の「無尽」といったものを相互銀行に引き上げた。そこで銀行が大反対した、「銀行という名前をやめてくれ」と。愛知は「何を言っているんだ、銀行は何も特別なものじゃない」と。相互銀行と名づけるときの銀行という名前にえらい抵抗があった。それを頑としてねつけて、相互銀行という名前をつけた。だから相互銀行の生みの親です。だからずっと末代まで相互銀行は愛知を恩人としたでしょうね。そういう才能と一徹さがありますね。私は非常に好きな男だ。

いまの息子、愛知和男は似てはおるけれど、愛知揆一は尊敬する一人だな。私は何度も教わっている。いろいろなことを教わったな。私は予算の読み方もわからなかったんですが、愛知に聞くとも教えてくれた。福田、愛知というのは双璧ですね。福田、愛知、池田は、大蔵省の三傑物だな。早く死んだものですからね。やっぱり酒乱で酒を飲み過ぎた。たしか愛知には子供がいなかった。いまの和男は養子じゃないかな。

小池 「愛知和男は」この前の選挙で落選しましたね。

松野 たしか子供がいなかったから、養子じゃないかな。私は冷やかして、「飲み過ぎたから種が切れたんだろう」なんて冗談を言ったから、子供がなかったんじゃないかな。養子かもしれないね。私はいまでも愛知揆一というのは立派だと思つて。政策面に

おいて、池田、佐藤よりも愛知だったでしょうね。予算編成と政調会副会長を一緒にやりましたからね。予算編成も円満で、池田みたいに小馬鹿にしないで、とくとくと説いてくれて、とくとくと教えてくれる。池田は小馬鹿にするんだ。

伊藤 だいたいこの五人で佐藤さんを戴いて、派閥が運営されるという感じですか。

松野 運営されてましたね。党人派の空気は私が見えるわけだ。池田派の空気は田中がわかる。そういうふうにみんなが触覚、触覚で、話し合う。もめ事が起こると、今度の総裁選挙はこういう空気だよとか、どうもこつちに来そうだよという話で、進んでいく。池田のあとで佐藤が総裁選挙に出るか出ないかというときは、どれだけ票が取れるか、大変なものです。少しの差で池田に敗れたけれど、七票ぐらいの差ですから、すれすれですね。五人は走り回って、個人個人に会って、「どうするんだ」といつて聞いて票を集めると、七票ぐらい勝つはずだったんだ。そうしたら七票ぐらい負けたんだ。負けたのはあれとあれと、おまえの受け持ちかおれか、と始まるわけです。

一所懸命頼みに行くと、ある人が「松野さん、私はどつちか言えない」という。「言えないといつても、日にちが迫っているんだから」「私は朝にしか決めない」「どうしてだ」「私の信心する仏さんに毎朝お経を上げてお詣りをする。そのお告げで決めるから、朝のお告げで決まるんです」。そんなことを言ったのが木村「義雄」君というんだ。これはどうも、あとで見ると向こうに行っている。面白いんだ。「私は毎朝お経上げるんだ。お経を上げるときに、仏さんの言葉が伝わってそれで決まる」「じゃあ朝までわからないのか」「わからない」という。どうもあの言い方を見ると、こつちじゃなかった。そういうのが計算違いで、七票勝つのが、負けた。

伊藤 川島正次郎という人は、佐藤さんにとって大事な人だった

んでしよう。

松野 それは岸さんだ。岸さんの幹事長ですから。岸さんの時にいちばん大事だったのは川島正次郎。鳩山さんの時から大事ですね。鳩山さんの時の幹事長「選挙制度調査特別委員長」をした。この人は飄々として、料亭へ行かないような人だ。待合政治家そのものです。戦前派ですから。たしか鳩山さんの時の幹事長をした人で、小選挙区をさかんにつくって、ゲリマンダーだなんだという問題があった。あの時の幹事長で、飄々とした人でした。

人を食っていた。「ああそう、わかった、わかった」と言つて、全然わかつていなかった。それで平気だ。人の話を聞いているかと思うと小唄を歌ったりしてね。目の前でね。「さっきの話はどうなったんだ、唄を聞きに来たんじゃない。さっきの話を聞きに来たんだ」「ああそうか。俺は君たちに会ってあんまり気持ちがいいから、つい唄っちゃった」という。それぐらい人を食っているんだ。私は、あれぐらいになったら傑物だと思う。小さい声で小唄を歌うんだ。こつちも困るんだ。「人の話を聞いていて小唄を歌うなんてとんでもない。小唄を聴きに来たんじゃない、さっきの話をしに来たんだ」「ああそうだ、あんまり君たちと会って気持ちがいいから、つい唄が出た」なんて、言い方も上手ですね。そういう政治家だ。人を食っていた。

伊藤 佐藤さん支持でしょう。

松野 もちろん、岸、佐藤だ。佐藤よりも兄貴分だったでしょうね。あれがとうとう成田空港を決めたんだ。あれは千葉県出身だったから。

伊藤 おかげで大変なことになったんですね。

松野 あれがいたから、鳩山内閣で成田空港を決定したでしょう。岸内閣に持ち越しましたけれどね。大野伴睦は羽島駅をつくるし、川島正次郎は成田空港をつくる。そういう、人をまるめるのが名

人でしたね。これは戦前派の私のおやじなんかの時代の川島正次郎。それぐらい人を食っていた。それで川島正次郎という人柄が通ったんだ。結局、政治力というのみんなが認めるかどうかなんです。癖があっても、みんなに認められた癖は許されるんだ。

伊藤 しょうがないな、という感じですね。

松野 しょうがない、あの男ならしょうがないと。鳩山一郎も年中失言するが、認められる。川島正次郎の小唄も、人を馬鹿にしているというけれど、そうじゃないんです。認められるんです。「君たちが来て気持ちがいいから、つい唄が出ちゃった」と言われると、腹も立てられない。その人心の妙、隙間を突くからね。人間誰でも心に隙間がある。隙間を上手に突いてくるから、なんとも言われない。人の癖を知っている。そんな人物です。

伊藤 佐藤シンパですね。

松野 シンパでしたね。

伊藤 西村英一さんというのはどうですか。

松野 西村英一は、佐藤が役人の時から、飾りっ気のない、真面目な、金庫番に最適な男でしたね。そこで金庫番にしたのが西村英一です。

伊藤 金庫番というのはどういうものですか。

松野 金庫番というのは、党の経理局長ですね。入るときも出すときも経理局長が決める。だから選挙応援というときは、金額に上中下をつけるわけです。党からの公認料。

伊藤 公認料は一律じゃないんですか。

松野 一律は一律でも、そのほかにまた上中下、第二、第三の補助が出る。一律に一千万といっても、特にふだんから、これはあげたいとか、これは大したことがないとか、敵味方によって、一千五百万なり、二千万なり、三千万になるものがあるわけだ。一律は一千万ということだ。あの頃は五百万でしたね。一律は五百万。そのほかに、上中下がつく。それは西村の裁量だ。もちろん

佐藤に相談してですけど、決めるわけだ。そのためには信頼される者でなければいけない。いまの機密費みたいな怪しい者は駄目だ。馬を買ったりは絶対にしない男だ。また彼女も持たない男だ。西村英一が芸者をもったなんて話を聞いたことがない。料亭も自分で行かない。呼ばれば行きますが、自分で進んで行く男ではない。

川島正次郎とか大野伴睦とかは、行かなければムズムズする。毎晩決まった料亭があるわけだ。行かなければ寂しい。昔の政治家はそうです。料亭が決まっています、毎晩そこに行くんだ。そこに行きさえすれば会えるわけだ。夜の政治事務所ですね。それも一流料亭ですよ。そこに行けば会える。利権屋はそっちに行つた方が早いんだ。だから料亭の女将が利権の橋渡しをする。一番いいことだ。いろいろな事件の時は必ず料亭の女将だ。「中川」とか「いな垣」とか料亭の女将が必ず事件の時に出てくる。「新喜楽」の女将とか、「中川」の女将は犬養健の時に出てきましたね。有名な話だ。料亭の女将が利権の仲立ちをする。業者は料亭に行くわけだ。その女将に頼んでおくと、先生は必ず来る。料亭は料亭で、来てくれれば売れるから。そのうちに、料亭の勘定は全部その人が払ってくれるわけだ。一年間使ったものをまとめて払ってくれるわけだ。だから料亭の女将は業者を大事にする。政治家本人は金を取らなくても、料亭の女将はとるわけだ。政治家は料亭はタダだ。だから料亭はいい政治家をつかまえるわけだ。来てもらえば、それについて、利権屋が来る。利権屋が来れば金が入る。政治家の会合費ぐらいは、何倍も取り返せる。それが待合政治です。待合が事件の橋渡しだ。いま、それがなくなつたけれども。

だから料亭の女将は自分が拘留されても物を言わないわけだ。先生に傷がつかないように。それが大事なことだ。自分は二十一

日間拘留されても一切言わない、というのが料亭女将の仁義だ。料亭は商売だから、お客から金をもらったっていいでしょうね。少し多すぎるじゃないか言われても、多いのはいろいろありますからと言って、自分のところで全部かぶって、何々先生という名前は言わない。また帳面にもつけないんだから。檢察が入っても、帳面には先生の名前が書いてないんだから。それが戦後の待合政治の華やかなとき。だから、「いな垣」は誰、どこは誰、と料亭によって決まる。大野伴睦は彼女がいましたからね。

益谷「秀次」は、そこに「さかい」という店がありましたからね。「さかい」に行くと言え。私ら若いのは、飯を食うところがないと、「おい、今日は『さかい』に行こうか」「俺は益谷は知らない」「俺が行くから」ということで、益谷派のやつが私を連れて行く。今度は大野の時は私が連れて行く。みんなでぐるぐる回るんだ（笑い）。料亭を回ってれば夕夕に決まってる。みんなおやじがいるんだから。いなくても勘定は取らない。それは絶対に取りません。みんな若いのが、今日どこへ行こう、夕飯をどこで食べようと言って、あつちに行こう、こつちに行こうという。どこへ行っても、自分の子分になると思っご馳走してくれるんですね。その勘定は、だいたいどこかの土建屋が払う。あの頃は糸へん、金へんですからね。糸へんの時は繊維業の代表がみな払ってくれる。金へんの時は鉄鋼関係だ。糸へん、金へん、油で、だいたいあの時代はバブル以上だったでしょうね。闇の時代だから。物が無いときは、いまよりもっと激しかったです。

伊藤 何へんというのがいまなくなっちゃった。

松野 なくなっちゃった。闇の時は大変なものです。ゴムを持っていくとゴム。ゴムへんはないけれど、闇ゴム。闇酒、酒だつて闇だつたからね。あの頃は、金より物だったから。ものを持っていけば、なんでも手に入る。それで一番利益を得たのがブリジストンです。ブリジストンは地下足袋と運動靴をつくっていた。軍御用

だ。だからゴムをたくさん持っていた。それで終戦で、軍がなくなつた。それで自転車のタイヤ、チューブをつくつた。そのうちに自転車もつくり出した。そのうちに自動車タイヤに行つた。だからブリジストンというのは、もともと地下足袋から、自転車のチューブ、タイヤ、それから自動車タイヤ、最後にはプリンスという自動車までつくつて、大失敗しますけれどね。あの頃の闇は、いまの時代と違うでしょうね。

伊藤 西村さんというのはそういうことが全然ない人なんですね。

松野 西村はそれをしないというので、佐藤の金庫番だ。政策的にはなくて人間として一番信頼したのは西村でしょう。西村はさすがに田中にも文句を言っていました。それは田中が領収書を余計に書けと言うわけだ。一億を三億に書けというんだ「電話で一時中断」。

伊藤 党から一億もらうんですか。

松野 そうではなくて、党に入れて、自分が取りたいわけだ。カラ領収書を発行させたいんだ。自分が取ると危ないから、党に取めさせる。だから領収書だけ出してくれと言って、自分が取るわけだ。

伊藤 お金は自分が取る。

松野 そう。そういう危ないことをする。党に入ればいいわけだ。自分で取るというわけにはいかない。だからカラ領収書を書けという、西村は怒って、「そんなことはできない」という。「いいじゃないか、どうせ党のものなんだから、みんな使っているからいいじゃないか」「それなら一回入れなきゃ駄目だ、持ってこい」といって、非常に正確なんだ。「田中は」カラ領収書を書かせた。党に入つたことにして、自分が使いたい。そうすると西村は、それは駄目だという。あの時は党に入る企業献金は無制限だった。個人だと問題になる。西村経理局長だから、党に入つたことにし

て領収書だけ書けという、西村はそんなことはできないという。口から泡を吹いて、そんなことはできるか、という。そんな話をしていましたね。

それをすぐ西村が佐藤に言うわけだ。危ないからやめろ、という。金集めは上手だけれど、危ないから用心しろという。西村は田中と親しいし、田中派の旗揚げの時は西村も田中を応援していますが、親しいのと自分の規律とは別なんだな。規律を曲げることはできない男なんだ。それを佐藤は知っていた。たしか技官ですから、運輸省の技術屋さんだ。文官じゃない。技術の方の最高でしょう。非常にかたかったんでしよう。その意味では価値のある男でしたね。

伊藤 政治家として、佐藤派の幹部というわけではないんですね。

松野 やはり幹部の中に。私達より年齢も上でしたからね。私も西村はどちらかという尊敬していましたね。

伊藤 でも、よく五奉行と言われる中に入っていない。

松野 それは佐藤の直系だったでしょう。佐藤の運輸省の関係で直系でした。細田吉蔵なんかも運輸省で、これも佐藤の直系だ。いわば直参だ。私達が五奉行といっても、細田吉蔵や西村英一は直参だ。

伊藤 ああそうですか。じゃあこの五奉行と別に、直参がいるわけですね。

松野 直参がいるんです。運輸省という出身母体で、これは直参と言った方が早いでしょうね。五奉行のほかに直参がいたんだ。竹下は直参にも入っていない。秘書課長みたいなところだったでしょうね。

伊藤 自分でもそんな感じで言っていましたよ。

松野 才能から見ても、秘書課長ぐらいとしか私は見ていなかった。それがいつのまにか総理になるとは、私どもは笑っていた。竹下が総理になったとき、佐藤栄作の家に入ったんです。それで私が、

消費税か何かのことで竹下に会いたいからと朝電話して、「お伺いする」と言ったら、「いやあ、先輩が来ていただかなくていいです」と言うから、「とにかく今日は俺が頼むんだから行くよ」と言っただけで、行ったんだ。竹下は驚いていた。私は佐藤の家に竹下がおる、その姿が見たかったわけだ。昔は玄関番にしていたのが、主になつてきている。皮肉まじりであつたけれど、佐藤の家に竹下を訪ねていったけれど、用事は何もなかつたんですね。いたずらでしようね。竹下が夫婦で玄関まで来た。なるほどこの家におると、むかしは玄関番だったけれど、今度は主になつてきている。竹下もえらくなつたな、と思つたね。人間は、一つを軽く見ても、ほかの才能があるんです。やつぱり人間というのは全部馬鹿にはできない。一つを馬鹿にしても、得難い才能を持っている。竹下の隠れた才能は、人事の趣味でしょうね。田中は図々しさと迫力でしょうね。

伊藤 お金もあるんじゃないですか。

松野 それを材料にして、金権の掴み方ですね。人の弱みを掴む、人心を掴んで金を取るでしょうね。また人心を掴んで金を渡すでしょうね。

伊藤 佐藤派の中に五奉行がいて、例えば田中さんについている人、それから松野さんについている人、愛知さんについている人、というふうに派内で小さなグループはできませんでしたか。

松野 できます。五、六人ずつ仲間ができる。田中がグツと出てくると、田中と反田中に分かれましてね。それまでは五人にバラバラだったでしょうけれど、一人が出てくると、ほかのがまとまる。「電話のため一時中断」

佐藤というのは、人をよく使っていましたね。それは吉田さんの教訓を得ているな。吉田さんがだいたい苦労しましたからね。吉田さんに鍛えられたから、佐藤は吉田の轍を踏まないように用心したでしょうね。それまでは役人だから、運輸省のプリンスだつ

たでしょうね。運輸省のワンマンでした。大臣よりも佐藤の方が威張っていた。それから政界に入って、吉田内閣でただ勤めていればいいと思つたら、そうじゃないということがわかった。政治は、縦、横、人事というのが難しい。それでずいぶん鍛えられましたね。左遷もされたし、叱りもされたし、いじめもされた。党人派からはいじめられる。吉田さんからは鍛えられる。それで非常に人事が練れていましたね。私から見るとずるい人事もやっているんだな。岸さんのように開けっ放しではなかった。岸は開けっ放しだった。佐藤はどちらかというと、人事に関してはいくらかっただすね。人に隠して、開けっ放しにできなかった。

伊藤 よく「人事の佐藤」と言われるでしょう。僕は、岸さんにインタビュしたときに、岸さんは、「弟が人事、と言われているけれど、あれは自分から見ると下手なやつなんだ」と、さかんに言っておられましたね。僕はよく意味がわからなかったんですけれど。

松野 そうでしょう。岸さんは開けっ放しでやっていた。佐藤は陰でやっていた。その差があつたでしょう。佐藤が「人事の佐藤」と言われるのは、人に漏らさない。自分でずつとやっていましたから、岸さんから見ると、かえって下手に見えたかもしれませんね。「俺みたいに開けっ放しにした方がいい人事ができる。佐藤は自分でこつそり鉛筆を舐めるから間違えるんだ」ということでしょうね。佐藤は名前を書くのに、自分で鉛筆を舐めていましたからね。

だから私達にも、これにはこれを言い、あれにはあれを言うんです。保利に言うのはこれ、私に言うのはこれ、田中に言うのはこれ、全部違うんだ。ときどき会って話すと、話が違うんだ。相手を見て言っているんだ。何か頼んでおきながら、私には右の方へ行つて来いと言い、保利には左の方へ行つて来いと言うので、二人で「おかしいな、君に言っているのと俺に言っているのでは

違うじゃないか」と言っていた。

そんなことが、最後の福田、田中の時に出ましたね。佐藤の真意はどつちだというときに出たでしょう。田中は「佐藤は俺だ」という、福田も「俺だ」という。二人が俺だという。それが最後にはつきり出たのが、福田と田中に対する佐藤の言葉だ。それで一番真中で上手にいったのが竹下でしょうね。官房長官だ。彼が逆に、佐藤を上手に使つたでしょうね。佐藤に忠勤を励みながら、田中に全部内通していたわけだ。それで最後に、「竹下、おまえ、俺のところに来るな」といって、記者会見は竹下抜きでしょう。その佐藤の癖を逆用したのが竹下なんだ。それで若い者には「佐藤は田中だ」と竹下が言うものだから、若い者は佐藤は田中だと思ひ込んでしまったんだ。私達は直接聞いているからそうじゃないと言う。踏切を切り替えたのはそれです。「電話のために一時中断」

すみません、竹下、田中というのは、そんな人事でしたな。

伊藤 田中さんは、自分の周りに集まってくる連中に軍資金をやるじゃないですか。そうすると、松野先生は自分の周りにいる若手に援助しないといけませんね。そういうお金は、それぞれが自分で集めたお金でやるわけですね。

松野 あの頃は個人献金無制限でしたからね。もちろんそうです。

伊藤 そうすると、派閥の中に小さな派閥ができるということですね。

松野 ある程度できますね。ふだんはそう多額なものではないけれど、総裁選挙とかいろいろ事態が起こるときは、五百万のところ二千万にしてくれといつて頼んで歩いて、集めますわな。集めた金で、私達十七、八人は運営していましたね。

伊藤 それは田中が抜けた後ですね。

松野 抜けた後です。それまではせいぜい三十万ぐらいのものですよ。お互い盆暮れに、それぐらいのものは仲間で、好きずきで

やっていますたけれどね。

伊藤 例えば選挙があるでしょう。そうすると公認料が出るじゃないですか。幹部の人たちももらうわけですか。

松野 公認料は党からもらいます。

伊藤 だけど、自分を頼っている若手にはまた別にやらなければならぬわけですね。

松野 三十万でも五十万でも入れていましたね。公認料をもらうけれど、自分で使うよりも、それを三人ぐらいに分けてやりましたね。いつも私の公認料の半分は、やっていました。公認料は当然もらっていないんです。それをまた仲間に分けますけれどね。

伊藤 でも松野先生には上乘せはないでしょう。

松野 党から上乘せはありません。

伊藤 ないですよ。

松野 党から上乘せしてもらったことは一回もない。公認料をもらって仲間に分けた。上乘せは私は一回もない。その上乘せで一番尽くしたのが、保利に尽くしたんです。金丸が保利に、田中を通じて。保利と田中はある程度つながっていたでしょうね。保利というのはあまり金脈に関係しない男です。佐藤よりも、田中が賄っていたんじゃないでしょうか。五奉行の中で、橋本も田中が賄ったかもしれませんね。愛知はあまりそんなことはしなかった。

伊藤 佐藤さんはそういうことをわかっているわけですね。

松野 わかっている。全部知っている。さすがに人事の佐藤は全部知っている。

伊藤 それは言ってみれば、田中さんによる佐藤派の篡奪ですよ。その田中派を、今度は竹下さんが篡奪する。こういう仕掛けになるわけですが、いつも派の中の大きな派ですね。

松野 総裁選挙のたびに派が分裂しますね。それで新しい派ができます。田中が天下を取ったときに私達は田中派にならなかつたから、自然に反田中派になったんでしょうね。それで福田と一緒

になってしまった。総裁選挙から福田の方にいった。もう田中のところにはおれませぬね。それで佐藤派もなくなっちゃった。結局、田中と福田に分かれた。保利も福田の方だ。そのとき田中の方に行つたのが、いまずつと残っている。だから福田に行つたのと違うわけだ。その流れですね。いまのは、その水源の下流なんだ。その伝統は残っていますね。宏池会もそうだ。

伊藤 やはり宏池会と佐藤派。

松野 その二つが大きな流れでしょうね。

伊藤 あと岸・福田派ですね。

松野 岸が福田派になったでしょうね。それで佐藤の半分、私達は福田に行きましたからね。

伊藤 だから大きな派閥は三つぐらいですね。あと群小派閥があつて、三木さん、あるいは河野派を引き継いだ中曾根さんみたいな人がときどき総理になる。でもだいたい、その三つの派閥で総理をとっていく。

松野 そうですね。宏池会、田中、福田。この流れが、名前は変わつても、いまでも残っていますね。

伊藤 その当時の派閥といまの派閥とそう変わらないんですか。

松野 いまの派閥は資金がないですね。資金収集が、あの時代の五分の一でしょうね。政治資金規正法でうるさくなつたから。そのかわり、政党助成金ができたわけだ。

伊藤 でもあれは派閥には行かないわけでしょう。

松野 行きます。

伊藤 いちおう政党に行くんじゃないですか。

松野 政党に行つて、また派閥に行くんです。主流派になれば、派閥に使うでしょうね。

伊藤 主流派になれば、ですね。

松野 主流派になれば、政党助成金を牛耳るから、やはりその派閥に使うでしょうね。

伊藤 そうすると政権を持つている派閥がすごく大きくなる。

松野 もう一つは機密費でしょうね（笑い）。

小池 官邸機密費ですね。

松野 問題になっている官邸機密費でしょうね。

伊藤 それもあるでしょうけれど、結局政治資金規正法で網がかげられちゃったから、闇のお金はどうしても出て来るじゃないですか。

松野 それは多少のもので、大きな金はなかなか出ません。億という金はなかなか出ないでしょう。百万単位は出ても、億という金が政治資金規正法の網をくぐることは容易じゃないでしょうね。だからいまみんな百万単位を数多く集めなければいけません。億といいでしょ。昔は億でまとめていましたけれどね。いまは百万単位で数多く集めなければ、多く出す会社は不可能でしょうね。どんな大会社でも、新日鉄でも難しいでしょうね。政党には出せませんよ。派閥には出しにくいんですね。

伊藤 佐藤派ができたときから、とにかく次は佐藤政権だという
照準はー。

松野 池田の後に、照準を絞っていました。私なども佐藤も、池田を早く降ろしたいぐらいだった。それで四年目には立候補させたんだから。それで二期目に佐藤を立候補させて戦ったんだ。そうしたら五年目に病気で亡くなったんですけれどね。それはやっぱり派閥の争いは激しかったですよ。いまは政党間の争いだけれど、あの頃は派閥間の争いの方が大きかったな。政党間の争いは大したことがなかった。社会党だけだから。あの頃は派閥間の争いが政党間の争いのようにだった。

伊藤 池田政権に対して、佐藤派はどうやって戦うんですか。

松野 それがなかなか難しいんですね。同じ党内で、大義名分を立てて総裁選挙をやるときも、みんなに訴えなければならぬ。池田の経済政策は間違っているとか、もう所得倍増の時代じゃない

とか、所得倍増をいいながら、福祉はよくないじゃないかとか、そういうことを訴えなければいけない。佐藤になったら福祉を中心にやるとか。だから政党間の争いとは多少違うけれど、小さい区切りを争わなければいけない。

伊藤 なかなかその政策は難しいでしょう。

■森首相の断

松野 もう一つは、やっぱり人事ですよ。看板を立てて、こういう人事をやるんだと。財政はこうするんだとか。「電話のため中断」

今日はこの問題「森首相の辞任、後継」で、どうするか。不信任案、解任決議案を出して否決されたものだから、野党は手の打ちようがないんだ。

伊藤 問責決議案なんてしようがないじゃないですかね。

松野 一つの世論を掻き立てるだけです。どうするということから、昔、板倉卓造さんに聞いた話で、野党が妨害するときの話だ。イングランドとスコットランドの合併の話が出たとき、スコットランドの代表が反対して、二日三晩演説したという記録がある。飯を食う時間とか、生理的なものは別として、それで抵抗したそう。それは民主政治で許されることだ。暴力をするということとは別として、演説、言論はいくら徹底してもいい。二日三晩やったという話がある。だから君たちも長演説をしてみてもどうかという。ところがそれは日本でもやったことがあるんだ。一人で四時間しゃべれといつて、四人担当させて、十六時間だ。ところがしゃべることがないんだ。だから古い速記録を読み始めた。古い速記録はいくらでもありますから、「何々議員はこう言った、大臣はこう答えた、何々議員はこう言った」という。そういう妨害の

道もある。

野党というのは、採決させないことしか戦術はない。それは言論の府だから、四時間ずつしゃべったことがある。そうすると私達与党は、会議前に時間制限をした。二十分として、二十分ずつに制限して、それを妨害したことがある。そこでいま不信任でもなんでも、二十分以上はしゃべらせない。そうすると、野党はやりようがない。出ないという。出ないと出ないで、採決されちゃう。だから野党の妨害は容易じゃない。

伊藤 そうですよ、松野先生は与党の時代ですからね。

松野 私は与党の方だから、野党の話はどうすればいいかね。与党で一番怖いのはスキャンダルですよ。だからスキャンダルをほじくってしようがないと言うけれど、スキャンダルだけは与党が怖い。私達与党も、何かスキャンダルが出やせんか、大臣のスキャンダルが出やせんか、ハラハラだ。だからスキャンダルで重箱の隅を突くようで汚いけれど、野党としてみればそれしかないんだ。だから最後になると女性スキャンダルまで探さないとしようがない。これは採決させないということだ。採決すれば負けちゃうんだ。スキャンダルばかり探すわけにもいかんけれど、週刊誌でもみんな読んでいますよ。

小池 でも今回のように、スキャンダルもたくさん出ましたね。KSDとか、いっぱい出た。それで内閣の支持率も低くて、不信任も、問責決議案も否決となってる。野党は本当に打つ手がないんじゃないですかね。

松野 ないんですよ。それで一番悪かったのは、今度の参議院の拘束名簿を非拘束にした。あれなんかめっちゃくちゃですよ。いままたそういうことをやろうとしつつあるわけだ。それは、中選挙区に直そうというんだ。

伊藤 それは公明党でしょう。

小池 公明党の悲願でしょう。

松野 それが出るかもしれない。そうだったらどうするか。その時はもう議場を混乱させて乱暴でもするしかないよと(笑い)。

小池 中選挙区法案を出すんですかね。

松野 ありますね。

小池 しかしいまの自民党も、中選挙区に戻して選挙区割りをもう一回やることができますかね。組織がないところもけっこうあるでしょう。

松野 それが、この機会じゃないと、もうできないんだ。参議院が負けたらもうできないんだ。そこなんだ、問題は。良識をやっていると負けるんだな。参議院が負けると、法案だから通らなくなる。その乱暴なことをやり得る者が、森のあとに案外なるかもしれない。非常に混沌としていますね。野党はそれを用心しながらだね。

伊藤 時間ですので、次回の日程を決めさせていただきます。

伊藤 また一ヶ月経ったら、どういことが起こっているかわかりませんから。

松野 いまのようなことになるかもしれないよ。最後だから危ないんだ。鮠の最後つぺみたいなものだ。

伊藤 そうですか、それは考えなかつたですね。

松野 それも一人漫才じゃないけれど、あなたの言われた通りで、都会だけやろうというわけだから。それは人口の比重で、区が割れないじゃないかとこ言つてね。人口を増やす代わりに中選挙区に行こうと。猿知恵が出るでしょうが。

小池 東京だったら、自民党は勝ちますね。

松野 それは公明の悲願だから。悪知恵でしょう。

小池 関西公明党がまた強いですからね。

松野 それでいま人口比例で都会が増えたでしょう。増やす代わりにそれで行こうというわけだ。区割りをするから。だから増えるところというと、東京だけです。大阪も増えるでしょうね。

都会だけで、あとは人口比例がないから。
 小池 では議員の数を増やすというわけですか。
 松野 いま四八〇でしょう。だから五〇〇まではいいということ
 でしょう。最初は五〇〇だったんだから。ゲリマンダーそのもの
 だ。
 伊藤 また大騒ぎになるな。自民党の中も大騒ぎになるでしょう

ね。
 松野 そうでしょう。だからいまは正常より狂っている。あの非
 拘束も狂っていますよ。あれでも勝てないんだ。これでもか、と
 いうことで、第二弾のゲリマンダーだ。
 伊藤 どうもありがとうございました。

政局関連年表

「森喜朗内閣出来事」

- 二〇〇〇年四月二日
小渕首相緊急入院。
- 四月三日
青木官房長官が病名が脳梗塞であると発表。首相後継問題が浮上。
- 四月五日
小渕内閣総辞職。自民党森喜朗総裁を首班とする内閣発足。
- 五月十五日
小渕氏死去。森首相のいわゆる「神の国発言」。
- 六月三日
森首相のいわゆる「国体発言」。
- 六月二十五日
衆議院総選挙投票日。自民党単独過半数ならず。
- 六月三十日
中尾栄一元建設相、受託収賄容疑で逮捕。
- 七月四日
第二次森内閣発足。
- 七月三十日
久世公典金融再生委員長辞任。
- 十月二十四日
森首相のいわゆる「第三国発言」
- 十月二十七日
中川秀直官房長官辞任。
- 二〇〇〇年十一月上旬～下旬
いわゆる「加藤の乱」。
- 十一月二十日
内閣不信任案否決。
- 十二月五日
第一次森改造内閣発足。
- 二〇〇一年一月六日
中央省庁再編。
- 一月十六日
小山孝雄参議院議員逮捕。
- 一月二十三日
額賀福志郎経済企画庁長官辞任。
- 二月十日
漁業実習船えひめ丸と米原潜グリーンビルとの衝突事故発生。
- 二月十五日
森首相にゴルフ会員権無償供与疑惑発覚。
- 三月二日
村上正邦参議院議員逮捕。
- 三月十日
松尾克俊・外務省要人外国訪問支授室長を詐欺容疑で逮捕。
- 四月六日
森首相、正式に退陣表明。

松野頼三 オーラルヒストリー

第7回

[2001年4月17日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

■自民党総裁選のワイド

伊藤 前回の速記録を見直していたら、「総裁選の有力候補は」野中でしたね。一ヶ月経つと、変わりますね。

松野 この前読んでいて恐ろしいと思ったのは、このあいだ送っていた海原「治」のオーラルヒストリーです。私のことを、松野が威張りたかったからどうだこうだと言っていますね。

伊藤 ずいぶん悪口を言っているでしょう。あれは係の人が、「これ、松野さんに送りましょうか、どうしましょうか」と言うから、「そんなものは送りなさい、どうせ、お互いに悪口を言い放題だから、今度は海原の悪口を聞こう」と言っただけです（笑い）。松野 あの程度しか知らなかったのかと思って、啞然としました。私が威張っているとかどうのこうのと言って、本人が自分の鏡を見たことがないのかと思った。

伊藤 あの人も威張っていたんでしょう。

松野 あいつが一番悪い、と私は赴任の前に言われたんだ。それは岸さんから言われたんだから。岸さんのところには旧軍人がたくさん来るわけだ。若造の海原が旧軍人を馬鹿にして、おまえたちは戦犯だという顔をしていたので、防衛庁の中では旧軍人が肩身が狭いんだ。

伊藤 それはお話を伺っていて、よくわかりました。

松野 おまえたちは戦犯だなんだといって、彼が横暴を極めて、歴代の防衛長官を籠絡していた。おまえ、それだけは注意しろと言われて、私は赴任したんだ。だから、あれには近づかなかったわけだ。それが本人にはわからないんだ。だから自分の鏡を見たことがないのか、と思うんだ。

伊藤 いや、自分でわかっているんです。

松野 私が書くと同じように、わからないといって松野頼三が笑

われると思うと怖いと思ったね。みんな死ななきゃ直らない。今の自民党も死ななきゃ直らない。

伊藤 誰が「総裁に」なっても、「自民党は」死にますか。

松野 死んだ方が早いでしょうね。死んでつくり直したときが本物でしょうね。こんなことは中途半端に手直したって駄目でしょうね。死んでつくり直したときに、いいものができると思う。

小池 小泉がなつても駄目ですか。

松野 小泉は壊すでしょうね。

小池 壊しちゃいますか。連立の組み替えの話もしましたしね。

伊藤 小泉さんがなる可能性はどうですか。

松野 少ない。七割は改革したくないという現状維持派だ。こたつの火が消えることはわかっていても、こたつから出ようとしな

伊藤 こたつは、火が消えてもしばらく暖かいですからね。

松野 余韻が残っているんだ。七割は改革をしたくないんだ。小泉は三割だ。七対三でしょうね。

伊藤 二回目の橋本内閣ですか。同じ人が二回やるというのは、戦後初めてですね。

小池 吉田もそうですね。

松野 ただし、あの時は制度が違って、第一回の吉田は大命降下なんだ。

伊藤 そうですね、旧憲法ですね。

小池 新憲法で初めてですね。ただ、地方票では小泉さんが多いんじゃないですか。

松野 地方票で小泉が多くて、永田町でそれをひっくり返せば、世論はたいへん沸騰するでしょうね。選挙は俺たちでやるんだと思っている。なぜおまえたちは権力ばかり、といって怒るでしょうね。地方票を私は見たいんだ。党員の構成を見ると、土建業だ、なんとか業だ、個人は一人もないじゃないか。みんなKSDみ

たいなものばかりが並んでいる。あれを見ると、自民党の黨員というのはいないということなんだ。組織・団体だけであつて、あれはまたひどい黨員だ。組織・団体が立て替えて党費を納めているわけだ。あれはちよつと恥ずかしい。KSDと同じことだ。

伊藤 いずれにしても、参議院選挙で負ける。

松野 大改革になるでしょうね。小泉のいう「解党的出直し」ということで、自民党を含めて、新党運動を起すでしょうね。出て行かずに。

伊藤 いま小泉さんを推しているグループが自民党を出たら、自民党政権は倒れるでしょう。

松野 もちろん。一二〇いますからね。一番だらしがないのが森派の森「喜朗」なんだ。これがいちばんダラ幹なんだ。今度もそうだ。

伊藤 小泉のために一所懸命やつていないんですか。

松野 やつていない。勝てそうもないのならやめろ、という言い方だな。小泉は、そんなこと言っていたら駄目だ、やらなきゃわからないと。

小池 やはり派閥の会長を手放したくないということなんですかね。

松野 そういうことですよ。また、せめて森も、最後に李登輝の入国ぐらいは、はんを捺さなければ。李登輝の入国でおろしている馬鹿が、日本の主権の行使もできないんだから。他国に相談するんだから。

伊藤 森さんは入国を認めろといったけれど、外務省が抵抗して、言うことをきかないという話じゃないですか。

小池 でも副大臣は入れろ、と言っているんですね。

松野 それも卑怯なこと、入国問題は総理に一任しろと言えば、今日でもできるんだ。なんでもないことだ。それを河野の責任、自分の責任ばかり考えているんだ。こんなことでおろおろしてい

たらね。これは教科書の問題とは違うんだから、日本への入国なんて当たり前のことですよ。なんでもない。中国政府にお伺いを立てているんだから。

小池 人道的な問題ですからね。鳩山さんは入れるということでは動きが早かったですね。

松野 それは誰にしても、なんでもないことだ。

小池 ただ、羽田さんは入れないというんですね。先生、麻生さんはどうですか。

松野 ゼロでしょうね、たぶん。私はゼロだと思う。

伊藤 今度の総裁選は、決選投票になるんですかね。

松野 なります。

伊藤 そのとき亀井派は橋本につくわけですか。

松野 八割はそうでしょうね。「亀井は」幹事長を取る気でしょうね。もう堀内の方は総務会長を取る気でしょうね。

小池 ということは古賀をおろすということですか。

松野 古賀は入閣でしょうな。

伊藤 だけど、小泉さんの方で幹事長を約束したらどうですか。

松野 そういう約束はしない。

伊藤 あれは危ないですか。

松野 小泉はしない。森がしたらいいでしょうね。

伊藤 小泉さんがしないというのは、あの人「亀井」は危ないからということですか。

松野 小泉はそういう男じゃない。取引をしたくない。

伊藤 取引をしたくないということですか。

松野 どうぞご自由に、私は関係ない、推薦もしない、ということだ。

伊藤 いままでの合従連衡ではだいたいポストの話が出るんですよ。それが空手形になることもありますけれど。

松野 うん。合従連衡といつても、小泉は今度決選投票ですから

ね。それは周辺がやることです。

伊藤 やっぱり周辺がやりますかね。

松野 やります。

伊藤 周辺がやったら、幹事長のポストをあちこちに出して、あとで手形が落ちないといういいこともー。

松野 まあ、田舎の村長選挙みたいに、助役を五人ぐらいつくるでしょう。もう永田町の連中も慣れていきますからね。騙す方も騙される方もどっちもプロだから、可能性のないものには乗りませんよ。

伊藤 でも五人に手形を出したら、三人ぐらい信じるでしょう。

松野 まあ、橋本と野中の両方で、別々に三人ずつぐらいに手形を切るでしょう。小泉本人はそんなことには一切無関心だ。

伊藤 小泉さんの参謀は誰ですか。

松野 田中真紀子でしょうね。

有馬 田中真紀子さんは、一般の受けがいいという以上に意味があるんですか。

松野 ある。あれは、竹下派が嫌いなんだ。

伊藤 それはわかります。因縁ですから。

松野 したがって、あの派に入らない。いつの時代でも、平安朝でもそうだが、人間の感情は、権力に対する執着とか憎悪というのは同じですね。憎悪、やきもち、感情は同じだ。洋服を着ても、ちよんまげを結つていても、人間の感情は同じだ。

伊藤 基本的には嫉妬でしょうね。

松野 嫉妬、やきもち、そねみ、恨み、これは同じですね。恩になつたことは忘れるけれど、恨みは三代覚えてるね。恩義は一年で忘れる。

伊藤 犬の方がましだ。

松野 犬は恩義は覚えている。人間は恩義は一年、恨みは三代。

政治家の口利きについて

伊藤 田中真紀子さんだって、竹下に対して恨みはずつと残ってるでしょう。

武田 篡奪された、という恨みですね。

小池 そばで全部見てるでしょうしね。

松野 だから学校の入学でも、「おかげであります。これは一生忘れません」といっても、入学が終わったらケロッと忘れる。頼んできて入らないと、「あの先生、入れてくれなかつた」と言われる。

伊藤 三代恨まれる。

松野 たまらないんです。だから用件はそれじゃないけれど、そう思い込むんだ。羊羹一つで、入れたり落としたりするわけじゃないですから。私は毎年頼まれるんだ。頼まれたって、言いようがない。だから私は推薦名簿だけちゃんとつくって、塾長に面会して渡してくる。それだけが義務だ。それ以上どうなったか、わかりはしませんよ。一日早く教えてくれなんて、そんなことできるか。だから言われただけ。責任も言われただけ。それ以上の責任は負えない。

伊藤 伝達するだけです。

松野 伝達する。それは成績が良ければ入るでしょうし、悪ければ入らない。そんなことまで言いませんからね。塾長に言うのと、塾長も伝達するだけだという。担当部長に伝達するだけで、私もそれ以上できませんという。それで担当部長に、「それが来たかどうか」と聞くと、「それはいただいて名簿として見るけれど、それによって左右はできません。ああ入ったとか入らなかつたとか、あとで見るだけで、慶應はそんなことはしませんよ」という。

私はずっとフォローして聞いてみたんだ、「君はどうするんだ、伝達されたら」と。部長は、「それは塾長から来たから名簿は見ます、それで、合格不合格を見て、これは駄目、これは受かったと見るだけです」という（笑い）。それで結局、「松野さんの推薦の打率は三割しかなかった」とかい。

武田 三割ならかなり高いんじゃないですか。

松野 「その程度は覚えますが、それによって左右はできませんよ。ちゃんと来るものだから見ますが、私が鉛筆舐めることはできませんよ」「じゃああまり効果はないね」「あまり効果はありません。でも印象には残りますよ」ということだ。その程度なんだ。

慶應は下ほど難しいんだ。上ほどラクなんだ。一番難しいのが幼稚舎、そして中等部。大学になると三千人も四千人も採るから。一番下ほど難しい。そういう入学運動は、幼稚舎が一番激しいんだ。それから中等部。この辺まではみんないろいろとツテをたどってくる。効果があるかどうか、私もわからんですけれどね。言われた通り、手紙を出して推薦はしますけれど、効果があるかどうか、それはわからん。

伊藤 頼まれ事というのは、入学のほかにとんないことがあるんですか。

松野 一番多いのが就職、入学。

伊藤 それが一番多いんですか。

松野 多い。それから公務員の転職。

伊藤 どれぐらいのレベルの話ですか。

松野 九州の方に転職させてくれとか、同じ役所の中で九州管区にやってくれとか。

伊藤 それは実家がそっちにあるからとか、そういうわけですか。

松野 そう。だから多いのは、入学、就職、転職。

伊藤 交通事故はどうですか。

松野 交通事故もあります。スピード違反もあったけれど、最近

警察がうるさくなったからね。

伊藤 この前事件がありましたからね。

松野 スピード違反はそれまである程度効果があったんですけどね。ずいぶんたくさん逃してやって、いままでは効果がある程度ありましたが、最近はこちらも遠慮しますね。

伊藤 そうですね、やって何か言われたらね。

松野 もう遠慮して。それから中小企業の、政府機関からの融資斡旋。

伊藤 現役でなくても、そういうことを頼まれますか。

松野 あります。まだ選挙民がたくさんいますからね。それはなんとか、と思うけれど、なかなか触りにくい。本当に懇意なものならいいけれど、そうじゃない者はなかなか言えませんよ。私が入社させたとか、私が役所の推薦人になったとか保証人になったという者には言えるけれど、それ以外はなかなか言えませんよ。

伊藤 そういう仕事を議員さんたちがやっている、勉強する暇はなくなりますね。

松野 そういうことばかりをやって、票を稼ぐ人もいますね。そういうことが非常に行き届くという噂だけでも十分票になりますね。

伊藤 冠婚葬祭もあるでしょう。

松野 冠婚葬祭も大変です。

伊藤 あれは禁止されたでしょう。

松野 金額が、本人が行ったときに一万円まで、それ以外はいけないとか、だいたい禁止になりました。花輪は禁止。私は辞めたものだから、花輪を出してもいいわけだ。だから息子がやっている、今度は私の名前を出さなければならぬ。だから私は、冠婚葬祭の花輪は出していないんだ。いままで不義理だったものはみんな出さなければいけない。

伊藤 選挙の時に、間違つて親父の名前を書いたり（笑い）。

松野 今でも月に四つぐらいあります。

伊藤 結婚式ですか。

松野 結婚式は呼ばれて行く。結婚式は日にちが決まっているからいい。お葬式は日にちが決まっていらない、突然だから困るんだ。結婚式は私が出て、やっぱり三万、五万でしようね。飛行機代を払って、そのほかに三万、五万ですから、大変な金額なんだ。

伊藤 いまのお年になったら、飛行機だつてつらいでしょう。

松野 往復六万円かかるんですよ。そのほかに五万円だ。気が利いた人で、飛行機代を別に送ってくる人もいます。

伊藤 選挙の応援はどうですか。

松野 選挙の応援ももちろんします。ただ、私たちは街頭に出ると、あまり良くない。演説会場ならいいけれど、街頭に出ると若い人が多いですから、そうするといかにも年寄りが立っているみたいで、あまり受けは良くないですね。でも珍しいから人は来ます。来るけれど、反響を見るとあまり良くない。だから私は演説会には顔を出すけれど、街頭には一切出ません。

伊藤 地元の県会議員とか市長さんとか、そういうものも頼まれますか。

松野 頼まれます。でもあまり行かないですね。一人のところに行く、片方に敵を作りますからね。市長だつて三人も出ていると、一人のところに行く、あと二人を敵にする。その必要はないもの。もう私は、一切街頭には出ない。

伊藤 いまはそういう気楽な立場になったからいいけれど。

松野 少しはわがままをさせてもらつてもいい。「私は」もう八十四歳ですから。鈴木善幸は九十歳だといえますからね。鈴木善幸は、いま麻生が出ているものだから、元気でやっていますよ。あの娘が麻生の奥さんだから。鈴木内閣の時に結婚したんですね。あれは同じ池田派だから。

■防衛庁長官に—佐藤に直談判

伊藤 先生には、履歴書とか年譜とか、そういうものがおありですか。

松野 持っていないんですね。

伊藤 でも勲章の時には。

松野 まだ勲章はもらわないんだ。私は勲章を延期してもらっているんだ。それはなぜかという、まだ息子の選挙をやっているでしょう。選挙をするときに、勲章をもらつて、もし選挙違反にでもなると、勲章を返さなければいけない。いまそういう制度があるかどうか知らないけれど、私たちの常識では、不名誉なことをすると勲章を返さなければいけないという気持ちがある。選挙違反でもしたときに申し訳ないから、延期している。だから私はいまだに勲章をもらっていないんだ。死んだときにいただければいいかな、と思つている。

伊藤 そうですか。年譜がないものですから、やみくもに質問させていただきますが、昭和四十年に防衛庁長官になられますね。

松野 四十年でしたかね。もうちょっとあとのような気がする。いや、四十年か、そうかもしれません。五十歳ぐらいですね。その辺です。

伊藤 これは第一次佐藤内閣の改造ですか。

松野 佐藤内閣の改造第一回でしょうね。初めはそのまま池田内閣を引き継いだんです。その半年後に初めて改造した。その第一回ですね。

伊藤 つまり実質的な佐藤内閣の第一回ですね。

松野 初めは池田内閣を引き継いで、官房長官の橋本登美三郎と二人だけ入つて、半年ぐらいして改造した。だから正式な改造の第一回です。

伊藤 防衛庁長官というのは、予測していましたか。

松野 予測していました。

伊藤 それは予測できるんですか。

松野 佐藤に「松野、閣僚の椅子が足りないから一回待ってくれ」と言われたから、「待つならいらぬ」と言った。直談判したんです。「それなら佐藤内閣中、いらぬよ」と言って口喧嘩したんだ。それで防衛長官だ。

伊藤 じゃあ、誰かが外れたということですか。

松野 誰か外れたんだ。

伊藤 誰が外れたかわからないですね（笑い）。

松野 それはわからない。やりくりしたんでしょうね。「椅子がないから、松野、一回待ってくれ」という。「佐藤内閣の功労者に第一回にしないというのなら、いらぬよ。佐藤内閣中、いらぬ」と言って口喧嘩した。

防衛長官ということは、前もって、「松野、おまえは防衛長官ぐらいがいいな」という話をしていたから、防衛長官だと思っていた。最後になって、待ってくれ、と言ったんだ。待たされるぐらいなら、別にやらんでもいいよ、と言った。

伊藤 労働大臣と防衛庁長官だと、どういう関係になりますか。

松野 同じことですが、労働大臣の時には、なんとはなしに労働大臣であればよかったですけれど、防衛長官だと私も軍人出身だから、防衛論だから、自分でも自信があるし最適だと思っている。その前に、テレビの討論会で社会党との防衛論争を年中やっていますからね。

伊藤 社会党の論客は誰ですか。

松野 三矢事件というのがありましたね。横路「節雄」、榎崎「弥之助」、岡田「春夫」。三矢事件のときに、私は小委員長をしたんだ。「一九六五年二月十日」。三矢のとき、小泉純也「が防衛庁長官」のときに、私は小委員長をしたんだ。それだから、その

ときは防衛長官が私は最適であると佐藤は認めていた。三矢事件の小委員長をして、社会党の岡田春夫なんかがやっていたから、横路とか、あの連中と内閣委員会で論戦をしていた。私は小委員長だから。みんなまいっちゃった、小坂「善太郎」、大平正芳もそうだった。私は防衛問題では、その点で熟知していた。

伊藤 このとき、さつきお話になった海原「治」さんが矢面に立ってやっていたんだと思いますけれど。

松野 もちろんいた。彼はどちらかというところ、社会党の機嫌を取るような人だった。社会党と深かったんです。その海原に用心しろといわれたのは、社会党に近かったからだ。それからマッチポンプみたいに考えられていた。それで用心しろというのを、ほうほうから聞いていた。だから私が「防衛庁長官に」なって、その次の増田甲子七も同じだ。増田甲子七も私と同じ路線で、それから海原追い出しになったわけですね。海原のいままでの路線が、やや左だった。それを正常に直したわけです。それには海原がいちばん邪魔だった。彼は非常に社会党系にも深入りしていましたね。

伊藤 社会党と親しいということは言っていましたけれど。

松野 民社党の永末「英一」なんていうのとも非常に近かったでしょうね。

伊藤 でも永末さんは防衛力整備の方ですね。

松野 ある時は永末を使い、ある時は岡田を使い、ある時は自民党を使う。役人というのはそういうところがありますね。

伊藤 この三矢事件というのは、そもそも火をつけたのは岡田でしょう。

松野 岡田です。小さな原稿ですよ。防衛庁を辞めた役人か何かの古い図上演習、メモかノートか何かを取り寄せて、大問題にしたわけです。なんのことはない、あれは図上演習の個人的なものです。三佐ですから少佐ですよ、図上で日本防衛はこうするんだ、

ああするんだといって、二、三人で個人的に協議した。それをどこも採用しないで、そのまま放つて置いたのを誰かから聞いて、それをもらって、それでやったことだ。何でもなかったんだ。ただ議会で大騒ぎして、その準備がなかったものだから、おろおろしただけだ。内容は何も無い。全部オープンにしたら何のことはない。騒ぐほどのことはなかったんです。

伊藤 でも岡田春夫という人は、これで名をあげた。

松野 そうですよ。三矢事件を大問題にした。あれは役者ですからね。そのとき、小泉純一郎のおやじが、おろおろしたんだ。人が好いから、わからないから。そういうことがあるのかないのか、小泉純也は知らなかったんだ。それで驚いたからいけないのか、調べなければいけない。調べる間にどんどん、片方はそれみろ、それみろという。小泉純也が人が好かったから。そんなものは知りませんよ、一佐、二佐が個人で五、六人の研究グループでやっていたんだから、わかるわけがない。ただ、やったからといって、それは勉強で、いいことなんだ。

伊藤 本当は、そういうことは防衛庁はきちんとやるべきことだったんですね。

松野 やるべきことなんです。それで私はやるべきことだということ、やや人事異動をした。どうしますかというから、左遷しないように、横に異動しておけばいいじゃないかといって、左遷しなかった。異動はしたけれど、それで私は防衛長官になる自信を持ったわけだ。また三矢小委員長になったときも、「松野、頼む。これをうまく抑えてくれ」といって、みんなで頼みに来るんだから。抑えたら当然、防衛長官になるのが当たり前だと思いませんね。

伊藤 その前から防衛問題は、いろいろー。

松野 それは私も海軍だから。それは詳しいですよ。

伊藤 個人的に詳しいというだけではなくて、そういうグループ

があったわけですか。

松野 防衛問題のグループは、私もだいたい国防族の方ですからね。ただ、日米安保条約の頃から、防衛を一所懸命研究しましたね。労働省にいながら、労働問題以外もずいぶん研究しましたね。石橋政嗣という、うるさいのがいて。

伊藤 社会党ですね。

小池 先生と選挙区が近いですね。

松野 全駐労「全駐留軍労働組合」だ。これがうるさくてね。そして全駐労の検討を始めたから、防衛というものに関心が出て、安保条約の締結の時から日米安保条約の中の防衛を一所懸命研究した。それはそういう刺激があったからですね。

伊藤 どういう仲間ですか。

松野 そのとき私と一緒に熱心に行っていたのは、あまり質のいいのもいなかったな。上林山「栄吉」なんていたな。

伊藤 あとでお国入りか何かする人ですね。

松野 そうそう、お国入りです。ああいうのはみんな海原がつくるんですよ。へりでお国入り。私の時も、官房長が熊本で閲兵式をおやりなさいと勧めるんですよ。それで私もやりましたよ。それは全部海原がし向けるんです。私の時に船の名前を、「長官、お決めください」という。自分の郷里の名前をつけなさいといって持って来たんだ。「阿蘇」とでもつけようと思ったんですよ。私は断った。私たちが海軍の時は、日本の「榛名」とか「赤城」とか、バランスを採って決めていたんだ。川とか風とか。それにいきなり自分の郷里の「阿蘇」なんていう名前を持って来たらバランスが崩れる、という意識があつて、私はそんなことはしない、いままでの並びにしてくれと言って断ったんだ。そういうときに、自分で名前をつけた大臣もいるんですよ。

有馬 護衛艦の名前というのは大臣のところに来るんですか。

松野 そうやって持ってくるんだ、官房長が大臣に。いろいろあ

るんだ。私はそれはよくないと言ったんだ。駆逐艦は風、戦艦は山、そういうふうが決まっているんだから、それを乱したらよくない。だから私はつけないと言って断ったから、順番に何か名前をつけたでしょうね。それも官房長が持つてくるんですよ。

伊藤 それはおべんちゃらなんですかね。

松野 ヘリコプターでお国入りも、それはそうでしょうね。それは私は乗らなかつたけれどね。

伊藤 乗らなくてよかつたですね。

松野 だから防衛問題というのは、終戦になって、憲法改正、憲法論、そういうものからどうしても考えなければいけないことだと思つた。

伊藤 しかし安全保障の問題は、自民党の中でも言つてみればちよつとタブーみたいになつていたのでしよう。議会に防衛関係の法案が出ると、社会党に反対されて、その議会はもめるでしよう。だからなるべく避けようという気持ちもあつたんじゃないですか。

松野 ありましたね。あつたのが、いま見ると悪かつたでしょうね。だから中途半端になつてしまつた。

今度も防衛省ぐらいつくつたつてよさそうなものだ。大変革ですから。大蔵省を財務省にして、あんなに大改革をして、たつた一つ防衛庁を防衛省にさえてできない。これはどういうわけだ。これは公明党に遠慮したんです。行革でこんな馬鹿なものはない。防衛庁が防衛省になることは、行革の当然のことだ。それを連立の公明党に遠慮した。やつぱり、この五年の政治が空白だつたんだ。政権があつても、政治が空白だつた。それは連立ですよ。連立の欠点は、力を合わせる連立ではない。我田引水で、責任は相手に、利益は自分にとり連立なんだ。だから連立はどうしても長続きしない。細川の時もそうでした。ただ総理総裁が強引にやればできるけれど、その代わり崩れる。細川は強引にやりまし

た、自分の我を通して。だから崩れてしまつた。崩れないようにしようと思うと、今度は政治が犠牲になる、国民が犠牲になる。いままさに、この五年間、村山、橋本、小淵、森、この五年間は、政権があつても国民の政治がなかつたでしょうね。

連立をつくるなら、将来合同してもいいという責任を共有しなければいけない。それが私は連立だと思つた。同棲はするが結婚しないというのは不純な同棲だ。同棲してよかつたら結婚するぞ、という前提がなければね。最初から学生の間だけ同棲するが、学校が終わったらやめるといふのは、同棲ではない。利益を共有するだけで、何の实りもない。

まさに私は、この五年で日本は遅れたんだと思つた。強引に我を通そうとした細川は短命に終わった。長くもたせようと思えば、政治を犠牲にしないと連立はもたない。いまは政局が優先するから、政治がちつとも進まない。何をやっていいのかわからない。国民もさすがに飽きてきたんですね。今度の参議院選挙では、その結果が出るでしょうね。

私は、若いときから連立というものをそういうふうに使つてきた。それを体験してきたんだ。片山、芦田内閣の連立の時からそういうことを教え込まれたんだ。それで片山、芦田には、吉田は入らなかつた。それは、どうせおまへたち一緒にやつたつて割れるんだから俺は入らないよ、ということだ。それを懇々と教え込まれたものだ。それで単独内閣、責任は全部自分でとるといふ自民党の四十年ができたんです。いまはもう駄目だ、連立が当たり前になつちやつたんだ。

伊藤 その防衛庁長官に就任するにあつて、自分は何をやるかというお考えがありましたか。

松野 それは、士気を鼓舞していこうということです。自衛隊員がやや日陰者だつたから、誇りを持って隊務に励もう、胸を張つた自衛隊になろうということで、私は大いに宣伝をしました。国

防宣伝を議会で一所懸命した。だからすすんで社会党の人と防衛論を展開した。私が議会で頭を下げずに威張っていると、隊員も肩を張って行けるだろう。だから露骨に強硬な路線を張っていました。

伊藤 そうですか。やはり社会党の防衛問題というのはさっきの三人ですか。

松野 そう、横路、岡田、楢崎の三人でした。楢崎はちよつと違っていました。あれは隊員の不正問題をやっていました。防衛論よりも彼は自衛隊のあら探しが多かった。隊の規律の問題が多かった。岡田、横路は防衛論、楢崎は規律問題だった。

伊藤 社会党のそういう人たちは、日本の安全保障は、日本が軍事力を持たないでやっていけると考えていたんですかね。

松野 今でも考えているじゃないでしょうか、土井たか子さんは。土井さんは持つことが危険だという感じでしょうね。

伊藤 その流れは民主党にもちよつとあるじゃないですか。昔の社会党の流れが。

小池 横路「孝弘」さんがいますからね。

松野 多少はあるけれど、いまはほとんど少なくなりましたね。民主党は非常に少なくなりました。それはあの頃は組合中心で、ストライキの労働組合の思想がそうだったからね。労働組合が組織的なストライキをする。それを弾圧するのが警察、自衛隊。彼らは、左派が共産党と同じように革命運動を言ったからな。革命運動家にとっては、警察と自衛隊がいちばん邪魔だったでしょうね。

伊藤 岡田さんと横路さんとか、みんな左派でしょう。

松野 左派だから、革命とまではいなくても、共産党に近かったですでしょうね。

伊藤 社会党の中には、共産党より左だという人もいましたから。

松野 いま共産党もすっかり変わりました。憲法を認めると言い出しましたからね。

佐道 先生が防衛庁長官におなりになったときに、いわゆる三次防の策定がありましたね。三次防をどういうふうにつくろうとお考えでしたか。

松野 あの三次防では、たしか五年、五年、五年と区切る。それでは駄目だ。進歩があるから。三年、三年をだぶって重ね合わせてやったらどうかと。

佐道 ローリング方式ですね。

松野 ローリング方式だ。それを私は一所懸命勉強した。ローリング方式だと途中で変えられるし、兵器は日進月歩だというので、ローリング方式を一所懸命やろうとしたが、結局間に合わなかった。ローリング方式に大蔵省が乗ってこなかった。もう一つは、兵器の発注で、空から来る飛行機に陸からミサイルで防衛するというのがあった。地对空ミサイルだ。それがチェコ製だった。これは共産国ではないのか、共産国から買うのは嫌だな、と言って一ヶ月したら、スイスから持って来た。同じものだ。これならお気に入りですかといって、スイス製に決めた。何のことはない、裏は同じだ。兵器生産というのは世界中同じなんだ。スイス製でもチェコ製でも製造元は同じなんです。輸出先がスイス製となる。そういうのを見て、あれつと思つた。

伊藤 アメリカ以外から武器を買おうと、アメリカからクレームはつかないですか。

松野 重要な、飛行機関連のものはアメリカからクレームがつきますが、それはアメリカだつて同じなんです。アメリカもその兵器を使っている。同じものを使っている。製造はアメリカはアメリカ、スイスはスイス、チェコはチェコ、同じものを使っているんだ。ただチェコとあったから、これは共産国じゃないのか、と言つたら、はいわかりましたと言つて、一ヶ月したらスイス製になった。

その頃、よくイギリスの飛行機を日本に売り込みに来ていまし

た。垂直にあがる。あれはヨーロッパ、イギリスなんだ。イギリスは飛行場が狭いからそういうものだ。アメリカは広いから、そんなものはいらない。それが羽田までデモンストレーションにきました。イギリスのコーンズとかいう人が来ましたね。飛んできて、デモンストレーションをやりました。それは「値段が」高くてね。同じ飛行機よりも五割ぐらい高いんですよ。それはそうですよ。イギリスも狭い、日本も狭いから共通なんだ。アメリカにはあまり関係ない。そういうのが来たから、兵器というのは恐ろしいものだと思った。

佐道 いま、イギリスの飛行機が高かったという話がありました。三次防の大綱に、二次防と違う特徴として、日本は海洋国家だから海上防衛力をつけなければいけないということ、兵器の国産化、自主防衛をやらなければいけないということが書いてあるんですが、これはその当時先生が特に推進されたということですか。

松野 やりました、自主防衛をやりました。そのときの兵器生産で、三菱で飛行機をつくり始めた。それがYSになった。私は石播と三菱が大いに奨励した。三菱は戦車と飛行機をつくった。私は奨励して、賛成しました。しかし日本は金がないんだ。兵器を買う金はあるんだけど、研究開発に金を注ぎ込むだけの予算がないんです。日本の予算は先行投資を認めない。できたものを買うことはできる。しかし前もって委託生産はできない。できたものを買うから早くつくれと言って、三菱は一所懸命だった。社長は熱心でしたよ、三菱はむかし大きな飛行機をつくったので。

先行投資と言ったって、利益の中からの先行投資だから、防衛長官がいうように前渡金をくれるならやるけれど、金は出さない、つくれ、と言われても民間では限度がある。それなら防衛費から出してくれんか。アメリカは全部防衛費から出してくれる。日本の昔の陸軍も防衛費から出した。なぜ防衛費から出してくれない

んだ。そんな話を福田大蔵大臣としたけれど、福田は「それは無理だ、いまの日本では先行投資は無理だ。研究開発費という名前で行くらかは出せるけれど、それは無理だ」ということでした。

伊藤 できたものを、外国に売ることができないから、単価が高くなるんじゃないですか。

松野 兵器輸出禁止法でね。それもあります。しかし外国に売るとどの兵器まで、まだできていない。

伊藤 技術水準が低い。

松野 技術的に、まず日本の国産をつくるのが先だ。それから伸びたのがYSに近いものだ。まず練習機をつくった。いま練習機は国産であるでしょう。あれは、私の時に初めて予算に組んだんです。国産練習機、あれは私の時に、福田と予算を相談して、研究費でやるかといって、それが国産練習機になった。それを三菱でつくっているはずですよ。

小池 T-2ですね。

松野 T-2です。その前に富士重工かどこかでつくってましたね。その程度なんだ。日本は飛行機がもつとようと発達している。占領軍が全部禁止したものですからね。いちばん怖かったのは、パールハーバーの零戦が怖いものだから、飛行機産業禁止なんだ。あれが六年間禁止されて、すっかり遅れたでしょうね。石播だって、ある程度研究開発の設計図を持っていたけれど、みんな壊されたり持って行かれたりした。ロケットまでつくっていたんですからね。あの六年ですっかり飛行機生産が遅れた。それはあとで復活するといつても、スタッフはいるんです。スタッフはいるが、製造機械が壊されちゃった。日本は本当をいえば、飛行機はほとんどできるはずなんだ。それがすべて遅れた。この六年の占領中の遅れで、五十年ぐらい遅れたでしょうね。

伊藤 船も同じことじゃないですか。

松野 船も同じです。船はしかし今では大丈夫です。造船能力は

なくなつたけれど、さすがに日本の船はアメリカも尊敬していません。日本の軍艦技術は、アメリカが設計図を盗んでいったようなものでしょうね。壊すというより、向こうが尊敬してしまいましたね。飛行機は壊していった。造船は協力していったでしょうね。日本の造船は世界一、二だったでしょうから、アメリカも尊敬していた。自衛艦もどんでんきました。

佐道 YSもそうでしたが、通産省は国産化推進ということで、応援団に回っていたと思うんですが。

松野 回っていました。

佐道 通産と協力してやろうということは一。

松野 ありました。ありました。やはり技術者に、通産は防衛庁の技術者とはどうしても溝がある。一緒にはなれませんね。防衛庁の研究所と、通産の研究所とはなかなか一緒にはならない。宗派があるみたいですね。伝統的に宗派がある。剣道でも柔道でも空手でも派があるでしょう。同じ有段者でも同じようにはいらない。宗派というのがあつて、民と官の長い伝統がある。

佐道 なかなか他流試合とはいきませんか。

松野 いかない。一緒にならない。それはどうしても難しいでしょうね。共通する英雄、傑物が出てくれば一緒になるでしょうけれど、小物同士では難しい。

佐道 先ほど言われたローリング方式ですが、先生は国防族として防衛庁長官になれる前から、二次防の状況を見て、そういうやり方がいいなど思っていたんですか。

松野 防衛長官になる前に、予算を組んでいるときにそんな話がありました。それで防衛長官になつてから、ふだんの持論を私は展開した。それで大蔵大臣に交渉した。大蔵大臣は考えて、別に悪いとは言わんけれど、初めてだから、と言っていました。そのときは福田越夫でしたね。福田は非常に理解があつた。彼も陸軍の主計官をやっていましたからね。だから陸軍のことは詳しい。

それで練習艦をつくってくれた。「香取」「鹿島」。そのときは福田が予算をつけた。練習艦に小さい駆逐艦が四隻出た。それを「香取」「鹿島」で倍の船をつくつて、二隻の練習艦になった。それまでは四隻で行っていた。そうすると訓練がバラバラなんです。それで「香取」「鹿島」の二隻にして、いま二ハイで行っていますね。それは福田越夫が私がいいるときに、練習艦の予算をつけた。

もう一つは、婦人自衛官をつけてくれた。それは私が交渉して婦人自衛官、はじめは五十人ぐらいでしたかね。今は五千人か、相当あるけれど。婦人自衛官は予算がかかるんだ。兵隊一人の予算より、女子の予算は高いんだ。風呂を変えなければいかん、便所を変えなければいかん、宿舍も変えなければいかん。だから今の予算に継ぎ足すわけにはいかない。別個のものを、建物から何からつくらなければいけない。だから一人あたりの単価が高い。それでも最初だからというので、五十人の最初の予算をつけたのが福田越夫。福田がよくやってくれたんだ。練習艦、ローリング方式の研究、それから婦人自衛官。

伊藤 海上の防衛強化もやっただね。

松野 海上の防衛強化も。福田も、私と同じぐらいの気持ちで、防衛は熱心にやってくれた。

佐道 先生は防衛庁長官になつてローリング方式を至急検討しろと号令をかけられた、そのときの防衛庁の中はいかがでしたか。

松野 中は非常に素直に研究してくれました。ある程度部内はそれでできたけれど、大蔵省が駄目だ。五年、五年が、三年、三年、三年とローリングになるわけだ。大蔵省がうまく行かない。今まで五年計画でした。今度三年、三年、三年とローリングしていくものだから、大蔵省の方が迷った。それであとにしよう、今年はもう時間がないから、三次防で今まで通りとなった。もう一年おればできたでしょうね。

佐道 任期が短かつたんですね。

松野 短かった。

佐道 防衛庁長官になる前にいろいろお考えだったということですが、二次防の審議の過程については、自民党の国防部会などにはどの程度まで報告が来るんでしょうか。

松野 予算の要求までですね。あまり細かいことは言ってきましたね。私が一番心配したのは潜水艦だ。その心配は、世界でバッテリーの潜水艦を使っているのは日本だけだ。これこそ原子力潜水艦じゃないと用をなさない。性能が問題にならない。なんとか潜水艦だけ原子力にならんか、と思っただけで、その時期は早かったですね。原子力発電ができていた頃ですからね。それには、水上に「むつ」が出ていた。その「むつ」が失敗しちゃった。あれが成功していたら、潜水艦は原子力潜水艦に進歩したでしょうね。残念だけれど、水上原子力船のむつが大失敗した。その成功が私の時にはまだなかった。原子力船さえまだ日本では受け入れない。原子力潜水艦といったら、戦争目的だといって刺激が強すぎる。

佐道 米国の原潜の入港を認めるかどうか、もめていた時代ですからね。

松野 そうですね。潜水艦ぐらい原子力でないと、バッテリーじゃ問題にならない。

伊藤 ということが、みんなわかっているんですね。原子力で推進するということが、原爆を積んでいるということが、ごっちゃになっていたんですね。

松野 推進力ですからね。今でもそうです。バッテリーの潜水艦は世界で日本だけでしょう。無駄というのか、効力がないんだ。ただ、潜水艦を沈めて、敵がくるのを待っているだけで、追いかけることができないんだ。原子力潜水艦は追いかけて行きますからね。まるで砦に沈んでいるみたいだ。そんなものに金をかけるのは無駄というか、よくないでしょう。日本の海は潜水艦が一番

必要なんだ。

小池 海峡も狭いですからね。

松野 そのときに、沈んでいるだけだもの。原潜のスピードはたいたもの。そういったけれど、原子力の推進力と爆発力が混合されて、説明がつかないんだ。おまえは推進力というけれど、上に原爆をつけるんだらうなんていう質問だから、とても進まないんだ。そのうえ、原子力船「むつ」が失敗したでしょう。もうあの時は、とてもそんなことができない。

私はそのときにアメリカの原子力潜水艦を一回見に行きました。三階建てで大きなもので、私は心配して、いつまでもつかといたら、四十日から六十日大丈夫だという。水はどうするかっていうと、潜望鏡を立てておればいくらでもできるとい。四十日から六十日平気だ。隊員はテレビも見られる、映画も見られる。デイスコダンスもできる。至れり尽くせりだ。風呂は毎日入れる。原子力だから、エネルギーは無限にある。真水がなくて苦労している私たちには考えられない。今の原子力空母なんていうのは、大型でしようから、毎日水がいるでしょうね。私たちは真水がないので、積んでいて、それがなくなると終わりですからね。だから水なんて貴重なものだ。そういうのを聞いたり見たりしていたから、潜水艦は原子力じゃないか、と思っていた。バッテリーじゃあね。

伊藤 それを買うというのはどうなんですか。

松野 買うという構想まではまだ行きませんでしたね。買っても、原子力なら駄目だったでしょうね。

伊藤 原子力と聞いただけで駄目なんですかね。

松野 駄目ですね。

佐道 アレルギーですね。

小池 今でもそうですね。

松野 水上艦艇は、はじめ、ない時にはずいぶん買いましたからね。

初期の防衛庁の時は、アメリカから無償供与でしたね。

伊藤 そうですね。貸与された。

松野 そう、無償貸与で駆逐艦をうんともらったんだ。

伊藤 それがだんだん古くなっていくでしょう。

松野 もちろん、もうほとんどありません。

伊藤 今はそうでしょうけれど、先生の頃です。

佐道 ちょうどつくり替えの時期ですね。

松野 つくり替えの時期だった。そこまでは議会でも認めてくれる。原潜は無理だ。議会は大騒ぎで大変だったでしょう。

伊藤 先生が防衛庁長官の時に、沖縄返還を考えて、沖縄の防衛

問題をどうするかという問題がございましてね。

松野 それは岸内閣の安全保障改訂の時だ。そのときに岸さんは

沖縄防衛を入れるといった。アメリカは、施政権はアメリカだから

入れない、という。そのときにありました。

伊藤 でも今度はいよいよ戻ってくるということになると。

松野 戻ってくるときは、第一に日本の防衛が入るので、沖縄出

身者を隊長にしたのを覚えています。一佐、大佐の隊長に、沖縄

出身者を任命したと思う。それで最初に、那覇に防衛庁の出張所

ができた。そのとき二百人ぐらい行ったでしょう。たしかその隊

長に、沖縄県出身者を選んだと思いますね。

伊藤 沖縄が返還されたあと、「沖縄は」反自衛隊になっちゃ

でしょう。前はなかったじゃないですか。

松野 自衛隊がそこに出て行く。反自衛隊というのがありました。

伊藤 すでに返還の前からですか。

松野 前からです。しかしそれは、一部の思想的なものでしたね。

私の時に任命して、たしか行ったはずだ。行ったけれど、そう大

きなものはなかったですね。反対という旗が出たとかいうけれど、

騒動はありませんでした。沖縄県出身者を選んで隊員にしたとい

う記憶がありますね。

伊藤 先生は全国の防衛庁の施設は、かなりご覧になりましたか。

松野 あまり見ませんでしたね。浜松とか米子とか。あまり動か

なかったですね。

佐道 先ほど、防衛庁の省への昇格問題をお話しされていま

が、岸内閣の終わりの頃に、防衛省昇格問題があつて、それは岸

内閣が倒れたのでうまくいかなかった。それから、池田内閣の後

半にまた防衛省に昇格しろということで、自民党の総務会で決議

が出されたにもかかわらず、できなかったということがありまし

た。六三年ぐらいですが。そのときは行政改革の話が出ていた時

代ですが、その絡みで昇格できなかったということですか。

松野 絡みがあつたし、まだあの頃は、オカッパルとか横路とか

あの連中が予算委員会でアジっていましたからね。アジっていた

ところに、わざわざ油を差すようなことは、議会対策として出さ

なかった。結局、予算委員会を混乱させたくないから出さなかつ

たんですね。総務会でも決めたんですね。

伊藤 オカッパルと言いましたね(笑い)。当時はそう言ってい

たんですね。

松野 そう言っていた。岡田春夫だから、オカッパルだ。

佐道 池田さんと佐藤さんの防衛に対する姿勢はいかがでした

か。

松野 佐藤の方がはつきりしていましたね。池田はあまりはつき

りしていませんでした。池田は経済論ばかりだったな。佐藤は沖縄返

還があるから、やや防衛論でしょうね。池田はあまりなかった。

自分が火中の栗を拾おうという気持ちはなかった。それよりも、

所得倍増でしょうね。経済の池田で行こうとしたでしょうね。や

っぱり特技があつて、柔道でも背負い投げをやりたいというやつ

と、寝技で行くやつがいる。自分の得意なものに引きずっていき

たいでしょうね。

防衛長官の時の私は、予算委員会で社会党が質問すると、社会党の倍ぐらい答えていましたね。それは要するに士気を鼓舞しようということですよ。わざと論戦を挑んだわけだ。屁理屈、小理屈くつつけてね。それは三矢でウォーミングアップしていたからですよ。

伊藤 議会だと、大臣に代わって政府委員として大いに論戦に加わる人が――。

松野 ふつうは官房長がやるんですけれどね。そのときの海原は、野党の顔も立て、与党の顔も立てるような答弁をしていましたね。野党の顔も立てていましたね。

伊藤 「海原氏は」防衛局長ですかね。

佐道 いえ、先生「が防衛庁長官」の頃は「海原氏は」官房長です。六五年から官房長ですから。さきほどの話で、先生のあと「防衛庁長官が」増田さんになって、海原官房長は国防会議に行くわけですね。当時の新聞には、更迭の時に自民党の中でも議論が出て、海原を次官にしたらどうだという意見もあったという記事もあるんですが、海原さんを推す人たちは、自民党の中にもいらしたんですか。

松野 いたでしょうね、わからんやつが。要するに海原を知らないやつだ。知らない者が二、三いまして、たいした根拠はないんだ。海原にご機嫌をとられたから、海原がいいじゃないかという程度だ。海原がいいからだという者は一人もいなかった。官房長が次官になるのがいいんじゃないのか、という言い方をした程度であって、それは私とか増田みたいに実際に使ってみた人間とは違うということだ。使ってみた人間は誰もいなかった。

伊藤 次官の人事は――。

松野 大臣が決めて、閣議で承認。

伊藤 やっぱり閣議の問題になるわけですね。

松野 総理からこれにしろといったことはありません。それは飛

び越えて越権になる。相談すれば返事をしますよ。

伊藤 佐藤さんは海原さんを直接知っていたんですか。

松野 知ってはあったでしょう。知ってはあったけれど、海原の印象は、佐藤も岸も、そんなによくなかった。

伊藤 防衛庁長官の時代は短いですね。一年ぐらいですね。それでまた改造内閣で――。

松野 それで農林大臣だ「第一次佐藤内閣第二次改造、昭和四十一年八月一日」。

伊藤 農林大臣ですね。農林大臣は、先生のもとの――。さっきは国防族ということでしたけれど。

松野 農林省では、またわがままばかり言っていましたよ。官の時よりも農林省の方が威張っていましたよ。

伊藤 そうですか。だけど防衛長官というのは「みんなが敬礼するような立場じゃないですか」。

松野 それは形はそうだけれど、農林大臣の時はずっと威張っていました。

伊藤 やはり管轄している範囲が広いからですか。

松野 いや、私は長く農林族だったから、気に入らん役人と気に入る役人とを決めていたんだ（一同笑い）。なったときから知っていたから。こいつは悪いとか、こいつはいいとか。だから、それは激しかったですよ。

伊藤 でも大臣が役人の人事に首を突っ込んだら、さうとう抵抗があるでしょう。

松野 だから省議でいじめていたわけだ。それが言うと、私は二倍反論するんだ。

伊藤 じゃあ、いびり出した、ということですか（笑い）。

松野 今で言えばいじめだ。いじめていたわけだ。いじめたら、いじめたところからしつぺ返しもあったんですよ。そのしつぺ返しもひどかった。エライ目に遭ったことがある。

■農林水産大臣時代

伊藤 第一次佐藤内閣の改造で農林大臣になられるわけですが、当時の農林族のボスというのは誰ですか。まだご自分じゃないでしょうか。

松野 井出一太郎、野原正勝、それから東北が多かったですね。

佐道 強力にグイグイやっていくというタイプではありませんね。

松野 小枝一雄という岡山のやつ。それから加藤精三なんかもいましたね、加藤紘一のおやじ、これも農林族だ。

伊藤 農林族というのは一番多いでしょう。

松野 東北が多いんですよ。

伊藤 根本龍太郎なんていうのもいましたね。

松野 根本龍太郎も東北だ。鈴木善幸も水産族ですね。東北が多いんです。

伊藤 水産族と農林族は違うんですか。

松野 多少違いますね。水産族といえば、中川一郎も水産族でしょうね。

伊藤 農林省の中の水産庁ということですね。応援団がちよっと違うわけですね。

小池 中川は北方領土をやっていましたね。

松野 農林族は東北が多いですね、単作地帯だから。農林族があまり保護政策をやったから、今の産業構造改革という農業者が一番遅れている。残念だけれど。私たちがあまり保護政策をやったものだから、いまご覧なさい。すべての産業構造で、いちばん農業が遅れちゃった。セーフガードなんていうと、全部農林物資でしよう。こんな馬鹿なことはない。いかに農林が補助金と補助政策にあぐらをかいていたか。国際的に恥ずかしい。

佐道 今回のセーフガード実施についてはどうお考えですか。

松野 全部ですね。ネギだけじゃない。六〇品目ぐらい農作物資ばかりです。それは保護政策に安住したからです。私たちのときと時世が変わったのに、同じことをしている。いまご覧なさい、いま休耕田になっているのは水田の四割ですよ。それでなおかつ諫早干拓で農地をつくるなんていう。馬鹿も馬鹿だ。片一方ではつぶし、片一方ではつくっている。

伊藤 もう八郎潟の時からそれは言われているんだから。

松野 八郎潟で懲りているんだ。それにもかかわらず、今度は諫早干拓だ。八郎潟はまだ淡水があったからいいんですよ。海水は駄目なんだ。塩害で米なんかできやしないんだ。

伊藤 米をつくるたつて、米はもう要らないじゃないですか。

松野 馬鹿も馬鹿だ。それで保護政策でしょう。その結果、目の前にある生鮮食料品でも輸入に負けるんだから恥ずかしい。こんなものは長く保存が利かないものですよ。生鮮食料品ぐらい国内で自給するのは当たり前のことだ。それが負けるなんていうことは政策が悪い。

伊藤 いや、本当にそうですね。

松野 不思議でしょう。労賃が高いというけれど、労賃は同じなんです。みんな日雇いには金を払っていないんだ。自家労働だから、労賃は同じなんだ。あとは機械が少し高いか、肥料が高いかという程度で、運賃をかければ同じで来るはずだ。

伊藤 向こうから来るものは、運賃がうんとかかっているわけですからね。

松野 労賃が高いといっても、労働賃金というのはほとんどないんですよ。自家労働なんだから。三ちゃん農業で、じいちゃん、ばあちゃん、かあちゃん、労賃をもらっている人はおりません。労賃に換算すれば、だ。換算しなければ負けるなんていうことはあり得ない。技術はいい。目の前で採れる。葉っ葉や野菜やネギ

なんかが負けるなんて、どうしてだろうと思う。間違ひなく農政が悪い。

伊藤 僕は本当に、なんでネギが、と思いましたね。

松野 ネギなんてそう長く保つものではありませんからね。

佐道 値段が倍以上違います。

松野 どうしてだろうと思う。それは休耕田でつくらせないからです。あの四割で自由につくらせれば、つくりますよ。農地はただ空いているんだ。そこでつくらせないでおくから、ああいう馬鹿なことになる。私は農政は根本から間違ひしていると思う。それは私たちが保護政策をとったからだ。

伊藤 先生のときの保護政策の一番は何ですか。

松野 積雪と寒冷の雪寒地帯、それから急傾斜地帯、シラス地帯、台風地帯、そういう地帯に全部保護法をつくった。それで、全部がどこかに入るんだ。単作地帯は九州が入らないが、九州は暴風地帯に入るんだ。全国が何かに入らなくなってきているんだ。網がかかっている。なければそこに無理にくつつけるんだ。鹿児島はシラス土壌。それから段段畑。そういうことで、全国が網に入るようにつくるんだ。最後には、蜂までつくった。養蜂。蜂は何かという、これはレンゲ草をつくるから。レンゲ草は堆肥になるわけだ。だから蜂は保護するんだ。

有馬 すごい理屈ですね。

松野 レンゲ草のことを漢名で紫雲英（しうんえい）というんです。だからレンゲ草保護法となると、レンゲ草に補助金を出すんです。全部、補助金付きだ。レンゲ草が一番多いのは長野か山梨です。蜂も多いんだ。そうすると、一町村に五万円ずつぐらい補助金が行く。五万円をどうするのか。組合員が二百人。「五万円を君たちはどういうふうに分けるんだ」ときくと、「いや、五万円は、村でみんなが集まって、会合をして、盃で分けるんだ。それで元氣を出してやるんです。だからこの補助金は大事な補助金で

す」という。一町村五万円ぐらいですよ。それをみんなで集まって、盃で分けるというんだ。それが紫雲英補助金、養蜂補助金。そういうところまで補助し過ぎていているんだ、それが全部自民党の票になるものだから。それが伝統的に過保護になって、自主性がなくなつて、若い者が――。

もう一つ大きいのは、農地法で縛りすぎた。農地法で農業組合を強化して、それを自民党の集票マシーンとしてつくつたんだ。そのためには補助金をうんと組む。米の集荷は農協でなければいけない。そんなものはおかしい。いまは多少米商がやっていますよ。やっていますよ、あの当時は農協しか集荷できない。販売を全部農協一本にしたんですね。そういう独占的なものを与えて、しかもそれに補助金を出す、手数料を払う。それで農協を育て、農協組織にみんな押しつけて、それが集票マシーンとなつて、農協が全部票を集めてくれる。われわれ農林議員は、農協を相手にしていれば票を全部集めてくれる。だから農協補助金をうんと組まなければならぬ。米の集荷手数料というのが大事なんだ。あまりにも補助をやりましたために、自立心がなくなる。いまは反省の限りですね。

伊藤 農協もいまはつぶれているんじゃないですか。

松野 それでも駄目なんだ。自立心がないものだから。頼りすぎている。米が余つてきたものだから集荷手数料が入らない。もう一つは倉庫へも入らない。そういうもので余つてきた。いまは糖尿病みたいになつたでしょうね。保護が多すぎて、生産が駄目なんだ。だから、本当に私たちがやったことの反省は農業だ。もつと自主農業で厳しくしておけばよかつたな、と思う。一番が農地です。農地法に、自由に農地が買えないようになっていて。農民以外、農地を持つちやいけないんだから。これが間違ひつたですね。だから集団農家、集団農園を自由に認めればよかつた。

伊藤 農地の売買をして、ですね。

松野 農業をするものは売買自由になればよかった。

伊藤 いま農業後継者がいなくなるでしょう。

松野 これからは魅力がないんです。若い者がつかない。同じ農業だから。新しいことができないから、やめるんだ。それはなぜかというと、農地法で縛っているから新しいことができない。自分の畑が二町あるから、これを菜園にしようとか、特別なものにしてどうか、農業団地にしようと思っても、できないんです。制限がある。米をいくら作らなければいけないとか決まっている。だから若い者が行かなくなった。もつと農地を自由に売買できるようにすれば、都会から若い人が行くでしょうね。退職者が五人ぐらい集まって、〇〇農園なんていうのをつくれればいい農業ができるんだ。小岩井農園がそうですからね。あれは、小と岩と井の三人でつくったんだ。「小野義真・岩崎弥之助・井上勝」。それが近代酪農農業をつくったんだ。それは日本の新しい酪農農業の先覚者ですよ。まさにそういうことが必要なときなんだ。

佐道 先生の頃から、若者の農業離れは相当加速していたんですね。

松野 それがあったから、私たちは一所懸命酪農を奨励したんだ。私たちは酪農の時代だった。酪農が道だった。羊を飼うのに、どれだけ草を食べるか。農産物から酪農製品の時代だった。いまは酪農からもつと先の加工食品の時代になっているでしょうね。

伊藤 酪農は失敗したんですね。酪農といっても、結局牛自体を輸入して、飼料も全部輸入だから、太刀打ちできるわけがないです。

松野 でも、チーズでも、もつといい日本人向けのものをつくれればよかった。

佐道 松坂牛みたいに特化したものですか。

伊藤 でも、どこに行っても何とかの黒牛というのが、全国至る所にありますからね。

松野 どこでも松阪になってしまおう（笑い）。昨日テレビでやってたが、シイタケ、ネギは、日本が中国につくらせたそうすね。それでいま日本が輸入を制限する。自分たちがつくらせたんだ。

伊藤 あれは商社や何かがやったんでしよう。

松野 日本人がつけらせておいて、日本人が輸入する。

伊藤 日本では自由にできないけれど、向こうでは自由にできますからね。

松野 それは農政の貧困そのものだな。それを聞いたときには驚いた。

伊藤 僕が一番驚いたのはネギですね。

松野 ネギには私も驚いた。あれは日本のネギだとばかり思っていた。タマネギは輸入ということは知っていましたよ。あの白い足は、日本のネギに決まっている、日本のものだとばかり思っていた。中国産とは知らなかった。あんな立派なものができる。日本人が教えたんだからね。

伊藤 まあそうですね。種も持っていったんでしよう。

松野 あの頃河野一郎農林大臣「第一次第三次鳩山内閣」が、国際農業を主張した。分業しろというんだ。餌は日本をつくるな、タイから買えというような国際農業を、河野一郎はさかんに唱えていた。私ら国内農業者は、さかんにそれに反論していたけれど、いま考えると、河野一郎の言っていることは正しかったな。そういう付加価値の少ないものは外国から買え、付加価値の高いものだけで農業をしる、エサとか飼料はタイから買えばいい、日本でつくる暇はないと、要するに国際分業論を言っていましたね。河野一郎は、藤原弘達みたいな学者と組んで、さかんに国際農業論を言っていましたね。目新しいことだった。いま考えると参考になることですね。

伊藤 国際農業もいいですが、一番身近な野菜なんていうのはや

っぱり国内でつくれるんじゃないかと思えますね。

松野 菜っ葉とか、そういう目の前のものは日本でつくらなければ。

伊藤 だけどほうれん草とか小松菜も、輸入がいっぱいあるでしょう。

松野 ずいぶん高いコストでしょうね、輸入の値段は。それでも安いんだ。そんなものは三日ももちませんよ。よっぽど冷蔵、冷凍で持ってくるんでしょね。

伊藤 そういう技術が発達したということでしょうね。

松野 それにしたって高い。

小池 日本は国内の流通が悪いですからね。

松野 流通が悪いね。案外産地でも高いでしょうね。

佐道 海外旅行よりも国内旅行の方が高い国ですから。

小池 流通コストが高すぎるんだと思いますね。

佐道 さきほど農林族の中でも農政と水産は少し違うとおっしゃいましたが、水産もいまはずいぶん厳しいですね。それに、この頃は違いますが、たとえばクジラなんていうのは環境問題の犠牲になってさんざんな目に遭っています。この時代は、鈴木善幸さんなどが水産族の中心にいたと思いますが、日本の水産はこうならなければならぬという議論は、その当時はどういうものでしたか。

松野 水産の大きなものは、水産場の油を無税にした。C重油か何か。

小池 漁船用のですか。

松野 漁船用。それは私は鈴木善幸に大いに協力した。その一つは、農業用のガソリンを免税にした。いまでも農業用ガソリンは免税です。ただし、それはわからないんだ。農業用の油か自家用の油か。そこでガソリンの税金の何%かを、農業用免税道路、農免道路という名前で作っているんだ。その農免道路というのは、

ガソリンの減税分で作ったんだ。個々には免税しない代わりに、大蔵省と協議して、何%かを農林省に渡すんだ。農林省は、それをガソリンの免税分として各町村に農業用の道路をつくったんだ。だから農免道路というものがあつたんです。それに該当するものを、C重油の免税にしたんだ。船はわかるんです。船はすぐわかるけれど、自動車か農機具かはわからない。だから一定割合を大蔵省が出す。それが農免道路だ。そのときは鈴木善幸と協力して、水産のC重油を免税にしたんだ。

佐道 その頃ですか。

松野 その頃、一緒に。これは鈴木善幸にえらく感謝されました。そのときは、陸と一緒にじゃないか、陸がガソリンなら、海は重油じゃないか、一緒にやれ、ということ、大蔵省と通産省が大反対したけれど、水産に対してやつたんだ。

もう一つは、農林漁業金融公庫から漁船の貸し出しの金利引き下げとか。クジラだ。おかしなもので、アメリカはクジラに大反対するんだ。世界中が賛成しているのに、アメリカだけが反対する。クジラは海上における唯一の哺乳類だから、神様みたいに考えているんだ。それで大変だ、という。これは鈴木善幸の話ですよ。アメリカが一番困る。アメリカでは一部のインディアンで、クジラだけを食っている地域がいまでもあるそう。それを全部禁止して、クジラを獲らせない代わりに全額補助金を出している。そうしてクジラを保護している。アメリカはおかしいんだ。いまはクジラが増えて増えて、あふれるほどいる。ある地域において、魚を五トンぐらい食べるそう。クジラが増えたと魚を食うので、日本のマグロの資源がなくなる。そのうち自分の海流では間に合わないから、ほうほうの港に入ってきて来て、東京湾まで来ている。それはエサを追いかけて来るんだ。それぐらい増えているのに、アメリカは獲らせない。

伊藤 もともとアメリカが捕鯨を太平洋でやって、それでペリー

が来た、ということなんですけれどね（笑い）。

松野 昔は捕鯨船が日本に寄りたいんだね。いまはとんでもない、という話を鈴木善幸がいつていた。クジラの会議の時は毎回、私たちに、とんでもない国だと言っていた。それでいまは試験漁業として何千トン。それでも日本の割り当ては少ない。もうひどいものだと言っていた。

農林、水産一緒でしたが、水産のことは私はわからないんだ。だから鈴木善幸に聞いたたり、一緒に協力したりした。その免税の時は、C重油の免税を農免道路と一緒にした。そういうことをしましたね。水産のことは私は本当にわからない。マグロがどこでいくら採れるのか。それは鈴木善幸とか中川たちに聞いて一緒にやっていましたね。

佐道 農林省の外局に水産庁がありましたね。水産庁長官には農林省の人がなりますが、中の人事などはかなり独自にやっていますか。

松野 人事は同じです。食糧長官、水産長官、同じです。何も水産専門じゃないんです。技術者は専門だけれど。中川一郎が農林大臣になったとき、「農林水産省」としやにむに「水産」を入れたんだ。彼は水産族だから、農林省を農林水産省にした。「水産」を入れたのは中川一郎です。「福田改造内閣、昭和五十二年十一月二十八日」。

伊藤 初めは馴染めないで、農水省とは一体なんだと思っていましたけれどね。

松野 「農林」では「水産」がないというんだ。じゃあ林野も入れなければならぬ。まあ、林野は「農林」に「林」が入っていると。

伊藤 この農林大臣の期間は、そんなに長くはないんですね。

松野 長くはなかったです。一年ぐらいですね。

伊藤 四十二年には終わりになっているんですね。この時期には

荒船事件、自分のところに急行を止める事件がありましたね。深谷です。これも佐藤内閣の期間ですね。

松野 そのとき幹事長は田中角栄だったと思いますよ。

伊藤 佐藤内閣の時はずっと大臣だったわけじゃないんですね。

松野 ずっとではありません。私は二年だけ。そのとき幹事長は田中角栄だったと思う。

■選挙調査会長に就任

伊藤 昭和四十二年に大臣をやめて、そのあとは――。

松野 そのあとは、私は選挙調査会長をした。

伊藤 自由民主党の選挙制度調査会長になりますね。

松野 ええ、四、五年やりました。

伊藤 四、五年もやりましたか。

松野 ずいぶんやりました。それで政治資金規正法とか――。

伊藤 なんてそういうことになったんですか。

松野 選挙調査会というのは、その頃ぼつぼつ政治資金規正法がいろいろ議論になってきたんだ。それで佐藤が私を呼んで、「選挙調査会長になれ」という。私は「大して興味がないが」というと、「とにかくくなっておけ。おれのところに会いに来るのに、何もないと会いに来られないぞ。何か選挙調査会の報告という名前ならいつでも来られるじゃないか。だから看板だけつけておけ」ということなので、選挙調査会長をやったんだ。「総理大臣に会いに来るのに何もなしで、ただ会いに来たって、きみ、困るだろう。なんで来ましたか、と言われると困るだろう」と言われましたね。

伊藤 選挙調査会というのは、何にくつついているんですか。

松野 党の中の選挙調査会は、幹事長にはくつついていない、憲

法調査会とか、選挙調査会、税制調査会というのは、党の中の最高組織でしょうね。

伊藤 政調とは別なんですか。

松野 政調とは別です。政調会長に付属しているわけではない。

小池 総務会でもないんですか。

松野 総務会にはみんな付属しているでしょうね。だから政調会に付属しているわけではない。調査会というのは横並びでしょうね。だから何をすることも、特に報告しなくてもいいわけだ。だから総裁直属と言ってもいいんでしょうね。

伊藤 先生はこのときはまだ総務にはなっていないませんか。

松野 総務になったり、ならなかったりしたかもしれない。しかし選挙調査会はずっと放しませんでしたからね。私はたしか四年ぐらい、佐藤内閣のあいだやっただけです。その方がやりやすいから、何かになっておけということだった。

伊藤 もう一回大臣に、という話は—。

松野 もう一回大臣に、ということとはしばらくありませんでしたね。

伊藤 やつぱりみんな譲らなければならぬということですか。

松野 私も、もう一回大臣になりたいという気はほとんどなかった。自分から志願もしなかった。

伊藤 ああいうものは志願しないと駄目なものですか。

松野 志願しないと駄目ですね。

伊藤 佐藤さんのところに行つて、何々にしてくれと—。

松野 やつぱり言わなければ駄目でしょうね。人に言わせてもいいですよ。なんとかあれを今度はやってくれとか。とにかく頭に入れておかなければいかんですね。資格がないものは別として、当選五、六回ならね。やつぱり年度を置かなければ。私は、自分でも人でも、それから大臣はいやだと思いましたが。一年ごとに替わつて、一年間やつても大して効果はないと思つたな。自分が

威張つてやつても、大して効果はない。一年間で実績が上がることはないですからね。ただ石垣に石を一つ積むぐらいで、石垣全部はつくれないんだから。

佐道 大臣としてどのぐらい時間があればいいですか。

松野 まあ二年でしょうね。二年がいちばんいいと思う。一年では、自分で考えて予算を組んだつて、執行まで見られませんか。執行を見て、それを継続して直せれば、ものになるわけだ。二年やればものになる。一年ではちよつと中途半端だ。

伊藤 防衛庁長官の時も、予算を組んで、予算が決まるころではもう替わつていゝるんですね。

佐道 先生は約一年ですが、歴代防衛庁長官の平均は約七ヶ月です。

伊藤 防衛庁長官がなぜ短いかというと、失言でしょう。

佐道 それもありますね。

伊藤 いわゆる失言で、正論を吐いただけ。先生はお上手だったんですね（笑い）。

松野 正論はやっていましたけれどね。やつぱり終戦以来、日本人の中に、戦争というものに対する異常な罪悪感をはびこっているんだ。もちろん戦争が善という人はいない。しかしその罪悪感が度を超しているんだ。日本が戦争に一〇〇%責任があつて悪いんだということだが、戦争というのは五分五分だろうと思うけれど。

伊藤 当時なら、これで完全に失言だ（笑い）。

松野 （笑い）そういう罪悪感があるから、言えないんだ。いまの「五分五分だ」と言っただけで失言ということになるから。

伊藤 これは社会党にとつてはもつつけの幸いで—。

松野 そういうことがいまだに消えないんだ。教科書問題でもそうですよ。教科書は私はよく読んだことがないから、どう書いてあるか知らんけれど、そんな極端なことは書いてないと思うけれど。

ど。

伊藤 いや書いていませんよ（笑い）。

松野 それでもこんなにアレルギーになる。

伊藤 要するに社会主義的じゃない教科書なものですから。

松野 そのときに防衛長官はなんでも「失言になる」。日本人は

極端というか、案外自主性がないんだろうな。

伊藤 やっぱ日教組にやられたんですよ。

松野 日教組に、すっかり戦争犯罪ということでやられた。戦争

犯罪で押し切られた。戦争は是なりというやつはおらんけれど、

全国民が戦争反対なんだ。日教組以外のものは全部戦争犯罪者み

たいに言われる。それがひどかったですね。もう一つ、占領軍が

それを煽ったな。

伊藤 基本は占領軍がつくったんですよね。

松野 占領軍がそれを煽って、野坂「参三」を許し、徳田「球二」

を許し、あとになってあわてて追放にした。占領軍もおろろし

ているんです。いちばん被害を受けたのは教育だ。

伊藤 もうその日教組の教育を受けた連中が自民党の党员ですか

らね。それで議員ですから、これが大変なんです。

松野 これは「不逞の輩」「曲学阿世の徒」と言って吉田さん

が頑張ったけれどね。あれは南原「繁」さんだったかな。

伊藤 南原さんはしょうがないですよ、不逞の輩だ。

松野 吉田さんが頑張ったけれど、あとに続くものがないかった。

何かの時に、正月か何か、自民党の党员に挨拶して、「不逞の輩

だ」といった。何か政治に口を出したんだね。批判か何かをした

んだ。それに応えて言ったんだ。

伊藤 あれは講和ですね。全面講和だ。

松野 それで自民党の挨拶で、「不逞の輩が国を誤らせる」と言

った。全面講和論だったんですね。

佐道 選挙調査会の実質的な活動は！。

松野 政治資金。

佐道 かなり活発に活動されていたんですか。

松野 まず一票の重みが違う、これが第一。これは最高裁判所か

ら次々に来るわけだ。最高裁判所も憲法違反とは言わない、望ま

しくないという。次々に来るものだから、それをなんとかしなく

てはいけない。そこで私がそれをやってみると、参議院は憲法違

反と言いくいんだ。地域代表という意味があるから。アメリカ

の上院と同じだ。だから必ずしも人口割でいなくてもいい。た

だ二票目になると人口割になる。終戦の時、東京の人口が四五〇

万ぐらいいだった。北海道は四〇〇万ぐらいいだった。そこで北海

道は定員八、東京も定員八。その頃の参議院は、東京と北海道が同

数なんだ。これはいかにも無理だ。いま北海道は八名が四名にな

って、東京は八名そのまま。それを横浜とか福岡とか二割割り振

った。そういうことが私の仕事だった。

それと併せて政治資金だ。業界から政治資金をたくさんもらっ

ている。政治資金規正法を作れという問題。衆議院でそれをやる

と、失礼だけれど自民党が負けちゃうんだ。農村に多く配分して

いるものだから、さっきの農協が働いてくれて勝つんだ。それを

平等にやると負けちゃうんだ。それが自民党の大事どころだ。

農村に不公平であるから、いいわけだ（一同笑い）。人口比例に

すると東京に集まっちゃう。不公平だ、不公平だと言われながら、

それを少しずつ直していくのが私の仕事だった。いっぺんに直さ

ずに、一ヶ所ずつ直して、時間をかけてやっていったわけだ。政治

資金規正法も作りながら、抜け道を考えながらやっていった。これ

は何回もやっていますが、みんな抜け道。ある程度ごまかしごま

かしてやっていった。

伊藤 抜け道をつくらないと、自民党の中が大変ですね。

松野 抜け道をつくらなかったら、私は袋だたきになる。それで

は自民党の連中はみんなやっていけない。

佐道 抜け道をつくつたにしても、定員をいじつたりすることは議員には死活問題ですから、大変ですね。

松野 そこで定員のバランスをとると、減らさなければいけないんだ。減らさないでバランスをとるということは、増やせばいいんだ。だから農村部分を減らさずに、都会を増やせば比率が合う。それで五二〇以上まで増えたんです。私の時に増えたんです。いまの五〇〇選挙区より増えている。減らさずに増やしたから、ああいうことになった。そんなごまかしをやってきた。正直に言えばね。農村を減らして都会を増やせば、バランスはすぐ合います。でもそれじゃあ自民党は困る。だから農村をおいておいて、都会を三名、二名と増やして、たしか五二〇ぐらいまで増やしたでしょう。それは何かというと、そういう奥深い考えがあつたんだ。自民党を守るために。

小池 昭和三十年当時に、小選挙区法案を一回出して駄目だったときがありますね。

松野 鳩山内閣ですね。鳩山内閣の時に出しました。そのとき幹事長が川島正次郎「岸信介の間違い」。私たちは必ずしも与党ではなかった。まだ保守合同の前です。そのときにいちばん悪かったのは、ゲリマンダーをつくっちゃったことだ。真ん中を別にして、こつちとこつちをくつつけた。淡路島です。淡路島の半分をこつちにつけて、半分をこつちにつけた。あそこは代議士が二人いたものだから、一人ひとりに分けたんだ。そういうゲリマンダーを各所につくつたので評判が悪くなった。そうしないと代議士は賛成しないんだ。賛成するには現議員が出られるような選挙区をつくつてやらなければいけない。選挙区をつくれれば、でたらめです。あつちとこつちをくつつけたりする。それだから評判が悪くて、世論から叩かれた。これは民主党のためにつくつていんじゃないかと。

伊藤 岸内閣の時もやりましたね。

松野 やりました。やったけれど、それは代議士の個人個人の承諾を得なければ通らないんだから。それには個人個人の代議士の身分保障をしなければならぬ。それで割っていくと、選挙区はバラバラになるんです。斑になって、きちんと分けられない。結局、失敗した。代議士の賛成を得なければできない。代議士が賛成するには、各人に納得させなければいけない。各人に納得させようと思うと、分割はでたらめになる。理論のない分割になる。結局、世論から叩かれる。私の時は、小選挙区まで理論は考えたけれど、地図まではつくりませんでした。定員の是正と、選挙資金・政治資金の二つは、何度も私がやりました。私も質問に立つたりしました。誘導質問で、自分で出して自分で説明したわけだ。伊藤 それで法案にしたわけですね。

松野 法案にした。ある程度はやりましたが、抜け道ばかりつくっていましたね。個人はいけないけれど、政党はいいとか。政党を経由して受け取れないじゃないか。受け取る方で制限をすることから出す方は無制限にするとか、そういう抜け道ばかりつくっていましたね。

佐道 調査会には、先生のほかのメンバーとしてはどういふ方がいらつしやつたのでしょうか。

松野 私がほとんど一人でやっていました。赤澤正道君と一緒にやってくれた。奥野「誠亮」なんかも一緒でした。

伊藤 そういえば奥野さんの話の中にも出て来ましたね。奥野さんはあつちとこつちにおやりになりますね。

松野 彼は自治省にいたから詳しいですからね。奥野誠亮は自治省の事務次官までしたから、選挙は詳しくかった。それから参議院の降矢敬雄、これも選挙部長になった。そういう人がたくさんいましたね。

佐道 調査会の世話をする事務局みたいなものはあつたんですか。

松野 いました。政調の方に一人いました。名前を忘れましたが、辞めました。アオキとか、いましたね。それと選挙部長。政調会に担当がいるんです。アオキとか、そういう人がいくつか兼務してやるわけです。政調会が事務局の事務をやるわけだ。

伊藤 それは自民党の中に部屋があるわけですか。

松野 部屋はありません。その日一日借りるだけです。会議をするときだけです。

伊藤 委員長の部屋はないんですか。

松野 ない。

伊藤 そうすると日常的には、先生はどこで仕事をされるんですか。

松野 それは議員会館です。会議をするときだけです。ふだんは仕事をしません。代議士というのは便利なもので、椅子に座ればすぐベテランになる。会議の最高権力者になる。選挙調査会という会議を開く。開いて私がしゃべると、私が言うことはほとんど九割その通りになる。

伊藤 それは先生だからじゃないですか。

松野 そんなものです。だから総理大臣になったら、森の言うことが通るじゃない。議長になればそうでしょう。馬鹿かどうかは別ですよ。政治というのは、椅子に座れば、座っているあいだは、その人の言うことが通る。

佐道 だから辞めさせるといふ話が出るんですね。

松野 辞めさせなければ直らないんだ。椅子争いなんだ。権力とは何だというと、椅子に座ることだ。椅子に付随して、権限がついているんだ。大臣の椅子に座れば、行政官庁として、大臣は部下を統括命令することができるを書いてある。だからその権限を持つわけだ。椅子に座れば、その権限は自動的に行政法で決まっている。そこに椅子争いが起こる。椅子に座っているあいだは、どんなに嫌でもしかたがない。引き下ろさなければしょうがない。

椅子から引き下ろすのに、森の場合四ヶ月かかった。一月から四月まで四ヶ月だ。降りないんだから。権限というのは、行政組織法によって、椅子に決まっている。大臣の椅子に座れば、その権限はたくさん出てくる。

伊藤 それは自民党の役員でもそうですね。

松野 役員でもそう。選挙調査会長に座れば、選挙調査会の項目は全部決める。会議を統括し、それを主導し、それを決する。反対が出れば別ですよ。私はその権限を持っている。幹事長に座れば、たいしたものでもなくても幹事長だ。そこで椅子争いが激しいんだ。人事で決まるんだ。それを冒すことはできない。それを冒せば自分になったときに冒される。幹事長の権限を持っているものを勝手に無視すると、自分になったときに無視される。だから自分のことを考えると、その間は相手を冒せない。それが権力でしょうね。権力は権力がいちばん怖いんだ。大臣同士が陰で喧嘩するといちばん困るでしょうね。

有馬 大臣に座ったときはお役人のお膳立てがありますね。いろいろなことについて、役人がそれなりにお膳立てをしてくれるということがありますが、党の調査会の会長の場合にはどうですか。

松野 お膳立てはありません。調査会長がお膳立てを決める。どういう運営をしようか、誰を運営委員にしようか。まず委員を選ぶことから始まるんだ。

佐道 全部先生の裁量ですか。

松野 何人かは希望が来ます。ぜひなりたいといつて来る。希望は入れます。あとは私が勝手に決める。

伊藤 でも選挙制度調査会というのは、なりたい人がいるんですか。

松野 あまりいませんね。

伊藤 何の権益もない。

松野 何も利権がないから、なんでもないんだ。

伊藤 でも先生がこの役職に就いたのは、特にそこに権限があるとか、そういうことではないんでしょう。

松野 それは佐藤に会いに行くパスポートみたいなものです。「来ると必ず、新聞記者がなんで来ましたか、と言うから、そのときは選挙調査会の報告に来たと言えればいいじゃないか。選挙調査会長になっていないと、それができない。だからおまえは選挙調査会長になっておけば、いつでもおれのところに選挙調査会の報告に来たと言えば来やすいぞ」という佐藤の進言だった。

伊藤 その時は、自民党の選挙調査会長であつて、議員であつて、あとは派閥・佐藤派の領袖である。そうすると、常務がないわけです。その間に、どういいういたずらをされたのかと（笑い）。

松野 あとは予算委員ぐらいのもですね。予算委員は、予算委員会だけちよつと顔を出していればいい。あぶない発言もしなかった。与党の質問はあまりないんです。質問したつて、八百長質問にしかならない。知っていることをお互いに言う。自問自答しているようなものだ。だから与党の質問はつまらない。まあ、自分の博学を宣伝する人はたくさんいます。おれはこういう知識を持つているんだということを滔々と述べる人はいる。それは質問じゃない。最後に、「〜と思うが、大臣はどうですか」と言うんだ。大臣も「私もそう思います」といつて終わりだ。そういう人も与党にはいますよ。最後に、「総理はどうお考えですか」という。「いや、立派なご意見で、私も同じです」と答える。そんな質問をする人もいる。自分の博学を二十分しゃべつて、最後に「総理はこのことについてどういうご意見がありますか」「いや私も同じだ」、これは自分の知識を述べたいからしゃべりたいんですね。

伊藤 あとで速記録を選挙区に配るんですね。

松野 そうです。

佐道 防衛庁長官のときはオカッパルさんとか、野党の方がいろ

いろ言つてきましたが、農林大臣のときは野党はどうでしたか。

松野 あまり言つてきませんでしたね。農林関係については、野党は米価だけだから。米を上げる、上げる、いくらでも上げるといふ。

伊藤 それは農協だけではなくて、野党も言つんですね。

小池 社会党の議員も強いですからね。

松野 五五〇円なら、六〇〇円に上げる、俺たちは農民のためにうんと上げろという。社会党にも農業がありますからね。

伊藤 日農ですね。

松野 日農というんだ。社会党も農業にはうるさいのがいます。それが政府米価よりも高いものを要求する。俺たちはこんなに要求したのに、政府はこれだけだ、農民を圧迫しているという。日農という組織がありましたね。

佐道 米価が中心で、政策論ではないわけですね。

松野 米価だけだ。

伊藤 農地法なんていうのは「社会党も」守りたい方でしょう。

松野 もちろん守りたい方だ。農地法を大いに強化しろ、という言い方だ。農民をもっと保護しろという。それは逆ですよ。自由主義じゃない。それで米価を上げろという。

伊藤 これは与野党で円満にできますね。

松野 それは言うだけで、たいした力はなかったですね。

伊藤 そうすると、農林大臣はあまり緊張感がないですね。

松野 野溝勝、これは日農の会長だった。

伊藤 農林大臣は居心地がいいですね。

松野 農林大臣のときは、防衛長官のときよりも威張つていましたよ。

小池 先ほどのお話の中に、しつぺ返しを食らつたというお話がありましたね。

松野 しつぺ返しはね、いまでも思い出すが、農地転用か何かの

書類を、農地局長が私が外遊する前の夕方に持って来たんだ。夕方五時頃だ。「よし、よろしい」といって、私はサインしちゃったんだ。それが大変な問題になったんだ。閣議に出たら、閣僚から「これはおかしい。農林大臣のサインがしてある——もちろん代理はいましたよ——、この農地転用はちよっとおかしい、松野を呼べ」ということになった。そのとき私はカナダかどこかに行っていた。そこに電話がかかってきて、帰ってきてみたたら、「局長の説明は簡単だったけれど、大変な問題のところだった。それでその局長が、私が発する五分前に持って来てサインさせたんだ」〔昭和四十一年十月二日〕。簡単そうな顔をして。それは何年もの懸案事項だったんだ。

伊藤 農地転用というのは何ですか。

松野 何かの農地を、非常に安く払い下げか何かをする。開拓農地だったか、多年の問題の土地だった。それを私は出発前に、その局長がいかにもまともな顔をして、これはたいしたものではない、簡単な事務的なものですよ、というような顔で出すものだから、サインしちゃった。それにやられた。とんでもないしつべ返しは、それです。

小池 その農地局長をいじめていたわけですか。

松野 農地局長だ。いま考えたら、あの五分前に、これは簡単な事務的なものですよという顔で出すものだから。そうしたら長年の懸案のものだった。それを五分でサインさせる。それがしつべ返しだ。役人という奴はやるな、と思った。あとで全部それをやり直したんですよ。恥ずかしいけれど、引き下げたんです。

伊藤 そういうものは閣議まで出るんですか。

松野 閣議まで出る事件だった。それがしつべ返しだった。

伊藤 出して、引つ込めるといふことは——

松野 閣議に出すのをやめて、取り下げた。

小池 出さなかったことにするわけですね。

松野 出さないことにしたんです。

有馬 というのは、そうとうみつともないことですか。

松野 みつともない。あまりいいことではないですね。もちろん新聞にも出ました。それは大臣として軽率でしょうね。そんなことを仕組みやがった。役人は知っていたに決まっています。何年間か問題になっていることを、わずか出発五分前に出すんですから。これは事務的なものですからという顔で。これは明らかにしつべ返しです。

佐道 先生がサインしたときに、やった、と思ったでしょうね

(笑い)。

松野 いまでもあの局長の顔を覚えている。「大臣、これお願いします」というから「これは何だ」というと、「ええ」とかいって、はつきり言わなかったけれど、えらい恥をかかされた。サインを取り消したということです。

伊藤 それはみつともない事態ですね。

小池 次官会議には出ていたわけですね。その次官会議で了承されて閣議まで上がったわけですね。

松野 上がったんでしょね。農林省はいいけれど、ほかの役所がこれはおかしいと言いつつ出したんです。ほかの役所が反対で、これはおかしいといった。それで閣議で保留になった。

伊藤 選挙制度調査会は党にありますね。それから衆議院に調査会がありますね。そこに出すわけですか。

松野 選挙制度調査会は衆議院にもあったでしょうね。

伊藤 あつたと思います。

松野 ある時とない時がある。常設ではありませんから。選挙制度調査会というのはなかったんじゃないかな。私はなかったと思います。

伊藤 常設ではなかったと思いますが、あつたと思います。

松野 いや、地方制度調査会でやっていますからね。選挙制度調

査会というのは、あつた時とない時がありますね。

伊藤 選挙制度審議会は―。

松野 それは学者を集めた審議会ですね。第六次があつた。小汀利得とか。

伊藤 これは総理の審議会ですか。

松野 総理の審議会で、自治大臣がやっていましたね。

伊藤 それと自民党とは―。

松野 別です。

伊藤 別でしょうが、案を出すわけですか。どっちが出すわけですか。

松野 選挙制度審議会は第六次でやめちゃったんです。佐藤の時になくなっていた。そのあとを私がやったんだ。そのときはなくなっていました。小汀利得さんもなくなつて、細川隆元もやめていましたね。

伊藤 そうですか。自民党の選挙制度調査会で事を決めて、総務会なりなんなり出して、法案にして、出すということですか。

松野 その前は、内閣が選挙制度審議会に諮問していた。諮問して、その答申を受けて法律をつくっていた。しかし第六次までで、やめてしまった。やめたあと、私がやった。

伊藤 これは閣議に出すのは、自治省から出すわけですか。

松野 自治省から出していましたね。

伊藤 そうすると、選挙制度調査会は自治省との関係が深い。

松野 深い。

伊藤 法案提出権は自治省にあるわけですね。

松野 自治省にあります。

伊藤 でも先生、これは六年間ですか。

松野 六年です。選挙制度審議会というのは、私の時にありましたね。小汀利得とか細川隆元とか、一緒に会議をしましたね。そのときは全国区比例代表は大きすぎるから、ブロック別にしてはどうかとか、そういう話がありました。それから「非拘束ではない拘束名簿にしてはどうか」と言われた。「それは順番がつけにくい」「政党が順番をつけられないというのはおかしいじゃないか。政党というのはそれぐらいの良識をもつて、党員の順番をつけるのあたりまえじゃないか」とか、さんざん言われた。拘束名簿式、ブロック別という、衆議院のいまの制度はそこから生まれただけで、無理だ。これは残酷区だといっていましたね。どんなことをしても、三〇〇万人に手紙を出さなければいけない。

伊藤 だいたい超過してしまいました。

松野 今日選挙制度までにしましょう。

伊藤 では次回を決めたいと思います。

松野 みなさんは不便だけれど、来ていただけるので、私はありがたい。

伊藤 不便ではないですよ。遠い人はしょうがないんですが、福岡と広島ですから。

松野 広島は亀井のところだな。

小池 僕の選挙区は中川秀直です。東広島ですから。

松野 呉もそうでしょう。

小池 呉は池田行彦です。

松野 私は呉に三ヶ月ぐらいいたから。

伊藤 今日は、どうもありがとうございました。次回もよろしくお願いたします。

政局関連年表

「自民党総裁選の動き」

三月五日

野党四党から出された森内閣に対する内閣不信任決議案が、衆院本会議での採決の結果、与党の反対多数で否決。

三月七日

保守党の扇賢首が野中氏に首相就任を要請。野中氏は固辞。

三月十日

森首相が古賀幹事長ら党五役と会談。森首相は総裁選前倒しに言及し、事実上の辞意表明。

三月十七日

野中前幹事長が佐賀市で講演し、総裁選について出馬の意欲を否定。その一方、野中氏は有力候補の一人である小泉氏を牽制。

三月二十一日

公明党の神崎代表と保守党の野田幹事長が国会内で会談し、財政による景気下支えの必要性と郵政事業民営化の反対で一致。野中氏を評価し、小泉氏を間接的に批判。

三月二十七日

自民党の田中真紀子氏、平沢勝栄衆院議員らが小泉氏に党総裁選出馬を要請。小泉氏は自らの対応については明言を避けた。

三月二十九日

自民党執行部が、予備選実施を容認する方針を決定。

三月三十一日

古賀幹事長が野中前幹事長の総裁選出馬に強い期待感を表明。

四月六日

森首相が閣僚懇談会で、初めて自らの退陣と総裁選不出馬を表明。橋本派が橋本氏の擁立を決定。小泉氏が立候補を表明。

四月十日

亀井政調会長、麻生経済財政担当相が立候補の考えを表明。

四月十三日

立候補した麻生太郎経済財政担当相、橋本龍太郎行革担当相、亀井幹香政調会長、小泉純一郎元厚相による立会演説会を党本部で開催。

四月十五日

小泉氏が、予備選の結果を国会議員は尊重すべきだとの考えを強調。

四月十八日

堀内派が総会を開き、総裁選で橋本氏支持を全員一致で決定。

四月十九日

森派の塩川座長、安倍官房副長官らが、江藤・亀井派の中川昭一事務総長らに、決選投票になった場合の小泉氏への支援を要請。

四月二十一日

総裁選予備選挙が七県で開票が行われ、小泉氏が全勝。橋本派の有力幹部は、事実上の敗北宣言ともとれる発言。

四月二十三日

予備選が終了し、地方票（計百四十一票）は、小泉氏百二十三票、橋本氏十五票、亀井氏三票、麻生氏得票なしで確定。

四月二十四日

小泉氏が本選挙で二百九十八票を獲得し、総裁に就任。

四月二十六日

小泉氏が衆参両院本会議での首相指名選挙で首相に選出。

「李登輝前総統訪日問題の経緯」

三月二十五日

台湾各紙が、李登輝・前総統が四月末に訪米、母校のコーネル大学を訪問し、帰途に日本に立ち寄る計画もあると報道。

三月三十一日

ダライ・ラマ十四世が台湾を二回目の訪問。陳水扁総統ら首脳との会談も予定。

四月五日

森首相が外務省に対しビザの発給を検討するよう指示していることが判明。橋本派の幹部らは慎重論を唱え、首相周辺や外務省内ではビザ発給に前向き。

四月十日

森首相が、李登輝前総統から申請があった場合、ビザを発給する方向で最終調整を開始。河野外相は日中間の悪化を懸念。

李登輝前総統が、交流協会台北事務所にビザを申請。交流協会台北事務所は「受理はしていない」と述べる。

四月十一日

福田官房長官が申請自体を否定する見解を強調。

陳水扁總統が、交流協会台北事務所の山下新太郎所長と会い、李登輝氏のビザを発給するよう要請。

四月十二日

石原慎太郎知事が定例会見で政府の対応を批判。

四月十五日

李登輝前總統が、日本政府の対応を批判。

四月十七日

森喜朗首相は河野洋平外相と会談し、ビザ発給に向けた検討を改めて指示。外相は慎重論を唱えた。

四月十七日

「李登輝氏に日本で治療を実現させる超党派の国会議員有志の会」の平沢勝栄衆院議員ら四人が陳健中国大使を訪ね、台湾の李登輝前總統へのビザ発給に反対しないよう申し入れ。

四月十九日

政府が李登輝前總統に対し、医療行為に行動を限ることを条件にビザの発給を認める方針を固めた。

四月二十日

中国外務省の章啓月報道局副局長は記者会見で、どんな理由であれ、訪日自体に反対するとの見解を改めて強調。

為への限定などを条件にビザを発給。李氏は政治活動を日本で行わないことなどを口頭で了承。

四月二十二日

李登輝前總統は、曾文惠夫人らとともに関西国際空港に到着。中国は李氏の訪日に強く反発し、対抗措置を取る方針。

松野 頼三

オーラルヒストリー

第8回

[2001年5月21日12:00~14:00]

[インタビューアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

(於：松野頼三事務所)

■小泉内閣のウソ

松野 小泉「純一郎」、小泉で、騒がしいね。

伊藤 さすがの先生も前回はー。

松野 私小泉が「総裁、総理に」なる、とまでは思わなかった。本人も思わなかったかもしれない。それでいろいろところがコメントを取りに来る。三十社ぐらい来たでしょうね。テレビだ、雑誌だ、週刊誌だ、と。今日また三時頃から神奈川新聞が来るんですね。神奈川はあれ「小泉氏の地元」だから。私だってそう知っているわけではないけれど、多少は脚色して話しているんです（笑い）。誰も知らないんだから。歴史なんていうのはみんなそんなものでしょう。真実は何だ、と言われると困ってしまう。だいたい皆が信じられることが真実だと思わなければね。

伊藤 そうですね。「アサヒ芸能」も来ましたか。

松野 来ました。「女性自身」が来た。「男性自身」ならいいけれど、「女性自身」はいやだよ」と言ったら、「男性自身」という本も出したことがあるんだって。ただ、売れなかったという。それで『女性自身』が残った。「おっしゃる通り、『男性自身』ってむかし出したんですよ」という。「女性自身」「男性自身」のほかに、「一人自身」という本も出したんだという。みんな駄目で、結局残ったのが『女性自身』だけだという。

佐道 そういう雑誌が政治ネタを扱うような時代になったんですね。

松野 政治ネタというより、小泉純一郎という題だ。

伊藤 とにかくワイドショーでかなりのウェイトを占めているから。

小池 国会中継で民放より視聴率を稼ぐ時代ですからね。

武田 六・何%でしたか、七%以上でしたかね。

小池 瞬間では一三%が出たんでしょう。

松野 このあいだ議会を見ていたら、竹中「平蔵」が、ペイオフ延期はけしからん、と総論でしゃべっていたわけだ。それを民主党の代議士が、あなたはペイオフは最悪の政策だと言った、いまいどうだ、と聞いたたら、なんとかごまかしてぐじゃぐじゃ言っていた。それを聞いていて、竹中と親しい学者が私のところに来たから、「竹中は間違っているんじゃないか。政治家ぶった真似をする」と第二の堺屋になるぞ。小泉にしても誰にしても、「竹中には」エコノミストとして閣僚と違うことを言ってもらいたいから入れているんだ。それが閣僚の言葉に合わせるようなら、竹中がやなくて、前の麻生太郎の方がよかったんだ。なぜ学者を入れるかというと、学者として他の閣僚と違うことを言ってもらいたいんだ。それを、他の閣僚と合わせてしゃべるようになったら間違っている。竹中に馬鹿学者になるな、と伝えてくれ」と言ったんだ。「あなたの名前がいいか」と言うから、「俺の名前で言え、松野頼三がそういっていると言ってくれ」と言った。竹中は馬鹿学者になりつつあるぞ、みんなと違うことを言うのが大事なことなんだ。そういうことを小泉は狙って、竹中を入れたんだ。

小池 ずっと筋の悪い政策だと言っているわけですからね。

松野 それを言えればいいんだ。

小池 言ってもいいと思うんですけどね。

松野 言わなきゃいけないんだ。小泉はそれを言ってもらいたくない。自分では、与党だから言えない。まさか森「喜朗」とか小淵「恵三」の悪口は言えないから、学者の口から言ってもらいたくないんだ。

伊藤 組閣はどうですか。どうやって組閣したんですかね。

松野 全部替えるというのが大前提だった。なかなかいいのがおるわけだ。運輸大臣なんてね。わりにはいいのがおるんです。七人留任させたわけだ。「片山虎之助総務相、坂口力厚生労働相、平

沼越夫経済産業相、扇千景国土交通相、川口順子環境相、福田康夫内閣官房長官、柳沢伯夫金融担当相」

伊藤 それは政治力学の問題ですか。

松野 自分の政治姿勢だ。小泉は替えたかった。クビをすげ替えるようなことはいやだと言つてやったんだから、全部替えたんだ。どうしても優秀なおおるわけだ。金融政策なんて続けてやつていながらいるから、それで仕方がない、これを残そう、これを残そうということになる。最後に困つたのは、扇千景と坂口「力」なんだ。これは替えない、と公明党が言うんだ。扇も替わらない。それでどうとう留任が七名になつちやつた。

伊藤 公明党はいま困つていてどうしようね。

松野 公明党は困るも何も、私から見ると、連立していることがおかしいんだ。しかもあの時に、小泉ならば連立をやめるとか、野中「広務」がいいとか、馬鹿なことを言つていた。野中と組んでいるようじゃね。靖国参拝も言われたし。

伊藤 田中真紀子はどうですか。

松野 やり手です。

伊藤 やり手はやり手だけれど、ときどき危ないことを言っているから。

松野 危ない。ちよつと危ないですね。やり手であるけれど、ちよつと女性の視野が狭いような気がする。一途なところはいいけれど、ちよつと視野が狭いですね。

小池 アキレス腱になるんじゃないですかね。答弁があれだけクルクル変わつたりしますと、昔だと問責決議案ですね。これだけの高支持率がなければ、「問責決議が」されていたんじゃないでしょうかね。

松野 そうでしょうね。小泉内閣は人気が高いからね。小泉内閣の悪口を委員会で言つと、電話とメールが大変だという。達増「拓也」という外務省官僚上がりの議員が田中真紀子を攻撃した

でしょう（小池 自由党ですね）。そうしたところが、あの会館がパニックになるほどの電話とファックスで、参つちやつたという。田中をいじめるな、という。菅「直人」のところにも来たでしょうね。

伊藤 民主党はすっかり色褪せましたね。

松野 弱つていた。

佐道 小泉さんを批判したら国民から批判されて、褒めたりした存在意義がなくなる。何をやっていいのかわからない。

松野 鳩山「由紀夫」が言つていた、「保守リベラル」という名前を小泉に取られちゃつたと。既存の規制を打破するとか、全部取られた。

伊藤 質問すれば、応援してくださいと言われるから。

佐道 そうですね。問題だというと、それを私はやりたいんだと言われたら、あと何も言えなくなつてしまふ。

松野 私は民主党を敵だと思つてないとかね。

伊藤 民主党だつて、あまり政策問題でいろいろやると、自分のところが分裂する危険性がありますからね。

佐道 もう野党が分裂を始めましたしね。

小池 そのことで、自民党の内部では、旧田中派を中心としてそういう圧力は目立ってきているんですか。

松野 大変ですよ。

伊藤 でも何もできないでしょう。

松野 今度衆議院で二十八日に財政金融の総括質問をやるように決まっています。与党の外務委員が外交も入れてくれという。与党が、ですよ。その筆頭が鈴木宗男なんだ。鈴木宗男が言うんです、外交も入れてやれよ、と。三時間ぐらいやりますからね。ふつと与党は、なるべく削ることが仕事でしょう。増やしてくるんだから。みんな唾然としている。結局外交も入つたんですね。

伊藤 またメールやファックスでワツとやられるんじゃないです

か。
佐道 鈴木宗男氏にしたら、田中真紀子さんの外務省改革の標的の一番ですから、憎くてしょうがないでしょう。

松野 森という前の総理大臣が辞めてから、テレビ朝日で二島先行論をソ連が提案したと言ったでしょう。それで田中を、こんなのを外務大臣にしたら危ないと言った。余計なことですよ。あれでは鈴木宗男が言っていることと同じですよ。森の頭がおかしい。わざわざこのあいだ、イルクーツクに行つて二島論をロシアも了解したとか、しそうだとか。

伊藤 でもこのあいだロシアは否定したでしょう。

小池 あつさり、外務大臣が否定してしまいましたね。

松野 全然箸にも棒にもかからないものを自分で有力視して、自分の手柄話に入れたんだ。なんで森が今頃手柄話をしなければいけないんだ。

佐道 誰も褒めてくれないから(笑い)。

伊藤 しかし、小泉以外全部霞んじやったという感じだね。これだけ大きな変化が、わずか一ヶ月足らずの間に起こったわけだから。

佐道 小泉内閣出現の最大の功労者は森さんだという話がありますね。

松野 逆論でいうとね。

伊藤 しかし野中さんなんていうのは、壊滅的な打撃ですね。

松野 野中、橋本「龍太郎」、亀井「静香」なんて、名前が出ないもの。

小池 亀井もそうですね。

伊藤 「総裁選で小泉を」応援したのに(笑い)。

■ 退陣した総理は辞職すべき

松野 ただし、三役は一新ということを言っていたんだから、亀井が残ることは無理なんだ。それで敬意を表して平沼にしたわけだ。平沼は、亀井が三役に残ればいいけれど、亀井は駄目だといって、とうとう江藤「隆美」なんていう老骨が、相も変わらず派閥的に指揮する色気を出した。それで嫌気がさして、すぐに替えんだ。あれは無理なんだ。

今度の森の後、総理になつてから、真つ先に電話がかかつて、「ありがとうございます」というから、「主義を通して命を落とすことはあつても、妥協して命を長らえるなかれ」と私は電話で言った。「その通りです、その通りです」と言うから、「それでやれよ。かつて中曽根「康弘」が青年将校として彗星の如く出たが、「首相に」なつた途端に延命策のために、憲法は妥協する、靖国は妥協する、みな妥協する。だから彼が六年いても、何の記録も残らない。短くても、妥協しなかつた細川「護熙」は九ヶ月でも名が残っている。だから君は第二の中曽根になるなかれ」、そんなことを言った。

もうひとつ最近感じたのは、私は総理総裁というのには最高の地位だから、これになつたものはもう議員を辞めるべきだと思う。私はそれは絶対だと思う。また色気を出してもう一回なんて思うから、みんな生き恥をさらすんだ。議員を辞めろというんだ。

伊藤 生き恥をさらした人がいるな(笑い)。

松野 みんなそうなんだ。見なさい、元総理で「総裁選に」立候補した橋本なんて、生き恥でしょう。私は議員を辞めろというんだ。それまでに最大の努力をしろ、それをもう一回やるというような感じを持つから、駄目なんだ。私は小泉にこの次に会つたとき、「総理総裁のベストを尽くせ、その代わり総理をやめるとき

は議員を辞める。その覚悟がないと、本当の政治はできないよ」といつてやろうと思つて。私は最近つくづく感じた。死ねとは言わんが、議員は辞めなきゃあ。何のために議員をやつておるかということは非常に疑わしいし、良くないと思う。

伊藤 アメリカの大統領と同じですね。

小池 しかし橋本さんなんかまだお若いですからね。

松野 それなら、ならなければいいんだ。なつた以上は、それをもつて自分の最高の使命なんだから、その使命を尽くしたら、議員を辞めることだ。死ねとは言わんが。そうすると、在任期間、思い切つてできると思う。

小池 在任期間も長くなるでしょうしね。

松野 長くなるし、努力する。みんながそういう目で見ればいいと思う。この次、小泉に「今度君が「総理を」辞めるときは、議員を辞める。その間にベストを尽くせ。残つた前総理大臣は何の役にも立たないんだ。立たないどころじゃない、逆にマイナスになつていゝ。議員を辞めれば、かえつて色気がないから、国民が見直さだろ」と言おうと思う。

伊藤 辞めて、アメリカの大統領のように、いい位置があるといふだけだね。

小池 印税収入で過ごせるとか。

伊藤 アメリカの大統領は、終身政府が面倒を見るんですね。そういう制度を作ればいい。

松野 サッチャーは、メリルリンチに頼まれて顧問になつていゝ。大変な金額ですよ。何もしなくてもいいんです。ときどき講演すればいい。その話が細川のところに来た。メリルリンチから。それでわかつたんだ。

伊藤 そのとき細川さんはどうしたんですか。

松野 相当な待遇だ。事務所の経費、秘書の経費、そのほかに年俵いくら。義務はありません。講演だけ年に四回ぐらいすればいい。

い。

伊藤 細川さんは受けたんですか。

松野 受けなかつた。パートならいい、講演だけなら受けるけれど、年俵まで縛られるわけにはいかないといった。それでサッチャーの待遇がわかつたわけだ。だいたい各国の元首は、そういう財閥がやつていゝらうな、ということだ。

伊藤 アメリカの場合は国費ですけれどね。

松野 アメリカは国費ですかね。あの国務大臣、キッシンジャーは国費じゃないだろう。講演が高いんだ。誰か日本で講演を頼んだら、四〇〇〇万円とか言われて、とても新聞社も払えない。一回の講演で四〇〇〇万円じゃあね。それは読売新聞が全傘下で出しても、そんなには出せない。

小池 広島大学の五十周年記念事業で、キッシンジャーを呼ぼうという話があつたんです。高すぎて駄目で、シユミット「元西独首相」に変わったんです。シユミットは、値切つて五五〇万だつたそうです。値切つたそうです。

松野 それだけの価値はないですね。細川はさすがに「縛られるのいやだ」と言った。「まだ復帰する望みがあるのか」と言われたそう。それでいま陶芸をやつていゝんだ。それで「壺中居」といゝ、骨董屋で一番古いのが日本橋にある。そのビルの一階を細川に提供して、自分の作品、八十ぐらいあつたでしょうか、ほとんど茶碗ですが、その展示会があつたので、初めて行つた。ものすごい名器だ。黒いらく茶碗なんていゝのは、素人が見ても素晴らしい。

「どうしてこんなに上手になつたんだ」と聞いたたら、「もともと子供の時好きじゃなかつた。暇だから、二年、先生についてやつた。それだけです」といゝ。実に評判がいい。六月から京都でもやるという。その筋では大した評判だ。

別室で、彼の焼いた茶碗でお茶をいれてくれた。「ところで細

川君、私は作法を知らんけれど、どうやって飲めばいいんだ」と聞くと、「もう自由に飲んでください。私は裏千家も表千家もきょうだいが行っていますから、親類です。古流も私の姪が行っています。お茶は、私の家族きょうだい、妹、いとこが行っているものだから、私はどの流儀にも入らない作法をやるんです」という。それが細川流と言えば、細川流だ。「だから松野さん、流儀に入らなくてもいいんです。流儀に入らない飲み方をする方が価値があるんです」という。

それを聞いて哑然とした。なるほど作法なんていうのは下のやつがやるので、上のやつは作法がないことが作法なんだ。「いやあ、君にいいことを聞いた。おれも今日から細川流で行こう」といった。その大胆なこと。こうやって「茶碗を」回していると、回すのは家来が回すんだ、殿様はまっすぐ飲めばいい。秀吉に対して申し訳ないから、家来が回して飲むんだ。秀吉はまっすぐ飲むんです。細川も、「私もまっすぐ飲むんです。どの流儀にも関係ない」という。その話を聞いて、私はワツハワツハ笑った。

似た話を私は、参議院の團伊能から聞いた。おととい死んだ團伊玖磨のおやじだ。團というのは有馬家の久留米出身だ。團伊能が参議院に出た。経歴を見ると、東大美学教授と書いてある。「團さん、美学って何ですか」と汽車の中で聞いた。「松野さん、美学というのは好きということですか」「どういうことですか」「あなたは何が好きですか」「バラがいい」「それならバラがあなたの美学です。私は蘭がいい、私はコスモスがいい、みんな各人、好きだというものがその人の美なんだ。みんなが同じものを言わない。好きな人は個々でいいんだ、美学は強制するものではない。だからいくら涙を垂らした鼻ぺちの女でも、おかめみたいな女でも、あなたが美人だと思えば、あなたの美学はそれに当てはまる」「そうですか、私はいろいろ女を見るけれど、目移りして困るんだけれど」(一同笑い)「それはあなた、さまよえる美学です。

そのうち、死ぬ前に一人に決まりますよ。美学の放浪者だ」という。美人の基準が変わるんだ。あなたは放浪者だという。

伊藤 終身放浪者かもしれない(笑い)

松野 それと細川のいまのお茶の話、どちらも桁外れだが、非常にわかりやすい。お茶の作法もわかったし、美学もわかった。私は一生さまよえる美学だ。私は薄く広くいろいろな人に会う。会うことが私の仕事だ。会うことによつて勉強するんだ。自分で勉強してもわからない。自分でわからないところは、誰かに会つて聞こうと思う。私は参議院にいた佐々友房。

伊藤 たしか友房の息子の弘雄ですよ。朝日新聞にいた。

松野 それだ、佐々友房の息子の弘雄だ。それが緑風会というのをつくつた。それは熊本出身者だからね。私たちが若い政治家を集めてよく話をしていた。非常にあか抜けした学者で、明るかった。それで、「緑風会は竹林の七賢というので、私は緑風」とか言つて、いまでいえばニューリーダーでしょうね。いい男だった。いい男は早く死ぬんですね。私は佐々には政治学とかを習いに行つた。参議院は暇だから、佐々さんと議員会館で食事しようとお昼に誘つたりした。非常にあか抜けした男だった。これなどが生きているともつと政治が違つたらう。いまのような時代を先取りしていましたね。

伊藤 熊本の人脈というのがあるんですね。

松野 「政党は固まって進むと安寧、安心、政局の安定ということ、どうしても進まなくなる。だから私は政党に入らない。緑風会はみんな一匹狼です。松野さん、犬を見つけるときは一匹狼を見つけるでしょう。群をなしている犬にはろくな犬がない。駄犬が多い。一匹狼をつくらうと思つて私は緑風会にした。だから緑風会には党議決定はない。見てください。一匹狼の中にいい政治家がいる。英雄豪傑はみな一匹狼です。群れをなすのは金魚の

フンです。一匹狼の中にいいものを求めなさい。それで私は政党に入らないんだ。政党に入るとみんな押し込まれる。数で押し込まれる。そうじゃないんだ。いいものはみんな一匹です。発明家をごらんなさい、一人で発明するんだ。みんなで発明するのでもない。一人で発明して、みんながそれについてくる。英雄豪傑みなそうです。それが緑風会だ」という話をしましたね。

その話を聞いていたら、小泉は一匹狼なんだ。まさに佐々さんの言った申し子が、いまの小泉でしょうね。小泉は異口同音はしないんだ。賛成の時は黙っている。「賛成」とも言わない。反対の時は一人でも反対する。だから彼が黙っているときは、賛成か、あるいは興味がないことでしょう。いろいろな会議で見ていると、黙っているんだ。言い出すと一人でも言う。言わないと黙っている。「君は意見はどうだ」と聞くと、「ええ、けっこうです」、それで終わり。

だから彼は友達もいなかったし、孤立していた。一匹狼で、一人で勉強し、一人で遊び、あまり連れ立って酒を飲みに行くこともなかったでしょうね。宴会でもスツと帰ってしまう。そういうところが変人だったでしょうね。佐々の言う、緑風会の一匹狼という思想の中に、いいのが出て来たと思う。最近小泉を見ると、佐々を思い出す。あなた方が学生を見ても、みなと一緒にいるより、一人でぼつんとしているのに興味があると思う。何かやりださんか。やはり一匹狼の中には、佐々が言ったような、いいのがあるんです。デパートの展示品じゃないんだ。一品品（いっぴんひん）の中に名器を見つけたんだ。それが緑風会なんだ。だから党議決定なんて考えないという。

伊藤 一匹狼が少なくなったから、緑風会がつぶれたんです。

松野 その通り。

伊藤 せっかく育成しようと思つて、育成しきれなかった。

松野 しかしその思想は、いまの小泉に。小泉は、三党与党は

かりを考えていない。できれば多くのものと一緒になりたいというのは、まさに緑風会思想でしょうね。一匹狼の考えでしょうね。

■選挙制度調査会長とつづ

伊藤 前回あった選挙制度調査会の話なんですが、ちょうど先生が選挙制度調査会をやっていた頃に、テレビの討論会が始まるんですか。

松野 あれは私の時に始めました。選挙調査会でいろいろやっている、自民党は年寄りが多いが、年寄りの代議士連中が、立会演説をやめてくれという。「労力が無駄、それから立会演説で若手と一緒に立つと、お客は自分の方を集まってくるけれど、聴衆の空気は若い者に拍手が多い。年寄りは客集めに使われるだけだつたらん、これをぜひやめてくれ」という希望が、中堅以上の年寄りから来たわけだ。立会演説会というのは、各党ずつとありましたからね。しかも立会演説会は時間を制限して選挙でやる、何月何日という予定を勝手に決めてやるものだから、議員の自由な選挙運動はできなくなる。選挙のスケジュールに合わせた選挙運動しかできない。これもよくない。といって、欠席すれば欠席したでまた非難を受ける。だから何の意味もないから、自由選挙ならもっと自由にしてくれという。それで年寄りからは、「私たちは看板だけならいいけれど、来た聴衆は若いやつに拍手する。共産党のためにまで人集めするなんて、そんな馬鹿なことがあるか。共産党の演説会なら五、六人しか来ないのに、立会演説会だと三百人も五百人も来る。それは何のことはない、共産党を利するだけじゃないか」といわれる。

そういう議論から、立会演説会をテレビでやるうじやないかというところで、NHKと交渉をした。ところがローカルなものだけ

ら非常に困るというんだ。東京は、埼玉と神奈川と放送が一緒だ。それを分けることは難しいとか、いろいろな意見が出ました。結局最初は、五分半にした。今は七分半ですが、前後に紹介するから五分半という時間をとってくれた。「五分半は短いぞ」といったら、「どんな歌舞伎の役者でも、一人で五分半しゃべる芝居はありません。二分、三分の対話はあるけれど、一人で五分半というのは、松野さん、大変な時間ですよ。対談じゃないんだから。テレビ人から見ると、一人で五分半しゃべることで十分だ。そこで政策を言えないという方が間違っている」という。

伊藤 五分半というのはけっこう長いですよ。

松野 その話をNHKは真つ先に受けてくれた。ただし、夜になつたり朝になつたりする時間は我慢してください、ということになった。そうしたら民放も、ということになった。あれは出演料と広告料は政府が払うんです。NHKが基準を出したのだから、その基準で民放にいったら、民放も受けた。まる五分半で、電波料がせいぜい十四、五万だったと思いますね。たしか十四、五万で、候補者はだいたい二千人ぐらいいますから、二千人と十四、五万とを考えてみたら、民放も採算が合うというんだ。自分で作らなくていいんだ。構成料とか制作費がゼロだから。たしか私の最初の時は十四、五万だったと思います。それで民放もやるといふ。逆に民放の方が希望があつて、自分の方にたくさんくれ、なんて言われた。

そこで民放を合わせて、NHKを入れて、一人五回ぐらいいしゃべつていいわけだ。どこをやるかは候補者が決める。いま、たしか五回ぐらいいやつているはずですよ。だいたいNHKが一番多いですかね。NHKで二回、あと民放で三回ぐらいいですね。今それが七分ぐらいい延びているはずですよ。あれは選挙費用から電波料を払うんです。NHKにも払つているし、民放にも同じように払つている。そういうことで、選挙の費用を切り換えた。それは私が

選挙調査会長のときです。だから今でも数字を覚えている。

伊藤 ただ、立会演説会もだんだん人が減つて来たんじゃないですか。

松野 減つてきました。

伊藤 集まつて来ないんですね。

松野 集まらなくて、少なくなつてきましたね。最初の時代よりはだいぶ減つてきた。長くやると、あまり聞きに行かなくなつた。それで私が選挙調査会長のときに、テレビ放送を始めたのを覚えていいます。

伊藤 「政見放送」ですね。

松野 テレビの政見放送、候補者紹介。

伊藤 それで立会演説会はなくなりましたか。

松野 立会演説会はなくしました。そこで一番困つたのは、売名候補が出てくることだ。それで、供託金を上げたはずだ。テレビ放送の実費を政府がもつ代わりに、供託金を上げたんだ。売名を防ぐためだ。その前は百万円ぐらいいだつた供託金を、三百万ぐらいいに上げました。それでもまだテレビ放送から見ると、三百万やそこらでは安いんですよ。名を売るだけだ。いまだにずいぶん出ます。第一回の時にはオカマみたいなのが出ましたね。それでも東京全部で八千票か一万票ぐらいい取つたんじゃないですか。だからオカマが一万票ぐらいいあるんだな、と思つた（笑い）。それは覚えているな。

伊藤 あれはNHKで映像を作るわけですね。

松野 その局で作るんです。

伊藤 同じ局でやる場合は同じものを流すんですね。

松野 同じものを流す。一回やつておけば、そのまま流す。

伊藤 じゃあNHKと民放ではまた違うんですか。

松野 別です。NHKのは、民放ではやりません。民放は民放に行つて録画する。受付期間がありますから、いつ行つてもいい。

二回なら二回、同じものをやってくれる。変えてもいいんです。二回撮っておいて、これは一回目、これは二回目としてもいい。それは自由。それは録画ですから。

伊藤 どうせ、セットも何も要らないわけですからね。

松野 要らないんです。それで一番困るのは、二回までは撮り直せるけれど、三回はいけないとかなっている筈です。撮り直しは二回まではいい。そうしないと、何回も何回も、十回もやられたらたまらんといい。だから二回までは撮り直しするけれど、三回以上は駄目と選挙法で決めているはずですよ。

伊藤 ご自分でも録画されたことはあるでしょう。

松野 ありますよ。

伊藤 あれは何分と決まっていると、その中に収めるというのはなかなか難しいんじゃないですか。

松野 いやそうでもない。もちろん一週間ぐらい時間を計ってやりますからね。だいたい私たちは一分前まではいろいろなことをしゃべるんです。残り一分でまとめるまで覚えておけばいい。

伊藤 そこが難しいですね。

松野 一分を、ちょうど五十九秒ぐらいで止まるようにする。その最後の一分が問題なんだ。前はいろいろしゃべっている。だから四分まではいいけれど、最後の一分間だけを私は覚えておくわけだ。最初は多少違っても、まとめさえ良ければいい。最初の三十秒と、終わりの一分だけきちんとしておけばいい。話は最初と最後が締められればいいですからね。途中はいい。あなた方の授業も真ん中へんは忘れたっていいんだから（一同笑い）。最後のところだけ覚えておけばいい。

伊藤 でも普通われわれが講義する場合には、あと一分ぐらいだな、と思ってやりますけれど、テレビの場合はあと五秒、四秒、三秒……と出て来ますからね。

松野 そうそう。だいたい私は一分のところだけ自分で計って、

録画する前に四、五回練習していきます。だから一分ということになれば、ああここでまとめだと思って、ここはスラスラと出る。それで五十五秒ぐらいで、ピタッと終わる。

佐道 先生でも練習されたわけですか。

松野 それは最後の一分だけ計った。それで時間が余ったときは、じいっと頭を下げていればいいんです。五秒ぐらい頭を下げていると丁寧に見えるわけだ（笑い）。最後の五秒ぐらい余ったら、ずっと頭を下げていられる。それは画面に映るから、その辺は役者だよ。五十五秒ぐらいで、あとの五秒は頭を下げる。それが八秒になっても構わない。こんなにお辞儀しなざるかということになる。こっちは時間が余ってお辞儀しているんだけど、見ている方はずいぶん丁寧だと思う（笑い）。

伊藤 選挙制度調査会は、この前は佐藤さんのところに行くパスポートみたいなものだというお話でした。実際に行って、何を話すんですか。

松野 選挙調査会のことより、ほとんど党内の噂ですね。こんな噂がありますよとか、あいつはこんなことをしてますよとか、あいつは佐藤内閣けしからんと言っていますよとか、あいつは案外あなたを褒めていますよとか、そんな話です。

伊藤 そういうことは、どうやって情報を集めるんですか。

松野 やつぱりそういうのは、私たちの話でしょうね。佐藤は案外、人の噂というのをよく耳にしましたね。案外政治家は人の噂を耳にする。あいつは褒めていましたよ、社会党の誰々も褒めていましたよ。「民社党の池田禎治なんていうのも褒めていましたよ」というと、「池田は褒めていたか」とか、「あいつは前からあなたを嫌っていますよ」「そうだろうな、質問もあいつはいやだったな」とか、そういう噂です。だからまとまった話じゃないですね。

伊藤 でも党内のいろいろな情報は――

松野 一番よくいったのは、総裁選挙の前、佐藤三選をしましたからね。三木「武夫」が出たわけだ。三木は必ず佐藤に立ち向かう。だから「三木がこんなことを言っていますよ。三木は今度出ますよ」という話をした。だから、無競争にはしなかった。三木さんは常に出た。それが二百票対五、六十票でもやっていますからね。

伊藤 佐藤さんは三木さんが嫌いでしょう。

松野 嫌い。三木さんも佐藤が嫌い。「三木さんは佐藤さんのことを」ああいう官僚政治家、権力政治家と言っていたな。「民主主義は国民のもんだ。あいつは権力者の政治だと思っている。民主主義を間違えている」というようなことを言っていた。その頃は三木さんの悪口を言って、佐藤のところにご注進に行っていたけれど、三木内閣になったらすっかり私は逆になった（笑い）。すっかり逆になって、佐藤内閣は悪かったと思うようになった。今の小泉がそうですね。橋本内閣で厚生大臣をしておいて、今になったら橋本内閣が悪かったと思っただけでしょう。攻守とことろを変えればそんなものです。人間が変節しているんじゃない。そういう立場になると、そうなってくるんだ。それは北風が吹くときと南風が吹くときと違うように、人間というのは変わる。変節といえば変節だけれど。

有馬 松野先生自身の情報収集というか、その手法は。

松野 それはよく私の仲間が、保利「茂」とか坪川「信三」とか、塚原「俊郎」とか、細田吉蔵とか、いろいろな人間がいるわけだ。それらとはほとんど毎日会いますからね。「今日はきれいな女ができたから銀座に見に來いや」「じゃあ行くか」といって行ってみたり。それでいろいろ話をする。やはり仲間づきあいから情報を得ている。

伊藤 それは派閥を超えて、ですか。

松野 派閥を超えて、仲間同士。それから委員会の隣同士とかね。

どうせ委員会なんか聞いている人はいませんからね。べちゃくちやしやべっている（一同笑い）。

佐道 選挙制度調査会長をなさっていることで、日本全国の選挙区の事情とか。

松野 選挙調査会長のときは、細川隆元とか、読売で亡くなった小林与三次とか、もう一人新聞記者、小汀利得、そういう人たちの話をいろいろ聞きますね。

伊藤 そのつき合いもありますね。いろいろなつき合いが出て来ますね。議員の中の委員会仲間、これもかなり緊密でしょう。

松野 委員会仲間も緊密。私は農林委員と予算委員でしたからね。それからほかの委員会はわからないが、彼らが出てくる。今日の委員会は面白いことがあったよ、と話し合ったりする。各委員会に出ていても、昼か夜かに必ず会いますからね。「夕飯を食うか」とか、「今日は暇か、じゃあどこかのすき焼きを食いにいこうか」というのが、ほとんど毎日ですからね。

伊藤 やっぱ飯を食って情報を集めるというのが普通のやり方ですね。

松野 人間というのは、褒めることはないよ。悪口がほとんどだ。

伊藤 それはおいしいから（笑い）。

松野 悪口の方がうまいんだ。学者も同じでしょう。

小池 同じです。

松野 悪口ほど、うまいんだ。ほとんど悪口です。悪口の中に噂が出るんだ。あれは善人だよ、ああそうか、で終わりでしょう。

伊藤 善人と言われたら、馬鹿と言われたのと同じことだ（笑い）。

松野 善人は噂にならない。悪いやつじゃないと噂にならない、話題に乗らないんだ。

伊藤 話題に乗らないのはしょうがないですね。

松野 話題に乗らないのは存在価値がゼロでしょう。話題に乗ればまだいい。私たちがいろいろ新聞で悪口を書かれる方がまだ

いいんだ。残るから。悪口も書かれない政治家が一番困る。悪口でも言ってくれば、存在がある。悪口も存在だ。

伊藤 それで内閣を交替して、急に名前が出なくなった人はたくさんいますね。

松野 野中なんて一字も出ない。この二年間、カラスが鳴かない日があっても、野中という字が出ない日はなかった。どうですか。カラスは鳴いても、野中は出なくなりました。こんなものだ。そうしてみると、あの男は虚勢を張っていたな、という感じですね。ただ新聞に出ているだけで、人間は同じなんです。行動も同じなんだから、それで新聞に出ないということは、飾った人気だな。伊藤 松野さんは、野中さんなんかとはおつき合いはなかったんですか。

松野 全然ない。

伊藤 全然、ですか。

松野 「野中が」大臣になったときに名刺を持って来ましたよ。村山内閣で自治大臣になった。そのとき私に初めて名刺を持って来た。いやあ、お名前は聞いていたけれどと言ったけれど、その時初めてだった。飛行機の中で、「いやあ、お名前は聞いていたけれど、一度お会いしたかった、よかった、よかった」と言ったけれど、自治大臣の名刺をもらった。ちょうど熊本に行く飛行機の中で、彼も同じ飛行機で、私はたぶん野中だろうと思っただけれど、こっちからものを言うほど親しくないから。

佐道 これほど急速に失権というか、出なくなると、なかなか復活は難しいものですか。

松野 難しい。政治で復活できる者は、名前が一回落ちてでも、どこに残るんだ。どこかに週に一回ぐらいは彼の発言が出る。今まで落ちていたけれど、山崎「拓」の記事はときどき出たでしょう。あれを見てご覧なさい。彼は一年半ぐらい反主流で、何もしなくても、山崎の財政問題についての意見とか、かすかに出るん

だ。ということみんな、世のものが山崎の存在を見ているんだ。野中を出てこない。反対する時以外出てこないでしょうね。ガソリン税反対とか言うときしか出てこないでしょう。公平な議論は出てこない。橋本の意見も出てこなくなっちゃった。

伊藤 完全に過去の人になったんですね。

小池 かわいそうですね。

佐道 橋本派はもうほぼ終わりということですか。

松野 まあ、橋本派は一所懸命会合をやっているんですね。出る者が少なくなっている。定員は一〇四名だけれど、おそらく週二回ずつやって、二回で六〇集まらんでしょうね。私は六〇集まらんとする。たいてい派閥は週二回、火曜と金曜とかに集まるのが常識ですが、おそらく集まらないと思う。

■ 沖縄返還交渉に関与

伊藤 昭和四十六年に、先生はベトナム、サイゴンに行っておられますか、思い出されますか。

松野 覚えています。それは、アメリカが後押しして新政権ができました。

伊藤 グエン・バン・チューですね。

松野 グエン・バン・チューでした。そのときにアメリカの代表が（伊藤 コナリー財務長官ですね）コナリー財務長官だった。佐藤内閣だった。佐藤から、「コナリーが行くからおまえは行ってこい」と言われたんだ。何故かという、コナリーはアメリカ政府で有力だ、問題は沖縄問題だ。沖縄返還の交渉でしょう。コナリーが行くからおまえは行ってこい。佐藤は沖縄返還については、核だけには敏感だから、核無し核抜きで返還してくれという希望をもっている。それを言ってこい、というんだ。

それで私は祝賀会に行く名目で、コナリーに面会を申し出た。そのときの大使はたしか東郷「文彦」という人だった。東郷もそれを承知していたから、私が行ったら、すぐコナリーが来る。一日しかいませんから。その日にサイゴンのアメリカ大使館に行つて、東郷と一緒にコナリーに会つた。そして「実は佐藤から、沖繩返還のことを頼まれてきた。ここは核抜きで返還をしてくれ」と言つたら、コナリーは「それはおれの担当じゃない。しかし今の趣旨は、すぐにアメリカの担当国務大臣、アメリカ政府に伝えておくということを佐藤に返事してくれ」と言つた。その四、五日後、コナリーは日本に來まして、佐藤と直接会いました。佐藤はちよつと私と同じことを言つた。私はその露払いで行つたわけだ。

伊藤 前触れみたいなものですね。

松野 そのために私は行つたんだ。

伊藤 どういう資格で行かれるんですか。

松野 特命全權大使。

伊藤 特命全權大使ということはお天皇から。

松野 そんな天皇からのことじゃないから、特命全權大使じゃない。ただ特命大使でしょうね。たいしたものではなかった。それでも外務省が秘書を一人つけましたよ。それで東郷に会つたら、いきなり千ドル出すんだ。「おれは旅費をもらつてきているよ。どうしてこれをくれるんだ」といつたら、「これは外務大臣から渡せと言われた金です」という。ああこれが機密費だと思つた。「どうぞ滞在中にお使いください」ということだった。開けてみたらアメリカ・ドルで千ドルあつた。

東郷君、どうしてこれをおれにくれるんだと聞いたら、これは外務大臣から松野さんに渡せと訓令が来ているんです。お受け取りくださいという。はあ、これが機密費だと思つた。ついできた外務省の事務官が一人いましたから、事務官に二百ドルやつ

た。あそこは買う物がないんです。何も土産物がない。漆塗りの絵ばかりだ。そんなものは五十ドルか百ドルだ。何もないんだ。

それで二日間いた。二日間祝賀会があるんだ。全部で二百人ぐらい集まつていて、一つのテーブルに十人。コナリーさんも私のテーブルだった。英語とフランス語だから、話ができない。そのときは通訳がいませんから、困つて、つまらんと思つていたら、韓国の代表がいたんだ。韓国の党の幹事長です。日本の明治大学を出ているんだ。それが夫婦で来ていた。「松野さん、日本語で話しましょう。この連中はわからんから大丈夫ですよ」という。よかつた（笑）。「韓国の兵を見に来るんです。韓国の兵は四万人来ている。アメリカ人より強いんですよ」「どうして強いんだ」「アメリカはアイスクリームとサンドイッチがないと働かない。私のは握り飯一つでいいんだ」という話とか、「韓国の兵隊は非常に強い、日本の歩兵操典を全部真似して作つたんですよ。いきなり軍はできないから、日本の歩兵操典を全部韓国語に訳して、気をつけの時は角度が四十五度。前を習え、左へ習え、同じものを訳したんです。だから日本の軍隊がそのまま、韓国で生きているんです。だから強いんです。それで握り飯です。だからコナリーに、アメリカの兵隊の費用の四分の一でおれたちはやつている。だから韓国の兵隊をもつと使つた方がいいんじゃないかと明日言うんです」という話をしていた。それでわかつたんだ。歩兵操典を全部訳した。四十五度だそう。日本の歩兵操典が韓国の軍隊の基本なんだ。

佐道 旧日本陸軍の伝統は陸上自衛隊には残らず、韓国に残つた。松野 韓国に残つちやつた。自衛隊は英語でやるけれど、あそこは韓国語でやるんでしょうね。思い出しました、金鍾泌です。明治大学を出て、奥さんも日本語ができる。この人がいてホツとした。四時間、四時間、延々と二日間あるんですからな。

佐道 韓国政界の大物ですね。

松野 たまたまその夫婦がいて、私はホツとして、四時間のうち二時間は金鍾泌との話。それで韓国の話を書いて帰った。それからアメリカの軍隊は弱いんです、すぐ逃げます。私たちは逃げない。それは日本の軍隊をご覧なさい、強かったですよ。あれが生きているんだという話。費用も握り飯でいい。彼らは肉がなければいけない、ステーキがなければいけないという。費用は四分の一しかからない。それがサイゴンに行った使命だった。二日間退屈だと思っていたけれど、金鍾泌に救われた。

伊藤 核抜きというのは具体的にどういうことですか。

松野 日本に返還するその瞬間だけは核抜きにしてくれということだ。返還後アメリカ軍がどうこうと、そこまでは言わない。返還の時は倉庫を見せてくれというのが佐藤の要求だ。アメリカは、そんなことはできないと言う。返還するのは書類上であって、倉庫の中まで、なんで見る必要があるんだという。居抜きで返すんだからという。こっちは居抜きじゃない、立ち会わせてくれという。その問題なんだ。返還ということは、アメリカから日本に返ってくる。倉庫の隅まで日本に検査させてくれ。そのときは核はないようにしてくれというのが佐藤の希望だ。アメリカは居抜きで返還するんだから、今でも核はないと言ってあるんだからいいじゃないか、という言い方なんだ。核はないと言ってあるんだから、それでいいじゃないかという。実際はわからなかったですね。

伊藤 まあそうですね。いちおう形としては――。

松野 形は核抜きということを主張し、核抜きという形で返ってきたんです。しかしその証拠や立会人はありません。佐藤はそのことを年中要求していました。核抜きだ、核抜きだと。私はそれを言いに行った。結局、核抜き返還ということになったでしょうね。米軍は、核抜きか核抜きじゃないかのコメントはしませんでした。日本政府だけの発言で済んでしまった。

伊藤 アメリカも何かやっているんじゃないですか。

松野 いや何もしなかった。核のことは言わなかった。

伊藤 それは言わないことになっているんですよ。

松野 核抜きとは一言もいわないし、核ありとも言わなかった。日本政府だけの独りよがりだったようですね。

伊藤 じゃあ日本政府は言ってもいいよ、ということですね。

松野 そういうことでしょうか。結局、それはそのまま。その話を私はコナリーさんに言った。それが私が行った第一理由だった。それで機密費千ドルをもらった。外務大臣から訓令が来ておりますからお受け取りください、と言われましたから。

伊藤 じゃあ千ドルは残りましたね。

松野 残りしましたよ。二百ドルしか使わない。日本にそのまま持って返ってきたでしょうね。どこにも使うところがないんだ。

伊藤 台湾に行かれたのもその頃ですか。

松野 台湾はその後、いや、台湾はもっと前だ。国連の時だ。佐藤のために、台湾と沖縄に行ったんだ。これは国連の代表権問題です。国連の代表権問題で、私が佐藤のところと呼ばれて、「君のおやじは張群さんと親しかった。また蒋介石さんとも親しかった。おまえが行けば会うだろうから、おまえ行ってこい。これは外務省にも言わないから（「外相は」福田赳夫でした）、おまえ個人で行ってこい」という。官房長官が保利茂だった。佐藤と官房長官と二人がいて、「行ってこい」と言われた。「政府は何も連絡しないから、おまえのルートで行ってこい」という。そう言ったって私も突然で、向こうに行つてからでは遅いから、東京の大使館（台湾は当時は大使館だった）に行つて、これこれこういうわけで行くから、張群さんにお会いしたいという連絡だけしておいてくれと言って、私は行つたんだ。

伊藤 このときは資格はなしですか。

松野 資格はなし。個人で、旅費もおまえが払えよといって、佐

藤と保利の前で、ちようど百万円くれましたけれどね。これも機密費だったかもしれない(笑い)。「これは飛行機の手配も全部自分でしていい、政府は一切関係せんからな」と言われた。

伊藤 お金だけくれたんですか。

松野 それも百万円だけですからね。

伊藤 百万円じゃ足りないですか。

松野 足りない。何日いるかわからんから、予定が立たない。会えるのかもわからない。会うまで私も頑張らなければいけません、と思った。一週間か十日かかるでしょうね。

伊藤 お父さんは親しかったかもしれませんが、松野さんご自身はお会いになったことはあるんですか。

松野 私はないんです。それで、その連絡をしたが、会えるかどうかからん。向こうへ行ってから話をしようと思った。張群さんにも会えるかな、と思っていたんです。そうしたら驚いたことに、張群さんが飛行場に来てくれたんです。それでいきなり自分の自動車に乗せて、圓山大飯店に連れて行って、「いや、どういうことですか」と聞いたので、「代表権問題で佐藤が困っている。長い間の尊敬するルーズベルトもスターリンも死んで、あの時の三大巨頭で生きているのは蒋介石さん一人だ。ヤルタ会談ですか。三人の英雄の中で生きているのは蒋介石さん一人だ。世界の情勢は一番詳しいんだから、蒋介石さんに会って、代表権問題についてご意見があるなら聞いてほしいという話だ」と言った。そうしたら一所懸命聞いて、昼一緒に長々と飯を食って話をした。そして「ちよつと二、三日お待ちください」と言われた。

そして二日ぐらい待っていたら、張群さんが朝来て、「今日、蒋介石が会うといましたから、今からすぐ行きましょう」という。二日ぐらい待って、朝八時頃来て、十一時にそのまま連れて行ってくれた。大きな山の上の離宮に行った。大きな部屋に、蒋介石と少佐か何かの通訳と、張群さんと私の四人だけだ。大使館

はもちろん来ないですからね。その軍人の少佐は日本語の通訳でした。その人がだいたい通訳してくれた。そして、「話はわかった。どうぞ佐藤さんに言ってください。政府はときどき間違っています。国民は間違わない。台湾の国民も日本の国民もいま非常に親密です。外交というのは国民が決めるものだ。政府はその上に乗っているだけでときどき間違えます。佐藤政府がどういう決定をされても、私の意思は変わりません。日本と台湾の親交の気持ちは変わりませんから、佐藤政権がやりやすいように、代表権問題は賛成されようと反対されようと結構です。私たちの気持ちは少しも変わりません。どう決定されてもいい」という。

私は、おそらく代表権問題では台湾を支持してくれと言われると思っていたわけだ。一切言わないんだ。それをすぐメモして、佐藤に渡した。佐藤はこれを見て、「えらいね、さすがだね」と言った。「蒋介石は支持してくれとは」一言も言わなかった。佐藤政権がどうお決めたにしても、お都合のいいようにお決めください。しかし日本と台湾の親善の気持ちは少しも変わりませんと言おう。佐藤は本当に驚いて、それですぐ台湾支持に決めたんだ。その一言で決めた。恩に報いるには恩をもつてするという。福田外務大臣は知らなかったんだ、朝まで。私が行ったことも知らないし、その報告も知らない。

伊藤 新聞記者にも嗅ぎつけられなかったですか。

松野 嗅ぎつけられなかった。一人も気がつかなかった。大使館の日本の大使が、翌日ホテルに来ました。「何かご用で」「いやおれは一人であつたんだ。台湾の姑娘(クニーヤン)でも見に来たから、あまりそばに寄るなよ」と言っていて私は断った。ところが、蒋介石に会って帰ってきたら、ワツと来た。

伊藤 じゃあわかつたんですか。

松野 わかつたんだ。面会簿でわかつた。台湾の蒋介石に会った

後、ワツと来た。

伊藤 それは日本人記者ですか。

松野 日本人記者も来たし、台湾も来た。「何事ですか」というから、「いや私の父のことで、非常にお世話になったから、父の伝言を話に来たんです」と言って、一切言いませんでした。それだけだ。だから台湾にいる日本の大使も知らないんですよ。最初は私は遊びに来たと言った。後では私の父の話をしに来た、蒋介石さんと親しかつたからと言った。それで、とうとう語らずじまい。それが佐藤が私を使った二つですね。

伊藤 ほかにもどこかに出かけられましたか。

松野 今のところその二つでした。アメリカには私は人脈がないから。そういう人脈をよく使うのが佐藤は上手だった。彼はそういう人の噂を聞いて、人脈を確かめて、突然呼ぶ。「君のおやじは蒋介石さんと親しかつたという話を聞いた。おまえ、会ったことあるか」「ありません」「行って、こういう話ができるか」「できるかどうかから」「まあとにかく遊びに行つてこい、旅費はおれが出すから」という話で、向こうまで行けるかどうか半信半疑だった。その蒋介石の言葉には、佐藤も、「大人(たいじん)だね、やっぱり違うね、大人だね」と何遍も言っていた。『佐藤日記』の中でもそのことは感じられたでしょうね。そんなに佐藤が喜んだというか、感激したのは少ないでしょうね。その後が、コナリーと会ったときの話だ。

■ 田中派旗揚げ

伊藤 佐藤さんのところにしょっちゅう行って党内情勢を伝えていて、田中派がだんだん形成されているというのは、あまりよくわからなかったですか。

松野 いや、よくわかっていたんです。

伊藤 わかっていたんですか。

松野 わかっていたから、そのときは年中、ひっきりなしに、「佐藤に」どうするんだ、どうするんだと言っていました。そのとき田中は通産大臣でしょう。福田が大蔵大臣か。福田も田中も閣僚でしたからね。アメリカでの日米繊維交渉に、田中と福田を連れて行った。それがたしか二月、三月頃ではなかったでしょうか。そのときに話をすると思っていた。二人の調整をすると思つた。私も「どうするんだ。田中は今度旗揚げをするぞ。どうするんだ、どうするんだ」と言つた。「まあ、おれに任せろ」と言っているから、私はその間に二人を調整して帰つてくると思ひ込んでいた。

そうしたところが、なんだかおかしい。それで引退の発言を佐藤がしてしまう。沖縄返還後、自分は引退するという発言をする前に調整してくれ、と私たちは希望していた。「いや任せておけ、機会を見るから、機会を見るから」と言っていたが、とうとう機会を見る暇がなかった。聞いてみたら、田中が寄りつかないんだ。そうだ。いくら佐藤が呼んでも、はいはいといつて来ても、ほとんど落ち着かない顔をして、寄りつかないんだ。とうとう話できないままになった。それは寄りつかないわけだ。田中の方は戦鬨を整えていますからね。寄りついたら、かえつて崩れてしまう。福田の方は何も準備ができていない。

結局、佐藤派の中にあの時は九十人ぐらいたでしようね。九十人の中で、十七、八人、私たちが福田に回つたわけだ。佐藤派の九十の中で十七、八人が反対で、あとの七十何人が田中に行つたんですね。

伊藤 佐藤内閣ができた後も、佐藤邸での五奉行「保利茂、田中角栄、橋本登美三郎、愛知揆一、松野頼三。西村英一、竹下登を入れて七奉行ともいう」の会合というのはあつたんですか。

松野 年中やっていました。

伊藤 それとは別に、周山会もやっていたんですか。

松野 やっていました。

伊藤 周山会の会合も週に二回あるわけですか。

松野 週に二回ありました。

伊藤 それは内閣の時代もそうですか。

松野 内閣の時代もそう。だいたい年寄りで、橋本登美三郎がだいたい周山会の座長みたいな顔をしていましたね。あれは第一回の官房長官をして、やめてからですね。それが座長みたいなことをしていた。だいたい十時から三十分ぐらいかな。

伊藤 それはどこでやるんですか。

松野 今でいうと、特許局の近くにありました。東急ビルか何かの八階か何かを全部借り切って。今でもあの建物はあります。汚いけれど、あの頃はまあまあだったんですね。特許局の横です。溜池の通りの左側にある。十階建てぐらいの建物でした。

伊藤 朝ですか。

松野 そこに椅子を並べると八十人ぐらいは入れましたかね。

伊藤 全員が来るわけではないんですね。

松野 だいたい椅子が足りないと思いますからね。若いのはみんな立っている。

伊藤 三十分ぐらいで終わるものなんですか。

松野 三十分ぐらい。いろいろな意見があると。

伊藤 それは総裁も出ているわけですね。

松野 総裁は出ていません。それをまとめて、橋本登美三郎が、「今日の周山会ではこんなことがあった」と報告に行くだけです。

伊藤 あとで田中派が独立していくときには、周山会は――

松野 もう周山会にはあまり来なくなる。彼らは来なくなる。それで別に田中邸で集まったりして、やっていましたよ。田中邸で集まるようになってから、不穏な空気が出て来たわけですね。その

うちに、いつのまにか事務所をつくったりしていてね。

伊藤 だいたい佐藤四選の後ぐらいからですか。

松野 佐藤四選の時に多少動きがありましたね。多少、田中が不満というのをおかしいが、「長過ぎやせんだろうか」とか言っていましたね。三選が六年ですから、四選ですね。四選の時に田中があまり積極的ではなかったな。田中は健康が悪いものだから、やや焦っていましたね。あれはバセドウ氏病の持病があるでしょう。だからなんだかせかせか急いでいたのは、私は健康が理由だと思う。どうも私は、自分の寿命というのか、自分の健康のために急いだような気がするな。佐藤四選の時も積極的ではなかったですね。四選するなら仕方ないな、という感じでした。

伊藤 あの四選にはいろいろ意見があったとしても、大勢としてはそうなっちゃったんですね。

松野 そうなったんだ。田中は、四選するのか、少し長過ぎるんじゃないか、とかそんなことを思っているような感じを私は受けたんですね。

伊藤 ただその段階ではどうなんですか。福田さんという流れになつていたんじゃないですか。

松野 福田という流れにはなつていなかったな。まだなつていない。福田なら、田中の方が準備ができていなかったかもしれないですね。実際に私は、佐藤の後、福田がやった方がよかったですね。でも思っている。それでわざわざ田中に、「おまえやめて、福田につかんか」と言いに行つたのは、そういう気持ちで言いに行つたんだ。

佐道 福田さんは、最後まで佐藤さんか――

松野 禅譲すると思つていた。佐藤は必ず自分をまとめて推してくれる、田中を抑えて推してくれると思つていた。そう思い決めていましたね。また官僚の順番から行くと当然でしょうね。池田・佐藤・福田というのは、官僚の中で言えば当然でしょう。誰

も不思議に思わないですね。

伊藤 流れとして当然だ、ということですね。

松野 福田は争わずに禅譲で、佐藤がまとめて、自分を推してくれるのを待つという感じだった。だから兵を養っていなかった。

伊藤 だけど、田中さんは佐藤派でしょう。福田さんは別の派ですからね。

松野 別の派だけれど、佐藤に一番信頼されていたのは福田でしょうね。福田は政策面で、ほとんど佐藤の国債発行をやったんだから。組めない予算を組んで、経済成長させたんだから。福田は芯から自分の全力を佐藤に注いだけでしょうね。そうでなければ、自分の時まで国債発行は延ばしたかもしれない。自分の時にやっただかもしれない。

伊藤 岸「信介」と福田は――。

松野 岸と福田は一緒です。

伊藤 だから岸、佐藤と来ると、福田となりますね。

松野 池田「勇人」が入りますけれどね。だいたいその流れでしょうね。

伊藤 田中さんは池田派と組んでいるわけでしょう。これはどういうことなんですか。

松野 彼は利口だから、ほうほうに派閥を動いた男ですからね。それで佐藤にただけであって、もともと幣原「喜重郎」から、少数派閥から出て、あっちこっちに来て生き残った男だから、常に二股をかけていたわけだ。佐藤派で尽くしながら、池田にもくっついていて。信濃町にも近づいていたでしょうね。少数派だと常に二つに懸けないと危ない。だから佐藤派と池田派に懸けていた。もうひとつ、一番露骨に出たのは、佐藤と池田の選挙をやったときだ。そのときに田中が困った。総裁選挙をやった時ですね。

伊藤 池田三選の時ですね。

松野 池田に近寄って、池田「内閣の」の大蔵大臣になって、田

中はいろいろ利権を進めて、相当な金脈を作ったでしょうね。だから池田には非常に恩義があるわけだ。そのときに佐藤・池田の総裁選挙になった。身体は佐藤派、餌は池田派で食っているものだから、そのあいだ約一ヶ月間、田中は周山会に来ないんだ。池田の方にも行かないんだ。役所から出ないんだ。大蔵大臣室に自分の子飼いのイノチュウとか瀬戸山「三男」とか、そういう仲間を呼ぶけれど、自分は周山会に来ないんだ。それで「ちょっとおかしいな」というと、「いや、大蔵大臣だから、そう言うな、そう言うな」となだめすかしている。それで彼はは大蔵大臣室で自分の仲間にだけ資金を配っていたようでした。私などは呼ばれませんし。

武田 先生はいつ頃田中さんとお会いになったんですか。もうずいぶん前からですか。

松野 それこそ第一回だから、昭和二十二年に私は立ったから、二十三年からですね。「田中は」幣原さんと一緒に自由党に入ってきた。そのときに私のところに挨拶に来て、三万円か三十万円置いていったから、私は返しに行っただから。

伊藤 その頃からお金を配られていたんですね。

松野 金を配るのは上手でしたね。私が返しに行ったので、こいついやなやつだと思っただけでしょうね。それから、こっちは借りは作りたくない。向こうは、こいつは要警戒だと思っただけでしょう。だから大蔵大臣の時は、とうとう「周山会に」来ないんだ。私が「田中はどうしたんだ？」なんて大きな声で言うと、みんな黙っているんだ。田中派が多いから。「大臣はちょっと触るなよ、大臣はどうせこっちに来るに決まっているんだから」とかいつて、とうとう来なかった。さすがに裏切って、佐藤派を池田に持つていくようなことはしませんでしたけれどね。本人は一切動かなかった。

佐道 そうやって「派内派」をつくったんですね。

松野 それが派内派のスタートでしょうね。

伊藤 それで福田さんと争うんですね。これは相当危ないな、と。松野 佐藤は福田に心を許している。自分には多少警戒を始めたな、と「田中は」思ったでしょうね。その池田・佐藤の争いの時には、本人も非常に困った。私は佐藤に直接、「なぜ田中は来ないんですか、とんでもないやつだ」と言った。「うん」といって割り切れん顔をしていた。私が覚えているのは、一ヶ月間のあいだに「田中が」佐藤のところに来たのは二回ぐらいでしょうね。大蔵省から出なかった。

伊藤 そういう中で、保利さんなんていうのはどういう位置にいたんですか。

松野 保利は七割は佐藤でしょうね。三割は批判的だった。保利の方が政治家としては先輩だからね。あれは一回早く出ていますからね。政治記者だった。彼「佐藤」は官僚から来ている、俺「保利」は政党から来ている、という自負心があった。まあ自分では兄貴分ぐらいに思っていたでしょうね。国定忠治の日光の円蔵ぐらいだろうな。ちょっとそういう感じだった。

伊藤 「保利さんの」田中さんとの関係はどうなんですか。

松野 保利の方が田中よりも威張っていましたね。「おい、田中」と言っていましたから。威張っていたけれど、田中から上納金があったかもしれないですね（笑い）。

伊藤 上納金ですか（笑い）。それでだんだん田中派の方に、周山会のメンバーは流れていったんですね。残ったのは！。

松野 残ったのは田中との金銭的な関係がないやつばかりです。大橋武夫とかね。

伊藤 比較的年寄りの方じゃないですか。

松野 年寄りばかり。

伊藤 年寄りばかりが残っていくわけですか。これは福田さんに

松野 要するに、田中のやり方が体質的に合わないということですね。まあ馬鹿にしていたでしょうね。

佐道 どういうところが一番問題だったんですか。

松野 問題は、すぐ金だ、ということでしょうね。金で相手を籠絡する。命の次に欲しいのは金だぞ、という言い方だった。

伊藤 命の前、ということはないでしょうかね（笑い）。

松野 そういうことを常にいう。「命の次に欲しいのは金だ。金を持っていて、話がつかんわけがない。金で話をつけるのは当たり前だ。その次が主義主張だ」という言い方だな。

伊藤 ある程度政界に通用する考え方かな。

松野 通用する。それに対して！。

伊藤 「田中ごとき者の下につくのは潔しとはしない」と。

松野 そういう感じだ。「田中ごとき」という感じだ。そういうのが十七、八人いたわけだ。

伊藤 その中心は誰ですか。

松野 それは保利茂が中心だったでしょうね。保利は上納金があっても、田中ごときに、という感じだったでしょうね。

武田 一番複雑な関係ですね。

伊藤 いただく物はいただいて。

松野 それによつて説は曲げないということだ。金はもらっても心は許さんということでしょうね。保利というのは、そういう侍（さむらい）だった。

伊藤 大橋さんなんかもその仲間ですか。

松野 大橋は最初から、「田中ごときに」だったでしょうね。その一番の問題は、大橋と同じ選挙区に竹下がおるんだ。竹下登が大橋と同じ選挙区なんだ。

伊藤 そういうこともあるんですね。

松野 あるんだ。その竹下が田中の腰巾着だ。「田中ごときの腰巾着の竹下が」という感じが丸出しだった。酒も飲まないうちに

すぐ言うんですよ。「竹下ごときやつが」と。その親分が田中だから、「田中ごときやつが」というんだ。

伊藤 増田さんもこつちでしょう。

松野 増田甲子七、これも侍だ。田中ごときが、だ。みんな腹は減っても高楊枝じゃないけれど、妙なプライドを持ったやつばかりです。腹は減っているけれど。

伊藤 塚原「俊郎」さんはどうですか。

松野 塚原もそうだ。

伊藤 塚原さんというのはどういう感じの人ですか。

松野 塚原というのは、新聞記者上がりでしたからね。茨城の水戸中で、お父さんは名校長だ。これと一緒になのが、檜山「広」という、丸紅のロッキード事件のあれが同級生だ。塚原が一番で檜山が二番だった。とにかく秀才、神童、それで、東大に入って駄目になっちゃったんだ（一同笑い）。東大に入って駄目になったのは、女を覚えたからだ。

伊藤 じゃあどこに行っちゃったって同じだ（笑い）。

松野 こんなにいいことをおれは今まで知らなかった。こんなに人生で明るいもの知らなかったという。だから勉強して秀才な者ほど、その落差が大きい。それですつかり、卒業するときはビリだ。それでどこにも入れなくて、共同に入った。東大に入るまではよかった。

伊藤 でも共同に入ったらいいじゃないですか。

松野 不忍池の下宿のおかみさんの味を覚えちゃって、学校へ行くよりも下宿にいる方が長かった。だから東大には恨みがあるというんだ。

佐道 大学じゃなくて、下宿に問題があるのに（笑い）。

松野 東大がなければ、あの下宿に行かなかった（笑い）。落差が大きい。だからそれぐらいのことは平気だ。人生はどつちがいにかそれはわからん。おれは新しい人生を生きるんだという。だ

から東大の人生は入学した途端に終わって、新しい人生を送るといふ豪傑だ。田中が偉そうなことを言うけれど、それは塚原の方がよっぽど頭がいいし、政策もよくわかる。

伊藤 政策マンですね。

松野 政策マンだ。「田中の言っている列島改造なんて幼稚だ。ただ道路造り、自動車屋と同じことを言っているんだ。そんな者は政治じゃない」という言い方をしていた。「もつと人間を愛さなきゃいかん」というから、「人間でも女だろ、君は」というと、「ワハハハ」と笑う。

伊藤 何族ですか。

松野 運輸族。

伊藤 じゃあ田中さんとバッティングする。

松野 運輸省で秘書官をした。増田甲子七さんが運輸大臣のときに秘書官をして、それから政界入りをした。また運輸政務次官なんかをしましたね。交通鉄道網に詳しい。なかなか頭のいい男で、馬鹿みたいな顔をして、酒ばかり飲んでいたらけれど、非常に人生豊かな男だった。私は彼には非常に啓発されたな。

伊藤 人間を愛することですか（笑い）。

佐道 いま増田さんの名前が出ましたが、増田さんが運輸大臣の時に、次官が佐藤栄作ですね。吉田内閣の時に幹事長になったりしていたのに、後で入って来た佐藤さんがぐんぐん追い抜いていったことになりました。佐藤さんはやがて総理総裁になって、増田さんはその下という形になりましたが、かなり複雑な人間関係ですね。

松野 そうでもない。あの時、増田さんの時の運輸大臣は佐藤栄作だった。吉田さんは佐藤栄作を運輸大臣にすることに決めていたんだ。ところがGHQがどうしても承知しないんだ。それは戦犯の弟だから。そこで急遽、誰がいいだろうと行って佐藤に、「おまえ誰か見つけてこい、おまえがしたものを」といった

ら、佐藤が、北海道長官である増田甲子七を見つけてきた。あの時は内務省の任命知事ですからね。それで佐藤栄作が増田さんならいいだろうと言って、自分で推薦して来たんだ。だからあれは逆なんだ。もともと運輸大臣は佐藤なんだ。増田さんは雇われ大臣なんだ。

佐藤 その増田さんと佐藤さんの仲は、別に悪くはないんですね。

松野 仲は悪くない。

伊藤 増田さんというのは、「増田官房長官」という言葉で覚えているけれど。

松野 「佐藤は」その後すぐ、事務次官から官房長官になったんですからね。半年ぐらいただ。だから吉田さんは佐藤を運輸大臣に決めたんだ。佐藤がいいものを連れて来いといったんだ。だから逆なんだ。あの頃は、人間、人脈というのが非常に貴重でしたね。

伊藤 それは今でもそうでしょう。

松野 今でもそうさ。

伊藤 先生、さつき坪川さんのことをおっしゃいましたね。
松野 坪川信三というのは、保利茂と一緒に入党してきたんだ。犬養派だ。これは、福井のダルマという百貨店の御曹司で、福井ではなかなかの名門の息子で、第一回から出ている。保利茂と一緒に、一緒に入って来たんだ。保利茂、増田、坪川、私、塚原、それから細田吉蔵、このへんが年中会っていた。それから大橋武夫。増田甲子七はちよつと歳が多くて、かたい男でしたが、それもグループでした。

伊藤 坪川さんは何の族ですか。

松野 坪川も運輸政務次官をしたんじゃないかな。福井で芦原（あわら）温泉の近くでした。福井というのは面白いところで、繊維のさかんところだ。戦後は、いま驚くなけれ、コンドームの一番の生産は福井県だ。

伊藤 それは繊維が転換したんですか。

松野 繊維の女性が転換したんだ。だからこのものでも、元のメーカーは福井なんだ。もうひとつは眼鏡の縁、フレーム、これも福井だ。日本の何割を占めている。女工さんの手先が器用で、福井羽二重の繊維工場が転換して、コンドームと眼鏡になったんだ。この伝統は消えないんだ。

伊藤 面白い地場産業ですね。

松野 だからどこで買っても、コンドームは元は同じなんです。その包装が違うだけだ。その後、軍隊も同じようなことをやっているんだね。伝統というのは、日本は誰かが作るとそこにみんな来てしまう。

伊藤 西村直己さんはー。

松野 これは親しい。これは九州の運輸省の技官だった。佐藤栄作と同期ぐらいです。片方は事務官、片方は技術者で、非常に信頼していましたね。だからよく経理部長とか、経理のことは西村にやらせていた。これなら一銭一厘ごまかさずから、と言っていた。なかなか真面目で、佐藤栄作とほとんど歳が同じぐらいの感じ。運輸省で技術屋と事務官だった。

伊藤 瀬戸山三男さんも、その仲間ですか。

松野 瀬戸山三男は宮崎で、これは田中派の方に行つたでしょうね。西村は真ん中でうろろろしてましたけれど、瀬戸山は田中の方に行つたでしょうね。瀬戸山は役人出だ。たしか裁判官か何かだ。

伊藤 中馬「辰猪」という人はどうですか。

松野 中馬という人は鹿児島で、これはおやじが代議士だった。歳は私と同じぐらいで、九州で私と親しかった。あまり田中の方には行かなかつたでしょうね。

伊藤 何族ですか。

松野 建設族だったかな。瀬戸山も建設族です。

■農林族として

伊藤 この前のお話で、先生はだいたい農林族だというお話ですが、農林省は許認可で利権というのはかなりあつたんですか。

松野 ありましたね。

伊藤 農林省には何があるんですか。

松野 農林省は、土地改良組合とか、農業土木が多いんです。治山治水のダムを造るとか。農林土木というのは案外利権が多いんです。治山治水のダムは金額大きい。それから林野庁の営林署。

伊藤 ダムは建設省じゃないんですか。

松野 建設省のダムは治水ダム。こっちは砂防ダム。二つあるんです。片方は水を貯めるダム。片方は泥を防ぐダム。両方ともたぐさんあるんです。いまでも問題になっていきますね。

佐道 飛行場を作ったりするのはいつ頃からですか。

松野 飛行場はつい最近ですよ。あんな馬鹿なものを一。

佐道 農業用空港というのはあちこちにありますが。

松野 そんなことを農林省がやるなんて馬鹿だ。全部使っているところはないでしょうね。一つも使っていない。せいぜいラジコンの大会に使う程度だ（一同笑い）。

伊藤 あれは肥料とか農薬を散布するためのものでしょう。

松野 それからもうひとつは、急いで花とかを出荷するとき。どっちも嘘だ。要するに土木屋に乗せられたでしょうね。

伊藤 農産物の輸出入の問題はどうですか。

松野 農産物の輸出入はもちろん権益で、利権もあります。割当てだから。

伊藤 有名なのはバナナとか。

松野 初期の頃はあつた。バナナとかレモンとかオレンジとか。でも、たいした利権じゃないな。

伊藤 水産の海苔とか。

松野 海苔もあります。海苔の方が大きいでしょうね。

伊藤 どうして利権になるんですか。

松野 韓国海苔だから。韓国海苔を入れるということが大変だったんです。韓国海苔を入れる輸入許可を与えるわけだ。

伊藤 それは農林省ですか。

松野 農林省です。商品だから。通産省じゃない、農林省だ。韓国海苔をこちらに入れると、日本の海苔の五分の一ぐらいしか生産費がない。だから五分の一で入れると、それが三倍ぐらいに暴騰して、日本の海苔の七〇%ぐらいの値段になるわけだ。だから入れるということが利権だった。

伊藤 そうですか。それをどこに許可するか、ということですか。

松野 そうです。しかしいまはもうほとんどありませんね。シーリングしちゃったから。最初の頃は利権だったでしょうね。バナナだって最初は大変だった。

伊藤 今頃バナナなんて利権でも何でもないでしょう。

松野 最初に入れるときは利権です。

佐道 先ほどお話に出たオレンジや牛肉などは、日米の間でも大きな交渉事になります。あれは入れてくれるなという農家側の反対があるわけですね。あいだに入ってずいぶん苦労されることがあるんですか。

松野 入れてくれるなと言って、日本の畜産組合が金を出すといいことはあまりありませんね。

伊藤 海苔はどうですか。海苔養殖業者は、入れないでくれということじゃないんですか。

松野 昔はありました。あつたけれど、金を使ってまで入れないでくれという人はいない。それからもっと上手になって、韓国から海苔を入れると、日本の加工屋が入れて、日本の海苔と混ぜて使うんだ。反対運動が出ないんだ。生産者は反対ですよ。加工業

者は混ぜて上手に使うとわからないんです。生産の時に混ぜるとわからない。だからいまはほとんどありませんね。なぜかという、日本の技術が伸びて、日本の生産のほとんどが日本でできるんです。あまり韓国に頼る必要もなくなりました。いま海苔の利権はほとんどありません。

佐道 それで言うと、いまの有明海の問題が出来ますね。

松野 有明海の問題が今年どれくらい影響するか。影響すればまた輸入問題が出てくるかもしれないですね。これはまだ先の話だ。農林省の利権というのは小さいものばかりですよ。

伊藤 ドカンとでかいものはないですか。

松野 ドカンとでかいものはない。

小池 干拓はどうですか。

松野 干拓はあるでしょうね、工事で。諫早なんて馬鹿の骨頂ですよ。

小池 八郎潟はー。

松野 八郎潟でも大きな工事があつたでしょうね。

伊藤 あれも農林省なんですか。

松野 農林省です。やっぱりその道を知らないと駄目なんだ。私たちのところに来ないんだ。

伊藤 どんな道ですか。

松野 要するに土建屋のルートがないから、私たちのところに来ないんだ。頼みにも来ないし、反対にも来ない。頼みに来なければ駄目だ。今度、八郎潟の干拓があるよと言ったら、ああそうですねと言つて、鹿島も何も来ないんです。

伊藤 どこへ行くんですか。

松野 その道のルートのところに行くでしょうね。真つ先に田中派に行くでしょうね。やっぱり長いあいだ同じ釜の飯を食わないと駄目ですね。良かれ悪しかれ、同じ釜の飯を食ったものが親しくなるんだ。私たちは同じ釜の飯を食ったことがないものだから、

来ないんだ。

伊藤 先生が農林族だったその当時の大親分は誰なんですか。

松野 農林族の親分は、最大の政敵は、河野一郎だった。

伊藤 河野さんはいろいろ利権問題が言われますね。

松野 それはあらゆることをやってたでしょうね。それは種馬からー。

伊藤 最近も馬が(笑い)。

松野 種馬輸入禁止の時に、彼だけが種馬を入れたりね。そのルートを見つけた。それから那須野で、国有地と民有地を交換したりね。

佐道 明治時代の話みたいですね。

松野 那須野は裏側に、小針「曆二」が山林を持っていた。温泉の方は国有地なんだ。国有地の方はちつとも杉が伸びないんだ。裏側が伸びるんだ。だから伸びない国有地を、伸びる方と交換しよう。それで交換したのが、那須高原の温泉地です。それは林野庁だ。林野庁は、森林を維持・管理・涵養するのが目的だ。だから伸びる方がいいわけだ。こっちは別荘地にするから、伸びない方がいいわけだ。だから当然目的が合うから交換する。交換すると、片方は別荘地にするには最適だ。木が伸びない。

伊藤 それも利権になるわけですか。

松野 もう大変な利権だ。有名な利権です。那須高原全部、何十万坪だから。その頃は坪三百円ぐらいで計算したんでしょうね。それで別荘地になると、だいたい一百万円になったでしょうね。何百万坪で、想像すると大変だ。これは新聞ダネになって大騒ぎをしたことがある。林野庁の方から見ると、森林涵養が目的でしょう。伸びない方を伸びる方と交換して何が悪いという。用途が違う。小針の方は森林は要らないんだから、伸びない方がいいわけだ。小針とか、いろいろ分譲しましたが、福島政商・小針が一番大きく、一番いいところを取ったはず。あとはいろいろな

ところが組んで、十社ぐらいでやったでしょうね。それがいまの那須高原の別荘地ですよ。

伊藤 そうですか、それが河野さんですか。

松野 そういう考えが出てこないんだ。河野という人は建設大臣になると、いろいろなもの山積みになっていても、はんこうを捺さないんだ。請け負う工事がずつと来るわけだ。国道とかなんとか。でもはんこうを捺さずにこんなに積んである。そうすると、早く捺してください、早く捺してくださいと言われる。待て、待てと言っている。そうすると鹿島とか熊谷とか、いろいろなところが頼みに来て、「大臣のところにありますけれど、よろしくお願ひします」と言っても、「う、うう」といつて返事をしない。どうしてもこれは駄目だと思つて、何か持つていくわけだ。そうするとスツと捺すんだ（笑い）。そういう噂が一つ出ると、みんなが河野のところに行つて頭を下げる。それで権力を持つているわけだ。

「入札を全部やり直す、一新する」というと、みんな驚く。それで河野詣でが流行る。それで適当に、だいたい好い頃になると、「あれはやつぱりやめた。元のままでいい」と半年後ぐらいに言うんだ。だから火をつけてポンプになるんだ。マッチポンプだ。何もしないんだ。果たしてそれが贈賄になるかどうかかわからない。何もしていないんだから。それが河野流で、一世を風靡したでしょうね。

私は野党だから、さかんにそれを攻撃するわけだ。ところが「やると言つて考えたけれど、やめた」と言われると、攻めようがない。那須高原はずいぶん攻めましたよ。攻めたけれど、最後のオチは林野行政の問題になるんだ。利権行政の問題じゃないんだ。私もずいぶん攻めたが、攻めにくかった。建設省の時も攻めたけれど、攻めにくいんだ。「私はそれを全部やり直したらいいと思つたが、いろいろ考えた結果、やつぱりやめたんだ」と言わ

れると、攻めにくいんだ。私は攻撃する方だから、何度も攻めたけれど、攻めにくい。利権行政から見るとひどいけれど、林野行政から見るとそうなつてゐる。

伊藤 正当性があるわけですね。

松野 「造林が多いところと替えて、松野君いけないのか。林野庁の財産なんだから」と言うから。本当に攻めにくかった。あとでそれが高い値で売り出されるという時になればわかるけれど、それまでには時間がかかるし、そのときにはもうやめてゐるからね。たしか坪三百円の等価交換だつたと思ひます。三百円の林を売ると、十年間の成長率をかけるとわかつてくる。そういう数字ができてゐる。だからどこが悪いんだ。三百円で等価交換した。それで造林率をかけていくと、木はこつちは伸びる。こちらは悪い。それを面積で計算するところなるというのが、ちゃんとできてゐる。攻めようがない。

伊藤 知恵がないとできないですね。

松野 それで金を取つたじゃないかといつても、わからんもの。

伊藤 そうですね。

松野 それを利権にしたんじゃないのか、と疑いがあつても、その時点ではわからない。本当に攻めにくかった。私が三百円という値段を知つてゐるのは、そのとき攻めたからだ。最後にはどうしても逃げられる。それは新聞記事にはなつたんですよ。なつたけれど、尻尾は捕まれない。

伊藤 松野先生は全然新聞ダネになつたことはないですか。

松野 私はありますね。それはロッキード。

伊藤 ロッキードではなくて、農林族としては。

松野 農林族としては一度もなかつたな。一つ新聞ダネになつたのは、私が防衛長官になつたときに、山口六郎次という人が落選した。これも大野派で仲間だつたんだ。落選して困つてゐるから、岐阜のブナの山を造林するというので、農林中金から金を借りる。

「おれだけは駄目だから、松野君、すまんけれど保証人になってくれ」というから、私は仕方ないと思って、保証人になったわけだ。ブナの林に索道と林道を作るために、四億ぐらい農林中金が出したんでしょね。その山口六郎次は山口チンネンのお父さんですよ。その山口六郎次が亡くなって、山口敏夫が出たんだ。

それで私が防衛長官になったら、農林省の農林なんとかという新聞に「松野防衛庁長官は保証人になっていて保証を踏み倒している」という新聞記事が出たわけだ。よくよく調べたら、山口六郎次のそのことだ。保証人になっていて、山口六郎次は死んだんだ。調べてみると、四億ぐらいの融資を受けて、索道もほとんど作っていない、道路も造っていない。ほとんど食っちゃっている。

それで、私の時に農林省の事務次官だったキオイというのが、その農林漁業金融公庫の総裁になっていたので、それが防衛庁に来て、「先生すいませんが、困ってしまいました。記事になってしまった。こうやって出ているんです」という。それで見ると、結論として保証人は十一人いた。「十一人いたから、それならしょうがない、キオイ君、四億の十一分の一だから、五百万だけおれが責任を負おう」と言った。そうしたら「先生、それは駄目なんだ。あとの十人は資産がないんだ」と言う（一同笑い）。「資産がなくたって、おれは十一分の一でいいじゃないか」と言ったら、「それは全然駄目だ。資産のあるものから取るようになってる。あなた一人から取ってもいいんですよ、あとの十人は資産がないんだから。資産のない人から取れないんです。農林中金から見ると、資産があるあなたから全額取ってもいいんですよ、法律的には」という。保証ってそういうものなんだというんだ。

伊藤　　そういうものなんですか。

松野　全部が平等な資産を持っているなら十一分の一ですが、資産のない時は、あるものから取っていいそうさ。十一分の五を取っても、十一分の八を取ってもいいそうさ。だから保証というの

は怖いものだ。資産がないものはいくら判を捺したっていいんです。資産のあるものからは全部取る。さあ困った。そこでキオイに、「おい、そんな馬鹿なことがあるか、おれは一銭も取つてないよ、月給一つもらつたことないんだよ、そんな馬鹿なことがあるか」と言った。そうしたらキオイが一所懸命研究して、「最善の道として、それではまず四億の中の二億はよろしい。それからあと一億をなんとかして減らしましょう。あと一億残る。その一億の中で、どうですか、大臣、少なくとも三千万は払ってください」「おれが三割持つのか」「そうです。遺族がなんとかして、三千万。みんな十人が三千万。あなた一人で三千万、それで九千万で、あとは農林中金でなんとか減らして行きますから、それだけは受け持つてくれ」という。「その三千万はない」「それはわかっています。十年でいい、十年で払ってください。その代わり利息はいただきます」「じゃあ三百万を十年払うのか」「それぐらいしてください。私も職を賭けてここまでやってきた」という。私の時の事務次官でしたからね。「そうでないと記事がどんどん出ます」というんだ。

名譽税だと思って、とうとう私は三千万を払った。その代わり、承諾書に判を捺して、利息を取らない、十年でいいということだ。とうとう私はそれを十年で払った。そんなことは山口敏夫は知らないんだ。

それからもうひとつ、長男がそれをやっていたんだ。長男がそのブナ山で自殺したんです。そこで農林省も放っておけない。それで記事になった。事件の発端はブナ山で長男が事業をしていて、首をつつて死んだ。山口敏夫の兄さんだ。それで記事が大きくなってきた。それはしょうがない。キオイだからよかつたんですよ。それでも結局、私が三千万、遺族が三千万、あとの三千万は十人から取れたかどうか知りません。要するにそういう帳面で、三分の一を私が負担して、話をつけた。そのときに記事になった。

「前農林大臣」ということだったが、そのときは防衛長官なんだ。前農林大臣が農林中金の融資を斡旋しただろう、という言い方なんだ。それは時代がだいぶ違うんですけれどね。自殺したのが大きかった。農林時報とか、農林新聞に大きく出た。

伊藤 一般新聞には出なかつたんですか。

松野 一般新聞には出なかつた。農林関係だ。雑誌、週刊誌が出した。政治家はいやな思いをしますよ。それから佐藤の時代はー。

伊藤 それはあとで伺います。それはいつばいあるんですから。

松野 あと私が印象に残っているのは、三木でしょうね。

伊藤 この次は角福の最初の選挙のお話を伺って、田中内閣の時代ですね。

松野 角福の時に小泉が一年議員で出て来たんだ。森も出て来た。角福争いの時には、小泉も森も議員だ。小泉はワンワン泣いていたな。福田が負けたといつて。そのときに裏切ったのが中曽根だ。

伊藤 中曽根さんの話もいろいろ伺いたいと思います。今日は時間になりましたので、これで終わりにしたいと思います。次回の日程を決めたいと思います。

松野 私のはほとんど大丈夫です。これは一生の仕事だと思っっているから、空けます。

伊藤 また来月までに小泉内閣がどうなるかわかりませんけれど。

松野 わからないな。

佐道 参議院選挙が近くなっていますからね。

松野 六月の頃に都議会議員選挙がある。

伊藤 これは一つの大きなメルクマイルになりますね。

松野 私は公明党が惨敗すると思う。公明党の支持率が消えていく。いまは単なる政権を食い荒らす駄犬みたいなものだ。私は創価学会員に不信感がみなぎっていると思う。

政局関連年表

「小泉首相就任後の
田中真紀子・鈴木宗男
関連記事要旨」

- 五月十一日 田中外相、川島事務次官の更迭を断念。「外務省は伏魔殿のようだ」と不信感を表明。
- 五月十六日 陳健駐日中国大使が、小泉首相の靖国参拝について懸念を表明。
- 五月十八日 田中外相、衆院外務委員会で、靖国参拝をしないことを明言。
- 五月二十四日 田中外相、アジア欧州会議に出席のため訪中、北京で唐外相と会談。
- 五月二十五日 田中外相がアジア欧州会議外相合同昼食会の場で、アメリカのミサイル防衛構想に疑問を表明したことが判明。
- 五月二十九日 田中外相、財産相続について、三億七千万円の延滞税滞納が判明。
- 五月三十日 田中外相、外務報道官の記者会見中止を支持。
- 六月五日 柳井駐米大使が、田中外相のNMDに関する発言について、米国が事態を厳しく受け止めていることを示唆。
- 六月十三日 田中外相が外交機密費の関係資料を外相の長男に見せたとの趣旨の発言を外務省幹部にしていることが判明。
- 六月十五日 田中外相、衆院外務委員会で、小泉首相の靖国参拝について再考を促していることを明らかに。
- 六月十六日 田中外相が訪米。
- 六月二十日 衆院外務委員会で、田中外相と鈴木宗男氏が外務省人事などをめぐり、約一時間にわたり激論。
- 六月二十一日 田中外相が土肥隆一外務委員長に、鈴木氏の質問を制限するよう要請。
- 七月十日 与党三党幹事長、江沢民国家主席と会談。
- 七月十一日 小泉首相、三党幹事長の報告を受け、靖国参拝について「熟慮する」と発言。
- 七月十四日 田中外相、欧州訪問へ出発。
- 七月二十三日 田中外相、ASEAN会議出席のためハノイへ出発。
- 七月二十六日 田中外相、首相の靖国参拝に反対の意向を改めて表明。
- 七月二十八日 田中外相、群馬県内で参院選の応援演説。内容が問題化。
- 七月二十九日 参院選投票。自民党大勝。
- 八月十日 外務人事刷新。川島裕事務次官が辞職し、後任に野上義二外務審議官。飯村官房長退任、後任に小町恭士欧州局長。
- 八月十三日 小泉首相、靖国神社に前倒し参拝。
- 八月十六日 山崎拓幹事長、東南アジア歴訪。
- 九月五日 田中外相の私的懇談会が初会合。メ
- 二〇〇一年四月二十六日 小泉氏、内閣総理大臣に就任。
- 五月一日 金正男氏とみられる人物ら四人が不法入国。旅券が偽造と判明し、法務省東京入国管理局成田空港支局が身柄を拘束。
- 五月四日 金正男が成田から北京に向け、国外退去処分に。
- 五月七日 田中外相、中国唐外相と電話会談。李登輝氏へのビザ再発給はないと伝える。
- 五月八日 田中外相、アーミテージ米 국무副長官との会談をキャンセル。
- 五月九日 小泉首相、国会答弁で靖国参拝を明言。田中外相、外務省内の人事凍結を明言。
- 六月五日 柳井駐米大使が、田中外相のNMD

ンバーは、孫正義ソフトバンク社長、黒柳徹子、中根千枝東大名誉教授、グレゴリー・クラーク多摩大学長、山口二郎北大教授、小林節慶大教授、横田洋三中大教授。

九月十一日
米国同時多発テロ事件発生。

九月十九日
衆院予算委員会で田中外相が答弁に窮し、質問者の斉藤勲議員が批判。

十月二日
田中外相が、米国務省の避難先を記者団に話したことを謝罪。

十月二十九日
田中外相、人事課に二時間居座り、齋木昭隆人事課長更迭の書類作成を要求。

十一月二日
与野党が田中外相の国連総会・G8への出席を認めない方向で合意。

十一月三日
上月豊久外相秘書官が官房長を通じて辞意を伝えていたことが判明。

十二月二十五日

田中外相が「台湾も将来は香港のように中国に収斂されるべき」と発言。

二〇〇二年一月二十日

NGOピースウィンズジャパンの西代表が、アフガン復興会議のオブザーバー参加を外務省から拒否されたと発言。

一月二十四日
衆院予算委員会で、田中外相が、NGO外しに関して鈴木議員の関与を認める発言。野上外務次官は記者会見でこれを否定。

一月三十日
小泉首相、田中外相と野上外務次官を更迭。鈴木宗男議員運営委員長も辞任。

二月一日
田中外相の後任に川口順子環境大臣が就任。

二月六日
田中前外相が川口外相に引き継ぎ式を要求。

二月七日
新外務次官に竹内行夫駐インドネシア大使を起用。

二月二十一日

北方四島支援事業「友好の家」建設をめぐり、後に受注する企業幹部が鈴木宗男事務所を受注に向けた協議

をしていたことが発覚。

二月二十二日
川口外相、鈴木議員の関与を示す内部文書の内容を認める。また、小町恭士官房長、重家俊範中東アフリカ局長、佐藤優国際情報局主任分析官を更迭。

二月二十八日
鈴木議員と近い関係にあった東郷和彦オランダ大使と西村六善OECD代表部大使を更迭。

三月四日
大西健丞ピースウィンズジャパン責任者と船戸良隆国際協力NGOセンター理事長が参院予算委員会で、アフガン復興会議からの排除は鈴木氏の圧力によるものとの認識を示す。

三月八日

鈴木宗男議員が九九年に警視庁によるロシア大使館員に対する情報収集について警察庁に対し、クレームとも受け取れる電話をかけていたことが判明。

三月十一日

鈴木宗男議員の証人喚問。

三月十三日

九六年の北方四島ビザなし交流の

際、鈴木議員は外務官僚に殴る蹴るの暴行を加えたことが判明。

三月十五日
鈴木議員が自民党離党を表明。

三月十八日
田中前外相、英ガーディアン紙で小泉首相を厳しく批判。

四月三日
田中前外相に秘書給与疑惑浮上。

四月三十日
東京地検が鈴木議員の公設秘書ら関係者七人を偽計業務妨害逮捕。

五月十四日

東京地検特捜部が佐藤優・前外務省国際情報局主任分析官と前島陽・元欧亜局ロシア支援室課長補佐を背任容疑で逮捕。

六月十九日
東京地検特捜部が鈴木宗男議員をあっせん収賄容疑で逮捕。

七月一日

田中前外相の党員資格停止処分二年間が決定。

八月九日

田中真紀子議員辞職。

松野頼三 オーラルヒストリー

第9回

[2001年6月25日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

■ 利権とごんごの

伊藤 「東京都議選のニュースを見ながら」 本当に「自民党の」圧勝ですね。

松野 圧勝ですね。

伊藤 でも公明党も圧勝したんじゃないですか。

松野 公明党は公明党の候補者には入るんです。よその候補者には入らないですね。

伊藤 やつぱり強い政党ですね。

松野 自分たちの仲間に入れますね。公明党を応援して回ったって、その票は入らない。民主党もどうやら来ました。共産党がー。

伊藤 民主党も第三党になったじゃないですか。

松野 前も弱かったですからね。まあ、民主党は善戦した方でしょうね。共産党の没落から見ればね。前も第三党だったでしょう。

伊藤 共産党が第二党だったんですね。

松野 東京都は九〇〇万票ありますから、だいたい日本の全人口の一割はありますからね。

伊藤 まだしばらく小泉人気は続きそうですね。

松野 続きますね。人気は続くが、党内が大変でしょうね。

伊藤 大変といっても、小泉「純一郎」にくつついていかないことにはどうにもならないじゃないですか。

松野 一番困るのは法案なんです。法案になると、今までは行政でやっているけれど、自民党の族議員が修正するでしょうね。否決はできないが、修正するでしょうね。

伊藤 しかしそれをやったら、またあちこちから抗議が来るんじゃないですか。

松野 否決すれば解散するでしょうからね。悪知恵で修正しますよ。

伊藤 じゃあ解散しようか、と言えばー。

松野 解散するかしないか、おそろおそろスレスレの修正をするでしょうね。道路財源は、あれは法案ですからね。水路、空路を道路にしようとしているんだ。港と空港を道路財源の中に入れて、水路、海路、空路も「路」だという。そうすると建設省の中で使えるわけだ。一般財源として大蔵省に持っていくかないで、枠を拡張するという悪知恵が修正案で出て来るわけだ。

伊藤 今度は国土交通省ですからね。

小池 でも亀井「静香」が政調会長の時に、新幹線に財源を使うとしてもすごい反対を受けましたね。

松野 全部取られるよりはいいでしょう。

伊藤 特殊法人はどのくらい「整理」できますかね。

松野 これには思ったほど抵抗が少ないかもしれない。これは役所の抵抗で、自民党の抵抗はわりに少ないと思う。役所の方が抵抗するでしょうね。自分たちの天下り場がなくなるから、議員よりも役人でしょうね。ただ小泉の言っている民営論で、民営にできる公社公団はほとんどないんですよ。道路を民営にするといっても、東名とか阪神とか、いいところは民営になるけれど、北海道なんて民営になりつこないですからね。

伊藤 本四架橋なんていうのはどうにもならないでしょう。借金をどうするか。

松野 どうにもならない。

伊藤 あのままやっていったら、どんどん赤字が増えるだけですからね。

松野 かえってあんなものはタダにした方が安上がりでしょうね。有料道路をやめる。

伊藤 借金はどうするんですか。

松野 借金は一般会計の国債で払わなければしょうがないでしょうね。

伊藤 じゃあやつぱり国道か何かにするわけですか。

松野 料金を取っても、その費用が出てこないでしょう。私はタダの方が安上がりだと思ふ。料金を取ったり、いろいろなことをする方が金がかかると思ふ。

民間にすると広告を取るでしょうな。橋に広告を書いたり、電柱一本一本で一万円ずつ広告料を取るでしょう。民間なら考えるでしょうね。それでも、元はどうせ取れないんですから。国有、民間というところで、運営費だけが出て来ればいいと思わなければ。佐道 今までかかったものはどうなりますか。

松野 それはもう全部ゼロで、返ってこない。国鉄は、かかったものは償還して、いくらかかず払っていますけれどね。国鉄は払っている。橋は払いつこないから、それはタダでしょう。タダで、民間にするしかないでしょうね。補償費だけを民間でやるぐらいです。それと広告料を取ったり、いろいろ考えるでしょうね。

伊藤 サービス・ステーションなんかの権利を売れば。

小池 あれは道路公団の子会社ですね。あれも含めてやれば。

松野 あれが役人の第二の就職口ですからね。道路施設協会というんだ。それからハイウェイパトロールとか、掃除をしたりする、それはみんな黒字なんです。

伊藤 そういう運輸関係とは、先生は全然関係なしですか。

松野 多少あります。

伊藤 農林族だけではないんでしょう。

松野 族は農林でしたけれどね。

伊藤 あちこちに首を突っ込んでいるんでしょうね。

松野 多少はね。まあ鉄道会社を持っているから。

伊藤 熊本電鉄ですね(笑い)。

松野 それで鉄路を入れる、と言っているわけだ。だから鉄路、水路、空路、これはみんな道路だと(笑い)。

佐道 その修正案も実は先生なんです(笑い)。

松野 いまそれが扇「千景」のところの国土省から出て来るんですよ。ところがそれを言ったのは、建設省の中なんだ。いままでは運輸省だった。今度は建設・運輸は一緒だ。だから彼らは、自分の役所の中なら我慢するでしょう。それがおそらく修正案だろう。そうすると解散とは言いにくい。私はそういう抵抗を順次してくると思ふ。

伊藤 それでも一歩前進になりますかね。

小池 新規事業をやらないだけでも一歩前進かもしれませんけれど。

佐道 やらないと言っていたことを、やると言い出しただけでも進歩ですから。

松野 いままで行政が税金の無駄遣いだったかというところが、足を止めて考えると出て来たんですね。いままでは歩いてくるからわからない。惰性で歩いてきたから、そういうものだと国民も思っていたわけだ。戦後五十年間そう思っていた。戦後の物の足りない時期から、ずっと物が欲しくて歩いてきて、その惰性で来た。足を止めて、さあこれが必要か要らないかと考えてみると、とんでもないものがあつた。無駄なものがいっぱいあつた。伊藤 小泉さんの言っている郵政三事業の問題は、そこからお金が出るわけですからね。

松野 どうしても財投をつかまないと駄目だ、というので、郵政三事業から始まった。あの財投の金が特殊法人の七十幾つにみんな入っているんですからね。それが全部赤字で、利息も払えなくなつてきている。そこからスタートしてきているんですからね。私は財投については、自民党の抵抗は思ったより少ないと思ふ。もう金がないんだから。

伊藤 郵貯が破産するじゃないですか。

松野 一兆かどうか知らんが、一兆節減するのは、そんなに抵抗はない。道路族の道路特別会計の改正案は、案だからね。片一方

は予算で出さなければいけません。自然につくれるんだから。こっち「道路会計」は法案だから、法案だと族議員が抵抗するでしょうね。特殊法人は役所が抵抗しますね。役所が夢中になって、族議員を経由して抵抗するでしょう。私は特殊法人の方は、七十のうち三十ぐらいいは可能じゃないかと思う。

伊藤 道路を押さえているのは、やっぱり橋本派なんですか。

松野 橋本派です。

伊藤 それはもうはつきりしているわけですか。

松野 はつきりしています。金丸「信」以来、代々そうです。今でもそうです。野呂田「芳成」とか。道路をなぜそんなに言うかという、道路を財源にして、代議士が町村に道路を造ってやるという公約をしているんだ。ただ道路財源というものがあるから、はつきりした担保がある。その次は請負工事も、ここに道路を造るから入れてやるぞ、というように利権まで整備されているのが道路財源です。それを一番やったのが、金権政治の田中角栄だ。あの頃は道路がなかったから。どこからか知らないけれど、ああいう悪い知恵は田中角栄はよく持ってくるんです。私たちにもさかんに説く。「ガソリン税を上げれば、これで道路ができる。それはデコボコ道路を走るより、ガソリンの消費が減るじゃないか」と言うんだ。あの頃はまだ舗装道路が少なかったから。

伊藤 道路ができる段階ではよかったですね。

松野 ある意味においてはよかったですね。

伊藤 しかし全国津々浦々、どこに行っても舗装ですからね。

松野 東名道路ができる、高速道路ができる、自動車が増える。だから自動車業界もそれに乗ったわけだ。建設省と自動車業界、そしてガソリン消費。個々に見ると、ガソリン消費をするような車が少なかった。富裕階級が公共バスしかなかった。個人の通勤なんか車じゃなかったんですからね。

伊藤 仕事のトラックはあったでしょうね。

松野 どちらかというと言った感じが、個人まで自動車が行き渡らない時ですからね。だから私たちがまずいぶん口説かれて、いいな、といって賛成したけれどね。それでガソリン税をかけたんだ。ところが農村は、ガソリン税はかかるけれど、道路は走らない。そこで私は農林議員だから、「走らない道路に、なんでおれたちが負担するんだ」といって、農免ということになる。そうしたら今度は鈴木善幸が、「船だつてそうだ、油のC重油にかかる。おれたちは道路を走らないんだから、税金を払う必要がない」といって、じゃあ免税にしよう。それで、漁業組合ではC重油はいまでも免税のほうです。そういうふうに道路を走らないということ、C重油と農免ができた。初めはトラクター、耕耘機が国道を走るものか、農道しか走らないじゃないか、という理屈をつけて、私は田中に反対したことを覚えている。それで考えたのが農免だ。

伊藤 そういうことは、プレッシャーグループというか、協会とかがあるわけですか。

松野 まあ、そういうグループが自然にできるんです。賛成する議員が初めは五人、それが五十人、百人と自民党の中にガソリン税賛成グループができる。それが賛成して、大蔵省と交渉する。そして、各部会に当たってくる。私は農林部会だから、「そんな馬鹿なことあるか」といって、部会で、それを持ってきた建設族との論戦が始まるわけだ。結局妥協案になる。それが決まったら、大蔵省にそれを要求する。

武田 農協は関係ないんですか。

松野 農協は関係あります。農免で、ガソリン税。

武田 農協もやはりプレッシャー・グループですか。

松野 プレッシャー・グループです。

伊藤 漁協もそうですか。

松野 漁協もそうです。それで農・漁が連合して、道路を走らな

いの税金だけ取られるのは不合理だ、農機具は高速道路を走ることはない。それだけバックしろ、と言った。農業用だけタダにしろといつても、ガソリンスタンドで分けられないんだ。これは農業用のガソリンなのか、家用の消費用ガソリンか、ガソリンスタンドでは税法上の免税措置は不可能だ。そこでだいたい何%というガソリンのパーセンテージで決める。ガソリン消費の1%は農業用だ。じゃあその1%分のガソリン税を農業にバックしようというので、農林省にそれが入ってくる。それが農林省の予算に入つて、農免道路をつくり始めたんだ。

伊藤 じゃあ道路は建設省とは限らないわけですね。

松野 そう、農免は農林省所管ですから。

有馬 そういう問題で、例えばスタンドで何に使うか分けられないじゃないか、というときに、そういう技術的な知恵を出してくるのはどういふ人なんですか。

松野 みんなで議論するとそうなるんですね。

有馬 党の中の議論で出て来るわけですか。

松野 大蔵省もそういうときには参考人ですからね。大蔵省の主税局で、「とても分けられません。免税のガソリンをたくさん農村が買って、それを自家用車に入れたら、高速道路を走るでしょう。そんなことがわかるのですか。入れるときは耕耘機に入れて、家に帰ったら自家用に入れ換えて、それで高速道路を走るなら無限に行くじゃないですか。そこまで監視できますか」と言う。それじゃあ仕方がない。だいたい農機具の過去のガソリン消費の比率を加味して、全体的に率で行こうということになった。漁業用C重油は漁業組合で販売していますから、漁協にもとから免税で卸す。港ではガソリンスタンドではなくて、漁協で入れるから、行く先がわかっていますからね。それでもそれを横流しされるといけませんから、ある程度の枠を決めてあるんですね。

伊藤 農林省の持っているそういう補助金はものすごくたくさん

あるでしょう。

松野 ものすごい。

伊藤 数からいったら、何百とあるでしょう。

松野 何百あるでしょうね。私も驚いたのは、紫雲英というレンゲ草の補助金がある。それから養蜂。蜂も、果樹とかみかんのときに花粉をつけるから要るわけだ。だから養蜂は果樹園芸で必要なものだ。そのために補助金を出す。そういう補助金は無限にある。二百ぐらいあるでしょうね。だいたい農林省というのは基本は保護政策なんだ。その保護は何かというと、食糧供給、生活の基本ということだ。

伊藤 あの休耕田に対する補償だつて大変なものでしょう。

松野 休耕田の補償は、仕事を辞めるから失業保険なんです。失業保険は収入の七割です。だから休耕田は所得の七割を補償する。所得の七割というのは、全生産の半分が所得ですから、十俵とれるところは、一俵一万五千円だから、十五万円になる。経費が七万五千円で、七万五千円が所得、その七割だから五万円ぐらいが休耕田の単価でしょうね。

伊藤 それはどういふふうに分けられるんですか。

松野 個々人にです。

伊藤 具体的なルートはどうですか。

松野 農協を通じて、個人に行く。

伊藤 それは大蔵省から農林省に行つて。

松野 大蔵省から農林省に行つて、農林省から農協に行く。その金を扱っているのが農林中央金庫、それから県信連。県信連から農協に行く、農協から個人に行く。そういう系統でずつと行きます。農協は個人の預金にするから、帳面では農協に全部入つてくる。農家の個人に行かないというけれど、それは行っているんです。本人の預金に入っている。

伊藤 耕地整理なんかはどうですか。

松野 耕地整理も同じことですね。耕地整理も組合を作って、政府からの補助金と、個人の負担でやる。

伊藤 県も出すんですか。

松野 県も一割ぐらい出します。国が七割、県が一割、本人が二割ぐらいでしょうね。それは町村営とか、国営によって多少違います。国営の方が安いでしょうね。町村営のもの、国営のもの、それによって負担金が一割ずつぐらい違います。その一割をいまの代金から天引きするわけです。

〔松野頼久氏登場〕

松野 息子です。〔出席者と松野頼久氏、名刺交換〕

まあ、時代が変わって、子供だ、子供だと思っているうちに代議士になっちゃった。小泉だってまだまだ新入生で、「頼久氏を指して」これぐらいの時に私のところに来たんだから。

伊藤 そのうち総理になるかもしれないですね（笑い）。それまで生きて頑張らないと。

松野 「休耕田の」補助金というのはそういうふうに行っていくわけですから、最初に生産が余ったわけだ。私が言い出して決めたものだった。私がちょうど政調会にいたときで、「余るから二年間だけ生産制限をしようじゃないか、その代わりこれは失業と同じだから、失業保険をきれいにし出してせ」といって大蔵省と交渉したが、理屈が通っているものだから、「じゃあそうしましょう」ということになった。初めは二年間だった。それがこんにち永遠になっている。失業保険だつて六ヶ月ですよ。制限がある。農地だからしょうがない、それで私は二年という制限をつけた。失業保険も六ヶ月、七割という基準だ。だから一反あたり三万円ぐらいにした。それがいまになったら、永久の固定した収入になつてしまった。失業保険が月給みたいになつた。こんな悪政はない。

伊藤 それを廃止したらどうなりますか。

松野 廃止して、与える物があればいいでしょう。私は廃止は自由によればいいと思う。農地法をやめればいい。その代わり、君は好きな物をつくれといえればいい。いまでも、いけない、自分の自由にさせてくれというのがあるんです。自分の好きな物をつくりたいというのがあるんです。ところがそれができないのは、各町村で一〇〇%やらないと補助金をもらえないからなんです。五人なら五人全部が揃わないと駄目なんだ。一人だけ、俺はやめた、補助金いらぬ、自由にするといったら、その五人が全部駄目になる。だから農協が押さえ込むわけだ。君一人のために、農林省の行政が困るといふことだ。だから無理にやっているんだ。私ももつと自由にすれば、各人が自分の好きな物をやると思います。

伊藤 農地法の改正は大きいですね。

松野 原因は農地法ですよ。そこで一番困るのは、悪いところ、生産の低いところを生産制限しないんだ。いいところを生産制限しなければ、過剰米が増えるわけだ。だから美田を生産制限に充てるんだ。そのまた問題がある。自分が持っている山つきの悪いところを生産制限してくれるのならまだいい。一番いいところをやらないと生産制限にならないんだ。日本で一二〇〇〜一三〇〇万トンできるうちの四割が生産制限です。もう五割になつたでしょう。六〇〇万トンぐらいしか生産しない。それもいいところ、良田を生産制限しなければいけない。そこにまた問題がある。しかもみんなが共同でやらなければいけない。だからみんなのためにやっているんだ。

伊藤 それで癖になつていくんですね。

松野 だからスト破りができないんだ。逆にスト破りをするとおまえけしからんといつて、みんなの袋だたきになる。抜けられないんだ。だから私は、大きな政治が一拳にそれを開ければ、反対は少ないと思う。一番反対するのは農林省の役人だ。仕事がない。

くなるから。農林省の農業振興局なんかの仕事はなくなるでしょうね。それが組んでやっているんだから、無駄も無駄だ。

佐道 いまの現役の農林族と言われる人の中で、そういう問題がわかっていて、このまま続けていったら崩壊しかないという意識をもって問題に当たろうと思っている人はいないんですか。

松野 おりませんが、いまの選挙地盤では、それで自分が票をとっているものだから、なかなか自己改革はできませんね。これは自民党内閣が替わって、民主党にならないとできません。政党が替わらなければできない。自己改革なんて、なかなかできません。

伊藤 しかし民主党にもそういう議員はいるでしょう。

松野 民主党に内閣が替わらないとできないと思う。

伊藤 小泉さんじゃできませんか。

松野 小泉は農業がわからないからね。全然わからないから駄目だ。

伊藤 「松野氏に」アドバイザーがいるじゃないですか（笑い）。

松野 私が教えても身に付かないんだ。やはり体験しなければ駄目だ。

伊藤 わかっていない、ということですか。

松野 わかっていないし、教えても無理だ。中途半端に教えても何もならない。忖からそれを体験し、経験したものでなければ無理だ。だから彼は郵政に関しては、体験・経験があるから自信がある。付焼刃で教えても無理でしょうね。

伊藤 でも誰かがやらないとできないでしょう。

松野 彼は経済政策も、竹中「平蔵」とやっているけれど、私はハラハラしていますね。だって専門じゃないんだから。竹中というのは学者だけれど、私はハラハラしている。彼はペーパーは上手で、計画・青写真をつくるけれど、大工をやったことはありませんから。自分で金槌をもって選挙をやったことがないから、人心がわからない。学者の欠点はそこなんだ。未来に向かつての

青写真と方針はいいけれど、自分で体験がないんだ。体験して、こつこつ家を築いていたら学者になれませんが（一同笑い）。農村を歩いて田植えをしていたら学者にはなれない、法学博士にはなれない。

私が見ていると、東畑精一とか東畑四郎は農政の神様といわれるけれど、話していると、理論と私たちの感じ、選挙民とのギャップが常を感じられた。一緒に話すと、彼も参考になる、私たちも参考になる。私たちは下しか見えないから、上がわからない。東畑は上ばかり見ているが、下がわからない。だから東畑四郎、東畑精一と私は非常に親しかつた。それが話すと、私が知らないことを彼らは知っている。彼らの知らないことを私が知っている。その差があつた。だから私は、あの二人については非常に親しくしていて、若い頃の農政の勉強は、東畑四郎と東畑精一からだ。私は素直に聴いた。彼は農政理論や、戦前戦後を通じての農業、あるいはシベリアの共産農業、中国の農業、いろいろなことに学的に詳しいわけだ。私たちは知らない。そういうものを見ると、なるほど農業はその国の生い立ちによって全部違うんだ。それに応じて農業は発達してきたんだ。よその農業は参考になるけれど、それを植えたつて駄目ですよ。日本の米をモスコウに植えたつて植わらない。東南アジアの農業というのは、その国の文化と民族ですよ、というような話は東畑はうまいんだ。私たちは気がつかないけれど、東畑が話すとうまいものだ。だから農をもって本とすると、そういう理論はそこから来る。稲の発達からだ。そういうことは学者はうまいんだ。ところが、いまの農政の現状というと彼はわからないんだ。「それは東畑さん、そう言うけれど、いまはそうはいかないんだ」「なぜいかないんだ」「あなた方が言うのと、いまの農村は違っているんだ」ということになる。

伊藤 いま、都市を重視しようということをやるうとすれば、農村への補助金をなんとかしなければしょうがないでしょう。

松野 農村の補助金は、一時二百「種類」もあった。私が農林大臣になって真つ先に変えたのは、メニュー式にしたことだ。二百をずっと書いて、五十ぐらいにして、この五十の中でローカルにどう使ってもいいという補助金にしる、メニュー式の補助金に変える、とやったわけだ。その時の大蔵大臣が福田越夫だった。福田もよく農村のことを知っていました。それもいいだろうと言って、個別補助金からメニュー式の補助金に変えた。そこである程度整理したわけだ。

伊藤 実際に変えたんですか。

松野 変えた。いまはだいぶ減っているはずですよ。二百の補助金は、少なくなっている。だからいま蜂とか紫雲英という補助金はなくなっている。そのメニューの一括の中に入っている。

伊藤 その配分はどこがやるんですか。

松野 配分は農林省がやる。大蔵省と総枠の対策をとって、あとは農林省で決める。農林省は各県の農林部長と交渉して決める。北海道と九州は違いますから、補助対象が違ってくるわけだ。その違う補助金を、農林部長と個別交渉して決めるわけだ。

伊藤 じゃあ各県には袋でやるわけですか。

松野 小さい補助金は袋だ。それをメニュー方式というわけです。いまはだいぶ減りました。昔は二百あったけれど、いまは六十幾つです。

伊藤 でも額で言ったら、そんなに減ったわけではないでしょう。

松野 額はあまり減っていません。

伊藤 むしろ増えているんじゃないですか。

松野 だいたい同じ金額でしょうね。古い事業については、なかなか農林省は増やさない。新規事業だから、つくっていくわけです。各省は新しい構想を持っていかないといけない。古いものを増やすといつても、大蔵省は増やさない。だから役所が上手なのは、大蔵省が食いつくような新しいプランを持っていくことだ。

■田中内閣発定

伊藤 そろそろお話を戻しまして、いよいよ佐藤内閣から田中内閣へ移るところですが、先生は福田さんを推すということではないかと思えます。

松野 私は福田「陣営」でした。

伊藤 福田陣営というのは、福田派があつて、田中派から先生たち十数人が加わるわけでしょう。

松野 十七名行きましたね。

伊藤 それは統一した選挙対策をするんですか。

松野 赤プリに統一した選挙対策本部をつくりました。その時に、森「喜朗」とか小泉「純一郎」が初めて来たわけです。福田の選挙事務所を使い走りだったのが森と小泉だ。福田派にいたわけだ。私たちは佐藤派から行って、赤坂プリンスと一緒に選挙事務所をつくりました。

伊藤 ほかの派閥に対してはどういうふうに対したんですか。

松野 ほかの派閥には、個々に。いちばん大きなのは中曽根派だったんです。田中派と中曽根派と福田派で、キャスティングを握ったのは中曽根派。それから三木派がありましたね。一番大きなのは中曽根派だ。

福田が「総裁選が」スタートするとき「中曽根に」、「今度立候補するから、同郷だからよろしく」「まあ考えておきましょう、同郷ですから」といって、握手して帰ってきたわけだ。彼は「中曽根が」自分を応援してくれるものだと思込んでいた。それでスタートした。終始中曽根派とも話をしていましたよ。

伊藤 中曽根派の議員と先生も話をなさるわけですね。

松野 もちろんしました。

伊藤 中曽根派の中には、親福田というグループもあるんですよ。

う。

松野 福田に近いグループもあります。

伊藤 でもあのときは、統制がとれたんですか。

松野 初めは中曽根派は、福田の方と田中の方と半々ぐらいだったでしょうね。福田もある時期まで自信を持っていたんです。それである程度手を打ったようでしたね。そうしたらそれがひっくり返った。

伊藤 それが大誤算ですか。

松野 大誤算だ。五日ぐらい前にひっくり返ったんだ。

伊藤 三木派はどうですか。

松野 三木派はあまりひっくり返らなかつたけれど、三木派は福田派の方には来ませんでしたね。

伊藤 それはどういうことなんですかね。

松野 三木派というのは、どちらかというと派閥に馴染まない人が多かったですね。だから三木派は個人個人に行っていたんです。森山「欽司」とか、藤本「孝雄」とか、個々に行っていました。グループとしてどっちと言わずに、個々に行きましたね。

伊藤 中曽根派は、最終的には一つのまとまりになったんですか。

松野 まとまりになった。最後にはまとまっちゃった。

伊藤 三木派はどうですか。

松野 三木派はまとまらなかつた。少しは、個々に来ました。それは個人だ。やつぱり、ある程度の資金が動くまとまりが早いんだな（笑い）。個々には多少のことがあります。それは個々であつて、まとまるときは潤滑油があつた方が早いでしょうね。

伊藤 潤滑油も、ドカンと行かないと駄目でしょう。

松野 みんながまとまるだけ「ドカンと行かないと駄目ですね」。そういう感じがありましたね。三木派なんかは個々だったから、何人来たか、というぐらいのことですね。私が三人ぐらい上乘せした。

伊藤 先生はその時は、福田派になったわけですか。

松野 それを機会に福田派になった。帰るところがないんだから。佐藤派がなくなつて、田中派になった。私たちは田中派に行けないから、福田派に残るしかない。それ以来ずっと福田派です。だから角福戦争から私は福田派なんだ。その前が佐藤派、その前が岸派だ。

伊藤 じゃあ、三木内閣の時はどうだったんですか。

松野 三木内閣の時は、福田派の代表で私は入った。

伊藤 それ以来ずっと福田派ということですか。

松野 ずっと福田派。角福戦争から福田派になった。

伊藤 先生はこの前も、知らないうちに田中派ができていたとおっしゃいましたね。

松野 それは佐藤派のとき。たしか一月か二月の初めに突然旗揚げした。

伊藤 でも早耳の松野先生としてはー。

松野 私は動きはわかつていた。しかしまさか佐藤が引退を声明するまではやらないと思つていた。その時はまだ佐藤が引退宣言をしていないから、引退を声明するまでは、まさか彼らもやるまいと思つていた。まだ二ヶ月や三ヶ月はある。そのあいだに対策を立てようとしていた。それで私が注進に行つて、「やめろや、君は」という余裕があつたわけだ。だけど、旗揚げしたときはもう五十何人でした。佐藤派九十何人のうち、五十何人集まつた。柳橋の「いながき」という料亭に五十何人集まつた。佐藤派の九十何人のうち五十何人集まるといふことは、絶対でしょうね。そこに田中はいなかつた。木村「武雄」という長老がいた。その中へ、みんな入つちやつた。私とか大橋武雄、保利茂、塚原「俊郎」、坪川「信三」なんていうのは入っていないわけだ。そこでその連中だけ、十七人でそこには参加しない。

伊藤 保利さんはちよつと違うでしょう。

松野 保利は私の方に入っていました。保利、大橋なんていうのは、私なんかと一緒に、反田中で集まった。

伊藤 でもあとで保利さんは反田中にならないでしょう。

松野 保利は福田派でしたよ。

伊藤 ずっと、ですか。

松野 ずっとですよ。田中派には入っていません。非常に親しかったけれど、田中派には入らなかつた。保利は田中と非常に親しかった。選挙資金もだいたい田中から応援が来ていました。それでもさすがに田中の下にはつかなくなつた。やっぱり良心が許さなかつたんでしょね。田中のやり方には—。

伊藤 それでいよいよ選挙になって、選挙寸前になつたら、もうだいたい負けだ、という感じだつたんですか。

松野 負けでしたね。

伊藤 選挙になつたら、だいたいわかつていた。

松野 いや、選挙になるとこまではまだよかつたんですね。途中でどうもはつきりしないな、と思った。その時私は総務会にいましたが、総務会長が中曾根だつた。福田派は私と中野四郎が総務会にいた。総務会長の中曾根とは、毎日総務会で顔を合わせているけれど、私たちに対して、目を逸らすんだ。おかしいな、と思つて、その話を福田にして「おい、大丈夫か」といった。「同郷だから大丈夫だ。まさか同郷で裏切ることはない」という。でも、どうもおかしいんだ。

そのうちに週刊誌に、金権政治で自民党は腐敗している、中曾根は田中から金を受け取つた、という話が出た。さあ、それが出たものだから、総務会で総務会長に、「党の名誉のために質す」といつて、中野四郎が質したわけだ。そうしたら中曾根は知らぬ存ぜぬだ。「知らぬ存ぜぬということはあるか」といつて、どうとう総務会長不信任案を出して、中曾根を退席させたりしてやつたけれど、その時はもう駄目でした。だからだいたい二週間くら

いが総裁選挙の期間だとすると、初めの一週間はまだ勝つかないと思つたけれど、後の一週間は、どうも情勢が悪い、やはり田中の縁が回つたな、と思つた。

伊藤 それでいよいよ田中内閣ができると、福田派は完全に野党ですか。

松野 完全に野党だ。田中内閣では、三池信というのを閣僚に指名してきたんだ。そこで「おかしいじゃないか。指名するとは何だ。推薦依頼をするのならわかる。推薦依頼なら聞いたことがあるけれど、指名とはおかしいじゃないか。そんな高ぶつたことがあるか。三池君、君はなぜ田中と内通していたんだ」と言われるから困つちゃうわけだ。内通してないが、そういうふうに指名されると、同志から疑われる。推薦依頼ならよかつたんだけど。それでいくら呼び出されても、「三池氏は」行けなくなつた。そこで田中内閣が全部決まつたのに、福田派からの指名の人が官邸に行かない。行かないと、本人の承諾がないから、入閣できない。どうとう「組閣が」一日遅れました。それは本人も行きにくいからだ。

伊藤 それで結局どうなつたわけですか。

松野 翌日になつて、もうここまで来たらもう行こう、と言つて、「三池氏は」黙って行きましたよ。だから一日組閣が遅れたのは、負けたときの経緯からです。指名が来た。たしか三人来ましたよ。伊藤 ゴボウ抜きということですね。

松野 ゴボウ抜きだ。その人たちも行きにくいわけだ。みんながいるところで、「なぜ君は田中と親しいんだ。昨日まで敵だったのに、君、おかしいじゃないか。内通したのか」といわれたら行きにくい。本人も、会議で目の前にいるけれど、行けなかつた。「君、どうするか」と言われて、「いや、おれは別にそんなことを頼んだ覚えはない」という。坊秀男と三池信だ。どうとう組閣を一日遅らせたことを覚えていきます。翌日になつたら、福田は、

「もうここまで来た以上、あまりに天下を騒がせたらいけない。負けたから敗戦の将があまり言っではいけない。もうやめようや、勝手にさせようじゃないか、どうせ長くもないだろうから」ということで、それで組閣になった。それで坊秀男が大蔵大臣「有田喜一が経企庁長官か」、三池信が建設大臣「郵政大臣」か何かになった。

伊藤 そうすると、松野さんは無役ですか。

松野 もちろん何も無い。

伊藤 何もなしですか。

松野 何もなし。

伊藤 総務もなしですか。

松野 総務もなかった。何もなし。もう、田中の禄を食むことは潔しとせず。打倒を言っていたんだから。

伊藤 無役ということは、党内では何もできないと！

松野 何もできないが、顔を出せばどこだって入れないわけにはいきませんからね。ヒラ委員で入れれば、どこでも入れてくれます。大蔵委員に入ろうがどこに入ろうが、ヒラ委員としてならどこに入ってもいい。会議に出る資格はあるんだから、大蔵部会に入っではいけないということはありませんからね。どの会に入ってもそれは自由だ。私のように憎まれておつたのは、どこに行っても強面でどうぞ、どうぞ、と言いますからね。そこで言いたいことだけを言うわけだ。

伊藤 じゃあ田中内閣の時期は、雌伏ですか。

松野 もう何もしませんでしたね。やる気も何も無い。

伊藤 倒れるまで待つ。

松野 どうせ長くはないんだから、倒れるまで待つ。二年はもたんだろうと思っただけから。

佐道 それはどういうことですか。

松野 だいたい総裁選挙は二年ですからね。次の総裁選挙まで二

年だから、二年で倒せればいいと思った。このまま放っておいても、この次に田中を倒せばいいんだ。総裁選挙というのは二年だ。だから二年放っておけばいい。池田内閣の時も、二年経てば佐藤内閣になると思うから、池田の時も私は何もしなかった。それは総裁選挙は二年だから、今度はやつつけるぞと思うからだ。別に無役であろうがなかるうが、あまり気にしません。

佐道 やつつけるための戦略を練るんですか。

松野 まあ二年間、「田中は悪いぞ、ろくなことをしないぞ」とあつてもなくても話をする、心ある者は「そうだ」と言う。心ない者は「いや違う」とか言うでしょうね。そんなことを言っつて、世論にぶすぶす火をつけて歩いているんです。

伊藤 でも列島改造とかで盛り上がったじゃないですか。

松野 列島改造の本を出しましたね。あんなものは、所詮、土建屋がやることだと言っていた。それは代議士仲間はいくらでも話をつくる。話をつくることは上手ですからね（笑い）。もつともらしく話を作ることは上手だ。どんなに小さな材料でも、上手につくる。それがウケると世論になるわけだ。ウケないと、あいつは謀反人、ということになる。

佐道 いまの小泉さんほどではないですが、田中さんは総理になつたときに「今太閤」と言われて、すごい人気がありましたね。だからあまり文句も言いつらい雰囲気ではありませんでしたか。

松野 「今太閤」とさかんに言っただけで、「太閤は教養がないから、下品だね。太閤は偉いけれど下品だから、草鞋取りから行つたんだから、大学を出ていないから、教養がないからね」と言えね。私にはそんな仲間しかいないんだ（笑い）。「太閤は偉いけれど、教養がないことこれまた日本一だ。あいつの家には鯉が飼ってみんな金色している。金色の鯉じゃなければ、あいつは飼わないそうだ。下品だからね」と言っつて話が盛り上がる。言いはいくらでもありますよ。

有馬 松野先生はその当時、列島改造について、政策的な評価としてはどういうふうにごらんになっていましたか。

松野 私は全然相手にしなかった。これは要するに自分の土建屋の青写真をつくったなと思った。彼は若いときに私のところに来て、「俺は一級建築士を持っているんだ。君のところの地図はみんな知っている。あそここの山はどうだ、この川はどうだ、あの川は急流だから、もう少し河川改修をした方がいいぞ。橋をもっと造った方がいいぞ」と言うんだ。「なんだ、他人の選挙区のことなのに」と言ったが、それが好きだったんだ。日本中を知っている。彼は私の選挙区の川の大きさまで知っている。

伊藤 よく勉強しているじゃないですか。

松野 それは趣味だ。「橋を架ければいい。俺が橋を架けてやるか」と言うので、「君に架けてもらわなくても、俺がやる」と言ったんだけどね。橋を架けてやるのかというのは、予算を取ってやるのかという意味だ。それで代議士に恩を売ってくるわけだ。私は「いや俺のところは俺がやるよ」と言った。全国の代議士の人心を掴むのは、そういうところから始まっている。それは一級建築士の趣味だ。天下を取る政略だったんでしょね。

伊藤 そういう土建の企業の集大成が列島改造ですか。

松野 私は、年中言っていたことをまとめて本に書いただけだなと思って、読みもしなかった。どうせ道路と橋だけだろうと思っただと言っているけれど、ふだんから聞いていることを集約したものとか見えていないから。

伊藤 それで狂乱物価ということになるでしょう。

松野 あれは一つのインフレでしたね。あのときはトイレット・ペーパーがなくなるといわれた。田中角栄が総理になった途端にトイレット・ペーパーがなくなる。オイルショックでしょう。「田中はトイレット・ペーパーまで買い占めているのか、あいつ

はいよいよトイレット・ペーパーまで買い占めたのか」という悪口を言ったから、印象に残っている。田中になって突然トイレットペーパーがなくなつた、あいつが買い占めたんだ。悪代官そのものだ、と私たちは思ったから、今でもその印象を持っている。

武田 先生に悪口を言われたくないですね。(一同笑い)

松野 そういう悪口を言いながら二年間話をしていればいいと思っていたら、二年経たないうちに替わっちゃった。

佐道 田中さんが七月に内閣を作って、すぐに問題になったのは日中国交正常化の問題ですね。先生が移られた福田派では、台湾の問題等々で、ああいうやり方でもいいのか、という議論が巻き上がったと思います。先生ご自身は日中国交正常化について、どうお考えでしたか。

松野 私は、田中らしくあわてやがったな、と思った。もう少し待てば、中国がもう少しおとなしくなるのに、こっちから飛び込んでおだてるから、中国が日中の主導権を持つてしまう。そういう感じを私は持つていた。もう少し待てば、日本が主導権を持つて日中国交回復ができた。こちらから飛び込んでいったから、向こうの主導権になった。そういう感じを私は持ちましたね。

武田 福田さんもかなり反対でしたね。

松野 反対だった。それは早い、ということですよ。まだ台湾と、米中の問題が済んでいない。米台の問題もある。なんであわてて飛び込んでいくんだ、二年早い、という感じがあった。私も福田も二年早いと思った。田中は今太閤といつても、朝鮮征伐に行くのとは違うぞ、朝鮮征伐にいつて負けて帰ってきたんだから、またあわてやがって、という批判をしながら、私たちは早い、と言っていた。たしかに早かったかもしれないね。アメリカがまだ慎重でしたからね。中国の国情がどうなるか。毛沢東以来、嵐のさなかですからね。ちよつと中国に利したんじゃないでしょうか。あれで中国の国情が安定したかもしれない。日中国交回復をした

から、あの政権が国際的にも認められたかもしれないですね。大
国では、日本が一番早かった。

伊藤 アメリカは結局、それに規制されることになりますからね。
松野 それがアメリカの機嫌を損ねたんでしょうね。やっぱり中
国の政情を見れば、もう少し落ち着いてからの方がよかったかも
しれませんね。

伊藤 アメリカの動向を見て、ですね。

松野 それから中国の国内の政権の動揺を見てからにしなければ
いけない。あれで中国の政府を安定させた。毛沢東の文化革命と
か、めまぐるしい嵐が吹いていましたからね。ことに共産国だか
らね。私は共産国を利するようなことはしない方がいいなと思っ
た。共産国を強化するようなことだ。

小池 あのとときは総務会がものすごく荒れましたよね。

松野 荒れた。総務会では、早い、という意見が多かった。しか
し彼はやってしまっていますから、いまさらどうこうできない。
あれもだいたい自民党の中でも強行した方でしょうね。今太閣だ。

伊藤 やはり総理というのは、やろうと思えばできるんですね。

松野 できるんだ、行政権の範囲は。

小池 あのとときは大平「正芳」が外務大臣でしたね。先生は大平
に対してはどのような印象をお持ちでしたか。

松野 大平はぐずぐずで、眠った牛みたいなものでした。悪い
ことはできないけれど、決断がない。話しても決まらない、
いつまでも同じことを言う。政調会長の時に一緒にいましたけれ
ど、同じことを毎日毎日言うんだから。大平、もういい加減にし
るよ、と思うぐらい同じことばかり言っている。粘り強いことは
粘り強いけれど、ちっとも決断しないで、ただ粘っている。

それでちょうど佐藤内閣の時、アメリカとの繊維交渉の時に、
いつまで経っても決まらない。それで通産大臣を宮沢に替えて、
宮沢の時に決めたでしょう。いくらやっても決まらない。決裂も

しなければ、結論も出ない。アメリカが手を焼いたのが大平の織
維交渉です。佐藤内閣の時ですね。それで宮沢に替えた。

武田 あれは田中さんが決めたんですね。宮沢さんの後ですね。

松野 田中でしたかね。

小池 大平が通産大臣の時、繊維交渉がうまくいかないときにク
ビを切るみたいな話は、先生の方にはあったんですか。

松野 ありました。佐藤は、もうこれは駄目だと言った。大平は
自分がる、留任すると思ひ込んでいた。

佐道 そういう大平さんであるにも関わらず、前尾「繁三郎」さ
んから宏池会を引き継ぐことができたのは、どういったところに
理由があるんでしょう。

松野 前尾というのは非常に人徳のある紳士だ。伊東正義とか前
尾というのは本当の紳士ですね。悪いことには一切手を染めない、
自分をつくらぬという人だ。ところが大平は、多少汚れても仲
間をつくる。馬鹿でも仲間が増える。あまりきれいな前尾だった
ので、突如としてクーデターを起こした。その発起人が田中六助
です。これが最初に前尾に、この際会長を替わってくれたらどう
だ、とやった。それで田中六助が大平内閣の幹事長になって名を
挙げた。それは前尾がオーソドックスだからなんだ。碁でいえば、
定石を外さない男だな。だから若い者からすると、いつまで経つ
ても頭を押さえられる。大平は馬鹿でも操れますからね。そこで
田中六助という才人みたいな者たちがたくさんで大平を担いだ。
そして自分の思うようにしたんでしょうね。

伊藤 その六助さんは、先生は評価されているんですか。

松野 六助というのは新聞記者として才能がありますね。安定し
た政治家ではないが、才能はある。先を見る目、こんにちを見る
目があるな。

伊藤 勘があるわけですか。

松野 勘がいい。前尾じゃ動かないんだ。いくら大平がいつても

動かない。定石を外さない。大平は馬鹿だから、大平の方がいい、操縦しやすいと思って、大平にしたんでしょね。それは田中六助は才人です。新聞記者としても、私が見ていても相当目先の利く男だ。大計を見るよりも、目先がよく利いた。

■福田赳夫との関係

伊藤 さつき先生は福田派になったとおっしゃいましたが、福田さんという人とのつき合いは、前からあるわけですか。

松野 福田さんは、驚くなかれ、彼が第一回の当選をした時から私は知っているんだ。私はその頃政調副会長をしていました。福田は後から、ずっと遅れて出て来たんですから。福田が第一回の当選をしたときに、真つ先に私は福田を呼んで「俺は政策のことはわからんから、福田君、一つ政策のことを教えてくれよ。ことに財政は俺はわからない」と言っただ。 「おお、いつでもいいよ」という話だった。それは昭電事件があったからだ。

伊藤 ずいぶん昔の話ですね。昭和二十年代ですね。

小池 「福田は当時」主計局長ですね。

松野 主計局長の前に銀行局長か何かやっています。福田赳夫の名刺が、昭電事件の日野原「節三」の自宅を捜査したときに出てきたんだ。問題はその名刺からだ。それで福田が約四年間、昭電事件のあいだ苦しんだ。

伊藤 その時はもう知っておられたんですか。

松野 その事件を通じて、福田という人間がこうやっておるが、福田というのは大蔵省で立派な人間だという印象を持っていた。どうして四年間かというのと、そういう軽微な者は捜査が一番あとなんだ。重大なものからやっていくと、四年ぐらいあとにしか福田の判決が来ないんだ。それで福田は何か判決になった。

小池 無罪だったんですね。

松野 その時は裁判官が、「これはまことに冤罪だ。あなたは四年間苦勞した。どうかひとつ、その時間を償うと思って、邦家のためにご尽力あらんことを願う」と言っただ。その裁判の記録を彼は持っていて、私に見せたことがある。裁判官が君は冤罪で気の毒だといったといったという判決の時の裁判官の記録を見せてもらった。

そういうことで私は、福田というのは一回会いたいなと思っただから、当選して真つ先に呼んだ。吉田さんは一所懸命福田をかわいがって、吉田さんがアメリカに行くときに福田さんをたしかつれて行ったはずですよ。私はその頃から、福田というのは立派な人だ、ということ、人間は好きだった。ただ非常に地味で、どちらかというと暗かったな。明るさはなかった。真面目さはあった。

「君はずいぶん苦勞したんだな」と言うと、「いやもつと俺は苦勞しているんだ。俺の家は高崎藩で一番の貧乏侍で、おやじは、兄弟五人ぐらいいる中で一人だけしか東京の学校にやれない、成績のいいやつ一人しかやれないという。兄弟をあわせたところ、おまえが一番いいから、赳夫だけ学校にやるといって、兄弟の中で一人だけ、東京の学校に入った。それで大根と蕎麦ばかり俺は食って育ったんだ」と言っていた。それで蕎麦が一生好きでしたね。兄弟で自分一人だけ選ばれた、そんな苦勞話を年中していましたね。

それで彼は昔で言う銀時計だ。銀時計で、授業料免除の特待生だったかもしれないね。よくできた男だ。それは本人から聞いた話で、私は、福田が派閥をつくる前から終始仲間として、友達として見ていた。だいたい池田派の時に、彼は派閥解消を唱えたんですね。

小池 党風刷新委員会「党風刷新連盟」ですね。

松野 党風刷新だ。彼は言葉の造語がうまいんだ。実にうまくつくるんだ。「山高ければ谷深し」とか、「油が切れれば油断大敵」とかね。造語がうまいんだね。「油が切れれば油断大敵」というのはオイルショックの時ですからね。彼はそういう言葉をつくるのが上手でしたね。「天の声も変な声」と言ってみたり。だから福田とは何となしに親しさを覚える。利用し合うわけではないけれど、人間として会えば、私はそういう尊敬の念を持っていましたね。

伊藤 どういう場面で会いますか。

松野 議会の議場では年中会いますからね。議場で会うと、「おい福田君」と言つてそばによつて話をしたりする。議会は毎日ありますからね。その時に「久しぶりだね、ちょっと寄ろうか」「じゃあ帰りに蕎麦でも食うか」といつて、そこで約束して、帰りに寄るわけだ。「たまには事務所に来いよ」「行こうか」ということもある。

伊藤 そうすると赤プリに行くわけですか。

松野 赤プリに行つて、いろいろな雑談をする。そう難しい話はふだんほとんどしませんからね。まあ雑談です。その中で、お互いの気持ちとか、いま何に関心を持っているかということがわかるわけだ。「油が切れると油断大敵だから」と言つてみたりね。

伊藤 福田派になるといふのは、やはりそういうことが背景にあるんですか。

松野 福田派になるのは、佐藤の時に、「佐藤に次は福田だろうね」と言つていたら、「福田だよ、あれは立派だ」ということで、私も保利も福田だと思ひ込んでいた。そこに田中派が旗揚げするから、こいつ、やりやがったな、と思うし、そこで敵対意識が出る。それで自然に、じゃあ誘おうかと言つて何人か誘つと、十七人が集まつた。俺は田中の下には行かない、あんな下品なやつの下はいやだ、あいつのところに行つたら金をもらったというのが

見えるから、俺はいやだよという輩が十七人揃つて、福田の方に رفتたわけだ。福田の方は、もう拍手で迎えるわけだ。だから私たちが行けば、福田派ではもう最高幹部なんだ。三池とか坊とか、倉石「忠雄」とかいましたよ。でも私とか保利とかが行けば、それは私たちを大事にするでしょう。

伊藤 その福田派はどんな構造になつていたわけですか。

松野 金銭のやりとりは、私たちは福田派の中では知りませんでした。それは田中龍夫とかが福田派でやつていた。

伊藤 福田さんの子飼いのー。

松野 坊秀夫とか三池信とかは子飼いの人です。党風刷新から一緒になつていた。私たちは金銭の出し入れまでは首を突つ込むわけにはいけません。

伊藤 田中龍夫さんなんかは、そつちの方なんですか。

松野 田中龍夫も福田の子飼いだ。

伊藤 福田派の派閥の会合は赤プリであるんですか。

松野 赤プリでやつていました。

伊藤 どの派閥とも同じように、週二回とか。

松野 週二回ぐらい、朝飯会ですね。

伊藤 代貸しみたいな人は誰ですか。

松野 代貸しの一番は、坊秀夫ぐらいでしょうかね。

伊藤 先生は外様みたいな形になるわけですか。

松野 まあ客分でしょうね。だから坊とか三池とか田中といつても、私や保利から見ればね。だから私たちは客分ですよ。まあ国定忠治の日光の円蔵みたいなものですよ（笑）。国定の一家の中には入らんでしょうね。福田派の中には入らないでしょうね。派としては入るけれど、福田の代貸しぐらいでは入らないでしょうね。まあ最高顧問ぐらいのところでしょう。

伊藤 そうすると十七人もいると頭でつかちになりますね。

松野 頭でつかちだった。みんな「おい、福田君」という態度で、

「福田先生」と言うのは少なかつたからね。まあ何かの会議の時は仕方ないけれど、みんな「福田君」ですよ。

伊藤 その「福田先生」と言う方の中心は、坊さんですか。

松野 坊、田中龍夫、渡海元三郎。塩川正十郎ももう少し下、中将ぐらいでしたかね。そのクラスですね。

伊藤 総員で結構な数でしょう。

松野 加藤六月というのがいましたね。それは相当いましたよ。八十人ぐらいいたでしょうね。

伊藤 そういうランクみたいなものはあるんですか。

松野 ランクは当選回数ですね。

伊藤 でもいちおう外様と子飼いとでは区別があるんでしょう。

松野 区別はあるが、外様の方が威張ってましたからね。いま息子で細田博之というのいるが、細田吉蔵も外様です。あれも一緒です。十七名の中にいた。

佐道 福田さんも扱いにくかつたでしょうね。

松野 それが福田派で、福田というのは党風刷新、派閥解消というのを唱えたんだからね。それがいつのまにか派閥になっちゃったんだ。

佐道 結束はどうですか。固い方ですか。

松野 私たちはどちらかというに住みよかつたですね。佐藤の時は厳しかった。佐藤は上下というのか、役人で厳しかったね。要するに上下という感じがあつた。福田になると上下がないな。

伊藤 でも福田さんも役人じゃないですか。

松野 福田の性格だな。佐藤は事務次官で、当時の官僚の中でずば抜けた厳しい官僚でしたからね。各省の中でずば抜けていた。役所の規律を守る。福田は局長で、事件で苦労して、堅さが抜けたんでしょね。世間の苦労を嘗めただけ、堅さが抜けた。だから非常に金銭に注意していましたね。一度思わぬ疑いをかけられたから。だから福田派は、金があまり集まらなかった。盆暮れの

手当も福田が一番少なかつたでしょうね。田中が三百万というと、福田のところは百万ぐらいではなかつたでしょうか。それでもついてくるのがいましたね。

伊藤 でも福田さんのところは、かなり財界人がついていたんじゃないですか。

松野 いい人がね。関西の芦原「義重」とか、好きなのがいましたね。

伊藤 赤アリだから、堤「清二」さんなんかもそうなんでしょう。松野 堤もそうでした。しかし財界人というのはみんな保険を

かけますからね。四分六、七・三につき合いますからね。自民党の中で一人につき合うわけではない。たいてい三・三・四ぐらいで三人つき合ふんです。だから資金も三・三・三・四ぐらいに割るんですかね。広く薄くつき合ふ方が利口でしょうね。誰になるかわからんから。

伊藤 そうですね。小泉さんになるとは思わないから。小泉さんにも保険をかけていた人がいるかどうか知りませんが。

松野 いない。保険はなかつた。

伊藤 今頃になつてあわてて支援団体をつくっているんじゃないですか。

松野 それで、田中はそういうことで日中の問題が一つあつて、あのロッキード事件はアメリカから風が吹いたんだね。日本よりもアメリカからロッキード事件がスタートしたんですからね。

■ 田中内閣崩壊

伊藤 その前に立花隆が「金脈の研究」をやりましたね。

有馬 『文藝春秋』ですね。

伊藤 あれはどのようにご覧になっていましたか。

松野 あれは私は非常に注目していたけれど、あれが事件になるかならんかまでは私には見えなかったですね。

伊藤 あのあと、外国人記者クラブでの質問があつて、それでかなり大事（おおごと）になるんですね。

松野 あれはたしかに立花隆の研究が一つのスタートになったけれど、あれを読んだだけでは、田中だからあるだろうとは思つたけれど、でも本人が直接どこまで関与しているかということとはわからなかった。私たちは、直接関与は逃げますからね。だからストーリーはこれだろうけれど、直接関与したのかなという感じがあつた。

伊藤 あれは公表されたデータで構築して、あれだけのことを突つき出したわけですね。

松野 本人が授受したのかどうか。

伊藤 だけど、田中派なり田中軍団というものの金脈が露わに出たわけでしょう。しかもあれは田中さんが直接関わっている企業、特に河川敷の関係とか、そういうものがみんな出たわけですね。

松野 河川敷はもつと前に出ていましたけれどね。

伊藤 あれは議会でも問題になったんですね。

松野 議会でも問題になった。そういうときに農林省は、あれは防災ダムとか、遊水池だとかいう。それにモーター、ポンプをつけて、それで掻き出すわけだ。これは当然農林省の仕事だと言つてみたり。それで浮かんた土地が、いつのまにか田中のものになつていたりする。農林省は、所有者よりも、防災のためにポンプをつけるということばかり答弁する。田中のためにやつたとは言わない。あそこの農地の冠水を直すために、あの頃一番大きなポンプ、七〇〇馬力ぐらいのポンプを三つか四つつけた。それは農地のためにやつたので、田中のためにやつたとは言いませんよ。だからなかなかつかみどころがないんだ。その所有者のことは私たちは知らないという。冠水されたものを排水することは、

農林省の当然の務めですという。農林委員会でいくら言つても、それ以上のものは出ないんだ。所有者が誰か、そんなことは問題ではない。冠水した農地を排水するだけのこと、これは前から計画がありましたという。冠水したところが田中の土地であつただけで、行政の範囲では事件が出てこない。

伊藤 そういう田中の金権政治みたいなものを、先生の側は批判すると言つても、同じ党内ですからね。

松野 批判はするけれど、目くそ鼻くそで、議員同士はなかなか言いにくいんだ。

伊藤 自分だつて何かやつているんでしょうからね。

松野 おまえだつてやつているじゃないか、ということになる。なかなか仲間同士では言えませんね。今度の田中真紀子と鈴木宗男みたいな、わかっていると言えないでしょうね。聞けば役人は知らないというでしょう。仲間同士で、バラしたり投書したりすることは仁義に反することだ。他党、共産党なら別だ。自民党のやつが自民党の政治資金をバラしたなんていうと、仮に正しくても、みんなから爪弾きされるでしょうね。自民党におれなくなるでしょう。田中なら「おまえだつてやりやあいいじゃないか」という言い方をしましょう。

それは不正があろうがなからうが、刑事事件は別として、仲間同士それをバラし合うということはあり得ませんね。なんでいけないだ、ちゃんと政治資金規正法に則つてやつているんだ、と形だけ届出だけは合法にしていますからね。政治献金でも、形式は全部政党の政治献金につくることぐらひは、どの代議士もしていることです。やりにくい時は仲間同士帳面を譲り合うんだ。「これはちよつと困るから、君の政治資金に入れてくれ。その代わり半分やるから」「よし、半分か」「半分だ」。そういうことはお互いに親しい仲間がやることですからね。これを十人に分けなければいかん、名前を貸してくれ、百万円ずつ十人に分けるぞ、とや

る。百万ならいい、一千万円一人だけではいかん。だから百万円を十人にする。その代わり五十万やるからという、みんな五十万取るでしょうね。そういう意味で、政治資金同士は自由になっているんだ。民間と政治資金はうるさいけれど、こっちは自由なんだ。政党から議員にいくらやっても自由です。田中派の政治団体から山田太郎にいくらやっても自由です。制限はない。政治団体同士は自由なんです。そこに抜け道がある。会社と個人には制限がある。こっちは自由なんだ。だからみんな分けてもらうわけだ。一千万を百万に分ける。その代わり、「俺が取ってきたんだから、君たち半額だぞ、あとで半額持つてこいよ」ということで、半分ずつに分けてお互いにやればいい。帳面は裏同士でやればいい。帳面につけてもいいんですけどね。そこに政治資金の抜け道がある。

だから仲間同士ではバラすということはあり得ない。いくら調べても、そんな下手なことはない。またそれをバラして何になるんですか。正義のためって、自分が正義を行なっていれればいいけれど、正義の侍がそんなことをするわけがない。だから田中のことも、立花の話は、みんな私たちはうすうすそうだろうと思っても、それを叩いたり、摘発することはできない。

伊藤 それで、田中さんが退陣するという前後ですね。これは辞めるだろうな、辞めざるを得ないだろうな、という感じでしたか。松野 私は辞めるだろうな、と思った。田中自身の議会においての顔色と答弁が、最後は支離滅裂でしたね。言い間違え、言い直し。予算委員会でも、言い間違え、言い直し、もう正常だとは見えなかった。これはもう近く辞めるなと思った。

伊藤 田中真紀子も言い直しばかりやっているじゃないですか。松野 真紀子のはちょっと違うけれど、田中は混乱していたんですね。

小池 それだけ田中にとっては急転回だったんですね。

松野 急転回だな。

伊藤 先生からご覧になっていても、やはり急転回でしたか。

松野 急転回だった。身近に感じたな。

伊藤 そう簡単につぶれるとはー。

松野 思わなかった。私は早いと思った。長くもてばもつほど悪くなるな、と思った。

佐道 最初から二年経ったら、という意識で見えられたところがー。

松野 一年になったわけだ。

佐道 いつくらの段階から、これは絶対に駄目だなと思われましたか。

松野 こっちは早いほどいいと思っているから、早く辞める、と思っていた。田中の末路は寂しかったですね。退陣の弁というのも、颯爽と出て来た太閤にしては、なんだかわからなかったですね。何のために辞めるのか。天下国家のために辞めると言うわけにもいかんし。最後の退陣の弁は、私が見ていて、なんで辞めるんだろうと思った。はっきり言えば、金権問題に追われて、と言うのだろうけれど、そうは言っていない。

佐道 田中内閣の時には、日中正常化問題を含めて、いろいろなエピソードがあります。たとえば通年国会の話とか、小選挙区制を強引にやろうとしたりしたこととか。小選挙区制の話は、先生は選挙制度調査会長を長く務めておられたのですが、何か関係がございませうか。

松野 彼は小選挙区で一人一区でやろうと言っていましたよ。その前に彼は三人区でいこうじゃないか、と言った。三人というのはなんだ、といったら、敵と味方と真ん中、その真ん中をとればマジョリテイがとれると。

伊藤 三分の二になればいいわけですね。

松野 二人だと五分五分になる。彼はマジョリテイをとれる三人

区が大好きだった。だから中選挙区を中小選挙区にしよう。それで過半数をとつてから、小選挙区にして二大政党を作ると。だから彼の案は三人区だった。「おい松野、三人区をなんとかしてくれ。それから小選挙区にするんだ」と言っていた。

佐道 前からそういう話はあつたんですか。

松野 前からあつた。彼が幹事長の時代からあつた。

伊藤 佐藤内閣ですね。

松野 佐藤内閣の時からあつた。佐藤内閣の頃から、総裁任期は三年説だつた。二年じゃ駄目だ、三年だと言っていた。

佐道 三が好きなんです。

松野 「総裁選挙をやつて一年間やると、もう一年ですぐ次の総裁選挙になる。だから三年で、その代わり二期六年まで、これでどうだ」というのが彼の幹事長の時の考えだ。それと小選挙区制、私のところに持つてきたのは、それだつた。私は、「三年で二期は、この次からする。佐藤の時はいらない、この次からする。この次には、野心を持つて、おまえがなるんじゃないのか。それで三年にして六年やろうという。そんなずるいことがあるか」なんて私は冷やかしたことがあるんだ。それと小選挙区だ。

彼が出たときは本当に今太閤じゃないけれど、列島改造の本が売れ、日中で、本当に今の小泉に近いような人気が一時は出ました。しかし小泉とは違うから、私はつくられた人気のように見えただ。いつか転びそうな、危ない人気だと思つた。それは彼の過去を知っているからだ。過去が危ないから、危ない人気だ。それは政治資金です。小泉の場合は、風船のようにきれいな人気で、過去がない。田中の方は、過去を知っているから、苦労に苦労を重ねて作り上げた人気だから、危ないと思つた。

伊藤 田中内閣は途中で経済状態が悪くなりまして、福田さんが蔵相に入りますね。このとき福田さんが入るべきかどうかということ、いろいろ議論があつたじゃないですか。これはどうでし

たか。

松野 いろいろ議論があつた。私は入るべきじゃない、ときかんに言つたけれど、福田は、田中だつていつまでも続くものじゃない、と言つて進んで入りましたね。私は止める方だつた。それは、石橋内閣に岸さんが入つたことがある。

小池 「その時、岸は」外務大臣で入つて、副総理格でした。

松野 岸が入つて、石橋が倒れたら副総理がそのまま総理になつた。福田はそのことで、「我慢して俺が入れば、田中は長くない。あとは俺に来る。敵にいるより中から取つた方が早い」といつて、進んで受けた。私は、入るな、といった。福田はその時に岸さんのことを言つた。「岸さんが我慢して総裁選挙に負けて、野におつても、入つたじゃないか。それで結局岸内閣が生まれたんだ。田中はいやだけれど、俺が入れば、田中の次に俺になるんだ。外から攻めるより、中にいる方が近道だ」といつて、福田は進んで入つた。私は外から、と言つた。

伊藤 派閥の中でも相当いろいろ議論があつたでしょう。

松野 ああ、いろいろ議論があつた。福田本人は、「それは俺だつていやだよ。いやだけれど、ここが我慢のしどころだ。韓信の股ぐりだ」と言つていました。

伊藤 もちろん、国家のために経済運営をやるのは俺しかないと。

松野 われわれの仲間では、そんな話よりも、あんな馬鹿なやつの内閣に入るのか、という話だつた。「韓信の股ぐり」だ。私は「でもそれは君は君の人生だから、君が決める。俺ならいやだ」と言つた。

伊藤 今度は政治資金問題でワーツとなつたときに、三木さんと福田さんが内閣を去りますね。このときはどうなんですか。

松野 このときは私は去る方が正しいと思つた。あれが一つの大きな決定打だと思ふ。その次は今度は三木と福田の争いになつ

た。椎名裁定で、三木か福田か、ということになった。私は当然福田だと思ひ込んでいましたからね。

伊藤 このときの福田さんの揺れ、入るか入らないか、出るか出ないか、こういうことは本人がー。

松野 本人も非常に悩んだんです。それは岸内閣の時に、池田、前尾、三木が出た。

小池 灘尾弘吉ですね。三閣僚辞任ですね。

松野 その時には、いかにも砂をかけて出るようで、内閣で共に組んだ以上はその責任は一部分担すべきだ。福田も私たちもそう思ったわけだ。岸の攻撃をしていたんだ。それと同じことになるんだ。安保の騒ぎの責任で、三閣僚が辞任した。「三閣僚が」辞任しても、岸さんは動ぜずにそのまま押し切りましたけれどね。田中の場合と少し政治情勢が違う。あの「岸の」ときは反対勢力の全学連とか共産党との戦いだっただ。今度は金権とか党内の問題だ。それがどうか、とだいぶあのかきは苦労しましたね。しかし福田は、「区切りをつけないといけない、悪い空気の中にいると自分も悪くなる」と言っていた。

伊藤 道連れになりますね。

松野 金権体質を自分がかぶるだけではない。三木もそうだったでしょうね。三木は特に清潔な男だった。それで二人で話し合っただんでしょね。あれは大きな衝撃というよりも、政治家として一つの道でしょうね。最後までつぶれる船に乗っている必要はない。

伊藤 田中内閣は、それで大きなダメージを受けることになりましたね。

松野 閣僚がみずから辞めるということは、内閣には打撃ですよ。岸内閣でも、あの時はこたえましたからね。あれで反安保闘争にますます火がついた。三木と灘尾と池田が辞めたから、全学連はますます勢いづいた。

伊藤 あとで池田さんは戻りますけれどね。

松野 ひとつの世論を決めたでしょうね。

佐道 福田さんが一度閣内にお入りになって、お辞めになるとき、そのあとの見通しについては、福田さんがこれ以上同じ泥船に乗っていたら危ないというお話でしたけれど、実際は椎名裁定になったわけですね。当時はどうなると予測されていましたか。

松野 彼は当然、田中のあとは自分に来ると思っていたでしょうね。

佐道 どういう手続きで。

松野 党内の世論は自分に必ず来る。そこにまた中曽根がおるわけだ。大平、中曽根、福田、三木の四人ですから。その当人は必ず自分に来ると思うけれど、三木と福田はだいたい閣内で手を握ったと思う。大平と中曽根がまた手を握っている。そこで福田は大平をつかまえていました。それで大福連合があった。大福連合で過半数を取った。そこに椎名裁定というのが突如として、なんとなしにー。

伊藤 あれはなんとなしに、ですか。

松野 何となしにだ。総裁選挙することに、誰も自信がないんだ。

伊藤 誰もー。

松野 誰もない。福田は自分が万全であるべきで、俺がなるべきだと決めているけれど、それでも不安なんだ。あとの三人は、誰もなる自信がない。福田は不安、三人は自信がない。そこで期せずして、副総裁だった椎名のところにもみな相談に行くわけだ。そのうちに、いつのまにか世論は椎名裁定で行こうじゃないかとなった。この際、田中の金権のあとに、自民党が総裁選挙などをしてまた争うことはよくない。ついこのあいだ、一年前に角福戦争で総裁選挙を争ったばかりだ。まだ任期も途中で二年経っていない。そのあいだ臨時に調停しようじゃないか。それが椎名裁定

だった。それは総裁選挙から二年経っていなかったということ。

ついでこのあいだ、忌まわしい噂の高い金権選挙をした。第二に金権で田中が倒れた。こう考えると、自民党が天下に向かつて堂々と胸を張る時期じゃない。そういうことから椎名裁定というのを、いつのまにかみんな考えた。みんな選挙をしたくない。

伊藤 選挙するといっても、一年前にやったからみんなお金もないだろうし。

松野 金もないし、自信もない。だからみんな選挙をしたくない。

伊藤 その金権選挙というのは、松野先生も一所懸命やったわけでしょう。

松野 やりましたよ。

伊藤 福田さんの方だって、お金がないわけじゃないし。

松野 もうないです。総裁選挙も、二度は財界に頼めません。みな自信がない。その上に、倒れたのが金権で倒れたでしょう。そこでなんでまた金権選挙ができるのか。金権で倒れた田中内閣のあとに、また総裁選挙で金権の匂いがするなら、なんでやれるのか。

伊藤 どうしても金権になっちゃうでしょう、四人で争ったら。

松野 なるに決まっている。その前に悪例がありますからね。だからみんな総裁選挙は怖かったんです。そこに突如として椎名裁定が出て来た。福田は、福田・大平連合で過半数を取って総裁選挙をやるかと思っただけで、大平がご承知のようにグズだから、いつまで経っても返事をしない。グズでグズで、返事をしない。だから福田だって自信がない。毎日やっていったんだから。大平と朝晩会っていたんだ。

佐道 大平さんが早めに返事をして、じゃあこの際「大福」で行こうとなっていれば、総裁選を形式的にでもやって、きちんと形をつけたんでしょうか。

松野 なったでしょうね。大平が一言、福田がいいと言えば、決

まったでしょうね。それは、大平が亡くなったときに福田が、

「鈴木善幸でどうだろう」と言ったら、「いいだろう、鈴木善幸、賛成だ」といってそれで決まったでしょう。だからあの時に大平が福田がいいと言えれば決まったでしょうね。大平というのはグズでグズでグズで、返事をするような男じゃない。中曽根はまた角福戦争の時のしりが残っている。だから誰も総裁選挙をする自信がない。そこで時の氏神として、誰かが決めればいいと。

じゃあ長老の椎名にしようか、ということになる。岸さん以来、わりに清潔な方でしたからね。

小池 岸の一番頭ですね。商工大臣―商工次官の関係ですから。

伊藤 だけどいちおう岸さんとは別れたわけだし。

小池 「椎名氏は」福田とはあまりよくなかったんですか。

伊藤 福田とは悪いから。

松野 あまり福田とはよくなかった。だけど、わりに公平だったでしょうね。無派閥みたいな人でしたからね。

伊藤 中間派ですね。

松野 中間派だから一番無難だ。

小池 自民党の三賢人と言われましたね。

伊藤 そんなことは党規約にも何もないことでしょう。

松野 何も規約にはないですよ。そんな元老とか、西園寺「公望」さんみたいなものではないんだから。

伊藤 結局みんなが下駄を預ける。

松野 いつのまにか、椎名にどうだ、といったら、反対するものがいなくなっていたんですね。

伊藤 でも一札入れたわけですか。

松野 最後には椎名が一札とったんです。いよいよ椎名裁定でやろうじゃないかと言いつつ出したときに、椎名がいつまでもぐずぐずして、「おれはそんなことはできない」という。「だって君しかいないじゃないか」「いやおれはな」とやっているわけだ。「だって

俺のいうことを君たちは聞くか」と言っ、椎名が一人ひとりに裁定に従うという確約を取ったんだ。椎名裁定にしようじゃないか、椎名頼む、ということになってから、椎名がとったんです。だからあとから取ったんです。椎名が行司役についてから、答申案を出す二日ぐらい前に、自分のいうことを無条件で聞くかどうか、四人に確約書を書いてくれと書いて、それから書いたんだ。

伊藤 あの時、椎名暫定政権説というのもあったでしょう。

松野 それもありました。まあ、その四人から、椎名が最後に答申案を出す二日ぐらい前に確約書をとったわけだ。「俺が出してみんな聞かなかったら俺は恥をかく。聞くのか」「聞く」。それじゃあということで、四人に一人ずつ会って、一人ずつ確約書をとったわけだ。それで二日か三日後に決めたわけだ。

伊藤 松野先生はどうなると思っていましたか。

松野 私は、福田が第一、大平、中曽根はないから、大穴が三木。福田が本命、大穴が三木、この二人しか考えなかった。中曽根、大平は、党内の空気から見えない。中曽根はあり得ない。

小池 大平や中曽根は格下、ということですか。

松野 中曽根は角福戦争の時にあれだけの非難を浴びたから。

伊藤 じゃあ大平さんは！

松野 大平はグズだから。椎名だつて人を見るだろう（笑い）。

佐道 大平さんは、ぎりぎりまで自分がいけるんじゃないかと言っていたという話がありますね。

松野 思っていたでしょうね。

小池 田中派の応援があるわけですからね。

松野 田中の応援は大平だ。佐藤は、「福田だろうな」と言っていましたけれどね。佐藤は別に関与していませんでした。その時は辞めていたから。

武田 佐藤さんは全然影響力はなかったんですか。

松野 もう影響力はなかった。でも佐藤と椎名は、電話ぐらいで

は話していますけれど、「福田だろうな、おれはわからんよ」と言っていた。私は福田か三木か、この二人しかないと思っていた。伊藤 でも福田派としては、福田に来てくれないと困るじゃないですか。

松野 三木だと少数でどうするだろうな、と心配していた。まあ福田かな、この二人のどちらかだと思っていた。そして椎名がみんな割り振って、三木にした。幹事長を中曽根にして、大平と福田を閣内に入れて、挙党態勢を取ってくれというのが条件だ。幹事長は中曽根で、福田と大平は必ず入閣してくれるか協力してくれと。それで、福田の代理に私が入ったわけだ。

有馬 あの時椎名裁定というのは、一般の国民は裁定が出て三木さんに行つて、あつと驚いたというところがあつたと思うんですが、党内の雰囲気として、そこまでやらないともう世論の金権批判をかわせない、という切迫したものがあつたんですか。

松野 党内にはありましたね。党内では、三木に「決まってる」喜んだ。それがなつても敵はできる。三木は少数だから、一番敵がなかった。党内基盤が弱かったから、それだけに三木になったときにみんな非常に安堵しましたね。福田なら福田で、また福田派の力が出て来る。

伊藤 じゃあ今度の小泉も同じようなものじゃないですか。

松野 小泉は少数でしょうね。小泉も三木に似たような少数でしょうね。

伊藤 これ「小泉」は裁定じゃなくて、選挙で選ばれたから。

松野 天の声でしょうね。時の利、天の声だ。三木が言ったことは、あれ「小泉」と同じように、やっぱり政治改革で、彼が真っ先にやったのは政治資金規正法だ。自分の政党の資金を縛るんですから、党内は喧喧諤諤です。なんで保守党をつぶすんだ。三木はもともとバルカン政党だから、保守党をつぶそうとしている、とね。

伊藤 じゃあ小泉と同じじゃないですか（笑い）。

松野 兵糧を断つというんだから。

伊藤 これも同じだ（笑い）。

松野 自分で兵糧を断つ、そんな馬鹿なことがあるかと、党内が真つ先だ。私はその時の政調会長をしていたから、「松野も本気でやるのか」と言われた。「本気だ」「自分の兵糧をみずから断つ馬鹿があるか。兵糧は蓄えるべきものだぞ」という。それで参議院の時は与野党同数でしたからね。衆議院はなんとかやっただけで、参議院は同数だ。河野謙三議長が一票入れて通った。あんなことはありません。

伊藤 三木内閣ができるときは、もう混乱の極でしょう。さつきのお話では、中曽根幹事長―。

松野 灘尾総務会長、私が政調会長。

伊藤 閣僚には、福田さんは―。

松野 入っているけれど、党内、総務会は常に少数です。

伊藤 何が少数なんですか。

松野 三木派というのはほとんどないですからね。だから妥協しながら、妥協の産物でいったわけだ。まあ小泉みたいに、力というか、自分の主張だけで行かないものだから、妥協しながら党内運営をやってきたんです。だから三木の政治は妥協です。政治資金規正法も妥協に妥協を重ねて、あの案ができたわけです。もっと厳しかったんですが、それを有名無実にした。

小池 三木内閣の成立の過程で、党三役が最初に決まりますね。

党三役の決まり方は、中曽根はわかるわけですが、先生と灘尾さんの決まり方というのはどういふ感じだったんでしょう。

松野 それは「私は」福田の推薦というかわりりで、すぐに決まりました。灘尾は無派閥代表だったでしょうね。

伊藤 そうすると大平派は―。

松野 大平は閣僚に入れた。

小池 基本的に四人で組閣をしたのではないのですか。

松野 ほとんど三木さんが原案を出して、それを私たちに示しましたね。その時に私が覚えているのは、稲葉修が防衛庁長官だった。そして坂田道太が法務大臣だった。それで私は、「これは三木さん、入れ替えた方がいいんじゃないですか。坂田は若いから、稲葉の年寄りの方が防衛長官よりもいい」「そうだな、じゃあそうしようか」ということで、稲葉を法務大臣にして、坂田を防衛長官にした。その稲葉が、田中事件になるんだ。運命というのは面白いものですね。稲葉と田中は仲が悪かったんですね。

伊藤 同じ県「新潟県」ですね。

松野 選挙区が違う。それが田中のロッキード事件の法務大臣だった。あの時は坂田が、「あれは助かった、もし俺だったら困ったよ」と言っていた。坂田ならできなかったかもしれない。坂田は終始田中から資金援助を受けていましたからね。選挙のたびに資金援助を受けていた。坂田は田中派じゃない。隠れ田中派だ。石井派の名残で、どこに行っていましたかね。田中派じゃないけれど、常に資金援助を受けていた。要するに隠れ田中派がたくさるんいる。

伊藤 各派閥にいるのかな。

松野 各派閥に隠れ田中派がいる。

佐道 当時は「坂田氏は」無派閥とみなされていましたね。その坂田さんが防衛庁長官になった。ハト派の三木内閣で、しかも文教族であった坂田さんのところで、今までできなかった日米防衛協力がグツと進んでいくという話になるんですが。

松野 そうそう、逆にね。だいたい特に必要のないこと以外は、これを変えてくれと言えなかった。

■三木武夫との関係

伊藤 先生は三木さんとの関係は前からあるんですか。

松野 派閥は違って敵味方だったけれど、前からずつつながりがあります。森コンツェルンの森「蠱視」さんは政友会で、私の父と親しかった。森睦子さんも、きれいなお嬢さんで、私の兄弟は男三人いたから、森さんのところのきれいな娘をもらおうじゃないかなんていう話が出たんだ。しかし森の方に、「松野のところの不良には駄目だ」といって断わられたのを、睦子さんは覚えている。私の方は知らないわけだ。松野のところの不良は駄目だ、といって親が断わったという話を私にするんだ。そっちの話はこっちは知らなかった。

だからおやじ同士は親しかったんですね。それからあの息子が出たときに、私は一緒に代議士になったので、それで親しい。三木というのは、そのあとで、そういう縁故関係で、直接政治行動を共にはしないが、お互いにこういう人だ、ああいう人だということ、廊下であったときに挨拶ぐらいしていた。演説は上手だった。吉田内閣の時に三木は三回も不信任案をやりました。名演説だった。だから三木というのはいやなやつだ。知ってはいるけれど、演説が上手で、吉田さんの不信任案を三回やったんですからね。あのとき改進黨の幹事長をやったりで、知ってはいるけれど、ずいぶんギリギリするような男だなと思っていました。

伊藤 知ってはいるでしょうけれど、親近感はあまりなかったでしょう（笑い）。

松野 親近感はなかったけれど、ある程度の人物は私は知っていました。

伊藤 それで三木内閣になって、「松野先生は」政調会長になっ

松野 総裁選挙の時には相談に行っているもの。角福戦争の時に三木に、「なんとかならんか」と相談に行った。

伊藤 なんとかならなかったですね。

松野 「いや、松野君、こういうのは今日いろいろあつてね。いろいろ君、あつてね、即答はできないよ」という。「いつ返事をもらえますか」「まあ」とか言っているから、多少田中に近かったかもしれないな。「田中内閣に」入閣したんだからな。なかなか上手だった。いちおうの政治家は、敵味方でも知ってはいるんです。またその許容範囲の中でお互いにつき合うから。人物は尊敬しながら敵になったり、味方であっても軽蔑したり。だから政治家はそれぞれ見ているんですよ。

伊藤 その三木内閣の政調会長として三木さんを支えていこうということになったんですか。

松野 それが一番はつきりしたのは、三木というのは味方が少ないやつなんだ。ただ彼が言うのは、政党「政治」の筋が通っている。私たちは自民党の中で筋を通してあるんだけど、彼は民主政治の中に筋を通した男なんだ。その差が私に知らないことで、勉強したところだな。私は自民党の筋しか知らなかったんだ。三木は議会の筋を知っているんだ。その筋で、三木というのは、私たちが知らないものを知っているなと思った。そのうちに、たまたま内閣を共にした以上、献身的に応援してやろうかなと思った。そうしてみると、福田の言う方が小さいんだ。福田は福田派を中心にものを言う、また自民党を中心にものを言う。三木は国会を中心に、日本を中心にものを言う。

伊藤 三木派になったわけではないでしょう。

松野 三木派にはならないよ（笑い）。福田には、「君の言うことは間違っている」と面と向かって私は喧嘩したことがある。それで一週間ぐらい物を言わなかった。

伊藤 福田派全体はどうだったんですか。

松野 私は政調会長になったから、福田派にあまり顔を出さなくなつた。たまに行きましたけれど、あまり顔を出さなかつた。

伊藤 じゃあなんとなく福田から離れたような格好になるでしょう。

松野 離れた格好に、自然になる。福田はあのとき副総理格ですからね。三木内閣の閣僚ですから、年中会わなければいけない。あの時は副総理という格で福田は入っているんですからね。三木の言うことの方が筋が通っている。

また三木というのは、一日おきに公邸に呼ぶんだ。それぐらい熱心で、公邸に来てくれ、七時頃になると公邸に來いという。それで民主政治の話やいろいろな話を、卓を叩いて、二時間ぐらいするんだ。

伊藤 触られていたんじゃないですか。

松野 触つて、こうやつて。

佐道 膝を触られたりするんですね。

松野 そうして毎日毎日洗脳される。話しているうちに、なるほどこれは本当のことを言っていると思う。とにかく初めから私は公邸だ。公邸で、大したご馳走はないんですよ。それで二時間ぐらい。それがまた好きなんだ。そのうちにすっかり洗脳されちゃつた。かつてそれまで政党政治をこんなに熱心に口説かれたことはないと思う。そのうちに自然に三木の考えが入ってくる。それで考えが福田と離れてしまう。今度は逆に、福田に説教するようになる。

いろいろな政策の中で一番大きなのは、田中のロッキード事件で田中逮捕の時だ。たしか寒いときだったでしょう。私は本当に知らなかつた。朝七時にニュースをつけたら、いきなり田中逮捕のニュースが出たので、それから飛んで走って本部に行った。

それから福田がそのことをずっと言う。「松野、おまえは知つていてなぜ俺に言わなかつた。また三木も、俺は副総理なのに俺

に言わなかつた」と言う。そのことが福田・三木の争いのスタートになる。田中逮捕を自分に言わなかつたということだ。私は福田になんべんも聞かれた、「君はいつ知つたんだ。三木からいつ電話がかかつたんだ」「電話なんかかからないよ、俺はニュースで知つたんだ」「そんなことはないだろう。三木は俺にも言わなかつた」という。そのことが、三木・福田の溝になった。田中逮捕のことを自分に言わなかつたということだ。

田中の問題も進んできたものだから、毎日毎日新聞に田中の問題が出るわけだから、三木はその二時間ずつ講義している中で、「困つたね、困つたね。しかしこういうことは政治は関与しちやいかんからね」というふうなことをフツと言つた。「いかなる事態が起きてても、日本の民主政治は健全でなければいけない」、そんなことを二、三日前に言つていたことを覚えてる。その時は一般論だと思つた。それが要するに田中逮捕とつながつた話だということの後からわかるけれど、その時はそんなことしか言わなない。「いま新聞に出ているが、こういうことは政治が関与しちやいけないから」というだけだ。

伊藤 あの時は、いつ逮捕か、という新聞がたくさん出ていたじゃないですか。

松野 そういうことが新聞に出ていた頃、「こういうことはね、松野君、政治は関与しちやいけない。しかしいかなる事があつても、民主政治は守らなきゃいけない」と言つたことを私も覚えてる。それは新聞にも書いてあるときだ。私も心配だから、田中はどうなるんですかと言つた。あとで聞いてみたら、いろいろなことを稲葉は三木さんに報告していたらしい。しかし逮捕の話はしなかつたんだ。

小池 稲葉さんが三木に言っていないんですね。

松野 そう。「逮捕の報告を」したのは、その晩の十二時だそう。稲葉は三日ぐらい前に知つていた。もちろん検事総長から。

しかし稲葉は三木に言わなかった。言ったのはその晩の十二時だそう。それはもう、早く言うことの方がよくないと思った。しかしその前に逐一いろいろな報告はしていた。逮捕のことはその晩にしかししない。だから私を知るわけがない。しかし状況は報告していた。それを福田が問題にした。

伊藤 三木内閣の政調会長としていろいろなことをおやりになつたと思いますので、そのことから次回は始めていただければと思います。

松野 どんな項目があるか、項目だけ出してください。

伊藤 さつきおつしやつた政治資金が一番大きいでしょう。

松野 そうですね。

伊藤 それから政治改革。

松野 政治改革は政治資金でした。

伊藤 中心はそうですね。そのことを中心にお話しいただいて、それからいまお話のありました田中逮捕以後の問題ですね。

佐道 挙党協ですね。

松野 そのへんにしましょう。わかりました。

伊藤 挙党協は、先生には敵なんでしょう。

松野 敵だ。保利茂が敵なんだ。敵と味方が入れ替わるんだから、

激しいんだ。

伊藤 本当ですね。

松野 いままでの盟友が敵味方になる。

伊藤 三木さんに膝をさすられて。

松野 すっかり。

武田 洗脳された。

松野 あれぐらい熱心にやられれば、女性だってなびくでしょう。

伊藤 それでは日取りをお願いします。

松野 私は選挙の当日に解説をしなければいけないから。

松野 私はこのあいだ知事に言ったんだ。「君たち橋を造つたりするな、橋を造つても十億かかる。十億の橋を一つ造つたと思えば、優秀な小学生に百万円ずつ千人に奨学金を出せるよ。人間をつくれ。小学生の優秀なのに百万円ずつ千人にやつてみる。県の奨学金だ。その千人のうち十人でも成功すれば大成功だよ、そんなふうにしる。橋に十億かかるんだから、そういうところに公共事業を使え、人間に公共事業を使え。馬鹿もいい加減な橋を造るな。それは熊本で有名なのは、いまだに加藤清正と細川護熙だろう。あと歴代の知事の名前を覚えてやるやつは一人もない。歴史の人をつくつてみる。菊池武時、武光、人間つくり金に投資しろ。これを忘れるな」と言った。

あなた方にはたくさん若い学生がいるけれど、学生に奨学金をやればいいと思うけれど、いまの学生は奨学金をもらうとかえつて墮落する。小学生ならいいだろう。大学生に奨学金をやつても駄目なんだ。小学生ぐらいでなければ。

伊藤 しかしいまの小学生はどうか。

小池 いや、小学校はお金がかかりますからね。

伊藤 親にやらなければ駄目だ。

松野 小学校に百万円ずつやつて、その頃から育てていけばいいのが出るだろう。大学生になったらもう遅いんだ。ある程度ずるさを覚えているから。小学生から、双葉の時からじゃないといいものが出てこない。

伊藤 大学院生にやつた方がいい(笑い)。

小池 もうずるいことを知っていますから。

松野 あるいは成績何点以上取つたものといえば、一所懸命それを取るかもしれない。オリンピックだって、金メダルを取つたら賞金出すと言えは取るもの。逆に点数でここまでとれたら奨学金をやるといったら、勉強するかもしれない。

小池 先生、でもゆとり教育の時代ですから、点数がよくわから

ないんです。点数をつけないですから。

松野 どうして点数をつけないんだろう。

小池 差別をするから。いま一等賞とかもないですからね。徒競走でも、みんな一等賞。

松野 あれが間違いだな。

伊藤 塾に行くと、歴然とクラス編成は違うし、番号はついていてる。うちの孫なんか喜んでいてる。

松野 塾の方がいいんだ。私は塾の教育の方が正しいんだと思う。学校教育を塾教育と一緒にして、どっちか好きな方に行けとすればいいと思う。資格は同じで。

伊藤 やはり競争心というのがありますからね。

松野 点数をつけないのはねー。

小池 だから塾に行けないと、本当に能力の差が出てしまいますね。うちみたいにエンゲル係数が高いときついんです。

伊藤 それは食べ過ぎというか。(笑い)

松野 どうも今日はありがとうございました。

一同 ありがとうございます。

政局関連年表

「東京都議選概要」

二月七日

東京都選挙管理委員会が都議選の日程を六月十五日告示、二十四日投票とすることを正式に決定。

三月八日

自民党都議団が議員総会開催。森首相では選挙に勝てないと、全員離党して戦うなどの意見が出る。

四月二十六日

小泉内閣発足。

五月二日

都議会立候補予定者と小泉首相との写真撮影。

六月十五日

都議選告示。

六月二十四日

都議選投票。自民党勝利。

松野 頼三

オーラルヒストリー

第10回

[2001年8月1日12:00~14:00]

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

有馬 学 (九州大学教授)

佐道明広 (政策研究大学院大学助教授)

小池聖一 (広島大学助教授)

(於：松野頼三事務所)

武田知己 (政策研究大学院大学特別研究員)

靖国神社問題と田中首相について

松野 「靖国神社参拝問題について」……いつも戦犯の合祀をいうわけだ。私たちは戦犯にお詣りに行くんじゃない。心に念ずるものは決まっているんだからいいじゃないかというけれど、すぐ戦犯のことをいう。私たちは戦犯にお詣りするんじゃない。少なくとも百二十万の英霊が祀られているんだ。各人、自分の念じる人は違うんだ。その全部を知っているわけではないんですからね。田原坂まで、私はお詣りしない。私は、クラスの同級生が十四人合祀されているんだ。私はその十四人にお詣りするので、あの人を念じるものではないんだ。私も奉賛会に入って、毎年いくらかずつ会費を出している。

伊藤 これは内閣を揺さぶる第一歩ですからね。ここでへこたれたら、将棋倒しになりますよ。

松野 それで昨日から、戦犯のことについてどういう区切りをつけようかと思つて！。

伊藤 いや、負けたから戦犯になったんですから（笑い）。勝つていたら英雄ですよ。

松野 中曽根の時に靖国問題懇談会というのがあって、カネコという私大の教授が、仏教では生前の罪は他界に行つたときは消えるんだという論拠を書いている。それをコピーか何かで送つてきました。仏教の用語を使うのもいやだな、と思いましたがね。そういう宗教的な言葉は困るな、と思つた。

伊藤 昔は首相の公式参拝は当たり前にやっていたんじゃないですか。

松野 中曽根が公式参拝をした。

伊藤 それはだいたい後の話で、その前はずっとやっていたはずですよ。三木さんもやつたでしょう。

小池 三木さんの時から始まつたんです。

佐道 三木が「私人として」と言つたんですね。

伊藤 余計なことを言つたから。その前は「私人」とかなんとか言わないでやつていたんですから。

松野 私は仏教の言葉を引用するのはいやだな、宗教的な話はいたくない。歴史の話はしてもいい。

伊藤 この前、先生からお話を伺つたときは都議選の勝利の後だったんですが、今度は参院選の勝利の後ですね。

松野 都議選と参議院選挙とは同じ形だ。自民党が五人勝ち、民主党も二名勝ち、共産の没落、あのカーブは不思議なくらい同じなんだ。

伊藤 でもこれからが正念場ですね。

松野 共産が本当に没落しましたね。その敗因の国民的基礎は憲法じゃないかと思うんです。「憲法改正絶対反対」と言つた共産党と社民党が激減した。その原因は憲法じゃないか。憲法改正絶対反対と言っているのがどんどん落ちていく。小沢は憲法改正賛成で伸びている。民主党も自由党も、憲法は改正論ですからね。反対は共産党と土井たか子なんだ。この二つが、都議選でも参院選でも落ちていく。どうも私は、憲法がそこにあるんじゃないかと思う。

小池 広島みたいなどころでも、社民支持者の四五%が憲法改正の人に入りましたからね。そういう意味では議論にもならなかつた。

松野 どうも私は憲法論を巡つて勝ち負けが区分けできるように思うんです。あとの枝葉はあるけれど、主として共産と社民が激減したのは、そこだと思うんです。

伊藤 田中真紀子が靖国問題であれほどヒステリックになつているのは、どういうことですか。

松野 基本は、田中角栄の分身が再現したんだと思う。

伊藤 中国に義理立てしているということですか。

佐道 あれだけはっきり言うのと、閣内不統一になるんじゃないですか。

松野 この問題では閣内不統一ですね。

伊藤 でも、「田中真紀子は」だからといって辞めるつもりはないとか言っていますね。

松野 自民党は、これを機会に辞めてくれるかと思っています。

伊藤 外務省もそんな気持ちでしょう。

佐道 外務省の人事問題でも官邸と対立していますね。

松野 有能で、正論も認めるけれど、わがままだ。いくら正しくても、わがままの度が過ぎたね。いかにもお姫様ですよ。

伊藤 まわりにいる人が大変でしょうね。

小池 対応を見ていると、官房長官の福田はずいぶんまともですね。

松野 あれは出来がいい。それに冷静だ。今の閣僚では福田康夫がいちばん出来がいいでしょうね。

伊藤 人気もありますね。

松野 人怖じしない。

佐道 やつぱり真紀子さんを解任することは難しいですか。

松野 辞めさせることはできませんね。どんなに悪くとも抱えていかなないと、小泉の不徳を暴露することになる。任命権者の責任が、田中に関しては大きいでしょうね。

伊藤 でも田中さんも、小泉の言うことを聞かなければどうしようもないでしょう。

松野 最後になるとサッと退くんですよ。それはわかっているんだ。

伊藤 そのへんの呼吸はわかっているみたいですね。

松野 それでなるべく、「小泉は」公用車を使わないようにして「靖国に」行くこうと思つて福田が苦勞したわけだ。公私混同という

言葉があるけれど、今度のことは明らかに公私で言えば「私」に決まっているんですよ。閣議に関係ない、報告もいらない、相談もしないんだから。公人だつて公私はあるんだ。今度は、世間の言う方が公私混同だ。それは「私」に決まっていることです。自分のじいさんの墓参りに行くことは「私」に決まっています。公職にあるものも、公私はあるに決まっています。それは「私」に属することで、心の問題だ。わたしのところに電話がかかってくる、小泉にやめさせた方がいいぞ、ということをや二回、懇意な古い朝日系の新聞記者が言ってきたから、「俺は弁護士じゃないけれど、賛成論でテレビに出るんだ。やめさせるところか、俺は行けという方なんだ」と言ったら、呆れていた。

小池 でも先生、息子さんは民主党で、地盤の連合・社民協力があられるけれど、大丈夫ですか。

松野 そうなんだ。こんなことは関係ないと。一時、終戦後自民党で、宗教分離の憲法になったから、靖国神社をどうするかという話になった。今までは全部政府資金でしたからね。それでどうしようかといつて、回り回つて補助金を出そうと言ったときに、靖国神社が断つたんだ。「もうそんな必要はありません、その代わり干渉しないでくれ、私たちは奉賛会でやりますから、政府とか妙な補助金はいりません」という。それで干渉しなくなつた。それから戦犯の合祀は、政府もわれわれも知らないんです。靖国神社が決めたことだ。金もいらぬ、干渉もいらぬ、と言われた。

それでいま、別のものをつくるというけれど、馬鹿もいい加減にしる。今ごろつくつたつて誰がお詣りに行くか。屋上屋を重ねるだけです。靖国神社は平然としている。案外靖国神社は頑固だ。

小池 死んだ人も、死んだら靖国神社に行くということで死んでいるわけですからね。新しく墓地をつくつてもー。

松野 靖国神社には、九人の戦犯の中で七人が祀ってあるそうだ。ただ、戦犯で戦場で絞首刑になった山下奉文とか、戦場の人のこととは言わないんだ。オーストラリア軍に絞首刑になったのはたっさんいるんだ。そのことは言わないで、東京裁判だけを言うんだ。伊藤 小泉内閣を揺さぶる最初の一手ですから、ここで躓くとずつと響きますよ。

小池 自民党内のハト派と言われている野中「広務」とか、そのあたりが出てくるんじゃないですか。

伊藤 なんであれがハト派なの。

小池 彼は靖国参拝反対でしょう。だから、比較的ハト派だと言われている人でしょう。

松野 それで中国は野中を呼んだわけだ。それでひよこひよこ行つて、お叱りを受けて帰ってきたわけだ。田中真紀子はやめなさいと言われて帰ってきたわけだ。

小池 あれはテレビに出ましたからね。「げんめいしました」という。

武田 どちらの「げんめい」かわからない「言明と厳命」。

小池 あれは内政干渉だと山崎が言っていたけれど。

伊藤 これでやらないと、ODAもいじれない。

小池 一定のODAを切るいいチャンスだと思っただけですけどね。

松野 まあ、大使館引き揚げぐらいいはやるでしょうね。

伊藤 非常にいいんじゃないですか。もうODAはやらないと。

小池 ODAだけじゃないですからね。輸銀も含めて送っていますから、港湾施設の四〇%、鉄道施設の一五%は日本の金でしょう。

松野 読売に、「妥協したら小泉じゃない」と書いておいた。これは私の経験で、みんな足して二で割るんです。それは勝者の議論で、少数はそれで終わってしまう。大きなものが妥協して、足

して二で割ることはいい。それは呑み込んでしまうことだ。少数は、足して二で割ったら殲滅されてしまう。少数は包囲されているから、最後まで抵抗しないと生き延びられない。だから足して二で割る妥協が正義だというけれど、それは勝者のいう言葉で、少数派は足して二で割ったらそれでつぶれてしまう。小泉は少数だから、足して二で割ったらつぶれる。

伊藤 小泉派というのはないからね。森「喜朗」さんだつてどう思っているかわからない。

佐道 苦々しく思っているんじゃないですか。参議院選挙も、結局増えたのは橋本派ですから。

小池 森派はけっこう落ちましたからね。

松野 選挙区は、前から替えられないんだ。比例はある程度替えられるけれど、地区は替えられないんだ。

伊藤 比例だつて替えられないでしょう。結構長いこと選挙準備をやっているわけですからね。

松野 しかも現職優先でしょう。だから替えられない。そうするとみんな橋本派なんだ。選挙区の中の約三分の一は橋本派だ。亀井「静香」のところを入れると過半数になる。

佐道 自民党は選挙に勝ったけれど、小泉さんの基盤は弱くなった。

松野 負けたんだ。小泉は党内で少数になった。それで『サンデー毎日』に「スフィンクスだ。顔は小泉だけれど、下は動物だぞ」と書いた。

佐道 明確に総理大臣に反対と言っている外務大臣は問題だと思っただけです。それで「アジア諸国との関係が悪くなったら、また私がやらなければいけない」なんていう言い方は――。

伊藤 やりたくなかったら辞めたらいいんだ。

松野 女性は怖い。扇千景をこらんなさい。女性は男性の常識ではないんだ。女性の常識は男性とは違う。扇千景を見てこらんな

さい。みっともないというのか、図々しいというのか、破廉恥というか。

武田 当確がついたり消えたりしましたね。

松野 しかし国民世論もえらいですね。徳田「虎雄」の自由連合は、ドクター中松とか野坂昭如とか、ああいうのが揃って並んでも、一人もとれなかった。やはり国民は賢明なところがある。

伊藤 田嶋陽子みたいなのは入ったけれどね。

松野 世論というのはよく見えていますよ。私はよく見ていたと思う。

伊藤 今度は、自民党は先生の予測を上回って大きくなりましたでしょう。

松野 私は『A E R A』に六十二と書いておいた。それが六十四、一人増えて六十五になった。私は六十二という数字を出した。それは比例が二十で地方区が四十二、合わせて六十二と出した。

伊藤 六十二というのは改選議席から一増えるということですか。現実はずっと増えたんですね。

松野 地区が私の予想より強かった。大分なんて勝てないと思っただら勝った。沖縄も勝てないと思っただら勝った。この二つは、私の予想より強かったですね。

小池 熊本はどうですか、先生。

松野 熊本は駄目だったな。森なら勝ったかもしれない。

小池 熊本の三浦一水というのは亀井派のゴリゴリで、このあいだの総裁選では橋本でなければ駄目だ、と言っていたやつなんです。

松野 あれは橋本に入れたんです。それは小泉は知っていた。三浦というのは橋本に入れた。行くのか、いかんわけにはいかない。小泉はちゃんと誰が入れたか知っていますよ。選挙区に行きながら、全部知っていた。あれは橋本に入れた、そうです。

小池 民主党「香山真理子」はいいところ行くと言われていたん

ですけれどね。

松野 いいところに行くはずだったんだけど、ちょっとね。もう一つは、ブームがわかなかったですね、女性ブームが。

佐道 鳩山さんは、もう一つ人気が出ませんね。

松野 党首討論が、誰が見ても負けだ。党首討論なんです。いかにも人は好いけれど、論拠は弱い。なんだかブレっていて、敵だか味方だかわからない言い方をしているんだ。それがはっきりしているのが小沢で、あの小さな党が三つ増えた。三つ増えたということは大変なことですからね。

小池 倍増ですからね。

松野 自民党でもやっと三つ増えた。民主党も増えたけれど、あの小さい党が三つ増えるということは大変なことだ。自民党が三十増えたぐらい脅威ですよ。あれはひとつ、ブレないことにファンがついているんでしょうね。

伊藤 あれはどうなるかと思っていたけれど、まさかと思つて数字を見ていましたよ。

小池 選挙区で二つ取りましたからね。

松野 選挙区で勝った。東京でも選挙区では負けたけれど、相当取っていますからね。

佐道 あちこちでいい戦いをしていますね。

小池 大阪でも「票を」取っていますしね。

松野 あれが鳩山と一緒になつたら、鳩山は食われちゃうからね。青大将とハブみたいだから、一緒に入れるわけにはいかない。青大将はハブに食われてしまう。ちょっとそれを一緒にしろとは言にくい。鳩山は青大将、片一方は小さくてもハブだ。だからガラス越しにつき合う程度だ。隣近所までしておけといい、同じ一室に入れたら、それは最初は鳩山が党首でいいと言っに決まっていますよ。いいけれど、幹事長になつたら鳩山は一回で食われちゃう。存在はゼロでしょうね。でも、一番いいのは自由党と民

主党が一緒になることだ。

伊藤 また自由民主党になる（笑い）。

佐道 本家争いが起こる。

松野 自民じゃなしに、民自党なんだ。

佐道 いつか聞いたような名前ですね。

松野 片一方は自民党、こちらは民自党なんだ。

■三木内閣政調会長時代

伊藤 さて、本題に入らせてください。この前は、先生が三木内閣の政調会長になられたというところですが、最初に一般的な話を伺いたいと思います。政調会というのは、予算であろうと法案であろうと、そこを通らないと、当時は自民党一党ですから、何もできないというところで、非常に大きな権限を持っているところですね。これには部会がずつついていきますね。政調会長というのは部会との関係で、部会長を指名することができますか。

松野 できます。

伊藤 それは実際にそうなんですか。

松野 できます。その前の経緯ですが、総裁選挙の妥協案として、福田・大平・三木・中曽根の四人がいたんですが、それを椎名が、福田にすると大平と争う、中曽根は早い、三木が中間でいいだろうと、頭の中は三木に決めた。そうすると中曽根は年齢的にも幹事長に持っていきける。福田、大平は入閣すればいい。そういう考えで、幹事長・中曽根というのは幹事案の中に言外に入っているんです。それで中曽根は納得した。そして福田の方から推薦してくれと言って、私が出ていった。それから無派閥で灘尾が選ばれた。この三人がまず選ばれた。

幹事長は中曽根に決まっている。私と灘尾は、政調会長か総務

会長か、固定したものではありません。年齢的に灘尾が年が多いから総務会長でいいだろう、じゃあ松野が政調会長だということ、政調会長として決まったのは後の話なんです。三人の中で幹事長だけが決まっていた。それは椎名裁定の中に入っていた。それで中曽根を納得させた。福田は副総理というか、三木・福田内閣のようにしよう、三木・福田内閣という意味で俺は三木を選んだんだ。だから福田は当然副総理格で協力してくれ」と椎名は考えた」。その福田の方の代表で、私が入った。あとは中間派があるものだから、その代表が灘尾だ。割に人望があった。だから「私は」政調会長というわけではなくて、三役の中に入ることが決まった。そこで灘尾が年が多いから総務会長、松野は政調会長にしようということ、三木さんが決めた。三役というのは、だいたい会議は一緒ですからね。三役はほとんど毎日会合しますからね。

伊藤 毎日ですか。

松野 毎日会合します。何を言っても構わない。担当という程度ですからね。三役ということが一つの格だ。あとは、総務の方を担当し、幹事長を担当し、俺が政調を担当し、ということですね。政調会は各部会を統括することも、指名することもできます。部会で決定することもできます。

伊藤 内閣が替わって三役が替わったら、各部会とも部会長は替わるんですか。

松野 替えてもいい、替えなくてもいい。私はほとんど、七割は替えませんでした。

伊藤 それはどうやって任命していくわけですか。

松野 だいたい委員会がありますね。農林委員会、農林族で農林委員長になった者が次になるのが部会長だ。だいたい仲間同士で話し合ってきます。おのずから順番というか格式がある。部会から推薦してくるのがあります。私が特にこの人が有能だと指名する人もおられます。

伊藤 それは可能なんですね。

松野 それは可能です。

伊藤 そうすると、ちよつとトラブルになりかねないですね。

松野 多少はありますけれど、大きなトラブルにはなりませんね。

伊藤 やつぱり部会長というのは、みんななりたいたいものですか。

松野 なりたいですね。その役所に対しては絶対ですから。部会長でないとは、法案の審議ができませんからね。厚生省は厚生部会

長ぐらいに毎日会わなければいけない。その役所に関しては、部会長は相当利得のあるポジションですね。

伊藤 戦後政調会ができた最初の頃は、議員さんも新人が多いわけですから、役人が物事をやっていく上で役人主導的な部会の運営があつたわけでしょう。

松野 ありました。

伊藤 この段階ではどうなんですか。

松野 最初のうちはそうでしたが、そのうちだんだん議員の方が詳しくなる。役人は二年経つと替わりますが、議員は十年選手ぐらいになるとなかなか替わりません。「前の局長の時はこうだったぞ」と言われると、次の局長は困ってしまう。だから部会長の

方が役所のことをよく知っているわけだ。「前の局長はこうだったぞ、なぜ今ごろ農政局長のきみがこんなことを言うんだ」と言われると、言われた農政局長は前のことを知らんものだから、「ああそつでしたか」と頭を下げるしかない。古くなると、委員の方が威張りますね。

委員が一番威張つて困るのは箇所付けなんです。選挙区の箇所付けを我田引水する。厚生省でも保育園を自分の選挙区に余計に取つたりする。農林省なら土地改良予算を、自分の県で二倍ぐら

い増やしたりする。各省とも、みな地方に対する利得がある。利権までいかんが、利得であることは間違いない。その部会長が行くと、その県は二倍ぐらい予算が増えますね。

伊藤 そういう利得は我田引水をやるから、それが政治の公平さを欠く。それが当然だという感じなんだ。国民から見れば不公平だと言

言いが、その省にあるものは当たり前だという。俺が努力して俺が働いているんだから、俺のところは予算をたくさん取るのは当たり前だといつて、予算分捕りになつて

いる。その分捕りは、また役所も悪いんだ。使うか使わないか、必要かどうかを別にして、予算をたくさん取りたがる。無駄なものがたくさん出てくる。消化不良の予算がたくさんあります。それは何かというと、役人が

予算をたくさん取ることが名大臣だということになる。部会にそれがプッシュされる。部会は予算編成の時に自分の省を一所懸命に守る。何に使うか、有効か無効かということではないんだ。とにかく予算分捕りだ。支出が増えるだけで、削減した予算なんて、この五十年ないでしょうね。その弊害は、部会から始まつている。

伊藤 部会長になつた人のところに箇所付けを余計にするというのは、役人の方も心得ているわけでしょう。

松野 役人も心得ているし、本人も予算を取るときに言うわけだ。ことごとこの予算を入れておけよ、と予算を取る前から命令しておく。予算を取れば入れざるを得ないでしょう。それは常套手段だ。部会長には、仲間も頼みに行くから、部会長に権限が集中してくるでしょうね。それは農林部会の連中も、俺のところも頼む、俺のところも頼むと、みんなで自分の選挙区の有利なところを取る。それが次の選挙地盤に響くでしょうね。

伊藤 あの先生は力がある、ということですね。

松野 ある、ということだ。それは箇所付けを余計に取つてくるからだ。今でも町村長には、この先生のおかげでこの橋ができた、ということを手柄になるでしょうね。それが選挙地盤になる。だから農林とか建設とか厚生とか、地方に関係のある部会長が競争が多い。なりたがるのが多い。

松野 郵政もそうですね。特定郵便局があるでしょう。

伊藤 特定郵便局というのはどういう利得があるんですか。

松野 特定郵便局というのは、日本の三千の市町村の中で一万以上あるでしょうね。だいたい村長、農協長、特定郵便局長というのは地方の名士ですよ。校長は動かんから、校長は駄目だけれど、そういうのは選挙区において人望のある人がなっている。だから特定郵便局長が一所懸命やれば、その村の信用が上がるでしょうね。

伊藤 特定郵便局というのは何か予算に絡むんですか。

松野 予算に絡むんです。郵政省予算。賃金の値上げとか、郵便ハガキの値上げとか。

小池 特定郵便局には、特別な機密費みたいなお金が出ているんじゃないですか。

松野 それはないけれど、郵便局の値上げに来るわけだ。もう一つは、特定郵便局長会というのが、郵政省の下働きで一番強いんです。

伊藤 強いのはわかるんですが、どういう利益があるのかな、と思うんですが。

松野 郵便局というのは、いつも頼まれるのは、大蔵省との問題で、郵貯。もう一つは、ハガキ・封書料金の値上げの問題。今年はハガキの値上げがありますからよろしくという、一年ぐらい前から準備しているでしょう。やはり郵政というのはひとつの大きな利権になるでしょうね。

伊藤 特定郵便局長というのは、どういうことかと思ったんですが。

松野 特定郵便局には補助金がないが、郵政省の問題が特定郵便局です。郵政省は労組ですからね。

小池 全通ですか。

松野 全通だから、自民党の票にはならんわけだ。特定郵便局は

自民党だから、票になるわけだ。だから郵政省は、自民党の圧力をかけるときは特定郵便局長を使うわけだ。社会党に圧力をかけるときには全通を使うわけだ。自民党の一種の手足でしょうね。

伊藤 各部会がありますね。だいたい部会で採んで決めてきて、政調会長のところまで紛糾が上がってくるということはあまりないんでしょう。

松野 新規事業だけはあります。新しいものは、予算編成の前に各部会からこういうものを今度やりたいと言ってくる。新しいものはみんな来ます。古いものはだいたい右へ倣え、でしょうね。

伊藤 それはどこで調整するわけですか。

松野 政調会長のところにみんな来ます。

伊藤 政調会というものは、各部会長が集まるわけですか。

松野 部会長が四十人ぐらい集まって、新規事業を。

伊藤 四十も部会があるんですか。

松野 いろいろあつて、四十ぐらいあるんです。外交調査会とか、いろいろなものがありますからね。

伊藤 部会以外のものがあるんですね。

松野 それから引き揚げ問題とか、婦人問題とかありますからね。役所以外にそういう特別委員会がある。四十人ぐらいで、予算前に各部会の新規事業について聞くわけです。三日間ぐらいに分けて聞きますね。四つか五つずつ。

伊藤 ほかの部会の人も聞いているわけですか。

松野 それはほとんどいません。その部会の人だけ。その説明には、後ろに役人がついてきますね。官房長ぐらいですね。どうせ官房長と打ち合わせをして来ているんですからね。新しい事業をやりたいというのは、農村には簡易水道はできたけれど下水がない、環境整備をしたい、そういう案を持ってくるわけだ。どこにつくるかわかりませんが、いろいろなものを予算獲得のためにやる。減らそうというのは一つありません。みんなもつと

もらしくつける。それが各省から出てくる。

みんな増額要求ですからね。切ってこい、といっても切ってこない。「役に立たないものがあれば省内でやれ。総額はそれでいいから、増やすのならどこか切ってこい。人間だつてそうだろう、増やすのなら切れるだろう」と言うが、「切るところは一つもない、まだ継続だ」という。新しいものが欲しいんだ。それが役人の本性でしょうね。

伊藤 そういう正式の会合のほかに、個人的に政調会長に陳情というのもあるでしょう。

松野 ありません。特に、在外公館を一つ増やしたいとか。それは予算に関係しますから。それは先輩から、「松野、在外公館を一つ、どうしても増やしてくれ」とか、「警察の警備費の中に特にこういうものを用意してくれ」とか、それは懇意な者から来ます。それで私が予算要求の中に二重丸をつけて入れておくと、それは入ります。二重丸をつけておくと、金額が五億でも、五千万ぐらいは必ず入りますね。二重丸をつけたものは、いくらか必ず入ります。

伊藤 最終的に予算案なら予算案を、政調会として決めるといふときは、政調会を開いて決めるわけですか。

松野 政調会を開いて決めます。それは誰が見ても増額で、福田と私と打ち合わせしてありますから、だいたいわかるわけだ。毎年のことだから阿吽の呼吸だ。それでとても要求が多いときは、「よしわかった、俺に任せろ」と最後は一任をとるわけだ。一任をとって、福田と私で相談するわけだ。みんな入ると思っているから、一任をとっておけばいい。それで、これは調査費だけ組む。代議士はうるさいから、ゼロはいかんけれど、調査費とか準備費とか、そういうわずか一千万ぐらいのものをつけておくわけだ。そうすると総額が合う。三億の事業のうち一千万つけておけばいいわけだ。

もつと予算が足りないときには、補助金だけつけておく。だから金利だけつけておくんでしょね。これで財投から金を借りろ、二千万出すから。財投は五分（ごぶ）の利息がつくから、五分を予算の一般会計に入れておくので、財投から使えというわけだ。その財投が積もり積もったのが大赤字で、いま出ている話だ。

伊藤 その財投については政調会は手をつつ込めないですか。

松野 いえ、突つ込みます。

伊藤 しかし財投というのは予算案とは全然別でしょう。

松野 別ですけど、財投にも話の時には一緒に入れます。財投の中まではわからないんだ。財投というのはほとんどが継続的なものですからね。今度も五兆何千億というのは決まったものから、あまり新しいものは出てこない。ただ財投は、郵便貯金が増えた金額については自由に使えるわけだ。三十兆の預貯金が三十二兆見込めるときは、二兆は私のところで使えるわけだ。

伊藤 その継続というのは、別に法的な根拠のある話ではないんですね。

松野 今年はそれでやるが、将来予算化するときには一般予算に入れますからね。そのあいだつないでおけ、ということだ。そうすると五千万で十億の予算が組めるわけだ。五分入れればいいんだから。要するに宥め料みたいなものですね。それを本当にやるときは一般会計に入つて来ますからね。一年間はそれでやっていくわけだ。財投の金を借りてやっておけ、調査が済んだら一般会計に入れるから、ということだ。

伊藤 予算案とか法案というのは、政調会で最終的に決めて、それから総務会に出すわけですか。

松野 それから総務会に出します。

伊藤 総務会で採めるということは一。

松野 総務会の中に特に熱心な警察の人が治安費をもつと出せとか、個々のもの、部会の話は出ませんが、部会以外の話が出るん

だ。新幹線なんていうのは部会以外ですね。新幹線は運輸省といっても、運輸省の中というよりもちょっと別の意味がありますからね。新幹線なんていうのは、総務会で出てくるんだ。

伊藤 幹事長はー。

松野 幹事長は黙ってまとも役のようにして、予算の時はあまり動きませぬね。中曽根個人から、これを頼むといって、憲法調査会はこれだけは予算をつけておいてくれよとか、そういうことは個々にありますけれど、「よしわかった、入っているよ」と言っておく。灘尾は文教関係だから、老朽校舎の予算手当てとか、私学振興の予算を増やせとか、それは個々に来ます。私学振興は足りないから、あと一千億ふやしておいてくれとか、そういうものが来ます。

伊藤 三木さんからはどうですか。

松野 三木さんはほとんど言いませんね。三木さんは政党政治で、金権政治を打破する人ですから、言うなれば選挙管理委員会ぐらいの予算はしっかりつける、ぐらいい話ですね(笑)。選挙粛正運動とか、選挙を監視する予算を見ておいてくれよ、という話で、それは予算の中でいつでもできることですからね。三木さんはそんなことは個々には言わなかった。

伊藤 そうですか。政調会長自身のイニシアチブで何かをしようとすることはあまりないんですか。

松野 ほとんどやることはできません。

伊藤 やろうと思えばできるわけですね、こういうことをやりたいたと思えば。

松野 できます。どうしても予算が入らないときがある。予算の原因は何かというと、経済成長率というものです。経済成長率というもので税収の基本額が決まる。そこで経済成長率を私は動かしたんだ(一同笑い)。そうすると枠が広がるわけだ。消費物価の中で、デパートの売上金が増えているんです。だから、これは

いつ作つたんだ、と叫びたら、あれはだいたい九月末の経済統計からすべてが出てくるんです。予算は十二月に作るわけですね。私が十月、十一月と見たら、増えているんですね。「九月よりも十月、十一月は増えているじゃないか。これは来年ならもつと増えるはずだ。この統計を増やせ」と言ったら、いや々な顔をする。福田もいやな顔をする、役人も全部いやな顔をする。それは自分たちが作つたものが全部崩れるからだ。だから黙っている。福田も黙っている。主計局長も黙っている。「増やせよ、これは増えているじゃないか。君たちは九月、俺は十一月でやるんだから、何がおかしい」と言ったら、黙ったままで一時間ぐらいで物別れだ。

どうなるかと思ったら、翌日の朝、福田が「松野君、あの統計は増やせないけれど、なんとかで増やすよ」と言ってきた。あの統計を動かすことは困る、全部だから。しかしなんとか予算で増やすから、ということと妥協した。「統計は我慢してくれ。言われても困る。しかしなんとかで少し増やすよ」ということで妥協して、結局増えました。

伊藤 増えたのは公共工事をやろうということですか。

松野 その時はやっぱり公共工事でしたね。

伊藤 それは景気の問題ですかようにすると今度は労働統計まで狂う。

松野 景気の問題というより、地方の大きなプロジェクトが出てきて、新幹線もその頃は入っていたでしょうね。それがどうしても足りない。それで私は基本を増やせと言った。「その統計を動かすのは、松野君、困る。統計は役所としてすべて困ってくる。九月末とやると決めているんだから、きみの言うように十一月にずらすことはできない。ただし、きみの要求する金額は入れるから」という話で妥協したのを覚えています。

福田も返事をしない、役人も返事をしないんだ。返事をしない

やつを相手に一時間もしゃべって、こちらはとうなるかと思った。

そこで、それは物別れで終わり。しかしそのことで予算編成が遅れるんだから、翌日の朝、福田が電話してきて、「松野君、昨日の話はあのへんにしてくれ、それをやるとすべてが崩れる。きみの言うよ。貿易統計も狂ってくる。大蔵省が予算を組むのは、九月末で決めているんだ。すべての統計がそこで揃っている。消費者物価の百貨店だけ十一月ということはできない」という。それもそうだ。結局、私の要求する予算は増えたけれど、どこかで増えたかわかりませんけれどね。

伊藤 先生が予算を増やさなければいけないと考えたもとは何なんですか。

松野 向こうは、なるべく健全財政でやらせたかったんだ。あの頃は私たちは増やしたかったんだ。大蔵は節約しなかった。その差でしょうね。今のような景気の問題とは関係ありません。

伊藤 それは部会から出てきた話ではなくて—。

松野 部会で私が一任を取った以上、みんなの予算を入れないわけだ。入れたいものだから、そういうわがままを言った。「それは全部九月末で全部決めているのに、君のところだけ百貨店の統計だけ十一月にしろと言うが、ほかの統計はどうするんだ。労働統計もあれば貿易統計もある、すべてあるんだよ。その統計を九月末の統計で、全部予算編成をやるものだ。君のように、百貨店の売り上げが十月、十一月増えたから、経済成長を伸ばせというのは、俺の立場でできるか。経済成長率が影響してくる」という。「それもそうかな」といったら、「その代わり、要求の金額は俺がなんとか増やすから、その主張は降ろしてくれ」という話で、それも一理あると思った。私の方はやや屁理屈だったでしょうね。予算を増やしたいから。

伊藤 しかし大した横車を通つたものですね。それぐらい政調会長というのは力があるということですね。

松野 承認しなければ、各省との交渉ができないんです。政調会長が承知しない限り、各省別の予算交渉ができない。それが決まっただけから、各省と大蔵省は二日間かかって、省別予算交渉をする。その時に政調会長は立ち合うんだ。大蔵大臣の横で。党も政府も一体だという意味で、各省大臣と大蔵大臣と個別交渉が各省別に、十八省庁全部あるんです。

伊藤 大臣折衝の場ですね。

松野 大臣折衝です。そこに政調会長は立ち合います。だからずっと一緒にいるんです。そこに大臣と政務次官と官房長ぐらいが来て、大臣折衝をやるわけだ。そこで多少のやりとりがありますね。

有馬 党側から立ち合うのは政調会長だけですか。

松野 私だけ、政調会長だけです。

武田 それは前からですか。

松野 前からずっとです。総会で予算が決まったら党は反対しない。そこで賛成する。党は修正案も何も出さない。そこで予算編成が決まるようなものですね。もう、可決するでしょうね。

政治資金問題

伊藤 この前のお話で、組閣の時から政治資金規正法の改正を三木さんが考えておられて、案も持っておられたということですが、現実に法案となるまでのプロセスはどういうことになるんですか。

松野 それは三木さんが政治資金規正法について、三役、私と灘尾と中曾根に「どうしても政治資金を規正しなければならぬ」という。それは大変ですよ、党は政治資金を増やせとは言っていないけれど、減らせということはまるで川の流を逆にするよう

なことだ。灘尾も私も中曽根も頭を痛めた。もう毎日、三木が公邸に来てと呼ぶんですから。そして「政治はね、保守党の政治が悪いのは金と金権だ。これがある限り絶対に駄目だ。金権は麻薬みたいなものだ、早くこれを断ち切らなければいけない」と言う。毎日やられているうちに私が「おい中曽根君、やってみようか」と言った。灘尾が「おれはいいけどなあ」とか言う。「せっかくな三木内閣をつくったんだから、何かやらなきゃいかん、三木さんは政治資金だという。じゃあおい、思い切つて、三階から飛び降りたつもりでやろうか、松野、おまえやるか」「おれもしようがない、やってみよう、一生一代のことだ」。それでやることになった。

さあ、党内は大変だ。三木は保守党をつぶす、と言う。その陣頭に立つて反対したのが保利茂だ。「政党政治を知らないやつだ。党は力、力は金、なぜ悪いんだ、強奪するわけじゃあるまいし。進んで協力するものが献金するのなぜ悪いんだ。政友会、民政党以来伝統ある政治資金だ。三木のやつはとんでもない。国民協同党ぐらいから出てきて、党をつぶしやがる」といって、総務会では毎日毎日、喧喧諤諤。

それで私が、非難を避けながらコツコツつくと、それを三木さんと、「どうだ、百万ぐらいにしようじゃないか」といえば、「百万の限度は仕方がない。天井がなかったんだから、個人献金は百万を限度にしようじゃないか」という。百万を限度にするといくらになるか、計算しなければならぬ。それで、いやいややなことを一所懸命やった。

世論は賛成するんだ。新聞は政治資金規正には賛成なんだ。世論は賛成してくれる。野党も必ずしも絶対反対でもない。反対派はもっと減らせという方だ。百万は多すぎる、五十万にしろ、というのが野党だ。自民党はとんでもない、といって、ちょうど三分の二が反対だ。だから通せば通る可能性があるけれど、さあ大

変だ。これが一番頭が痛かった。

伊藤 これは所管官庁はどこになるんですか。

松野 大臣は誰でしたかね。三木がみんな答えていましたからね。無理に言えば総務長官でしょうね。選挙管理は自治大臣で、総務長官でしょうね。

伊藤 そうすると、部会は内閣部会ですか。

松野 内閣部会です。

伊藤 内閣部会も大変でしょう。

松野 大変です。政調は私に任命権があるから、政調は通ります。総務会は別。古手の代議士がみな反対だ。福田も、「おい松野、大丈夫か」という。福田も政治資金の規制に反対ではないんです。しかし福田派は駄目なんだ。しかし三木の一つの思想で、私もすっかり洗脳されて、やってみようということになった。ほかでは

できませんからね。佐藤栄作も政治資金規正法を作つて出したけれど、佐藤は通さない法案を出しているんだ。私が選挙調査会長でした。あまり世論がうるさいから、政治資金規正法を作つたが、それは通さない方を出したんだ。だからつぶれているんです。形は政府が提案したんだけど、通さないという前提で党内を納得させたんだ。この国会は通さないから、ということだった。とうとう通さない、それで次に廃案になった。その時私は選挙調査会長でしたから、私が代表質問をしたんだ。それは佐藤と私で、最初から審議未了になるに決まっているんだ。しかし質問は二時間ぐらいしました。政治資金規正法の議論を佐藤としたんだ。しかしこれは審議未了になるという前提で党内は納得しました。三木の方は、通して法案にするというんだから、大変なものだ。しかしよくあれが通りましたね。

伊藤 総務会を納得させたわけですか。

松野 納得も何もない。三役がさんざん叩かれながら、二回も三回も総務会をやった。灘尾も馬鹿だと言われながら、最後は「こ

のへんで」ということで打ちきりでした。四時間ぐらいいしゃべらせて、しゃべり飽きるほどしゃべらせた。そういうときは、しゃべり飽きるまで会議を長引かせればいいんです。採決権は総務会長が持っているんだから。政党というのは不思議なもので、最後の採決は挙手投票はしないんだから。「まっ、このへんで」という。

伊藤 「このへんで」という頃合いが難しいわけですね。

松野 やっぱ四時間、六時間、疲れるまでしゃべらせるんだ。二十人ぐらいの反対論を黙って聞いていても、四、五時間かかりますよ。それが終わってから、「じゃあ意見は出尽くしましたから、今日はこのへんで」という。「このへんで」というのは、別に可決でも否決でもないんだ。「みなさんのご意見を拝聴しますから、このへんでお任せください」と灘尾が言うわけだ。そうすると、可決か否決かわからない。

伊藤 任せられない、という人はいないんですか。

松野 それで決まったら政府提案で出さず。野党は、これじゃあ生ぬるいという反対でしたね。与党は政党政治を知らないというて反対だった。参議院では可否同数だったんです。同数で、河野謙三議長が一票入れた。それで可決となった。同数でしたからね。それは気に入らないからといって与党議員が欠席したということ。与党が過半数があるに決まっているんですから。それがなかったということは、与党議員が欠席したのが理由だった。

伊藤 よほど反対が強かったということですね。

松野 反対が強かった。それが今ある政治資金規正法です。個人百万、公表するとか。

伊藤 でもそれは、この前先生がおっしゃったように逃げ道があるわけでしょう。

松野 逃げ道はあるけれど、小さい逃げ道です。総枠は逃げられないんです。小さく分けるだけ。五万円ずつ分けることはできま

すが、百万は逃げられない。個人の公表を避けるために五万円ずつに分けることはできません。多少の逃げ道はあるけれど、大枠は大事です。その政治資金規正法が通った翌年、ロッキード事件が起こった。

伊藤 政治資金規正法が通るまでは、政治資金は野放し状態だったんですか。

松野 届出制度でした。

伊藤 届出制度がありましたね。それはただ届けておけばいいというだけですか。

松野 禁止がなかった。今度は総額禁止ですからね。それをやると、違反行為になりますから、犯罪ですからね。

伊藤 その前は、届出さえしておけば何も。

松野 登録して、会社を分ければよかったのか、会社の登録みたいですね。個人は無制限だったかもしれない。個人が個人に献金するのは無制限だったんです。だから個人に五十万という枠、法人は百万という枠、その枠が問題だった。百万とは何の根拠とか、今までの資本金の何分の一という制限があった、それはどういう意味だとか、まあみんな自分の財布に響きますからね。

伊藤 政治団体を分けるといえることができるでしょう。

松野 政治団体を分けるといえるものもありました。政治団体も一つにしたわけです。今まではいくつもできた。竹下登なんて二十ぐらいついていましたからね。その政治団体も制限したはず。その時の大きな抜け道は、政党間の金額が自由だったんだ。

伊藤 政党の中、ということですか。

松野 自民党が松野頼三にいくらくれても、これは自由だった。その抜け道がありましたね。だから個人には制限するが、党には今まで通り。それは自由でしたからそういう抜け道がありました。後援会もいくつ作ってもいいが、一人の総額を決めたんだ。後援会を分けることは自由だが、合計する。

伊藤 三木内閣の時期に一番採めたのはこれですか。

松野 これです。最初の年はこれが一番採めた。政治資金だ。二番目がロッキードで採めたんだ。

伊藤 独禁法はどうですか。

松野 独禁法も最初の時でした。独禁法はそれほど大きな問題ではなかったな。経済界でだいぶ問題になった。党内では、利害は政治資金ほど大きくなかった。

伊藤 独禁法は議員さんにはそれほど利害関係はないんですか。

松野 わりに少なかった。経済界がうるさかったですね。

伊藤 経済界がうるさいということは、党内にがんと響いてくるんじゃないですか。

松野 響くけれど、個人の政治資金ほど個々には響きませんからね。独禁法になると、鯛の刺身みたいなもので、あまり大衆的ではありませんからね。上流のものだけなんだ。片一方は鯛の値を上げるようなことだから、全員に響くわけだ。片一方は鯛の刺身だから、財界に詳しいもの、それから土建の関係のものだけであって、党内のインテリは問題だったけれど、代議士の中ではそんなにひどくなかったですね。

伊藤 これはどこの部会になるわけですか。

松野 独禁法の監督官庁は――。

小池 公正取引委員会ですから。

松野 会計検査院と公正取引委員会は総務委員会だから、予算委員会です。

伊藤 部会だどこになるんでしょうかね。

松野 どこでしょうね。

伊藤 あまり政調会で採めたということはないんですか。

松野 たしか、独禁法対策特別委員会をつくったと思う。それには大蔵関係者とか、財政関係者とか、わりにインテリの人が多いんです。独禁法はあまりみな知らないんだ。体験していないんだ。

法律は知っているだろうけれど。独禁法は経済界でもそうでしょう。独禁法に詳しい財界人は少ないでしょうね。

武田 椎名さんもすごく批判的だったと言われていますね。

松野 椎名は政治資金にも反対だった。独禁法も反対だった。「三木は反対のことばかりする」と言っていた。椎名は通産大臣をしていますから、非常に反対だった。「三木はろくなことをしない」と言った。

伊藤 指名した生みの親である椎名さんというのは、この内閣に対してあまり影響力がなかったわけですか。

松野 ありました。三木さんがいちばん困ったのは、独禁法の際に椎名が承知しないと行ったときだ。私は椎名の自宅に朝二回も行きました。

伊藤 納得するまで話したわけですか。

松野 高樹町の自宅に行った。「三木は何だ、日本の経済をつぶそうとしている。独禁法というのは集約効率的に必要なんだ。日本の企業は集約的なのでやってきたんだ。それを排他的には少数に分ける」と言っていた。

佐道 椎名さんがうんと言わなければ、見通しも立たなかったんですか。

松野 三木も通しにくかったんです。私は二回ぐらい、三木に「行ってくれ」と言われて行った。「俺は一所懸命やったのに、おまえは俺の反対のことばかりする。しかし任命してしまったからしかたがないな、と言ってくれ」と言ったら。その通り言いましたよ。笑っていた。これで、しょうがない、諦めたなど思っただけだ。

伊藤 結局松野先生は説得したということですか。

松野 説得したんじゃない、あまりしつこいから。

伊藤 じゃあ三木さんと同じじゃないですか（笑い）。

松野 朝飯時に、二日間ぐらい行きましたかね。椎名の家を知っ

ているから。「松野君、君のおやじはよかつたけれど、君はうるさいね」とか言われた（笑い）。椎名がかんかんに怒っていましたよ。それで「どうした」というから、「もう勝手にしろと言いましたよ」「じゃあそうしよう」ということになった。

伊藤 それだけ、「椎名の」影響はあつたわけですね。

松野 それはありました。

伊藤 今日の冒頭で触れられた靖国神社参拝問題ですが、その問題はこの内閣でもありましたね。

松野 靖国神社参拝問題は毎年いろいろなときにあつた。吉田さんは、あまり問題なかつたと思うんですね。もちろん占領中です。鳩山「一郎」さんは靖国神社には行かなかつたんじゃないかな。あまりめめませんでしたね。岸さんの時も行かなかつたと思う。佐藤もあまり行かなかつたと思う。中曽根は、ラッパを吹いていたから行かざるを得ない。三木さんは、武道館のあとで行きました。武道館の戦没者の追悼会が終わつてから、官邸に帰つて、車を乗り換えて、秘書を一人連れて行きました。この時はあまり大きな問題はなかつたんですけれどね。もちろんニュースになりましたよ。

伊藤 ニュースにもなつたし、議会でも問題になつたんじゃないですか。

松野 なつたけれど、それは一回ぐらい質問があつた程度でしょうね。三木さんは行つたけれど、私には大きな印象がありませんね。一回帰つてから、モーニングを着替えて私服で、タカハシという秘書を連れて行つたと思います。

伊藤 靖国神社の国家護持問題がむしろ問題になつていたわけですね。

松野 自民党の中では毎回出ました。毎回出るが、国家護持を靖国神社自身が喜ばないんです。そんなことはしないでくれという。国家護持というと、靖国神社本体の本質を変えてしまうんだ。そ

れで靖国神社が「国家護持」という言葉を嫌つて、断つた。靖国神社は神社法の宗教法人だから、国家護持だと宗教法人を變形してしまうといつて、靖国神社が拒否したんです。そんな余計なこととはせんでくれといつた。毎回自民党内から国家護持というのが出る。出るたびに話が消える。靖国神社がそういう形態を受けないんだ。本体が消えるという。

伊藤 三木さんはこの時は「私人として」という感じで行つたわけですね。

松野 私人として。モーニングを着替えて、自動車も自家用にして、秘書官ではなくて秘書を連れて行きました。

佐道 それまでは公人とか私人とか、どなたもおつしやつたことがなかつたのを、三木さんが初めて「自分は私人として来た」という言い方をされたんですね。

松野 すべて私人の姿で行きました。洋服まで替えて行きましたから。しかし私人・公人というのは、公私混同ではないが、公人というのは必ず規定があるんです。大臣はかくかくこうだ、総理はこうだと。その規定がないのは公務ではないんだ。公務でないということは、公人ではないということだ。公私というのを、世論の説明の中で混同しているんじゃないか。公私という言葉を対して混同しているのではないか。公私混同は悪いことだが、世論が公私混同している。公というのは、総理大臣の時には閣議報告、閣議了解、官房長官の日程表に載るに決まつている。それが公務なんだ。それに載らないもの、載せなくていいものは私用なんだ。だから私は世論の方が公私混同していると思う。二十四時間公務だ、なんていうことはありませんよ。

そのくせ官邸と公邸の食費はうるさいんです。二十四時間公人だつたら、官邸も公邸も、食事は全部公費で賄うかというのと、自分のところの家庭の食事まで公費を使ったといつてうるさいでしょう。だから公私があるんだ。あるのに、靖国神社に関しては公

私混同だといっている。

いま、たまたま小泉にこのところどうしていると聞いたら、姉さんがみんな買い出しに行くという。スーパーに買い出しに行くんです。「人を呼ぶときはどうするんだ」「人を呼ぶときは、私は家庭料理はできません。出前を頼んでいる」という。その費用はどうしているかというと、公邸の方は全部自分持ち。廊下を隔てた向こうの官邸にはコックがいるんです。官邸は全部やってください。廊下からこっちの私邸の方は、コックは絶対につくってこない。家族がつくるんです。困ったことは、夜、公邸に人を呼んだときだ。「とても私には、お客に出すものをつくれな。だからその時は出前を取ります」という。それぐらい公私にうるさい。

今度の行動になると、靖国神社に「私」で行ったって「公」だという。私はそっちの方が公私混同だと思う。小泉が自分のおじいさんの墓参りに行くと言えば「私」でしょう。そこでお線香を立てたって別に宗教行事じゃないでしょう。心に念ずることは自由なはずだ。それは明らかに公私混同だ。

伊藤 さっきの政治資金規正法との関わりですが、このあたりからパーティをやって資金集めをするというのが少しずつさかんになったと言われていますけれど、これは誰かのアイデアなんですか。

松野 三木さん。三木はパーティが好きだった。パーティで集めろという。昔からそうだった。パーティで一ドル、十ドル。アメリカの十ドル・パーティ、それを三木は主張していた。それは政治献金とは別だ、それは政治資金規正法の埒外においていい、というのが三木だった。会社がらみの直接もらうものがないが、パーティはいんだ。三木さんはパーティ好きだった。パーティ献金は、アメリカの十ドル・パーティですよ。

伊藤 そうですか、それで自民党の政経文化パーティというのを

やるわけですね。

松野 あれは三木が非常に好きだった。みんなから取るのが好きなんだ。個別に取るのが嫌いなんだ。それがひも付きだ、癒着のもとだ。パーティは癒着しない。

それでもパーティ券は癒着していますね。一人で百万とか買ってくれるところがあるもの。二万円のパーティ券を二百枚買ってくれる会社がありますよ。来るときは二十人しか来ないんですけどね。そういう会社もあるけれど、一応パーティというのは二万円までですからね。けれども、だいたい経費は一万円で済ませますからね。だから政治家のパーティに行くと、食べ物が少なく、すぐなくなってしまうんだ(笑い)。人数の三分の一しか注文しないから、食べるものなんかありませんの。乾杯と言って飲んでみると、あとは何一つなくなっちゃっている(笑い)。政治家のパーティで夕飯を食べようと思ったら大間違いです。あるものじゃない。だいたい二千万ぐらい集めると、五百万ぐらいの料理しか注文しませんからね、四分の一ぐらいにしかならない。

伊藤 先生もパーティをおやりになりましたか。

松野 私もやりましたが、偏っていますね。懇意な人がたくさん買ってくれるが、一般の人から二万円は取れませんよ。結局、三十人ぐらいの人に、二、三百枚買ってもらう。友達を買うんです。それで帳面を合わせるしかない。若い人から二万円は取れませんよ。ただで招待してやる。

伊藤 でも買ってくれて、人が少ししか集まらないというのも格好悪いですね。

松野 格好悪い。やはり四、五百は集めないかね。

伊藤 だんだんあとになっていくと、これが政治資金のかなり大きな部分になりますね。

松野 いま私の息子なんかは、それで食っていますね。春秋二回やります。二回やって、四、五百万は残るようですよ。それが重

要な政治資金になるんでしょね。

伊藤 これは政治資金規正法の埒外ですか。

松野 届出はするようになっていきます。税法上の問題がある。領収書を発行しますからね。だから届出はしなくてはいけない。政治資金規正法第何条によるパーティであるということを領収書に書いておかなければならぬ。それを持っていくと、会社の方では免税になりますからね。

伊藤 そうですか、免税の対象になるんですか。

武田 年に二回ぐらいが普通ですか。

松野 年に二回が普通。

武田 だいたい二回ぐらいと決まっているわけですか。

松野 三回ぐらいやる人がいますけれど、まあ年に二回でしょうね。いまの私の息子なんかは、それが重大な収入源になっていません。

伊藤 三木内閣が発足してしばらく経って、稲葉「修」さんが自主憲法制定国民会議の総会に出席したということが問題になったんですね。予算委員会で「現憲法は欠陥が多い」という発言をされたので、だいぶワーツとなった事態がありましたね。

松野 憲法を守るといふのは内閣の責任、閣僚の責任なんだ。それで、議員として憲法改正はいいけれど、閣僚は内閣法に現行憲法のもとで守るといふ規定があるじゃないか、ということではないぶやられた。中曽根もやられたんです。中曽根は、私は在任中はやりませんと答えてしまった。稲葉も同じように、「大臣の在任中に私がやるという意味ではない、自分のかねがねの政治信念を言っただけだ」と、たしかそんな答弁をして、ちよつと揉めましたけれどね。

伊藤 大問題にまでは発展しませんでしたね。もうちよつとあとの時期だと、あるいはクビが飛んだかもしれない。

松野 そのあとの時期は、ロッキードが出てきた。稲葉は逆に注

目の人になってしまった。その時は叩かれる方で、今度は持ち上げられる方になった。野党が、やれ、やれと言うから。人間は思ったようにはならない。その時は叩かれてクビが飛ぶが飛ぶかと思つたら、その次は野党が稲葉に、しつかりやれ、しつかりやれ、と言うんだからね。

伊藤 稲葉さんというかたは、先生はよくご存知なんですか。

松野 稲葉はよく知っております。わりにひょうきんで、洒落た男でした。ユーモアがある男で、人間は枯れていましたね。枯れたという感じがあつた。

伊藤 あのかたが法務大臣であつたということが。

松野 法務大臣は適任だつたでしょうね。実は入閣のときに、坂田道太というのが防衛長官になった。三木さんは、坂田道太を法務大臣、稲葉修を防衛長官という名簿を出した。任命前に目の前を出して、「この名簿でどうだ」という。私は「坂田道太は法務大臣よりも防衛長官でしょう。稲葉修の方が法務大臣でしょう」と言った。

伊藤 それはどういうわけですか。

松野 坂田道太が若くて、腰が曲がったのが榮譽礼を受けるよりも、ピンとしたのが榮譽礼を受ける方がいい。

伊藤 そういう理由ですか（笑い）。

松野 そうしたら三木さんが笑って、中曽根が「松野君の意見がいい、これは入れ換えましよう」といった。稲葉は中曽根派ですから、中曽根が承知すればいいわけだ。中曽根が「松野君の意見がいい、稲葉は法務大臣のほうがいいかもしれない」「それじゃあ一つこれは入れ換えよう」と言つて、目の前で入れ換えたのが、偶然、期せずしてロッキードに当たつた。

坂田は私にあとでお礼を言つた。「松野君、俺は助かったよ、俺が法務大臣だつたら神経衰弱になつていた」。ことに坂田道太は田中角栄に近い男だつた。田中角栄から常に選挙資金をもらつ

ていた男だから。もしあれになっていたら、神経衰弱になっていたという。

伊藤 だけど、中曽根さんが大変だったんじゃないですか。

松野 稲葉は中曽根と合わないけれども、もともとは中曽根グループですからね。それで中曽根が賛成したんだ。それがいいという。簡単に入れ換えたんだけれど、あとの運命を考えると、大変なことだ。その時は神のみぞ知るでしょうね。偶然だった。

伊藤 稲葉さんはこのことで本当に有名になりましたからね。

松野 坂田が法務大臣になっていたら、神経衰弱になっていたら、とても耐えられなかったと思う。稲葉だから、ああやってできたんでしょね。毎日釣りをしたり、よそへ行ったりして、二ヶ月ぐらいしゃべらないでいた。

■佐藤死去

伊藤 ちょうどこの頃、日中平和友好条約の締結交渉が進行しているわけですが、こういうことは政調会とはあまり関係ないですか。

松野 あまり関係ありません。どちらかと言えば、幹事長マターでしょうね。政策決定マター。幹事長がそういうことは進めた方がいいと言ったか。

伊藤 例の覇権条項の問題で、かなりゴタスタしていたように思うんですけど。覇権と言っている対象はソ連なんですね。

小池 覇権条項というのは、対ソ同盟的な意味合いをつけようという中国側の意図でしたね。

松野 それは田中内閣の頃かな。

伊藤 いや、これは三木内閣の時に交渉をやっているわけですから。

松野 その問題は中曽根が一所懸命やっていました。それは幹事長の職務としてやっていたんですね。説明は聞いていましたけれどね。

伊藤 政調会長というのは総務でもあるんですか。

松野 総務ではありません。

伊藤 そうじゃないんですか。総務会にはー。

松野 もちろん呼ばれて、常に出席。

伊藤 それじゃあ総務のようなものですね。

松野 しかし採決権はないんです。

伊藤 採決権と言ったって、さっきのお話がありましたからね(笑い)。

松野 総務は総務会長までです。幹事長と私は常にゲスト。陪席だな。総務会長は総務です。総務会から互選するんですけど。

伊藤 五月に佐藤総理が亡くなられますね。この時のことは何か記憶がございませうか。

松野 その時は記憶があります。田中内閣がつぶれて、椎名裁定になるときに、私は佐藤のところに行って、「椎名裁定は福田になるんだろうな」と念を押したんだ。私は福田派でしたけれど。「さあ、松野、そうはいかんだろうな」「いかん、って誰ですか」「三木じゃないか」「三木？ 三木はひどい」と私はいったんだけど、その時佐藤はおそらく、椎名裁定は三木だということを知っていましたね。椎名はずっと有力者を一人ひとり回って意見を聴いているんだ。それで結局、福田にするわけにはいかん、大平にするわけにもいかん、中曽根じゃあ小さすぎる、政治経験から見ると三木だ、ということを知っていましたからね。「難しいぞ」「大平じゃないでしょう」「大平じゃないよ」。それで、三木なんです。

松野 そんなことをして、突然料亭の「新喜楽」で飲んでいて倒れたという報告が夜来たわけです。その晩私は「新喜楽」に飛ん

でいった。そうしたら、そこでもちろん女将が出てきて、いま別室にいて動かすことができないという。もちろん誰にも面会はできないし、お会いしたって眠っているだけだ、身をかわっているだけだというので、大津「正」という秘書がそこにいましたね。「先生は誰にもお会いにならないし、お会いにならなかつたって無駄ですよ」という。私は夜中の十一時頃に新喜楽に行った。その後二週間ぐらい動かさずにいたんでしようね。それから動いた。その時はもうほとんど意識がありませんからね。佐藤と会ったのは、椎名裁定の時に会って、それ以後は会っていません。佐藤と会ったのは、椎名裁定の時に会って、それ以後は会っていません。

伊藤 もう佐藤さんは政治に対する影響力はそれほどなくなっていたんでしようか。

松野 わりになかった。たしか佐藤信二を参議院の全国区か何かに出したかな。そのことで一所懸命でした。

伊藤 『日記』を見ていても、そのことが中心になっていますね。松野 保利なんかは、「松野、もう佐藤のところに行つたって駄目だよ。佐藤信二のことで頭がいっぱいだ。行くと、佐藤信二頼むよと言われるだけだ」と言っていた。全国区だったから、各人に頼むんだ。熊本で何万か出してくれと。あれは全国区で、自分で取らなければいけなかった。百万人。それで行くと、各代議士に、「君の県で二万ずつ取ってくれ」とか「二万取ってくれ」とかいうことばかりだった。おそろく『日記』にもそのことばかりだと思えます。

伊藤 ほとんどそのことが中心ですね。

松野 だから天下国家のことより、佐藤信二のほうに夢中だったでしょうね。

伊藤 それで国民葬が日本武道館で行なわれたんですが、その時に愛国党の暴漢に襲われますね。何か記憶にありますか。国民葬は行かれましたか。

松野 もちろん行きました。どこで誰が襲われたんですか。

伊藤 武道館の中で、三木さんが愛国党の暴漢に。

松野 ああ、ありました。その時三木さんのそばにいました。ガタガタつといたただけで、三木さんが突き飛ばされたんだ。外だった。玄関だ。私は中にいて、三木さんが来るのでガタガタしていた。三木さんが入り口に入るときに、玄関のところ突き飛ばされた。私たちは中にいたから、あとで聞いたんだ。車から降りて、広場を降りて中に入るでしょう。あの広いコンクリートのところだ。突き飛ばしたらいいですね。その後、中に三木さんは来ましたが、それであつと襲われたという話を聞きました。

■野党との関係

伊藤 ちょうどその前後ですが、創共協定というのをご存知ですか。創価学会と共産党が握手をしたということですね。

松野 いま思うと大変なことですね（笑い）。狐と狸ですね。

伊藤 公明党と自民党との関係は、いまは密着していますが、この当時はかなり敵対的だったんじゃないかと思いますが、公明党との関係というのは、この時点ではどうですか。

松野 敵でした。三木も、中曾根もあまり。自民党に近づいたのは、藤原弘達の人に田中角栄が中に入って、弘達の批判「著書『創価学会を斬る』日新報道、一九六九年」を抑えた。あのときは、田中とは親しかったでしょうね。私たちは親しくなかった。その田中の流れが、いつのまにか小淵の連立になったんでしようね。その流れの末裔でしょうね。佐藤とはあまり良くなかった。佐藤派とか私たちはほとんど創価学会に近寄りなかつたんだ。伊藤 でも『佐藤日記』を見てみると、池田「大作」と何回か会っていますね。

松野 会っているかもしれない。そのくせ立正佼成会の庭野「日

敬」とも会っていますよ。

伊藤 それもよく会っています。先生はどうですか、公明党というか創価学会との関連は。

松野 一度も会ったことがない。立正佼成会の庭野とはあります。池田には近寄ったことがない。

伊藤 この段階では、公明党というのはほとんど。

松野 単独内閣でしたし、連立なんて考えなかった時ですからね。今でこそ連立が常套化したけれど、その頃は連立は墮落だと思っていたからね。連立政権というのは墮落で、一期だけはいいけれど、二期、三期と続けるものではないという基本的な考えですからね。連立なんていうことは、踏み台として一回ぐらいはいいけれど、その踏み台を常設にするようなことは考えられなかった。

いまでもそう思いますね。常設になったら駄目になる。あれは小渕のときからだ。今日の日本の放漫財政は連立のせいですよ。連立の時は使え、使え、で使うことしかやらないんだ。緊縮財政をやれなんていう連立はありませんよ。だから結局節度を超えるんだ。それがこの六百兆の公債、四百兆の公債になったんじゃないでしょうか。小渕の時に百兆以上増やしているんですね。

一度連立の話では、佐藤の時に、春日一幸との連立を考えたことがあるな。それは要するに社会党を分断して、春日たちを吸収合併しようという考えで、直前まで行きましたけれどね。それから佐々木良作。これは福田越夫が、将来の合併を目標に連立しようやという話を私が進めたのを覚えています。佐々木良作と同じ年ですからね。何度も、「福田内閣が出来たらおまえと連立しよう。連立は合併を前提だよ」という話をして、本人も半分以上承知していましたけれど、困ったのは組合だった。議会はいいけれど、組合、同盟をなんとかしてくれないと、という話だ。同盟は労働組合で、自民党との連立に賛成するかと、佐々木良作は同盟を心配していましたね。議会の代議士は賛成なんだ。

伊藤 三木さんは、民社とは良かったんじゃないですか。

松野 民社とは良かったです。

伊藤 誰ですか。やっぱりその路線ですか。

松野 その延長かもしれないですね。佐藤のあとですからね。私の言うのは、三木の後の話だ。三木はもともと小党から出ていたから、わりに連立は平気だったかもしれない。

伊藤 三木さんが連立を考えているから、「椎名裁定で」三木に行かざるを得なかったという言い方がありますね。

松野 佐々木良作かな。春日一幸もいたでしょうね。わりに三木さんは連立は平気でしたね。

伊藤 民社党の連中と先生は。

松野 わりに親しかったですね。佐々木とか、国鉄で神奈川から出ているオカダとか、春日一幸とか、民社党とは非常に親しかったですよ。三木内閣の時に賛成してもらったから。その時の書きつけ文もありますよ。書きつけ文を書いて、二人で約束した覚えがある。政治家の書きつけ文なんて珍しいですな。書いた文書はみんな破られるんですからね（笑い）。民社とは親しかった。

伊藤 民社のある部分は、自民党に飛び込んでもいいと思っていましたよ。

松野 将来は自民党に飛び込んでもいいという感じでしたね。

小池 それは佐藤内閣の時ですか。

松野 三木の時。佐藤の時もそうでした。その傾向は非常に強かった。佐藤が春日一幸とは非常に親しかったですから。

伊藤 いまは民社の流れは民主党にいますけれど。

松野 岡田「克也」なんていう政調会長は民社党系でしょうね。赤松「広隆」はどうだったかな。

小池 あれは社会党系ですね。

伊藤 だから社会党や民社党の流れが民主党に入っていますから、その間にちよつと。

松野 ゼンセンもそうでしたかね。

伊藤 ゼンセンはだいたい民社系ですね。

松野 滋賀から出ているわりに優秀なのがおつて、民社党だった。小池 広島には友愛同盟が残っていますからね。民社からの流れですね。

松野 あれは労働組合というより職員組合という感じですからね。民社党の中は、組合という言葉をなくさないかね。組合じゃなくて、サラリーマンか何かにならないと、言葉が良くない。ストライキをする組合は過去ですからね。それでその次に出てくるのが、ロッキード、これが一番大きな問題だ。

■日本の安全保障

伊藤 その前に、クアラルンプールでの事件がありましたね。これが「一九七五年」八月に起こっていますね。この時はまた大変だったんじゃないかな、と思いますけれど。

松野 クアラルンプールの時は、毎晩夜中官邸に呼ばれた。一番歯痒かったのは、外国だから警察権が及ばない。だから国際警察みたいなものをつくっておかないと、ああいうときにはいけなかった。国連軍じゃないけれど、国際警察だ。一番歯痒いのは、向こうに頼むしかないんだ。いまの日本能力じゃこつちから警察を連れて行くわけにはいかないし、ただ向こうに頼むしかない。福田内閣の時もありました。こういうものは国際警察などで、警察権をお互い共有できるようにしないとね。日本の警察でなければ駄目でしょうね、日本人相手なら。

伊藤 この時超法規的措置として、五人の赤軍派を釈放して向こうに渡したんですね。

松野 それはもう悔しくてね。日本から飛行機に乗せて運んだでしょう。悔しいけれど、しょうがない。しかしこれはいつか捕ま

えることができるんだ。人質は野ウサギだ。犯人は一回逃がしてもまた捕まえることができるという論拠でしたな。人質が再び帰ってこないような不祥事件があったら大変だ。そういう理論で放して、しかし五人もいつか捕まったでしょうね。

有馬 あのと、「超法規的措置」という、誰もそれまで知らない言葉が出てきましたが、あれは誰が考えたんですか。

松野 超法規的措置は、みんなで話しているうちにそうなったんですかね。「法律じゃないね」「これをやるのなら超法規だな」と、みんなで会議をしているときだ。その理論は、犯人を逃がすことは法律でいけば許せないことだが、犯人はまた捕まえられる。しかしこの際、人質に万一のことがあった方が大変だ。だから釈放する。なんという理由で釈放するのか。超法規しかないだろう。釈放の法律はないんだから。釈放の時、超法規という言葉が出たんだ。じゃあしょうがない、超法規か。なんとなく、釈放の理由の時にその言葉が出たんです。法律がない。それはないだろうね、それじゃあ超法規だ。そんなことを、中曽根とか、三木さんの中から出てきたように思いますね。中曽根が言ったかもしれない。夜中でしたね。

佐道 昭和五十一年に防衛計画の大綱ができるんですね。それとほとんど同時に、同じ国防会議でGNP比の1%というのが決定されます。これには先生ご自身は何か関与されましたか。

松野 三木さんが言い出した。三木さんが何か制限がつけられないかという。それで私が、ずっと予算を計上していた。その時は国民所得の〇・八八%ぐらいだったんです。予算の1%ぐらいで、国民所得の〇・八八%だった。それで1%ならいいだろうというので、三木さんが1%に制限するという大演説をぶった。その時は〇・八八だった。まだ〇・一二%余裕があるから、三年ぐらいは大丈夫だなと思った。三木さんが喜んで、それで大演説をぶったわけだ。1%以内に防衛費を制限すると。その案は、私のと

ころになんとかならんかと言ってきたんです。私は〇・八八だから〇・一二の余裕があるから、三年間は大丈夫だと思った。「じゃあ一%はどうだ」「いやうれい、ありがたい」といって、国民所得の一%以内という演説をぶつたのはその筋でしょう。その時は〇・八八だった。

佐道 その一%を、防衛庁長官の坂田さんは「一%程度」という言葉にして欲しいといい、大蔵大臣の太平さんは「一%以内」にしたいという。「一%以内」にしてしまうとそれ以上あがらないから、坂田さんは「一%程度」にしたいということで、相当議論したという話がありますが。

松野 ありました。三木さんは一%以内ということで演説をした。その数字は〇・八八%だった。これなら一%という主張が三年はもつと思った。それで私は、「三木さん、一%でいいですよ」といった。それで三木さんが一%でいいと言ったので、大平と坂田から議論が出た。だけどそれはそのまま押し切った。その案は私が計算しました。

伊藤 閣議での了解なんでしょう。

松野 ええ、閣議了解です。

伊藤 だから閣議了解を変えればいくらだつて変えられる。

松野 三木内閣のあいだだけですからね、その公約は、次の内閣でまた変えればいい。

佐道 実際はしばらく変わりませんでしたね。

松野 非核三原則だつてそうですよ。あれは佐藤内閣の時の公約なんだ。だから佐藤内閣が替われば、あの公約を変えていいんだ。いいけれど、必ず内閣が替わると、三原則を守るか守らないかと真っ先に聞かれるんだ。そうすると次の総理大臣も「守ります」と言うものだから、とうとう守るようになってしまった。あれはその内閣の約束ですよ。三木内閣のあいだは一%にする。それで私は自信があつたんです、二年は大丈夫だと。

伊藤 三木内閣が続くあいだは大丈夫だろうということですね。

佐道 その前の防衛計画の大綱はいかがですか。つまり防衛費の算定について、それまでは相手側がこれだけの軍事力だから、こちらもそれに備えてこうやるという所用防衛力の計算だったものを、平和時はこれだけの防衛力があればいいという基盤的防衛力に変えてしまった。これはご記憶ございませんか。

松野 あります。その件も、軸がないんだ。どっちから見るかというだけで、その時の政治情勢で決まる。どちらから言っても、坂田は基盤防衛力ということを主張しておりましたね。いままでは相対防衛力という感じでした。坂田は基盤防衛力ということをさかんに言っていましたね。あのときは、いづれにしてもまだ防衛力は不十分でしたからね。日本の防衛力で一番の根本は国内の防衛体制の整備ができていなかったことですね。交通整理さえないんだから。戦車が通るときは交通規制ができないんだ。その基本は何かというと、防衛の国民意識がないということですね。どんなに先をやっても、国民に防衛という意識がない。意識がないために、進んで、優先して防衛をする、橋を先に渡すとか、進んで土囊をつくるとか、そういうものが一つもない。国民意識に防衛力が欠けているんだから、基盤防衛をしようが何をしようが自衛隊だけの整備なんだ。その背景には国民に防衛意識がない。航空管制、交通管制すらないんですからね。非常事態に交通管制できるかという何もない。防空管制もないんだ。それを考えると、一部の防衛でしょうね。自衛隊だけの防衛だ。自衛隊防衛計画であつて、国の防衛計画になつていないんだ。

佐道 三木さんは、一応ハト派と言われていましたね。防衛計画の大綱をつくったこともそうなんです。日米協力ということでは、それまで防衛庁長官同士の対話とか、向こうの国防長官と日米の具体的な協力についての話し合いとか、あまりありませんでした。先生は三木さんについてどのように見ておられましたか。

か。

松野 三木さんは、基盤防衛力でも無制限に出てくるのを怖れて、一%を決めておく。その表と裏だ。坂田は基盤防衛力増強なんだ。三木さんは予算制限なんだ。それで一%が出てきたんです。基盤防衛力を抑えるために。

佐道 坂田さんと三木さんは考え方が違っていったんですか。

松野 違っていた。それで抑えるために、基盤防衛力は飲む代わりに、予算総額を制限した。一%以内と言っています。

佐道 いまのアメリカとの協力の方はどうでしょう。三木さんのあとの福田内閣の時にガイドラインができるんですが、日米防衛協力というのは、実は三木さんの時代から少しずつ話が進んでいくようなのですが。

松野 あまり進んでいませんでしたね。三木さんはあまり防衛増強が好きじゃなかった。

伊藤 三木さんのアメリカとの関係はどうなんですか。

松野 三木さんはアメリカに留学したぐらいですから、悪くはないが、あの人の思想は平和主義者ですからね。また戦争中、あの人は圧迫されたほうですからね。反軍と目された政治家だから、軍に対する反感が強いんですね。

伊藤 国防という問題はどうですか。

松野 国防は意識がありました。いまの基盤整備には反対しなかった。国防は必要であることは認めている。

伊藤 安保も、ですか。

松野 安保も認めている。ただ、強く増強することは反対だったな。なるべく削減していきたいということだ。それで一%も削減なんです。だから何かの時は、政調会長への相談は常に行っていました。三役で三木からは私が一番相談を受けたでしょう。すつかり洗脳されたと言われたのも、それだ。

伊藤 一方で、アメリカの国防長官と坂田防衛庁長官が会談をし

て、防衛協力について大いにやっていこうということをやっていますね。こういうことに三木さんはー。

松野 そういうことは毎年の恒例儀式ですからね。

伊藤 この時は一步踏み込んだような感じだと思っただけです。

佐道 そんなに深い関心はなかったということですか。

松野 あまりない。恒例儀式だと思っただけでしょうね。私もその程度です。

伊藤 三木さんは生涯設計計画というものを出されますね。これはライフサイクルで、持ち家と生涯教育と社会保障と老後生活。これはいつたいていどこから出てきたんですか。

松野 それはずいぶん言われました。滔々とそれを述べて、「生涯教育とライフサイクルというものを自分は念頭に置いて政治をしている。政策の基本をそこに持ってきた」と言っていましたね。

武田 政策のブレインがいたんですか。

伊藤 誰が後ろについていたんですか。

松野 誰でしょう。私にはいきなりそれを説きましたね。さかんに私は、膝を叩いて説かれました。誰かがいたんでしょう。そこまでは私は知りません。私はそれを、いいですね、いいですねと聞いていた。私は洗脳された方だから。

伊藤 これは結局、予算に反映してことになるわけですね。

松野 反映しますが、特にそこで大きな目立ったものはないんですね。

伊藤 ドカーンという大きな予算はないですね。

松野 ないんです。教育振興といえば、学校でも教育費を増やせと。精神的なものみたいでしたね。そういう気持ちで政治を司るといふ意味しか見えない。予算に大きな変更はありません。

伊藤 ただ、持ち家制度とかなると住宅公団で、いま問題になっ

ていますね（笑い）。

松野 私が福田にその話をしたら、「三木は何を考えているんだらう、持ち家といって、住宅積立金でも免税しろというのかな」と言っていた。持ち家のために十年計画で貯蓄をする。その貯蓄を免税にしろというのか。住宅積立金を積んで、十年間はその積立金について無税にする。そうするとみんなが十年積み立てる。それで持ち家の頭金にする、そんなことかな、と福田は独り言を言っていました。大蔵大臣ですからね。そのうちに、それは何も実現しないうちに終わっちゃった。

持ち家といえば、そういう制度はないことはないんです。殖産住宅というのはそれでしたからね。掛け金をする。月三千円。それが三年間で二十万ぐらい。その時の物価です。掛け金をすると二十万円で、十倍の二百万円の家をつくれる。そのあとは年賦で払う。あの当時は二百万円もあれば十分家が建ちましたからね。それが殖産住宅で、これは野田卯一が建設大臣のときにこの法律をつくりました。野田卯一、これは野田聖子の祖父だ、これが建設大臣のときの住宅案で、それで殖産住宅とか電建とか、そういう建設会社がたくさん生まれました。要するに掛け金で三分の一積み立てたときに、三分の二の家を造ってくれる。三分の一は積み立てる。それが自己資金。

伊藤 あとは年賦で払っていくんですね。あとで殖産住宅事件とこのがありますね。

松野 その殖産住宅事件は東郷「民安」と中曽根だ。あれは殖産住宅の増資問題ですから。上場するとかいって、株の増資をする。東郷と中曽根は静岡高校で同級生なんだ。私は麻布中学で東郷と同級生なんだ。私のところに持ってこないで、向こうに行っちゃった。私は東郷民安と麻布で同級生、中曽根は静岡で同級生。どちらも同級生だ。東郷は中曽根の方に頼みに行つて、私の方に来なかった。中曽根は景気がよかつたし、派閥を持っていましたか

らね。私は一雇い人だったから、私には来なかった。私のところに来れば、考えてやつたんだけれど（笑い）。

その後東郷とは同級生で再会をするんです。そうすると、その話を冷やかして言うんだ。「おまえは俺のところに来れば、もつとうまい具合に考えたのにな」「いや、松野君、失敗した」。彼は中曽根のことを一言も言いませんからね。口を噤んで、いまでも冗談も言わない。何かあるんでしょうね。普通なら冗談に言うが、冗談も言わない。「俺が死ぬとき、伝記に書いとくよ」なんて言っていたから、「俺のことは書くなよ」と言っておいた（笑い）。それは株の増資の時です。その事件は、いまの法律の電建事件とは違います。

伊藤 それではここまでにいたしましょう。

松野 一番困っているのは靖国ですよ。

伊藤 頑張ってくださいよ。

松野 あなたの方から頑張れと言われると心強い。

伊藤 だって最初の一步ですから、これで転んだら、あとは将棋倒しですよ。

小池 改革に対する信用がなくなりますね。

松野 よしつ、小泉に、既定方針通り一步も下がるなど言おう。

伊藤 熟慮してます、熟慮してます、と言っていて、その当日を迎えるのがいんじゃないですか。

松野 こんな馬鹿な問題はないですね。中国もしつこすぎる。

小池 マスコミは今回はいろいろな面で迷走しています。だから信用をなくすんじゃないですか。

松野 公私混同、マスコミが迷走している。ガツンとやらなきゃいかん。

伊藤 ほんとうにそうです。もう黙ってやつちやつた方がいいんです。

政局関連年表

「二〇〇一年
参院選関連年表」

二〇〇一年三月十日
森首相退陣。

四月十七日

大田昌秀前沖縄県知事が参院選比例代表に社民党から出馬することを正式表明。

四月二十六日

小泉内閣発足。

五月十六日

小泉首相が自民党国家戦略本部の保岡興治事務総長と会談し、「国家ビジョン」を参院選までにまとめるよう指示。

五月十八日

小泉首相が、参院選の自民党公認候補の派閥離脱について、党に対し検討を指示したことを表明。

五月二十一日

小泉首相が、道路特定財源の使途見直し作業に入り、これを参院選公約にするよう指示。

五月二十四日

小泉首相が、党本部で党政治制度改革本部の原田昇左右本部長、青木幹雄参院幹事長らと会談し、参院選挙の立候補予定者の派閥離脱については候補者本人の判断に任せることを確認。

五月二十六日

連合の鷲尾悦也会長が政権交代の必要性を強調し、小泉首相を批判。

五月二十九日

小泉首相が、参院選などに向けた自民党の各種団体総決起大会に出席し、会場からの質問に答えて改革路線への理解を求めた。首相は地方交付税交付金の見直し問題について、交付金の削減を目指すことを明言、同時に交付金削減の見返りとして、国から地方への税源移譲に取り組み方針を明らかに。

六月四日

共産党の市田忠義書記局長が、「自共対決」を強調、志位和夫委員長は第二回中央委員会総会で民主党を批判、野党共闘と決別。

六月六日

与党三党が幹事長会談を開き、参院選は三党で過半数維持を目標とすること一致。
プロレスラー兼タレントの大仁田厚

が、鳩山邦夫衆院議員のパーティーで、参院選比例代表の自民党候補としての出馬を検討していることを明らかに。

六月九日

自民党の山崎拓幹事長が、小泉政権の高支持率の一方で、自民党支持率が伸び悩んでいることについて、道路特定財源の見直しなど小泉政権の改革路線に対し、党挙げて改革を支持しなければ、参院選勝利は難しくなるとけん制。

小泉首相が参院選後の内閣改造の可能性を否定。さらに自民党が参院選で一定の議席を確保すれば、道路特定財源見直しなどに対する党内の反発は弱まるとの見通しを示す。衆参同日選についても否定。

六月十四日

山崎幹事長が参院選について、与党三党で過半数、自民党の勝敗ラインは五十であると発言。

六月二十五日

東京都議選で自民党勝利。

六月二十六日

テレビタレントの大橋巨泉が、民主党公認候補として参院選比例代表への立候補を表明。

六月二十八日

小泉首相が与党三党首・幹事長会談を行い、連立継続の意向を示した。

六月二十九日

政府が閣議で参院選の日程を七月十二日公示、二十九日投票と正式に決定。通常国会が閉幕。

七月三日

自民党が参院選の追加公約を発表。追加公約は、構造改革の推進、特定財源の見直し、人権尊重社会の実現、郵政三事業の検討、地方税財源の拡充と地方財政の健全化（地方交付税の見直し）の五項目。

七月五日

全国町村会が臨時の全国大会を開き、小泉政権が掲げる地方交付税削減や道路特定財源の見直しに反対する特別決議を採択。

七月十二日

参院選公示。

七月二十八日

田中真紀子外相が群馬県内二ヶ所で行った自民党候補応援演説が問題化。

七月二十九日

参院選投票。自民党大勝。

「小泉首相
靖国参拝関連年表」

二〇〇一年四月十六日
小泉氏が日本遺族会幹部らとの会合で、首相になったら靖国神社の公式参拝を行うと明言。

四月二十四日
小泉総裁が自民党総裁就任会見で、改めて参拝の意向を示す。

五月十七日

堀内自民党総務会長が中国の陳健駐日大使と会談。大使は、参拝を取りやめるよう求める。中国外務省の王毅次官が阿南惟茂大使に小泉首相の姿勢について抗議。中国外務省の孫玉璽報道局副局長が会見で歴史教科書、靖国参拝問題について中韓両国の立場が一致しているとの認識を示す。

七月十日

山崎自民党幹事長ら三与党幹事長が唐外相と会談。唐外相は靖国参拝に関して反対を表明。

また、江沢民国家主席、銭其琛副首相、曾慶紅・共産党組織部長とも相次いで会談。江主席らは暗に小泉純一郎首相に靖国神社参拝での慎重な対応を要求。

七月十一日

山崎幹事長ら与党三党幹事長が小泉純一郎首相に帰国報告、中国側の反応を説明。首相は「熟慮してみる」と述べる。

七月十七日

政府が閣議で、小泉首相が八月十五日に予定している靖国参拝について、一九九五年の村山談話と「矛盾するものではない」との答弁書を決定。民主党の伊藤英成衆院議員の質問主意書に回答。

七月二十四日

小泉純一郎首相が靖国参拝について「総理大臣である小泉純一郎として八月十五日に参拝する」と重ねて表明。中韓両国との関係修復については「参拝後に大局的見地に立つて考える」と述べる。

田中外相がハノイで唐中国外相と会談。小泉首相の靖国参拝方針について唐外相が、靖国神社にはA級戦犯が合祀されているとして強く参拝中止を要求。

七月二十五日

田中外相がハノイで韓国の韓昇洙外交通商相と会談。韓外相が、首相の靖国神社参拝について再考を要求。

首相の靖国参拝については首相と協議する考えを示す。

七月二十六日

日本弁護士連合会の久保井一匡会長が記者会見し、首相の公式参拝中止を求める声明を発表。

小泉首相が、中韓両国の批判や参拝中止要請に反論し、改めて八月十五日に参拝する意向を表明。

七月二十七日

小泉首相の靖国参拝問題をめぐり、中国の唐外相が二十四日の日中外相会談後、「やめなさい」と言明した」と記者団に日本語で語ったことが問題化。

七月二十九日

公明党の神崎代表が、首相の靖国参拝問題について再考を求めると表明。

七月三十日

小泉首相が靖国参拝について「虚心坦懐に意見を聞いたうえで、熟慮して参拝したい」との考えを表明。

七月三十一日

青木参院幹事長が、小泉首相の靖国参拝問題について最後は首相が判断して決めるべきと述べた。

石原都知事が小泉首相の靖国参拝問題について、参拝すべきとの考えを

表明。

八月二日

小泉首相が中国の武大偉駐日大使と会談。武大使は参拝中止への期待感を表明。首相は「熟慮して判断する」と回答。

八月三日

小泉首相が自民党の青木参院幹事長、公明党の鶴岡洋参院議員会長、保守党の扇千景党首ら与党三党の参院幹部と会談。扇氏は靖国参拝を予定通り実施するよう求めた。

八月五日

民主党の菅直人幹事長が、小泉首相の靖国参拝方針を厳しく批判。

八月六日

自民党の山崎幹事長が、小泉首相の靖国参拝について、参拝にあわせて新たな首相談話の発表を検討すべきとの認識を示す。

八月六日

中国の胡錦涛国家副主席が自民党の野中広務元幹事長と会談。胡副主席は日中関係の長期的な安定に期待を表明。

八月六日

平沼経済産業相が、小泉首相の靖国参拝問題について予定通りの参拝を支持し、自分も参拝するつもりであると語る。

八月八日

公明党の神崎武法代表が、小泉首相の靖国参拝問題について八月十五日以外の参拝に一定の理解を示す。

八月九日

民主党の菅幹事長が、福田官房長官と会い、小泉首相の靖国神社参拝について中止を求める鳩山代表名の文書を手渡す。

共産党の志位委員長が、首相参拝を十五日の終戦記念日ではなく別の日

に行うとの動きについて、参拝自体が憲法違反であると批判。

民主、自由、共産、社民の野党有志が呼びかけた「小泉首相の靖国参拝反対の集い」が国会内で開催。

自民、自由、保守三党からなる「小泉首相の靖国神社参拝を実現させる超党派国会議員有志の会」（保岡興治会長）のメンバー約二十人が首相官邸に安倍官房副長官を訪ね、十五日に参拝するよう求める首相あての申し入れ書を提出。

八月十日

小泉首相が、与党三党の幹事長と靖国参拝問題について意見交換。公明、保守両党の幹事長は近隣諸国への配慮から十五日の参拝に反対する考えを改めて伝えたが、首相は最終的な結論を明言せず。

八月十一日

小泉首相が、靖国参拝について十五日の参拝を見送ることを視野に入れる方針を決定。与党三党幹事長が反

対しているほか、福田官房長官も今

後の政権運営などを考慮して、慎重姿勢に転じたため。このため首相は、参拝そのものを見送る可能性があることを踏まえ、十一日に個人名で靖国神社に供花を行うよう周辺に指示。

八月十三日

午後四時ごろ、小泉首相が靖国神社に参拝。

平成15年度 文部科学省研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕
発行：2003年8月20日《無断転載禁》

政策研究大学院大学(政策研究院)
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2
Tel : 03 (3341) 0458 Fax : 03 (3341) 0446